

# 博士論文

## 宗峰妙超墨蹟の研究 —茶の湯文化における受容史— (研究編)

文化情報学研究科文化情報学専攻 博士課程後期課程

48101003

宮武 慶之

指導教員 矢野 環 教授

# 目次

はじめに

1

第一章 先行研究とその問題点

3

第一節 宗峰妙超とその墨蹟について

3

第二節 宗峰妙超墨蹟研究における先行研究

5

第三節 本研究の目的

8

第二章 現存する宗峰妙超墨蹟の調査について

11

第一節 調査の目的とその対象

11

第二節 調査を実施した墨蹟の筆跡の特徴

11

第三節 新たに所在が判明した墨蹟

18

第一項 《一帆風》（個人蔵）

18

第二項 《物我両忘》（個人蔵）

27

第三項 《日山之賦》（個人蔵）の添状

29

第四項 《与宗智大姉法語》（MIHO MUSEUM蔵）

34

第五項 《手抄二卷（断簡）》（個人蔵）

34

第六項 《宗峰妙超墨蹟澤庵宗彭証明》（個人蔵）

36

第四節 小結

37

第三章 現存不明の墨蹟の調査

38

第一節 売立目録の調査

39

第一項 《一帆風》（個人蔵）のツレと考えられる墨蹟二件

40

第二項 《白雲集》のツレと考えられる墨蹟一件

43

第三項 《手抄二卷》（芳春院蔵）のツレと考えられる墨蹟一件

45

第四項 《林間録》のツレと考えられる墨蹟一件

45

第五項 《句双紙》

47

第六項 『旧大名某家所蔵品入札』にみる《禅林類聚膳写卷》

47

第七項 『某家御所蔵品入札』にみる《至道偈》の添状

47

第八項 売立目録に記載される出品者

49

第二節 名物記

50

第一項 『茶器名物図彙』

51

第二項 『石州過眼録』

54

第三項 『中興名物記』

57



第四項	『土屋侯御道具帳』	5
第五項	『雲州蔵帳』	6
第三節	『徳川実紀』にみる宗峰妙超墨蹟	6
第一項	下賜された宗峰妙超墨蹟三件	6
第二項	献上された宗峰妙超墨蹟四件	6
第四節	大徳寺文書中の重書箱記録にみる宗峰妙超墨蹟	6
第五節	小結	6
第四章	茶の湯文化における宗峰妙超墨蹟の受容史	7
第一節	宗峰妙超墨蹟の所有者と茶の湯文化	7
第一項	第一期（初期茶の湯）	7
第二項	第二期（江戸初期）	7
第三項	第三期（江戸中期）	8
第四項	第四期（江戸末期）	8
第五項	第五期（明治維新後）	9
第六項	第一期から第五期にみる寺院での宗峰妙超墨蹟の増減	9
第二節	初期茶の湯における宗峰妙超墨蹟	9
第一項	『山上宗二記』にみる宗峰妙超墨蹟	9
第二項	宗二時代の茶の湯における宗峰妙超墨蹟	9
第三項	永禄年間に語られた宗峰妙超の人物像	9
第五章	おわりに	9
註釈		1
謝辞		1
参考文献		1
表1から12		1
表1	現存する宗峰妙超墨蹟表	1
表2	売立目録に掲載される宗峰妙超墨蹟	1
表3	「大徳寺虫弘之記」における宗峰妙超墨蹟	1
表4	遺物の献上	1
表5	致仕の得物としての献上品	1
表6	大徳寺の墨蹟	1
表7	真珠庵と徳禅寺所蔵の墨蹟	1
表8	『茶会記の研究』掲載の茶会記にみる宗峰妙超墨蹟の使用件数	1

表 9	天正年間の茶会にみる宗峰妙超墨蹟	1
表 10	『墨蹟之写』にみる所有者	3
表 11	御遺物の御三家への下賜	8
表 12	徳川家における茶会で使用された掛物一覧	140

## はじめに

本研究は京都紫野、大徳寺開山である宗峰妙超（図1。一二八二―一三三八）の墨蹟を対象とする。宗峰妙超は鎌倉時代に活躍した禅僧である。宗峰が弟子や在家の信者に書き与えた法語などの墨蹟は現存しており、国指定文化財四十件<sup>1</sup>、重要美術品七件<sup>2</sup>がある。平成二十三年六月、個人の所蔵による宗峰妙超墨蹟《一帆風》の調査を実施した。本墨蹟はこれまでの先行研究において明らかにされておらず、新たに所在が判明した墨蹟である。墨蹟に付属する添状の調査により、この墨蹟は堺の豪商であった谷安殷（一六六九―一七二二）が所蔵し、その後は谷家の祖である宗印（一五三二―一六〇一）が建立した堺の祥雲寺に寄進されていたことが判明した。本研究の動機は、先行研究では明らかにされていない墨蹟が未だに存在しており、研究によって新たな墨蹟を提示できるものと考えたことにある。また付属する添状や箱書などを調査することによって受容史を研究する資料になりうると考えた。

茶の湯において、宗峰妙超墨蹟はわが国の禅僧の中で最高位の評価がある。宗峰妙超墨蹟が重用される理由は虚堂智愚、南浦紹明、宗峰妙超と続く禅の法灯のためだけなのであろうか。本研究では、現存する墨蹟および、所在が不明な墨蹟ほか文献の博搜による宗峰妙超墨蹟の総合的な調査を実施し、宗峰妙超墨蹟の受容史を明らかにする。

本研究の目的は二点ある。一点目は現存する墨蹟の調査から宗峰妙超の筆跡の特徴を検討し、新たに所在が判明した墨蹟との比較を行い、墨蹟の性格を明らかにする。二点目は宗峰妙超墨蹟の受容史を明らかにすることである。

本研究では現存する墨蹟と現存不明な墨蹟の把握を目指して調査を行うとともに文献を博搜する。現存する墨蹟の調査の目的は二つある。一つ目は真蹟とされる筆跡を参考に新たに所在が判明した墨蹟と比較検討するためである。二つ目は墨蹟に付属する添状や箱書、文献記述との合致などから伝来、所有者移転を明らかにすることである。現存する墨蹟の調査対象は博物館、美術館、大徳寺および塔頭寺院と子院、任意団体、個人の所蔵する宗峰妙超墨蹟である。これらのうち、宗峰妙超墨蹟の真蹟について検討する。

現存が不明な墨蹟の調査の目的は、文献に掲載される図版や内容が判明する記述などから墨蹟の筆跡および付属する添状などを研究資料として活用することである。そのため調査対象を売立目録、名物記、『墨蹟之写』、『徳川実紀』、『大徳寺文書』とする。

売立目録の調査では都守淳夫『売立目録の書誌と全国所在一覧』（二〇〇一、勉誠出

版）を参考にする<sup>3</sup>。同書では売立目録は四千三百三十六件が確認されており、記載の所蔵元に従い四千二百五十件の売立目録を調査した。また近年の海外オークションカタログ、東京美術倶楽部や日本橋三越における展示会図録等も調査対象に加えたところ百三十二件の宗峰妙超墨蹟図版を収集することができた。掲載される図版の宗峰妙超墨蹟は、売立が行われた近代初頭から近年に存在した、もしくは現在でも存在している墨蹟である。

名物記の調査では宗峰妙超墨蹟の形態もしくは内容の把握が可能なものから、当時存在した墨蹟を明らかにする。

以上に加えて江月宗玩『墨蹟之写』の調査を行う<sup>4</sup>。本書は江戸時代初期に活躍した禅僧である江月宗玩（一五七四―一六四三）による墨蹟鑑定の記録控えである。『墨蹟之写』（二十二冊）には五十一件の宗峰妙超墨蹟の鑑定記録が掲載される。これらの記述を翻刻し、江戸時代初期に存在した宗峰妙超墨蹟を明らかにする。

『徳川実紀』では五件の宗峰妙超墨蹟について、将軍家からの下賜品または、大名家からの献上品として記録されている。また松平家の記録では初花肩衝を将軍家に献上したときに、宗峰妙超墨蹟も献上されている。これらの移動を明らかにする。

『大徳寺文書』では、墨蹟等の重要な文書を保管した重書箱の記録がある。記録された当時、大徳寺が所蔵した墨蹟が判明する。また、文書には墨蹟の流出に関する記録もあり、大徳寺における墨蹟の増減を明らかにすることができる。

以上の墨蹟の調査によって、宗峰妙超墨蹟および所有者の把握が可能となる。これらの調査により得られた宗峰妙超の墨蹟、売立目録図版、付属品から判明する所有者、所有者移転とその時代などに分類し研究資料として活用する。

茶の湯文化における宗峰妙超墨蹟の受容史については、茶会の記録である茶会記を活用し、検討する。茶会記百七件、総数一万五千三百二十七回の茶会から、宗峰妙超墨蹟が用いられた七十五回の茶会記を参考にした。現存する墨蹟および、売立目録、文献に記載される墨蹟と茶会記を併用して、茶の湯文化における受容史をみることをする。

## 第一章 先行研究とその問題点

### 第一節 宗峰妙超とその墨蹟について

京都紫野、大徳寺は、鎌倉時代の終わり宗峰妙超（諡号は大燈国師。以下、宗峰妙超とする）により開かれた臨済宗の寺院である。大徳寺は花園天皇（一二九七―一三四八）、後醍醐天皇（一二八八―一三三九）の帰依を受け勅願道場となった。大徳寺は室町中期以降、茶の湯と密接な関係を持ち、臨済宗大徳寺派の本山として今日に至っている。

宗峰の生い立ちを『大燈国師行状』よりみてみたい<sup>5)</sup>。宗峰は弘安五年（一二八二）、浦上荘の豪族、浦上氏の一族、浦上一国（掃部入道覚性。姓は紀氏）の子として播磨に生まれた。正応五年（一二九二）、書写山の戒信律師に師事して教書などを読み仏教を学んだが、その後、書写山を下り仏道を求めて京都にのぼることとなる。この年代について、竹貫元勝氏は『宗峰妙超』において『年譜』にある永仁五年（一二九七）か六年（一二九八）頃と推定している<sup>6)</sup>。京都では参禅の師を見つけることはできず、その後、鎌倉にのぼることとなる。

正安三年（一二〇一）、東遊して鎌倉の建長寺において老師と問答した。鎌倉では建長寺や寿福寺、万寿寺があり、参禅の師匠を求めて問答をした。

嘉元二年（一二〇四）に高峰顕日（一二四一―一三一六）に参じる。宗峰は当時、万寿寺にいた高峰顕日のもとで出家得度した。これより鎌倉での修行にはいることとなる。顕日のもとで百丈懷海の「靈光」について悟るところがあった。師に見解を述べ、認められ印可を与えられる。

嘉元三年（一二〇五）、当時、虚堂智愚（一一八五―一二六九）の法を嗣ぎ京都の韜光庵に移住した南浦紹明（一二三五―一二〇九）に参じた。徳治二年（一二〇七）、南浦が鎌倉の建長寺住持になると宗峰も従い、同年、雲門関の公案を大悟する。このとき師の南浦に呈した偈が現在、大徳寺に所蔵される『投機偈』である。本墨蹟の後半には南浦の印可が記されている。そこには「只是れ二十年長養して」とある。

延慶二年（一二〇九）、鎌倉から京都に戻り師の教えに従い、東山に雲居庵という庵室を設け、そこに隠棲し修行生活にはいった。その修行生活の実態は明らかではないが、經典などの祖録を写経することや、座禅などをしたものと考えられる。正和二年（一二三三）には四十日間で『景德伝灯録』（図2、大徳寺蔵）三十巻の筆写をした。『景德伝灯録』の奥書には「正和二祀五月二十三日」とあることから宗峰三十六歳のときに書かれたものである。このように当時、中国大陸からもたらされた祖録の写経などをして過ごした日々であると考えられる。

正和四年（一一三五）には東山雲居庵から紫野に小寺を構える。これが大徳寺のはじまりである。元応元年（一二一九）には後醍醐天皇（一二八―一三三九）が内裏に招き法談し、元亨元年（一二三二）には花園天皇（一二九七―一三四八）と法談を交わしている。花園天皇、後花園天皇とはその後も対談している。花園天皇と宗峰妙超においてその問答書が現在、大徳寺に残されている（《花園天皇宗峰妙超御問答書》二件、大徳寺蔵）。

正中二年（一二三五）には宮中の清涼殿において、宗論が行われた。顕密講師との禅宗論が行われ、宗峰妙超は論破する。このとき顕密講師の「教外別伝の義、如何」との問いに「八角の磨盤空裏を走る」と答え、旧仏教勢力を論破していった。これによって宗峰の名は世間に広まることとなる。なお、このときの講師の一人であった玄恵は宗峰の弟子となり居宅を寄進し、これが大徳寺の方丈となる。同年には花園天皇、後醍醐天皇の祈願所となる。

嘉暦四年（一二二九）に当時、宗峰の弟子で、後の妙心寺開山となる慧玄蔵主（一二七―一二六二）に《関山号》（図3、妙心寺蔵）の字号を与える。その間、土地の寄進が相次ぎ大徳寺の寺領は拡大することとなる。元徳二年（一二三〇）には関山慧玄に《与関山慧玄印可状》（図4、妙心寺蔵）を与え、《頂相》（図5、妙心寺蔵）に自賛したことが確認できる。

元徳三年（一二三二）三月には後醍醐天皇の許可を得て大宰府、崇福寺に赴いている。六月には退院して大徳寺に帰り、同年七月に崇福寺において始めた結制を大徳寺で解き、小参法語を大衆に示している（《解夏小参法語》大徳寺蔵）。

元弘三年（一二三三）の出来事として重要なのは八月に後醍醐天皇から本朝無双の禅苑として、宗峰門徒一流の相承を認められたことである。さらに同年十月には大徳寺が京都五山のひとつとなった。

建武二年（一二三五）十一月には遺戒を大衆に示している。これは老僧行脚よりはじまるもので、寺社仏閣が如何に繁栄しようとも修行を怠らず精進せよとの教えである。晩年である建武四年（一二三七）には宗圓道人に《与宗圓道人法語》（梅澤記念館蔵）を書き与えた。また、同年には南浦紹明所伝の紫法衣を塔頭に蔵め、門徒等出頭の際に用いることが定めた《徹翁大徳寺一世置文》（図6、大徳寺蔵）を徹翁に与えている。

宗峰妙超に帰依する者は花園天皇、後醍醐天皇のほか、朝廷、幕府の役人がいた。在家の者では女性も多くいた。宗峰妙超の禅風は中国の中峰明本（一二六三―一二三三）による公案禅の方式による教化の方法で、峻烈であったことから「気宇、王の如く」と評された。

先述のように弟子らに書き与えた法語などの墨蹟は多数現存している。現存が確認で

きた宗峰妙超墨蹟九十一件を一覧にしたのが【表1】である。これらのうち国指定文化財は四十件、国認定文化財は七件あった。現存する宗峰妙超墨蹟をみると、弟子等に与えた印可状や法語、二大字などの字号、大徳寺経営に関する文書、祖録の写本などである。墨蹟は書かれる内容から以下のように分類できる。

・字号

禅僧が剃髪得度に際して師匠から法諱を与えられ、修行がある段階にきたときに授けられる号である。

・印可

師僧が弟子に仏道の悟りに達したことを証明した文書のことである。師が法嗣として認めた証明である。先の字号とともに授けられる場合がある。

・法語

書かれる内容は仏典などを引用し、修行の精進やその道程をたたえたものである。宗峰妙超墨蹟の場合、在俗の弟子や信者に書き与えた。特に信者の中には女性も多くいた。

・詩偈

仏典や禅僧の詩集などを引用して書かれた墨蹟である。宗峰の場合は『虚堂録』、『白雲守端詩偈集』、『碧巖録』などを出典として書かれている墨蹟が存在する。

・書翰

消息文のことである。これらはほかの墨蹟とは異なり日常の筆跡を知る上で重要な筆跡である。

・祖録写本

当時、中国からもたらされた仏典や詩集を写経した。これらは祖録の写本として存在している。

## 第二節 宗峰妙超墨蹟研究における先行研究

宗峰妙超墨蹟の先行研究についてみてみたい。先行研究において紹介される墨蹟は、先の【表1】に記入した。

昭和二十四年（一九四九）に宗教学者である古田紹欽によって著された『大燈国師墨蹟』（一九四九、河原書店）がある<sup>7</sup>。古田は同書において二十七件の宗峰妙超墨蹟の内容に注目し、宗教史学の観点から論じている。古田は宗峰妙超を「意力の勝っている禅者」としており、「大燈は我国禅者の一類型と考えられる意力的禅者の絶頂点に位置する人」と紹介されている<sup>8</sup>。同書の図版で紹介する墨蹟は、当時、存在が明らかであった墨蹟である。しかし筆跡については少なからず触れてはいるものの、同書中で紹介

される墨蹟の中には、現在の筆跡基準と比較して後世の写本と考えられる作品も含まれている。

昭和二十四年（一九四九）から昭和二十六年（一九五一）にかけて、国立博物館附属美術研究所（現在の東京文化財研究所）によって刊行された『墨蹟資料集』（一輯―三輯）がある<sup>9</sup>。これらは、玉村竹二、伊東卓治、松下隆章によるもので、墨蹟の解説は伊東が担当した。掲載される宗峰妙超墨蹟は六件である。当時、伊東らを中心に現存する墨蹟の調査を行っており、調査の過程で撮影した図版は、現在、東京文化財研究所文化財アーカイブズ研究室に所蔵される墨蹟の画像資料である<sup>10</sup>。

この『墨蹟資料集』の発刊にも携わった伊東卓治により、昭和二十五年（一九五〇）には『書品』第四号で宗峰妙超墨蹟に関する論考が発表された<sup>11</sup>。伊東は、益田孝（一八四八―一九三八）が所蔵した『興作偈』（図7。出光美術館蔵）を同書において初めて紹介し、新たに所在が判明した墨蹟として注目された。本論では伊東によって確認された宗峰妙超墨蹟から、真蹟の特徴を明らかにしている。墨蹟中に書かれる年号から年代順に筆跡の特徴を論じている。『書品』において、伊東が「この小論で、一応大燈ものの整理をし、問題として残る所は問題として提起したいと思う」と述べるように、現存する墨蹟のなかには、筆跡について疑わしい墨蹟が存在するとされる<sup>12</sup>。伊東による、うつしまたは摸本であるとする筆跡の見解は、その後の研究における先駆けとなった。

昭和三十年（一九五五）、四十年（一九六五）には田山方南（旧文部省国宝鑑定官）により『禅林墨蹟』正篇および続編が発刊される<sup>13</sup>。所載される墨蹟は主に大徳寺、個人、美術館に所蔵される墨蹟を図版化した

たもので、今日の墨蹟研究の主要な文献となっている。これらの墨蹟から筆跡、紙質、内容の解釈、一部の墨蹟については付属品の記載にまで言及されている。田山方南による宗峰妙超墨蹟研究の特色は年記が書かれていない墨蹟について制作年代を推定している点である。これは制作年代が判明する墨蹟との比較を通して行われた。

昭和四十二年（一九六七）に発刊された『墨美（第一六五号）』では、田山方南は四十七件の宗峰妙超墨蹟を提示し、解説をおこなっている<sup>14</sup>。本書は『禅林墨蹟』（正編、続編）刊行後、同書の中から墨蹟の画像紹介であり、論じられる内容も同一である。

昭和五十年（一九七五）には『書道芸術』（一九七五年、中公論社）において、解説を古田紹欽、釈文と解題を木下政雄、中田勇次郎、篠原壽雄、加藤秀幸が行っており、筆跡、内容ともに各分野を専門とする研究者が論考している。先に紹介した伊東、田山の先行研究を引き継ぎ、真蹟と考えられる墨蹟を紹介している<sup>15</sup>。

昭和五十二年（一九七七）には田山による『禅林墨蹟』拾遺編が発刊される<sup>16</sup>。こ



れは昭和四十年（一九六五）の続編発刊以後、田山の調査により明らかとなった宗峰妙超墨蹟を紹介している。『禅林墨蹟』の正編、続編および拾遺編では、現存する墨蹟のうち真蹟と考えられる墨蹟に関して、ほとんど網羅されており所有者も判明する。ただし『禅林墨蹟』全編における問題点は、図版による解説を主としているが、田山も本文中で指摘しているように、論じられる墨蹟について、「写し」の可能性が高いものが含まれている点である。田山は『禅林墨蹟』（続編、一九六五）において当時、岩崎家が所蔵した《消息（三月一日付）》（図8。東京国立博物館蔵）を紹介しているが、解説においては「殊に最初の一行や、中央の本望の字がどうも真蹟らしくない」としている。つまり、『禅林墨蹟』が刊行された当時、存在した宗峰妙超墨蹟や所有者が判明することとは有意であるものの、筆跡にはなお検討が必要な点が挙げられる。

以上の先行研究を踏まえ、筆跡について編年および、作風の検討を包括的に行ったのが木下政雄（当時、京都国立博物館）である。昭和六十年（一九八五）、木下による「高僧と美術——（3）——大燈国師真蹟の意義」（『月刊文化財（通号二六二号）』）では、宗峰妙超の真蹟とする墨蹟を選定し、その筆跡を検討している<sup>17</sup>。論考では、制作年代が明らかな墨蹟を採用し、筆跡の作例基準を定めた上で、現存する墨蹟について筆跡を中心に論じている。木下は明らかに後世の写本である墨蹟も、宗峰妙超墨蹟の原本の存在を考える上で重要な資料に成りうるとしている。筆跡では有力視される墨蹟を事例として挙げ、その筆跡に関して五期に区分し論を展開している。木下は宗峰妙超墨蹟の筆跡について、五期のそれぞれの特徴を、以下のように指摘している。

#### （一）第一期Ⅱ幼少期

幼少期から《投機偈》（図9。大徳寺蔵）にいたるまでの二十五歳までを対象としている。なおこの時期の作品の発見には至っていないとしている。

#### （二）第二期Ⅱ青年期

師、南浦紹明に従い鎌倉建長寺にいた時期より、大悟して京都、雲居庵において修行する時期である文保二年（一一三八）の三十七歳ころまでを対象にしている。この時期は、祖録の写本も多く残しており、現存するものとして《景德伝灯録》（図2）、《手抄二卷》（図10。芳春院蔵）、《大川普済録》（図11。龍光院蔵）、《白雲集》（図12。福岡市美術館蔵）を挙げている。署名の特徴として、「沙門妙超」「野僧妙超」とされる。

#### （三）第三期Ⅱ壮年期

元応元年（一一一九）の三十七歳の時は、赤松円心（一二七七・一三五〇）の寄施および、慧玄法印による邸宅の寄進により大徳寺の基礎が出来上がった時期である。この時期より、後醍醐天皇から勅願所の綸旨を賜わる嘉暦元年（一二三六）、四十六歳ころ

までの八年間を対象とする。署名には、「大徳宗峰妙超書于明月軒」、自筆置文には「比丘妙超（花押）」があるとしている。

#### （四）第四期

嘉暦元年（一二二六）、宗峰四十六歳の大徳寺開堂以来、後醍醐天皇より「本朝無双の禅苑」の宸翰置文を賜わる元弘三年（一二三三）、宗峰五十三歳のときまでを対象とする。署名の特徴は「龍宝山宗峰叟」、「宗峰叟妙超」とされる。この時期の代表的な作例として《看読真詮榜》（図13。真珠庵）を挙げている。なお、木下は《看読真詮榜》を四十三歳ごろの筆跡と推定している。

#### （五）第五期Ⅱ晩年

元弘三年（一二三三）以降の建武年間（一二三四・一二三七）である宗峰妙超五十三歳以降、建武四年（一二三七）の晩年までの筆跡を対象とする。木下は《よねの文》（福岡市美術館蔵）と《日山之賦》（個人蔵）を挙げて、晩年の筆跡について「枯淡な味わいが増し、後世最も大燈様と呼ばれる墨蹟の特色が認められる時期」であるとしている。

これらの対象は筆跡の変化を論じるとともに、『大燈国師行状』などを参考に考慮された論考である。

### 第三節 本研究の目的

先行研究において古田は宗教史の立場から宗峰妙超墨蹟に書かれる内容を解釈し、論考した。しかしながら、紹介する資料においては、のちに伊東卓治が指摘する写しの可能性が高い《与宗明大姉法語》（図14。根津美術館蔵）を紹介しており、そのすべてにおいて筆跡を検討したものとはいえない。

伊東においては、現存する墨蹟のうち、年号の書かれる墨蹟について筆跡を検討した。また、真蹟とする墨蹟から筆跡の特徴を明らかにしている。現存する墨蹟の中には、双鉤や写しの墨蹟も存在すると問題提起され、筆跡研究の先駆けとなった。しかし紹介された宗峰妙超墨蹟が限られており、墨蹟の全貌を明らかにしたものとはいえない。

田山方南は当時、存在が知られていた大徳寺、個人、美術館の蔵品を多数紹介されている。これらの墨蹟を紹介するとともに伝来、付属品も部分的に紹介している。また、田山は解説などで紹介した墨蹟を「写し」として紹介する墨蹟があるが、ほかの墨蹟においては筆跡の真偽について述べられていない墨蹟もある。

木下は現存する墨蹟の中に双鉤や写しによる墨蹟があるものの、原本の筆跡を知る上で史料的な価値があるとしている。これまでの先行研究から筆跡を五期に分類し、筆跡の特徴を論じており、宗峰妙超墨蹟の各期における様式を明らかにされた。しかし論文

中で使用される墨蹟は、これまでに明らかにされた指定文化財および真蹟とされる個人蔵の墨蹟である。

先行研究における問題点は二点ある。一点目は宗峰妙超墨蹟についての総合的な調査が行われていない点である。近年、新たに所在が判明した宗峰妙超墨蹟が存在しており、これらを調査し、筆跡を検討する必要がある。また、宗峰妙超墨蹟は売立目録などの文献に図版が掲載されている。しかしながら総合的に墨蹟図版が明らかにされていない。

二点目は、宗峰妙超墨蹟が評価された茶の湯文化における受容史が明らかにされていない点である。宗峰妙超墨蹟は先行研究でも指摘するように「我国第一の墨蹟」とする評価や、「茶席におけるわが国禅僧中、最高位の掛物」とする評価があつた<sup>18)</sup>。しかしながら茶の湯が、どのように宗峰妙超墨蹟を評価し、受容してきたのかを明らかにしていない。

本研究の目的は、茶の湯文化における宗峰妙超墨蹟の受容史を明らかにすることである。そのため現存する宗峰妙超墨蹟と現存不明な墨蹟を明らかにし、研究資料として活用する。

現存する墨蹟の調査では、調査対象を先行研究において紹介される墨蹟に加え、近年、新たに所在が判明した墨蹟とする。現存する墨蹟の調査の意義は二つある。一つ目は真蹟とする筆跡を参考に新たに所在が判明した墨蹟と比較検討を可能にすることである。二つ目は墨蹟に付属する添状や箱書、文献記述との合致などから伝来、所有者の情報を取得できることである。これらの調査を通じ、新たに所在が判明した宗峰妙超墨蹟の筆跡を検討する。新たに所在が判明した宗峰妙超墨蹟は個人が所蔵する《一帆風》や、近年、MIHO MUSEUM が収蔵した《与宗智大姉法語》、個人が所蔵する《手抄二巻》のツレなどである。先行研究において明らかにされた筆跡の所見を参考に、これらの筆跡を検討する。

現存不明な墨蹟の調査では売立目録や名物記の記述とともに、『墨蹟之写』、『大徳寺文書』、『徳川実記』の記述を参考にする。これまでの宗峰妙超墨蹟の先行研究において、戦災や震災で焼失し、今日確認できない宗峰妙超墨蹟を明らかにしていない。倉澤洋行（元神戸大学教授）は『珠光 茶道形成期の精神』（二〇〇二、淡交社）において、太平洋戦争時に焼失した水戸徳川家旧蔵の圓悟克勤墨蹟を売立目録から紹介し、筆跡検討の資料に活用している<sup>19)</sup>。倉沢の研究手法を参考に、本研究では売立目録を活用する。売立とは徳川家をはじめとする大名家や豪商などの所有した家財や器物を入札により売却することである。日本においては明治初期から昭和中期にかけて行われた。このときモノクロ図版入りの出品目録が作成された。都守の『売立目録の書誌と全国所在一覽』によれば、現存する売立目録は四千三百三十六件あるとされている<sup>20)</sup>。閲覧

可能な売立目録を調査し、所載される宗峰妙超墨蹟図版を収集する。このほか海外オークションカタログ、販売を目的とする展示会図録等も調査対象に加え、近年に至るまでの宗峰妙超墨蹟図版を収集する。

文献上、宗峰妙超墨蹟は茶の湯道具として名物記に所載される。名物記とは、由緒のある道具の名称や形状、伝来などについて書かれた書物である。宗峰妙超墨蹟が所載される名物記を博搜する。

このほかの文献では『墨蹟之写』、『大徳寺文書』、『徳川実記』を活用する。『墨蹟之写』とは江戸時代初期の大徳寺禅僧、江月宗玩（一五七四・一六四三）による墨蹟鑑定の記録である。当時、江月のもとに鑑定のために持ち込まれた宗峰妙超墨蹟および、江月の所見が確認できる。このほか、『徳川実記』では將軍家からの下賜、大名からの献上において宗峰妙超墨蹟が使用されていた。また、『大徳寺文書』では墨蹟の寄進や流出に関する記述がある。これらの宗峰妙超墨蹟の移動について明らかにする。

以上の宗峰妙超墨蹟の総合的な調査により、江戸時代初期と近代および現代にかけて存在した宗峰妙超墨蹟と所有者の把握が可能となる。総合的な調査から判明する宗峰妙超墨蹟に関する情報とともに、本研究では茶会記を活用する。茶会記には開催された茶会の日時や招かれた客、使用された道具が記録される。茶会記の研究では谷晃が『茶会記の研究』（二〇〇一、淡交社）において、現存を確認された茶会記二百二十八件を紹介されている。そのうち百十一件の茶会記中、宗峰妙超墨蹟が床の間の掛物として使用された茶会は七十五回確認できた。現存する墨蹟および、売立目録、文献に記載される墨蹟と茶会記を併用して、茶の湯文化における受容史をみることにする。

## 第二章 現存する宗峰妙超墨蹟の調査

### 第一節 調査の目的とその対象

筆者の調査により宗峰妙超墨蹟《一帆風》や、個人の所蔵する墨蹟の存在が明らかとなった。また近年、MIHO MUSEUMにより収蔵された墨蹟も存在する。これらは先行研究において紹介されておらず、新たに所在が判明した墨蹟である。現存する墨蹟を調査する動機は、これらの新たに所在が判明した宗峰妙超墨蹟の筆跡を検討するためである。先行研究において伊東や田山が指摘するように、現存する墨蹟には双鉤や写しの墨蹟があり、図録からだけの判断では限界がある。そのため現存する墨蹟を閲覧し、運筆や墨色を確認する。本調査の目的は墨蹟の筆跡について検討するとともに、付属する添状や箱墨書の記述も含め文献での記述を明らかにし研究資料として活用することである。

本研究の調査対象は現存する宗峰妙超墨蹟である。そのうち閲覧できた墨蹟の所蔵先は大徳寺、徳禅寺、真珠庵、芳春院、九州国立博物館、湯木美術館、藤田美術館、野村美術館、出光美術館、根津美術館、永青文庫、MOA美術館、福岡市美術館、梅澤記念館、個人である。新たに所在が判明した墨蹟については個人の所蔵による《一帆風》、《物我両忘》、《手抄二卷（断簡）》、《宗峰妙超墨蹟澤庵宗彭極》、MIHO MUSEUMの所蔵する《与宗智大姉法語》であり、これらの墨蹟の調査を実施した。

以上の調査により宗峰妙超墨蹟の筆跡の特徴を明らかにし、新たに所在が判明した墨蹟と比較を行うこととする。

### 第二節 調査を実施した墨蹟の筆跡の特徴

現存する宗峰妙超墨蹟の調査から少年期、青年期、壮年期、晩年に分けて筆跡の特徴を明らかにする。

#### ・少年期

二十六歳以前の宗峰妙超の行状では、『大燈国師行状』によれば鎌倉に来てより建長寺の長老と問答を行い、二十三歳のときに高峰顕日に受髪して参禅しはじめる時期である。このころは宗峰と名乗っていたが、それ以前は道吾と名乗った。先行研究において、木下政雄によれば二十六歳以前に書かれた墨蹟は確認されていないとのことであった。ただ、文献ではその存在が確認できる。宗峰と名乗る以前の、道悟時代に書かれた

書状の記述が江月宗玩『墨蹟之写』（慶長廿年元和元年、墨蹟之寫卷五）に記載されており、以下のような記述がある（図15）。

何事よりもまつ酒如此

承候之條感悦之外無

他事令存候哉古しへ遣

能法語に下語をして

まいら勢候こ連越可有御

覧御本を志路しめされす

候盤舞本とハ下語に御心え

あるへか羅す候也

法々本来法足瘦草鞋覓心々

無別心鐵丸無縫罇世界國土

このしうに申しいれまいらせさせ

給候へ者一日も御せんけの御物

かたり候しかハ御させん候へく候

かやうの

事も御古ねにもわたり亭返々

よろこひいりて候へともな越まこと二

この法にて生死ハ者なるへき物

そとふかく信する御心かいまた候ハぬこ

と於ほく候かまへてもろともに御修

候へく候實にハ又な越さりにてハかな

ハぬ事にて候やよくゝ志いても御

させんハあるへき事にて候也何事も

ゆいけんしやういん御まいり候ハんとき

申入候へく候恐々謹言

二月十六日

「花押」

浦上殿

此文字道吾トミタリ

開山ヲ初ハ道吾ト云タ

浦上殿ハ開山ノ親父也此文ハ前宮幸三郎所持一段ハ利休  
所ニ有リ利休ヨリ住吉屋宗拙父モライタト也由来正キ

物ソ壺道味ニ有之開山ノ文

記述の内容は、父である浦上氏に修行の様子を伝えるものである。『墨蹟之写』にある江月の写しでは、仮名文字のおおよその筆跡が確認できる。『墨蹟之写』に所載する道悟時代の墨蹟と筆跡が近い墨蹟として、『写本讓狀紀州高家莊』(図16。龍光院蔵)がある。同墨蹟の継紙には江月宗玩によって以下のような記述がある。

紀州高家莊讓狀之写

大燈国師自筆錐仮名難辨別

国師授与浦上氏慈父慈母仮名之

藻翰相似分明矣

宗玩書

印

文中の「国師授与浦上氏慈父慈母仮名之藻翰」とは『墨蹟之写』中に所載される道悟時代の書状(図15)と合致する。『墨蹟之写』と『写本讓狀紀州高家莊』から、二十五歳以前に書かれた宗峰妙超墨蹟では、仮名消息が残存していたことがわかる。

#### ・青年期

その後、宗峰妙超は高峰頭日のもとで大悟するも、二十五歳のとき、当時、虚堂智愚の法嗣である南浦紹明(大応国師)に参じる。

宗峰妙超は二十六歳のとき、師である南浦紹明に『投機偈』(図17)を呈する<sup>21</sup>。

本墨蹟は師である南浦紹明から与えられた雲門関の公案を透得したとき、その胸中を書き師に示したものである。そのため後半部分には師の南浦により印可証明する旨が書かれている。宗峰妙超は二十八歳のとき、師のもとを離れ、東山の雲居庵、ついで三十四歳のとき京都紫野に小庵を営んだ。その後も数人の弟子らと参学に励んだ。これらの足跡を物語る墨蹟では『景德伝灯録』(図2)、『手抄二卷』(図10。芳春院蔵)、『大川普済録』(図11。龍光院蔵)、『白雲集』(図12。福岡市美術館蔵)がある。以上の墨蹟中、制作年代が判明する墨蹟は『投機偈』と『景德伝灯録』がある。

『投機偈』と『景德伝灯録』の筆跡に注目する。宗峰妙超が二十六歳のときに書いた『投機偈』(図17)の筆跡は、筆の腹部を用いて書かれている。字粒は写経のような小文字であり、字形は正方形に納まる。筆勢も穏やかである。用いた筆は穂先が短く写経用の筆であると考えられる。本幅は行書体で書かれるが、一文字ずつの間隔が狭い。

次に『景德伝灯録』(図2)は巻末の奥書に

正和二年五月廿三日 野僧妙超寫

とあり、正和二年(一二三二)、宗峰妙超三十二歳のときの筆跡であることが判明する。本墨蹟は四十日間で書かれたため、速度のある運筆が認められる。『景德伝灯録』は、

写経用の小筆を用いて筆先を立てて書写されている。奥書部分の筆跡は、小筆を用いているが、続けて書かれたようで筆を立てて書かれている。三十二歳当時の字の書体をみることもできる。

このほか、書かれた年代が判明しないものの、およそ三十代の筆跡としては、《大川普濟録》、《白雲集》、《手抄二卷》がある。《大川普濟録》(図11)は閲覧していないものの、図版から分析を試みると、筆跡こそは他の写本と異なるが、三十代の青年期に書かれたものと考えられる。筆跡は筆先のみを用いて、ある程度の速度をもって書かれた。經典などを写す場合、内容の理解に重きをおいたとみえ、穂先を用いて速筆で書かれている。文字全体は面長に書かれる。これは祖録を写すときの筆跡であろう。

《白雲集》(図12)は写経用の筆で穂先の短い小筆を用いて書かれている<sup>22</sup>。筆跡に注目すると一画一点をおろそかにしていない。起筆終筆ともにしっかりしており、写経用の穂先の短い筆によって書かれている。なお、篠原壽雄によれば「大川録などに続く三十歳代のものと考えられる」としている<sup>23</sup>。

《手抄二卷》(図10)は筆先のみを用いて書かれている。傍線や○印も本紙中に朱書きがあるが、後世の書き入れであろう。総じて字粒は小さい。さきの《白雲集》にみた筆跡とは異なっており、ハネやハライを気にせずに書かれたものである。以上の祖録写本から青年期における筆跡の特徴は、写本の性格から運筆の速度が速く書かれている。青年期に書かれた墨蹟のうち《投機偈》は宗峰妙超二十六歳の筆跡であり、その書体の特徴をみることができた。祖録写本では、《景德伝灯録》や《白雲集》では筆先を用いて書かれており、文字の終筆と起筆に特徴がみられる。またハネ、ハライ、横画には伸びがみられた。

#### ・壮年期



現存する墨蹟を便宜上区分するため四十代前半と後半に分類する。ここでは先ず四十一歳以降、四十五歳までの墨蹟の筆跡を検討する。

四十一歳のときの墨蹟では元亨壬戌、すなわち元亨二年(一二三二)に書かれた《与宗圓禪人法語》(図18。根津美術館蔵)がある<sup>24</sup>。閲覧したところ行書体で書かれている。横画に注目すると入筆から徐々に筆圧を強めて書かれている。始筆は鋭く、中央部はふくらみ、終筆は次の文字の一画目につながようとしているため、部分的に連綿になっている。「時」の文字などは行書体になっている。起筆から徐々に力を入れて書かれ、終筆で止めている。運筆は比較的ゆつくりと書かれ





る。文字毎の間隔は狭く、一文字あたりの字粒は全体を通じて同一であるが「處」の文字は筆先を用い細めに書かれている。この文字の場合、終筆は若干上向いている。

四十四歳のときの墨蹟では正中二年（一二三二）に書かれた《与宗明大姉法語》（図19。永青文庫蔵）がある。この墨蹟はもともとは前半部分が存在したが欠損し、現存するのは後半部分のみである<sup>25</sup>。閲覧したところ、筆跡は行書体を中心に書かれる。後半部分の筆跡に注目すると先ず、全体を通じて「一」の文字と最終画が横長に書かれている。文字が比較的、正方形に書かれること、「一」の文字が横長に広がることで文字全体に躍動感が与えられている。末文には「筆に信せて之を書す」とあることから、一気に書かれたことがわかる。そのため運筆は速く、本紙の四行目の以降から最後までをみると徐々に行書体が崩れ草書体に変化している。この時期から一文字において右肩上がりに書く癖が表れている。

次に四十代後半では嘉暦四年（一二三九）、四十八歳のときに書かれた《関山号》（図3）、元徳二年（一二三〇）、四十九歳のときに書かれた《与関山慧玄印可状》（図4）や《与宗悟大姉法語》（図20。大仙院蔵）がある。これら三件の墨蹟は閲覧していないため、図版から筆跡の所見を述べることにする。《関山号》（図3）は元々別であった字号と偈頌を後世、上下にして表装されたものである。字号、偈頌ともに一文字が右肩上がりに書かれている。下部の讚部分は行書体で書かれており、一部は草書体である<sup>26</sup>。該当する文字は一行目三文字目の「路」、最終行二文字目の「春」がある。《与関山慧玄印可状》は行書体で書かれている。一文字に注目すると、正方形に書かれている。最終画がハライの場合は、筆の勢いに任せて書かれている。《与宗悟大姉法語》の筆跡は、楷書体であるものの一部に、行書体の文字がみられる。文字は一画毎に書かれている。

五十歳前後の筆跡では《与泰綱居士法語》（図21。湯木美術館蔵）がある。田山方南によれば本墨蹟の筆致は、《与宗圓禪人法語》（図18）に近いことから五十歳前後であると推定されている<sup>27</sup>。閲覧したところ筆跡は「火中蓮花」の「花」以降に変化を確認できる。「花」以前は宗峰特有の墨を多く含んだ筆致で描かれており、やや遅筆である。後半は、比較的速い速度で書かれている。墨蹟中に「明月軒」とあり、明月軒という居室で書かれたことがわかる<sup>28</sup>。背面からみると横筋が多く入っている。縦筋は少ない。紙の色は時代の経過によって黄色みを帯びていた。現在、本墨蹟には春屋宗園による極めが付属する<sup>29</sup>。



このほか先行研究において、五十歳前後に書かれた墨蹟としては《七言偈（「熱一上」）》（図22。藤田美術館蔵）がある。田山方南は墨蹟中に書かれる「龍寶山」に注目し、大徳寺の開堂が四十五歳前後になることから、本墨蹟を五十歳前後であると推定している<sup>30</sup>。閲覧したところ起筆終筆ともにしつかりと書かれている。このような字形は筆を垂直に近い形でもって書かれたためと考えられる。ハネ、ハライは穏やかであることから一定の速度で書かれた。文字および行間がほかの法語墨蹟と異なり、広くとられている。特に語句と落款部分の行間は大きく空けられている。

なお、四十代後半もしくは五十代前半に書かれた墨蹟として《看読真詮傍》（図13）がある<sup>31</sup>。看読真詮傍とは七月十五日の孟蘭盆会に際し僧堂に掲示する紙のことである。そこには看読するよう指示した経典が書かれ、僧が随意に読経を行う。この墨蹟は先行研究において、木下政雄が「四十七歳に近い頃の作品」であると推定されている<sup>32</sup>。また、田山方南は本墨蹟の書かれた年代を建武元年（一二三三）<sup>33</sup>、すなわち宗峰妙超五十三歳の筆跡であると推定されている<sup>34</sup>。本墨蹟を閲覧したところ文末に宗鏡とあるが、筆跡が異なっているため宗峰妙超のものとはいえず、加筆である。筆跡は中筆を用いて書かれ、墨色の変化もあり運筆をよくみることができる。起筆をみると徐々に筆が入っており、穂先の長い筆を用いて書かれたと考えられる。文字から文字への移動に際して筆が紙面と擦れる部分は細い連綿となっている。紙面が限られている中で、一行あたり四文字程度を書いており、文字と文字の間は適宜、間隔が空いている。また行書体、草書体が入り交じって書かれている。文字全体をみると縦の線、ウ冠、「利」の右側、「二」の字など強調して書かれている。

#### ・晩年

元弘二年（一二三二）以降の五十代の墨蹟では、《与宗玉善女法語》（図23。水府明徳会蔵）がある。この墨蹟は元弘二年（一二三二）、宗峰妙超が五十一歳のときに書かれた墨蹟である。閲覧できていないため、図版から筆跡の所見を述べることにする。一文字に注目すると正方形にはおさまりきらずに縦横に拡張している。一部では筆圧が強く書かれる箇所があり、その特徴は「從」の文字等にみられる。全体的には行書体で書かれるが草書体の割合が多くなっている。なおこの時期から僅かに穂先に揺れがみられる時期となる。

このほか建武元年（一二三四）の墨蹟では《宗峰妙超像》（図24。大徳寺蔵）の讚



部分がある<sup>34</sup>。閲覧したところ讀文三行目から五行目は剥落しているが、おおよその文字の形状が判読できる。「機」という文字をみると書体がしっかりしている。このころは藏峰で書かれており、書き出しは筆の中腹までを用いてしっかりと書かれているが、後半になるとやや筆先を用い書いている箇所がある。そのため線質に若干の変化がある。

建武三年（一三三六）に書かれた《示衆法語》（図25。孤篷庵蔵）は宗峰妙超が五十五歳のときに書いた墨蹟である。本墨蹟は閲覧できていないため、図版を参考に所見を述べたい。一文字に注目するとやや丸みを帯びている。書体は行書体で、一文字毎に書かれている。なお、法語墨蹟中、花押がみられるのは本墨蹟のみである。

建武四年（一三三七）に書かれた墨蹟では《日山之賦》（図26。個人蔵）がある。閲覧したところ筆跡は字の骨格がしっかりと書かれ、筆先には僅かに震えた箇所がみられる。また最晩年に書かれた墨蹟では《遺偈》（図27。大徳寺蔵）がある。《遺偈》にも筆先に僅かな震えがみられる。このほかでは《与宗圓道人法語》（図28。梅澤記念館蔵）がある。墨色と筆跡に勢いがあり全文十八行で、宗峰最晩年中、最長の墨蹟である。閲覧したところ筆跡は、終筆にはわずかに筆先が震えた箇所がある。このほかの墨蹟では《徹翁号》（図29。徳禅寺蔵）が晩年に書かれた墨蹟であるとされる<sup>35</sup>。本墨蹟は宗峰妙超が法嗣の徹翁義亨（一二九五―一三六九）に与えた字号である。閲覧したところ中筆が大筆に墨を十分に含ませて書かれている。本墨蹟の筆跡は「徹」という文字においては紙面に押し付けるように書かれている。一定の速度が感じられ、速筆で書かれたものと考えられる。また同時期に書かれたと考えられる墨蹟として《徹翁大徳寺一世置文》（図6）がある。この頃の筆跡の特徴は入筆と終筆ともに僅かな震えがみられる。

建武年間の中間から晩年に書いたとされる墨蹟では、《興作偈》、《夏日偈》（図30。出光美術館蔵）の双幅がある。本墨蹟のうち、《興作偈》は田山方南が『禅林墨蹟』において、建武年間の筆跡であると指摘している<sup>36</sup>。これら二件の墨蹟は『白雲守端語録』を出典とする墨蹟である<sup>37</sup>。《興作偈》を閲覧したところ用いた筆は、もう一方の《夏日偈》同様に毛先が柔らかな筆であろう。文字に注目すると「成」の四画面などのハライが右肩上がりになる箇所や、「殊」の文字が左下がりになっている箇所など、これらが本紙全体で動きをつける役割をしている。総体に各字形が右肩上がりになっている特徴がある。墨色もはつきりとしている。次に《夏日偈》も大筆を用い書かれてい

る。墨色の濃淡も残り、筆の腹部を用いて書かれている。筆の毛が柔らかかったため、線質は丸みを帯びている。経年変化による皺、および表面に割れが多くみられる。筆跡が同じことから《興作偈》と《夏日偈》は同時に書かれた墨蹟であると考えられる。

このほかでは《白雲偈》(図31。野村美術館蔵)がある。本墨蹟は、『碧巖録』三七七則「盤山三界無法」を出典とする<sup>38)</sup>。先行研究において田山方南は、本墨蹟を最晩年の筆跡であると指摘している<sup>39)</sup>。閲覧したところ「雲」の跳ね上がりの二画目の字が金釘のようなまがりの調子をみせている。運筆をみると前半四文字は各文字行草書体が入り交じったものであるのに対して、後半四文字は行書体である。「泉」の字は、途中から墨を継いで書かれたことが確認できる。用いられた筆はやや穂先の長い、大筆と考えられる。

以上の墨蹟から建武元年(一二三四)より晩年の建武四年(一二三七)までにみる筆跡の特徴は、楷書体に近い行書体になっている点である。たとえば、『遺偈』や《日山之賦》などはその傾向が顕著にみられる。また、一文字も筆全体を用いて太く書かれており、筆先に僅かな揺れをみることができる。現存する建武年間(一二三四―一二三八)の筆跡において、最長の墨蹟は《与宗圓道人法語》(図28)である。《与宗圓道人法語》は《遺偈》や《日山之賦》にみる行書体ではないものの文字には僅かな揺れを確認することができた。また、青年期に書かれた《投機偈》より晩年に書かれた墨蹟をみると、文字の字体に変化はなく、行書体や草書体など、字形の変化があったことがわかる。

### 第三節 新たに所在が判明した墨蹟

#### 第一項 《一帆風》(個人蔵)

本墨蹟(図32)は現在、個人が所蔵する。書かれる内容は、一帆風を宗峰妙超によつて書写したものである。一帆風とは宗峰妙超の師である南浦紹明(一二三五―一三〇九)が、その師である徑山の虚堂智愚(一一八五―一二六九)のもとを去るにあたり、尊宿から送られた送別詩偈の総称である。

この墨蹟は田山方南をはじめとする先行研究では取り上げてこられず<sup>40)</sup>、これまで所在が不明だった。この墨蹟を紹介した初出は『同門』である。『同門』では大徳寺で開催された、表千家家元如心斎と即中斎の遠忌の茶会を紹介している。本墨蹟は茶会において京都支部が担当した茶席の掛物として用いられている。同誌中、本墨蹟について木下收(北村美術館館長)が墨蹟と添状について触れ、堀内宗心(表千家宗匠)が墨蹟の内容を解説している<sup>41)</sup>。茶会で使用されて以降、墨蹟が紹介されたものとしては堀

内による『茶道雜誌』（二〇〇〇年から二〇〇一年）がある。その中で、堀内は同墨蹟の内容解釈を中心とし、添状二件（東海寺江西宗寛ら添状および新井白石添状）を解説され、その関係について述べられている<sup>42</sup>。しかしながら、本墨蹟と現存する墨蹟を比較し、制作年代を検討しておらず、また、すべての添状を明らかにしていない。そのため墨蹟および添状の調査から筆跡や伝来を検討する余地があるものと考ええる。

本作の形態は、紙本墨書、掛幅装である。表装裂は一文字風帯が紫地印金、中廻しが花鳥緞子（唐物緞子か）、上下が茶地絨であり、これに象牙軸が付されている。本墨蹟を収納する箱の甲部に「祥雲寺」とあり、堺の祥雲寺に伝来した墨蹟であることが判明する。本紙は素紙で、寸法は縦三二・二寸、横六三寸。最終行に宗峰の方印を捺す。本紙の構成は、一行におよそ十七文字、最終行に詩偈の作者名を書いている。墨蹟では東嘉從逸、天台禪会、天台可権、虚堂智愚の順に送別の詩偈が書かれる。墨蹟中の詩偈は以下になる。

扶桑国裏蓬萊客萬里迢々扣師席太唐元

在脚頭邊早是循人舊途跡當機撞着老

菸菟遭他一口毒無藥含冤直上五峰巔

直要窮他起死着機前攘臂將其鬚未

拈棒時先領畧從來子不使爺錢肯用東山省

數佰秋風喚起故郷心打辦行囊佛短策臨

行無可壯行色問龍借力飛大舶 東嘉從逸

高禪家近扶桑国巨海遐征驗知識年後生

涯自許長熟知寸短難憑尺東西曠索六七

年雨花雲葉固彌漫鉄心一触機穎脱玻璃

蓋面春芳妍風味果然非草々如人飲水応難

道取之不足用有餘地産黄金奚足寶了々々々

沒可尋乘時歸去藏家林胸中新語慎勿吐、

故郷易動行人心

天台禪会

海東古有僧名曉冒浪衛波來訪道髑髏

悞飲便知帰四七二三俱靠倒上人逸格真

其流骨気雄々充斗牛鉅宋山河脚跟底、

風驚草動知来日驀被南山老虎嚙從

前学海成枯竭手面換人双眼睛一甌苦茗

浮春雪因思百丈曾戴参迅機一喝何森

巖五峰相見齒不啓甘草苦兮黄連甜樹

頭葉々落寒羽萬里迢々又杯渡鄉邦元是  
太平人莫把華言成錮鑰 天台可權  
敲磬門庭細揣摩路頭盡處再經過明々說  
与虚堂叟東海孫兒日轉多 明知客發  
明後欲告歸日本尋照知客通首座源長老聚  
頭說龍峰會裏家私袖紙求法語老僧今年八  
十三無力思索作一偈以贐行色萬里水程以道瓊  
衛咸淳丁卯住徑山大 智愚

宗峰書 印

紙質は他の宗峰妙超墨蹟にみられるのと同様、薄手である。背面から目視すると横皺が多い<sup>43</sup>。墨蹟の墨色は薄い。筆跡に注目すると文字は比較的、正方形である。字粒は小さく、行書体で書かれているが、「知」の文字などは草書体である。本墨蹟は宗峰妙超の筆跡であると考えられる。そこで現存する真蹟との比較から制作年代を検討する。第一に宗峰妙超二十六歳のときに書かれた《投機偈》(図9)と比較したのが図33である。共通する文字は「家」、「門」、「一」、「機」、「風」、「人」である。二十六歳当時は、筆に墨を多く含ませ遅筆で正方形に書かれている。一方の《一帆風》の書体は、筆に慣れた印象を受け、二十六歳よりも後年であると考えられる。

次に宗峰妙超、三十二歳のときに書いた墨蹟では《景德伝灯録》(図2)がある。《景德伝灯録》は、祖録写本であるため、筆跡は異なっているが、奥書部分には、書写した旨が書かれた記述がある。奥書中の文字と《一帆風》に共通する文字を比較したのが図34である。共通する文字は「是」、「郷」、「其」、「何」、「不」、「知」である。比較すると《景德伝灯録》の文字よりも《一帆風》の文字は、「不」や「知」の運筆と同一であるが、《一帆風》の方が、右肩上がりになっている。文字が右肩上がりになる傾向は四十四歳のときに書かれた《与宗明大姉法語》(図19)にみられた。以上の比較から《一帆風》の書かれた年代としては、三十代後半から四十代前半であると推定する。

本墨蹟には添状五件が付属しており、これらが一卷の卷子となっている。これら五件の添状は大心義統横物、大心義統添状(図35)、龍巖宗棟添状、江西宗寛ら添状(図36)、玉僊宗斤添状(図37)、新井白石添状(図38)である。

先ず、大心義統(一六五七―一七三〇)横物では

印

源 深 流

彌 長

印

印

と書かれて、さらに大心義統添状が続いている。

印

南浦國師初絶深溟遍游宋地終抵徑山觀投虛堂  
師祖大獲記莚既而欲還本土師祖寵賞之以七絶  
粧其行色一時庶名納無不矜式各聲詩偈亦  
贈祖道渾緝之其篇四十有二品題為一帆風  
咸淳三年茗溪慧明冠引語而相流國師東歸  
後門人衷之貽厥塔所天源菴然昔時有鬱攸  
之凶所衷之者僉俱燼焉所賴我之大燈祖掌  
騰寫之爲一軸矣予以淹雖聞持之未知散在  
何家而不果目焉斯日府之壇越紀安殷速予懸  
一軸就而敬矚則所謂燈祖手澤之一帆風也匪  
啻多年宿望果乎今日而已且喜拜燈祖臨池天縱  
妙而甄知世多贗類時安殷之曰儻不容偽疑者  
則請賜一語爲後照鑑據矣於此乎予告之曰縱  
鞅掌士不族予之辯而知茲墨字眞也然予據  
其因由抑自曰國徃中華蒙許可者大都一百  
人予未聆如國師得微悃提重許可者方觀師祖  
不誤兒孫日多懸記彌漫延驗今日而可知然而  
予於茲墨寶不克無一喜一惜蓋一帆風所職由  
者其以敲磬門庭等語句也其重如九鼎也假如  
餘韻已成焉比九鼎則奚其不輕邪爾則首  
其輕者尾其重者理敢然乎況勦蠲彼全篇而  
纔剩從逸禱會等詩偈耳耶雖然燈祖若斯  
書也予豈得間然唯嘆惜焉而已且所以喜者何  
夫墨寶所尊者名實泊模印也賴燈祖名印  
在于茲尚且所重亦在于茲是予喜其所惜惜其  
所喜者也今原其餘軸鎮其某院秘于某家而  
既三之云嗚呼各鎮秘之而爲世之奇貨則雖不  
可惜庶幾偕繾綣留護于一所

享保辛酉三月十六日 紫野東堂 義統拝書 印

記述から、本墨蹟は一帆風を宗峰妙超が書写した真蹟であり、その原本は師である南浦紹明の塔所である龍翔寺に存在したと書かれている。次に龍巖宗棟添状では以下のような記述がある。

燈祖毫端三昧一帆風壺軸

好事者斷三段其一段東嘉

從逸等四首者谷安殷得之

寶秘如夜光明月也夫信手書

縱意所如点畫奇勁出於自然

猗乎先德之作用雖伸紙

弄墨之際亦自卓絶況其

不可名者乎

享保六年辛丑夏

前大德龍巖宗棟拝書

記述から、この墨蹟が谷安殷が取得した墨蹟であることがわかる。次に江西宗寛ら添状には以下のような記述がある。

大燈國師所書宋國諸尊宿送南浦

和尚歸日本偈頌若干章後來裁為

三幅俱爲好古之者所藏今其末篇

始於扶桑國裏蓬萊客卒於住徑山

智愚計二十九行行々嚴整字々精

奇可謂碧落之碑無贗本因證之

東海寺

江西宗寛（花押）

法靈院

桃林宗陽（花押）

享保五庚子年十月日

妙解院

天柱義雪（花押）

勝幢院

鶴洲宗壽（花押）

記述から、本墨蹟が一帆風の内容であることが述べられる。また宗峰妙超による《一



帆風》墨蹟は当時、三つに裁断され「好古の者」が所蔵したことが判明する。次に玉僊宗斤添状では以下のような記述がある。

印

谷氏安殷居士家寶一軸者世  
所謂一帆風所載之從逸禪會  
二老之長篇泊天澤師祖  
之兒孫日多之偈而大燈國師  
之眞蹟也嗚呼國師滅後垂  
于四百年而墨色雲興龍蛇  
飛動頃安殷就予求其語予曰  
目擊分明一大手筆点畫  
已前文彩全彰豈敢容喙于  
其間乎謂趙璧無瑕類勿  
受相如瞞者也因爲之語  
享保六歲次年丑孟夏

紫野 宗斤 玉僊敬書

印 印 印

記述から、本墨蹟は谷安殷が所蔵している墨蹟であり、その内容も一帆風であるとしている。さらに本墨蹟には新井白石（一六五七―一七二五）の添状が付属する。添状には以下のような記述がある。

印

予嘗觀宋僧送南浦明公東歸詩四十四首梓  
行于世者一卷題之曰一帆風盖祝之也是歲  
庚子冬復觀泉州紀安殷所藏宗峰妙超國師眞  
蹟一幅即是卷中所錄者其始則法逸禪會可  
權詩而次之以虛堂愚禪師偈并引凡四首蓋  
彼三僧其引所謂當時聚頭者耳因知帆風之  
作自惟溪至正芾七言絶凡四十詩是固一卷  
也且彼三僧所作古風短編其體裁自別而後  
來鏤梓者勦之以入于卷中遂使其引語亦無  
歸趣可以笑也雖然愚禪師宋末名僧其徒寶  
業靈石禹溪之輩皆是一時之傑而南浦師兄  
者也豈復無一言之贈其行乎哉而今則不傳

矣禪師及三僧所贈幸得于世者實賴宗峰所

書而已宗峰嗣南浦其所書必不誤矣 傳

享保五年十一月白石源君美書

印 印

記述では南浦が虚堂智愚のもとを去るにあたり持ち帰った四十四首の詩偈を一帆船といい、虚堂の詩偈は別に存在したとされる。南浦の弟子である宗峰妙超によって書写された一帆船は紀安殷（谷氏は紀氏ともいう）が所蔵したとしている。添状にみられる谷安殷（一六六九―一七二二）は当時の所有者で、堺の両替商である。

添状の記述より享保年間（一七一六―一七三五）、《一帆船》は本墨蹟を含め三つに裁断され、これらの墨蹟は好古の者が所蔵していたことが判明する。一帆船の内容自体は、寛文四年（一六六四）に発刊された版本から全文が明らかとなっている。この版本の跋文は黄檗宗の僧、即非如一（一六一六―一六七二）によって書かれ、同文中、一帆船一卷が京都の古刹（大徳寺か）で発見されたとある。寛文四年（一六六四）には四十三首本、そのうち二十五首が加わった六十八首本が発刊された<sup>44</sup>。ただし、これまでのところ、版本の原本は確認されていない。

谷家と堺、祥雲寺との交渉は、安殷の祖父である谷宗印（正安 一五八九―一六四四）の時代にまでさかのぼる。谷家は堺の豪商で、宗印の祖父である宗臨は圓悟克勤墨蹟を所持していた茶人でもあり、千利休（一五二二―一五九二）らとも交流があった。宗臨の子の宗卓、孫の宗印も茶をよくした<sup>45</sup>。宗印はその後、伊達政宗（一五六七―一六三六）の要請により圓悟の墨蹟を二分割し、一方を伊達家へ、一方を没する直前に堺、祥雲寺へ寄進する。宗印から祥雲寺に寄進された墨蹟は、《流れ圓悟》（図39。東京国立博物館蔵）である<sup>46</sup>。祥雲寺は谷宗印により澤庵宗彭（一五七三―一六四五）を開基に迎え、谷家の菩提寺となった<sup>47</sup>。宗印の時代、谷家には多数の器物があった。圓悟墨蹟をはじめ、これらの一部を宗印は没前に祥雲寺へ寄進する<sup>48</sup>。このほか、宗印によって祥雲寺へ寄進されたものは《松島図屏風》（フリーアールギャリ―蔵）がある<sup>49</sup>。

宗峰妙超墨蹟《一帆船》は安殷の生前か没後かは不明だが、谷家によって祥雲寺に寄進される。寄進後の谷家では、経済的な理由から本墨蹟と大慧墨蹟を借り受けた。このことは『大仙院文書』より以下の記述によって確認できる<sup>50</sup>。

従谷勘左衛門祥雲寺江墨蹟借状

覚

一 大慧禅師墨蹟 一幅

「添状一卷」

一 大燈国師墨蹟 一幅

「添状一卷同一通」

右之什物、当家不如意二付、御願申上拝借仕処実正也、身上取續候上、返納可仕候、仍後證如件、

享保十九 寅年九月十三日

谷六兵衛



谷喜八郎



谷又兵衛



谷勘左衛門



祥雲寺

右之通私共承知仕候處相違無御座候、以上、

享保十九 寅年九月十三日

山科清三郎



益田治兵衛



祥雲寺

（「谷勘左衛門等連署墨蹟借用証文」）

ここにある墨蹟二件についてみると、大慧墨蹟とは大慧宗杲墨蹟のことである。宗印によって寄進された掛物目録については「祥雲寺什物掛物之目録」<sup>51</sup>にみることで、大恵については「大恵影 無明元長賛 一幅」と記述があるのみで、墨蹟としての寄進はない。大慧墨蹟は宗印以降の谷家当主または安殷自身により寄進されたものと推測される。一方の宗峰妙超墨蹟であるが、添状一卷の存在と谷家が借用した点を考えると、谷家により寄進された《一帆風》墨蹟が該当し、添状一卷の記述も一致する。ただ、一卷の他に添状一通が付属したようであるが現在には不明である。

この証文には谷家の経済的理由から借用し、経済状況が立ち直れば返却するところある。祥雲寺ではこの証文の通り、二件の墨蹟を谷家へ貸し出したが、その後の記録はない。以上から、後世の谷家では経済的理由から《一帆風》墨蹟を借用した。このことは谷家が、二件の墨蹟を抵当にして第三者から金銭の借用があったと推測される。谷家はその後、安殷の末孫である善次郎が寛政年間（一七八九―一八〇一）で没しており、嗣子がなかったため断絶する。祥雲寺からの流出は、借用した谷家もしくは返却された祥雲寺から第三者へ譲渡されたものと考えられる。なお、この墨蹟は昭和五年（一九三〇）に大阪美術倶楽部で開催された入札会の売立目録『某家所蔵品入札』に掲載される<sup>52</sup>。現在の所蔵家の教示によると大阪での売立以後、同家に伝来することである。

東嘉從逸らから南浦紹明へ贈られた一帆風と考えられる原本は、これまでのところ発見されていない。先に紹介した大心義統添状にもあるように、原本と考えられるものは南浦の塔所である龍翔寺に所蔵されたようである<sup>53</sup>。そこで龍翔寺に係する文書をみてみると、文保二年（一二三二）五月の記載がある「祥雲庵常住証文等目録」には

以下のような記述がある。

祥雲庵常住証文等目録事

(略)

一 真蹟等

八通 「墨蹟等九紙」

一卷 送行頌〈唐本〉

四通 寺号御書

一卷 先師置文案〈正文者在筑紫云々〉

一卷 常住物注文

本文書は、龍翔寺祥雲庵常住証文目録であり、通翁鏡円（一二五八―一三二五）と絶崖宗卓（一三三四没）の書名がある。この記述から「二卷 送行頌〈唐本〉」が、一帆風の原本であると考えられる。送行頌は、送別詩偈を意味し、唐本は当時の中国からもたらされたことを意味する。当時、この一卷は龍翔寺に存在した。その後、これらの祥雲庵の常什物は絶崖から通翁に送られている。その証文が『絶崖宗卓龍翔寺流通物送状』であり、以下のような記述がある<sup>54</sup>。

塔頭流通物送状

(中略)

一、文書等数卷 一、墨蹟等数通

目録一卷之中二見之、頌軸一冊

已上赤塗杉箱ニ納之、鎖子並鑰子有之

右、所送進如件

元応元年十一月二五日 宗卓（花押）

当塔主 円公西堂 禅師

近日殊火事其怖候之間、渡進候、宝蔵造立間ハ、仁和寺日々前門之庫

蔵ニ可被預置候哉、此状モ入日記モ進置

記述によれば当時火事が多発し、南浦紹明の塔所である龍翔寺の宝蔵を造営するため一時的に什物を預かるように絶崖が通翁に依頼する内容である。そのため龍翔寺に伝来した墨蹟などを通翁に送った。その後、龍翔寺は存続したが、延文三年（一三五八）には荒廢し、光嚴天皇（一一三三―一三六四）が徹翁義亨に再興を命じている。龍翔寺から通翁のもとへ送られた墨蹟等の中に送行の頌は存在したこととなる。現在の龍翔寺に送行の頌は存在しておらず、時期は不明ながら流出したと考えられる。

個人蔵の『一帆風』が存在する事は当時存在した一帆風の原本の形態を考える上で重要である。

## 第二項 《物我両忘》（個人蔵）

近年、新発田藩十二代藩主であつた溝口直正（一八五五―一九一九）<sup>55</sup>が所蔵したとする宗峰妙超墨蹟《物我両忘》（図40）の存在が明らかとなった。この墨蹟は二〇〇四年にアメリカ、ニューヨークのクリスティーズにおけるオークションに出品され、その後落札された。現在は日本国内の個人が所蔵する。閲覧したところ、本紙の寸法は縦三三・五<sup>チン</sup>、横九二<sup>チン</sup>。表装裂は一文字風帯が紫地二重蔓印金、中廻が花鳥金欄、上下が茶地丸紋北絹。軸先は塗軸が付される<sup>56</sup>。本墨蹟は『虚堂録』にある物我両忘の詩文を書いた偈頌墨蹟である。墨蹟を収納する箱裏には貼り紙（図41）があり、以下のような記述がある。

寄進大仙院 薩州坊津 田中総左衛門尉橘英重宗圓

永禄元年戊午五月日

記述から、永禄元年（一五五八）に、坊津の田中総左衛門尉と橘英重宗圓により大徳寺山内の大仙院へ寄進されたことが判明する。坊津は、現在の鹿児島県南さつま市坊津をさし、中世後期には港町として栄えた。《流れ園悟》（図39）ゆかりの地域でもある<sup>57</sup>。寄進者の田中氏、橘氏<sup>58</sup>についての詳細は判明していない。この墨蹟は『墨蹟之写』（慶長十六辛亥 墨蹟之写卷一）<sup>59</sup>にも記載され、以下のような記述がある。

物我両忘

居常多不器情

謂盡方知有

眼挂空壁無

心合祖師衲

穿隨手補客

至下階遲或

問虚堂叟

慇懃説向

伊 「方印」 「丸印」

（宗峰ノ字乎） （妙超ノ字乎）

右之開山ノ墨蹟大森宗巴被取候也此墨蹟ハ先季

薩摩衆大仙へ寄進其後大仙ヨリ出候今ハ和泉衆ヨリ

宗巴へ来候也金子三枚か四枚がほとニテ取候ト聞ヘタ

帋二所ホトツイテ有タ

記述によると、この墨蹟は薩摩の人から大仙院に寄進され、さらに堺の人の手に渡

ったのち、大森宗巴の所有となった。大森宗巴は佐竹氏の御用商人であり、有力な商人であった<sup>60</sup>。記述にある「薩摩の衆」とは永禄年間（一五五八・一五七〇）に坊津の田中氏および橘氏のことであり、両者より大仙院へ寄進され、さらに堺にあった人物に沽却され、慶長年間（一五九六・一六一五）には大森宗巴によって所有された。その後、大森氏のもとを離れたこととなる。

ところで、明治三十六年（一九〇三）に大阪で開催された第五回内国勸業博覧会がある。この博覧会では、初めて海外からも出品がなされ、事実上、日本で初めての万国博覧会といえるべきものであった。京都でも関連の行事として、京都美術協会の主催による古美術展覧会が開催された。展覧会の様子が収められた『旧儀裝飾十六式図譜』<sup>61</sup>では溝口直正による抹茶席の様子（図42）が紹介されており、本墨蹟が使用されていることが判明する。当日、使用された掛物について、『旧儀裝飾十六式図譜』では「掛物 大燈国師墨蹟 物我両忘」と紹介される。また、古美術展覧会の出品目録である『古美術展覧会出品目録』には宗峰妙超墨蹟《物我両忘》と澤庵宗彭添状が掲載される<sup>62</sup>。さらに図譜にある各展観席の詳細を記した『旧儀裝飾十六式図譜解説書』には添状について以下の記述がある<sup>63</sup>。

大徳寺妙超（大燈国師）の筆にて、物我両忘の句なり、澤庵、玉舟、天祐、傳外他等の添書あり、表装は中、唐物縫紗、一風、紫地印金、上下茶地紵なり

記述から、本墨蹟には澤庵宗彭（一五七三・一六四五）のほかに、玉舟宗璫（一六〇〇・一六六八）、天祐紹杲（一五八六・一六六六）、傳外宗左（一六〇八・一六七五）などの添状があったことがわかる。以上のことから図譜に所載の宗峰妙超墨蹟は、現存する墨蹟と同一であり、溝口直正所蔵の墨蹟である<sup>64</sup>。

溝口家が所蔵した宗峰妙超墨蹟を明らかにするため、新発田市立図書館が所蔵する溝口伊織家文書の調査を行った。溝口伊織家は新発田藩家老の家である。同館には溝口家の所有した茶道具類が記載された道具帳が存在する。『新発田御道具帳』、『江戸御道具帳』、『御掛物帳』、『七間之御土蔵御道具帳』（いずれも新発田市立図書館蔵）である。今回、注目したのは『御掛物帳』（図43）である<sup>65</sup>。近年に至るまで本書の存在は『溝口伊織家古文書』<sup>66</sup>に紹介されるも、調査がなされることはなく、内容を知ることではできなかった。二〇一三年に発刊された『溝口家書目集成』<sup>67</sup>（全四巻）にも未所収である。また、科学研究費による研究として、新潟大学原直史教授を中心としたグループによる研究がある。原らは『御道具控』、『御道具類目録』、『蓄蔵物品目次』道具帳三件の翻刻を行い研究報告書を出した<sup>68</sup>。しかしながら、先に述べた四件の蔵帳については未所収である。

『御掛物帳』の外題は御掛物帳である。本紙料紙の寸法は縦二四<sup>サ</sup>、横一七<sup>サ</sup>。形態

は和本。溝口家の家老であった溝口伊織家旧蔵である。ここで、『御掛物帳』にある藩主の記載について注目してみる。十代藩主、直諒（一七九一―一八五八）は見廟と記される。これは直諒の法名が見龍院殿であることによる。十一代藩主、直溥（一八一九―一八七四）は名前で書かれる。このことから本書の成立時期は直諒没後かつ直溥存命中、すなわち一八五八年以降一八七四年以前と考えられる<sup>69</sup>。

記載される内容をみると、はじめに歴代藩主によって書かれた書軸および、歴代藩主によって作られた竹花入の記載も確認できる。中国絵画、大名などの書、禅僧の墨蹟、絵画、屏風、絵巻物、歌書巻物、歌書手鑑がある。このことから『御掛物帳』は幕末における溝口家所蔵の掛物目録である。同書の「乾坤入之部」（図44）には二件の宗峰妙超墨蹟について以下のような記述がある。

一 大燈國師墨蹟

添状點字一箱

一 大燈國師書簡

これらの墨蹟についてみると「大燈國師墨蹟 添状點字一箱」は、茶会での使用、添状の存在から先に紹介した《物我両忘》墨蹟と合致する。添状点字一箱と記載されるが、筆者が閲覧したところ添状は付属していなかったことから、添状点字は別の一箱に収められていたこととなる。「大燈國師書簡」について詳細は不明である。なお、『禅林墨蹟拾遺』には溝口家伝来とする墨蹟が掲載されるが、書簡ではないためここでは論じない<sup>70</sup>。

### 第三項 《日山之賦》（個人蔵）の添状

第二項において紹介した溝口家の道具帳中、『御掛物帳』『雑之部』（図45）には宗峰妙超墨蹟について以下のような記述がある。

一 大燈國師墨蹟 日山賦 宗甫文添外題点状有

利休所持同人箱書

この墨蹟は現存する《日山之賦》（図26）であると考えられる。墨蹟の内容は金剛寺の日山に与えた字号と印可である。本紙寸法は縦四四<sup>サ</sup>、横四三・二<sup>サ</sup>。この墨蹟はかつて松下幸之助<sup>71</sup>が所蔵した墨蹟である<sup>72</sup>。この墨蹟が使用された茶会としては、京都美術倶楽部で二〇〇八年に行われた百周年記念茶会がある。茶会の図録には、利休所持とする箱書の画像も掲載されている<sup>73</sup>。文末に建武丁丑、すなわち建武四年（一三三七）の宗峰妙超、最晩年に書かれた墨蹟である<sup>74</sup>。賦号の与えられた日山について『龍寶山祖師伝』<sup>75</sup>には以下のような記述がある。

日山和尚

嗣法開山國師住河州靈松山金剛禪寺不詳氏族  
法諱據春浦和尚語錄文明七年相當師百年忌然

師之示寂盖有永和二年六月廿八日去徹翁和尚示寂應安二年七  
年後也

(中略)

延寶伝燈録曰、金剛日山禪師心地明潔頓機電奔

(中略)

師逸居金剛一生不出生 全文抄出廿一卷

記述によると、日山和尚は宗峰妙超の晩年の法嗣で靈松山金剛寺にあった。出自については不詳である。同文中では春浦宗熙(一四一六―一四九六)の語録の記述が紹介され、永和二年(一三七六)六月二十八日に死去したことが書かれ、また、日山は不出生の人物であったとも記される。この《日山之賦》墨蹟の内容は、宗峰妙超から日山和尚に与えられた印可状である。この墨蹟は『墨蹟之写』(寛永十二年 墨蹟之寫卷三十六)にも所載が確認され、以下のような記述がある。

## 一 賦

日山之號

華嚴方廣中重々無盡

須弥第一峯跛鼈盲龜出

幽谷正今日之照林鋒

建武丁丑龍寶山宗峰叟書

帑之内横一尺四寸五分豎一尺四寸九分表具上下茶絹

中風帶薄萌黄之金紗一文字帑地ノ金紗勝田今以

□参候佐久間将監ニテ見候事之文字ソ板嶋左衛門持来ル  
所持也

この墨蹟は金剛寺に伝来したと考えられるが『墨蹟之写』の記述によると、寛永十二年(一六三五)以前には寺から流出していたことが判明する。

本墨蹟は『禪林墨蹟拾遺』および「茶の湯と掛物Ⅱ」<sup>76</sup>の図録に墨蹟本体のみが紹介されるが、添状については触れられていなかった。調査により、溝口家の道具帳に記載される小堀遠州ほか十件の添状を確認した。これらの添状はこれまでの先行研究では紹介されておらず、新たに所在が判明した資料である<sup>77</sup>。

現在、《日山之賦》(図36)に付属する添状は大林宗套外題、小堀遠州添状(六月十五日付)、玉舟宗璠外題、傳心宗的添状、千仙叟宗室(山下祐也宛)、古筆了眠極(元禄甲戌付)、溝口翠濤入日記、古筆了伴極(天保十五年付)、了眠および了休外題各一



枚、点字一通（筆者不明）がある<sup>78</sup>。このほか田山方南筆とする添状一覧のメモが付属しているが、田山方南による著作や論文などでの紹介はない。以下、添状から所有者の変遷を明らかにしていきたい。

先ず小堀遠州添状には以下のような記述がある<sup>79</sup>。

大灯之掛物表具来候間

もたせ進之候表具之取合

事ノ外見事ニ存候紙も白く

成申候御覧候はゞ此ものニ卷せ可

有候惣卷候へバ表具惣成

申候先事月早々申承御残多

存候恐惶謹言

六月十五日

（花押）

（端裏）

小堀遠江守

井上新左様

人々御中

添状の見返し部分には井上新左<sup>80</sup>という人物が確認できる。添状の内容は表具が完成し、裂地取り合わせが良いことが述べられる。宛名が井上であることから、同人が所有したと考えられる。

次に傳心宗的（一六二四・一六九七）添状は元禄八年（一六九五）に山下の要請によつて書かれたもので、添状には以下のような記述がある。

大燈國師賦日山號之書軸

項目赴山下祐也請始拝観

焉偈句興墨痕絶勝之真

蹟也讚嘆随喜遠為希

有因求認余此語為後證

蓋是珠中夜光不假助揚

者也然聊書防按劍之疑

元禄八年春

前住龍寶傳心宗的

印 印

次に、千宗室（仙叟。一六二二・一六九七）の添状では以下のような記述がある。

大燈国師墨蹟之

箱利休好内ニ宗易

底ニ抛筌書付同筆

無紛作御秘藏可成候

以上

宗室（花押）

四月十六日

山下祐也様

千宗室添状は四月十六日の日付があり、年号は不明で、宛名が山下祐也となつてゐる。宗室の筆跡から晩年と考えられる。また宛名が山下宛の傳心宗的極状が元禄八年（一六九五）に書かれた点を考え合わせても、元禄年間（一六八八・一七〇四）に書かれたと考えられる。

その後の伝来および溝口家が入手した経緯については、「溝口翠濤入日記」に詳しく記される。この入日記中の署名には翠濤と書かれる。翠濤とは新発田藩十代藩主、溝口直諒（一七九九・一八五八）が名乗った号である。《日山之賦》墨蹟を天保十四年（一八四三）に入手したのち、弘化三年（一八四六）に改めて覚え書きとして認めた記録書が「溝口翠濤入日記」である。「溝口翠濤入日記」には以下のような記述がある。

○大燈國師日山賦墨蹟 二重箱

表具

一 上下浅黄北絹

一 中茶地造土印金

一 一風紫地二重つる中牡丹印金

一 象牙きり軸

右内箱杉かうし草紐利休好同人

所持箱外内同人筆

ふた表 大燈 二字あり

箱内 宗易 同

羽底 抛筌 同

外箱相鉄の 錠付

添状外題一包

内

- 一 宗甫文一包
- 一 外題大林和尚一包
- 一 同 宗璿 玉舟和尚
- 一 傳心證文一包山下祐也宛
- 一 宗室添文一包同宛 仙叟宗室
- 一 点状一通 一 了眠證文一包

(ツギメ)

右天保十四癸卯年七月古筆了休方々  
手二入る家傳乾坤入之古墨蹟除哥  
多しと云へ共利休箱書同人所持ハ無之  
此所稀世之道具最秘藏二乾坤之  
所同様ニ取扱へし茶を嗜さるよりは必在輯  
置へし弘化二乙巳年数寄屋ひらきに  
口切茶會あり其節はしめて此かけものを用  
へるを大燈の二幅ハ名物と云へし

弘化三丙午年十二月十五日改記

翠濤庵退翁書證之

**割印**

記述から現在、付属する添状がそのまま溝口家に入手されたことが判明する。後半部分には直諒により本墨蹟の入手について書かれる。入日記の記述によれば、翠濤は弘化二年（一八四五）に行われた数寄屋披き（口切茶会）の掛物としてこの墨蹟を用いている。記述ではもう一幅の宗峰妙超墨蹟を所蔵した。もう一幅の宗峰妙超墨蹟とは『御掛物帳』に所載される《物我両忘》か《書簡》のいずれかである。溝口直諒は《日山之賦》墨蹟ともう一つの墨蹟を、同家の名物として位置づけている。包み紙には以下のような記述がある。

(左側部分)

此軸実ニ珍奇之宝物と云へし殊ニ利休箱書  
めつら也遠州添文宗中へ監定願候所正筆無疑  
に候と申也文意を案すれば表具は利休なるへし  
了休秘藏之軸天保十五甲辰年七月同人々衆之  
觀阿候すに

(中央部分)

(異筆、朱書)

越後蒲原郡

新発田城主

溝口家傳來

(右側部分)

七十二番 秘藏掛物之部

日山之賦

大燈國師墨蹟折紙一 古筆了休

天保十五甲辰年八月

記述から、この墨蹟は古筆了伴(一七九〇―一八五三)が所持した後、芳村觀阿(一七六五―一八四八)の仲介を経て溝口直諒が入手したことがわかる。

以上から『日山之賦』墨蹟の伝来を整理すると、当初は金剛寺に伝来したと考えられるが『墨蹟之写』の記述から寛永以前にはすでに寺から流出していた。元禄八年(一六九五)には山下裕也が所有した。その後は古筆了伴が所持し、溝口直諒が入手し同家に伝来したが、近代では松下幸之助が入手することとなる。

以上から『物我両忘』(個人蔵)および『日山之賦』(個人蔵)が溝口家で入手された経緯をみることができた。

#### 第四項 《与宗智大姉法語》(MIHO MUSEUM蔵)

本墨蹟(図46)は近年、MIHO MUSEUMに収蔵された。本紙寸法は縦三三・九<sub>セシ</sub>、横八一・三<sub>セシ</sub>。書かれる内容は宗智という在家の女性に与えた法語である。なお、本墨蹟は『赤星家所蔵品入札』(大正七年)、『渋柿庵蔵品入札』(大正十四年)の売立目録に所載されている<sup>161)</sup>。赤星家とは赤星弥之助のことで、『茶道辞典』によれば鹿児島県出身の実業家で、茶道具の購入に努め、茶湯は裏千家円能斎宗室に学んだ人物である<sup>162)</sup>。その後の所有者である渋柿庵とは梅澤安蔵の庵号で、益田鈍翁が命名した。梅澤安蔵について、飯田國宏によれば「安政元年から昭和八年(一八四五―一九三三)に活躍した道具商で、号は鶴叟、渋柿庵である。鈴木屋の屋号で鈴安と呼ばれ、山澄力蔵、伊丹信太郎とともに東都を代表する道具商であった」とされる<sup>163)</sup>。本墨蹟は梅澤安蔵の旧蔵品である。本墨蹟を収納する塗箱、保護する二重箱以外の付属品はない。

#### 第五項 《手抄二卷(断簡)》(個人蔵)

『手抄二卷』は宗峰妙超により、語録などから語句を書き出した抄録である。本紙寸法は縦二四・五<sub>セシ</sub>。本墨蹟二卷は重要美術品に認定されている。現在、芳春院が所蔵する『手抄二卷』(図10)を閲覧したところ、本紙には後世のものと考えられる朱点が

記入されている<sup>164</sup>。後巻末には玉舟宗璠、天室宗竺（一六〇五・一六六七）、宙寶宗宇（一七六〇・一八三八）の極めがある。宙寶の極めには各巻に以下のような記述がある。先ず、巻一卷末（図47）には以下のような記述がある。

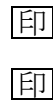
国師走毫楮数大小九枚壹卷

明應圓明両祖奥書書分析乙丑

冬修補永為芳春院寶卑印

每継加之都計両卷印子十面

松月宗宇拝納



記述から巻一は九枚をつないだ巻であることが述べられる。次に巻二巻末（図48）では以下のような記述がある。

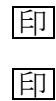
国師走毫楮数大小七枚壹卷

明應圓明両祖奥書書分析乙丑

冬修補永為芳春院寶卑印

每継加之都計両卷印子九面

松月宗宇拝納



記述から巻二は七枚をつないだ巻であることが述べられる。本紙には左上部に丁数と考えられる数字が記載しており巻一では「三十四」、「五十一」、「三十四」、「四十五」、「八十三」、「二十一」、「三十六」、「十二」、「二」とあり、九紙と考えられる。また巻二には「三十」、「二十三」、「三十六」、「二十八」、「三十九」、「十五」、「十九」とあり、こちらも七枚と合致する。記述にある表具の改修については、二巻を収納する箱に、宙寶によつて、甲には「開山國師尊毫 兩卷」とあり、内側には以下のような記述がある。

開山國師細字手澤 兩卷

納之芳春院法寶藏須珍襲矣

修補友箱浦井隆屋喜捨

文政十二歳次巳丑十二月 松月宗宇識（花押）

記述から文政十二年（一八二九）に浦井隆屋<sup>165</sup>の寄進によつて表具が改修されたことが判明し、押印と巻末の極めはこのときになされたことがわかる。

現在、個人の所蔵による宗峰妙超墨蹟（図49）が存在する。この墨蹟は《手抄二巻》のツレと考えられる。墨蹟の本紙寸法は縦三〇<sup>センチ</sup>、横二三・六<sup>センチ</sup>。閲覧したところ、本墨蹟の本紙上部に「十七」、「十二」の丁数を示す朱書がある。芳春院本にも「十二」

の丁数の書き入れがある。また、筆跡も芳春院所蔵本と同様であり、小筆を用いて禅語録の一部が書写されている。以上の点から個人蔵本は芳春院所蔵《手抄二卷》のツレであると考えられる。

#### 第六項 《宗峰妙超墨蹟澤庵宗彭証明》（個人蔵）

本墨蹟図（図50）は句双紙を内容とする。句双紙とは『禅学大辞典』によれば「偈頌の学習や作詩の際に適句を検索する便宜に供するために編纂された禅句集」のことである<sup>166</sup>。本墨蹟は、天保七年（一八三六）に、西田作兵衛から森本を経て、摂津般若寺に寄進された墨蹟である。収納する箱の甲には「大燈国師墨痕 般若寺常什」とあり、裏（図51）には以下のような記述がある。

時西田作兵衛所寄附有故轉為他有當国師五百遠忌森本半兵衛寄附

天保七年丙申九月二十又二日 玄々斎宗室造函子寄附為 真珠庵太室（花押）

記述によると、この墨蹟は西田作兵衛が般若寺に寄進した墨蹟であったが、流出し、その後は森本半兵衛が所有した。天保七年（一八三六）九月二十二日に、森本によって再び般若寺に寄進された墨蹟であることが判明する。この墨書がある箱は、千宗室玄々斎（一八一〇―一八七七）による寄進である。般若寺は、摂津にあつた大徳寺派の子院で、江戸中期には荒廃したが萬仞宗岱（生没年不詳）により中興された。この墨蹟の箱書きにある西田作兵衛について、『藤村庸軒流茶書』<sup>167</sup>には「道修町西田作兵衛之庭」とあり、西田は大阪の道修町に住した人物であることが判明する<sup>168</sup>。このほか西田に関する資料では《一休和尚並森盲女図》（正木美術館蔵）がある。収納する外箱には以下のような記述がある<sup>169</sup>。

釈惠乘尼、寛政十戊午年九月二日卒、為冥福其子浪華道修町一丁目西田作

兵衛寄附、享和元辛酉四月七日、酬恩菴常住

記述から、西田は大阪の道修町の西田氏であると考えられる。《宗峰妙超墨蹟澤庵宗彭証明》（図50）は西田作兵衛が所蔵したが、その後は他家の所蔵であつた。しかし、この墨蹟は天保七年（一八三六）九月二十二日に、大燈国師五百年遠忌のときに森本によって般若寺に寄進された。

ところで、現在、大徳寺に所蔵される《関山慧玄墨蹟》（大徳寺蔵）を収納する外箱の甲部には「妙心開山関山国師墨痕 般若寺什」と書かれ、箱裏には以下のような記述がある。

當大燈國師五百年忌西田作左衛門寄進

天保七年九月二十二日 真珠庵 太室（花押）

記述から、天保七年（一八三六）九月二十二日、西田作左衛門（作兵衛のこと）によ

つて般若寺に寄進されていたことが判明する<sup>170</sup>。

これらのことから天保七年（一八三六）九月二十二日に森本が宗峰墨蹟を般若寺に寄進し、この墨蹟のかつての所有者である西田氏が《関山慧玄墨蹟》を般若寺に寄進したことが判明する<sup>171</sup>。

#### 第四節 小結

第二章では現存する墨蹟の調査から、宗峰妙超墨蹟の制作年代別に分類し、筆跡の特徴を明らかにした。

調査により新たに所在が判明した墨蹟では《一帆風》（個人蔵）、《物我両忘》（個人蔵）、《日山之賦》（個人蔵）の添状など十件、《与宗智大姉法語》（MIHO MUSEUM蔵）、《手抄二卷（断簡）》（個人蔵）、《宗峰妙超墨蹟澤庵宗彭証明》（個人蔵）がある。これらのうち、新たに所在が判明した墨蹟と、制作年代が近い墨蹟の文字との比較を行った。《一帆風》（個人蔵）の制作年代としては三十代後半から四十代前半の筆跡と推定した。また付属する添状から、本墨蹟は谷安殷が所蔵し、堺祥雲寺に寄進されたものである。《与宗智大姉法語》（MIHO MUSEUM蔵）は元徳二年（一三三〇）の署名がある。同年代に書かれた墨蹟から真蹟であることを明らかにした。《物我両忘》（個人蔵）は明治期の記録から新発田藩主、溝口直正による茶会で用いられていた。さらに同家の蔵帳を発見したことから、《日山之賦》（個人蔵）も所蔵していたことを明らかにした。《日山之賦》はこれまで先行研究でも紹介される著名な墨蹟であったが、その添状について明らかにされていなかった。調査により小堀遠州をはじめとする添状など十件を明らかにし、伝来が判明した。《手抄二卷（断簡）》（個人蔵）では丁数や筆跡から、芳春院が所蔵する《手抄二卷》のツレであることを明らかにした。《宗峰妙超墨蹟澤庵宗彭証明》（個人蔵）は句双紙を出典とする墨蹟である。この墨蹟は西田作兵衛が所蔵したが、その後は森本が所蔵した。作兵衛は天保七年（一八三六）に所蔵した《関山慧玄墨蹟》を般若寺に寄進している。同日には、かつて所有した《宗峰妙超墨蹟澤庵宗彭証明》も森本によって、同寺に寄進されていることが判明した。

### 第三章 現存不明の墨蹟の調査

現存が不明な宗峰妙超墨蹟とは、かつては文献上で存在が確認できたがその後、焼失または紛失した墨蹟を意味する。焼失した墨蹟では関東大震災の例がある。関東大震災において焼失した美術作品については大正十五年（一九二六）に、当時の内務省社会局が作成した『大正震災史』（一九二六、岩波書店）において東京で失われた宗峰妙超墨蹟二件がわかる<sup>183</sup>。先ず一件目について同書には以下のような記述がある。

森岡平右衛門氏（駿河台南甲賀町）の書院は、近年数寄を凝らされた建物で、床廻りの装飾は木内半古の彫刻であつたがのが総て滅亡し、土蔵も第二の雑物蔵が残つたのみで、第一の寶庫を灰塵に付したるは太だ惜しいことであつた。其内容の主要なものを左に掲げる。

#### 一、大燈国師墨蹟

次に二件目では以下のような記述がある。

山澄力蔵氏（濱町）は倉庫三棟全焼して数千の蔵品を失つた。其内の数点を記す。

#### 一、大燈国師墨蹟

記述によると失われた一件目の所有者である森岡平右衛門とは鉄鋼商であり、日本橋に店を構えた森岡平右衛門商店の主人である。次に山澄力蔵とは東都における有力な道具商であつた<sup>184</sup>。森岡家、山澄家の所蔵した宗峰妙超墨蹟は関東大震災により焼失した。

このほか東京谷中にある大徳寺派の寺院、廣徳寺はかつて『大燈国師筆写本二冊』を所蔵したが<sup>185</sup>、住職の福富海雲氏によれば、この墨蹟は関東大震災で焼失したとの教示を得た。このように震災や戦災等で過去に失われた墨蹟が存在すると考えられる。

本調査の目的は、震災や戦災以前の資料も含めた文献を博搜し、宗峰妙超墨蹟の図版や記述を明らかにすることである。調査対象とする資料は売立目録と名物記、『徳川実紀』、『大徳寺文書』とした。

現存する『一帆風』（図32）には売立時の落札表が付属しており、売立に出品されたことが判明する。売立目録の調査を実施したところ、本墨蹟は『某家所蔵品入札』（大阪美術倶楽部蔵）にモノクロ図版（図52）が掲載されていた。また、このほかの売立目録には本墨蹟のツレと考えられる墨蹟二件のモノクロ図版も所載されていた<sup>186</sup>。これら二件の墨蹟はいずれも現存不明の墨蹟である。実際に墨蹟を閲覧することに越したことはないが、次善の策として確認可能な売立目録を調査し、掲載される宗峰妙超墨蹟図版を明らかにすることができれば、現存する墨蹟のツレや、これまで明らかになつて



いない墨蹟を明らかにすることが出来るものと考ええる。

名物記の調査では宗峰妙超墨蹟の筆跡または本紙の形態が判明するものを対象にした。名物記には性格上、墨蹟内容、図（一部は双鉤による）、所有者が記載される。これらの名物記は、当時世間に流布しており、掲載される宗峰妙超墨蹟は茶の湯における掛物として著名な墨蹟であったことが想像される。

『徳川実紀』には、將軍家から大名家への下賜品、大名家から將軍家への献上品が記録される。実紀中の道具の移動では宗峰妙超墨蹟も含まれているため、その移動を明らかにする。

『大徳寺文書』には大徳寺が所蔵した墨蹟などを保管した重書箱についての記録がある。記録から、当時の大徳寺がどのような墨蹟を所有していたのかを明らかにする。また塔頭寺院における宗峰妙超墨蹟の所有と、流出を明らかにする。

## 第一節 売立目録の調査

売立とは家財や器物を入札または競りにより売却することである。売立の仕組みは道具商を札元として、指定された道具商のみが入札ができるものである。売立が行われた期間は明治初期から昭和中期までである。売立を実施した家としては徳川宗家をはじめとする旧大名家、公家、豪商、当時の美術品収集家などがある。売立に際して出品一覧の目録が作られ事前配布された。その目録が売立目録である。明治初期から明治中期ごろまで行われた売立の目録は出品作品を記載した文字だけの冊子目録である。以後の売立目録では主要な作品がモノクロ図版で紹介されている。売立目録に掲載される図版を研究することにより戦前、戦後の日本において存在し、かつ今日みることのできない作品を明らかにすることができると考える。これまでの宗峰妙超墨蹟に関する先行研究において、売立目録を活用した例はない<sup>187</sup>。

調査方法は都守淳夫による『売立目録の書誌と全国所在一覧』にある売立目録のうち閲覧可能な目録を調査し、目録に所載される宗峰妙超墨蹟図版を収集する。『売立目録の書誌と全国所在一覧』には明治三十七年（一九〇四）の益田克徳家の売立から平成八年（一九九六）までの売立、競売、オークションカタログが所載される。本書に掲載される目録を調査することによって明治中期以降近年に至るまでの市場に流入した宗峰妙超墨蹟を明らかにすることが出来るものと考ええる。

本研究では『売立目録の書誌と全国所在一覧』に所載される目録四千三百三十六件中、四千二百五十件の調査を実施した。残る八十六件の調査ができなかった理由は、同書における所蔵先が個人蔵書であり閲覧できなかったことと、所蔵先において蔵書確認がで

きなかつたためである<sup>188)</sup>。

四千二百五十件の売立目録の調査を実施した所蔵先は東京文化財研究所、東京国立博物館、奈良国立博物館、大阪美術倶楽部、東京美術倶楽部、京都美術倶楽部、西尾市岩瀬文庫、同志社大学文化情報学部文献室、九州大学文学部図書室、大和文華館、国会図書館をはじめとする国公立図書館である。このほか木村重圭氏（元甲南女子大学教授）、岡村浩氏（新潟大学教授）、星名四郎氏の個人が所蔵する売立目録についても調査を実施した。

『売立目録の書誌と全国所在一覧』に掲載される目録は平成八年（一九九六）分までであるが、以後も美術品が市場で売買されている。そのため平成八年以降に作成された、販売を目的とする美術品展示会である東美特別展、済美入札会、和美の会の図録を調査した。このほか『売立目録の書誌と全国所在一覧』には所収されない、日本橋三越で開催された茶美の会による展示会図録や、クリスティーズ、ニューヨークによるオークションカタログ『Japanese and Korean Art』などを加え調査した<sup>189)</sup>。調査により判明した売立目録、展示会図録に掲載される宗峰妙超墨蹟の図版は百三十二件であり、売立会名の一覧が【表2】となる。

### 第一項 《一帆風》（個人蔵）のツレと考えられる墨蹟二件

先述の宗峰妙超墨蹟《一帆風》（図32）は享保年間（二七一六―一七三五）にすでに三切され、好古の者が所蔵していた。売立目録の調査から一帆風のツレと考えられる墨蹟が二件所載されていた。

まず一件目は『池田清助氏所蔵書画屏風道具類入札』に掲載される宗峰妙超墨蹟（図53）である。この売立は明治四十四年（一九一一）五月二十二日に京都美術倶楽部で開札された<sup>191)</sup>。所蔵家である池田清助とは京都美術倶楽部の初代社長を務めた人物である。同目録に所載される墨蹟には以下のような九首の詩偈を収める。

家在扶桑何所求 梯山航海賦歸休 大唐遑  
得單伝旨黄葉瓢々双径秋 笠澤清達  
搆得凌霄那一機 片帆高掛賦歸歟 扶桑故  
国入相問 報道山頭有鯉魚 東川慧林  
唐言会尽見 帰程六国風清一葦輕 更説扶  
桑烟水濶 黄蘆葉々は秋声 石橋法思  
清波無路透 応難一舟親 従大唐会雲浄風  
体天似洗不知身 在屋頭山 康山宗憩  
誰知家住在扶桑 萬里迢々大唐雜毒中

心帰故国定応錯罵老虚堂　金華智端  
一片寒雲下翠微　櫓声高处語声底誰知月  
白風清夜日本人従天外帰　甫東徳来  
南詢端的便知休天上元無兩日頭可是明々

窮得一帆風急驚濤秋　赤城行弘

身蔵日本未離前一摑須弥上梵天命委危  
流来又往方知意不在南辺　福庵若水  
當機擬弁賓中主妙在南針転　間窮尽煙  
波一漚尔還從漚未発前看　古勝本聞

一行目に十七文字または十八文字、二行目末部に偈の作者が書かれる。本墨蹟は池田家の売立のあと、大正五年（一九一六）六月二十六日に東京美術倶楽部で開札された『土方伯爵某子爵家御所蔵品入札』<sup>192</sup>の売立目録にも掲載される（図54）。池田家入札ののち、土方家が所有したと考えられる。『土方伯爵某子爵家御所蔵品入札』には、この墨蹟の付属品について以下のような記述がある。

東海寺宗寛添状他数々

表装一風上

代紗中紺金上子純子

記述にある添状の筆者である東海寺宗寛とは、江西宗寛（大徳寺二九一世）のことである。

次に大正十三年（一九二四）十月二十七日、東美術倶楽部<sup>193</sup>で開札された売立に益田信世氏所蔵品入札がある。益田信世とは益田鈍翁の二男にあたり、初代小田原市長を務めた人物である。同氏の売立目録『益田信世氏所蔵品入札』<sup>194</sup>には宗峰妙超墨蹟（図55）が所載されており、以下のような十五首の詩偈を収める。

山上鯉魚纔入手棹頭重買旧時舟明朝帆遂

海潮落無底籃提上筑州　重慶継寧

風波眼孔鉄心肝華夏溪出飽訪尋碧海東

還休錯拏黄金如土貴知音　白雲惟汾

十載思帰人夢頻海濤翻雪浪無垠大唐天

子親曾見難衙謾他外国人　赤城允澄

曲施客礼接来賓茗瀾湖波上苑春今日故

郷帰夢遠眼明東海復何人　双鶏惟栄

怒浪千尋奮激時分明棒喝上全機最初一

歩悔不領落賺十年方始歸      南康道準  
 樹頭零落眼頭空路在千波萬浪中歸到扶  
 桑尋旧隱依然午夜日輪紅      鄧山契和  
 巨宋山河掌樣平荒村野店亦堪行衲僧公驗  
 有如此又逐天風理去心程      左綿銳彰  
 離却家鄉到五峰黃金颺下棒頑銅臨風  
 一別分妍醜日本依然在海東      甬東宗海  
 烟波尽處青山的々南方有路路還仏法固知  
 無彼此普天風雪一般寒      象山可觀  
 主賓句裏元無句錯入唐朝錯見入烟水  
 茫々一仍舊咲他海底起紅塵      赤城義為  
 十載曾為宋地僧青山無翳水無塵萬年一  
 念難拋棄海国誰分眼底春      鄧江曇瑞  
 氷寒槩苦不推尋万斛沙中一寸金海面無  
 風波自涌扣舷休作大唐吟      石橋自簡  
 誰知別了又逢君三處家山一日分我自坐看  
 峰頂      斤鼎撥乱海東雲      蘭陵法新  
 江山歷尽眼頭空霜肅寒林樹々紅今日辞唐  
 還本国萬程烟水一帆風      四明志平  
 歷遍天南欲尽頭慣於陸地上行舟不知鄉  
 国在何処征袂遙々不可留      鄧江元明  
 一行目に約十八文字、二行目末部に偈の作者が書かれる。なお、この目録によると  
 長慶寺實源添状、東海寺一山書添が付属している<sup>195</sup>。以上、二件の墨蹟はいずれも現  
 在の所在は不明である。

ここで現存する《一帆風》(図32)と売立目録に掲載される二件の図版から共通す  
 る文字を比較する。共通する文字を比較したのが図56である。共通する文字は「家」、  
 「機」、「東」、「一帆風」があり、「一帆風」については個人蔵本中、「帆」の部分がか  
 ったため、「一」および「帆」の文字から比較が可能である。先ず、「家」は、そのウ冠  
 および最終画に共通性が見いだせる。「機」と「東」については同系の筆跡であると考  
 えられる。「一帆風」の部分であるが、個人蔵本の「一」は中心がやや膨らんでおり、  
 池田、益田本におけるものと共通性が確認できる。また個人蔵本の「風」は二画目であ  
 る「几」の箇所に通性があり、その中部は行書体で書かれている。以上から、これら  
 の墨蹟は、宗峰妙超による同一の筆跡であると判断される。

『池田清助氏所蔵書画屏風道具類入札』（図53）には江西宗寛の添状が付属しており、先述の《一帆風》（図32）にも江西による添状が付属していた。江西は当時、一帆風墨蹟が三切されたとしていることから、図53もその一件もしくは、部分であると考えられる。以上のことから『益田信世氏所蔵品入札』も含めた三件は宗峰による墨蹟《一帆風》を切断したものである。

## 第二項 《白雲集残卷》（福岡市美術館蔵）のツレと考えられる墨蹟一件

《白雲集》（図12）には、版本『白雲集』巻二のうち十首、巻三のうち三十九首、巻四のうち十四首の計六十三首が収められている。元来は冊子本であったものが分割され、さらに後世になって収集され卷子に仕立てられたものである。閲覧したところ、繋ぎ合わせた紙と紙の上に押印がなされている。《白雲集残卷》に付属する添状（同館蔵）には以下のような記述がある。

第二巻 贈鄭炳文 井上家 掛軸

送人之平江投知己

孫景翔幽居

暨田別友

記述から贈鄭炳文以下の四首は軸装本であり井上家が所蔵した。井上家とは井上馨（一八三六・一九一五）を指すものと考えられる。井上馨が所蔵した白雲集については『萬象録』の大正元年（一九一二）十一月三十日、「井上馨侯八窓庵茶会」に以下のような記述がある<sup>196</sup>。

## 書院には宗峰妙超の白雲集

記述から、井上馨が所持した白雲集とは、四首の詩偈が書かれた軸装本であり、茶会で使用されていた。このほかにも明治三十二年（一八九九）四月十八日に行われた石黒忠恵（一八四五・一九四一）による茶会では、「宗峰妙超墨蹟 三首の内 春日山居詩あり」が用いられており、本墨蹟も白雲集のツレである<sup>197</sup>。これらの散逸したツレは軸装本として存在し、近代では茶会などで使用されていた。その後、収集され現在の一巻になった。福岡市美術館本では『白雲集』巻一を内容とするツレは所収されていない。売立目録および東京美術倶楽部主催の展示会カタログの図版中に《白雲集残卷》のツレと考えられる墨蹟図版二件が掲載される。

一件目は大正十一年（一九二二）三月二十四日に大阪美術倶楽部で開札された甲南氏所蔵品入札の売立目録である『甲南氏所蔵品入札』<sup>198</sup>に所載される宗峰妙超墨蹟（図57）である。書かれる内容は以下の三首となる。

寄陳隣処士

先生九里松間住松下橋橫玉一溪想得清吟山月  
夜秋雲両梅白獨啼

湖上晩歩

畫橈帰去歇笙蕭水影山光其寂寥一叟相逢双鬢  
雪向人猶自話前朝

送同行省親

送子緑楊堤楊花如雪飛相看忍相別同出不同帰

雁背夕陽遠断春草肥北堂慰弧寂  
色動斑衣

記述にある「寄陳隣処士」、「湖上晩歩」、「送同行省親」の三首は『白雲集』巻一の内容である。

二件目は平成二十一年（二〇〇九）に東京美術倶楽部で開催された和会の展示会図録『和会の会』に所載される宗峰妙超墨蹟（図58）である。書かれる内容は以下の三首となる<sup>199</sup>。

浮生

浮生空役々誰肯死前休今日復明日黒頭成白頭  
百年身世夢両字利名愁輸与僧閑好眠雲看瀑流

過瓜州

落日瓜州渡餘寒透薄衣客囊空薏苡春色自薔薇  
江遠水東去天晴鴈北飛故山千里外昨夜夢先皈

寄蘭壑宗長

同宗同在旅彼此繫微官所去無多遠其如相見難  
連雲秋樹老卷雪暮濤寒幾度空江上思君独凭欄

記述にある「浮生」、「過瓜州」、「寄蘭壑宗長」の三首は『白雲集』巻一の内容である。以上二件六首の筆跡は福岡市美術館本と共通しておりツレであると考えられる。

宗峰妙超による白雲集のツレを考えるにあたり、文献上では『妙喜庵茶事道具料理扣』に記述がある<sup>200</sup>。本書は享和二年（一八〇二）の冬からの妙喜庵における記録で、茶客として招かれた金剛庵によって書かれた茶会記である。同書には以下のような記述がある。

十二月朔日一時庵 正午

對山曲及秋夜曲

一 掛物 大燈国師詩二首錢塘釋英實存

天倫忽證之極

記述によると、当日使用された掛物は宗峰による詩二首（對山曲、秋夜曲）であることがわかる。この墨蹟には天倫宗忽（一六二六・一六九七）による極めがあった。錢塘釈英実存とは『白雲集』の作者である。妙喜庵で用いられた宗峰妙超墨蹟は『白雲集』巻一冒頭の「對山曲」と「秋夜曲」であることが判明する。

以上、断簡二件六首および『妙喜庵茶事道具料理扣』に掲載される二首は、すべて『白雲集』巻一の内容と合致する。福岡市美術館所蔵の《白雲集残巻》は、巻二から巻四の内容を所収しており、巻一のツレをみることはできなかった。茶会記および売立目録などから《白雲集》巻一の内容三件八首を提示した。

### 第三項 《手抄二巻》（芳春院蔵）のツレと考えられる墨蹟一件

《手抄二巻》（芳春院蔵）は宗峰によって書かれた、語録の語句を書き出した抄録である。第二章においては芳春院が所蔵する《手抄二巻》（図10）の紹介と、現存する個人の墨蹟が、芳春院本のツレ（図49）であることを明らかにした。ここでは図版が掲載されるものの現存が確認できていない墨蹟を検討する。

平成二年（一九九〇）五月二十九日から六月三日まで、日本橋三越本店において古美術茶道具展が開催された。同展の図録である『茶美の会』には、宗峰妙超墨蹟（図59）が掲載される<sup>201</sup>。本紙第一葉には「古人焉古人是同是別」を題とする二十詩、第二葉では二十六詩、第三葉では十八詩を収める。第三葉左上部に「五十八」の丁数がある。字粒は小さく、現存する墨蹟では芳春院が所蔵する《手抄二巻》と、筆跡が同一であることからツレであると考えられる。芳春院が所蔵する《手抄二巻》には丁数が書かれていた。『茶美の会』に掲載される墨蹟の丁数が「五十八」であることから、本墨蹟は《手抄二巻》の五十八丁目のツレである。

### 第四項 《林間録》のツレと考えられる墨蹟一件

永青文庫が所蔵する《与宗明大姉法語》（図19）と一緒に保管される添状の中に宗峰妙超墨蹟《林間録》の添状（図60）がある。添状は二通が一枚になっているが、元来は一通ずつだったのをつなぎ合わせたものである。これらの添状には以下のような記述がある。

林間録全部

大燈国師真蹟也殊有

法明禅師親證焉

不可涉猶豫矣

三月十日

宗珠拝手

印 印

義端拝證

印 印

林間録全部

大燈国師真跡

實希世之至寶矣

端堂和尚書證語於

卷末尤不可涉異論也

遠孫小比丘梅堂義琇拝證

印

記述によると宗峰妙超墨蹟の「林間録全部」が存在し、奥書は端堂紹肅（一七一三年没。諡号は法明禪師）によつて書かれたことが判明する。添状から宗峰妙超墨蹟《林間録》の存在が考えられる。

文献にみる宗峰妙超墨蹟《林間録》は『稼堂集』に記述がある<sup>202</sup>。筆者である稼堂とは黒本稼堂（一八五八・一九三六）のことで、稼堂は明治から大正時代に活躍した漢学者である。『稼堂集』には宗峰妙超墨蹟の入手経緯と所有者の変遷について以下のようない記述がある。

記宗峰妙超真蹟林間録事

此書宗峰妙超真蹟。尾書嘉元三年善福寺七字。按嘉元後二条天皇年号。時国師年廿五歳。而其書如老成人。国師風丰可想。善福在鎌倉。盖遍歴参禅中寓其寺以寫者那。

末有端堂和尚跋。

記述によると宗峰妙超墨蹟《林間録》は、古美術商により熊本、妙解寺より放出された。そして所有者の変遷は稼堂自身が所有し、その後は田中千里<sup>203</sup>が所有したが、稼堂のもとに戻るようになる。記述によれば宗峰妙超筆の《林間録》が存在し、奥書に「嘉元三年善福寺七字」が書かれているとされる。

妙解寺は、肥後熊本藩二代藩主、細川光尚（一六一九・一六五〇）が初代藩主、忠利（一五八六・一六四一）の菩提を弔うため、熊本城の城外に建立した。明治維新のころにはすでに廃寺となったが、現在でも敷地内には細川家墓所がある。奥書にある「嘉元三年善福寺七字」について、嘉元三年（二三〇五）は、宗峰妙超二十五歳のときである。このころは『大燈国師行状』にもあるように、鎌倉において老師らと問答をした時期であり、本墨蹟はその参学の途中における祖録写本であったと想像される。本墨蹟には端堂和尚の跋があるとされる。さきにみた永青文庫所蔵の添状（図60）にも、林間録に



は巻末に端堂和尚の極めがあるとする点から同一墨蹟をさすものと考えられる。現在のところ、宗峰妙超による《林間録》墨蹟は所在が確認できていない。

ところで昭和三十年（一九五五）二月二十七日に、東京美術倶楽部において開札された書画美術品洋画展観立がある。その目録である『書画美術品洋画展観』には宗峰妙超墨蹟《林間録断簡》とする墨蹟図版（図61）が掲載される<sup>204</sup>。本墨蹟の形状から《林間録》を書写した祖録写本であると考えられる。ただし画像が不鮮明なため筆跡の判読ができない。

林間録は冊子または卷子として存在したようであるが、分割されたのち軸装され、図61にみたように、掛物として受容されたものと考えられる。

#### 第五項 《句双紙》

売立目録において多くみられた墨蹟では句双紙があった。現存する墨蹟では《宗峰妙超墨蹟澤庵宗彭証明》（図50）がある。売立目録中、宗峰妙超墨蹟として句双紙は四件掲載される。元来、これらは祖録写本と同じように冊子または卷子として存在し、分割されたと考えられる。句双紙は『当市辻東氏蔵品売立』（図62）などの売立目録に掲載されている<sup>205</sup>。

#### 第六項 『旧大名某家所蔵品入札』にみる《禅林類聚膳写卷》

昭和十五年（一九四〇）十月二十五日に東京美術倶楽部で開札された旧大名某家所蔵品入札がある。同入札の目録である『旧大名某家所蔵品入札』<sup>206</sup>には、宗峰妙超墨蹟《禅林類聚膳写卷》（図63）が掲載される。

図版墨蹟に書かれた内容は、『禅林類聚』巻六の内容と合致する。図版から本墨蹟は元来、和本綴じの冊子であったものが後世になって卷子になったと考えられる。

#### 第七項 『某家御所蔵品入札』にみる《至道偈》の添状

昭和五年（一九三〇）十一月十四日、大阪美術倶楽部で開札された某家の所蔵品入札がある。目録である『某家御所蔵品入札』に『至道無難』から始まる墨蹟（図64）が掲載される。文末には「建武丁丑仲秋日書明月軒」とある。建武丁丑、すなわち建武四年（一二三七）の筆跡では《与宗圓道人法語》（梅澤記念館蔵）、《遺偈》（大徳寺蔵）、《日山之賦》（個人蔵）などがあるが、図版の筆跡はいずれの筆跡とも合致しない。また、明月軒の軒名が書かれる墨蹟として《与泰綱居士法語》（湯木美術館蔵）があるも、その筆跡は合致しない。従って本墨蹟図版の筆跡は宗峰のものとは考えにくい。

売立目録には墨蹟に付属する三通の添状図版が掲載され、それらは玉舟宗璿、大心義

統、大龍宗丈（一六九二・一七五一）による添状である。ここでは宛名の記載がある玉舟宗璠の添状（図65）について注目する。玉舟の添状には以下のような記述がある。

至道無難言端語

端一有多種二無兩

般天際日上月下檻

前山深水寒髑

髑識畫喜河直

枯木龍吟消

未乾難々練擇

明白君自看

建武丁丑仲秋

日書明月軒

大燈国師之墨蹟至

道無難之頌一凍和尚

副訓点之後玉室老師

一覽真輪已次矣不

可涉孤疑者也

芳春院

宗璠

仲秋上院

本阿弥

光甫老

添状の記述では「至道無難言端語」から始まる墨蹟の極めを当時、芳春院の住職であった玉舟宗璠がしている。宛名は本阿弥光甫（一六〇一―一六八二）である。本阿弥光甫とは本阿弥光悦（一五五八―一六三七）の養子である光磋の子である。『原色茶道大辞典』によれば「光悦の孫、光磋の子。名を光甫、空中齋と号した。家業を継ぎ、刀剣の鑑定・磨砺・淨拭にあたったが、光悦の遺風を継ぎ、茶湯・香・書画をよくし、作陶に秀でた才能を発揮し、楽焼を一入に学び、名碗「寒月」をのこした。」と紹介されている<sup>207</sup>。

ところで『墨蹟之写』（断簡卷七、七ノ六、八六）には、本阿弥家の所蔵した宗峰妙超墨蹟について以下のような記述がある。

至道無難言端語

端一有多種二無兩

般天際日上月下檻

前山深水寒髑

體識畫喜河直

枯木龍吟消

未乾難々練擇

明白君自看

建武丁丑仲秋

日書明月軒

此大燈墨蹟以非旁青仰甫持來候本安ミ家々來候力也

正筆ト相見候堺ヨリ出候由申亦々見候一凍自筆然モ相添

二人モ可為正筆四方ニフトキ筋有紋有薄唐帑紋ヲ

縫イタル様ニ赤黒ナル帑ヤナ帑ゾ後ニ然ニ本前之

又左衛門金三拾枚ニ所持之由申候光悦同等之大徳寺衆

ニミセ而不及事トテ候由玉室以相□コシ

帑ノ内横ニ尺一寸六分豎一尺一寸壺分表具上下浅黄絹中風帶紺地金紗

右之壺軸之文字ハ寛永十八十二月十八日夜本光甫ヨリ

□時ヨリ有光仰時ヨリ有テ光仰後家所ニ有身誰不成候相他へ遣候

愚僧ニ見セテト也定而致候者ト也三ヶ來候間紅□ニ□行可の由

易本壮行□物致候此覺之可為正筆ト有今ハ證人ニカ誰

成ニ愁ゾ

同書の記述から、この墨蹟は本阿弥光悦の所有であつたが、孫の光甫の時代まで、同家で所蔵されたことがわかる。

この墨蹟を江月は偽筆であるとしている。そもそもこの墨蹟は本阿弥家には光仰の時代から存在したようである。当初は又左衛門という人物が金三十枚で入手して所持していた。その後、本阿弥家が入手してのち、光悦は、当時の大徳寺和尚らに鑑定を依頼せずに所持していた。江月の元へは光甫が持ち込んだ。売立目録中、玉舟による極め状の宛名が本阿弥光甫であることから『墨蹟之写』で述べられる墨蹟と合致すると考えられる。

## 第八項 売立目録に記載される出品者

売立目録に記載される当時の所有者を家別に分類すると、爵位を有する家、寺院、そのほかに分類できる。先ず、爵位を有する家では売立目録百三十二件中、三十件がある。これらのうち旧藩主家は十五件、十二家である。十二家とは紀州徳川家、田安德川家、島原藩主松平家、鳥取藩主池田家、肥前平戸藩主松浦家、徳島藩蜂須賀家、久留米藩主有馬家、小浜藩主酒井家、松本藩主戸田家、伊豫西条藩主松平家である<sup>208</sup>。なお『子爵土井家御蔵品入札』に該当する土井家は古河藩主土井家（宗家）、刈谷藩主土井家、大野藩主土井家の三家のいずれかである。なお、クリステイーズのオークションカタログ『Japanese and Korean Art』に所載される『物我両忘』（図45）は新発田藩主溝口家の旧蔵品である<sup>209</sup>。

これら以外では明治維新後に勲功のあった人物の所蔵がある。氏名が判明する者のうち政治家では土方久元、末松謙澄、松方正義、武井守正、井上毅、井上馨がいる。実業家では赤星弥之助、郷誠之助、藤田伝三郎がいる。寺院では岐阜県犬山の瑞泉寺関家の所蔵品一件が確認できる。なお寺院が旧蔵していたとする墨蹟は『白鶴帳』所載においては『禽獸詩』が紫野大徳寺伝来とされ、『井上侯爵家御蔵品入札』においては「萬年大樹」の書き出しから始まる墨蹟が真珠庵伝来であると紹介されている。

民間における所蔵をみると、豪商であった家では堺の廣岡家がある。新興の財閥では赤星家、八木家（騎牛庵）がある。民間にあつて多くの道具を所蔵した者では金沢の能久治家、京都の雁半中村家、伊勢松坂町の長井家、益田信世などがある。道具商では梅澤安蔵（洪柿庵）、池田清助、古美術鑑定家の柏木探古がいる。画家では下篠桂谷がいる。総じて旧大名もしくは藩主、豪商であった家に伝来した場合と、売立目録所載の人物によつて収集された墨蹟であることがわかる。

## 第二節 名物記

名物記とは、由緒のある道具の名称や形状、伝来などについて書かれた書物である。足利将軍家の所蔵した書画や器物は『君台観左右帳記』に所載されている。名物といわれる道具は主として茶壺や茶入、掛物である。これらが記載する名物記は、その後も作成されるようになった。

名物記における宗峰妙超の初見は『唐物凡数』（同志社大学総合情報センター蔵）である。同書は山田哲也により翻刻と解題が紹介される<sup>210</sup>。同書は孤本の名物記で、『仙茶集』の末部に付属する。奥書には筆者である宗魯なる人物により「右一本者於南泉堺地染禿筆矣 宗魯（印）」と書かれている。山田によれば、名物記の内容は「永祿から天正年間にかけての地域別茶湯名物記」とされる。同書には「阿波分」として一件の宗

峰妙超墨蹟が所載される<sup>211</sup>。記述中の阿波とは所有者をさし、三好一族をさすものと考えられる。

天正年間（一五七三―一五九三）の名物道具を知る上で重要な名物記としては『山上宗二記』がある。本書は千利休の高弟であつた山上宗二による名物道具の目利き書の性格をもっており、当時、堺や京都の各地に存在した名物道具の所在が判明する。同書には宗峰妙超墨蹟について以下のような記述がある。

大燈之墨蹟 方々ニ可有四十幅・五十幅、其内從語様子、紙之中ニ善文字之可為名物也

記述では、圓悟克勤、虛堂智愚、高峰顯日、大燈国師（宗峰妙超）の順に記載がある。

宗峰妙超墨蹟は当時、四十件から五十件近く相当数存在し、墨蹟の語句と筆勢が尊重された。

その後の名物記において宗峰妙超墨蹟を図入りで紹介しているものには『茶器名物図彙』と『石州過眼録』がある。文字だけの記述では、江戸時代初期に小堀遠州によつて選定されたとする名物記である『中興名物記』がある。『中興名物記』は当時、民間に存在した名物道具の名寄せである。このほか著名な茶人などが所蔵した所蔵品リストである蔵帳が名物記となつた。これらは所有者が小堀遠州や松平不昧などで、作品自体の評価とともに著名な茶匠が所有したという伝来も評価に加味されるようになった。主要な蔵帳には小堀遠州が所持していた道具をまとめた『遠州蔵帳』、土屋政直の所蔵品を記録した『土屋蔵帳』、松平不昧が所持していた道具をまとめた『雲州蔵帳』などがある。これらの蔵帳は所蔵した作品の名称を留めるのみである場合が大半である。以上の名物記に記載される宗峰妙超墨蹟について検討する。

### 第一項 『茶器名物図彙』

草間直方（一七五三―一八三二）による『茶器名物図彙』は、名物茶入、掛物をはじめとする茶道具全般、茶会記、大徳寺虫干の記録などが書かれている。文政十年（一八二七）に発刊された。このうち本書には二件の宗峰妙超墨蹟が掲載される<sup>212</sup>。

一件目は「名号 二幅対」である。所蔵元の表記はないものの、宗峰妙超によつて書かれた名号の二幅対であることがわかる。

二件目は墨蹟図版（図66）が掲載されている。所載される図から筆跡の所見を述べると、横画に注目した場合、起筆は鋭く、文字の中腹にふくらみがある。終筆は次の文字につなげようとしており、運筆をみることができる。本紙には嘉暦二丁卯、すなわち嘉暦二年（一三二七）の年号があり、宗峰四十六歳のときに書かれた墨蹟とされる。そこで書かれた年代に近い筆跡を比較してみると、四十四歳のときの墨蹟に《与宗明大

姉法語》(図19)がある。筆跡は行書体を中心に書かれ、一文字に注目すると右肩上がりとなる書き癖がみられる。このほか嘉暦年間(一二二六―一二二九)に書かれた墨蹟では《関山号》(図3)がある。この墨蹟には嘉暦四年(一二二九)の署名があり、宗峰四十八歳の筆跡である。『茶器名物図彙』所載の墨蹟は《関山号》(図3)と《与宗明大姉法語》(図19)の中間年に書かれた墨蹟となるが、いずれの筆跡とも類似せず、模本であると考えられる。

次に二件目の墨蹟では、同書に以下のような記述がある。

大燈、徹翁、一休三筆

徹翁墨蹟

大燈墨蹟

一休墨蹟

この墨蹟と同一の内容と考えられる墨蹟が『墨蹟之写』(寛永十九 壬午年 貳冊内下墨蹟之寫卷四十六)に記載され、以下のような記述がある<sup>213</sup>。

是日秉佛罷□使洞院都護請師入内 皇帝共仕受殿出

御對譚就五節所設寶座俄尔請上堂帝曰朕須發一問師受命曰

帷□帝座龍於室座右側亦園座宝座左側之平席點蠟□

當行灯□客勤之此外非月卿者不許入此内場

師拈香云此一辨香勢向炉中恭為祝延今上明時聖窮萬歲々々

萬々歲陛下恭顔金輪統御天基永同四海帰仁萬邦乎 師就

座云陰陽之統化育之本廣發無雲之清□高垂無私 天鑑

聖上良久師云得乃云至尊良久既是雷音大震何故瞿曇曰

法離言說難心線難因果難名桐蓋以尺大地尽法界都是一團

圓光□有微塵許之間隔何處有問話時節何処有答話

時節無問無答云二無三非動非静非去非来所以古者云天

得一以清地得一以寧 君王得一以治天下以至後庭梁園左轉右

弼皆悉從一中出來有忠有孝有智有礼致君於老舜撫氏

於無偏迄于達磨示祖應密迹而丈陰濟發大杭此影与皆在御前

各々從一中出頭一花開五葉拔菩提枯株起□林供範立照用

略山野亦從一中生恭蒙聖恩對御說禪析宝□於億兆

祝聖寿於□彊況是彩瓶受其体於長香合受其形於園蠟光  
受其用於明松柄受其性於青箇一斎從箇一中出來作□

道場之莊嚴麗金玉殿之奇澤雖然如是親要向簾□呈露

國家得一治天下庭事卓拄仗一下云而今四海清似鏡三邊誰

敢殺封彊皆非拄仗下座

皇情大悦師登曰山野適来許多言説功皈何処聖上指一丈真箇

丈□為證明師云此外更無有證明人磨聖上竖起拳頭師曰

舉□則南山對北闕夜々見る明星聖上瞬目而搢師鞠躬又手出去

次日賜金子絹綿廿寺

未□見校劫可書入之

龍寶開山大燈国師并靈山和尚之墨

迹也主禪鳳禪人

一休子宗純老書之「方印」

帗ノ内竪九寸四分横一尺四寸五分表具上下アサギ北絹中ヨヘキ笹丸金紗丸

大トコロニアリ一文字風帶紫色中ツルノ紗象牙軸風体露白シ此三筆ノ文字

ハ矢嶋ヨリ覚甫所持而後什也宗春所持宗春ヨリ茶屋四郎次郎所へ方以霜月

有今四郎次郎持来候間見候見申候徹翁大灯一休三筆共ニ見事也

記述によると、『墨蹟之写』で紹介されるのは宗峰妙超、その法嗣である徹翁義亨（大徳寺一世）、一休宗純（大徳寺四十七世）との三墨蹟である。所有者に着目すると、この墨蹟は矢嶋氏より覚甫が所持し、針屋宗春から茶屋家の所有となった。覚甫とは天野屋覚甫であると考えられる。覚甫は古田織部の高弟であり、織部の書状にしばしばその名がみえ、使者として諸大名へ参上したり、あるいは同道するなど、信任の厚い人物であったとされる<sup>214</sup>。この墨蹟はその後、針屋宗春、茶屋四郎次郎が所持していたことがわかる。

記述から紙面のほとんどの部分が徹翁による筆跡で、最終部に師である宗峰妙超が「未□見校劫可書入之」を加筆したと考えられる。なお、本墨蹟はその後、鴻池家が所有したようで、同家の蔵帳である『鴻池家蔵器控』には以下のような記述がある<sup>215</sup>。

大燈国師 三筆墨蹟 後醍醐天皇勅問三法語

大燈国師校勘

大現禪師墨蹟 奥書一休和尚 遠州箱

記述から、三筆墨蹟は後醍醐天皇による勅問への返答の墨蹟であり、小堀遠州による箱墨書があったことがわかる。

次に『茶器名物図彙』には大徳寺および塔頭寺院における虫干しの記録である「大徳寺虫払之記」があり、同書のうち宗峰妙超墨蹟について整理したのが【表3】となる。表中の虚堂智愚墨蹟とは『達磨忌拈香語』（大徳寺蔵。国宝）をさす。本墨蹟を含めた理由は、『山上宗二記』にも所載され<sup>216</sup>、外題が宗峰妙超によるものと紹介されているためである<sup>217</sup>。

『茶器名物図彙』の「大徳寺虫干」に所載される墨蹟のうち、大半は現存が確認できる。「興作都」から始まる墨蹟は『興作偈』（図7）であると考えられ、当時は大仙院に所蔵されていたことがわかる。今日、現存が確認できないものとして真珠庵が所蔵した「大灯国師筆 釈迦牟尼仏 名号」と「南無文殊師利菩薩 大灯国師筆」の二件がある。これら二件は名号の墨蹟であることから、先述の『茶器名物図彙』一件目に紹介した「名号 二幅対」に該当すると考えられる。

## 第二項 『石州過眼録』

片桐石州（一六〇五－一六七三）がみた道具の記録である『石州過眼録』がある。本書は現在、慶応義塾大学図書館の高橋箒庵文庫に所蔵される。徹真居士による写本で、古墨蹟、古画、井戸茶碗の記述からなる。この内、石州のみた宗峰妙超墨蹟は五件掲載される。これらは石州自身が所持していたものではなく、鑑定を依頼されたため持ち込まれたものや、茶会などで実見した墨蹟である。五件の記述は以下となる。

- ①大堂墨蹟<sup>①</sup> 本紙 竪一尺一寸二分、横三尺一寸八分 名印アリ

表具中風帯萌黄地紗、ツカケ表具、上下柿地ノ波

空劫已前威音那畔

老拙信筆及筆

- ②大灯国師落字ノ墨蹟 千家名物ノ本ニクワシ  
落字書入

後醍醐天皇勅筆

学道如鑽火逢煙不一休

- ③大灯国師墨蹟

澤庵和尚外

真珠庵宗賢添状





横八六・一<sup>七</sup>。本墨蹟を柳営御物とする理由は、文庫の創設者で、本墨蹟を入手した菅原通斎（一八九四―一九八一）の著作中の記述による。『通斎美術ばなし』によれば徳川宗家から本墨蹟と南宋絵画の売却について徳川家に赴いたときに、予算上の都合で本墨蹟のみを入手したとされる<sup>218</sup>。図録画像でみるかぎり、本墨蹟の筆跡を述べると、文字の形状は宗峰の特徴と合致する。しかしながら筆跡には勢いや躍動感というものを感じることはできない。一文字ごとに注目すると、起筆は鋭く、一定の速度で書かれたとも考えられるが、終画はやや硬く、この点がほかの真蹟墨蹟とは異なっている。従って本墨蹟は真蹟といい難い。

現在、本墨蹟と同一内容の《与宗圓道人法語》（図28）の付属品には双鉤による原寸大の模写一枚（図69）が付属しており、点字が付されている。双鉤とは墨蹟本紙の上に和紙を敷いて文字をなぞり、その文字形状を書き写すことである。双鉤の存在は文字形状を留めておくための補完的な資料であつたと考えられる。このような双鉤による墨蹟が後世、表装され宗峰妙超墨蹟として伝来したと考えられる。

②は先述した千家名物の掛物である。『中興名物記』における記述をみても、本紙中の筆跡や行数、縦横の幅の形状などを明らかにすることはできない。

③は冒頭が「南泉道知貫云多」、末文が「失功也」である。売立目録中にも「南泉道知」の書き出しから始まる内容の墨蹟図版（図70）が掲載されるが、図版の筆跡から摸本であると考えられる。

⑤は「奉敬賛」からはじまる墨蹟である。記述によれば、この墨蹟は享保十八年（一七三三）五月十一日に《松山肩衝》と同時に石州のもとへ持ち込まれた<sup>219</sup>。現在、永青文庫には本墨蹟に付属したと考えられる添状が保管されている。これらは春澤宗晃、天室宗竺、玉舟宗璠による添状があり、そのうち春澤宗晃（一六一三―一六九四）添状（図71）では以下のような記述がある。

敬竹蘭雅韻之未一

軸大燈国師真墨

碧落碑何有右贋本

仍為證

春澤宗晃印

記述によると春澤は、敬竹蘭雅韻の書き出しから始まる墨蹟を真蹟としている。この墨蹟の所在については、現在のところ不明である。この墨蹟と同一内容の墨蹟が『墨蹟之写』に二件所載されている。一件目は『墨蹟之写』（卷三十八、寛永十四 丁丑年）であり、以下のような記述がある。

敬奉贋

〔惜〕〔春〕  
竹蘭雅韻之末矣

龍寶山宗峰叟

一樣春光華木中兩

般開落眼欲空勸君

有力相將者應離眞

来与去同

帟之内横一尺四寸七分竖一尺一寸三分

表具上下カバノキヌ中アサキ一文字

風帶モヨキ地金襴アタコ如成作両

了句抱其似セ物外題有候

二件目は、『墨蹟之写』（卷二十二、元和九、癸亥）において以下のような記述がある。

敬奉廣

惜春

竹蘭雅韻之末矣

龍寶山宗峰叟

一樣春光華木中兩

般開落眼欲空勸君

一有力相將者應離眞

来与去同

帟内横一尺六寸八分竖壹尺七分

表具上下浅黄絹中モヘキ地紗一文字

風帶紺地ノ金紗

二件の記述にみられる墨蹟の寸法は異なっており、いくつかの模本が存在したものと考えられる。

### 第三項 『中興名物記』

本書は中興名物の名寄せである。本書には宗峰妙超墨蹟として以下の四件が掲載される。

#### ①大燈消息 仮名文

大徳寺龍光院

②大燈墨蹟

江戸樽屋與左衛門

京、紫野雲林院

京篠屋より出る、表具、中白金らん、今大阪

③大燈墨蹟

辻治郎右衛門

後藤三右衛門

表具利休好

④大燈墨蹟

後藤三右衛門

冬木

落字の二字、後醍醐天皇書加せ給ふなり

ここでは①を除く残り三件の墨蹟について検討する。先ず、②は《風》(図72。九州国立博物館蔵)である。本紙寸法は縦三三<sup>サ</sup>、横八六・一<sup>サ</sup>。『虚堂録』を出典とする詩偈墨蹟である<sup>220</sup>。閲覧したところ墨蹟を収納する箱は桐箱で、二重箱がヤリガンナで形成し、漆で塗られたものである。二重箱の内側には以下のような墨書がある。

大燈国師墨蹟 死後則紫野真珠庵江

上可申者也 宗長

墨書の記述によると、本墨蹟は連歌師であった柴屋軒宗長(一四四八―一五三二)が所持し、没後、真珠庵に寄進したことが判明する。外箱裏の貼紙(図73)には以下のような記述がある。

雲林院開山大燈国師御筆跡 禅隆寺為永代什物奉遣上也 上田弥平次

(貼紙) 開山国師墨寶 雲林院常什 寶永五戊子歳二月 政郷

記述から上田弥平次が宝永五年(一七〇八)に禅隆寺へ寄進した墨蹟で、その後は雲林院に所蔵された墨蹟であることが判明する。江戸の材木商であった上田家は、かつて《利休遺偈》(不審庵蔵)を所持していた。屋号が冬木屋であったため、上田家は冬木家と称される。「政郷」のみ筆跡が異なることから、上田弥平次自身による自署である。この墨蹟が所蔵された雲林院とは大徳寺山内にある塔頭寺院である。元々は天台宗の寺院であったが、宗峰の時代に後醍醐天皇より下賜された。その後は廃れ江戸時代中期に江西宗寛により再興された寺院である。『龍寶山大徳禅寺世譜』<sup>221</sup>には以下のような記述がある。

雲林院 龍泉派獨往今兼帶

(中略)

寶永三年丙戌秋江西宗寛和尚中興殿宇一新莊田有羨檀越江戸冬木氏寛政享和間廃唯存観音堂一字門一棟耳

記述から荒廃していた雲林院は江西宗寛により中興されたが、その援助を冬木氏が行ったとある。この時の檀越こそが冬木屋の当主である上田政郷である。《風》墨蹟の箱書内容から、本墨蹟は上田政郷により禅隆寺に寄進したものである<sup>222</sup>。江西と冬木家との交渉は江西が品川、東海寺の輪番として住した時期より関係があつたものと推測される。江西以降四代まで雲林院は続いたが、その後は再び廃れる憂き目にあつた。明治二十八年（一八九五）七月十五日付の『雲林院什物』（大徳寺蔵）の記載には、本墨蹟は記載されておらず、当時すでに流出していたことがわかる。

『中興名物記』の記述では以前の所有者は京の篠屋とある。京の篠屋とは刀剣商であつた篠屋宗久のことを指す。篠屋は茶会などでこの墨蹟を用いたようである<sup>223</sup>。その後、この墨蹟は上田政郷が所持し禅隆寺に寄進され、その後は雲林院で所蔵された。更に雲林院から放出されてのちは、江戸町年寄の樽屋与左衛門が所持していた。

③は辻治郎右衛門、後藤三右衛門が所持していた墨蹟である。辻は『町人考見録』によると京都の両替商であつた辻次郎右衛門をさすものと考えられる<sup>224</sup>。辻家が所有して後は、金座御金改役の後藤三右衛門（一七九六―一八四五）が所持していた墨蹟である。墨蹟の内容は判明していない。

④は冬木屋、上田家が所蔵したもう一つの宗峰妙超墨蹟である。『中興名物記』では「落字の二字、後醍醐天皇書かせ給ふなり」とあり、後醍醐天皇の加筆があるものとされる。先述の『石州過眼録』にはこの墨蹟について以下のような記述がある。

大燈国師落字ノ墨蹟 千家名物ノ本ニクワシ

落字書入

後醍醐天皇勅筆

学道如鑽火逢煙不一休

記述によれば「落」の字の書入は後醍醐天皇によるものとされている。極めてであろうか、一休宗純による「学道如鑽火逢煙不」の墨書がある。

#### 第四項 『土屋侯御道具帳』

小堀遠州と関係の深かつた大名を考えると、土屋相模守政直（一六四一―一七二二）がいる。土屋家の場合、その蔵帳である『土屋侯御道具帳』<sup>225</sup>にみえる宗峰妙超墨蹟では以下の一件が所載される。

墨蹟

一 大燈国師墨蹟

龍睡証跡点字

政直が所持した墨蹟には龍睡宗章（大徳寺二百六十八世）による点字が付属していた

ことがわかる。この墨蹟は、享保四年（一七一九）十二月十二日の土屋政直の茶会<sup>226</sup>で用いられた墨蹟であると考えられる<sup>227</sup>。なお、この墨蹟は『墨蹟并名物茶具記』<sup>228</sup>にも

#### 一大燈国師墨蹟

##### 龍睡極証并点字

と記載が確認できる。土屋蔵帳と同一の墨蹟であり、当時より著名な墨蹟であつたことが判明する。なお、現存する宗峰妙超墨蹟中、龍睡宗章一人による極状があるものでは《消息》（図8）がある<sup>229</sup>。

#### 第五項 『雲州蔵帳』

出雲松江藩主、松平不昧（一七五一・一八一八）は多くの茶道具や掛物を収集した。不昧の所蔵品目録が『雲州蔵帳』である。同書は宝物、上之部、中之部、下之部からなる。本書において宗峰妙超墨蹟は二件存在する。「上之部」に掲載される墨蹟では以下のような記述がある。

##### 大燈文 京樋口 金三枚

この墨蹟は、現在、福岡市美術館が所蔵する《よねの文》（図67）であり、不昧による評価額がわかる。

本書にはもう一件の宗峰妙超墨蹟が記載される。同書「中之部下之部」には以下のような記述がある<sup>230</sup>。

##### 大燈国師墨蹟

##### 上下 浅黄紹

##### 中 金地紹金

##### 風帯 金地紹金

##### 一文字 紫地印金

##### 軸 黒塗撥

##### 包物 茶羽二重

##### 箱 桐 春慶塗 几帳面 金覆輪

##### 銀金物紐紫

##### 箱 蓋裏 張外題

##### 包物 白縮緬袷

##### 外箱 黒搔合塗 金粉銘

##### 包物 黄木綿憚

##### 極 一枚 古筆了延

極箱 桐 白木 書付 金物附

記述から表具および箱などの形状がわかる。なお、松平家は明治三年（一八七〇）に売立を行っており、そのときの記録は『御物及諸家道具』に所収される<sup>231</sup>。同書の「明治三年雲州侯入札御道具之記」によれば「右は明治三年三月於京師丸山二入札御払二相成分也」とあり、明治三年（一八七〇）、京都において開催された売立であつた。同書に宗峰妙超墨蹟について以下のような記述がある。

一 大燈国師墨蹟 了延極

中風帶茶地紹金 上下浅黄紹

澤庵、春澤、宗舜三和尚添掛物

記述から先述の『雲州蔵帳』における表具の記述が合致する。『御物及諸家道具』によれば、この墨蹟には澤庵宗彭、春澤宗晃、宗舜三和尚による添状が一卷の巻物として付属したことがわかる。現時点では本墨蹟と合致する墨蹟を明らかにできていない。

### 第三節 『徳川実紀』にみる宗峰妙超墨蹟

徳川家康（一五四三―一六一六）が江戸に幕府を開いて後、所蔵した道具類は柳営御物とよばれている。家康の死後、駿府にあつた家康の遺産は尾張徳川家、紀州徳川家、水戸徳川家に分与された。尾張藩初代藩主の徳川義直（一六〇一―一六五〇）に与えた遺産目録である『慶安四年御数寄御道具帳』<sup>232</sup>（徳川美術館蔵）には、宗峰妙超墨蹟が一件確認でき、以下のような記述がある。

一 御掛物 大燈 壺幅

記述から家康時代の柳営御物において宗峰妙超墨蹟が所蔵されていたことがわかる。家康以降の徳川將軍家における宗峰妙超墨蹟について検討するため『徳川実紀』をみることとする。『徳川実紀』は家康から十五代將軍、徳川慶喜（一八三七―一九一三）までの歴代將軍の謁見や柳営における出来事を記録した文書である。『徳川実紀』には茶入や刀劍、墨蹟が將軍家と大名家において下賜や献上という形で移動する記述がある。ここでは実記中の下賜と献上に注目して、宗峰妙超墨蹟の移動を明らかにする。

#### 第一項 下賜された宗峰妙超墨蹟三件

『徳川実紀』において將軍家が下賜した宗峰妙超墨蹟は以下の三件がある。

①寛文八年（一六六八）十二月十八日

甲府宰相綱重卿に無準筆の掛幅。堆朱卓。館林宰相綱吉に大燈筆の懸幅。螺鎚卓を

御前にて賜ふ。

②元禄十四年（一七〇一）三月十八日

光貞卿に栗田口国綱の御刀。金五十枚。時服二十。大燈国師墨蹟の掛幅<sup>233</sup>。

③正徳二年（一七一三）十一月廿九日

御遺物をわがちたまふ。尾張中納言光通卿に栗田口吉光の御さしぞへ。虚堂の墨蹟。紀伊中納言吉宗卿には來国次の御差ぞへ。虚堂の墨蹟。水戸中納言綱條卿には栗田口国吉の御さしぞへ。大燈国師の墨蹟。

①は四代將軍徳川家綱（一六五一―一六八〇）より館林宰相綱吉（一六四六―一七〇九）に宗峰妙超墨蹟を下賜したものである。綱吉は寛文元年（一六六一）に上野館林藩主として城持ちとなったため二十五万石の大名となった。綱吉に宗峰妙超墨蹟が下賜されたとき、兄である甲府宰相綱重（一六四四―一六七八）には無準師範墨蹟が下賜されている。綱重も寛文元年（一六六一）に十万石が加増され二十五万石の大名となっており甲府宰相と呼ばれる。両者への下賜は、同格の下賜であつたと考えられる。

ところで神田御殿には二件の宗峰妙超墨蹟が所蔵された。天保十二年（一八四一）に成立した『徳川家御道具帳』<sup>234</sup>（国立国会図書館蔵）には以下のような記述がある。

常憲院様御比進

一、琦楚石墨蹟 桜田御殿

一、大燈墨蹟 神田御殿

一、大燈墨蹟 神田御殿

記述によると常憲院様御比進とあり、綱吉が神田御殿に宗峰妙超墨蹟を寄贈したことがわかる。寄贈された時期として、綱吉が將軍となり居城が江戸城となったときであると推測される。神田御殿に存在した宗峰妙超墨蹟については古筆了仲（一八二〇―一八九一）が明治二十年（一八九五）、六十八歳のときに書いた自筆本『柳営山里之記』<sup>235</sup>に以下のような記述がある。

一 大燈国師墨蹟 横物 神田御殿

空劫已前之語

表具一文字紫地印金大牡丹ノ紋 上一寸二分、下六分

中黄鈍地大牡丹ノ紋<sup>（綴）</sup> 上五寸三分、下二寸三分五リン

上下ボツ絹 上一尺三寸八分 下六分

軸 象牙

十六行年号各印アリ



記述にある墨蹟は「空劫已前威音那畔」の書き出しから始まる墨蹟である。

②は徳川綱吉から徳川光貞（一六二七―一七〇五）への下賜である。光貞に下賜された墨蹟は紀州徳川家旧蔵《徳海号》（図74）である。この墨蹟は徳海の字号墨蹟である。閲覧できていないため『禅林墨蹟拾遺』を参考にする。同書には付属する紀州家覚書三通のうち、「元禄十六年九月十五日淡輪半次郎口上一通」が紹介されており、以下のような記述がある。

大燈之墨蹟、去々年御成之節、大殿様御拝領遊、其以後去々年殿様江從

大殿様進候。然者先あなた御差置可遊との御事にて云々

記述から『徳川実紀』中の下賜された年代が一致する。

③は十代將軍徳川家宣（一六六二―一七一二）の没後にその遺物を水戸徳川家、綱條（一六五六―一七一八）に下賜したものである。水戸徳川家に下賜された墨蹟は《与宗玉善女法語》（図52）である。この墨蹟は宗玉善女に与えられた法語墨蹟である。本文には元弘二年（一一三三）とあり、宗峰五十一歳のときの筆跡である。以上の墨蹟は徳川將軍家から館林宰相綱吉、紀州徳川家、水戸徳川家に下賜された宗峰妙超墨蹟である。このような墨蹟は、將軍家の所蔵品であったが、元来、徳川家が所蔵していた場合と、大名などにより献上された場合が考えられる。次項では大名家から將軍家に献上された宗峰妙超墨蹟を検討する。

## 第二項 献上された宗峰妙超墨蹟四件

『徳川実紀』中、將軍家において大名などからの献上を大別すると遺物によるもの、致仕によるもの、その他があった。將軍家への遺物の献上とは、前藩主の遺物を次代の藩主が將軍家に献上するものである。この場合、前藩主の時代に將軍家から下賜された品を返献する例もみられる。致仕とは官職を退くことである。遺物や致仕に際して將軍家に献上される品には茶入、刀剣、掛物などであった。ここでは、そのうち掛物に注目する。

『徳川実紀』中、遺物として献上された掛物を一覧にしたものが【表4】である。献上された掛物には牧谿や玉潤などの南宋画による唐絵や墨蹟がある。墨蹟では中国人禅僧が大半であるが、日本人禅僧では宗峰妙超と一休宗純墨蹟が各一件ある。

致仕の場合による献上品でも茶入、刀剣、掛物などの献上があった。そのうち『徳川実紀』中、致仕において献上された掛物を一覧にしたものが【表5】である。献上された墨蹟の筆者をみると中国禅僧では虚堂智愚、南堂清欲、無準師範、月江正印などがある。日本人では藤原定家と宗峰妙超がいる。絵画では牧谿や梁楷など南宋絵画の献上があった。ここでは將軍家に献上された宗峰妙超墨蹟を検討する。『徳川実紀』中、以下

の三件の献上が確認できた。

①寛文元年六月廿四日条

この日もとの加藤休意入道明成遺物大燈国師墨蹟を。其子内藏助明友よりさへぐ。

②寛文二年十二月五日条

不時朝會あり。本多能登守忠義致仕得物とて。左文字の脇差。大燈国師墨蹟を献ず。

③元禄十二年八月九日条

大留守居酒井雅樂頭忠舉より。所藏の吉光。來國光。當麻の差添ならびに京極中納言定家卿の色紙。大燈国師墨蹟を献ず。その賞とて金五千兩たまふ。

①は加藤明成（一五九二―一六六一）の遺物であつた宗峰妙超墨蹟を、息子の明友（一六二一―一六八四）が將軍家へ献上したものである。この墨蹟は『銅御藏御掛物御歌書極代付之帳』に掲載される。同書は矢野環による『君台觀左右帳記の総合研究』において紹介される<sup>236</sup>。矢野によると本書は「萬治元年閏十二月以降に献上された掛物、歌書を、元禄四年正月に、狩野洞雲、養卜、古筆了珉、了仲が拝見鑑別し、金三十五枚と上々などと評価している」藏帳である。また、この銅御藏は、明暦二年（一六五七）の明暦の大火後に城内山里に立てられ、厚い銅板で覆つたとされる<sup>237</sup>。本書には、加藤明成遺物の宗峰妙超墨蹟として以下のような記述がある。

御掛物

寛文元年丑六月二十四日 式部入道

一、大燈墨蹟 加藤休意遺物

右正筆代三拾枚 了珉

右上々代金百枚 了仲

寛文元年（一六六一）に加藤休意、すなわち加藤明成の遺物として献上されていることから『徳川実記』の記述と合致する。本書の成立時期である元禄四年（一六九一）当時の評価として、古筆了珉は「右正筆代三拾枚」としているが、古筆了仲は「右上々代金百枚」として、その間の評価の高まりを表している。

②は本多能登守忠義（一六〇二―一六七六）の遺物を献上したものである。③は大留守居であつた酒井雅樂頭忠舉（一六四八―一七二〇）により献上されたものである。

このほか徳川將軍家への宗峰妙超墨蹟の献上は一件ある。元禄十一年（一六九八）に松平備前守長矩（一六八〇―一七二二）が美作津山城主となつたときに、『初花肩衝』（図75）を献上した。このとき、松平家が所藏した宗峰妙超墨蹟も同時に献上されている。この墨蹟について『柳営山里之記』には以下のような記述がある。

一 大燈国師墨蹟 横物 元禄十一年十二月六日 松平備前守上ル

竪四尺二寸、横三寸六分

此表具一文字上代紗 中大阪蜀錦 上下薄茶純子

外題沢庵和尚

記述から寸法と表具、澤庵宗彭による外題があることがわかるが、この墨蹟の特定には至っていない。

以上の將軍家から下賜された、もしくは大名家から献上された宗峰妙超墨蹟が、將軍家と大名家の間を移動したものと考えられる。

#### 第四節 大徳寺文書中の重書箱記録にみる宗峰妙超墨蹟

宗峰妙超墨蹟は、宗峰が弟子や在俗の弟子に印可や法語を与えたものであった。つまり当初は寺院や信者のもとで保管されたと考えられる。ここでは『大徳寺文書』を中心に、大徳寺周辺において、宗峰妙超墨蹟の所蔵と流出について検討する。

千利休の高弟であった山上宗二による『山上宗二記』において、当時、四十件から五十件の宗峰妙超墨蹟が存在していたことがわかる。この記述は宗二が実見したもの、または伝聞をもとにしたものと想像される。当時、寺院で所蔵された宗峰妙超墨蹟は、茶人らによつて拝見されていた。『天王寺屋会記』中、永禄十一年（一五六八）九月十九日には宗及らが南宗寺の所蔵品を拝見した。同書には以下のような記録がある。

一 たいとうの墨蹟拝見申候、字おほき也、いんあり○□

一 たいとうと拝見、字二五くたりはかりあり、一段見事に覚申候、紙も

新候也、いんなく候

記録では谷宗印が同寺に寄進した圓悟克勤墨蹟、すなわち《流れ圓悟》（図39）を拝見しており、その後、二幅の宗峰妙超墨蹟も拝見している。南宗寺住職の田島碩應氏によれば、現在の南宗寺ではこれらに該当する墨蹟は所蔵されていないという。南宗寺所蔵の宗峰妙超墨蹟は寺院経営上の理由から放出されたと考えられる。

宗峰妙超墨蹟の移動を考えるにあたり、もともと墨蹟を所蔵した寺院での所蔵を『大徳寺文書』より明らかにする。宗峰妙超墨蹟は大徳寺を中心とする臨済宗寺院で所蔵されていた。大徳寺が所蔵した墨蹟などは重書箱に保管され、記録が残される。重書箱における記録から、大徳寺に所蔵された墨蹟中、宗峰妙超墨蹟について整理したものが【表6】である。重書箱の記録をみると、戸田宗潮により寄進された《解夏小参法語》（図76。大徳寺蔵）や、真珠庵における開山墨蹟すなわち宗峰妙超墨蹟《月岩》を再興するにあたり沽却するなど、その増減はあるものの主要な墨蹟は寺の外には流出して

いないことがわかる。

『大徳寺文書』には真珠庵、徳禅寺において所蔵された墨蹟についての記録もあり、一覽にしたものが【表7】である。これらをみてみると、いくつかの墨蹟は今日確認できない。真珠庵において元和五年（一六一九）の記録では宗峰妙超墨蹟《廓然無聖》が「再興ニ付去却」となっていることから、経営上の理由で売却されていることがわかる。この墨蹟は元和三年（一六一七）時点で同院に所蔵されている。従って、墨蹟が流出した時期は、元和三年（一六一七）から元和五年（一六一九）までの間であると考えられる。

真珠庵においては多数の墨蹟を所蔵したようであるが、いくつかの墨蹟は真珠庵から流出している。『真珠庵墨蹟箱入置注文』（弘治四年）の文書に着目すると、以下のような記述がある<sup>238</sup>。

墨蹟箱入置注文 弘治四戊午廿六

蓋上 滴凍 底下面 容膝

開山墨蹟 白雲流泉 同墨蹟 若以色、是人行期

徹翁病中法語 没倫 栗鼠絵 松田筆

白鷹絵 相阿證状 鐘馗像 牧谿筆

三教図 訴笑隠 助老二

御頭巾 應神像 二幅入黒筒、封之、

松上司ヨリ被預置之物一包

右十一種

此内開山墨蹟三幅共二松上司ニ預置也、爲沽却也、

宗普（花押）

本文書は明叟宗普（一五一六年―一五九〇）により書かれた。この文書に記載のある年号は弘治四年（一五五八）である。ここでは真珠庵にあった開山墨蹟の三幅（白雲、若以色、是人行期）を沽却することを目的に松上司に預けたとある。このうち「白雲流泉」とある墨蹟は現在、野村美術館に所蔵される《白雲偈》（図31）のことであり、かつては真珠庵の伝来品であることがわかる<sup>239</sup>。この墨蹟も、真珠庵の経営上の理由から沽却されたものである<sup>240</sup>。

徳禅寺における重書箱の記録では従宗峰妙超印可状、すなわち《徹翁大徳寺一世置文》（図6）、《投機偈》（図9）、《徹翁号》（図29）を所蔵していた。現在、これらの墨蹟は大徳寺に所蔵されることから、所有移転があったことがわかる。

江戸時代における大徳寺および塔頭寺院の所蔵する宗峰妙超墨蹟では、草間直方による「大徳寺虫払記」（『茶器名物図彙』）に記録がある。同書から虫払いされた墨蹟を一

覧にしたものが先出の【表3】である。表から大徳寺山内の塔頭寺院に宗峰妙超墨蹟が所蔵されていたことがわかる。

このほか流出した墨蹟では『溪林偈』（図77。正木美術館蔵）、『南嶽偈』（図78。正木美術館蔵）がある。二件の墨蹟は大徳寺山内塔頭の玉林院に伝来したが、同寺の檀家であった鴻池家が入手している。現在、鴻池合資会社資料室が所蔵する「大燈国師墨蹟二幅対譲状」には以下のような記述がある。

覚

一 大燈国師墨蹟貳幅対 一箱

右之両軸此度貴殿江相譲

申處実正也後來為無違杞

仍而状如件

京紫野

寛延二巳巳年十月日

玉林印（印）

山中喜右衛門殿

記述から、二件の墨蹟は、かつて真珠庵に所蔵されていた墨蹟であった。これら二件の墨蹟は金森宗和（一五八四―一六五七）の寄進によるものとされる。その後、寛延二年（一七四九）に、真珠庵から山中氏（鴻池氏）に譲渡されたことが判明する。

『大徳寺文書』中、大徳寺および塔頭へ宗峰妙超墨蹟を寄進した者では、後藤益勝がおり、益勝は『書簡』（図79。大徳寺蔵）を大徳寺へ寄進している。後藤益勝について『寛政重修家譜』によれば<sup>241</sup>十二歳の時より徳川家康に仕え、大坂夏の陣にも家康につき従い参加した。寛永四年（一六二七）に御所出入りの呉服商である縫殿寮の口宣を賜った<sup>242</sup>。この墨蹟は『墨蹟之写』（巻五 慶長廿年元和元年）に所載されており、以下のような記述がある。

綸旨無相違候目出候

於今ハ能可有御沙汰候哉

忝（慙）々可被進新田殿候

定御覽したく候ハん歟恐々

謹言

八月八日 「花押」

此開山ノ文後藤縫殿介所持候也死後主其志とて  
從後室大徳寺常住へ寄進候新田殿之義有之故乎

蜀隣ニ有之開山ノ文ソ文乙卯十一月十二日拝見之

記述から本墨蹟は後藤益勝によつて大徳寺に寄進され、益勝の死後、正室によつて「主其志」に従い大徳寺に寄進されたことがわかる。江月は大徳寺に寄進した理由として、宗峰妙超の出身地が播磨国であり、建武の新政時、新田義貞（一二〇一・一二三八）が播磨介となった関係から益勝が大徳寺に寄進したものと述べている。

以上から重書箱の記録より大徳寺、真珠庵、徳禅寺が所蔵した宗峰妙超墨蹟の寄進や沽却による増減をみる事ができた。

## 第五節 小結

売立目録に所載される図版には、今日では重要文化財に指定される《白雲偈》（図80。現在、野村美術館蔵。『徳川家御所蔵品入札』所載）。《靈微号》（図81。現在、サンリツ服部美術館蔵。『松浦伯爵家並某家蔵品展観入札目録』所載）があった。このほか重要美術品に認定される作品では《置文案》（図82。現在、出光美術館蔵。『某子爵家并某大家所蔵品入札』所載）、《消息》（図83。現在、根津美術館蔵。『前侯爵松方家蔵品入札』所載）がある。このほか現在、美術館や個人が所蔵する墨蹟も所載されていた。

売立目録の調査によつて、先行研究において紹介される墨蹟のツレを提示することができた。目録図版から新たに紹介した墨蹟では《一帆風》のツレ二件（図53、図55）、《手抄二卷》のツレ（図59）、《白雲集》のツレ二件（図57、図58）がある。また、『墨蹟之写』に所載されている本阿弥家所蔵の墨蹟を売立目録画像（図64）より提示した。これらは今日現存が確認できない墨蹟である。

売立目録や展示会図録等の調査では、目録名に所有者が記載されることから、家別に分類した。旧大名家十三家、新興の財閥、道具商、画家、寺院などの所有をみることで、所有者の移転が判明した。

名物記に記載される宗峰妙超墨蹟を調査したことにより『茶器名物図彙』、『石州過眼録』、『中興名物記』、『土屋蔵帳』、『雲州蔵帳』のそれぞれに所載を確認した。

『茶器名物図彙』には三件の墨蹟が所載されており、その中に宗峰、徹翁、一休による三筆墨蹟があった。この墨蹟は『墨蹟之写』に全文が紹介されており、当時の所有者は茶屋四郎次郎である。その後、この墨蹟は鴻池家が所蔵したことが判明した。『石州過眼録』には五件の宗峰妙超墨蹟が掲載されるが、そのうち「敬春惜」について、その全文は『墨蹟之写』に所載されており内容が判明する。また、本墨蹟に付属したと考えられる添状が現在、永青文庫に保管されており紹介した。『中興名物記』には四件の墨

蹟が所載されており、うち二件は大徳寺塔頭龍光院、雲林院の所蔵である。残り二件は辻家、後藤家の所有であり有力な商人の所蔵であったことが判明する。『土屋蔵帳』にも一件の宗峰妙超墨蹟が掲載されており、政直の茶会記により自身の茶会で使用されていたことが確認できた。

『徳川実紀』、『大徳寺文書』から、宗峰妙超墨蹟について明らかにした。『徳川実紀』では將軍家から下賜された三件および、献上された四件の墨蹟に着目した。下賜された三件のうち現存する墨蹟は紀州徳川家に下賜された『徳海号』（個人蔵）、水戸徳川家に下賜された『与宗玉善女法語』（水府明徳会蔵）である。

『大徳寺文書』では墨蹟等が保管されていた重書箱の記録に注目した。記録から、大徳寺において墨蹟の寄進や流出が判明した。

以上の宗峰妙超墨蹟の総合的な調査によって、第二章において現存を確認した墨蹟（【表1】）と、第三章で紹介した墨蹟図版や記述により、現存不明な宗峰妙超墨蹟を売立目録、名物記、『徳川実記』、『大徳寺文書』、『墨蹟之写』などから提示した。

## 第四章 茶の湯文化における宗峰妙超墨蹟の受容史

### 第一節 宗峰妙超墨蹟の所有者と茶の湯文化

筆者のこれまでの研究では宗峰妙超墨蹟の総合的な調査を実施してきた。調査により、真蹟の特徴、過去に存在した墨蹟の記述および図版を明らかにした。また、墨蹟の所有者を明らかにすることができた。墨蹟の所有者では、茶の湯文化に関係した人物の所有が多くみられた。名物記中、宗峰妙超墨蹟は『山上宗二記』や『中興名物記』に所載されることから、茶の湯における掛物として使用されたとみられる。ここでは、宗峰妙超墨蹟が茶の湯文化で、どのように受容されたのかについて論じる。宗峰妙超墨蹟を所有した社会階層は大名、有力な商人、町衆および豪商、茶匠らであった。これらの階層における宗峰妙超墨蹟の受容は、茶の湯文化が関係していると考えられる。茶の湯では床の間に掛物を掛け、釜、水指、茶入、茶碗、茶杓などの器具を用いて、茶を供する。茶会において初座または後座において、床の間には掛物が用いられた。そこで、茶会で使用された道具の記録である茶会記資料中、宗峰妙超墨蹟が用いられた茶会に注目する。茶会記について、谷晃は『茶会記の研究』において現存を確認した茶会記を二二八件紹介している<sup>243</sup>。そのうち、百七件の茶会記一万五千三百二十七回の茶会中、宗峰妙超墨蹟の使用が確認できた茶会は七十五回あった。茶会において宗峰妙超墨蹟の使用回数を示したものが【表8】である。現存する墨蹟および、売立目録、文献に記載される墨蹟と茶会記を併用して、茶の湯文化における宗峰妙超墨蹟の受容史をみることにする。そこで時代を五期に区分する。第Ⅰ期では初期茶の湯時代として、江戸時代初期以前までを範囲とする。第Ⅱ期では基底となる資料が『墨蹟之写』の記述となるため江戸時代初期とする。第Ⅲ期は江戸時代中期、第Ⅳ期を江戸末期、第Ⅴ期を明治維新後として区分した。

#### 第一項 第Ⅰ期（初期茶の湯）

永禄年間（一五五八―一五七〇）から天正年間（一五七三―一五九二）にかけての名物記である『唐物凡数』において、当時、三好一族が宗峰妙超墨蹟一件を所蔵していたことが判明する。

永禄年間（一五五八―一五七〇）から天正年間（一五七三―一五九二）にかけての茶の湯文化において、どのような人物が宗峰妙超墨蹟を所有したのであろうか。田中仙翁『茶



の本』および谷端昭夫『公家茶道の研究』<sup>244</sup>から天文年間（一五三二―一五五五）の茶会において、宗峰妙超墨蹟が使用された茶会を一覧に示したものが【表9】である。表を参考に、茶の湯文化における受容をみてみたい。なお所有者の社会的階層が武家および商人または千家などの茶匠であることから、武家と民間を区分して検討する。

### 武家の所有

堺の天王寺屋当主である津田宗達・宗及・宗凡の三代にわたる茶会記録が『天王寺屋会記』である。茶会では自会記および茶客として招かれた他会記の記述がある。『天王寺屋会記』において宗峰妙超墨蹟が使用された例として三好実休（一五二七・一五六二）、竹内秀勝、明智光秀（一五二八―一五八二）による茶会がある。

『天王寺屋会記』中の永禄四年（一五六二）四月十三日の茶会では、三好実休が所持した宗峰妙超墨蹟が使用されている。先述の『唐物凡数』に所載される三好一族所持の宗峰妙超墨蹟は、実休の所持品であったと考えられる。

慶長年間（一五九六―一六一五）では、織田有楽（一五四八―一六二二）による茶会で宗峰妙超墨蹟が使用された。有楽の茶会記である『有楽茶亭湯日記』<sup>245</sup>には有楽が所有した《紀国代灯》、《大灯》二件の墨蹟の使用がある。このほか有楽が所持した宗峰妙超墨蹟は、現存する《大灯松岳の似せ物》（大徳寺蔵）である。《大灯松岳の似せ物》は当初、有楽が所有したが、その後似せ物と判明し、徳川秀忠（一五七九・一六三二）の裁定を受け、大徳寺に下賜された<sup>246</sup>。『有楽茶亭湯日記』において、有楽が宗峰妙超墨蹟を用いた茶会では《紀国大灯》は慶長十七年（一六一二）十月二十四日昼、同十二月九日昼、慶長十八年（一六一三）正月三日、同五月四日があり、《大灯》では慶長十八年（一六一三）七月三日朝がある。これらの茶会記では有楽が所有した主要な茶入などの器物は記載されておらず、平時の茶会に用いられたと考えられる。

以上の茶会において宗峰妙超墨蹟の使用が確認できた。しかしながら、織田信長や豊臣秀吉の茶会では宗峰妙超墨蹟を使用した記録は確認されない。当時、信長や秀吉らの所蔵した道具では虚堂智愚墨蹟が多く、そのほかでは牧谿の絵に禅僧の讃があるものの、無準師範墨蹟などであった。宗峰妙超墨蹟の所蔵は確認されない。

永禄年間（一五五八―一五七〇）、天正年間（一五七三―一五九三）の茶の湯文化における宗峰妙超墨蹟の所有者の構成は、信長を頂点とする武家社会の中では三好実休、明智光秀、松永久秀（一五一〇―一五七七）を主君とする竹内秀勝などであった。実休の兄である三好長慶（一五二二―一五六四）は大休宗套（一四八〇―一五六八）に帰依し、三好一族の菩提寺として大徳寺山内に聚光院を建立する。竹内秀勝の主君である松永久秀も大林に帰依している。明智光秀は大徳寺に母の供養の為に山門を寄進している<sup>247</sup>。

このことから当時の武将と大徳寺、堺における南宗寺との関係により宗峰妙超墨蹟が受容されていたと考えられる。

### 有力商人の所有

茶の湯文化の主要な担い手として商人、とりわけ有力な商人の存在があった。先の『天王寺屋会記』をもとに有力な商人における受容をみてみたい。『天王寺屋会記』の筆者である宗及自身の茶会では天正十年（一五八二）九月朝会において「茶屋にて床、大灯ノ字カケテ」、また天正十三年（一五八五）正月十一日昼会において「大灯ノ墨蹟、坂本屋ノ也」があり<sup>248</sup>宗及自身の所有も確認される。また、宗及が招かれた茶会において宗峰妙超墨蹟が用いられた茶会では永禄十三年（一五七〇）二月三日朝の宗易会で「床ニ墨蹟、大灯之」、永禄十三年（一五七〇）十二月十七日朝の長慶寺語首座の茶会で「大ヘラニ大灯之字カケテ」、天正三年（一五七五）二月三十日朝の篠屋宗久会<sup>249</sup>で「大灯墨蹟カケテ但大ひらに」、天正八年（一五八〇）十二月二十日朝の惟任日向殿御会、すなわち明智光秀の茶会で「床ニ大灯之墨蹟」、天正十年（一五八二）十二月四日朝、および同年十二月十五日の天王寺屋道叱の茶会で「床 大灯墨蹟」がある。

このうち各家が所蔵した墨蹟について検討する。篠屋宗久は京の刀剣商である。現在、九州国立博物館に所蔵される《風》（図72）は篠屋の旧蔵品であった。篠屋は茶会において、《風》を用いたようである。その記録として、『天王寺屋会記』中「宗及他会記」の天正三年（一五七五）二月三十日朝会では以下のような記述がある<sup>250</sup>。

天正三年二月三十日朝 京の篠屋宗久会 宗及一人

大燈墨蹟かけて 但大ひらに

かたつき、持出て見せられ候、遅桜といふ壺也

此壺、始而見申候、なり悪候、かたひろく、そこ少き也、土 黒し、葉

も黒し、帯に筋あり、そこすりたる也

記述の茶会では、遅桜、すなわち《遅桜肩衝》が使用されている。この茶入は足利義政（一四三六―一四九〇）旧蔵品とされる茶入で、大名物とされる<sup>251</sup>。宗及による拝見記録があることから、茶入を主とした茶会であったことが想像できる。そのような茶会に宗峰妙超墨蹟が取り合わされていることは、宗峰妙超墨蹟が一定の格の高い道具として認知されていたと考えられる。

### 『山上宗二記』の宗峰妙超墨蹟

先述の『山上宗二記』において、当時、宗峰妙超墨蹟は四十件から五十件ほど存在しており、その評価は筆跡や書かれる語句の内容によって高下の差があった。筆者の山

上宗二は茶の湯を千利休に師事した。宗二自身も薩摩屋を名乗る町衆であった。先の【表9】にみた宗峰妙超墨蹟は、宗二が活躍した時期、堺や京に存在したことから、宗二記で述べられている四十件から五十件の墨蹟の一部であると考えられる。そこで宗二が関係した人物の所有に着目すると、茶の湯の師である利休や、茶の湯を通じて交流した藪内剣仲（一五三六―一六二七）の所有した宗峰妙超墨蹟がある。

宗二の茶の湯の師匠であった利休も宗峰妙超墨蹟を所持していた。これは『墨蹟之写』（慶長廿年元和元年 巻五）にみえる墨蹟である。同書には以下のような記述がある。

浦上殿ハ開山ノ親父也此文ハ前宮幸三郎所持一段ハ利休

所ニ有リ利休ヨリ住吉屋宗拙父モライタト也由来正キ

物ソ壺道味ニ有之開山ノ文

記述には「一段」とあることから、利休は、住吉屋宗拙の父より譲られた道悟時代に書かれた仮名墨蹟を所持していたことが判明する<sup>252</sup>。

ところで現存する墨蹟のうち『写本譲状紀州高家荘』（図16）がある。本墨蹟は、宗峰妙超による書簡の写しを江月宗玩が極めたものである。江月による紙中の極めでは、以下のような記述がある。

紀州高家荘譲状之写

宗峰妙超自筆錐仮名難辨別

国師授与浦上氏慈父慈母仮名之

藻翰相似分明矣

記述には「浦上氏慈父慈母仮名之藻翰相似」とあることから、第一章で紹介した『墨蹟之写』所載の墨蹟（図2）と合致する。利休は『写本譲状紀州高家荘』にみた仮名墨蹟を所持し、茶会などで用いたと考えられる<sup>253</sup>。

宗二と交流した人物として、利休のほかでは藪内剣仲がいる<sup>254</sup>。現在、藪内家が所

蔵する宗峰妙超墨蹟の箱墨書には以下のような記述がある<sup>255</sup>。

発端即日柳弄之四行大徳寺開山宗峰国師之真蹟也

家祖藪中斎之珍藏也良子孫永保之 藪竹陰記

記述によると箱墨書は藪内竹陰（一七二七―一八〇〇）によって書かれており、藪中斎、すなわち藪内剣仲が所持した宗峰妙超墨蹟であることが判明する。墨蹟の内容は道友に宛てた消息である。剣仲自身の茶会での使用は確認できていない。当時、利休や宗二、剣仲などの茶匠が宗峰妙超墨蹟を所持していたことが判明する。

宗二の活躍した当時、存在した宗峰妙超墨蹟は【表9】中、現存が確認できる墨蹟として篠屋宗久が所有した『風』（九州国立博物館蔵）がある。また、今井宗及が南宗寺で拝見した墨蹟は『興作偈』、『夏日偈』（いずれも出光美術館蔵）であったと考えら

れる。このほかの墨蹟について『墨蹟之写』中の宗峰妙超墨蹟に関する記述がある。宗二の活躍した時代と、江月の記録では約半世紀から六十年程度の時代の差があるが、ここでは宗二の時代に存在したと考えられる墨蹟に注目する。同書の記述をみてみると宗峰妙超墨蹟は五十一件が所載される。これらのうち、当時すでに寺院の所蔵となっていた墨蹟では薪寺、酬恩庵の所蔵した《梅溪》（五島美術館蔵）がある。このほか《繪旨相違無》（大徳寺蔵）は後藤益勝より没後、大徳寺に寄進されていた。『墨蹟之写』において、小堀遠州などは鑑定を目的とし、江月のもとへ持ちこんだ取り次ぎの人物であり、所有者とは区別される。従って、ここでは所有が明記される人物を整理したものが【表10】となる。これらの墨蹟のうち当時の所有者が判明し、現存する墨蹟では以下が確認できる。

大森宗巴	薩摩衆	和泉衆	《物我両忘》	個人蔵
徳乗（後藤徳乗）			《法語》	弧篷庵蔵
後藤縫殿介			《繪旨無相》	大徳寺蔵
板嶋左衛門			《日山之賦》	個人蔵
本阿弥家			《至道無難》	『某家御所蔵品入札』所載

また、所有者は判明しないものの、同書に所載されており、現存する墨蹟では《秋風偈》（MOA美術館蔵）、《一曲偈》（個人蔵）、《古徳偈》（湯木美術館蔵）、《恵知客》（根津美術館蔵）、《初心始學》（尊経閣文庫蔵）がある。

ところで島津家久（一五四七―一五八七）が京都に上洛したとき、各所に配った進物などの記録控えである「京都にて礼物進上覚候、又八様御上洛之時罷上二付き而之遣覚」（慶長三年六月二十四日付）がある<sup>256</sup>。同書には以下のような記述がある。

一 帷式ツ 代銀十一モン五分 後藤徳乗  
一 鳥目式貫文 代銀六モン六分 大森宗巴

記述では後藤徳乗、大森宗巴の名前が記載される。後藤徳乗（一五五〇―一六三一）は金工であり《示衆法語》（図25）を所有した。大森宗巴は貿易商であり<sup>257</sup>《物我両忘》（図40）を所有していた。当時の京における有力な町の人々により、宗峰妙超墨蹟が所有されていたことがわかる。この点は一期にみた堺における有力な商人の所有から洛中へと受容の地域が拡大していったのと同様であると推測される。また篠屋の茶会での使用例から、当時、有力商人においては宗峰妙超墨蹟は主要な道具としての位置付けがあったものと推測される。

以上、『墨蹟之写』などにみた墨蹟は、当時の茶の湯において受容された墨蹟であると考えられる。また、山上宗二時代に存在した墨蹟であることから、『山上宗二記』で紹介される五十件のうちの墨蹟の一部であると考えられる。

## 第二項 第二期（江戸初期）

江戸時代初期の茶の湯は、将軍家や大名家において御成などのとき、能などとともに饗応されるようになる。また小堀遠州や片桐石州などの茶匠、千家においては千宗旦の出現をみることができ、茶の湯も武家や商人の間で流行し、茶道人口は拡大することとなる。

### 武家の所有

加賀藩主、前田利常（一五九四―一六五八）が所蔵した宗峰妙超墨蹟について『微妙公夜話』では以下のような記述がある<sup>258</sup>。

大燈和尚之筆梅溪之二字之掛物ハ大坂より御帰陣之時分御覽被遊候其後御所望に御座候所寺之什物難指上候得共御家あり限り寺有限り現米百石毎年被下ハ寺の為に御座候間可差上之由被申候得者奇特成申様に候其通可被成旨今に至り大坂着米百石薪の酬恩庵へ被遣之候

記述によれば慶長二十年（一六一五）、前田利常が大坂夏の陣の帰路、酬恩庵に立ち寄った際に、宗峰妙超墨蹟をみて永代米百石を寄進することを条件に入手したことがわかる。この墨蹟は現在、五島美術館が所蔵する宗峰妙超墨蹟《梅溪》（図84）である。利常は茶の湯を嗜み、多くの道具を所持した。利常が所持した宗峰妙超墨蹟では、『梅溪』以外には《法語》（図85。尊経閣文庫蔵）がある<sup>259</sup>。先行研究では古田紹欽による『大燈国師墨蹟』<sup>260</sup>において紹介されている。この墨蹟は、『墨蹟之写』（元和八年墨蹟之写二十六卷）に同一と考えられる墨蹟の記載が確認でき、以下のような記述がある。

初心始學士先須發無二志願

不管一切是処單々思此而在此

如未然巡人情轉臨難事退攸

無勇猛意氣不達幻宗本旨且

道如何是出家本旨不見劉

鍊磨參撫山々云老牯牛

汝来也須彌特跳麼来  
基

山裏雄斎和尚還去也虚空

咬牙知它耳得続山千古貴不葛當頭

暗恁麼事

右大徳寺開山特賜興禪大燈高照正灯國師之眞蹟也  
後生之者不可疑之也慶長四年夷則日

帗内横一尺六寸五分竪一尺三寸六分上下浅黄之絹  
中風帶紺地ノ金紗一文字香地印金

八月廿四日知首座持参申候名印無之其上常ニ

見申候大燈ヨリモ手蹟ハタラキ見事候大燈トハ

難申候コトノ點アリ手蹟李叔太首座事

落墮候テ書被申候カト相見候

記述によると江月はこの墨蹟を偽筆であるとしており、その作者を李太首座が落墮して書かれたものであると推定している。書かれる内容から尊経閣文庫が所蔵する墨蹟と合致する。ただし墨蹟の十一行目より十三行目の部分には

右大徳寺開山特賜興禪大燈高照正灯國師之眞蹟也

後生之者不可疑之也慶長四年夷則日

とあり、この部分は現在、尊経閣文庫が所蔵する墨蹟に書かれていない。しかしながら墨蹟に付属する添状(図86)では、この二行の記述があり、当初は存在したが、前田家において、もしくは前田家が入手する以前に切断されたものと考えられる。

本墨蹟には添状(利常の書状の写し)が付属する。添状(図87)には以下のような記述がある。

明日用意出き候や

此かけもの大とう候

間つかわし申候 かしこ

二月二十二日

出雲まいる 中納言

記述から前田家に伝わった本墨蹟は利常の時代、一度は家臣に下賜されたが、後年再び前田家に献上されている。収納される箱の蓋には墨書で「進上 大燈御掛物 前田出雲」とあることから、利常の家臣であった前田出雲守貞里に下賜された墨蹟であることが判明する。貞里没後に再び前田家に遺物として献上された墨蹟である。

このような大名の所有であったものが、家臣へ下賜された例は、『墨蹟之写』中、伊達政宗(一五六七―一六三六)の所有した宗峰妙超墨蹟においても確認することができ。『墨蹟之写』(元和七、墨蹟之写卷二十)には伊達政宗の所有した墨蹟が記述される。

「獲殊吟 關南長老」の書き出しから始まる墨蹟では以下のような記述がある。

前方金龍院ニ大燈アリシガ正宗へ参候ヲ疑キ物トテ内衆へ

ヤラレタト云サタアリ若左様ノ文字テハ無之乎金龍院ノモ

不見候

記述によると、書き出しが「獲殊吟」から始まる墨蹟とは別に、大徳寺の金龍院に所蔵された宗峰妙超墨蹟を伊達政宗が所有したが、偽筆と判明し、近習のものに与えられたことが述べられる。当時の武家、特に大名において宗峰妙超墨蹟は、収集の対象となっていたことが判明する。

### 将軍家から下賜された宗峰妙超墨蹟

第二章では『徳川実紀』中、将軍家から下賜された宗峰妙超墨蹟について三件の記述があったことを述べた。ここでは将軍家から御三家への下賜に注目する。

徳川家綱の遺物下賜の場合では<sup>261</sup>、御三家筆頭の尾張徳川家には栗田口吉光の刀、虚堂智愚墨蹟が下賜されている。次に紀州徳川家には來国次の刀と虚堂智愚墨蹟が下賜されている。また水戸徳川家には栗田口国吉の刀と宗峰妙超墨蹟が下賜されている。このことから御三家には徳川家所蔵の刀と墨蹟がそれぞれ下賜されている。下賜された墨蹟は尾張、紀州家には虚堂智愚墨蹟であるものの、水戸家には宗峰妙超墨蹟と家格に応じての下賜である。ここで将軍の遺物を下賜する場合、『徳川実紀』における記述を一覧にしたものが【表11】である。序列としては尾張家、紀州家、水戸家の順であり、下賜される品目にも差があることがわかる。徳川将軍家において宗峰妙超墨蹟の評価はあまり高くないといえる。

徳川将軍家における宗峰妙超墨蹟の評価について検討するため、将軍による茶会で使用された掛物に注目する。そこで将軍による茶会で用いられた掛物を一覧としたのが【表12】である。将軍の茶会の記述では『徳川実紀』、『東武実録』、『公方様御茶会』（小堀宗中による写本）<sup>262</sup>を参照した。これらは秀忠、家光時代の茶会の記録である。用いられた掛物の筆者をみると虚堂智愚、圓悟克勤など中国禅僧の墨蹟が大半であり、日本人では一休宗純と藤原定家のみである。

『家綱公茶道御道具』中、「御掛物」には「大燈」とあり、当時の将軍家が宗峰妙超墨蹟を所有していたことがわかる。『家綱公茶道御道具』の「御掛物」に掲載される道具は正保三年（一六四六）以降に献上された品である。明友は父、明成の遺物である墨蹟を寛文元年（一六六一）に献上した。将軍家ではこの墨蹟を明暦三年（一六五七）の明暦の大火後に城内山里に立てられた銅御蔵で所蔵していた。『家綱公茶道御道具』に所載される墨蹟は、加藤明友による献上品であったと考えられる。しかし所載される墨

蹟の大半は虚堂智愚など中国禅僧の墨蹟である。

先述の御三家への下賜や、將軍による茶会で使用されていない点から宗峰妙超墨蹟の評価は虚堂智愚墨蹟と比較すると、重要視されていなかったことが判明する。

では献上した大名家においてはどのように評価されたのであろうか。大名家が將軍家に献上した掛物のうち、宗峰妙超墨蹟は四件がみられた。これらは加藤明成、松平長矩、本多忠義、酒井忠挙の所蔵による墨蹟である。以上、四家について、その背景を検討することで、大名家における宗峰妙超墨蹟の評価を明らかにしたい。

### ①加藤明友の場合

『徳川実紀』の記述から加藤明友が父、明成の遺物であった宗峰妙超墨蹟を献上していたことが判明する。献上された日付に注目すると、寛文元年（一六六一）六月二十四日である。宗峰妙超墨蹟を所有した明成は萬治元年（一六六一）一月に死去していることから、その直後の献上である。將軍家に献上された宗峰妙超墨蹟は加藤明成遺物として紹介されている<sup>263</sup>。加藤明成は会津四十万石の領主であったため多数の道具を所蔵したと考えられる。明成は、『寛政重修諸家譜』によると幕府に隠居と領地の返還を願い出て、祖父、加藤嘉明（一五六三ー一六三一）が旧勲を納めた地である水口一万石を領する。嫡子明友は水口を領し、父明成もそこで隠居した。幕府に隠居と領地返上を願い出る以前、明成は会津騒動を起こした。会津騒動とは、家臣の堀主水と弟らが藩主である明成との確執により出奔した際、明成は追っ手を差し向け主水らを殺害したことがある。

明成没後の寛文元年（一六六一）六月に、子の明友が宗峰妙超墨蹟を將軍家に献上している。『寛政重修諸家譜』によれば、献上してから四年後の寛文四年（一六六四）四月五日に家綱より領地の朱印が出ている。会津騒動後、加藤家では領地一万石となった。宗峰妙超墨蹟の献上は明友による襲封の礼と所領安堵のためと考えられる<sup>264</sup>。

当時の跡目相続のため、大名が將軍家に物品を献上する際、茶の湯道具が活用された事例は小堀正恒家がある。小堀正恒（一六四九ー一六九四）は元禄七年（一六九四）正月二日に没したため、跡目相続の準備ができていなかった。当時の状況が判明する資料として『里井自休年月記』がある<sup>265</sup>。本書は里井自休<sup>266</sup>によつて書かれた小堀家の記録である。『里井自休年月記』によれば元禄七年（一六九四）三月十五日条には以下のような記述がある。

一 三月一五日御登 城御継目之御礼被 仰上阿部豊後守様御

取持被遊 御前御首尾能相済候由

公方様江御太刀目録

黄金五枚  
御小袖

御女中

右衛門佐殿

白銀五枚



御台様江

白銀五枚

尾上殿 同二枚  
高瀬殿 同二枚

松江殿 同二枚

おてる殿 白銀二枚

御表使四人江白銀

一枚つつ何れも常是包ナリ

一 一文字ノ御腰物代金拾壹枚 和泉守様御遺物

一 上野両御佛殿 白銀二枚 一枚つつ

一 御老中様方江御遺物大久保加賀守様江高木貞宗御脇指代金

八枚、阿部豊後守様江唐物富士山御茶入、土屋相模守様へ一

字一錢ノ御かけ物、戸田山城守様へ定家僧次第御かけ物、牧

野備前守様へかね中かふら花入、柳沢出羽守様へ蒔絵蝶ノ文

台

以上の記述から、正恒没後の小堀家では、正房跡目相続の見返りに將軍家および幕閣の要人に金子または伝来の道具を献上、譲渡した<sup>267</sup>。このような献上は取りなしの御札を意味しており、当時行われた跡目相続等を目的とする献上の性格を示している。加藤明友にみた宗峰妙超墨蹟の献上も、このような取りなしを意味することが判明する。

## ②松平長矩の場合

加藤家でもみたように、家督相続の御札のために將軍家への献上品として宗峰妙超墨蹟を献上していたが、このような例は外にもある。たとえば『松平家譜』の元禄十一年（一六九八）十二月六日条には次のような記述がある。

拝領の初花の御茶入、且大燈の墨蹟一軸献上仕候

記述によると、元禄十一年（一六九八）に松平備前守長矩が初花肩衝と宗峰妙超墨蹟を將軍家に献上していることがわかる。この背景には松平長矩が美作津山城主となったとき、越前松平家が復興したことによる茶入と墨蹟の献上であると考えられる。このとき、当時松平家が所蔵した宗峰妙超墨蹟も献上されている<sup>268</sup>。松平家の献上は家の復活に対する御札を意味する。

## ③本多忠義の場合

本多忠義（一六〇二―一六七六）の場合をみてみたい。『徳川実紀』の記述では寛文二年（一六六二）十二月五日、本多忠義が隠居を願い出るとき、左文字の脇差と宗峰妙超墨蹟を將軍家に献上している。この条では得物とあり、忠義自身が所持していた墨蹟である。本多忠義は井戸茶碗《喜左衛門》（孤篷庵蔵）を所持しており、名物道具を所

藏した。

致仕による大名の献上では【表5】がある。大名家から將軍家に献上された墨蹟をみると、中国人禪僧として虚堂智愚、南堂清欲、無準師範、月江正印などがおり、日本人では藤原定家と宗峰妙超がいる。大名家において宗峰妙超墨蹟は献上品としての格を有する掛物として認知されていたと考えられる。

#### ④酒井忠挙の場合

『徳川実紀』中、元禄十二年（一六九九）八月九日、酒井忠挙は將軍家へ宗峰妙超墨蹟を献上している。忠挙は元禄十一年（二六九八）二月十五日に大留守居となっている。任官の直後の献上であることから、この献上は任官御札であったものと考えられる<sup>269</sup>。

以上から、大名からの献上された宗峰妙超墨蹟では加藤家、本多家、松平家、酒井家があった。これら各家の献上した墨蹟は、元来、献上した藩主自身が入手した場合、もしくは家祖伝来の墨蹟であったと考えられる。大名家において、宗峰妙超墨蹟は遺物や致仕の献上品として機能した。献上の目的は所領安堵、官位昇進の御札のためのものであることが判明する。献上された宗峰妙超墨蹟の評価を検討するとき、酒井家の場合、宗峰妙超墨蹟および刀剣、藤原定家色紙の献上に対して、將軍家から五千両が対価として下賜されており、相当の評価があったことが判明する。

#### 大名における宗峰妙超墨蹟の評価の背景 遠州の場合

『徳川実紀』では大名による宗峰妙超墨蹟の献上が確認でき、各大名家においては所領安堵や任官御札のため献上していた。大名家が宗峰妙超墨蹟を重要視する背景はどのようなものであったのであろうか。ここでは將軍家や大名家の茶の湯と関係した小堀遠州と片桐石州を中心に、宗峰妙超墨蹟との関係を検討する。

小堀遠州が所持した宗峰妙超墨蹟は『遠州蔵帳』「毛乃御長持」<sup>270</sup>から一件確認できた。遠州と交友のあった人物中、宗峰妙超の墨蹟鑑定では江月宗玩が大きく関係している。遠州は宗峰妙超墨蹟などの墨蹟を鑑定のため江月のもとへ持ち込んでいる。このような交渉は、江月による『墨蹟之写』（慶長十七壬子 墨蹟之写卷二）中、「一段大事因縁空劫已前」からはじまる墨蹟について以下のような記述がある。

ヤナナ半兵衛ヨリ来小遠州取ツキ為真筆ト点ヲシテ遣候也

また、『墨蹟之写』（断簡卷一、一ノ一一、一二）に「他日の有此知行」とする墨蹟について「一五日小遠州持来候」の記述があり、遠州は、宗峰妙超墨蹟を鑑定のため、江月のもとへ持ち込んでいたことがわかる。このような鑑定およびその取り次ぎのほか、遠州は宗峰妙超墨蹟の表具に関係した。遠州が表具に関係した宗峰妙超墨蹟では『遺偈』

(図27)がある。この墨蹟が収納される箱には、江月宗玩により金粉の隸書体で、甲部に「開山国師辞世」とあり、箱裏には以下のような記述がある。

開山国師辞世頌表楷繪小堀氏宗甫改之寄附之寛永壬午年二月二十二日 大徳寺住  
山江月叟誌

記述から寛永十九年(一六四二)、本墨蹟は小堀遠州により表具がし直された、表具寄進であったことがわかる<sup>271</sup>。

遠州は、宗峰妙超墨蹟を自身が所持し、当時、鑑定のために取り次ぐだけではなく、江月との交流から、大徳寺が所蔵する《遺偈》墨蹟の表具をし直すなどの墨蹟との関係がみられた。

### 遠州の周辺における宗峰妙超墨蹟

遠州自身の茶会での使用は確認できなかった。ただ遠州の周辺では、親交のあった土浦藩二代藩主、土屋政直(一六四一―一七二二)の茶会での使用が確認できる。政直の茶会記録をまとめた『土屋政直茶会記』中、「十二月十二日相州様御茶湯」では掛物に「大燈」とあり、当時の土屋家が所蔵した宗峰妙超墨蹟が用いられたことがわかる<sup>272</sup>。

遠州の周辺において、宗峰妙超墨蹟を所持した人物をみてみたい。『墨蹟之写』や『茶器名物図彙』に所載される宗峰、徹翁、一休による三筆墨蹟は天野屋寛甫が所有した<sup>273</sup>。この墨蹟はその後、針屋宗春、茶屋四郎次郎が所持している。両者は正保三年(一六四六)七月十九日、遠州が催した朝会の客として招かれている<sup>274</sup>。このほか遠州の茶会に招かれた客としては岸辺屋宗府がいる。遠州が正保三年(一六四六)七月十六日に催した朝会に、宗府が客として招かれている<sup>275</sup>。宗府は『墨蹟之写』(寛永二十拾年 癸未 墨蹟之寫卷四十七)によれば、「春陽<sup>氏</sup>茶」からはじまる宗峰妙超墨蹟を親の代から所有したという。このように、遠州の元に集う武家や有力な商人などによる宗峰妙超墨蹟の受容をみることができる。

### 大名における宗峰妙超墨蹟の評価の背景 石州の場合

『石州過眼録』には、石州のもとへ鑑定のために持ち込まれた宗峰妙超墨蹟五件が記載されている。このほか《与宗明大姉法語》(図19)にも石州の添状が付属していた。添状には以下のような記述がある<sup>276</sup>。

昨日御越之大燈国師之墨蹟

東海寺へ遣各相談仕候、春屋国師之

外題有之候上は、不及添状之旨被申候へとも

進て御所望之旨申入春沢和尚添状

被相調致候間、則墨蹟之家之

内へ入、墨蹟も只今返進仕候、猶得望

之時候、恐惶謹言

五月十五日

(花押)

(裏)

片桐石見守

伊沢隼人正様

人々御中

記述にある伊沢隼人とは、江戸幕府旗本である伊沢政信であると考えられる。彼の名は『寛政重修諸家譜』<sup>277</sup>や『干城録』<sup>278</sup>に記載がみられる。『寛政重修諸家譜』には寛文六年十一月十六日、先に菱御櫓下御茶屋の普請を奉公せしにより、時服羽織などを賜う

とあり、伊沢は、茶屋普請に関係した人物であったと考えられる。片桐石州との関係では、『片桐石州茶会記』において、霜月晦日之記の客に牧野佐渡守、牧野因幡守、牧野太郎左衛門らと共に招かれている<sup>279</sup>。石州と伊沢は茶の湯の交流や、先述の幕府の作事などに関係したと考えられる。

石州が行った茶会において宗峰妙超墨蹟を使用した茶会では、『隔蓐記』に記述が確認できる。『隔蓐記』は鹿苑寺金閣寺の住職であった鳳林承章(一五九三―一六六八)による記録である。同書には鳳林が石州の茶会に招かれたときの記録が所載されており、寛文七年(一六六七)閏二月の条には以下のような記述がある。

片桐石見守殿、而被請待茶之湯也。進甫興座元・元立・吉権此衆也。掛物大燈国師之墨跡也。茶入唐物之丸壺、盆立也。盆者四方青貝、人形之絵也。古田織部殿所持之茶入之由也。茶杓利休作、茶碗高麗、水指新敷伊賀焼

記述によると、このときの茶会では宗峰妙超墨蹟を用いている<sup>280</sup>。用いられる道具も、利休の茶杓や古田織部所持の唐物茶入丸壺を盆に据えて点前をしている。石州においては名物道具との取り合わせとして宗峰妙超墨蹟を用いていることがわかる。

遠州は宗峰妙超墨蹟を所蔵したようであるが、茶会での使用は確認できなかった<sup>281</sup>。遠州と宗峰妙超墨蹟の関係性は表具をし直すことや、墨蹟鑑定の仲介役となっていることにあった。石州は墨蹟の鑑定また、自身が所有したと考えられる宗峰妙超墨蹟を用いて、茶会を開催している。石州の茶会にみられたように、名物道具もしくは由緒のある道具と共に、宗峰妙超墨蹟が用いられている。

## 有力商人の所有

先述の「至道無難」から始まる墨蹟は本阿弥家が所有した墨蹟であつた。江月によれば、この墨蹟は本阿弥光仰時代から同家に伝来した墨蹟であるとされる。光悦の周辺においても宗峰妙超墨蹟は受容されたようである。光悦と交流した人物に千宗旦（一五七八―一六五八）がいる。宗旦は千利休の孫であり、幼少期は春屋宗園（一五二九―一六一一）のもとで喝食として過ごした。

千家では宗峰妙超墨蹟を所蔵したようである。このことは『元伯宗旦文書』<sup>282</sup>中、「寛永十年四月二十七日付 宗受宛」の記載にみえる。この書状は、宗旦から子息、宗受に送った消息である。文中、「少あん道具」のことが記される。記述の中心となる千少庵（一五四六―一六一四）は千利休の後、千家二世となった人物である。「少あん道具」とは少庵の所有した道具類を、宗旦が記憶を頼りに書いたものである。少庵が所持した道具には宗峰妙超墨蹟も含まれており、以下のような記述がある<sup>283</sup>。

一、大灯ノ墨蹟もアリ、太夫殿ニあり、それふつかニや候由候

記述によると、少庵の所持した宗峰妙超墨蹟は、その後、太夫殿すなわち福島正則（一五六一―一六二四）が所蔵したことが判明する。

宗旦自身は当時、存在した宗峰妙超墨蹟に関心が高かつたようである。売立目録中には宗旦による『碧巖録』中の一曲以下を書いたとされる二行書（図88）が掲載される。これは昭和十二年（一九三七）四月に大阪美術倶楽部で行われた藤田家の売立目録である『香雪斎藏品展観図録』に掲載されている<sup>284</sup>。本幅は宗旦と宗峰妙超墨蹟の関係を物語る資料であると考え<sup>285</sup>。

宗旦の周辺において、宗峰妙超墨蹟を所持した人物では弟子の山口了珠がいる。『江岑茶書』に所収される『巳ノ閏六月より茶ノ湯之覚』には了珠による茶会について、以下のような記述がある。

二月十三日昼 山口了珠 老父

宗五

一、墨蹟 大燈横物 書判有

老父とあるのは宗旦のことであり、宗旦を招いた茶会で、宗峰妙超墨蹟が用いられていることがわかる<sup>286</sup>。山口了珠は宗旦の高弟で『弟子衆控』<sup>287</sup>にその名が見え、宗峰妙超墨蹟を所有している点と宗旦の弟子であつた点から、当時の京の有力な商人であつたと考えられる。

## 『江岑茶書』における宗峰妙超墨蹟

宗旦の活躍した時代の宗峰妙超墨蹟の評価について宗旦の子息、江岑による茶会など  
の見聞録である『江岑茶書』に注目する。<sup>288</sup> 本書を中心に千家と宗峰妙超墨蹟につ  
いてみてみたい。江岑は宗旦の次男で、のちに表千家を成立させる。本書中、江岑が参  
加した茶会記などから宗峰妙超墨蹟を確認することができる。まず、『江岑宗左茶書補  
遺四』には以下のような記述がある。

十月十六日昼 周覚 後藤四郎三郎

一 墨蹟 大燈国師 立へ長キ物

印二ツ 炉印 四方印

表具織部 中ぬいしやこん地

ほか、『巳ノ閏六月より茶ノ湯之覚』には以下のような記述がある。

十一月十二日昼 芳春院へ 宗仁 宗林

一 墨蹟 大燈 杉原一枚二写也

以上、二回の茶会が所載される。これらの茶会記から当時、存在した墨蹟は「立へ長  
キ」墨蹟と、もう一方は「杉原一枚」とあることから横物墨蹟をさすものと考えられる。  
このような墨蹟が当時、江岑の周辺の茶の湯者によって所有されている<sup>289</sup>。そのほか  
の茶会では『万治二年より茶之湯覚』において、以下のような記述がある。

子ノ年五月 風炉

宗守へ 利兵 左吉

左助

一 大燈墨蹟

記述から宗峰妙超墨蹟を使用した人物に宗守、すなわち一翁宗守（一五九三―一六七  
五）がおり、宗守の茶会で使用されていることがわかる。このように千家の周辺や大徳  
寺における茶会で用いられていることが確認できる。

このほかの町衆では『墨蹟之写』に茶屋四郎次郎家の記述が記載されており、その内  
容は宗峰、徹翁、一休三筆の墨蹟であった<sup>290</sup>。同書には本阿弥家が所有したとする「至  
道無難」からはじまる墨蹟（図64）も記載されていた。茶の湯においてこれらを掛物  
として用いており、千家の茶の湯の流行と共に、受容が高まったとみることができる。

### 墨蹟の流行と似せ物

元禄年間（一六八八―一七〇四）に成立した『本阿弥行状記』は、光悦や光甫時代の  
ことが中心に記述される。『本阿弥行状記』（第四六段）において、当時の墨蹟の流行に  
ついて以下のような記述がある<sup>291</sup>。

惣て唐画または墨蹟類流行候故、段々値段上り候所、とかく画のかたよけいにて、

墨蹟は稀に御座候。此段目利人とも咄合候處、画は似せよく、書は筆意甚だむつかしく候故似調ひ難く候由。義政公御物の画の当時残、所々に有之候内には、似せ物も随分有之候と承り候。さ候へば高値の物は心得なくては、うかと調ひ難きものと被存候

記述によると、光悦や光甫の活躍した時代、墨蹟や唐画が流行し価格が高騰し、また、墨蹟や唐画の似せ物とする作品が多く出回ったことが述べられる。

宗峰妙超墨蹟の場合においても、似せ物は多く出回った。江月宗玩『墨蹟之写』（慶長十六辛亥 墨蹟之写卷一）では「新命龍山和尚」からはじまる宗峰妙超墨蹟が鑑定のために、江月のもとに持ち込まれた。江月の所見として以下のような記述がある。

右之墨蹟大燈也前萬江禾上二在之大佛之自性院

ヨリミセ二来候慶長十六二来候也外題在之月堂トヤラ

月英トヤラ云人ノ手跡ト萬江ヨリ云来候其人之

添状モ在之ト也添状ハ不来候爰元二久敷有テ正筆

ト云傳候ホト二定而可為其分候此節似物多ホト二

以正筆似タルも不存事候能々穿鑿候へと申遣候

其上切タル物ニテ

語ツキカヌルト云テヤリタリ

記述によると、この墨蹟は月英か月堂という人物の外題と添状が付属していたが、江月はこの人物について心あたりがないとのことである。また、この墨蹟はこれまで正筆であるとされてきたが、江月は偽筆と判断している。このような似せ物の宗峰妙超墨蹟が流通し、江月のもとへも持ち込まれていたのである。このような似せ物の墨蹟のうち、作者が判明していた事例がある。『墨蹟之寫』（巻二十）には以下のような記述がある。

八月廿四日知首座持参申候名印無之其上常二

見申候大燈ヨリモ手蹟ハタラキ見事候大燈トハ

難申候コト／＼點アリ手蹟李叔太首座事

落随候テ書被申候カト相見候

記述から、江月はこの墨蹟が李叔太首座によって作られたものと推測している。『本阿弥行状記』や『墨蹟之写』などの記述から、当時、墨蹟の似せ物は多数、存在したと考えられる。

第二期における特徴は、宗峰妙超墨蹟の受容が町衆と大名から將軍家にまで発展したことである。大名は家祖より伝来した、もしくは大名自身が入手したであろう宗峰妙超墨蹟を將軍家への献上品として用いていることが確認できた。

遠州と宗峰妙超墨蹟の関係では墨蹟の鑑定を江月に依頼するための仲介者であった。

また当時、遠州は大徳寺が所蔵した宗峰妙超墨蹟《遺偈》の表具寄進を行っており、そのほかの宗峰妙超墨蹟の表具にも関係した。遠州の茶会に招かれた人物は針屋宗春、茶屋四郎次郎、岸辺屋宗府がおり、彼らも宗峰妙超墨蹟を所有していた。このことから遠州の周辺において宗峰妙超墨蹟が受容されていたことが確認できた。

石州は『石州過眼録』の記述にもあるように五件の宗峰妙超に関係した。うち一件は当時、將軍家に存在した墨蹟であり、そのほかは寺院や大名家、民間において所蔵されたものと推測される。これらは見聞録としての記録であるが、鑑定のために持ち込まれた墨蹟も存在していた。石州の茶会において宗峰妙超墨蹟は一回の使用が確認できた。また、石州の茶会に招かれた伊沢氏は《与宗明大姉法語》（永青文庫蔵）を所有し、石州の周辺においても、宗峰妙超墨蹟は受容されていることが判明した。

### 第三項 第三期（江戸中期）

#### 武家の所有

酒井宗雅（一七五六一一七九〇）による茶会記では『逾好日記』（第二巻内）がある。同書には「掛物 大燈法語」として、五月十一日、夕、逾好庵の記録と、二月九日、正午、向屋敷の二回の記録がある。このとき使用された墨蹟は《夏日偈》、《興作偈》（図30）の双幅であると考えられる。

宗雅は松平不昧とも茶の湯を通じた交流があった。不昧が所有した墨蹟では『雲州蔵帳』の「上之部」にある《よねの文》（福岡市美術館蔵）や「中之部下之部」に所載される墨蹟があった。

ところで『逾好日記』に不昧から宗雅のもとに届いた書簡について、以下のような記述がある。

十二月二十三日

雲州よ梨来簡、被御口切道具付、懷石付到来如此

掛物 大燈ノ文

記述によると、不昧による口切茶会での道具組中、掛物では宗峰妙超墨蹟が用いられている<sup>292</sup>。「大燈の文」とは《よねの文》と考えられ、不昧による口切り茶会という主要な茶会で用いられた。

#### 民間の所有

これまでの調査および文献の博搜により鴻池家、山下家、谷家、冬木家の所蔵が判明した。鴻池家や冬木家は豪商であり、名物道具を多数所蔵した。茶の湯に関係した家では《日山之賦》を所蔵した山下裕也がいた。山下は千仙叟宗室（一六二二―一六九



七)との関係が深かった。このほか有力な商人が所有した宗峰妙超墨蹟では《与圓覚大姉法語》(図90。個人蔵)がある。この墨蹟および添状は『千里同風』に所載されている<sup>293</sup>。添状二通のうち覚々斎添状では以下のような記述がある。

大燈和尚

墨蹟表具も

利休好

付に玉舟和尚之

添状有之猶以

存候 御秘蔵

不宣

覚々斎

如上上句 (花押)

辻良有老

もう一通の太心義統、龍巖宗棟連名添状では以下のような記述がある。

大燈国師始于臨濟

徳山終于明月軒

墨蹟拝覧正筆

為明宣有秘蔵

者也珍重

禅楽寺

太心 (花押)

十月

寸松庵

龍巖 (花押)

辻良有老

記述から、辻良有が所持した宗峰妙超墨蹟は、利休の好みによる表具であり、玉舟宗璠の添状が付属することがわかる。覚々斎のほか太心義統および龍巖宗棟連名の添状も宛名は辻良有となっている。

添状の宛名である辻良有について『利休流茶道聞書』(秋田県立図書館蔵)の記述によると、良有は覚々斎の周辺にあって茶をよくした人物であると紹介されている<sup>294</sup>。千家茶道における宗峰妙超墨蹟の受容を考える場合、宗旦の弟子であった山口了珠の所有と同様に富商を中心に受容されたものといえる。

第Ⅲ期を通じてみた受容では第一に大名、民間における茶会での使用が確認できる。

当時、松平不昧による『古今名物類聚』や草間直方による『茶器名物図彙』の編纂が行われ、名物道具の名寄せが積極的に行われた。名物道具のなかには宗峰妙超墨蹟も加わったが、博物学的な姿勢が関心の高まりを助長させたものと考えられる。宗峰妙超墨蹟は財力を有する大名、有力な商人を中心に収集がなされた。その例は松平不昧、酒井宗雅、鴻池家にみることができた。

宗峰妙超墨蹟の金銭的な評価について、享保九年（一七二四）に成立した『微妙公夜話』中、梅溪の項において以下のような記述がある<sup>295</sup>。

年々に高値なる御道具に成候由今枝伊兵衛咄承り候

同書が成立した享保年間（一七一六―一七三五）当時では、価格的にも、以前の評価より高まりつつあったことが判明する。このことは先にみた、徳川将軍家や大名家の所有、大名自身による茶会での使用、千家を中心とした茶の湯の普及による有力な商人の所有によって、収集の対象となったためであると考えられる。

また、『茶器名物図彙』には大徳寺の虫干しに関する記述があり、当時、市中の人々が大徳寺の所蔵した宗峰妙超墨蹟の真蹟を拝見する機会があった<sup>296</sup>。また同書には一件ではあるが宗峰妙超墨蹟の図版が所載されており、筆跡への関心は高かったと考えられる。

#### 第四項 第二期（江戸末期）

##### 武家の所有

新発田藩十代藩主、溝口直諒は『日山之賦』（図26）を入手した。さきにみた同墨蹟の添状中、「翠濤入日記」において以下のような記述がある。

家傳乾坤入之古墨蹟除哥多しと云へ共利休箱書同人所持ハ無之此所稀世之道具最

秘藏ニ乾坤之所同様ニ取扱へし茶を嗜さるよりは必在輯置へし

記述によると、この墨蹟を乾坤入之部に匹敵する道具としている。

ところで直諒自筆による『名物重宝説』が東京大学史料編纂所に所蔵される<sup>297</sup>。本書には乾坤入之部について以下のような記述がある。

乾坤長持入之道具名物ニして家宝とする品也尤とも実の名物と右に準する品あり

共にみだりに用うべからず

記述から、乾坤入之部の道具とは、家祖伝来の道具であり、家宝とする道具をさす。直諒は『日山之賦』を、家祖伝来の家宝の道具に匹敵するものとして評価していた。直諒による茶会において『日山之賦』が使用された茶会では、弘化二年（一八四五）に行われた数寄屋披き（口切茶会）がある。直諒は天保九年（一八三八）に隠居し、その後は木挽町の幽清館で過ごした。現在、東京大学資料編纂所には『幽清館雜記』が所蔵さ

れる。『幽清館雜記』とは、幽清館における直諒の日常を家臣が記録した雑記である。同雑記の第五卷「茶会記抄」には「御数寄屋開にて初て御口切御茶会」（一八四五年十一月）の記述があり、茶会で使用された主な器物は以下となる。

掛物 大燈国師墨蹟 日山賦  
釜 古天猫阿弥陀堂 象眼入角鑑  
炭斗 ふくべ 石州在（判）  
香合 交趾象  
羽 三ツ羽大鳥  
灰器 新柳川ほうらく  
水次 砂張  
火箸、灰匙 松花堂所持  
花入 小堀遠州作 一重切 銘あまの  
水指 井筒形伊部  
茶入 大瀬戸（徳永肩衝）  
茶碗 井戸脇茶碗  
茶杓 古田織部作 共筒  
建水 木地曲  
蓋置 青竹

同書において掛物については以下のような記述がある。

年来御心かけにて書来候数寄屋開ニ付此御品御用ニ相成候古墨認賞玩いたし候第一之御品与申候

記述から、墨蹟の入手の目的は数寄屋開に伴い、口切り茶会を開催するために購入したものであることがわかる。直諒による「御数寄屋開にて初て御口切御茶会」は、十二月三日から開催された。『幽清館雜記』によると招かれた客は以下となる。

三日 松平佐渡守 本多上総介 鈴木宗栄 谷村長育 田中宗右  
六日 小堀静太郎 岡櫟仙院 鈴木林碩楚 川上宗寿  
八日 成瀬隼人正 鴨池元琳 谷村可順 桜山有泉 鳥羽屋道樹  
九日 竹腰兵部少補 小堀大膳 鈴木宗休 山勢検校

招かれた客から直諒による茶の湯の交流が判明するが、九日の茶会に招かれた客に注目すると、竹腰兵部少補、小堀大膳、鈴木宗休、山勢検校の四氏がいる。竹腰兵部少補は尾張徳川家付家老である竹腰正富（一八一八―一八八四）である。小堀大膳は遠州流八世、小堀宗中（一七八六―一八六七）である。鈴木宗休は幕府の数寄屋頭格である<sup>298</sup>。山勢検校（一七九一―一八五九）は山田流御三家山勢家初代家元である。小堀宗中は尾

張徳川家にも出入りし、徳川斉荘（一八一〇―一八四五）と交遊があった。宗中は尾張徳川家に入入りした関係から竹腰正富とも交遊があり、その関係から竹腰正富は直諒とも交流したと考えられる。

直諒の開催した茶会の記録では『溝口日向守様御茶事記』（小浜市立図書館蔵）がある。『溝口日向守様御茶事記』は、谷によると「溝口直諒ほかの茶会記」として紹介されている<sup>299</sup>。閲覧したところ、内容は溝口直諒ほかが行った茶会の記録である。そのうち、「庚戌六月十日於吟賞亭」とする茶会（図91）では以下のような記述がある。

庚戌六月十日於吟賞亭

正午時茶会 客 竹腰兵部少輔

山勢検校

鈴木宗休

同 宗栄

初坐

一 床掛物 大燈国師墨蹟

横物

物我両忘之頌

一 外題 澤庵 卷表粘紙

一 点字証文一卷之外題實堂

点字 澤庵

証文 同

同 天祐

同 玉舟

同 傳外

右一卷

一 外題点字証文之目録 一通

一 物我両忘之註智鑑 一枚

一 高桐院状 一通一色

宛名溝口出雲守

一 外箱蓋裏粘紙文別々写

記述にある茶会は庚戌、すなわち嘉永三年（一八五〇）六月十日に、木挽町、幽清館内の吟賞亭で行われた。席主は溝口直諒である。客は竹腰正富、山勢検校、鈴木宗休、鈴木宗栄である。さきの数寄屋開きの口切り茶会においては、小堀宗中が招かれていたが、この茶会では招かれていない。代わりにこの茶会では鈴木宗栄が招かれてい

る。

茶会当日、使用された掛物は宗峰妙超による「物我両忘之頌」とあり、付属していた点字証文などの巻物一巻や目録等の記述は、先述の《物我両忘》(図40)と合致する<sup>300</sup>。この茶会記は直諒が《物我両忘》を使用した茶会記である。点字証文などの付属品の記述があることから茶会の後に拝見に供されたと考えられる。《物我両忘》は溝口家の蔵帳中、「乾坤入之部」に分類されており、同家の家祖伝来の主要な墨蹟であった。

溝口直諒の茶会においては、数寄屋開き、および竹腰正富等を招いた吟賞亭における茶会での使用を確認できた。二件の墨蹟は溝口家において主要な扱いを受け、重要視される墨蹟であった。このことは松平不昧にみられた口切り茶会などの主要な茶会での使用と同様であり、この時期において茶の湯文化における評価の高まりをみることができる。

#### 第五項 第〆期(明治維新後)

明治維新後、大名家や古美術収集家においては所蔵品を売立により売却した。そのため市場には多数の美術品が流入することとなる。売立目録に所載される宗峰妙超墨蹟は【表2】に示した通りである<sup>301</sup>。

売立のほかにも、個人取引によっても美術品は移動した。新発田溝口家が所蔵した宗峰妙超墨蹟を、明治三十六年(一九〇三)に鳩居堂を介して、原三溪(一八六八・一九三九)が個人取引によって入手する。原三溪による購入品の目録である『三溪帖目録』(三溪園保勝会蔵)には

一 物我両忘五言律詩 一枚

大燈国師書

とあり、宗峰妙超による物我両忘の五言律詩墨蹟を購入している。三溪による記録から、個人蔵本(図40)と合致する。このような個人取引は、当時、多数行われたと考えられ、美術品が売立以外の方法で流出したと推測される。市場に流入した美術品を入手した新たな所有者とは、主に新興の財閥であった。また、新たな所有者は、入手した宗峰妙超墨蹟を茶会で使用したと考えられ、【表8】の茶会記をみると、この時期における茶会での使用回数が増加している。そのうち益田鈍翁による茶会での使用、『東都茶会記』では五回の使用が確認できる。また、畠山一清(一八八一・一九七二)は『即翁遺墨茶会日記』において自身の所有した宗峰妙超墨蹟を用いた二回の茶会と、益田鈍翁による三回の茶会を記録している。このような受容の要因は、茶の湯道具が博物館や展覧会などで展示されることが契機になったものと考えられる。たとえば《物我両

忘』は明治三十六年（一九〇三）の京都博物館における古美術展覧会において抹茶席の床の間に掛けられていた<sup>302</sup>。このとき用いられた道具は台子と皆具の諸飾りで、中興名物の瀬戸茶入《蚩》（畠山記念館蔵）に盆を添え、茶碗は天目茶碗で天目台が添えられており、格式の高い取り合わせである。また昭和十一年（一九三六）十月八日から十二日まで京都で行われた北野大茶の湯では、野村得庵（一八七八・一九四五）による碧雲台席に《白雲偈》（図31）が使用され、また太閤垣桐蔭席での多曾雅礼会による茶席に《仮名文》（図92）が用いられた<sup>303</sup>。また展覧会などでの公開と、茶の湯文化研究の進展とともにその評価が茶の湯や禅宗史における評価と相まって高まったものと考えられる<sup>304</sup>。

## 第六項 第一期から第〇期にみる寺院での宗峰妙超墨蹟の増減

第一期において《日山之賦》（個人蔵）は印可状の性格から日山を開山とする金剛寺に伝来したと考えられるが、『墨蹟之写』により寛文十二年（一六七二）以前に流出していることが判明する。このように元来、宗峰妙超墨蹟は大徳寺、塔頭寺院、末院、墨蹟を与えられた在俗の信者が所有した。大徳寺においては伝来した墨蹟が重書箱により判明する。薩摩の商人であった田中四郎左衛門が《物我両忘》（個人蔵）を永禄元年（一五五八）五月に大仙院へ寄進した墨蹟がある。その後、この墨蹟は再び流出している。このように当時の大徳寺および塔頭においては宗峰妙超墨蹟の寄進や流出があった。

第二期においては豪商による寄進がある。これは上田政郷が《夙》（九州国立博物館蔵）を禅隆寺へ寄進する場合、谷安殷が《一帆風》（個人蔵）を祥雲寺へ寄進する場合、西田作兵衛が《宗峰妙超墨蹟澤庵宗彭証明》（個人蔵）を撰津般若寺へ寄進する場合がみられた。そこで寄進者と寺院との関係をみてみると冬木家は雲林院の壇越、谷家は祥雲寺の壇越であった。西田家はそのほかに《一休禅師像》を酬恩庵へ寄進し、《関山恵玄墨蹟》を撰津般若寺に寄進するなどの例がみられ、篤志家であったと考えられる。このような寄進には宗峰妙超墨蹟が信仰の対象となっていたと考えられる。

第三期では寺院においては豪商からの寄進があったが、これらはその後、寺院経営上の理由により流出、もしくは、谷家にみられた寄進家の都合によって借用という名目で、返却される場合があり宗峰妙超墨蹟は所有者を移動した。

第〇期において、寺院からの流出では鴻池家が「大徳寺玉林院より購入した《溪林偈》、《南山偈》（正木美術館蔵）がある。

第〇期においては麻布祥雲寺が所蔵した《与宗圓道人法語》を馬越恭平（一八四四・一九三三）が入手している。

以上の寺院における宗峰妙超墨蹟は元来寺院が所蔵した墨蹟や寄進による墨蹟がある一方で、寺院経営上の理由により流出していることが確認できた。

## 第二節 初期茶の湯における宗峰妙超墨蹟

### 第一項 『山上宗二記』にみる宗峰妙超墨蹟

宗峰妙超墨蹟は、法語や偈頌墨蹟などの多さから、当初は大徳寺および子院や、弟子、在俗の信者が所持した。その後、天正年間（一五七三・一五九三）以後の茶の湯において掛物として使用されるようになった。このころの茶会において宗峰妙超墨蹟が使用された茶会は【表9】で示した。表から茶会で用いられる宗峰妙超墨蹟を多数みることができる。そこで初期茶の湯における宗峰妙超墨蹟の受容の背景について検討する。

宗峰妙超墨蹟について『山上宗二記』では、「大燈」の項をみると以下のような記述がある。

大燈之墨蹟 方々ニ可有四十幅・五十幅、其内從語様子、紙之中ニ善文字之可為名物也

記述の前半では、当時、宗峰妙超墨蹟は四十件から五十件存在していたことが述べられる。『山上宗二記』の筆者である宗二自身も、外題の筆者を宗峰妙超とする虚堂智愚墨蹟《達磨拈忌香語》（大徳寺蔵）を所有し、茶会で使用した。宗二の茶の湯の師である千利休も宗峰妙超墨蹟を所有し、自身の茶会で使用していた<sup>305</sup>。『山上宗二記』に所載の道具中、所有者をみると、寺院などではなく個人が主な所蔵者である<sup>306</sup>。従って宗峰妙超墨蹟は大徳寺などの寺院に所蔵されたものを除き、宗二が知りうる茶の湯者が所有していた墨蹟であると考えられる。

『山上宗二記』の記述の後半には「紙之中ニ善文字之可為名物也」とあり、宗峰妙超墨蹟のうち、「善き文字」の墨蹟は名物とされていた<sup>307</sup>。ただし、現存する宗峰妙超墨蹟のうち、宗二の活躍した時代から名物とされていた墨蹟は確認できていない<sup>308</sup>。

名物とは『茶道大辞典』によれば「茶道具で古来いわれのあるすぐれた器をいう」とされる<sup>309</sup>。茶の湯道具において名物とは、器物自体の評価、所有者による賞翫の歴史による評価がある。そのはじめりは相阿弥（一五二五年没）による『君台観左右帳記』である。足利將軍家では同朋衆の相阿弥が書院を飾り付ける掛物、立て花などの座敷飾りを担当した。『君台観左右帳記』に記載される掛物では、牧谿などの水墨画や大恵宗杲、無準師範などの中国禅僧墨蹟があり、当時日本にもたらされ重宝とされていた

掛物がある<sup>310</sup>。その後、珠光や武野紹鷗、千利休などの高名な茶人や、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康などの武将が所持した道具もその所蔵者により名物道具として伝来した<sup>311</sup>。名物について『山上宗二記』では以下のような記述がある。

御唐物不寄代之高下ニ、御床ニ厳ル御道具ヲ名物ト云

記述から、当時の名物は唐物を中心とするもので、床の間に飾られることが許された道具であった<sup>312</sup>。当時の床の間に飾ることができた道具は掛物や名物道具であった。掛物は主に中国禅僧の墨蹟が用いられている。また、その他では花入、香炉、場合によっては茶入などが飾られており、それは名物に準じた品であった<sup>313</sup>。茶会において、重要な掛物の扱いについて、寛永三年（一六二六）に発刊された『草人木』では以下のような記述がある。

大事の掛物なれば、茶の時かけて、会席の時は花などにてあひしらふ

記述によると、茶会をするときに用いる掛物が重要であれば茶を点てるときに用い、食事などのときに花入に花を入れて飾ることが述べられている。当時の茶会において、宗峰妙超墨蹟が重要な墨蹟として扱われた例として、『天王寺屋会記』における明智光秀の茶会をあげることができる。『天王寺屋会記』において、天正八年（一五八〇）十二月二十日朝の記録には以下のような記述がある。

床ニ大灯之墨跡、手水間ニかけて、但、花入ヲのけて

記述によれば、当日の茶会において光秀は、手水の間花入を外し、床の間に宗峰妙超墨蹟のみを掛けて茶会を行っている。このような掛物の使用方法から、光秀が宗峰妙超墨蹟を重要な掛物として扱っていることがわかる<sup>314</sup>。

## 第二項 宗二時代の茶の湯における宗峰妙超墨蹟

初期茶の湯において宗峰妙超墨蹟が用いられる背景はどのようなものであったのであろうか。天正期の初期茶の湯における宗峰墨蹟の評価を検討するにあたり『山上宗二記』では、当時、宗峰妙超墨蹟はその筆跡が評価され、善きものは名物として重宝とされていた。『山上宗二記』に所載される名物の墨蹟には圓悟克勤、虚堂智愚、圓照禅師（無準師範）、大燈国師（宗峰妙超）があった。このほかの墨蹟について、『山上宗二記』には以下のような記述がある。

大恵、密庵、智絶道仲、南堂、青拙、モクリン、インケツカウ、トクヒ、エセイカン、此他圓悟已来十九代ノ諸祖之墨蹟可有其数

記述では大恵宗杲、密庵咸傑、智絶道仲、南堂清欲、清拙正澄、古林茂清、月江正印、東陽徳輝、西巖了慧などの中国人禅僧墨蹟が名物であったことが判明する。宗峰妙超墨蹟は、以上にみた中国人禅僧墨蹟と同格の評価の高い墨蹟であった。



茶の湯において重要視される墨蹟を考えると、一休宗純の墨蹟が挙げられる。一休の墨蹟が重要視される理由は、珠光が一休に参禅し、圓悟克勤の墨蹟を譲り受けたため、圓悟の墨蹟と一休の墨蹟は重要視されるようになったと考えられている。『山上宗二記』には一休墨蹟の記述はない。ただし一休と珠光については圓悟墨蹟の項において、以下のような記述がある。

圓悟禅師之墨蹟 堺伊勢屋道和所持

右一軸ハ珠光一休和尚ヨリ被申請、墨蹟ノ懸始也。此外圓悟今一幅在堺ナラヤ宗也所持、又圓悟一幅在リ堺谷宗林所持、右之法悟ハ禅宗眼也、猶在口伝

記述から珠光が一休から貰い受けた圓悟克勤墨蹟を茶の湯において初めて掛けたことが述べられる。圓悟克勤の墨蹟はその後、将軍家において重要視され、将軍の茶会などで用いられている。このことは【表1-1】においても顕著で、秀忠や家光の茶会で用いられた掛物は圓悟克勤、虚堂智愚、一休宗純などの墨蹟である<sup>315</sup>。また将軍家から御三家への下賜をみると、やはり圓悟克勤、虚堂智愚などの主要な墨蹟が家格に応じて下賜されている。

珠光との関係から一休の墨蹟が重要視されたが、さらに重要視されたのが宗峰妙超であったと考えられる。

当時、日本には貿易によってもたらされた掛物や、既に日本に存在していた掛物が多数あった。ではなぜ宗峰妙超墨蹟が取り上げられたのであろうか。初期茶の湯における所有者をみると有力商人などが中心であった。これらの所有者は数多くの道具の中から、一つの道具を取り上げる目利きであったと考えられる。ここでは当時の目利きについて注目する。

ところで『長闇堂記』は江戸時代初期において久保権大夫（一五七一・一六四〇）が利休時代の茶の湯の周辺を記録したものである<sup>316</sup>。同書では目利きについて、以下のような記述がある。

数寄をたしなまん人ハ、ふたん茶独りたてましき物也、本客の時、かの自由おもはす出て見くるしき也、惣別、茶湯に上手浦山しからぬ物也、手く々つ、しな玉とりをみる心地せり、又、功者もうとましき物也、あふらしミしたる々むさけ者、只浦山敷は明利の人、作意ある人、是数寄の根本たるへし

記述によると茶の湯者にとって必須の条件は目利きをすること、道具の真価を見出すこと、見所を感得することであった。このような目利きの態度は既に紹鷗の時代においてもみられる。たとえば『紹鷗遺文』中、「又十体之事」には以下のような記述がある。

一、目聞

茶湯道具の事は不及申、目にて見る程の物の善悪を見分、人の調る程の物をしほらしく数寄に入て好事、専也

記述によると紹鷗は道具の善悪を見分けることを説く。そして「しほらしく」とある点について、永島福太郎は「さのみ奇麗すぎるのではなく、そのようなものを却つて悪しとして否定すらし、この「しほらしく」見える姿をよいとしているのは、たとえ物の萎れた姿に似ていても、その中に何か親しみをみつけるに似た心理が感じられ、強いて奇麗すぎるような完全さを保っているのではなく、人間としての真実感がこれに感じられるのを尊いとするのであった」と指摘している<sup>317</sup>。

その後、宗二はこの紹鷗の言葉を引用して『山上宗二記』において、目利きについて以下のように記述している。

#### 一、目聞

注二曰、茶湯之道具之事不及申、目ニテ見程ノ物ヲ善悪ヲ見分、人之詭程之物ヲシヲラシク数寄ニ入好事専也、目聞ニキラフコトハ、ムマキ物ニ似タル物ヲスク目聞ヲ嫌也

記述中、前半部分は『紹鷗遺文』の引用であるが、後半部分が宗二の私見である。宗二は、目利きにおいて嫌うべきことは「ムマキニ似タル物ヲスク」ことであるとしている。「ムマキ」とは「無紛物」とし、当時の瀬戸では唐物茶入に模した茶入が焼成されたが、このような似せた物を嫌ったと神津は指摘する<sup>318</sup>。また宗二は「善道具」について、以下のように記述している。

善道具ヲ持事、但珠光並引拙、紹鷗、宗易此衆心ニ被懸茶湯道具専也

記述によると珠光、紹鷗、利休らが評価した道具を善き道具としており、三者が所持した道具をそのまま尊重することにあつた。

当時、利休は【表9】の茶会記に記録が残ることからも明らかのように、宗峰妙超墨蹟を所持していた。茶の湯において宗峰妙超墨蹟が善き道具として、茶人に認知されていたと考えられる。

### 第三項 永禄年間に語られた宗峰妙超の人物像

宗峰妙超という人物の足跡は『大燈国師行状』において辿ることができる。このほか『大燈国師語録』では宗峰妙超の没後、弟子の性智らにより語録が集成された。語録中の弟子との問答や、公案などから宗峰の禅風を窺うことができる。

宗峰妙超の人物像は一休宗純（一三九四・一四八一）による漢詩を集成した『狂雲集』にみることができる。同書中、「題大燈国師行状末」がある。「題大燈国師行状末」とは一休の時代に編纂された宗峰妙超の行状記の跋文である。跋文には以下のような記

述がある。

挑起大燈輝一天、鸞輿競普法堂前、風浪水宿無人記、第五橋辺二十年

記述では宗峰は師の南浦から印可を証明され、二十年間の長養をしていた時期、四条大橋の下で乞食修行をしたとする伝承を一休が漢詩で詠んだものである。

また、永禄年間（一五五八・一五七〇）に存在した文献において、宗峰妙超について述べられているものでは『塵塚物語』がある<sup>319</sup>。『塵塚物語』の序文には「永禄つちのとのみの歳」とあり、すなわち序文は永禄二年（一五五九）に書かれた。『塵塚物語』には宗峰妙超について、以下のような記述がある。

建武之後大徳禅院大灯妙長（題）の令名世に比類なく王侯大人一人に帰依せしめたまふこれによつて五山大刹の長老も机前のちりをはらはん事をのそみ隠遁無為の尊徳もかへつて残盃の冷にしたかふ四海に鳴る雷霹のこしと云しかれとも門弟曾て大灯の心になかなひかく唯龍の勢ありておそるゝのみといへり、一日門弟議論せるに問説心に叶はざるに大灯立て首をうたれけるかあまりにつよく打擲せられて弟子をうちころされけるとなん

記述によると、当時、宗峰妙超は宗教者として、また大徳寺開山として名声があった。修行者としての宗峰妙超は、弟子が修行において問答するとき、弟子の答えが気に入らず殴打して打ち殺したことが述べられている。

『大燈国師行状』とともに、四条橋下における修行の様子や、弟子への応対など、これらの伝承が永禄年間（一五五八・一五七〇）において宗峰妙超という人物像を伝えたと考えられる。

先述の初期茶の湯において存在したと考えられる墨蹟では『物我両忘』（個人蔵）、『法語』（弧蓬庵蔵）、『綸旨無相』（大徳寺蔵）、『日山之賦』（個人蔵）、『至道無難』（『某家御所蔵品入札』に所載）、『秋風偈』（MOA美術館蔵）、『一曲偈』（個人蔵）、『古徳偈』（湯木美術館蔵）、『恵知客』（根津美術館蔵）、『初心始學』（尊経閣文庫蔵）が判明したが、これらにみる筆跡も横物の宗峰妙超墨蹟であった。また『綸旨無相』を除くと、宗峰妙超の筆跡として、その特徴がよく表されていた。このような筆跡と人物の評価、およびその行状が重なりあい、宗峰妙超墨蹟の受容へとつながったと考えられる。宗峰妙超が受容される基盤として、茶の湯においてこれまで述べてきたような筆跡への評価、その背景にある珠光、紹鷗、利休へと続く茶の湯道具への意識と、道具を取り上げる目利きが挙げられる。当時、宗峰妙超墨蹟が五十件程度存在したことに、茶の湯において評価されていた。このような基盤とともに信仰の側面も加わり、受容が拡大したものと考えられる。



## 第五章 おわりに

本研究では現存する墨蹟の調査から宗峰妙超の筆跡の特徴を検討し、新たに所在が判明した墨蹟との比較を行った。筆跡の検討では、これまでに閲覧した墨蹟から制作年代別の筆跡の特徴を明らかにした。

調査により新たに所在が判明した墨蹟では《一帆風》（個人蔵）、《与宗智大姉法語》（MIHO MUSEUM蔵）、《手抄二卷（断簡）》（個人蔵）、《物我両忘》（個人蔵）、《宗峰妙超墨蹟澤庵宗彭証明》（個人蔵）、新たに明らかにした添状では《日山之賦》（個人蔵）の添状など十件がある。

《一帆風》の制作年代としては三十年代後半から四十代前半の筆跡と推定した。また付属する添状から、本墨蹟は谷安殷が所蔵し、堺祥雲寺に寄進されたものである。その後、谷家の経営上の理由から墨蹟は返却されていることが判明した。

《物我両忘》（個人蔵）は明治期の記録から新発田藩主、溝口直正による茶会で用いられていた。同家の蔵帳を発見したことから、溝口家は《日山之賦》（個人蔵）も所蔵していたことが判明した。《日山之賦》はこれまで先行研究でも紹介される著名な墨蹟であったが、その添状について明らかにされていなかった。調査により小堀遠州をはじめとする添状など十件すべてを明らかにした。添状の記述から新発田藩十代藩主、溝口直諒が数寄屋開きの茶会のため、芳村観阿が仲介し古筆了伴から購入した墨蹟であることが判明した。

《手抄二卷（断簡）》（個人蔵）では丁数や筆跡から、芳春院が所蔵する《手抄二卷》のツレであることを明らかにした。

《宗峰妙超墨蹟澤庵宗彭証明》は句双紙を出典とする墨蹟である。この墨蹟は西田作兵衛が所蔵したが、その後は森本が所蔵した。作兵衛は天保七年（一八三六）に所蔵した《関山慧玄墨蹟》を般若寺に寄進している。この同日、かつて所有した《宗峰妙超墨蹟澤庵宗彭証明》も森本によって、同寺に寄進されていることが判明した。

宗峰妙超墨蹟の総合的な調査のため、売立目録に所載される図版、名物記、『徳川実紀』『大徳寺文書』の記述を調査した。売立目録では四千三百三十五件中、四千二百二十五件の調査を行い、百三十二件の図版を収集した。売立目録調査における成果は、先行研究において紹介される墨蹟の断簡画像を提示し、ツレであることを明らかにした。目録図版から新たに紹介した墨蹟では《一帆風》のツレ二件（図53、図55）、《手抄二卷》のツレ（図59）、《白雲集》のツレ二件（図57、図58）がある。このほか売立目録画像より提示した墨蹟は《禅語類聚膳写卷》（図63）、『墨蹟之写』に所載され

ている本阿弥家所蔵の墨蹟（図64）である。これらは今日現存が確認できない墨蹟であり、売立目録の調査により判明した。

売立目録において、当時の所有者を分類すると爵位を有する家、寺院、民間に分類できる。先ず、爵位を有する家では売立目録百三十二件中三十件ある。これらのうち旧藩主では十五件、十二家あった。これら以外では明治維新後に勲功のあった人物の所蔵があった。民間では豪商であった堺の廣岡家、新興の財閥では赤星家、八木家（騎牛庵）、このほか多くの道具を所蔵した金沢の能久治家、京都の雁半中村家、伊勢松坂町の長井家、益田信世などがあった。売立における所蔵者は総じて旧大名もしくは藩主、豪商であった家に伝来した場合と、売立目録所載の氏名のある人物によって収集された場合であったことが判明する。

名物記などに記載される宗峰妙超墨蹟の調査では、『茶器名物図彙』、『石州過眼録』、『遠州蔵帳』、『土屋蔵帳』、『中興名物記』のそれぞれに所載を確認した。

『茶器名物図彙』には三件の墨蹟が所載されていた。『石州過眼録』には五件の宗峰妙超墨蹟が掲載されるが、そのうち「敬春惜」の全文は『墨蹟之写』に所載されており内容が判明する。また、本墨蹟に付属したと考えられる添状が現在、永青文庫に保管されており紹介した。『中興名物記』には四件の墨蹟が所載されており、うち二件は大徳寺塔頭龍光院、雲林院の所蔵である。残り二件は辻家、後藤家であり有力な商人、町衆の所蔵であったことが判明する。

『徳川実紀』、『大徳寺文書』から、宗峰妙超墨蹟の所有移転について明らかにした。

以上の宗峰妙超墨蹟の総合的な調査から明らかとなった図版資料とともに、茶の湯文化における受容を検討するため茶会記を活用した。茶会記百七件、茶会総数一万五千三百二十七回から、宗峰妙超墨蹟が用いられた七十五回の茶会記を対象にした。先述した墨蹟の総合的な調査から判明した墨蹟および所有から、茶会記における記述との合致を試み、茶の湯文化における受容を第一期から第Ⅲ期に区分して検討した。

第一期において、宗峰妙超墨蹟を所有した大半は堺や京の有力な商人らであった。一部に武家の明智光秀や織田有楽の所有が確認できた。有力な商人による所有のうち田中氏による大仙院への寄進などがみられた。『山上宗二記』において約五十件の墨蹟が存在するとされたが、これは当時、宗二周辺の有力な商人が所有した墨蹟であると考えられる。当時の茶の湯における主要な道具所有者は堺や京の有力な商人らであった。織田信長の場合、有力な商人らの献上によって茶壺や茶入、中国禅僧の墨蹟などを所有した。信長の所有品や茶会では宗峰妙超墨蹟を確認できなかった。また、豊臣秀吉が北野大茶の湯において使用した掛物は虚堂智愚墨蹟であり、宗峰妙超墨蹟の所有や使用は確認できていない。つまり宗峰妙超墨蹟は堺や京における有力な商人により

収集された可能性が高く、評価された墨蹟であつたと考えられる。

第二期では江戸時代初期の宗峰妙超墨蹟について検討した。将軍家における宗峰妙超墨蹟の評価では、将軍家から下賜された三件の宗峰妙超墨蹟に注目した。綱重、綱吉兄弟では同格の下賜であつたが、御三家においては尾張徳川家、紀州徳川家、水戸徳川家の順に下賜される墨蹟にも格差があつた。将軍家において宗峰妙超墨蹟は、虚堂智愚ら中国禅僧墨蹟ほど重要視されていないことが判明した。献上された例では四件があり、遺物、致仕、任官御礼、所領安堵の献上がみられた。大名家においては、将軍家への献上品として宗峰妙超墨蹟が機能していることが判明した。このような将軍家と大名家の茶の湯に関係した人物では小堀遠州と片桐石州がおり、二者と宗峰妙超の関係について注目した。遠州は自身でも一件の宗峰妙超墨蹟を所有した。遠州は大徳寺所蔵の《遺偈》の表具改修に関与し、墨蹟の鑑定依頼を受けるなど、宗峰妙超墨蹟との関係には大きなものがあつた。石州も『石州過眼録』にみるように五件の墨蹟鑑定に関与した。

民間では本阿弥家などの所有と、その交流においても千宗旦による宗峰妙超墨蹟の受容、また利休や少庵による所有もあり千家における茶の湯のなかで、宗峰妙超墨蹟は受容されていたことが判明する。千家においては宗旦自身も大燈語録などを出典として、墨書を残している。宗旦の弟子では山口了珠が所有し、茶会での使用が確認できた。仙叟宗室と山下祐也、原叟宗左と辻良有などの交渉などからも明らかのように、以後の受容ではこれらの富商らにおいて受容された。また、墨蹟の流行は真蹟に交じり多数の似せ物が流通したことが確認される。

第三期の豪商における宗峰妙超墨蹟の受容をみてきたが、谷家、冬木家、西田家においては家と関係の深い禅宗寺院への寄進があることが判明した。豪商の場合、自家と関係する寺院への寄進が顕著にみられた。

宗峰妙超墨蹟の場合、当初はその筆跡が重要視されていたが、その後は筆者が宗峰妙超であることが重要となつた。そのため祖祿写本などが切断され掛物として用いられることとなる。このような例では谷家の所蔵した《一帆風》があげられる。この墨蹟は谷家によつて堺の祥雲寺に寄進されたが、筆跡の受容よりもむしろ法灯としての価値を認めたものとみられる。そして当初は一卷で存在した《一帆風》は切断され、そのツレが売立目録に二件所載される。このような事例は《白雲集》、《禅語類聚》、《林間録》、《禅語類聚膳写》、《句双紙》などでもみられた。

茶の湯を嗜んだ大名家では松平不昧や酒井宗雅がおり、多数の道具を収集した。不昧や宗雅による口切り茶会での使用は、宗峰妙超墨蹟が主要な茶会で用いられた例である。

第二期においては、溝口家が所蔵した《日山之賦》(個人蔵)と《物我両忘》(個人蔵)

が使用された茶会記に注目した。このときの当主は新発田藩十代藩主溝口直諒であり、『幽清館雜記』（東京大学史料編纂所蔵）、『溝口日向守様御茶事記』（小浜市立図書館蔵）により茶会記を明らかにした。溝口家において二件の墨蹟は重要な墨蹟として使用されており、当時の大名家における受容を明らかにした。

第4期においては、旧大名や豪商などが所有した美術品が、財政上の理由から流出する場合について論じた。このような流出は売立によるものや、個人取引による場合があった。売立によって流出した宗峰妙超墨蹟は、現在確認できる目録中、百三十二件であった。また、所有した者は総じて旧大名、豪商であった。【表8】の茶会記の動向をみると、初期茶の湯においては多数の宗峰妙超墨蹟が使用されたことが判明するが、その後は各家が所有したためか、茶会での使用回数は減少する。その後、江戸時代中期以降において、茶会での使用回数は増加している。これらの所有者をみると松平不味や酒井宗雅がいる。江戸時代末期では溝口直諒による茶会での使用が確認できた。明治期以降は、かつて宗峰妙超墨蹟を所有した旧大名をはじめ、古美術収集家によるコレクションが売立や個人取引により市場に流入したため、宗峰妙超墨蹟の所有者は移転した。新たな所有者は近代数寄者と呼ばれる人物らであった。そのため茶会での使用回数の増加をみることとなる。

茶の湯文化における宗峰妙超墨蹟の受容の背景については、宗峰妙超墨蹟が茶の湯の掛物として評価される『山上宗二記』を起点に検討した。同書において「善き文字」の宗峰妙超墨蹟は名物として、当時既に重要視され、文字に関する評価が高かった。当時、存在した墨蹟のうち現存が確認できる墨蹟を提示した。このような墨蹟を取り上げた茶の湯の目利きに注目し、宗峰妙超墨蹟が取り上げられた背景を検討した。当時、語られていた宗峰妙超という人物像について、一休宗純による『狂雲集』や、永禄二年（一五五九）の序文がある『塵塚物語』においてみることで、宗教指導者としての伝承と、筆跡が加味され受容されたことがわかった。このような評価の定まりは、その後の茶の湯文化においても享受され、茶の湯と大徳寺の禅の結びつきから評価を高めていくこととなる。宗教者としての宗峰妙超は、その後、白隠慧鶴（一六八六・一七六九）による語録を集成した『槐安国語骨董稿』<sup>320</sup>にもみられる。このほか『道歌心の策』<sup>321</sup>にもみられることから、伝承として伝わったと考えられる<sup>322</sup>。このような人物像とともに、その肉筆とする墨蹟、その筆跡に対する目利きも加わり茶の湯文化では掛物として受容されたと位置づけられる。



<sup>1</sup> 文化庁『国宝重要文化財大全』毎日新聞社、一九九七年。  
<sup>2</sup> 文部省教化局総務課『国立博物館編重要美術品認定物件目録』（内閣印刷局、一九四三）および同追加、官報において宗峰妙超墨蹟に関して重要美術品の認定を受けるのは墨蹟四件、画讃一件、手抄一件、加筆一件の計七件である。なお、『国立博物館編重要美術品認定物件目録』に記載される墨蹟は次の四件がある。

昭和12年2月16日

紙本墨書大燈国師仮名消息

一幅 中村貫之助

（建武元年十一月十四日）

昭和12年12月24日

紙本墨書大燈国師置文案

一幅 桂泰蔵

（元徳三年三月十一日）沢庵ノ紙中極アリ

昭和17年12月16日

大燈国師筆消息（三月二十二日）

一幅 服部玄三

昭和19年7月6日

宗峰妙超筆消息（恵知客下向云々）一幅 根津美術館

官報に記載される墨蹟は以下の三件がある。

昭和24年4月13日付 文部省告示第29号

絹本十一面観音像 大燈国師讃 一幅 真珠庵

昭和24年5月28日付 文部省告示第148号

藤原宣房消息 大燈国師加筆 一幅 平林寺

大燈国師筆手抄

二卷 芳春院

<sup>3</sup> 都守淳夫『売立目録の書誌と全国所在一覧』、勉誠出版、二〇〇一年。

<sup>4</sup> 江月宗玩『墨蹟之写』（影印本）、竹幽文庫蔵。

<sup>5</sup> 性智編『大燈国師参詳語』、一六二二年、国立国会図書館蔵。

<sup>6</sup> 竹貫元勝『宗峰妙超』、ミネルバ書房、二〇〇八年。

<sup>7</sup> 古田紹欽『大燈国師墨蹟』、河原書店、一九四九年。

<sup>8</sup> 前掲註（8）、五八頁。

<sup>9</sup> 国立博物館附属美術研究所編『墨蹟資料集』（第一・三輯）、秋葉啓、一九五一年。

<sup>10</sup> これらには「美術研究所」とあり、本書に使用される画像と一致する点から発刊前後、資料集収されたものと考えられる。

<sup>11</sup> 伊東卓治『書品（第四号）』（東洋書道協会、一九五〇）二一八頁。

<sup>12</sup> 伊東によれば《与宗圓禅人法語》（図7、根津美術館蔵）は「実に浅薄で、全くつくり字の如き感がある」として、筆跡について疑問を呈している。筆跡に関して疑問のある墨蹟として以下を挙げている。《与覚道人進道語》（常盤山文庫蔵蔵）は「うつし」、《恵知客》（根津美術館蔵）は「字の形は何れも大燈風と異なつて居り恐らく大燈であるまいと思う」、《与宗明大姉法語》（根津美術館蔵）は「双鉤かうつしという程度で真蹟とは受け取れない」、《解夏少参法語》（大徳寺蔵）は「書風は前後の一郡と必ずしも合致せず一応の考慮をようすべきもの」としている。

<sup>13</sup> 田山方南編『禅林墨蹟』（正篇）禅林墨蹟刊行会、一九五五年および田山方南編『禅林墨蹟』（続篇）禅林墨蹟刊行会、一九六五年。

<sup>14</sup> 田山方南『墨美』（第一六五号）、墨美社、一九六七年。

<sup>15</sup> 『書道芸術』（第一七巻、大燈国師・一休宗純）、央公論社、一九七五年。

<sup>16</sup> 田山方南編『禅林墨蹟・拾遺』禅林墨蹟刊行会、一九七七年。

<sup>17</sup> 木下政雄「高僧と美術（3）」『大燈国師真跡の意義』『月刊文化財（通号二六二号）』、三九四七頁。

<sup>18</sup> たとえば『書品（第四号）』（三頁）において、伊東卓治は田中親美と宗峰妙超墨蹟について以下のように述べている。

田中先生と墨蹟、殊に大燈墨蹟には殊に深い関心を持たれ、大燈国師は実にえらいもので、全墨蹟中の王者であるとまで極賞している田中先生の心酔に首肯が出来る。

<sup>1</sup><sub>9</sub> 倉澤行洋『珠光 茶道形成期の精神』、淡交社、二〇〇二年。

<sup>2</sup><sub>0</sub> 前掲註(3)。

<sup>2</sup><sub>1</sub> 本墨蹟が書かれた年代は、『大燈国師行狀』から宗峰二十六歳のときと判明する。

<sup>2</sup><sub>2</sub> 現在は卷子となっている。本紙寸法は二二<sup>2</sup><sub>セ</sub>、全長二六五<sup>2</sup><sub>セ</sub>である。

<sup>2</sup><sub>3</sub> 前掲註(15)、一九四・一九六頁。

<sup>2</sup><sub>4</sub> 筆者閲覧。

<sup>2</sup><sub>5</sub> 大本山大徳寺「大燈国師拾遺録」『大徳寺禅語録集成(第一卷)』法蔵館、平成元年)には本墨蹟の前半部分の記述がある。なお、本墨蹟の前半部分は、これまでのところ発見には至っていない。前半部分の墨蹟の内容について、以下のような記述がある。

地性大姉来参云予為参玄離卻鳩杖老母遠在京師多年母堂不耐其愛只要予常侍左右飢寒暖寒筵而予願力確乎終不從其命公春臥疾已帰寂請師為安名以此志以謝先靈之德育老僧乃云你不聞初發剃髮之偈棄恩入無為真実報恩者世間塵累癡愛相続入此出彼随縁浮沈随処流轉摧骨剥皮受五趣之苦疲

<sup>2</sup><sub>6</sub> 同年に書かれた墨蹟では『与宗悟大姉法語』(大仙院蔵)、《頂相》(妙心寺蔵)がある。

<sup>2</sup><sub>7</sub> 前掲註(15)、九六・九七頁。

<sup>2</sup><sub>8</sub> ほかの墨蹟中、明月軒と表記するのは『与明倫禅尼法語』(畠山記念館)があり、明月軒は宗峰の居室であるとされる。

<sup>2</sup><sub>9</sub> この墨蹟は『墨蹟之写』(元和三年丁巳、四冊之内上中下、墨蹟之写卷十)には以下のように掲載される。

古徳云

・ツギメ・

毫釐繫念三塗業因

警爾惜生劫萬劫羈鎖只

要直下休歇去見聞知覺

處便是安樂無事時節

穩察穩坐屈宅也可能

恁麼去喚男呼女坐起

經行大自在不可思議境

界与從上長拙秀才陳

操尚書李駙馬楊大年

把手俱行便是雖處在

家中則所謂火中蓮花

眞出家兒也泰綱居士

来受衣鉢上戒已做吾佛

一弟子求法号則名宗正紙

背寛个警策信筆及之

以塞其請大徳宗峰妙超

書于明月軒

奥少モライナシ春屋ノ外題有大灯国師眞蹟ト

有印ハナシ大灯正筆ト相見候春屋ノ外題モ

正筆ゾ

<sup>3</sup><sub>0</sub> この記述から江月は墨蹟および春屋による極め両方を真蹟としている。なお現在、この墨蹟には春屋宗園および伝小堀遠州筆による極め「たいとう」が付属している。

<sup>3</sup><sub>1</sub> 田山方南『続禅林墨蹟』禅林墨蹟刊行会、一九八一年、八三・八四頁。

<sup>3</sup><sub>2</sub> 本紙寸法は縦三二・七<sup>3</sup><sub>セ</sub>、全長八三二<sup>3</sup><sub>セ</sub>。全十七紙を継いでいる。

<sup>3</sup><sub>3</sub> 前掲註(15)、一八〇頁。木下は『看読真詮榜』の解説において以下のような記述がある。

大燈国師の墨蹟の中からこの看経榜に最も近い筆蹟特徴を示す作品を探してみると、

畠山記念館蔵の「与明輪禅尼法語」が浮かんでくる。ところで、この畠山記念館蔵の

法語は、その内容や署名肩書の仕方などから見て、妙超が満四十七歳頃の筆跡と考え

られるところから、この墨蹟もそれに近い頃と推定される。

<sup>3</sup><sub>4</sub> 前掲註(16)、七九・八一頁。

本紙寸法一一五・五<sup>3</sup><sub>セ</sub>、五六・七<sup>3</sup><sub>セ</sub>。

<sup>35</sup> 前掲註(13)、一九〇頁。篠原壽雄は本墨蹟の解説において、以下のように述べている。徹翁の二大字は、墨色はあくまで濃く、まことに堂々として、人に迫るものを感じせしめる豪気あふれる筆致である。国師の晩年の筆であろうが、この徹翁に托す国師の気迫が感ぜられる。

<sup>36</sup> 前掲註(13)、九五頁。田山は本墨蹟について以下のように述べている。

真珠庵所蔵の看経榜は、卷子本で大体建武中晩年の大作として知られているが、この墨蹟は即ち看経榜の筆致に通ずるを覚える。

<sup>37</sup> 国書刊行会『新纂大日本統蔵経』(第六九卷、一九八六年) 所収。

<sup>38</sup> 『碧巖録』中、第三七則「盤山三界無法」には以下のような頌がある。

<sup>39</sup> 三界無法。何處求心。白雲為蓋。流泉作琴。一曲兩曲無人會。雨過夜塘秋水深。

<sup>40</sup> 田山方南による『禪林墨蹟』正(一九五五年)、続(一九六五年)、拾遺(一九七七年)にも未収録である。ただ、田山は「一帆風」墨蹟の存在は把握していた。田山は大燈国師の命日にちなんだ大燈忌茶会を開催していた。茶会での使用を現在の所蔵家に依頼したが、田山が没したため、実現しなかった経緯がある。

<sup>41</sup> 表千家七代目家元如心斎、同十一代家元即中斎追善法要茶会が京都大徳寺で営まれた。三玄院における京都支部席の紹介では以下がある。(左海祥二郎編集『同門』増刊号、如心斎二百五十回忌即中斎二十三回忌特集、表千家同門会、二〇〇〇年、六四・六九頁)

本席

掛物 大燈国師筆 一帆風 祥雲寺伝来

虚堂並びにその門弟より

大應国師への餞別の抜録

付 大心義統、新井白石他

なお、同書において堀内宗心による解説がある。(「大燈墨蹟(日多ノ記)」と如心斎の禪、九八・九九頁)。

<sup>42</sup> 『茶道雑誌』河原書店、二〇〇〇年九月号・十月号、同年十二月号・二〇〇一年十一月の「如心斎聞書」に所収。ここでは、前掲註(10)の解説をさらに詳しく、墨蹟および添状の解釈の注解がなされる。添状は東海寺江西宗寛ら(二〇〇一年八月号)、新井白石(二〇〇一年九月号)のみが紹介される。また、谷安殷と新井白石の関係(二〇〇一年十月号)についても述べられる。

<sup>43</sup> 筆者閲覧。

<sup>44</sup> 四十三首本は花園大学所蔵本(請求記号W-11583)、六十八首本は関西大学所蔵本(請求記号L23-100-798)がある。

<sup>45</sup> 『玩貨名物記』(『茶道古典全集』第十二卷、淡交新社、一九六二年、一〇八頁)には次のような記述がある。

一 三ヶ月 堺 谷宗印

<sup>46</sup> 《与虎丘紹隆印可状》(東京国立博物館蔵)の前半部分である。

<sup>47</sup> 『東海和尚紀年録』(『史料大徳寺の歴史』毎日新聞、一九九三年、三八四頁)には次のような記述がある。

九月、到泉南、谷正安落祥雲寺、師応檀命而開堂供養、天祐作賀頌曰、泉南之居住谷氏正安、新創一字精舎、精舎已落成矣、粵拝請沢庵和尚大禪師、要令為開山祖、禪師固辞、正安慇懃敦請、禪師不獲已終隨其情

<sup>48</sup> 谷家が寄進した物品類は「祥雲寺什物掛物之目録」(小葉田淳編『堺市史』第三卷、堺市役所、一九七四年、三九四頁)によって判明し、圓悟墨蹟について以下のような記述がある。

祥雲寺什物掛物之目録

一 円悟墨蹟

(中略) 一幅

右祥雲寺什物也

<sup>49</sup> 仲町啓子「宗達筆松島図屏風考(上)」(『実践女子大美術史學十号』、一九九五年、一二・三四頁)によれば、澤庵が谷正安に与えた字号「海岸」に因み、正安が「松島図屏風」を祥雲寺に寄進したとされる。

<sup>50</sup> 伊藤克巳校訂『大仙院文書』、続群書類従完成会、二〇〇〇年、一五九・一六〇頁。  
<sup>51</sup> 「祥雲寺什物掛物之目録」『堺市史』第三卷、堺市役所、一九七四年、三九四頁。  
<sup>52</sup> 売立目録『某家所蔵品入札』、大阪美術倶楽部蔵、一九三〇年。  
<sup>53</sup> 現在の南浦の塔所は鎌倉建長寺内にある天源庵であるが、没後当時の塔所は龍翔寺である。

<sup>54</sup> 東京帝国大学文学部史料編纂所『大日本古文書 大徳寺文書之一』東京帝国大学文学部史料編纂所、一九四三年、四七〇・四七一頁。

<sup>55</sup> 溝口直正（一八五五・一九一九）。明治維新の大名。越後国新発田藩第十二代目藩主。第十一代藩主直溥の四男。

<sup>56</sup> 筆者閲覧。

<sup>57</sup> 圓悟克勤墨蹟「流れ圓悟」（または「与虎丘紹隆印可状」ともいう。東京国立博物館蔵）は、薩摩坊津に漂着したとされる。

<sup>58</sup> 橘氏については稲葉征雄『さつま人名辞典』（高城書房、一九九一年、一八〇頁）では次のような記述がある。

橘 薩摩監物 慶長五年 関ヶ原で戦没 一六〇〇年

<sup>59</sup> 欠伸会作『墨蹟之写』竹幽文庫蔵。

<sup>60</sup> 原田伴彦『動乱から秩序化へ』河出書房新社、一九八六年、一八頁。

<sup>61</sup> 熊谷直行、猪熊浅磨『旧儀裝飾十六式図譜』京都美術協会、一九〇三年。

<sup>62</sup> 宮武慶之「新発田藩溝口家旧蔵の大燈国師墨蹟―物我両忘と日山之賦を中心に―」『文化情報学』第九卷第一号、文化情報学会、二〇一四年九・一二頁。

<sup>63</sup> 京都美術協会『旧義裝飾十六色図譜解説書』京都美術協会、明治三十六年、二頁。

<sup>64</sup> なお、澤庵以下すべての添状は現在の所蔵家には現存しない。

<sup>65</sup> 『御掛物帳』新発田市立図書館蔵、請求記号S・07・9。

<sup>66</sup> 新発田古文書解説研究会、新発田市立図書館編『溝口伊織家古文書』目録第一集、新発田市古文書研修会、新発田市立図書館、二〇〇四年。

<sup>67</sup> 朝倉治彦監修『新発田藩溝口家書目集成』第一巻、ゆまに書房、二〇一三年。

<sup>68</sup> 浅倉有子、岩本篤志、原直史編『新発田藩道具蔵帳集成 二〇一・二・二〇一四年度科学研究費補助金基盤研究（C）「藩地域ア・カイブズの基礎的研究―新発田藩―を中心として」報告書』新潟大学人文学部原直史研究室、二〇一三年。

<sup>69</sup> 宮武慶之「御掛物帳にみる新発田藩溝口家の書画」『新潟県文人研究』第十六号、越佐文人研究会、二〇一四年、五九・一一九頁。

<sup>70</sup> 前掲註（16）。同書には、溝口家伝来とする大燈国師墨蹟が所載される。この墨蹟は法語墨蹟であり、『御掛物帳』にある「書簡」とはいい難い。また、所蔵した溝口家も新発田藩主家であるかは断言できない。

<sup>71</sup> 松下幸之助（一八九四・一九八九）。松下電気産業株式会社創業者（現パナソニック株式会社）。裏千家十四代家元淡々斎（一八九三・一九六四）に私淑し茶をよくした。西宮の自宅には名次庵、京都南禅寺近くには真々（いづれも小間）がある。なお真々は裏千家今日庵を写したものである。

<sup>72</sup> 前掲註（16）、一〇七頁。同書では「大燈国師墨蹟日山号 松下家蔵」と紹介される。

<sup>73</sup> 京都美術倶楽部編『京華』（京都美術倶楽部、二〇〇八年）二七八頁。このほかの茶会の使用では、財津永次氏によれば大燈忌茶会（於五島美術館）で用いられたとのことで、茶会当日のみ、当時の所有者である松下家から借用されたため、添状等の付属品は確認していないとのことである。

<sup>74</sup> 『書道芸術』（一九七五年）、木下政雄「大燈国師真跡の意義」『月刊文化財』一九八五年）でも紹介される。

<sup>75</sup> 『龍寶山祖師伝』花園大学蔵、請求記号≒33159。

<sup>76</sup> 展覧会図録『茶の湯と掛物Ⅱ・大徳寺の墨蹟を中心に』茶道資料館、一九八二年、一〇七頁。

<sup>77</sup> 中村昌正『茶道聚錦』（一九九九年、小学館）において谷端昭夫は、『日山之賦』墨蹟を紹介され解説を書かれている。そのうち、本墨蹟に付属する遠州添状に付いては触れられているが、その内容やそのほかの添状について明らかにされていない。

<sup>78</sup> このほか立花大亀により日山について記述した添状がある。

<sup>79</sup> 遠州の消息は未表装のままである。

80 井上新左については特定できていない。なお、井上新左衛門という人物については『新訂寛政重修諸家譜』（第十六卷、三三四頁）には大草公吉の項に次のような記述がある。

公吉

初公貫 三郎兵衛 実は井上新左衛門吉次が三男

161 売立目録『渋柿庵蔵品入札』、東京文化財研究所蔵。

162 井口海仙、永島福太郎監修『茶道辞典』淡交社、一九七九年、六頁

163 飯田國宏『東美ニュース』（五二号）。

164 筆者熟覧。

165 『平安人物史』によれば、以下のようない記述がある。

浦井隆屋 号有国又誹仙堂 中立売堀川東 浦井徳右衛門

166 禅学大辞典編纂所編『禅学大辞典』大修館書店、一九八五年、二四九頁、句双紙の項参照。

167 白寄頭成『藤村庸軒流茶書』、思文閣出版、二〇一二年、二九二頁。

168 道修町は薬種問屋が集中しており、西田氏も薬種を生業とした人物と想像される。

169 田中一松『田中一松絵画史論集』、中央公論美術出版、一九八六年、一九九頁。

170 般若寺が荒廃したことにより、什宝であった本墨蹟が、大徳寺に収蔵されたと考えられる。

171 「大燈国師墨蹟澤庵宗彭証明」（個人蔵）は一旦、般若寺の経営上の理由により放出されるが森本により再び般若寺に戻された。

183 内務省社会局『大正震災史』（上下）、岩波書店、一九二六年

184 前掲註（83）。

185 「広徳寺の什宝を盗む柔道二段の男」東京朝日新聞一九一八年十二月十二日第五面。廣徳寺が所蔵した宗峰妙超墨蹟は「二冊」とあることから、先の《白雲集》や《手抄二巻》と同様の祖録写本であると考えられる。この墨蹟は、盗難後、寺に戻されたようであるが、関東大震災によって焼失した。

186 宮武慶之「豪商における大燈国師墨蹟の受容―谷安殷旧蔵《一帆風》墨蹟を起点として―」、

『茶の湯文化学』第二十一号、一、一八頁、二〇一四年。

187 なお本調査は高梨学術奨励基金（美術史）および出光文化福祉財団の研究助成を受けた。

188 調査ができなかった八十六件の目録について国公立図書館での所蔵も含め、調査したが蔵書がなかったため現時点では調査ができていない。

189 クリステイーズにおいて、過去二十年間に出品落札された作品についてはウェブサイトで検索可能である。そのうち宗峰妙超、大燈国師などの語句を検索したところ本目録が該当したため、調査を実施した。

191 売立目録『池田清助氏所蔵書画屏風道具類入札』（東京文化財研究所蔵、一九一一年）に所載される。なお、本墨蹟は池田清助家の売立ののち、売立目録『土方伯爵某子爵家御所蔵品入札』（東京文化財研究所蔵、一九一六年）の目録でも確認できる。

192 売立目録『土方伯爵某子爵家御所蔵品入札』、東京文化財研究所蔵。

193 飯田國宏氏の教示によれば、大正十二年（一九二三）ごろ、当時の東京美術倶楽部が焼失したため、再建中は、東美倶楽部において入札会が行われたとのことである。

194 売立目録『益田信世氏所蔵品入札』、東京文化財研究所蔵。

195 図版から本紙の形態は左右の柱部分と上下部分に継ぎ紙がなされている。

196 高橋義雄『萬象録』高橋箒庵日記（巻一）、思文閣出版、一九八六年。

197 山本麻溪『古今茶湯集』木全宗八、一九一七年。

198 売立目録『甲南氏所蔵品入札』、東京文化財研究所蔵。

199 『和会の会』二〇〇九年秋号、東京美術倶楽部、二〇〇九年、三二頁。

200 『妙喜庵茶事道具料理扣』国立国会図書館蔵、請求記号832-178。

201 第二十回記念古美術茶道具展図録『茶美の会』、一九九〇年、正傳庵蔵。

202 黒本稼堂『稼堂集』（上）稼堂先生著書刊行会、一九三七年。

203 田中は大分県知事（一九一七年）、熊本県知事（一九二三年）を歴任した。

204 売立目録『書画美術品洋画展観入札売立会』、東京美術倶楽部蔵。

205 宗峰妙超による墨蹟中、句双紙は青年期に書かれたとする祖録写本の一種とみることができ、宗峰妙超の書風と合致しない。

206 売立目録『旧大名某家所蔵品入札』、東京文化財研究所蔵。

207 井口海仙、末宗廣、永島福太郎監修『原色茶道大辞典』、淡交社、一九七五年、八二六頁。

<sup>208</sup> このほか『旧大名某家所蔵品入札』がある。これらの売立目録に掲載される宗峰妙超墨蹟は各家に伝来した墨蹟であると考えられる。このうち肥前藩主の松浦家は宗峰妙超墨蹟を二件所蔵していたことが判明するが、もう一件は某家との合同入札のため、松浦家所蔵かは明らかではない。

<sup>209</sup> オークションカタログ『Japanese and Korean Art』、クリステイ・ズ・ニューヨーク、二〇〇四年。

<sup>210</sup> 山田哲也『唐物凡数』（同志社大学総合情報センター所蔵）、孤本名物記、その解題と翻刻『文化情報学』、二〇〇九年、六六・八二頁。

<sup>211</sup> 前掲註（116）。同書には以下のような記述がある。

阿波分

小茄子 奈良ソッケウみん小ナスビト云也

（中略）

一、虚堂ノ文字

一、大灯ノ文字

<sup>212</sup> 草間直方『茶器名物図彙』卷之十八「和漢墨蹟之部」、文彩社、一九七六年。

<sup>213</sup> 『墨蹟之写』「寛永十九 壬午年 貳冊内下 墨蹟之写卷四十六」。

<sup>214</sup> 伊藤敏子「茶人の書状」『茶道聚錦』第四卷、四六頁

<sup>215</sup> 小田栄作『茶道古美術蔵帳集成』卷一、国書刊行会、一九七七年。

<sup>216</sup> 『山上宗二記』には以下のような記述がある。

一、虚堂 一幅

堺山上宗二。此一幅ハ達磨大師七百年忌ノ枯ノ香也

記述から宗二が所蔵した墨蹟であることが判明する。同書では墨蹟の外題について以下のような記述がある。

虚堂墨蹟達磨忌七百年之拈香

應般若多羅之懺 嫩桂無差 破流支三藏之疑 詞鋒峻烈 縦此六宗斂影

正脉流通 一花五葉 滿地吹香 海豎山栴 咸霑聖澤 月良春小 莫莢五

敷 炷此兜慕 少伸攀慕 且道 大師還來也無 粹香云 不審々々

外題 虚堂和尚真蹟達磨忌拈香 大燈國師御筆

三好實休所持、其後本願寺家中へ渡、当代山上宗二所持也

記述から本墨蹟の外題は、宗峰妙超によつて書かれたとされる。

<sup>217</sup> 大徳寺において本墨蹟の外題を閲覧したところ、寸法は縦一二センチ、横三センチである。

<sup>218</sup> 菅原通斎『通斎美術ばなし』、淡交新社、一九六一年、一一・三四頁。

<sup>219</sup> 『松山肩衝』について、『大正名器鑑』では以下の様な記述がある。

神田源七所持

享保十八年丑五月十一日 支配人 松野茂兵衛 両人持来る二見る

手代 吉兵衛

<sup>220</sup> 筆者熟覧。横皺と共に、堅皺も多くあることを確認した。印は本文と末文の間にあるが、押されている位置関係から考え後印である。

<sup>221</sup> 平野宗浄校訂『増補龍寶山大徳禅寺世譜』、思文閣出版、一九七九年、三七頁。

<sup>222</sup> この墨蹟の伝来を整理すると以下のようになる。

連歌師宗長→真珠庵→（織田信長）→篠屋宗久→冬木弥平次→禅隆寺→雲林院→樽与左衛門→大坂某→平瀬露香→松岡忠良→井上馨→藤原銀次郎→藤原有三→東京国立博物館→九州国立博物館（現在）である。

<sup>223</sup> 『天王寺屋会記』の「宗及他会記」には以下のような記述がある。

天正三年二月三十日朝 京の篠屋宗久会 宗及一人  
大燈墨蹟かけて 但大ひらに

かたつき、持出て見せられ候、遅桜といふ壺也

此壺、始而見申候、なり悪候、かたひろく、そこ少き也、土 黒し、葉も

黒し、帯に筋あり、そこすりたる也

<sup>224</sup> 国書刊行会『徳川時代商業叢書（第一）』国書刊行会、一九一三年。

<sup>225</sup> 『土屋侯御道具帳』マイクロフィルム、請求記号 YD-古-3103、国立国会図書館蔵。

<sup>226</sup> 『土屋政直茶会記』『土屋家の茶の湯―土屋藏帳と大名家の茶―』、土浦市立博物館、一九九二年。

<sup>227</sup> 前掲註(124)に所載される政直の茶会中、宗峰妙超墨跡を用いた茶会は次の一回を確認することができる。

一 同十二月十二日相州様御茶湯新々囲長四疊

馬場五郎右衛門

道悦老

外村宗仙

鼠屋半兵衛

御家来

奥右衛門

一 掛物 大燈

<sup>228</sup> 『墨蹟并名物茶具記』マイクロフィルム、請求記号 YD - 古 - 3103、国会図書館所蔵。

<sup>229</sup> 田山方南『続禪林墨蹟』の解説には「附属 壬辰蠟月、竜睡宗章極狀一通、古筆了音極二通」とある。ただし、点字の記載はない。

<sup>230</sup> 小田栄作編『雲州家藏帳』『茶道古美術藏帳集成(上巻)』国書刊行会、一九七七年、三六六頁。

<sup>231</sup> 『御物及諸家道具』、慶応義塾大学図書館高橋箒庵文庫蔵。

<sup>232</sup> 徳川美術館編集『大名の茶の湯』(徳川美術館名品抄8)、一九九二年。

<sup>233</sup> 紀州徳川家旧蔵『徳海号』(個人蔵)について『禪林墨蹟拾遺』の解説の中、紀州家寛書三通のうち、「元禄十六年九月十五日淡輪半次郎口上一通」では「大燈之墨蹟、去々年御成之節、大殿様御拝領遊ヒ(以下略)」とあり、「徳川実紀」とその年代が一致する。従って、本墨蹟と考えられる。

<sup>234</sup> 『徳川家御道具帳』(茶道叢書182、請求記号 YD - 古 - 3102~3103、国立国会図書館所蔵)には以下のような記述がある。

元禄十一寅年十二月六日条

一、大燈国師墨蹟 松平備前守上

<sup>235</sup> 『柳宮山里之記』、慶応義塾大学図書館高橋箒庵文庫蔵。

<sup>236</sup> 矢野環『君台観左右帳記の総合研究』、勉強出版、一九九九年。

<sup>237</sup> 前掲註(144)、一四七頁。

<sup>238</sup> 『大日本古文書』家わけ第十七、大徳寺文書別集、真珠庵文書之一所収。

<sup>239</sup> 宮武慶之「大燈国師白雲偈小考」『野村美術館研究紀要』第二十一号、野村美術館、二〇一二年。

<sup>240</sup> 沽却された三件の宗峰妙超墨蹟のうち『白雲偈』以外の二件の墨蹟について詳細は判明していない。

<sup>241</sup> 後藤益勝について『寛政重修諸家譜』では以下のような記述がある。

初忠勝。生蔵或生三。縫殿允。慶長元年より東照宮につかえたてまつる。時に十二歳。のち大猷院に附属せられ、御側に勤仕し、のち父が家督を継、十九年大阪の役には東照宮にしたがひたてまつり、仰によりて大阪城に入り、和議の事をはからふ。元和元年の役には大猷院殿の御使として大阪におもむき、御陣所にいたり圓相前建の甲冑をたまり、五月七日も御陣に供奉す。寛永四年大猷院殿の御前にをいて恩命をかうぶるとき、益勝かつてより封禄をのぞまずとて其身の昇進を辞したてまつり、こふて致仕す。九月縫殿寮の口宣をたまわり、呉服司となる。今子孫その業を相統す。

<sup>242</sup> このほかの文献では、『本阿弥行状記』において益勝について以下のような記述がある。

台徳院様勝れたる名人ありやと御尋ね被成しとき、光室具に申上けるゆえ能く御存知被成、第一御秘蔵三吉正宗の拭ひを光瑤に被仰付度思召けれども、病人にて江戸まで罷越申事不叶ゆえ、後藤縫殿助に御腰物奉行衆付けられ、はるばる京都まで御登せ被成記述から益勝は刀剣についての鑑識も高かったようである。

このほか『大梁興宗禅師年譜』(寛永十年)によれば益勝について

洛有信士後藤氏、発願一新本山函丈、乃出家資巨万寄師、以告其志於山中諸彦とあり、益勝は、大徳寺方丈の寄進者でもあった。

<sup>243</sup> 谷晃『茶会記の研究』淡交社、二〇〇一年、巻末付録参照。

<sup>244</sup> 谷端昭夫『公家茶道の研究』(思文閣出版、二〇〇五年、三五頁)表1「茶会記に見られる

日本禅僧の掛物」参照。

<sup>245</sup> 『有楽茶亭湯日記』慶応義塾大学図書館高橋常庵文庫蔵。

<sup>246</sup> 秀忠裁定以降は現在も大徳寺に所蔵されている。表具も当時のままで補修された形跡はない。当時の持住であつた松嶽紹長は大徳寺を追放されている。

<sup>247</sup> 山田宗敏『史料大徳寺の歴史』、毎日新聞、三〇一頁。

<sup>248</sup> 坂本屋が所持していた宗峰妙超墨蹟を宗及は入手し、自身の茶会で用いたと考えられる。  
<sup>249</sup> 『天王寺屋会記』において長慶寺語首座は長慶寺語藏主とも記載され度々、宗及の茶会に招かれている。招かれた茶会は永禄十年十二月十五日朝、永禄十一年十一月二十二日朝、永禄十二年十二月一日昼、元二年十月二十二日朝の茶会である。

<sup>250</sup> 千宗室「天王寺屋会記」『茶道古典全集』第七卷、淡交社、一九五六年。

<sup>251</sup> 高橋常庵『大正名器鑑』第一卷、三七・四〇頁。

<sup>252</sup> この墨蹟の所有者は、宮幸三郎とあるが、当時の周辺状況から、宮王三郎と考えられる。先行研究では、利休と宮王三郎との関係は、利休の後妻、宗恩の前夫が宮王三郎である点を中心に述べられてきた。この本文から、茶会以外でも、宗峰妙超墨蹟の譲渡を巡る交渉があることがわかった。

<sup>253</sup> 利休による茶会で宗峰妙超墨蹟が使用された記録では「宗及他会記」(『天王寺屋会記』)に以下のような記述がある。

永禄十三年二月三日朝 宗易会 隆仙 道叱 宗及

床に墨蹟 大燈之 始めよりかけて

ほそ口 持ち出して袋を客人のまえにてぬかせて、客に見せられ候後

に薄板、こひいたし、すべて床へ上候

茶会記の記述から、当日は初座より床の間には宗峰妙超墨蹟が掛けられ、後座の濃茶になつても掛けられたままで、花入が持ち出された。

<sup>254</sup> 藪内家は剣中が利休と親交があり、妹が古田織部に嫁いだ関係もあつて茶の湯で重きをなした。剣仲は本願寺茶堂として仕えた。利休との交遊では、剣仲が茶室を立てた際、「雲脚」の扁額を贈っている。

<sup>255</sup> 『竹陰』(七十五号、平成二十五年三月、七四・七五頁)によると、この墨蹟の内容は以下となる。

即日柳弄暖梅生春敬惟高臥雲山

独居物表人生不顧萬戸候願一瀝韓荊

分爭奈殊途異轍未遂其心徒者慕高者

岱慕明者杪而已矣頓首再拜 宗峰妙超書印

<sup>256</sup> 鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料』旧記雑録後編六・附録一、一九八六、鹿児島県歴史資料センター黎明館、二二六頁。

<sup>257</sup> 『物我両忘』は大森宗巴から薩摩衆(田中氏、橋氏)に所有者が代わり、その後は大仙院に寄進されている。

<sup>258</sup> 「微妙公夜話」『改定史籍集覧(第二十六冊)』(臨川書店、一九九一年)一七一・一七二頁。

<sup>259</sup> 本紙寸法三十センチ、四十センチ。

<sup>260</sup> 古田紹鉄『大燈国師墨蹟』、河原書店、一九四九年。

<sup>261</sup> 高木文『柳宮御物集』(一九九三年)によれば萬治元年正月十五日に「一、大燈墨蹟 鐵壁ノ二字 松平伊豆守信綱ニ下サル」とあつて、大燈国師墨蹟《鐵壁》が下賜された記述がある。ただし他の資料から確認できない。

<sup>262</sup> 筒井紘一『茶書研究(2)』、二〇一三年、茶書研究会、三・三八頁。

<sup>263</sup> 加藤明成の父である嘉明は古田織部の弟子であつたといわれている。嘉明と織部との関係では慶長十八年に江戸において古田織部が、將軍であつた徳川秀忠の御成のとき茶会を催しているが、この時の相伴に「加藤左馬」とある。また嘉明は多くの器物を所蔵した。子の明成は茶の湯をたしなみ多くの器物を所蔵した様で、《小堀遠州書状 加藤明成宛》(大和文華館蔵)には

貴礼拝見仕候、かたての茶碗

今一度御覽被成度之由被仰下候、

先度、家之ふた付ちかへ御座候間、

かたてのちやわんと井戸茶碗と



二つながら御使へ相渡し進之候、  
井戸でのちやわんハ代式百貫と申候、  
京都より越候而、うりぬし別人ニて  
御座候、委細御使へ申渡候、  
恐惶慎言

二十四 正（花押）

小堀遠江守

（封） 加式部様 正

貴報

とあり、茶碗をめぐって小堀遠州との交渉があった。このように加藤嘉明、明成親子は茶の湯を嗜んだため、明成による収集中、宗峰妙超墨蹟を所蔵していたと考えられる。

<sup>264</sup>その後、加藤家では忠勤と善政が認められ天和二年（一六八二）に近江水口に新たに一万石を増され二万石となり、一時の転封はあったものの幕末まで続くこととなる。

<sup>265</sup>展覧会図録『遠州の数寄』（一九七八年、根津美術館編）所収。

<sup>266</sup>里井について、翻刻をされた熊倉功夫は解題中、里井が小堀家の家臣とも考えられるとされ、詳細については不詳とのことである。

<sup>267</sup>宮武慶之「閑極法雲東潤道洵両筆墨蹟について」『アート・リサーチ』第十四号、立命館大学アートリサーチセンター、二〇一四年、八九一〇四頁。  
<sup>268</sup>松平備前守が献上した墨蹟について『柳営山里之記』には以下のような記述がある。

一 大燈国師墨蹟 横物 元禄十一年十二月六日 松平備前守上ル

堅四尺二寸、横三寸六分

此表具一文字上代紗 中大阪蜀錦 上下薄茶純子

外題沢庵和尚

なお現在、この墨蹟の特定はできていない。

<sup>269</sup>元禄十二年前後の忠舉の動向に注目してみたい。元禄十一年七月五日、綱吉養女喜知姫の病気の事を翌日知らされる。このことは忠舉を刺激したようである。『徳川將軍側近の研究』において福留真紀は「忠舉は大留守居は老中に続く役職と位置づけられているようだが、老中は自分たちと忠舉をとりわけて違うように考えていると感じており、そのため指示が明確でなく、今後改善が期待できないと考えているのである。老中の態度に不満を示す一方で、だからといって勤めやすくなるよう柳沢（吉保）に指示を受けられますます老中が忠舉に対して隔心を抱くのではないかと老中への心証を気にする様子もみせている」とされる。

<sup>270</sup>益田孝、高橋義雄共編『遠州蔵帳図鑑』、実雲舎、一九三八年。

<sup>271</sup>茶道資料館『大徳寺近世墨蹟展』茶道資料館、昭和五十八年）「小堀遠州筆 天祐紹杲 書状」（三玄院蔵）には以下のような記述がある。

正便一書令啓候 貴殿

東行之節円鑑辞世

頌表具御寄進之儀

被仰置候 去月之末出来

記述から遠州によって表具寄進があったことがわかる。

<sup>272</sup>『土屋政直茶会記』には以下のような記述がある。

一同十二月十二日相州様御茶湯新々囲長四畳

馬場五郎右衛門

道悦老

外村宗仙

鼠屋半兵衛

御家来

奥右衛門

一 掛物 大燈

<sup>273</sup>覚甫が所持した宗峰妙超墨蹟に関する記述では『天王寺屋会記』（慶長四年三月十一日朝）に「覚甫 御会」があり、以下のような記述がある。

一てう半 いろいろに新釜うは口、五徳すえ、床に大とこの文字懸テ、手水の間に

文字を取て、かねの花生に柳と白玉生て、うす板にすわる、水指しからき、友蓋、肩衝、袋に入、今やき茶碗に道具仕入て、めんつう、引切、墨蹟は立に小長く、二くたり有て、奥書に大燈国師三轉とあり

大燈国師三轉語也

金龍山

實園

記述から覚甫は宗峰妙超の三轉語の墨蹟および三筆法語（「茶器名物図彙」所載）を所有したことになる。

<sup>274</sup> 小堀宗慶、田中博美「遠州口切帳」『茶道聚錦』（小学館、一九八三年）三〇〇頁。  
<sup>275</sup> 前掲註（178）。

<sup>276</sup> 『書道芸術』においても木下が紹介されている。

<sup>277</sup> 大田善磨『寛政重修家譜』第三卷、続群書類従完成会、一九六四年。

<sup>278</sup> 林亮勝、坂本正仁校訂『干城録』第一卷、人間舎、一九九七年。

<sup>279</sup> 栗田添星「片桐石州茶会記」『片桐石州の茶』、講談社、一九八七年、一四八頁。

<sup>280</sup> 町田宗心『片桐石州の生涯』（光村推古書院、二〇〇五年）では、この茶会を、客が禅僧であつたため、その源流である宗峰妙超墨蹟を用いたと解説されている。

<sup>281</sup> 小堀宗慶『小堀遠州茶会記集成』（主婦の友社、一九九六年）には、宗峰妙超墨蹟が使用された茶会が確認できない。

<sup>282</sup> 千宗左監修『新編 元伯宗旦文書』、不審庵文庫、二〇〇七年。

<sup>283</sup> 他の『宗旦文書』や関係資料から少庵の所持していた墨蹟特定することはできない。

<sup>284</sup> ここで「無」と「人」が逆になり、「夜」が「野」に変わっている点が指摘できる。ただし、「塘」は出典と合致する。

<sup>285</sup> MIHO MUSEUM編『永青文庫 細川家の名宝』（二〇〇二年、八八頁）には「澤庵宗彭書状 千宗旦宛」が掲載される。「澤庵宗彭書状 千宗旦宛」では大燈国師の教えを引用して処世の心得を説く内容となっている。

大燈之被仰事二  
浮世二居テ心安カ  
ラウト思ウハもゆる

火ノ中に居テ  
涼からふとおもう

程の事よと  
何がす々しからふ  
そ何が安からふそ

と 此事よきに  
御分別候へく候  
是ハ三界無安猶

如火宅之心ヲ  
しらしめんとの事  
にて候 よの中に

か々れとてこそ生れ  
けめ理しらぬ我  
涙かなと家隆之

詠吟是又珍に  
か様に申せハ法  
談に成候か様の

事も時に当て  
なくさむよしにも  
成とおもふ心ばかり

にて候  
かしく  
十月廿一日

（花押）

宗旦老 宗彭

<sup>286</sup> このほかの了珠の茶会では「霜月廿三日昼」の会があり、客は長渕、孫石、吉太であり、

掛物は、以下のような記述がある。

一、墨蹟 大燈 横物、廿一行有

名有

<sup>287</sup> 千宗左『江岑宗左茶書』、主婦の友社、一九九八年。

<sup>288</sup> 不審庵文庫『和比』第七卷、不審庵文庫、二〇一一年。

<sup>289</sup> 現在、芳春院が所蔵する墨蹟は『手抄二冊』と『二行物』である。芳春院で使用された墨蹟とは合致しない。芳春院住職、秋吉則州氏の教示によれば、同院では寛文八年（一六六八）に火災があり、二つあった蔵の内、一つが消失したとの教示を得た。そのとき該当する墨蹟も消失したと考えられる。

<sup>290</sup> 『墨蹟之写』（寛永十九壬午年、貳冊内下墨蹟之写卷四十六）には次のような記述がある。

此三筆ノ文字ハ矢嶋ヨリ覚甫所持而後什也宗春所持宗春ヨリ茶屋四郎次郎所へ方以霜月有今四郎次郎持来候間見候見申候徹翁大燈一休三筆共二見事也

この墨蹟は、大燈および、その弟子である徹翁義亨（大徳寺一世）、一休宗純（大徳寺四十七世）以上三人の墨蹟が一軸の紙本に収まっている。

<sup>291</sup> 日暮聖『本阿弥行状記』（平凡社、二〇一一年）第四十六段、一七八・一八〇頁。

<sup>292</sup> 不昧による『雲州蔵帳』によると、不昧の所持した宗峰妙超墨蹟『よねの文』は「金三十枚」と評価されている。

<sup>293</sup> 表千家同門会編『千里・同風』、表千家同門会、一九七八年。

<sup>294</sup> 辻に関してはこれまで資料が見当たらず詳細が明らかでなかったが、本書の存在によりその周辺が明らかとなった。まず、同書の序文によれば、良有は秋田出身であり、その後、京都の千丸屋に養子に出されている。最初は遠州流の山田某について茶を学んだが、後年には千家の茶を学ぶようになり、久田宗全の門人となった。その後、表千家六世となった覚々斎に茶を学ぶ。所有した道具として織部茶入があり、日毎茶を楽しんだとある。おそらく、覚々斎と年も近く茶友であり、そして千家を支えた庇護者であったことが想像される。

<sup>295</sup> 前掲註（165）。

<sup>296</sup> 墨蹟を拝見できる機会の拡大は、模本を生み出す契機になったとも考えられる。

<sup>297</sup> 溝口直諒自筆本『名物重宝説』、東京大学史料編纂所蔵、請求記号、溝口家史料・40。

<sup>298</sup> これらの交流のうち溝口直諒と竹腰兵部少輔との交流については、溝口直諒の自筆本である『茶説茶会略』（東京大学史料編纂所蔵）に、以下のような記述がある。

頃為茶会者僅存五氏、而已、竹腰兵部少輔・号無窮庵、三枝宗四郎号弧輪庵、岡田雪台・号素風庵、向井将監、小堀氏三人・大膳号宗中・静太郎号宗本・隼人号蓬露、就中間会者・只無窮・弧輪・素風・之三庵也、

記述によって、当時、直諒と正富は茶の湯を通じた交流があった。『溝口日向守様御茶事』の記述にある茶会も、両者の交流を示す茶会である。

<sup>299</sup> 谷見『茶会記の研究』、淡交社、二〇〇一年、付録参照。

<sup>300</sup> なお、『溝口日向守様御茶事記』（小浜市立図書館蔵）の記述から、『物我両忘』には高桐院住職による極め状が付属しており、宛名が溝口出雲、すなわち新発田藩四代藩主重雄であったことが判明する。

<sup>301</sup> 目録に所載される宗峰妙超墨蹟図版には明らかな偽筆が含まれている。

<sup>302</sup> 熊谷直行、猪熊淺磨『旧儀裝飾十六式図譜』、京都美術協会、一九〇三年。

<sup>303</sup> 北野大茶湯三百五十年記念大獻茶會『昭和北野大茶湯』（同会、一九三六年）によれば、使用された墨蹟について以下のような記述がある。

大燈国師墨蹟 仮名文 真珠庵伝来

外題 真珠庵宗賢 天倫和尚

箱書付 怡溪和尚

副状 大心和尚

<sup>304</sup> 幕末から明治維新における宗峰妙超墨蹟の評価として『名人古墨蹟時価録』に記述がある。本録は小野道風までの古い筆跡を網羅した価格番付である。初版は文化四年である。宗峰妙超墨蹟については釋氏部において

大燈 五メ目

とある。価格の五メ目とは五貫目である。当時、四目貫が金一両であったことから、宗峰妙超墨蹟が一・二五両であったことが判明する。同目録における価格で高いものから列举すると

園悟 六〇メ目

大恵	三〇メ目
虚堂	五〇メ目
南浦	六メ目
道元	同
大燈	五メ目
無準	同
明庵	同

とあり、宗峰妙超墨蹟の評価の程度が判明する。先の石州における『御道具調之覚』と同様に、圓悟や虚堂の墨蹟には傑出して高い評価があり、その他の古墨蹟には一様な評価があったことがわかる。

<sup>305</sup> 『墨蹟之写』所載および『天王寺屋会記』所載。

<sup>306</sup> たとえば虚堂智愚墨蹟は関白太閤の所有として所載される。

<sup>307</sup> 『山上宗二記』において墨蹟について「墨蹟之事」では、以下のような記述がある。

忽別墨蹟ハ第一ハ祖師、第二ハ語、其外様子次第ハ数寄入、代モ仕候者也、墨蹟之儀ニ多シ口伝、第一真筆見様在口伝

記述によれば、墨蹟において重要視したのは筆者、内容、文字であり、文字の真筆については口伝が存在したと書かれている。

<sup>308</sup> たとえば《風》（九州国立博物館蔵）は中興名物記に掲載される。当時、著名な墨蹟あったので、名物記に所載されたのであろう。

<sup>309</sup> 『茶道大辞典』淡交社、一一六二頁。

<sup>310</sup> 足利將軍家の所蔵品中、義満や義教の所蔵品には「天山」、「道有」の鑑蔵印が本紙に押され、義政の場合は「雑華室印」を本紙に押した。これらは東山御物と称された。

<sup>311</sup> 以降、名物記とする書物は『玩貨名物記』、松平乗邑による『三冊名物集』、松平不昧による『古今名物類聚』、草間直方による『茶器名物図集』などがあり、これらの所載する道具は名物道具として尊重されることとなる。

<sup>312</sup> 神津朝夫『山上宗二記入門』（角川学芸出版、二〇〇七年、四〇頁）において、神津は「名物を床に飾る唐物のこととする」と指摘される。

<sup>313</sup> 谷見『茶会記研究』（淡交社、二〇〇一年、一四八頁）において、以下のような記述がある。たとえ掛物の内容が理解できなくとも、茶人たちにとっては高名な禅僧の手になるものであればそれでよかった。

とし、「床の間に名声をもとめた」と指摘される。

<sup>314</sup> 光秀が茶会で使用した宗峰妙超墨蹟について、『信長公記』では信長から光秀に下賜された道具の記述は確認できない。光秀自身、天正八年（一五八〇）以前に入手した墨蹟であると考えられる。光秀が所持した道具としては《坂本井戸》（野村美術館蔵）のほか、『山上宗二記』では「式部少輔肩衝」、「八重桜茶壺」の名物道具の所有があった。このような道具の所有に関しては信長からの下賜もあったものと推測される。

<sup>315</sup> このほかに一山一寧や北礪居簡があった。

<sup>316</sup> 千宗室『茶道古典全集』第三巻、淡交社、一九七七年。

<sup>317</sup> 永島福太郎「紹鷗遺文」『茶道古典全集』第三巻、一九六〇年、三一・三二頁。

<sup>318</sup> 前掲註（1）、一二二頁。

<sup>319</sup> 朝倉治彦『日本随筆辞典』（東京書籍、一九八六年）によれば、本書は「天文二十一年（一五五二）の成稿」とあり、「巻末には藤某と記されているので著作は藤原氏の者であることが推測されるが、詳細は不明。元禄二年の板本がある」と紹介されている。

<sup>320</sup> 『槐安国語骨董稿』は寛延三年（一七五〇）の発刊である。同書には「五条橋下二十年」において、以下のような記述がある。

<sup>321</sup> 一休和尚跋国師語録之後頌曰挑起大燈大千變与競誓法堂前風浪宿無人記第五橋邊二十年  
『道歌心の策』は禅宗各派や仏教各宗の開祖など、高僧一百人の和歌の中から、一人一首ずつを選び、その肖像画とともに木版に刻み、「道歌 心の策」と題し、天保四年（一八三三）に刊行された。同書の「四六 大燈国師」には以下のような記述がある。

<sup>322</sup> 坐禅せば四条五条の橋の上往き来の人を深山木にして  
白隠による『槐安国語骨董稿』には「乞食隊裏」として、以下のような記述がある。

口碑曰。後醍醐帝元弘中。南都北京義學宗將蜂起。而欲破仏心。帝宣言林下一老宿禪家。當世何人可敵之。宿曰。有妙超侍者。明南浦的子也。見地明白。波瀾廣濶。有弄大旗手脚。實吾門爪牙。若使超旗鼓相當。則必有可見。然天性風（真、願の右）漢。居定止。伝聞。在乞食隊裏。放曠過日。帝曰。如何則可。宿曰。此人不可致。可就見焉。彼性好嗜甜瓜。宣行甜瓜施。於是。詔官陳數千枚瓜於第五橋下。諸乞食集。官甜瓜呼曰。無脚來者。度与之。諸乞食茫然。師聽。虎窺牛行。首如飛。逢被席出來曰。無手授与之。官便知之妙超。遂聞于朝。

## 謝辞

本論文は同志社大学大学院文化情報学研究科において行った研究が中心になっている。同志社大学狩野博幸教授には熟覧調査に協力をいただき、文化情報学会、アドバンストシンポジウムにおいて貴重な指摘、教示をいただいたことを深謝申し上げる。本論文の審査にあたり多くの指摘をいただいた神戸大学影山純夫名誉教授、同志社大学鋤柄俊夫教授、文章の推敲に多数の教示をいただいた同志社大学福田智子准教授に深謝申し上げる。研究を進めるにあたり、矢野環教授に指導いただき、墨蹟の熟覧調査を行う上で多大な支援をしていただいたことを深く感謝する。

墨蹟の研究とともに筆跡の所見について教示をいただいた元文化庁文化財保護審議会専門委員財津永次氏、財津氏を紹介していただき研究に協力をいただいた東京文化財研究所名誉研究員・神戸芸術工科大学名誉教授伊藤延男氏に深謝し上げる。

同志社大学大学院博士後期課程に入学当初、思想が人物に与える影響を考える上で貴重な教示をいただいた元内閣総理大臣細川護熙氏、再び研究の道へと進む契機を与えていただいた故久田尋牛斎宗也宗匠に謹んで深謝申し上げる。

宗峰妙超墨蹟の調査で拝見の機会をいただいた大徳寺、徳禅寺、真珠庵、芳春院、九州国立博物館、福岡市美術館、湯木美術館、出光美術館、野村美術館、根津美術館、藤田美術館、香雪美術館、永青文庫、尊経閣文庫、MOA美術館、MIHO MUSEUM、梅澤記念館、個人の所蔵家の皆様に深謝し上げる。

研究の過程、墨蹟と茶の湯について教示をいただいた人間国宝美術館館長矢部良明氏、帝塚山大学講師神津朝夫氏、裏千家学園講師山田哲也氏、資料調査の協力をいただいた新発田市立図書館館長鈴木秋彦氏、同志社大学ラーネッド記念図書館、小浜市教育委員会、東京文化財研究所元職員中村節子氏、同井上さやか氏、国際会議設立とともに海外において宗峰妙超墨蹟について発表する機会をいただいたサンフランシスコ州立大学教授マッキオンみどり氏に深謝し上げる。

墨蹟研究に協力をいただいた大徳寺派宗務総長戸田実山師、南宗寺住職田島碩應師、廣徳寺住職福富海雲師、徳禅寺住職橘宗義師、真珠庵住職山田宗正師、芳春院住職秋吉則州師、霊泉院住職今井雄峰師、妙楽寺住職渡辺桂堂師、祥雲寺住職那須宗弘師、茶道鎮信流宗家松浦章氏、湯木美術館理事長故湯木敏夫氏、

北村美術館館長木下收氏、野村美術館館長谷晃氏、梅澤記念館館長梅澤信子氏、虎屋文庫文庫長丸山良氏、長崎国際大学学長安部直樹氏、池坊中央研修学院特命教授柴田英雄氏、日本トランスシテイ株式会社相談役小菅弘正氏、フカオ齒科クリニック院長深尾正氏、小西酒造株式会社元監査役故戸田史郎氏に深謝申し上げます。

調査研究に協力をいただいた赤坂水戸幸、飯田好日堂、池正、岡田集雅堂（東京）、古美術齋藤、瀬津雅陶堂、善田昌運堂、瀧川峰晴堂、土橋永昌堂、戸田商店、クリスティーズ・ジャパン株式会社、柳桜園に深謝申し上げます。

売立目録の調査に協力をいただいた株式会社大阪美術倶楽部、株式会社東京美術倶楽部、株式会社京都美術倶楽部、東京文化財研究所ほか国公私立図書館、個人の所蔵本の調査では元甲南女子大学教授木村重圭氏、新潟大学教授岡村浩氏、星名四郎氏に深謝申し上げます。

議論を通じ研究について深い洞察を示していただいた同志社大学特任助教松森智彦氏、博士後期課程並木晴香氏、文化科学研究室の皆様には深謝申し上げます。今日まで研究に協力し支えていただいた家族にも感謝する。幼い頃より「芸には技術と人格があいまったものが必要」という言葉を与えてくれた祖母萩子に心より感謝の意を表したい。

本研究は以下の研究助成を受けた。

- ・ 平成二十四年度 財団法人高梨学術奨励基金調査研究助成（美術史分野）、宮武慶之、「禅宗文化における大燈国師墨蹟の位置 ―筆跡の検討を中心に―」
- ・ 平成二十五年度公益財団法人出光文化福祉財団調査・研究事業、宮武慶之（研究代表者）、財津永次、「売立目録所載の墨蹟画像データベース構築による筆跡の検討」

## 参考文献

### 第一章

- 文化庁『国宝重要文化財大全』（毎日新聞社 一九九七）
- 都守淳夫『売立目録の書誌と全国所在一覧』（勉誠出版 二〇〇一）
- 江月宗玩『墨蹟之写』（影印本）、竹幽文庫蔵。
- 性智編『大燈国師参詳語』（国立国会図書館蔵）
- 竹貫元勝『宗峰妙超』（ミネルバ書房 二〇〇八）
- 古田紹欽『大燈国師墨蹟』（河原書店 一九四九）
- 国立博物館附属美術研究所編『墨蹟資料集』（第一・三輯）（秋葉啓 一九五二）
- 伊東卓治『書品（第四号）』
- 田山方南編『禅林墨蹟』（禅林墨蹟刊行会 一九五五）
- 田山方南編『禅林墨蹟続篇』（禅林墨蹟刊行会 一九六五）
- 『墨美』（第一六五号）
- 『書道芸術（第十七卷）』（央公論社 一九七五）
- 田山方南編『禅林墨蹟・拾遺』（禅林墨蹟刊行会 一九七七）
- 木下政雄「高僧と美術（3）——大灯国師真跡の意義」『月刊文化財（通号二六二号）』
- 倉澤行洋『珠光 茶道形成期の精神』（淡交社 二〇〇二）
- 田山方南『続禅林墨蹟』（禅林墨蹟刊行会 一九八一）
- 国書刊行会『新纂大日本続藏経』（国書刊行会 一九八六）
- 左海祥二郎編集『同門』増刊号、如心齋二百五十回忌即中齋二十三回忌特集（表千家同門会 二〇〇〇）
- 『茶道雑誌』河原書店、二〇〇〇年九月号・十月号、同年十二月号・二〇〇一年十一月号所収。
- 『一帆風』（花園大学所蔵本および関西大学所蔵）
- 『玩貨名物記』（『茶道古典全集』第十二卷所収）
- 『東海和尚紀年録』（『史料大徳寺の歴史』所収）
- 「祥雲寺什物掛物之目録」（『堺市史』第三卷所収）
- 伊藤克巳校訂『大仙院文書』（続群書類従完成会 二〇〇〇）
- 「祥雲寺什物掛物之目録」（『堺市史』第三卷（堺市役所 一九七四）
- 売立目録『某家所蔵品入札』（大阪美術倶楽部蔵 一九三〇）
- 東京帝国大学文学部史料編纂所『大日本古文書 大徳寺文書之一』（東京帝国大学文



学部史料編纂所 一九四三)

欠伸会作『墨蹟之写』竹幽文庫蔵。

原田伴彦『動乱から秩序化へ』(河出書房新社 一九八六)

熊谷直行、猪熊浅磨『旧儀裝飾十六式図譜』(京都美術協会 一九〇三)

宮武慶之「新発田藩溝口家旧蔵の大燈国師墨蹟―物我両忘と日山之賦を中心に―」『文化情報学』第九卷第一号(文化情報学会 二〇一四)

京都美術協会『旧義裝飾十六色図譜解説書』(京都美術協会 一九〇三)

『御掛物帳』(新発田市立図書館蔵)

新発田古文書解説研修会、新発田市立図書館編『溝口伊織家古文書』目録第一集、新発田市古文書研修会(新発田市立図書館 二〇〇四)

朝倉治彦監修『新発田藩溝口家書目集成』第一卷(ゆまに書房 二〇一三)

浅倉有子、岩本篤志、原直史編『新発田藩道具蔵帳集成 二〇一二・二〇一四年度科学研究費補助金基盤研究(C)「藩地域ア・カイブズの基礎的研究―新発田藩―を中心として」報告書』(新潟大学人文学部原直史研究室 二〇一三)

宮武慶之「御掛物帳にみる新発田藩溝口家の書画」『新潟県文人研究』第十六号(越佐文人研究会 二〇一四)

京都美術倶楽部編『京華』(京都美術倶楽部 二〇〇八)

『龍寶山祖師伝』(花園大学図書館蔵)

展覧会図録『茶の湯と掛物Ⅱ・大徳寺の墨蹟を中心に』(茶道資料館 一九八二)  
中村昌正『茶道聚錦』(一九九九年 小学館)

売立目録『渋柿庵蔵品入札』(東京文化財研究所蔵)

井口海仙、永島福太郎監修『茶道辞典』(淡交社 一九七九)

飯田國宏『東美ニュース』(五二号)。

『平安人物史』(早稲田大学図書館蔵)

禅学大辞典編纂所編『禅学大辞典』(大修館書店 一九八五)

白寄顕成『藤村庸軒流茶書』(思文閣出版 二〇一二)

内務省社会局『大正震災史』(岩波書店 一九二六)

東京朝日新聞一九一八年十二月十二日第五面

宮武慶之「豪商における大燈国師墨蹟の受容―谷安殷旧蔵『一帆風』墨蹟を起点として―」、『茶の湯文化学』第二十一号(茶の湯文化学会 二〇一四)

売立目録『池田清助氏所蔵書画面屏風道具類入札』(東京文化財研究所蔵)

売立目録『土方伯爵某子爵家御所蔵品入札』(東京文化財研究所蔵)

売立目録『益田信世氏所蔵品入札』(東京文化財研究所蔵)

- 高橋義雄『萬象録』（思文閣出版 一九八六）
- 山本麻溪『古今茶湯集』（木全宗八 一九一七）
- 売立目録『甲南氏所藏品入札』（東京文化財研究所蔵）
- 『和美の会』二〇〇九年秋号（東京美術倶楽部 二〇〇九）
- 『妙喜庵茶事道具料理控』（国立国会図書館蔵）
- 第二十回記念古美術茶道具展図録『茶美の会』（茶美の会 一九九〇）
- 黒本稼堂『稼堂集（上）』（稼堂先生著書刊行会 一九三七）
- 売立目録『書画美術品洋画展観入札売立会』（東京美術倶楽部蔵）
- 売立目録『旧大名某家所藏品入札』（東京文化財研究所蔵）
- 井口海仙、末宗廣、永島福太郎監修『原色茶道大辞典』（淡交社 一九七五）
- オークションカタログ『Japanese and Korean Art』（クリ  
ステイズ・ニューヨーク 二〇〇四）
- 山田哲也『唐物凡数』（同志社大学総合情報センター所蔵）・孤本名物記・その解題  
と翻刻』『文化情報学』（文化情報学会 二〇〇九）
- 草間直方『茶器名物図彙』（文彩社 一九七六）
- 『墨蹟之写』
- 伊藤敏子「茶人の書状」（『茶道聚錦』第四卷所収）
- 小田栄作『茶道古美術蔵帳集成』巻一（国書刊行会 一九七七）
- 『山上宗二記』
- 菅原通斎『通斎美術ばなし』（淡交新社 一九六一）
- 平野宗浄校訂『増補龍寶山大徳禪寺世譜』（思文閣出版 一九七九）
- 国書刊行会『徳川時代商業叢書（第一）』（国書刊行会 一九一三）
- 『土屋侯御道具帳』（国立国会図書館蔵）
- 「土屋政直茶会記」「土屋家の茶の湯―土屋蔵帳と大名家の茶―」（土浦市立博物館  
一九九二）
- 『墨蹟并名物茶具記』（国会図書館蔵）
- 田山方南『続禅林墨蹟』
- 小田栄作編「雲州家蔵帳」「茶道古美術蔵帳集成（上巻）」（国書刊行会 一九七七）
- 『御物及諸家道具』（慶応義塾大学図書館高橋箒庵文庫蔵）
- 徳川美術館編集『大名の茶の湯』（徳川美術館 一九九二）
- 『徳川家御道具帳』（国立国会図書館蔵）
- 『柳営山里之記』（慶応義塾大学図書館高橋箒庵文庫蔵）
- 矢野環『君台觀左右帳記の総合研究』（勉誠出版 一九九九）

『大日本古文書』家わけ第十七、大徳寺文書別集、真珠庵文書之一所収。

宮武慶之「大燈国師白雲偈小考」『野村美術館研究紀要』第二十一号（野村美術館 二〇一一）

谷晃『茶会記の研究』（淡交社 二〇〇一）

谷端昭夫『公家茶道の研究』（思文閣出版 二〇〇五）

『有楽茶亭湯日記』（慶応義塾大学図書館高橋箒庵文庫蔵）

山田宗敏『史料大徳寺の歴史』（毎日新聞社 一九九三）

千宗室「天王寺屋会記」『茶道古典全集』第七卷（淡交社 一九五六）

高橋箒庵『大正名器鑑』第一卷（大正名器鑑編纂所 一九二六）

『竹陰』（第七十五号）

「微妙公夜話」『改定史籍集覧（第二十六冊）』（臨川書店 一九九一）

古田紹鉄『大燈国師墨蹟』（河原書店 一九四九）

高木文『柳営御物集』（一九九三年）

筒井紘一『茶書研究（2）』（茶書研究会 二〇一三年）

展覧会図録『遠州の数寄』（根津美術館 一九七八）

宮武慶之「閑極法雲東澗道洵両筆墨蹟について」『アート・リサーチ』第十四号（立

命館大学アートリサーチセンター、二〇一四）

益田孝、高橋義雄共編『遠州蔵帳図鑑』（実雲舎 一九三八年）

小堀宗慶、田中博美「遠州口切帳」『茶道聚錦』（小学館 一九八三）

大田善磨『寛政重修家譜』第三卷（続群書類従完成会 一九六四）

林亮勝、坂本正仁校訂『干城録』第一卷（人間舎 一九九七）

栗田添星「片桐石州茶会記」『片桐石州の茶』（講談社 一九八七）

町田宗心『片桐石州の生涯』（光村推古書院 二〇〇五）

小堀宗慶『小堀遠州茶会記集成』（主婦の友社 一九九六年）

千宗左監修『新編 元伯宗旦文書』（不審庵文庫 二〇〇七）

MIHO MUSEUM編『永青文庫 細川家の名宝』（MIHO MUSEUM 二〇一一）

千宗左『江岑宗左茶書』（主婦の友社 一九九八）

千宗左編『和比』第七卷（不審庵文庫 二〇一一）

日暮聖『本阿弥行状記』（平凡社 二〇一一）

『雲州蔵帳』（『茶道古美術蔵帳集成』上巻所収）

表千家同門会編『千里・同風』（表千家同門会 一九七八）

溝口直諒自筆本『名物重宝説』（東京大学史料編纂所蔵）

- 谷晃『茶会記の研究』（淡交社 二〇〇一）
- 熊谷直行、猪熊淺磨『旧儀裝飾十六式図譜』（京都美術協会 一九〇三年）
- 北野大茶湯三百五十年記念大獻茶會『昭和北野大茶湯』（北野大茶湯三百五十年記念大獻茶會 一九三六年）
- 筒井絃一『茶道大辞典』（淡交社 二〇一〇）
- 神津朝夫『山上宗二記入門』（角川学芸出版 二〇〇七年）
- 千宗室『茶道古典全集』第三卷（淡交社 一九七七）
- 『塵塚物語』（『日本随筆全集』所収）
- 白隠慧鶴『槐安国語骨董稿』（国立国会図書館蔵）
- 『道歌心の策』（花園大学図書館蔵）

表1 現存する宗峰妙超墨蹟

- ・記載した作品名は『国重・要文化財大全』の表記に従い、そのほかの作品は通称または適宜、作品名を付した。
- ・先行研究において紹介される文献名、図版番号または頁数を表記した。
- ・重要美術品の名称については『重要美術品認定物件目録』（文部省教化局、一九四三年）の表記に従った。

番号	指定	名称	所蔵館	「墨蹟資料集」	正統拾遺	「墨美」	「書道芸術」	「書品」	「月刊文化財」	「大盤国師墨蹟」	備考
1	国宝	看読真詮榜	真珠庵	16・19（1輯）		2・5	1・4・3	4・5	4・3頁	2	
2	国宝	南嶽偈	正木美術館			9	9・4・9・5				
3	国宝	溪林偈	正木美術館		4・5	8	9・6・9・7				
4	国宝	与宗悟大姉法語	大仙院		4・7	2・6	5・2・5・9			9	
5	国宝	印可状（与関山慧玄印可状）	妙心寺		4・4	2・7	4・8・5・1		4・5頁	8	
6	国宝	関山字号	妙心寺	15（2輯）	4・4	1・1	1・0・2・1・0・3		4・5頁	7	
7	重要文化財	花園天皇宗峰妙超御問答書（「二十年」）	大徳寺		1・5・4	2・0	9・0	2	4・1頁	1・5・2	
8	重要文化財	花園天皇宗峰妙超御問答書（「億劫相」）	大徳寺		1・5・5	2・1	9・1	3	4・1頁	1・5・1	
9	重要文化財	梅溪字号	五島美術館		1・5・8	1・3	1・0・6・1・0・7				
10	重要文化財	靈微字号	サンリツ服部美術館		5・2	1・5					
11	重要文化財	弧桂字号	畠山記念館		5・1	1・4	挿5			1・7	
12	重要文化財	微翁字号	徳禅寺		1・5・7	1・2	1・0・4・1・0・5				
13	重要文化財	遺偈	大徳寺			4・7	1・0・0・1・0・1	8頁		1・9	
14	重要文化財	法語（与宗賢居士法語）	龍光院		1・6・3	2・4	7・4・7・5			6	
15	重要文化財	投機偈	大徳寺		5・4	1・9	8・8・8・9	6頁	4・0頁	3	
16	重要文化財	与宗圓禪人法語	根津美術館		1・6・0	4	4・4・4・5			4	
17	重要文化財	偈語（興作偈）	出光美術館		4・6	6		1			瀬津家旧蔵 梅原龍三郎旧蔵
18	重要文化財	偈語（夏日偈）	出光美術館			7					
19	重要文化財	二行書	芳春院		1・5・9	1・0					
20	重要文化財	偈頌（白雲偈）	野村美術館		2・8・0	3・4	挿1・1				
21	重要文化財	七言偈（「熟」上）	藤田美術館		1・6・1	3・0	9・2・9・3				
22	重要文化財	与泰綱居士法語	湯木美術館		4・9	2・5	6・8・7・1			1・2	
23	重要文化財	上堂語（風墨蹟）	九州国立博物館		1・5・6	3・1	6・0・6・3				
24	重要文化財	与明輪禪尼法語	畠山記念館		4・8	2・9	挿2			1・1	
25	重要文化財	解夏小参語	大徳寺	16（2輯）		3・3	8・2・8・7			1・4	
26	重要文化財	与宗圓道人法語	梅澤記念館		5・0	3・2	7・6・8・1	6・9			
27	重要文化財	宗峰妙超墨蹟（示衆法語）	孤蓬庵			3・8					
28	重要文化財	与宗玉善女法語	徳川ミュージアム		1・6・5	2・8	6・4・6・7			1・6	





連番	年号	年	月	日	会名	筆者	墨蹟内容	現在の所蔵
図B 1	明治 40	年 10	月 一	日	白鶴帖	大燈	(禽十首猷十首詩二卷之内)	
図B 2	明治 44	年 5	月 22	日	池田清助家 目録	大燈	家在扶	
図B 3	大正 2	年 5	月 10	日	某貴顕御所蔵并二某家所蔵品入札	大燈	冬以寒	
図B 4	大正 2	年 10	月 20	日	当市武田氏所蔵品入札	大燈	倚角蒼	
図B 5	大正 3	年 11	月 16	日	金沢市能久治氏所蔵品入札	大燈	雲淡風	
図B 6	大正 4	年 5	月 一	日	渡邊氏及某家所蔵品入札	大燈	瑞岩今	
図B 7	大正 4	年 10	月 4	日	某子爵家并某大家所蔵品入札	大燈	梓池因	出光美術館蔵 (重要美術品)
図B 8	大正 4	年 10	月 24	日	第二回当市生嶋家所蔵品入札	大燈	道畏禪	
図B 9	大正 4	年 12	月 13	日	当市(雁半) 中村氏旧蔵品目録	大燈	道畏禪	香雪美術館蔵
図B 1 0	大正 5	年 2	月 7	日	当市(雁半) 中村氏旧蔵品第三回入札目録	大燈	南泉花	
図B 1 1	大正 5	年 2	月 18	日	当市丹羽氏旧蔵品売立	大燈	福来対	
図B 1 2	大正 5	年 4	月 9	日	当市吉田氏所蔵品売立	大燈	(句双紙)	図B 2 に同じ。
図B 1 3	大正 5	年 6	月 26	日	土方伯爵某子爵家御所蔵品入札	大燈	家在扶	
図B 1 4	大正 5	年 12	月 14	日	伊勢松坂町長井家旧蔵品	大燈	田入雲	
図B 1 5	大正 6	年 1	月 29	日	某家御所蔵品入札	大燈	三玄三	
図B 1 6	大正 6	年 2	月 5	日	当市木下家所蔵品第老回入札	大燈	舉心書	
図B 1 7	大正 6	年 4	月 24	日	当市某氏所蔵品入札	大燈	倚角滄	
図B 1 8	大正 6	年 5	月 8	日	京都市中京区飯後軒所蔵品入札	大燈	文云知	
図B 1 9	大正 6	年 10	月 15	日	第三回赤星家所蔵品入札	大燈	枝重似	
図B 2 0	大正 6	年 10	月 20	日	当市八田氏旧蔵品入札	大燈	後重似	
図B 2 1	大正 6	年 12	月 18	日	当市河原町寺村氏所蔵品入札	大燈	即日柳	
図B 2 2	大正 7	年 5	月 2	日	当市神戸氏青木氏所蔵品売立	大燈	(句双紙)	
図B 2 3	大正 7	年 11	月 28	日	当市上京栗辻氏所蔵品入札	大燈	妙悟在	
図B 2 4	大正 7	年 12	月 7	日	松平子爵(主殿頭) 家御蔵品入札	大燈		
図B 2 5	大正 8	年 2	月 8	日	当市某旧家所蔵品売立	大燈	秋庭佳	
図B 2 6	大正 8	年 4	月 5	日	池田侯爵家御所蔵品入札	大燈	吾不見	
図B 2 7	大正 8	年 4	月 28	日	当市三田九層台主人所蔵書面骨董入札	大燈	鐘聲而	
図B 2 8	大正 8	年 6	月 2	日	因州池田侯爵家御蔵品入札	大燈	御下向	(重要美術品)
図B 2 9	大正 8	年 11	月 20	日	郷男爵家御所蔵品入札	大燈	洗醴春	
図B 3 0	大正 8	年 12	月 22	日	某家所蔵品入札	大燈	洗醴春	
図B 3 1	大正 9	年 3	月 8	日	某子爵家御蔵品入札	大燈	回鷹峯	
図B 3 2	大正 9	年 4	月 19	日	子爵土井家御蔵品入札	大燈	身問心	
図B 3 3	大正 10	年 2	月 22	日	市内某家所蔵品外書面骨董茶器中道具屏風	大燈	萬年大	

表 2 売立目録に掲載される宗峰妙超墨蹟(図版は付録 3 参照)



図B 3 4	大正 10 年 3 月 7 日	末松子爵遺愛品入札	大燈	洗醖春	
図B 3 5	大正 10 年 6 月 25 日	田中四郎左衛門氏藏品入札	大燈	南嶽七	
図B 3 6	大正 10 年 6 月 28 日	市内島之内某旧家所藏品入札	大燈	雲門示	
図B 3 7	大正 11 年 3 月 24 日	甲南氏所藏品入札	大燈	(白雲集断簡)	
図B 3 8	大正 11 年 5 月 23 日	三重県松坂中井家・当市某家所藏品入札	大燈	(大燈経切)	
図B 3 9	大正 11 年 6 月 12 日	芦屋・大橋蒼翠軒氏及某氏所藏品入札	大燈	洗醖春	
図B 4 0	大正 12 年 1 月 22 日	益田家御所藏品入札	大燈	(大燈経切)	
図B 4 1	大正 12 年 4 月 9 日	徳川家御所藏品入札	大燈	白雲為	
図B 4 2	大正 12 年 4 月 16 日	当市中京大原氏・西陣本田氏旧藏品及某家所藏品入札	大燈	了無禪	
図B 4 3	大正 12 年 6 月 4 日	下篠桂谷翁遺愛品入札	大燈	南泉花	
図B 4 4	大正 12 年 6 月 14 日	若洲酒井伯爵家御所藏品入札	大燈	起居快	
図B 4 5	大正 13 年 4 月 7 日	糺緑亭神戸家所藏品売立	大燈	雲居	
図B 4 6	大正 13 年 6 月 9 日	旧伊豫西条藩主子爵松平家御所藏器入札	大燈	昨日	
図B 4 7	大正 13 年 6 月 16 日	市内某家所藏品入札	大燈	清浄	
図B 4 8	大正 13 年 10 月 27 日	益田信世氏所藏品入札	大燈	山上	
図B 4 9	大正 13 年 11 月 26 日	当市騎牛菴氏所藏品入札	大燈	老僧行	個人蔵
図B 5 0	大正 14 年 5 月 4 日	伯爵・有馬家御藏品入札	大燈	山門事	
図B 5 1	大正 14 年 5 月 20 日	当市某家所藏品入札	大燈	有月落	
図B 5 2	大正 14 年 6 月 11 日	下篠桂谷翁遺愛品入札	大燈	南泉花	
図B 5 3	大正 14 年 9 月 29 日	鈴木梅四郎氏・某氏所藏品入札	大燈	八萬十	
図B 5 4	大正 14 年 9 月 29 日	鈴木梅四郎氏・某氏所藏品入札	大燈	南嶽七	
図B 5 5	大正 14 年 10 月 19 日	大村家所藏品入札	大燈	枝重似	
図B 5 6	大正 14 年 10 月 22 日	秋田県河田丹楓氏入札目録	大燈	南嶽七	
図B 5 7	大正 14 年 11 月 9 日	井上侯爵家御所藏品入札	大燈	萬年大	
図B 5 8	大正 14 年 11 月 9 日	井上侯爵家御所藏品入札	大燈	祖師西	
図B 5 9	大正 14 年 11 月 16 日	市場・小栗家並某家所藏品入札	大燈	(消息)	
図B 6 0	大正 14 年 11 月 27 日	当市某家所藏品入札	大燈	けふ上	
図B 6 1	大正 14 年 11 月 27 日	当市某家所藏品入札	大燈	(佐保切)	
図B 6 2	大正 14 年 12 月 21 日	渋柿庵藏品入札	大燈	善女受	MIHO MUSEUM蔵
図B 6 3	大正 14 年 12 月 21 日	某家所藏品入札	大燈	南嶽七	
図B 6 4	大正 15 年 1 月 23 日	某家所藏品入札	大燈	是處輪	逸翁美術館蔵
図B 6 5	大正 15 年 2 月 21 日	某家所藏品入札	大燈	洗醖春	
図B 6 6	大正 15 年 4 月 26 日	当市西林治兵衛氏及某家所藏品入札	大燈	妙悟在	
図B 6 7	大正 15 年 11 月 27 日	当市某旧家・神戸一峯庵所藏品入札	大燈	道畏禪	
図B 6 8	昭和 2 年 2 月 19 日	某大家所藏品入札	大燈	南泉道	
図B 6 9	昭和 2 年 4 月 4 日	紀州徳川家藏品展覧目録	大燈	徳海号	個人蔵
図B 7 0	昭和 2 年 4 月 18 日	林家所藏品入札	大燈	難編處	

図B7 1	昭和	2	年	11	月	26	日	当市青木鷺語亭氏竹々鼻太田平右衛門両氏所蔵品売立	大燈	道畏禪	
図B7 2	昭和	2	年	11	月	28	日	肥前松浦伯爵家蔵品目録	大燈	了無禪	
図B7 3	昭和	2	年	11	月	28	日	肥前松浦伯爵家蔵品目録	大燈	清花堂	
図B7 4	昭和	3	年	2	月	10	日	某大家所蔵品入札目録	大燈	了無禪	靈泉院蔵
図B7 5	昭和	3	年	2	月	25	日	男爵神田家及某大家所蔵品入札	大燈	(大燈経切)	
図B7 6	昭和	3	年	3	月	26	日	松方前侯爵家蔵品入札	大燈	聡明書	
図B7 7	昭和	3	年	3	月	26	日	前公爵松方家蔵品入札	大燈	恵知客	根津美術館蔵 (重要美術品)
図B7 8	昭和	3	年	6	月	18	日	廣岡家蔵品入札	大燈	大恵云	
図B7 9	昭和	3	年	6	月	18	日	廣岡家蔵品入札	大燈・大現	上堂拳	
図B8 0	昭和	3	年	7	月	2	日	旧姫路藩男爵武井家蔵品入札	大燈	老龍	
図B8 1	昭和	4	年	1	月	24	日	市外西枇杷町故川島松次郎氏遺愛品売立目録	大燈	入門	
図B8 2	昭和	4	年	1	月	24	日	市外西枇杷町故川島松次郎氏遺愛品売立目録	大燈	南嶽七	
図B8 3	昭和	4	年	4	月	4	日	中京杉浦家所蔵品入札	大燈	新命龍	
図B8 4	昭和	5	年	5	月	18	日	信州松本藩戸田子爵家蔵品入札目録	大燈	明晴滄	
図B8 5	昭和	5	年	11	月	14	日	某家御所蔵品入札	大燈	御下向	
図B8 6	昭和	5	年	11	月	17	日	磯川山房蔵品入札	大燈	一ヶ早	
図B8 7	昭和	5	年	12	月	20	日	某家所蔵品入札	大燈	扶桑国	個人蔵
図B8 8	昭和	6	年	3	月	7	日	某家御所蔵品入札	大燈	倚角滄	
図B8 9	昭和	6	年	10	月	16	日	某子爵・江戸旧家所蔵品入札	大燈	常懷江	
図B9 0	昭和	7	年	4	月	25	日	井上子爵家並某家所蔵品入札	大燈	雨夜即	
図B9 1	昭和	7	年	4	月	25	日	井上子爵家並某家所蔵品入札	大燈	殿裏底	
図B9 2	昭和	7	年	5	月	14	日	某家御所蔵品入札	大燈	老僧行	
図B9 3	昭和	8	年	4	月	19	日	鈴木家蔵品入札	大燈	田入雲	
図B9 4	昭和	8	年	10	月	17	日	故村瀬江湘庵愛蔵品売立	大燈	本来無	
図B9 5	昭和	8	年	10	月	23	日	侯爵峰須賀家御蔵品入札	大燈	淹閑	
図B9 6	昭和	8	年	11	月	29	日	向日莊頼母木家所蔵品入札	大燈	師家無	
図B9 7	昭和	9	年	5	月	14	日	泉州沢久夫氏・某氏所蔵品入札	大燈	老龍	
図B9 8	昭和	9	年	5	月	20	日	大分市中尾家所蔵品展観入札	大燈	世尊一	
図B9 9	昭和	9	年	5	月	28	日	桜田莊遺愛品高橋弘吉氏所蔵品入札	大燈	南泉	
図B10 0	昭和	9	年	11	月	5	日	松浦伯爵家並某家蔵品展観入札目録	大燈	靈微	サンリツ服部美術館蔵 (重要文化財)
図B10 1	昭和	9	年	11	月	13	日	今井近田両家蔵品入札目録	大燈	萬年大	
図B10 2	昭和	9	年	12	月	10	日	翠樹園山田家所蔵品入札	大燈	難編處	
図B10 3	昭和	10	年	12	月	3	日	田村家	大燈	世間之	
図B10 4	昭和	11	年	2	月	24	日	甲州汲故庵村松家蔵品入札	大燈	聖諦廓	
図B10 5	昭和	11	年	10	月	17	日	某家所蔵品売立	大燈	(佐保切)	
図B10 6	昭和	14	年	2	月	15	日	特別展観目録	大燈	雨夜即	
図B10 7	昭和	14	年	6	月	8	日	泉松庵所蔵品入札目録	大燈	聡明書	
図B10 8	昭和	14	年	6	月	8	日	泉松庵所蔵品入札目録	大燈・大現	上堂拳	
図B10 9	昭和	14	年	6	月	13	日	某家所蔵品入札及売立	大燈	峯頭雲	
図B11 0	昭和	15	年	6	月	12	日	松筠亭蔵品展観目録	大燈	微妙清	

図B111	昭和15年10月25日	旧大名某家所蔵品入札	大燈	(榊林類聚騰寫卷)	
図B112	昭和16年5月9日	高知市瑞雲洞所蔵品入札目録	大燈	趙州問	
図B113	昭和17年2月16日	某家所蔵品入札	大燈	御下向	
図B114	昭和17年3月5日	某家所蔵品入札	大燈	山門事	
図B115	昭和17年3月28日	某家所蔵品入札	大燈	南泉道	
図B116	昭和18年5月25日	原田二郎翁	大燈	三問尊	
図B117	昭和29年2月24日	書画美術品入札展鋪売立会	大燈	居一切	
図B118	昭和30年2月27日	書画美術品洋画展觀	大燈	(林間録ノ記)	
図B119	昭和52年6月7日	茶美の会	大燈	(置文案)	図B7に同じ。
図B120	昭和53年3月25日	第12回東美オークション	大燈	記伊国	
図B121	昭和53年3月27日	第4回東美入札	大燈	(置文案)	図B7、118に同じ。
図B122	昭和54年10月8日	第8回東美特別展	大燈	衲子従	
図B123	昭和60年10月8日	第10回東美特別展	大燈	侍者請	個人蔵
図B124	平成2年5月9日	第20回記念古美術茶道具展茶美の会	大燈	(手抄二卷断簡)	
図B125	平成16年3月23日	Japanese and Korean Art	大燈	物我両	個人蔵
図B126	平成19年2月19日	済美入札会	大燈	剃々塵	個人蔵
図B127	- 年3月17日	当市辻東氏蔵品売立	大燈	秋庭佳	
図B128	- 年3月26日	青龍山瑞泉寺閑家御蔵器	大燈	家裏人	
図B129	- 年3月29日	当市田守家所蔵品入札	大燈	南泉道	
図B130	- 年2月15日	当市門前町柏屋並某家所蔵品売立	大燈	(不詳)	
図B131	大正9年4月24日	北風家某大家所蔵品入札	大燈	(不詳)	
図B132	大正6年6月11日	赤星家所蔵品入札	大燈	善女受	図B62に同じ。

表3 「大徳寺虫弘之記」における宗峰妙超墨蹟

塔頭名	墨蹟名		小書	図中の小書より
方丈	虚堂墨蹟			虚堂墨蹟大横物 一文字風帶造土印金 桑山果法印寄付
	大燈国師辞世		中白地古金欄 上下茶 一風帶地古金欄	表具利休遠州好
	印可状			
	同 徹翁之号			
	大燈国師かな法語			
	同 遺戒			
	後醍醐天皇大燈国師両筆			
	開山自賛頂相			
	国師投機頌			
	国師墨蹟			
	雲林院菩提講證文			
大遷院之分	大燈国師大黒蹟		中紫地印金 風帶トモ 上下浅黄	
	大燈国師三行物			「興作都・・・」
	大燈横物			「要超出・・・」

		真珠庵			竜光院之分	竜光院之分	総見院之分			三玄院之分
南無文殊師利菩薩 大燈国師筆	大燈国師筆 釈迦牟尼仏 名号	大燈国師巻物	開山国師 仮名文	同墨蹟	大燈国師似名法語	大燈国師大横物	「大燈はしめ国師之墨蹟」とあるも記載はなし	開山国師像 自賛	大燈国師墨蹟	大燈国師大墨蹟
		看讃貞詮榜								
		右之書出二而四五寸四方之大字也、不慢見事成るものにて長サ二間半程有之外二大燈二幅対、其他一休和尚数多有之、略之				中時代紗 上下茶 一風トモ造土印金				
						(大燈国師横物か)			一文字古金欄	

年号	年	月	日	献上者	遺物者（祖父）	遺物者（父）	遺物者（息子）	不明	献上品のうちの遺物	ほかの献上品
承応	2年	6月	18日	内藤飛騨守忠政		志摩守忠重			清出墨跡	左國弘の脇指
慶長	9年	9月	10日	其父勝刀可晴			堀尾山城守忠		桑根の筆寶	國次の脇指
寛永	2年	8月	24日	伊勢守吉里				(生母)	虚堂墨跡一幅	
寛永	2年	9月	28日	有馬筑後守頼旨		中務大輔朝元			陳所翁畫幅	吉光の小脇差
寛永	2年	10月	30日	松平生五郎		父出羽守吉秀			牧溪畫幅	國總の刀
寛永	2年	11月	28日	主税頭頼方		中納言綱教卿			門無開の虚無平の頭風来運啓明幅。入悉聖真の所	正宗の刀。茶壺（打疊大海）
寛永	3年	8月	10日	松平頼石衛門豐隆		土佐守豐房			顔輝筆の畫幅	貞宗の小脇差
寛永	4年	5月	28日	大塚成央		牧野備前守成春			雪舟筆の挂幅	青江次直の刀
寛永	5年	2月	28日	酒井興四郎親堂		雅樂頭忠相			簡翁の讀最居敬臘馬の畫幅	行光の脇差
寛永	6年	11月	13日	監物忠良		本多吉十郎忠孝			狩野松榮筆の三對幅	來國光の小脇差
寛永	7年	2月	14日	掃部頭直該		井伊掃部頭直恒			宋牧溪筆驚の配幅	貞宗の小脇差
寛永	13年	7月	21日	松平越前守忠宗		中納言家久卿		中納言政宗卿	牧溪畫（虚堂贊）の三幅	正宗の刀。貞宗の脇差。樋口肩作
寛永	15年	5月	13日	松平備前守光久		大藏少輔幸成			芝蘿石の墨跡	正宗の刀。貞宗の脇差。唐物肩付
寛永	20年	8月	7日	青山大膳亮幸利		丹波守直時			清拙牧溪畫の一幅	志津の脇差。
寛永	元	5月	14日	堀左門直吉		豐後守正武			獨翁の墨跡。	來國次の刀
寛永	元	5月	19日	吉十郎忠孝		本多中務大輔忠國			虚堂墨寶の挂幅	備前守包平の刀
寛永	元	11月	13日	阿部飛騨守正齋		豐後守正武			密庵の墨蹟	來國光の脇差
正保	2年	8月	21日	松平筑前守光高長子大千代丸		伊豫守忠昌			大納言殿。茂古林墨跡の掛幅	貞宗の脇差
正保	2年	10月	21日	松平万千代丸		彈正大尉定勝			玉圃の掛幅	東鑑）新藤五國光の刀。瓢の茶人壺
正保	2年	12月	29日	上杉喜正次		遠江守政一			牧溪の掛幅	立花丸壺の茶入
正保	4年	9月	6日	小堀大膳正之		下總守忠明			無事の掛幅	肩衝（運慶）。貞宗脇差
正保	元	6月	1日	松平輔松忠弘					竺田悟心の墨跡	茶人（鴨）。西方禪の脇差
慶安	3年	7月	22日	尾張豊相光		肥後守光尚			月潤の掛幅	左文字の刀。骨不知の差ぞへ
慶安	4年	6月	27日	六丸					清拙牧溪の掛幅	國吉のさしぞへ
慶安	元	7月	28日	對馬守重次		阿部備中守忠次			圓悟墨寶の掛幅	茶壺（瀬戸肩衝）
慶安	元	12月	29日	（一族小姓組）吉左衛門重弘				太田兵部少輔重恒	來國光の脇差	來國光の脇差
明暦	3年	12月	1日	對馬守重博	安藤石京進重長				宋趙昌が生薑の圖	
明暦	元	5月	7日	桑正氏信		戸田栄閑入道氏鐵			徑山南楚師説の墨跡	
明暦	元	6月	3日	水野備前守勝貞		美作守勝俊			宋趙昌の畫幅	正恒の刀。行光の差脇
寛治	2年	5月	1日	阿部伊豫守正春			備中守正高		宋僧牧溪筆竹雀畫幅	來備國の刀
寛治	2年	7月	26日	井伊玄書頭直澄		掃部頭直孝			蘇絳墨跡一幅	前田正宗の脇指。大隅肩衝の茶入
寛治	元	1月	28日	宗對馬守義眞		對馬守義成			宋徽宗帝畫讀福祿壽の一幅	光忠の刀
寛文	2年	8月	3日	酒井修理大夫忠直		空印入道			唐畫廿八祖像一軸	正宗脇差
寛文	4年	7月	11日	上杉喜平次		掃磨守綱勝			某の藍印月江贊出山釋迦の畫幅	左吉貞の脇差
寛文	6年	5月	28日	修理亮吉重		小出大和守吉英			圓悟墨跡	無銘の刀
寛文	6年	7月	28日	蛸須賀千松丸		阿波守光隆			無準の挂幅	貞宗の刀
寛文	8年	8月	25日	中務少輔忠直		水野出羽守忠職			梁楷筆の布袋畫幅	吉房の刀
寛文	8年	11月	13日	三左衛門有重		小出大隅守有棟			一休目畫義の一幅	
寛文	8年	12月	8日	右近大夫尚征		永井尚政入道信督			雪舟の畫幅	
寛文	10年	12月	18日	左門昌景		亞相頼宣卿			梁楷畫寒翁の一幅（讀一山）	備前兼光の刀
寛文	11年	3月	20日	紀伊寛門光貞卿					舞臺が花鳥畫卷	左安吉の刀
寛文	11年	3月	22日	市正直時	永井日向守直清				顔輝筆泰山台侍の畫幅	新藤五國光の刀
寛文	12年	2月	21日	松平賢吉之助信輝		甲斐守輝綱			笠仙墨跡	
寛文	12年	3月	14日	金森勘頼貴		飛騨守頼榮			大徳院師墨跡	
寛文	元	6月	24日	内藏助明友		加藤木意入道明成			牧溪畫觀音の一幅	備前長光の刀
延宝	2年	1月	7日	土佐守尚長		永井右近大夫尚征			大聖院師墨跡	
延宝	2年	1月	7日	三郎兵衛貞房		片桐石見守貞昌			琦楚石の墨跡	義弘の刀。茶壺（初奉）
延宝	2年	5月	5日	松平兵部大輔昌親		越前守光通				

表 4 遺物の献上

延享	3	年	12	月	22	日	立花左近將監鑑虎					好雪入道忠英				宋牧溪筆茶樹猿圖		
延享	5	年	2	月	9	日	和泉守高久					藤堂大學頭高次				虛堂墨跡		
延享	7	年	6	月	11	日	土屋但馬守數直					相模守政直				痴絶墨跡		備前兼光の刀
延享	3	年	3	月	9	日	松平岩松					彈正大弼綱晟				恵西藏の墨跡		正宗の刀
延享	元	年	8	月	7	日	石見守重種					板倉内膳正重矩				京極中納言定家卿眞蹟小倉山庄色紙一幅		大原重守の刀
延享	元	年	9	月	10	日	内藤和泉守忠勝					飛騨守忠政				俊明庵の掛幅		則重の刀
延享	元	年	12	月	21	日	土井帶刀利					大炊御利重				印月江の墨跡		左文字の刀
天和	2	年	7	月	26	日	伊豫守綱政					松平新太郎光政				默庵が畫。印月江藏布袋の挂幅		
貞享	3	年	9	月	26	日	彦四郎忠之					松平日向守信之				牧溪筆畫幅		來國俊の刀
貞享	4	年	9	月	6	日	興行實徳					那須遠江守實綱				一休和尚の墨寶		城州信國の刀
貞享	元	年	2	月	27	日	太郎明英						加藤内藏助明友			宋の岳飛の書幅		備前元重の刀
貞享	元	年	6	月	23	日	備中守資直						太田藩津守資次			牧溪の畫幅		相州行光の刀
貞享	元	年	10	月	13	日	播磨守幸賢									空翁筆布袋の掛幅		備前守家の刀
貞享	元	年	10	月	27	日	堀田下總守正仲				青山大膳亮幸利					京極中納言定家卿筆の掛幅		國行の刀
元禄	6	年	7	月	17	日	安藝守綱長					筑前守正俊				宋牧溪の畫幅		
元禄	7	年	4	月	17	日	松平主膳就勝					松平紀伊守光茂				宋牧溪の畫幅		來國次の刀。茶入（夕暮）
元禄	8	年	6	月	13	日	松平主膳岐守頼常					長門守吉就				軸物二卷		
元禄	8	年	6	月	13	日	奥平熊太郎昌成					龍雲軒入道源英				痴絶墨蹟の掛幅		
元禄	11	年	10	月	15	日	長門守信友					美作守昌章				唐畫須菩提像の畫幅		國宗の刀
元禄	12	年	7	月	25	日	右兵衛督吉通					安藤對馬守重博				李龍眠筆の畫幅		備前光近の刀
元禄	12	年	10	月	1	日	能登守忠貞					中納言綱誠卿				虛堂墨跡の幅		五月雨郷の刀。茶盞（花瓶口茄子）
元禄	13	年	9	月	15	日	本庄安藝守資俊					因幡守宗資		戸田山城守忠昌		門無間筆猿猴の掛幅		豐後行平の刀
元禄	13	年	9	月	27	日	東本願寺門跡光性					無碍光院光海				佛光國師墨跡の掛幅		備前國宗の刀
元禄	13	年	11	月	29	日	尾張中將吉通卿				大納言光友卿					染指筆踊布袋の畫幅		
元禄	14	年	6	月	19	日	五郎三郎秀延				丹羽玉峯入道光重					古法眼元信筆三對幅		
正徳	3	年	4	月	28	日	如川周信					狩野養朴・常信				宋夏明遠の山水畫幅		
正徳	3	年	9	月	18	日	五郎太のかた						中納言吉通卿			痴絶道中の書幅		中川郷の刀。繁雲と銘せし茶盞
正徳	3	年	9	月	18	日	大久保加賀守忠方					大久保加賀守忠曾				鍾璽筆布袋の畫幅		行光の刀
正徳	3	年	12	月	11	日	五郎太の方									牧溪の畫幅		當麻の少刀。茶盞一
正徳	5	年	9	月	28	日	求馬義峰					大膳大夫義格				頼朝牧溪の畫幅		豐後國行平の刀
正徳	元	年	7	月	26	日	本多伯耆守正永					本多伯耆守正永				李唐筆山水の事物		備前吉包の刀
享保	2	年	6	月	1	日	金地院元雄住職					前往崇達				一山國師の眞蹟一幅		
享保	3	年	4	月	4	日	松平豐五郎定頼					因幡守定遠				雪村の鷹の事物		大和の國包永の刀
享保	3	年	10	月	13	日	紀伊中納言宗直					中納言綱係卿				朱銘藤四郎吉光の差添。錢舜舉枇杷の畫一幅		
享保	5	年	6	月	6	日	松平陸奥守吉村					土佐守豐隆				郭憲が畫の牡丹に山谷が讀せし掛幅		來國次の小指添
享保	元	年	2	月	16	日	丹後守正知					稻葉内匠頭正往				袴懸筆の菟花掛幅		
元文	5	年	4	月	14	日	（俊備）					知恩院門跡尊龍法親王				後奈良院宸翰の一軸		
延享	2	年	6	月	10	日	門跡光超					東本願寺門跡光性				王若水の畫幅（鶴）		
延享	10	年	12	月	23	日						東本願寺門跡清浄光院光超				宋徽宗眞蹟鷹の畫の對幅		

年号	年	月	日	献上者	献上品	その他の献上品	備考
明暦	3年	7月	23日	松平土佐守忠義	南堂の書幅	貞宗の脇差	
明暦	3年	2月	晦日	鍋島信濃守勝茂	元菴墨蹟の書幅	貞宗の刀	
萬治	元年	9月	21日	土井遠江守利隆	自如忍所江兩筆の書幅	金森正宗の刀	
萬治	元年	2月	6日	永井信濃守尚政	無准の書幅	貞宗の差添	
萬治	元年	4月	5日	松平隠岐守定行	印月江墨蹟一幅	助眞の刀。猩々紺十間	
寛文	2年	12月	5日	本多能登守忠義	大猷国師墨蹟	左文字の脇差	
寛文	4年	閏5月	26日	立花飛騨守忠茂	瑳楚石墨蹟	來國光の刀。相良壹岐守頼寛得物國行の刀	
寛文	4年	10月	28日	本多下總守俊次	雪舟筆釋迦并に山水の畫幅	富樫の脇差	
寛文	7年	6月	1日	太納言頼言卿	成堂墨蹟	本庄正宗の刀。茶入（朱衣肩衝）	
寛文	9年	5月	12日	肥後守正之	源廷尉義経眞蹟額書（奥州會津塔寺村八幡宮に納めし所なり）	來國光の小脇差。茶入（托助）	
寛文	9年	6月	28日	對馬守忠豐	京極黃門定家卿の小倉山柱色紙	左安吉の小脇差	
寛文	11年	7月	6日	戸田永女正氏信	無准自贊布袋の畫幅	行光の脇差	
寛文	11年	12月	25日	太田備中守資宗	雪舟山水の畫幅	來國光の刀	
延宝	4年	8月	26日	松平兵部大輔昌親	佛智禪師墨蹟	中川郷の刀	
延宝	5年	7月	18日	阿部播磨守正能	周文の山水畫幅	相州行光の刀	
天和	2年	3月	21日	松平大膳大介綱廣	陳所翁養龍對幅		若君）牧溪筆鶴挂幅。來國光の刀
天和	2年	3月	21日	立花和泉守種長	梁楷の畫幅（福鏡壽）		若君）牧溪筆蘆雁挂幅
貞享	2年	7月	27日	松平相模守光仲	成堂墨蹟	吉光の脇指	
貞享	2年	7月	27日	松平相模守光仲	成堂墨蹟	吉光の脇差	
元禄	3年	12月	21日	松平右衛門佐光之	宋夏珪筆の山水畫幅	正宗の刀	
元禄	3年	10月	28日	永戸中納言光圀卿	京極中納言定家卿の小倉色紙一軸	伏見正宗の差添。金馬代。時服十捧げ	
元禄	4年	7月	28日	伊達宮内少輔宗純	彩繪の掛幅	青江次吉の刀。弓尻籠	
寛永	4年	9月	1日	稻葉丹後守正往	貞宗の刀。李迪の畫幅		
寛永	6年	7月	28日	松平伊豆守信輝入道宗見	二條大納言爲氏卿筆の朗詠集	來國光の刀	
正徳	2年	7月	28日	細川越中守綱利	唐經山寺佛照德光禪師の墨蹟。攝州宗禪寺開基周乗の筆跡	來國次のさしぞへ	
享保	4年	11月	28日	松平肥前守宣政	高然暉が畫の掛幅	正宗の刀	
享保	6年	9月	28日	岡部美濃守長泰	顔輝の畫幅	左國弘の刀	

表5 致仕の得物としての献上品



大徳寺重書箱入日記

134

表7 真珠庵と徳禅寺所蔵の墨蹟

真珠庵書画入日記		真珠庵墨蹟箱入置注文		真珠庵書画入日記		真珠庵書画入日記		徳禅寺絵箱入日記	
永正十八年（一五二二）七月十九日		弘智（治）四年（一五五八）二廿六	元和三年（一六一七）九月十六日	元和五年（一六一九）六月日	元和九年（一六二三）七月七日				
開山墨蹟 月岩			從大燈国師印可狀	一幅	○				一幅
同 法語 達磨大師			同 徹翁号	一幅					一幅
			大燈国師雲門関字頌 「投機偈」	一幅					一幅
同 廓然無聖	開山墨蹟 白雲流泉	○	○（再興ニ付去脚）						一幅
									一幅
	同墨迹 若以色								二幅
	同墨迹 是人行期								一幅
			開山尊像 自讃	○					一幅
			大應墨蹟	○					二幅
			開山墨蹟 溪林、南岳	○					一幅
			同 釈迦号	○					一幅
			同 文殊号	○					一幅
			観音 開山賛						一幅

表8 『茶会記の研究』掲載の茶会記にみる宗峰妙超墨蹟の使用件数

・会記名は『茶会記の研究』によった。  
・使用回数が0回のときは空欄とした。

会記名	所載回数	使用回数
松屋会記	856	
茶道四祖伝書	112	
利休全集茶会記	12	
天王寺屋会記・自会記	1500	20
天王寺屋会記・他会記	1292	
今井宗久茶湯日記抜書	84	
旁求茶会記	607	1
南方録会	56	
草間直方筆写茶会記	453	
宗湛日記	456	6
北野茶会記	1	
利休百会記	93	
古今茶湯集	559	10
慶長御尋書	24	
織部茶会記	38	
古織会書	21	
古織会付	49	
有楽亭茶湯日記	97	7
公方様御茶会記	13	
二三代将軍御会記	57	
御会記	13	
小堀遠州茶之湯置合之留	24	
遠宗拾遺	96	
遠州茶之留	176	
遠州道具置合	96	
茶会置合之控	76	
大有宗甫居士道具置合	96	
小堀遠州侯茶会記	262	
遠州百会記	200	
遠州小古茶湯記	17	
遠州旁求茶会記	110	
小堀遠州茶湯日記	29	
宗甫会書	29	
松花堂茶会記	30	
寛永九年遠州置合之留	17	
隔莫記茶会記	261	3
寛永十五年遠州口切帳	17	
尚嗣公記茶会記	139	
小堀遠州孤篷庵茶会記	95	
遠州道具揃写	85	
江岑茶会記	648	4
於江戸遠州道具置合	20	
於江戸茶之湯置合帳	20	
遠州口切帳	55	
正保二年十月二十一日朝	1	
宗和茶湯書	40	1
金森宗和居士茶会記	6	
宗和献立	80	
宗和会席	34	
書院のかこいにて茶之湯	24	
御茶湯会席帳	23	
上野焼茶会記録	44	
茶道石州会留書	61	
三菩提院宮御記茶会記	149	
後西院御茶湯之記	26	
反古庵唐軒茶之湯留書	10	
反古庵茶会	121	
唐軒旁求茶会記	22	
仙叟会付	144	
国会蔵蠟月庵日記	170	
庸子へ参ル茶湯之留	9	
伊達綱村茶会記	1309	

島津吉貴茶会記	4	
土屋政直茶会記	8	1
槐記茶会記	96	
利休百五十年忌茶会	86	
立賢筆記	不明	
西山筆記	不明	
友湖筆記	不明	
宗旦百年忌茶会	92	
百会留帳	110	
小堀和泉守様御茶湯之記	1	
柳沢堯山茶会記	12	
川上不自利休二百年回忌茶会記	143	
酒井宗雅茶会記	271	1
利休居士二百遠忌道具会	8	
諸方茶之湯控	41	
讌席目録	1	
竹浪庵茶会記	254	
妙喜庵茶事道具料理控	16	1
茶会記抄	118	
茶事会席帳	41	
逢茶来茶	55	
多賀宗乗茶会記	188	1
鷹司家等茶会記	102	
鐘奇斎茶会記録	102	
蓬生斎茶遊記	108	
溝口日向守様御茶事	9	1
彦根水屋帳	15	
懷石付	80	
東都水屋帳	29	
百会道具会席控	41	
尚古社出席帖	22	
每会水屋帳	24	
順会水屋帳	12	
安政六年八月ヨリ水屋帳	4	
安政万延水屋帳	10	
会席付	134	
茶会録	82	1
茶会会記集	131	1
松翁茶会記	400	
東都茶会記	299	5
野村得庵茶会記	461	2
大正茶道記	128	
昭和茶道記	不明	1
即翁遺墨茶会日記	267	5
光悦会茶会記	58	3
回数合計	15327	75

年号	年	月	日	墨跡名	文献上の表記	氏名	分類	備考	出典
弘治	2	10	21	国師之墨跡	宗折	堺薩摩屋宗折			天王寺屋会記
永祿	4	4	13	開山墨跡	実休	三好実休	武将		天王寺屋会記
	4	10	17	開山墨跡	道叱	天王寺屋宗叱		天王寺屋一族	天王寺屋会記
	4	12	12	開山墨跡	かなたやそうくわつ	金田屋宗宅			天王寺屋会記
	6	1	23	開山墨跡	道叱	天王寺屋宗叱		天王寺屋一族	天王寺屋会記
	6	11	5	開山墨跡	竹内下総守	竹内秀勝	武将	主・松永秀久	天王寺屋会記
	9	3	3	開山墨跡	道叱	天王寺屋宗叱			天王寺屋会記
	10	1	19	開山墨跡	石津屋宗陽	天王寺屋宗叱		師・武野紹鷗	天王寺屋会記
	12	3	5	開山之墨跡	千宗易	千利休		師・武野紹鷗	天王寺屋会記
	12	9	12	開山墨跡	金田屋宗くわつ	金田屋宗宅			天王寺屋会記
	13	2	3	大燈	宗易	千利休			天王寺屋会記
元龜	元	11	11	開山墨跡	道巴	天王寺屋道叱			天王寺屋会記
元	元	12	17	大燈之字	長慶寺語首座				天王寺屋会記
天正	3	2	30	大燈墨跡	篠屋宗久				天王寺屋会記
	3	7	3	大燈墨跡	道三	曲直瀬道三			天王寺屋会記
	5	12	4	開山之墨跡	かきや宗玉				天王寺屋会記
	8	12	20	大燈之墨跡	惟任日向守	明智光秀	武将		天王寺屋会記
	8	12	20	大燈之字	齋藤内藏	斎藤利三	武将	主・明智光秀	天王寺屋会記
	10	12	4	大燈墨跡	道叱	天王寺屋宗叱			天王寺屋会記
	10	12	15	大燈墨跡	道叱	天王寺屋宗叱			天王寺屋会記
	14	12	17	大トウ墨跡	新屋了心				宗湛日記
	14	12	21	大トウ墨跡	諾庵				宗湛日記
	15	2	19	大トウノ文字	宗及	天王寺屋宗及			宗湛日記
	15	3	9	大トウノカナ文字	宗及	天王寺屋宗及			宗湛日記

表 9 天正年間の茶会にみる宗峰妙超墨蹟

表10 『墨蹟之写』にみる所有者

『墨蹟之写』所載年、卷	形態	所有者				現存
慶長十六辛亥 墨蹟之寫卷一	横物 法語	大森宗巴	薩摩衆（田中氏、橘氏）	大仙院	和泉衆	個人蔵
慶長十七壬子 墨蹟之寫卷二	横物 法語	ヤナナ半兵衛				
慶長十九甲寅 墨蹟之寫卷四	二行	大阪丹波屋	水河州			
慶長廿年元和元年 墨蹟之寫卷五	横物 法語	徳乗				孤蓬庵
慶長廿年元和元年 墨蹟之寫卷五	横物 仮名	宮幸三郎	住吉屋宗拙父	（一段は）千利休		
慶長廿年元和元年 墨蹟之寫卷五	横物 消息	後藤縫殿介				大徳寺
元和九 癸亥 墨蹟之寫卷二十二	横物 消息	橘長兵				
寛永元年 元和第拾 甲子 墨蹟之寫卷二十三	横物 消息	取賣小左衛門				個人蔵
寛永十二 乙亥 二冊之内 但一冊ニ作之 口三枚京都之分 奥江戸之分 墨蹟之寫卷三十六	横物 字号	板嶋左衛門				
寛永十四 丁丑年 墨蹟之寫卷三十八	横物 法語	平野道析	天王寺や道他			
寛永十九 貳冊内上 墨蹟之寫卷四十五	横物 字号	市薪ノ什物				五島美術館
寛永十九 壬午年 貳冊内下 墨蹟之寫卷四十六	横物 三筆	矢嶋	覚甫	宗春（針屋宗春）	茶屋四郎次郎	
寛永二拾年 癸未 墨蹟之寫卷四十七	横物 法語	岸部や宗府（親の頃より）				
墨蹟之寫断簡卷七 七ノ六 八六	横物 法語	本安ミ家				壳立目録

年月日	寛永九年正月二十五日	同二月十二日	延宝八年六月二十七日	宝永六年二月二十九日
被遺物 家名	大御所	大御所	家綱	綱吉
尾張家	會建正宗の御刀 一体面壁の挂幅	銀三万枚	中川郷の御刀 癡絶道冲墨蹟の掛幅	正宗の御差添 茶入(宗無肩衝)
紀州家	寺澤貞宗の御さしぞへ 一休墨翁の挂幅	銀三万枚	貞宗の御刀 俱利伽羅正宗の小脇指 芝罘石の墨跡	⑤中將綱誠 ①中納言光貞 貞宗の御差添 茶入(大陣肩衝)
			茶毒(夏衣)	②安宮
			雪村筆花鳥屏風	〃
水戸家	切刃貞宗の御さしぞへ 俊成定家兩筆の挂幅	銀二万枚	貞宗の脇指 貞宗の御脇差 茶毒(伯耆肩衝)	③中將綱教 ⑥宰相光圀 〃
			當麻の御刀	⑦少將綱條 來國俊の御さしぞへ

年月日	宝永六年三月晦日	正徳二年十一月二十九日	享保元年六月二十四日	
被遺物 家名	淨光院	家宣	家繼	
尾張家	爲氏御筆古今集	①中納言吉通 虚堂の墨蹟	來國光の御さしぞへ 竺儂の墨跡	③中納言繼友 〃
紀州家	爲右卿筆の後撰集	③中納言吉宗 來國次の御差ぞへ 虚堂の墨蹟	②中納言吉宗 來國次の御さしぞへ 岳飛の眞跡	④左京大夫頼致 〃
水戸家	東山慈照院將軍筆新古今集 爲重卿筆の古今集	②中納言綱條 來國次の御差ぞへ 大徳國師の墨蹟	來國光の御さしぞへ 圓悟墨跡 行光の御さし添	①中納言綱條 〃 ②長子鶴千代

表 1 1 御遺物の御三家への下賜

表12 徳川家における茶会で使用された掛物一覧

『文献名』	年号		年		月		日	席主	使用掛物
『公方様御茶会記』	慶長	17	年	12	月	26	日	家康	一休墨蹟（初祖菩提達磨大師）
	元和	9	年	1	月	11	日	秀忠	安国寺虚堂
	元和	9	年	1	月	12	月	秀忠	円悟
	元和	9	年	1	月	12	火	秀忠	安国寺虚堂
	元和	9	年	1	月	13	水	秀忠	円悟
	元和	9	年	1	月	13	木	秀忠	安国寺虚堂
	元和	9	年	1	月	14	金	秀忠	円悟
	寛永	11	年	9	月	7	土	秀忠	安国寺虚堂
『二代三代将軍御会記』	寛永	4	年	6	月	25	日	家光	玉潤
	寛永	4	年	9	月	23	日	秀忠	安国寺虚堂
	寛永	5	年	1	月	28	日	秀忠	面壁達磨 一休和尚筆
	寛永	5	年	2	月	13	日	家光	円悟墨蹟
	寛永	5	年	3	月	23	日	秀忠	塞翁画讃
	寛永	5	年	9	月	14	日	秀忠	塞翁画 寧一山讃
	寛永	5	年	9	月	25	日	家光	円悟墨蹟
	寛永	5	年	10	月	6	日	(西ノ御丸ニテ御茶)	塞翁画 寧一山讃
	寛永	6	年	1	月	一	日	家光	一休大文字
	寛永	6	年	4	月	8	日	(西御丸ニテ御茶)	定家卿懷紙
	寛永	6	年	4	月	10	日	家光	虚堂墨蹟
	寛永	6	年	9	月	21	日	家光	寧一山墨蹟
	寛永	6	年	10	月	20	日	秀忠	安国寺虚堂
	寛永	7	年	4	月	9	日	秀忠	玉潤
『東武実録』	寛永	4	年	2	月	27	日	家光	円悟
	寛永	4	年	6	月	25	日	秀忠	北澗
	寛永	4	年	9	月	16	日	秀忠	安国寺虚堂
	寛永	5	年	1	月	18	日	秀忠	面壁ノ達磨 一休筆
	寛永	5	年	2	月	13	日	家光	円悟
	寛永	5	年	3	月	22	日	家光	塞翁絵讃
	寛永	5	年	9	月	14	日	秀忠	塞翁ノ絵 讃一山
	寛永	5	年	9	月	26	日	家光	円悟
	寛永	5	年	10	月	6	日	家光	塞翁絵讃
	寛永	5	年	10	月	6	日	秀忠	讃一山 塞翁ノ絵
	寛永	6	年	1	月	28	日	家光	一休大文字
	寛永	6	年	4	月	8	日	家光	定家懷紙
	寛永	6	年	4	月	8	日	秀忠	定家懷紙
	寛永	6	年	4	月	10	日	家光	虚堂
	寛永	6	年	9	月	21	日	家光	一山
	寛永	6	年	10	月	20	日	秀忠	安国寺虚堂
	寛永	7	年	1	月	22	日	家光	虚堂
	寛永	7	年	4	月	9	日	家光	北澗
	寛永	8	年	1	月	20	日	秀忠	一休大文字 表具珠光緞子
	寛永	8	年	1	月	28	日	家光	円悟
	寛永	8	年	6	月	3	日	家光	定家色紙
	寛永	9	年	11	月	22	日	家光	定家色紙
『巖君御茶之記』	萬治	3	年	3	月	9	日	家綱	恩断江印月江両筆
	寛文	5	年	11	月	8	日	家綱	無準二字物
	寛文	5	年	12	月	3	日	家綱	盧山瀑布之図 玉潤筆
	寛文	5	年	12	月	16	日	家綱	印月江
	寛文	6	年	12	月	16	日	家綱	定家七首
	寛文	8	年	10	月	25	日	家綱	定家七首
	寛文	11	年	2	月	15	日	家綱	円悟
	寛文	10	年	3	月	6	日	家綱	琦楚石
	寛文	10	年	3	月	25	日	家綱	園悟
	寛文	11	年	6	月	3	日	家綱	兀庵
	寛文	10	年	9	月	1	日	家綱	印月江
	寛文	10	年	11	月	14	日	家綱	虚堂
	寛文	13	年	3	月	28	日	家綱	痴絶道冲
	延宝	2	年	8	月	13	日	家綱	塞翁絵梁楷筆 一山讃
	延宝	4	年	3	月	26	日	家綱	自如恩断江
	延宝	4	年	7	月	23	日	家綱	定家筑紫銀
	延宝	5	年	3	月	26	日	家綱	円悟
	延宝	5	年	3	月	28	日	家綱	痴絶
	延宝	5	年	4	月	11	日	家綱	虚堂墨蹟
	延宝	6	年	2	月	26	日	家綱	印月江
	延宝	7	年	3	月	28	日	家綱	定家七首物

# 博士論文

## 宗峰妙超墨蹟の研究 — 茶の湯文化における受容史 — (図版編および研究編の付録)

文化情報学研究科文化情報学専攻 博士課程後期課程

48101003

宮武 慶之

指導教員 矢野 環 教授



## 目次

### 図版編

図版の出典	i
第一章	1
第二章	9
第三章	30
第四章	49
翻刻	54
	80

### 研究編の付録

付録1 調査を実施した墨蹟	1
付録2 江月宗玩『墨跡之写』にみえる宗峰妙超墨蹟	46
付録3 売立目録図版	69
	137

## 図版編

図番号	作品名	所蔵	出典
図 1	宗峰妙超像	大徳寺	『国宝・重要文化財大全』
図 2	景德伝燈録	大徳寺	『書道芸術』第一七巻
図 3	関山号	妙心寺	『国宝・重要文化財大全』
図 4	与閑山慧玄印可状	妙心寺	『大燈国師墨蹟』
図 5	頂相	妙心寺	『国宝・重要文化財大全』
図 6	徹翁大徳寺一世置文	大徳寺	『大徳寺の名宝』
図 7	興作偈	出光美術館	『国宝・重要文化財大全』
図 8	消息	東京国立博物館	東京国立博物館による画像提供
図 9	投機偈	大徳寺	『国宝・重要文化財大全』
図 10	手抄二巻	芳春院	撮影筆者
図 11	大川普済録	龍光院	『書道芸術』第一七巻
図 12	白雲集	福岡市美術館	撮影筆者
図 13	看誥真詮傍	真珠庵	『真珠庵展』
図 14	与宗悟大姉法語	根津美術館	『大燈国師墨蹟』
図 15	江月宗玩『墨蹟之写』中の大悟時代の墨蹟		影印本『墨蹟之写』
図 16	写本讓狀紀州高家荘	龍光院	『大徳寺墨蹟全集』
図 17	(図9に同じ。)		
図 18	与宗圓禪人法語	根津美術館	『国宝・重要文化財大全』
図 19	与宗明大姉法語	永青文庫	撮影筆者
図 20	与宗悟大姉法語	大仙院	『大燈国師墨蹟』
図 21	与泰綱居士法語	湯木美術館	『国宝・重要文化財大全』
図 22	七言偈（「熱一上」）	藤田美術館	『国宝・重要文化財大全』
図 23	与宗玉善女法語	水府明徳会	『国宝・重要文化財大全』
図 24	(図1に同じ。)		
図 25	示衆法語	孤蓬庵	『国宝・重要文化財大全』
図 26	日山之賦	個人蔵	『京華』
図 27	遺偈	大徳寺	『大徳寺の名宝』
図 28	与宗圓道人法語	梅澤記念館	撮影筆者
図 29	徹翁号	徳禪寺	『国宝・重要文化財大全』
図 30	興作偈、夏日偈	出光美術館	『国宝・重要文化財大全』
図 31	白雲偈	野村美術館	『国宝・重要文化財大全』
図 32	一帆風	個人蔵	所蔵者提供
図 35	大心義統添状	個人蔵	所蔵者提供
図 36	江西宗寛ら添状	個人蔵	所蔵者提供
図 37	玉僊宗斤添状	個人蔵	所蔵者提供
図 38	新井白石添状	個人蔵	所蔵者提供
図 39	流れ圓悟	東京国立博物館	同館による画像提供
図 40	物我両忘	個人蔵	CHRISTIE'S IMAGES LTD. 2013
図 41	墨蹟を収納する箱裏の貼紙	個人蔵	撮影筆者
図 42	『旧義裝飾十六式図譜』における抹茶席の図		『旧義裝飾十六式図譜』
図 43	『御掛物帳』	新発田市立図書館	撮影筆者
図 44	『御掛物帳』「乾坤入部」	新発田市立図書館	撮影筆者
図 45	『御掛物帳』「雑之部」	新発田市立図書館	撮影筆者
図 46	与宗智大姉法語	MIHO MUSEUM	同館による画像提供
図 47	巻一巻末	芳春院	撮影筆者
図 48	巻二巻末	芳春院	撮影筆者
図 49	手抄二巻断簡	個人蔵	撮影筆者
図 50	宗峰妙超墨蹟澤庵宗彭証明	個人蔵	撮影筆者
図 51	宗峰妙超墨蹟澤庵宗彭証明の箱墨書	個人蔵	撮影筆者
図 52	某家所蔵品入札		『某家所蔵品入札』
図 53	『池田清助氏所蔵書画屏風道具類入札』に 所載される宗峰妙超墨蹟		『池田清助氏所蔵書画屏風道具類入札』
図 54	『土方伯爵某子爵家御所蔵品入札』に 所載される宗峰妙超墨蹟		『土方伯爵某子爵家御所蔵品入札』
図 55	『益田信世氏所蔵品入札』所載の宗峰妙超墨蹟		『益田信世氏所蔵品入札』
図 57	白雲集断簡『甲南氏所蔵品入札』所載		『甲南氏所蔵品入札』
図 58	白雲集断簡		『和美的会』
図 59	手抄二巻の断簡		『茶美的会』
図 60	与宗明大姉法語（永青文庫）と一緒に保管される添状	永青文庫	撮影筆者
図 61	林間録断簡		『書画美術品洋画展観』
図 62	匂双紙		『当市辻東氏蔵品売立』
図 63	禪林類聚謄写		『旧大名某家所蔵品入札』
図 64	「至道無難」から始まる墨蹟		『某家御所蔵品入札』
図 65	目録所載の玉舟宗瑞の添状		『某家御所蔵品入札』
図 66	『茶器名物図集』所載の墨蹟		『茶器名物図集』
図 67	よねの文	福岡市美術館	撮影筆者
図 68	宗峰妙超墨蹟	常盤山文庫	『飛梅余香』
図 69	《与宗圓道人法語》に付属する原寸大の模写	梅澤記念館	撮影筆者
図 70	「南泉道知」の書き出しから始まる墨蹟		『下簾桂谷翁遺愛品入札』
図 71	敬春惜詩の春澤宗晃添状	永青文庫	撮影筆者
図 72	風	九州国立博物館	『国宝・重要文化財大全』
図 73	外箱裏	九州国立博物館	撮影筆者
図 74	徳海号	個人蔵	『紀州徳川家蔵品展観目録』
図 75	初花肩衝	個人蔵	『名物茶入物語』
図 76	解夏少参法語	大徳寺	『国宝・重要文化財大全』
図 77	溪林偈	正木美術館	『国宝・重要文化財大全』
図 78	南嶽偈	正木美術館	『国宝・重要文化財大全』
図 79	書簡	大徳寺	『国宝・重要文化財大全』
図 80	白雲偈（野村美術館）が所載する 『徳川家御所蔵品入札』		『徳川家御所蔵品入札』

図	81	霊微号（サンリツ服部美術館）が所載する 『松浦伯爵家並某家藏品展覧入札目録』	サンリツ服部美術館	『松浦伯爵家並某家藏品展覧入札目録』
図	82	置文案（出光美術館）が所載する 『某子爵家并某大家所藏品入札』		『某子爵家并某大家所藏品入札』
図	83	消息（根津美術館）が所載する 『前松方侯爵家藏品入札』		『前侯爵松方家藏品入札』
図	84	梅溪	五島美術館	『国宝・重要文化財大全』
図	85	法語	尊経閣文庫	尊経閣文庫提供
図	86	法語に付属する添状	尊経閣文庫	尊経閣文庫提供
図	87	元伯宗旦筆二行書		『香雪斎藏品展覧図録』
図	88	二行物	芳春院	『国宝・重要文化財大全』
図	90	与圓堂大姉法語	個人蔵	『千里同風』
図	91	『溝口日向守様御茶事記』	小浜市立図書館	小浜市立教育委員会提供
図	92	多曾雅礼会により使用された宗峰妙超墨蹟		『昭和北野大茶湯』

# 第一章の図版



図1 宗峰妙超像（大徳寺）

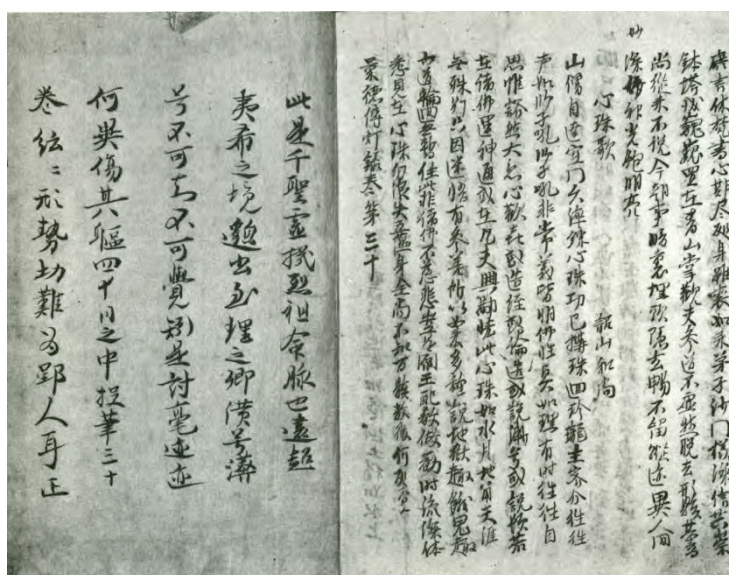


図2 景德伝灯録（大徳寺）



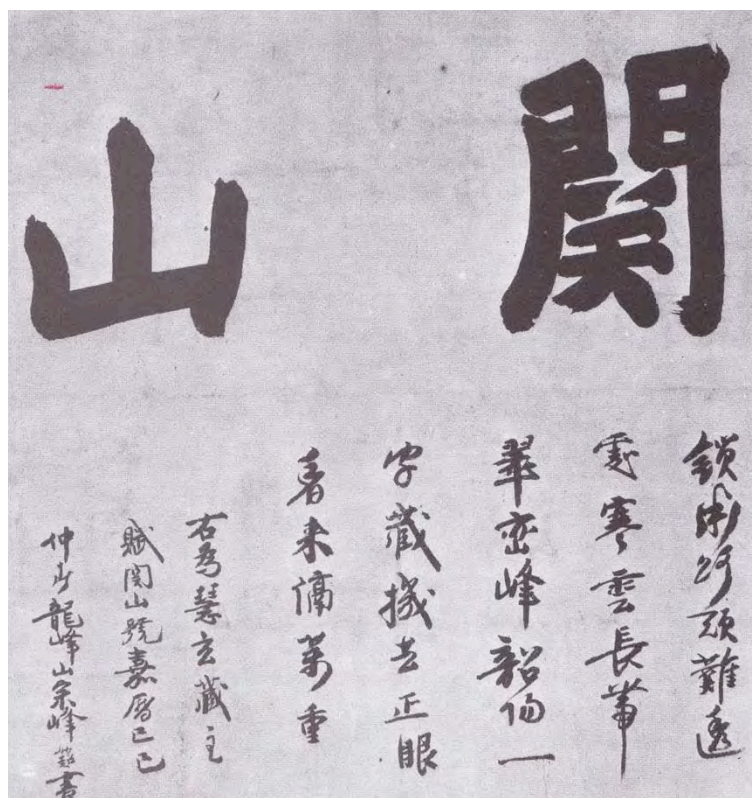


图3 関山号（妙心寺）

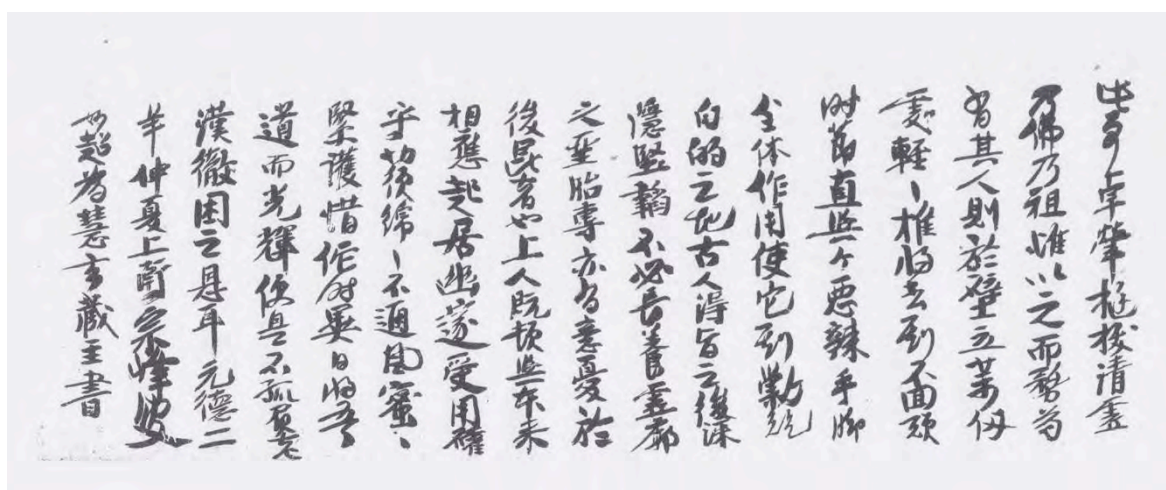


图4 与関山慧玄印可状（妙心寺）



图5 頂相（妙心寺）

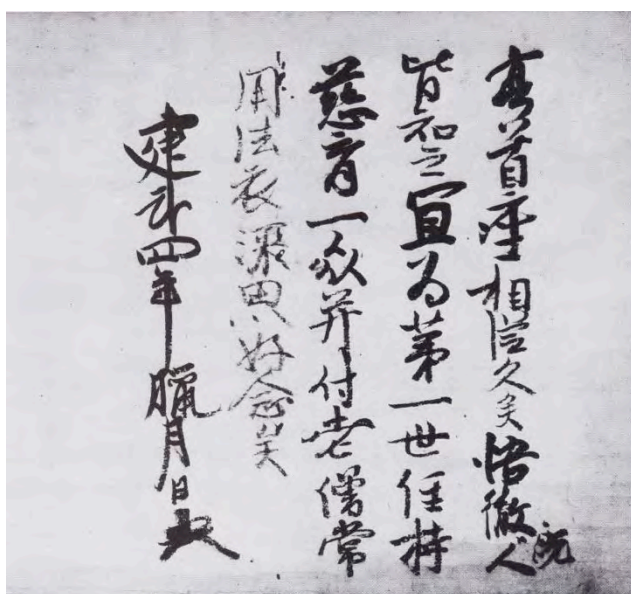


图6 徹翁大德寺一世置文（大德寺）



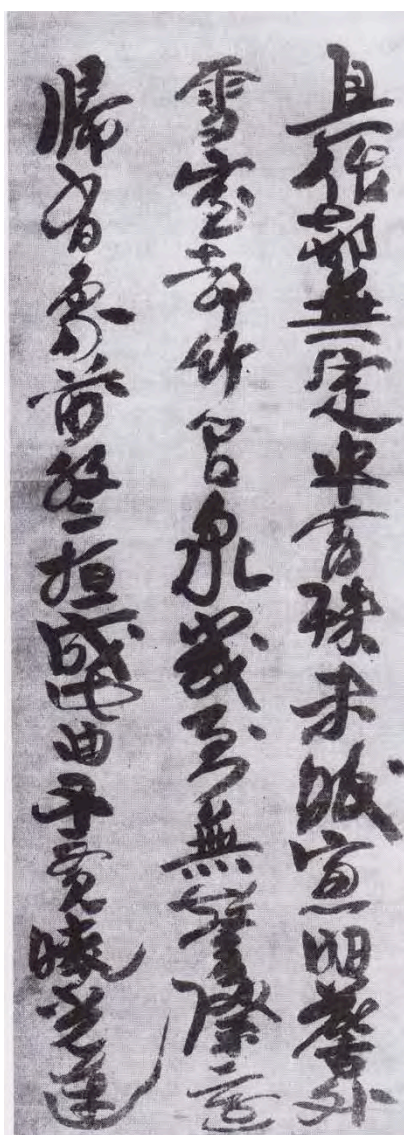


图7 興作偈（出光美術館）

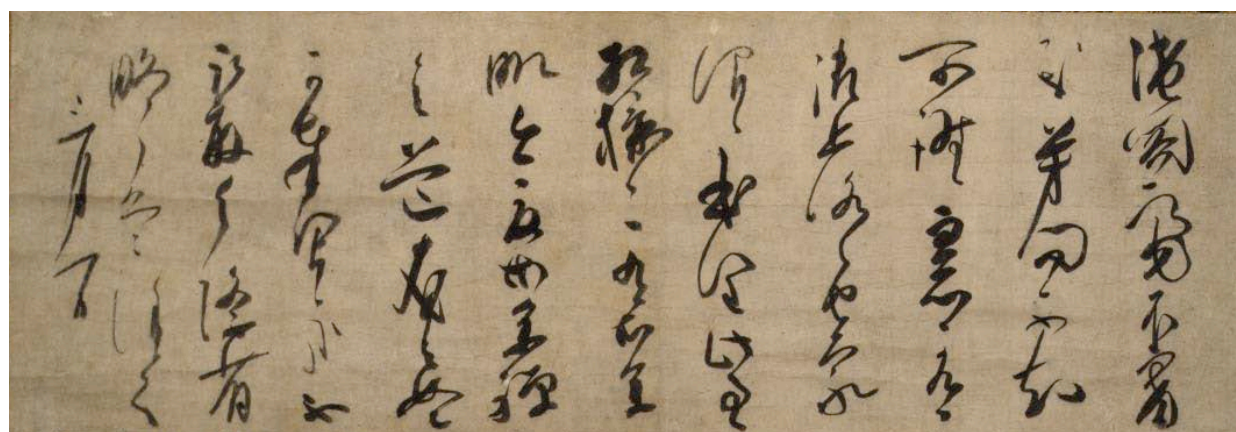


图8 消息（三月一日付）（東京国立博物館）



雲門玄關也 幾乎同結  
一而透得雲關之南山東西流注通  
夕霞朝遊無賓主脚頭脚底  
清風  
透透雲關無客路青天白日  
家山機軸面交親人到金色輪  
拱手還  
如雲懷如是若不孤負 師言代傳賜  
一言近擬席故都莫惜 尊意 爲  
大幸耳  
你既明投暗合吾不如你吾宗  
到你大立處只是二十年長養  
使人知此證明矣爲妙語禪人  
書 巨福山 西浦 如明臣

図9 投機偈（大徳寺）

年乃生巖上有月為澄心  
 意水非無復他山自有春  
 白雲收海而任日上天心  
 泉聲中夜後山色夕陽時  
 無力不到雲河聲流而西  
 泉涌際天地乃生戶外端  
 山中曾演室月色與泉聲  
 爭私王化升依回好山青  
 山色和烟白松聲帶露空  
 天共白鳥遠水和月流  
 紅霞穿碧落白日遠溪存  
 平原秋樹色沙麓暮鐘聲  
 百中掩不知梅苑先漏泄  
 有梅添月色無竹欠松聲  
 嵌梅殘雪後可與半梳時  
 雪梅中寒處月標上殿  
 王城野汝水第流  
 江山月自照一十三峯  
 陰陽不到雲百中盡抽芽  
 有水帶含月無山不帶了  
 看未布爾小半色華山可  
 到江吳地盡隔岸越山夕  
 乃吐波中月天接雨外山  
 泉聲到地響山色上樓多  
 華岳連天碧雲河徹底流  
 月為潭中影乃生山有衣  
 海暗三山雨白的五嶽春  
 仇池此十九嵩少三十六  
 五九零時又逢雪  
 雪霜零必先草的  
 梅白露出秀以而  
 春信潛通雪裏梅

图 10 手抄二卷 (芳春院)



大川和為 信山為法研也。後自云德之嗣也。云信山宗景嗣也。  
 編 吾早歸切連。典切繼。近輔以。吾早。少不難於。師。學。近。受。徒。而。滿。故。也。  
 大解脫門開把手拽不入 雪峰。綠。曰。向。你。還。不。乾。坤。是。个。解。脫。門。總。不。肯。入。但。如。在。裏。許。亂。走。也。竟。在。解。脫。門。外。是。个。人。師。胡。張。重。木。也。  
 方丈 招帖 云他類切帛書署  
 夜明符 此符。其。來。山。事。曰。同。身。是。一。元。不。老。時。年。山。元。心。動。洞。為。諸。長。流。手。執。一。一。象。个。如。天。  
 正按旁批 寶劍。或。而。按。或。手。提。也。云。批。提。劍。印。云。後。今。事。夏。收。羅。美。旅。事。源。是。用。  
 放過一著 能。得。亦。中。云。本。一。不。得。幸。二。一。落。也。云。二。一。著。云。諸。茶。有。云。  
 佛手授手不及 梵。經。曰。佛。性。常。信。現。在。無。過。三。世。切。中。生。起。不。能。得。受。千。佛。佛。手。授。手。世。不。能。惡。道。八。難。中。人。天。中。

圖 1 1 大川普濟錄（龍光院）



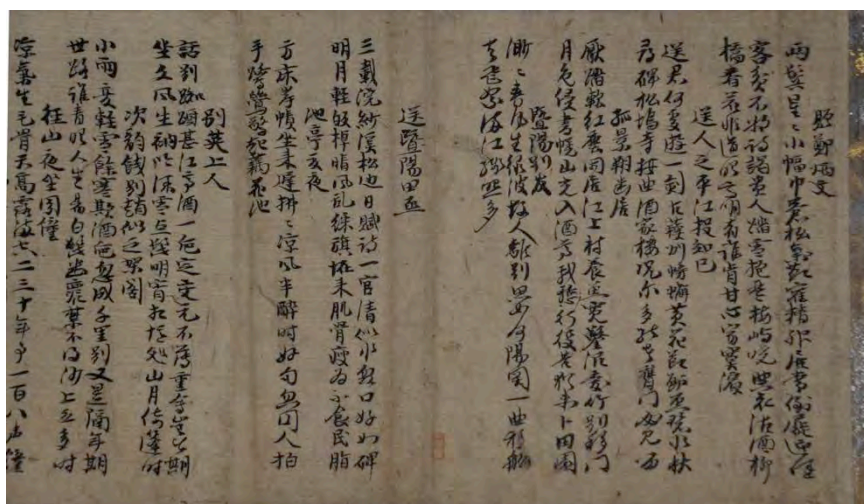


図 1 2 白雲集（福岡市美術館）

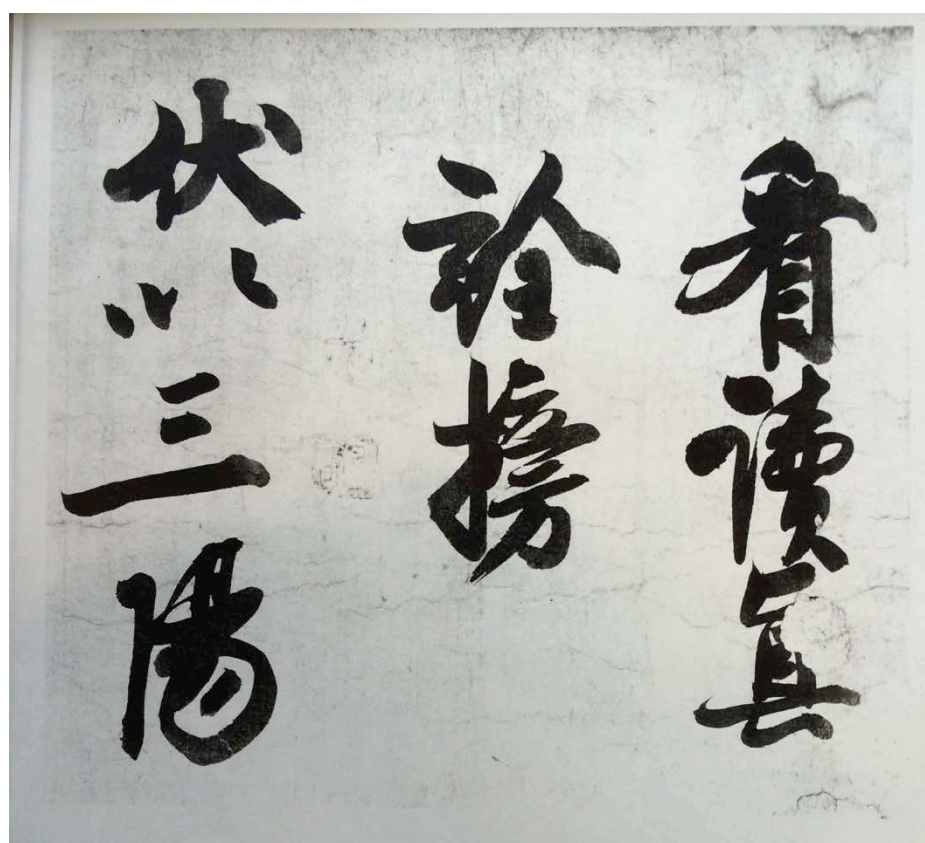


図 1 3 看讀真詮揚（真珠庵）

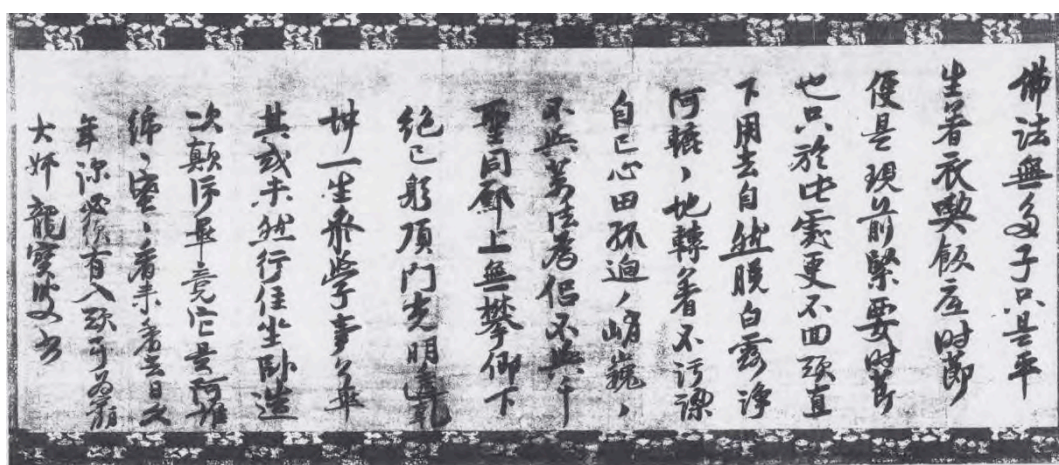


图 1 4 与宗明大姉法語（根津美術館）



## 第二章の図版

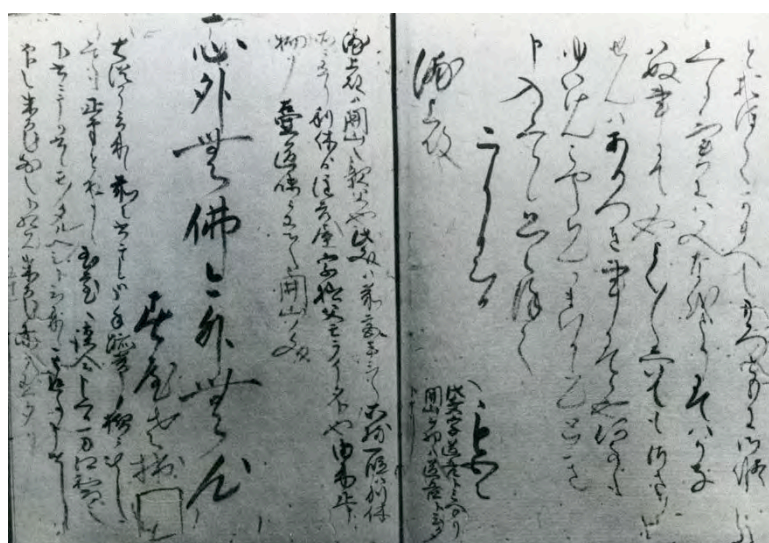
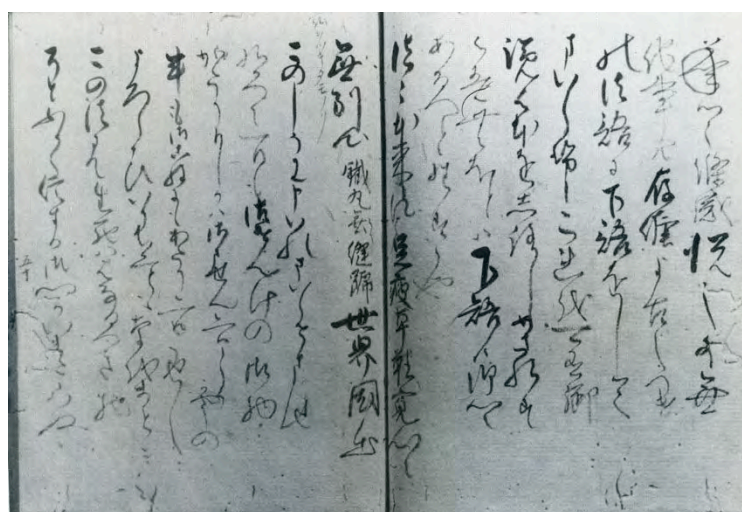
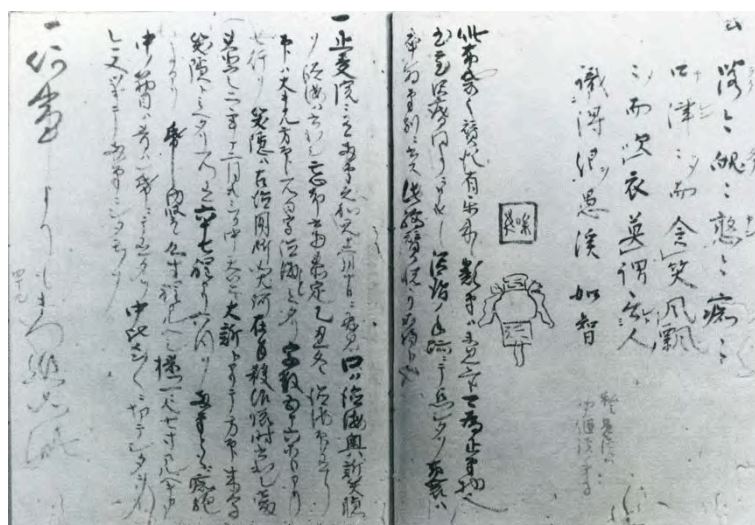


図15 江月宗玩『墨蹟之写』中の大悟時代の墨蹟  
(順に右上、左上、右下)

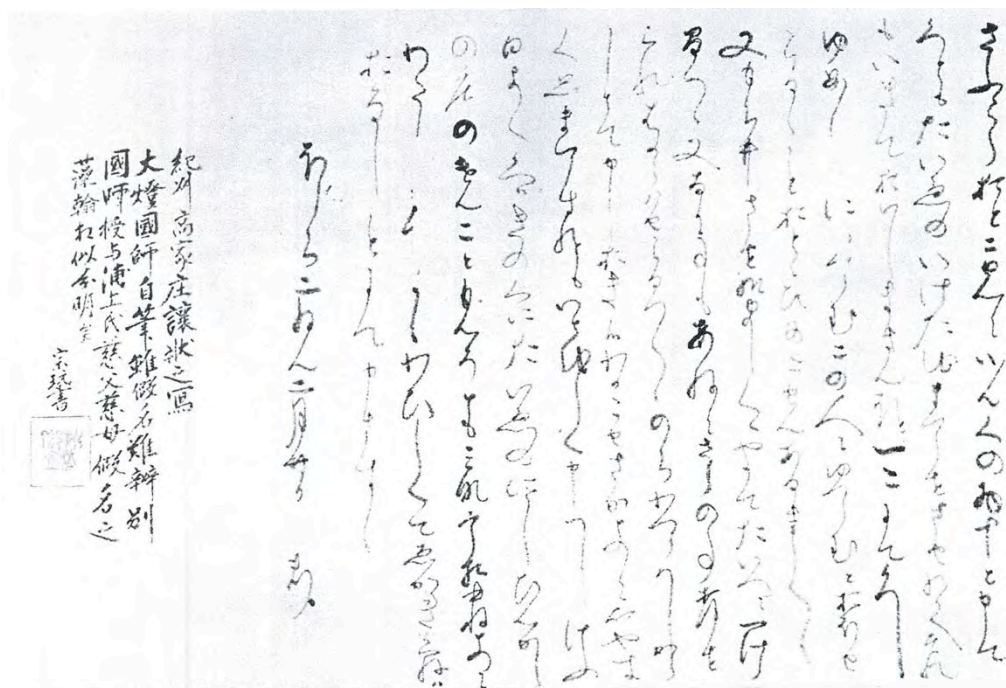


図 1 6 写本讓狀紀州高家莊（龍光院）

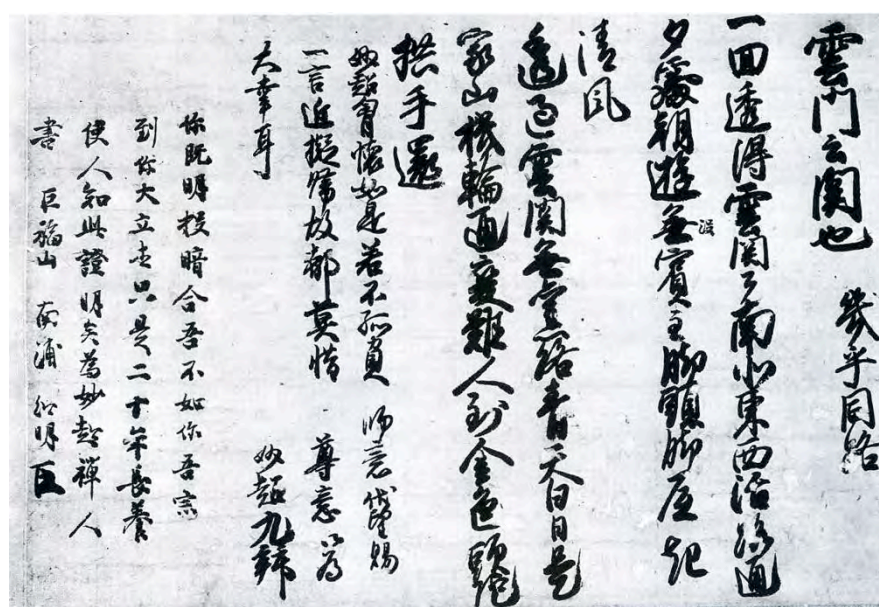


図 1 7 投機偈（大徳寺）



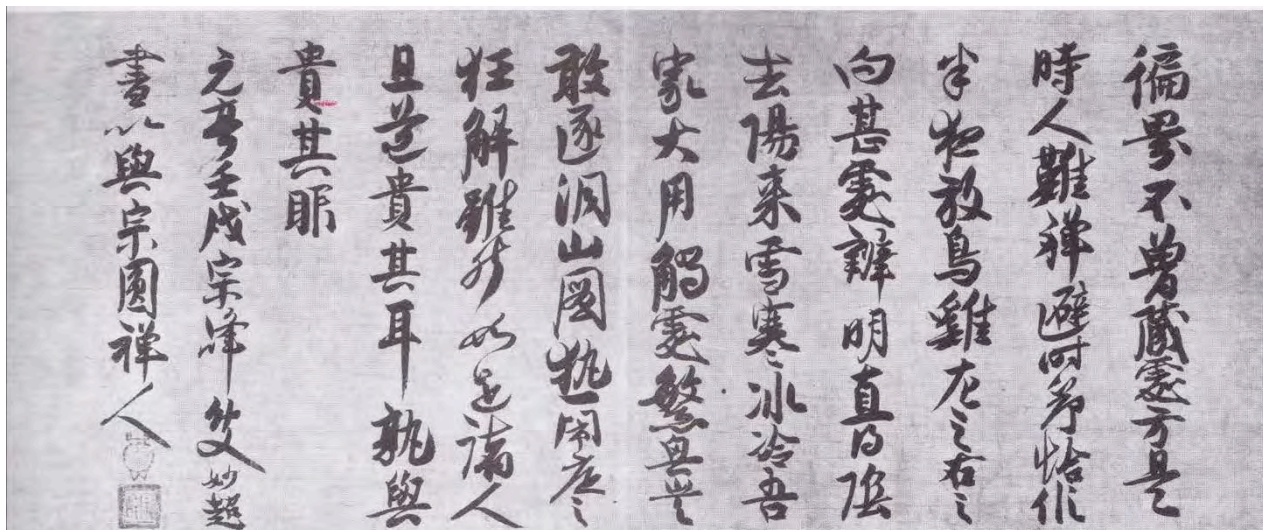


图 1 8 与宗圓禪人法語（根津美術館）

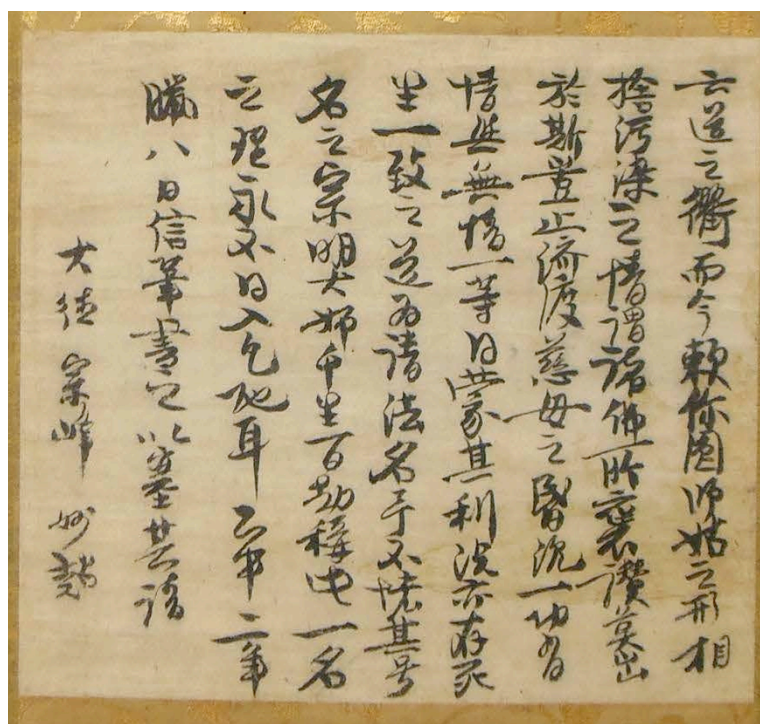


图 1 9 与宗明大姊法語（永青文庫）



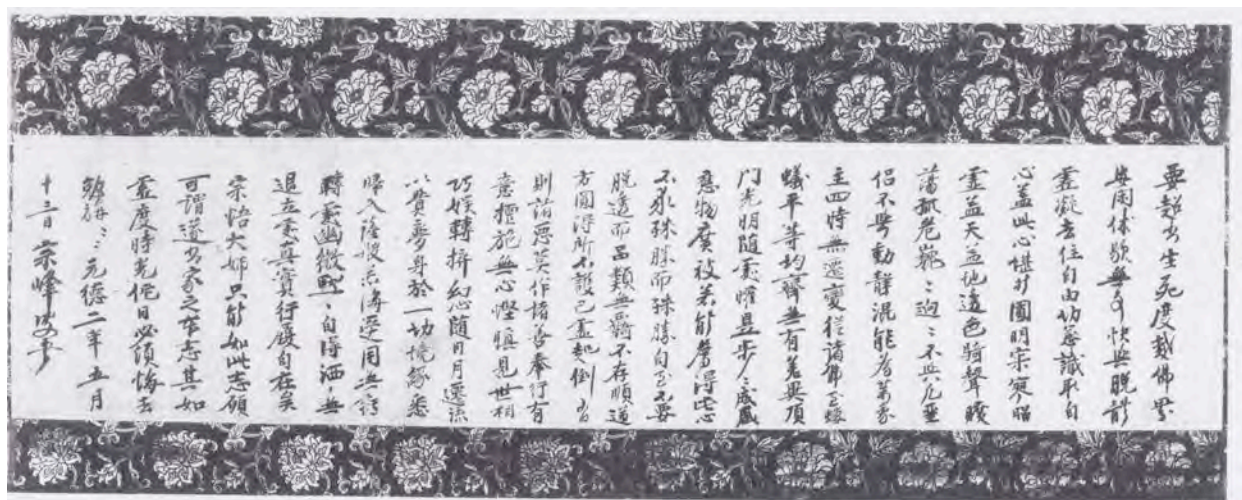


图 2 0 与宗悟大姊法語（大仙院）

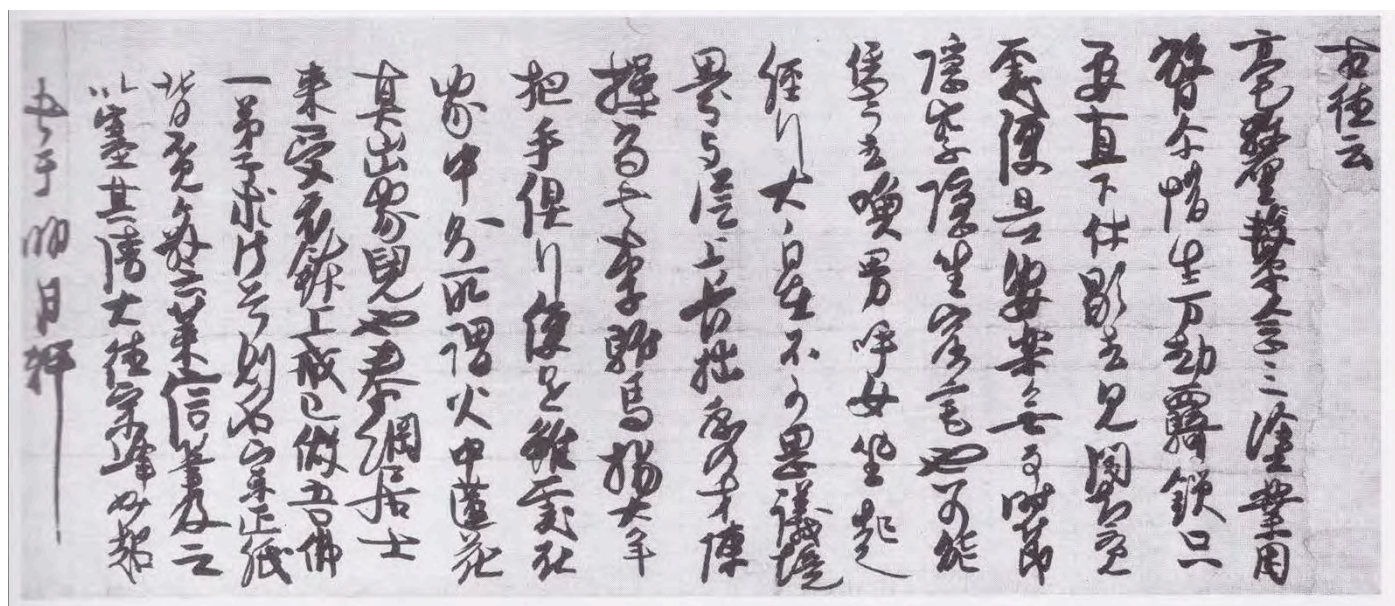


图 2 1 与泰綱居士法語（湯木美術館）



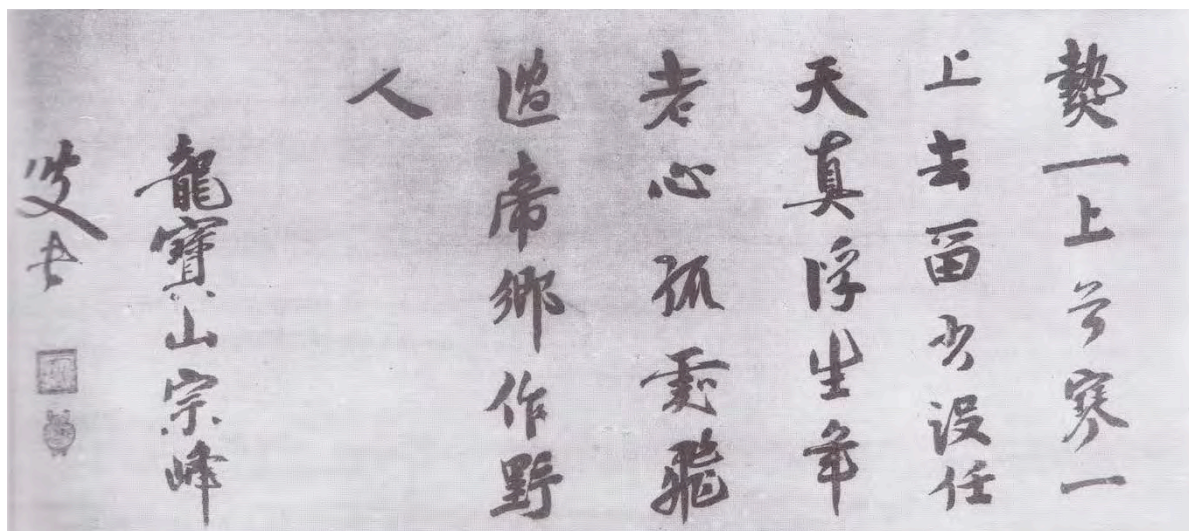


図 2 2 七言偈（「熱一上」）（藤田美術館）

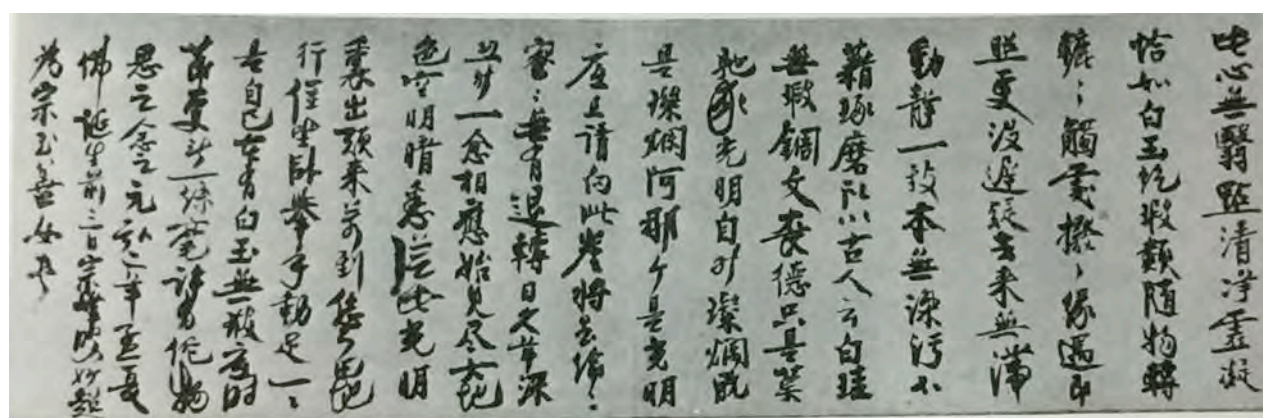


図 2 3 与宗玉善女法語（水府明德会）



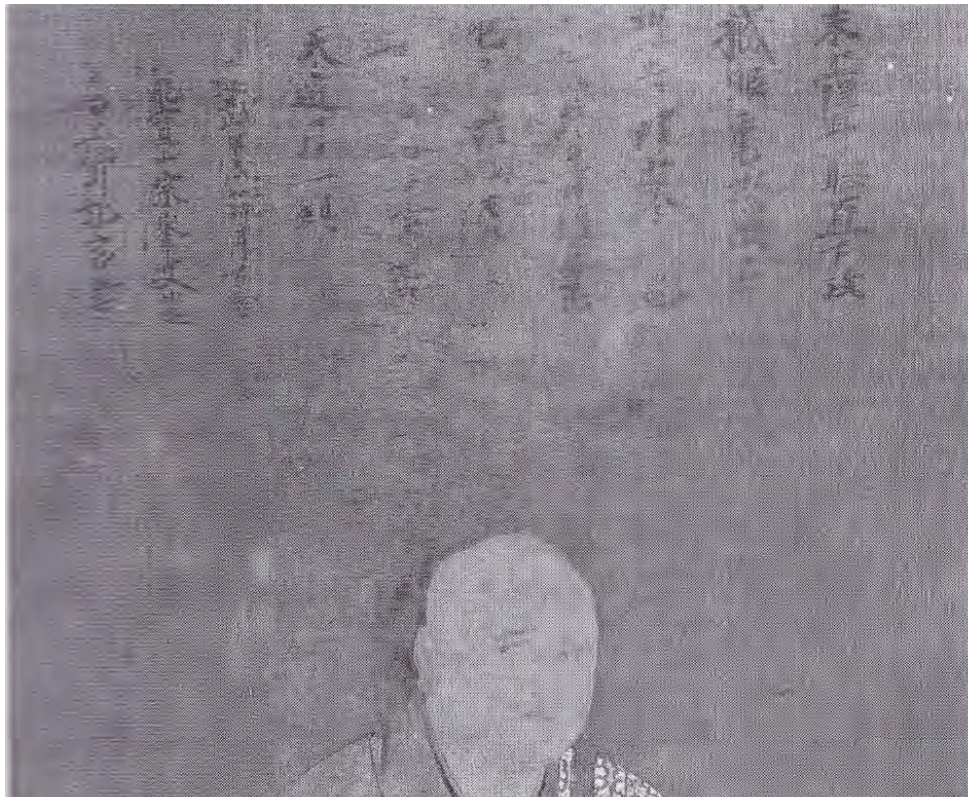


图 2 4 宗峰妙超像（大德寺）

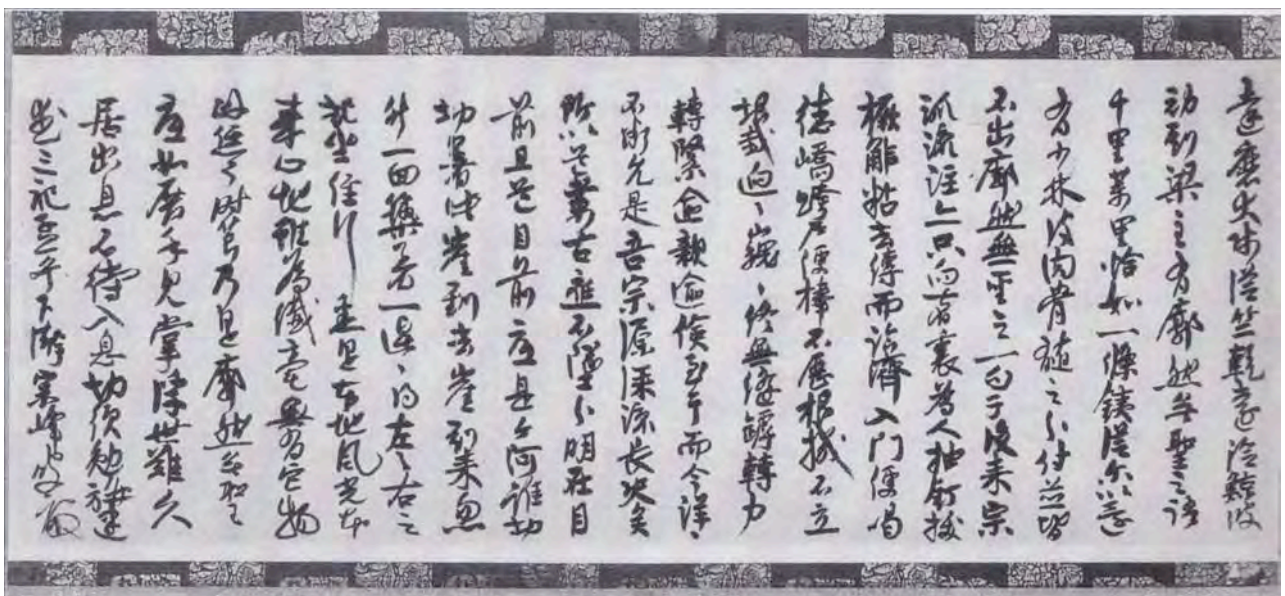


图 2 5 示衆法語（孤峰庵）



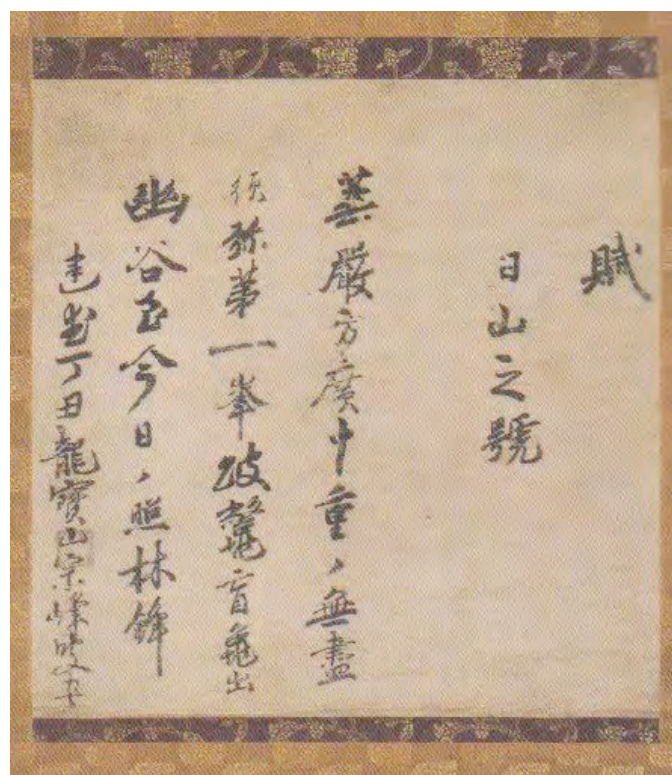


图 2 6 日山之賦（個人藏）

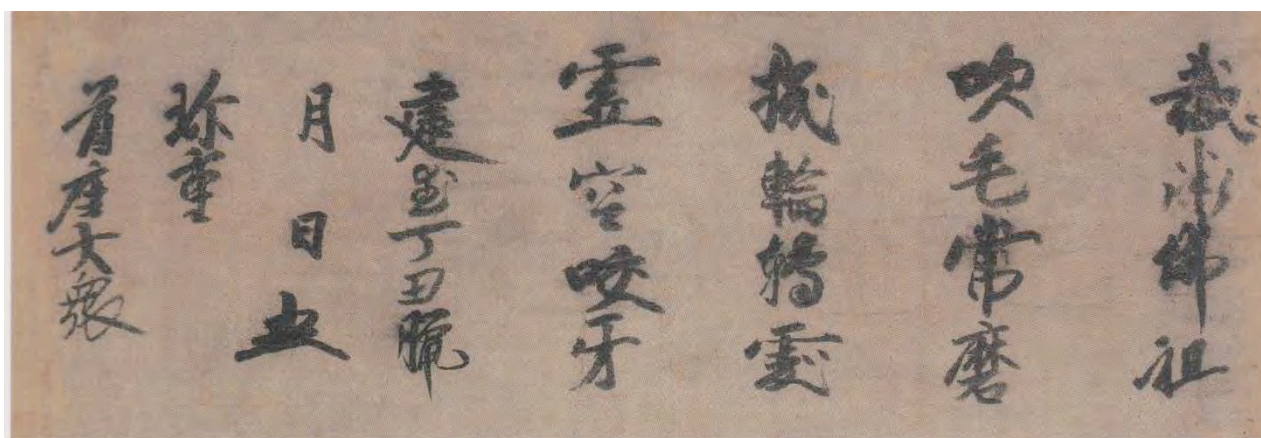


图 2 7 遺偈（大德寺）

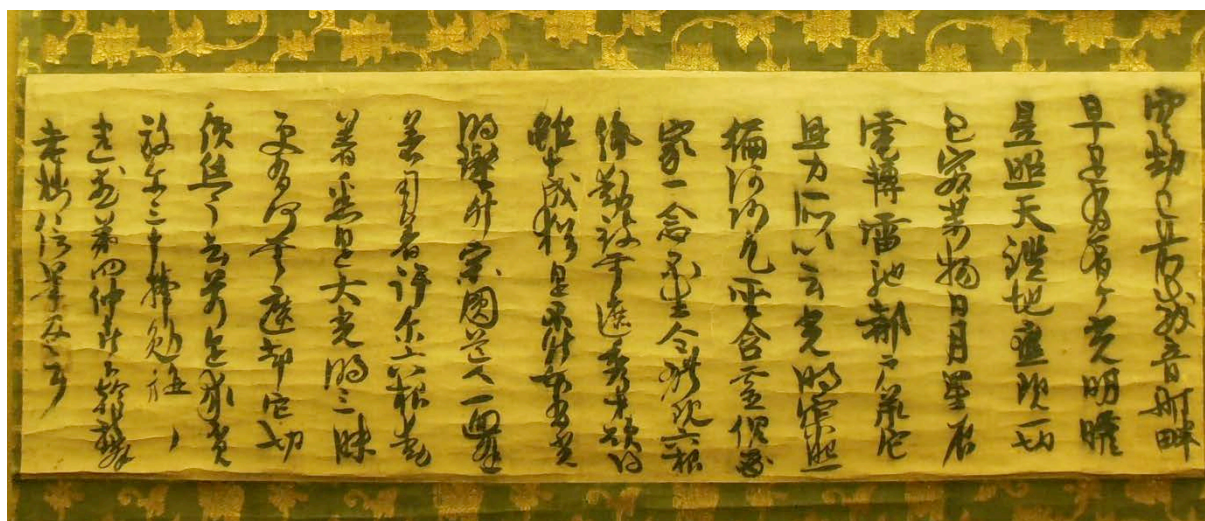


图 2 8 与宗圓道人法語（梅澤記念館）



图 2 9 徹翁号（德禅寺）



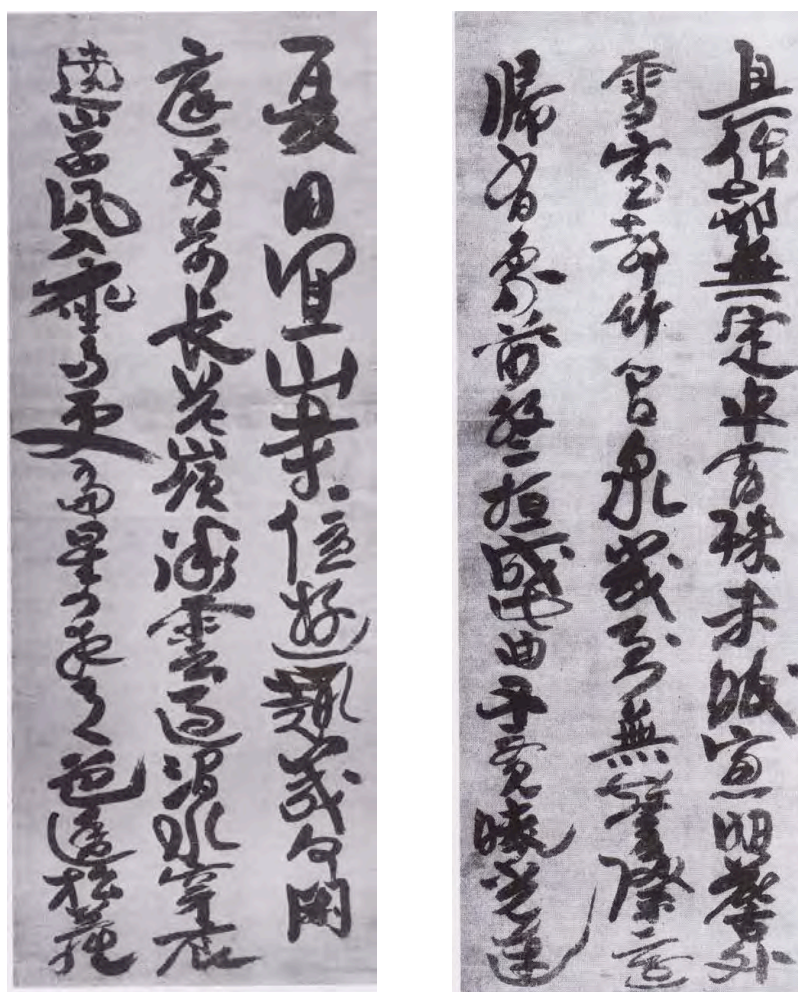


図30 興作偈、夏日偈（いずれも出光美術館）

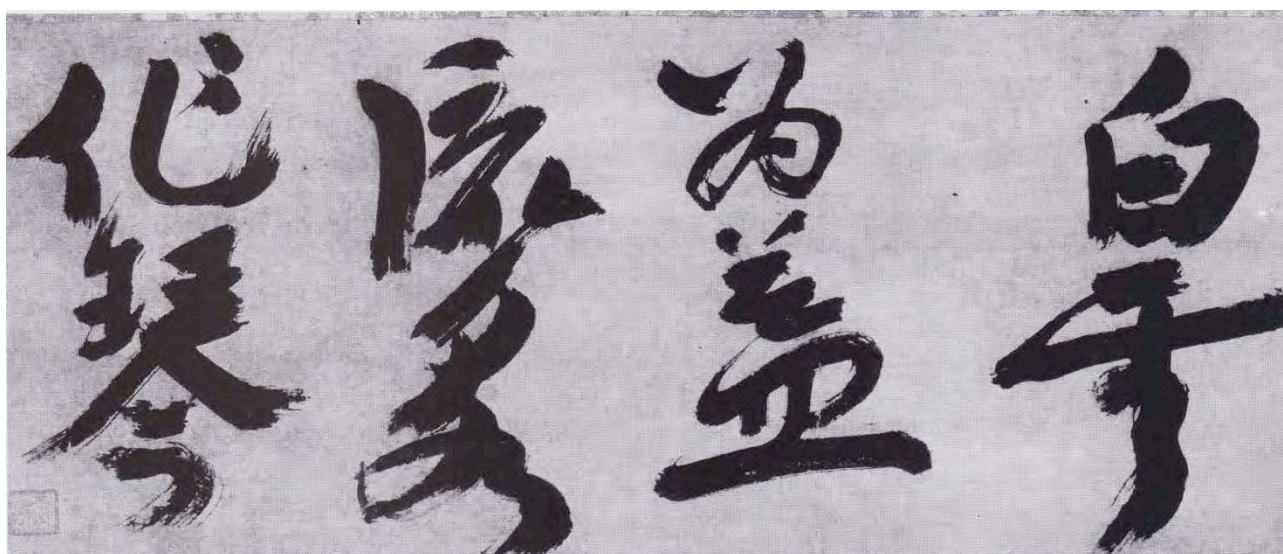


図31 白雲偈（野村美術館）

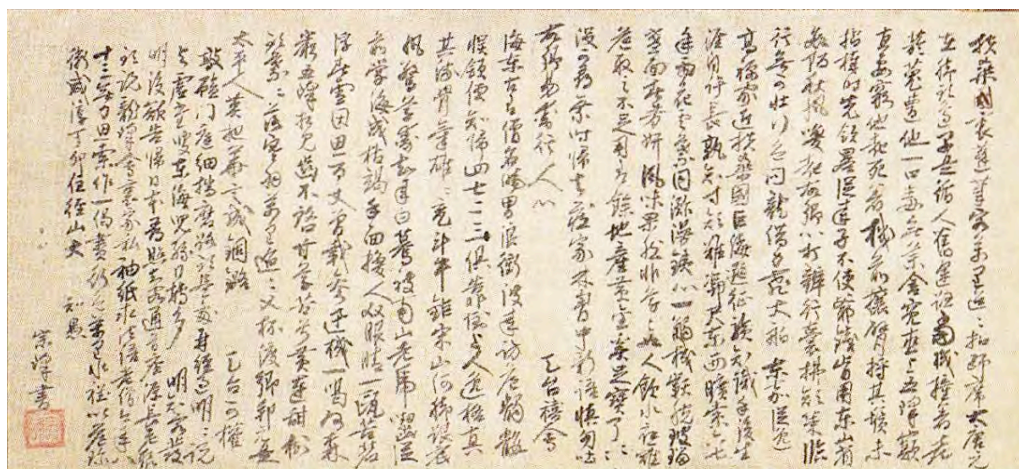


図 3 2 宗峰妙超墨蹟 一帆風（個人蔵）



図 3 3 一帆風（右）と投機偈（左）の文字比較





図3 4 一帆風（右）と景德伝燈録（左）の文字比較

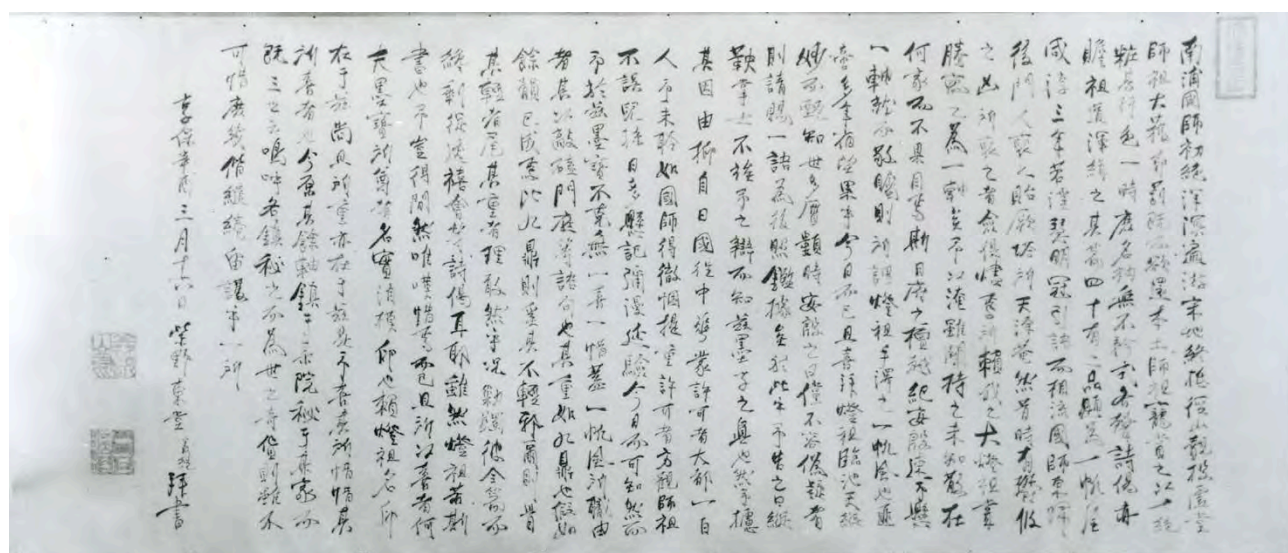


図3 5 大心義統添狀

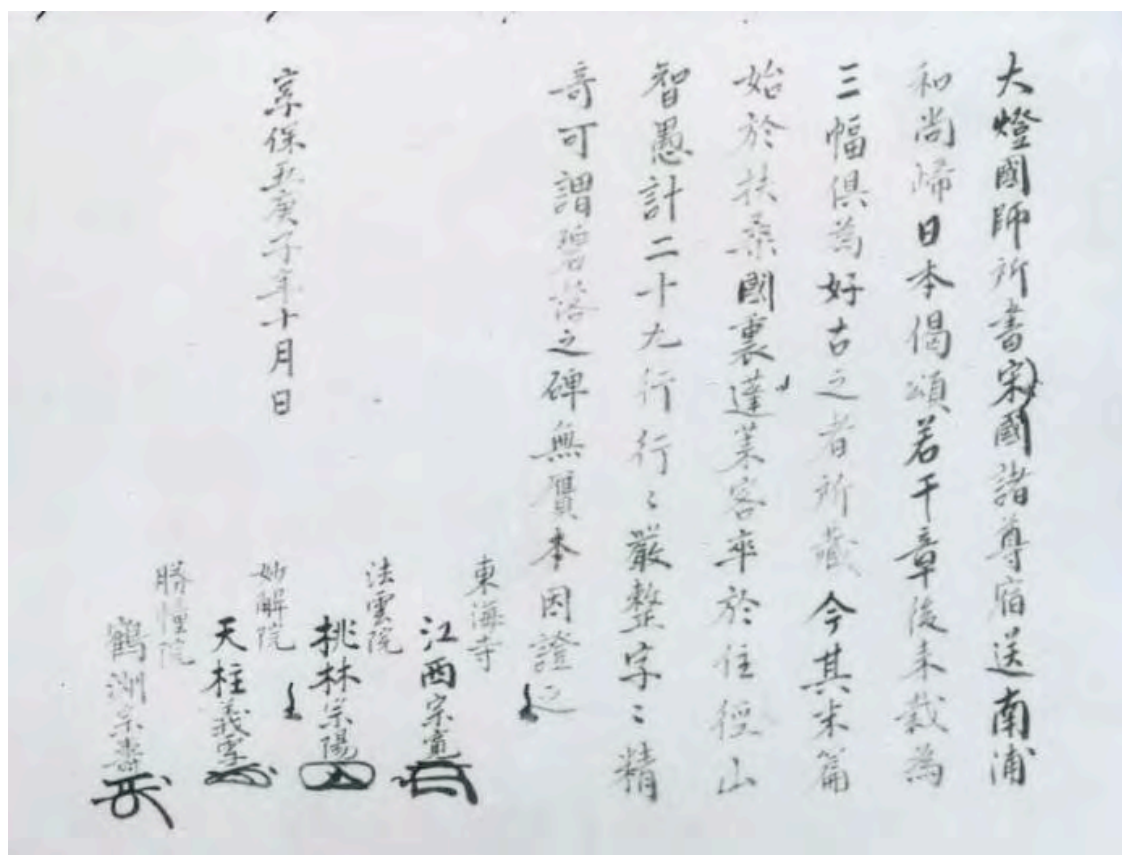


図 3 6 江西宗寛ら添状

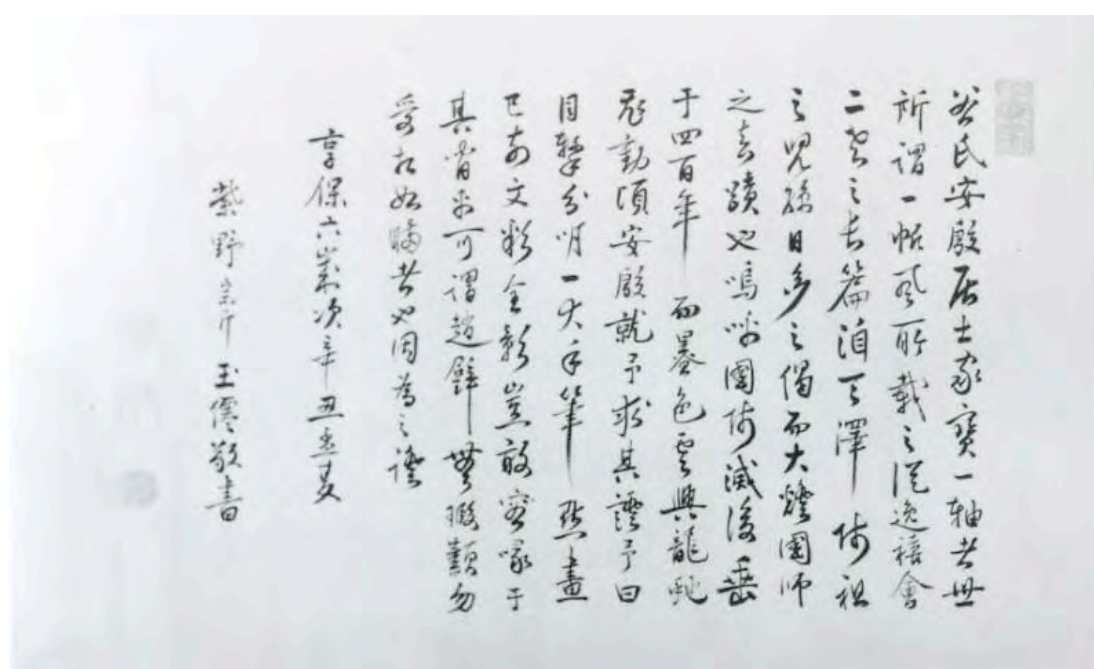


図 3 7 玉僊宗斤添状



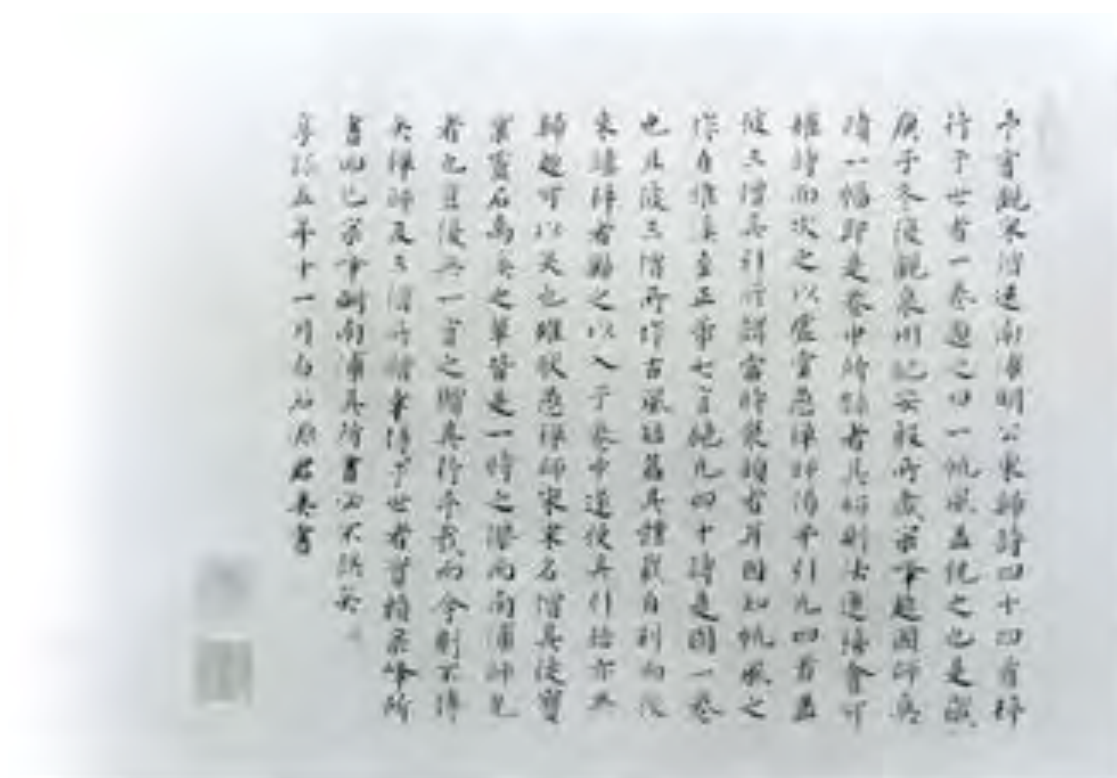


图 3 8 新井白石添状

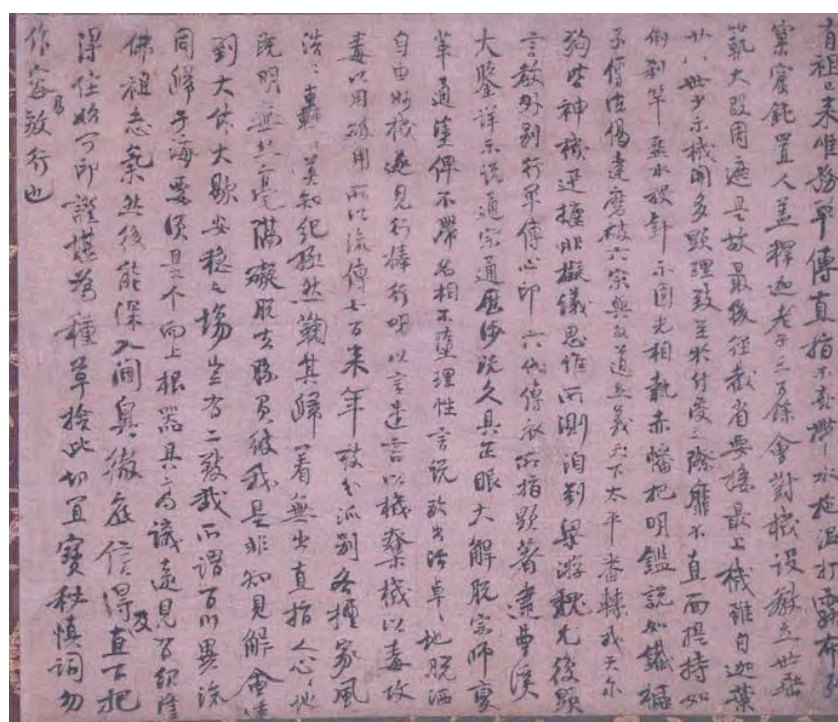


图 3 9 流れ圓悟（東京国立博物館）



図 4 0 物我両忘（個人蔵）

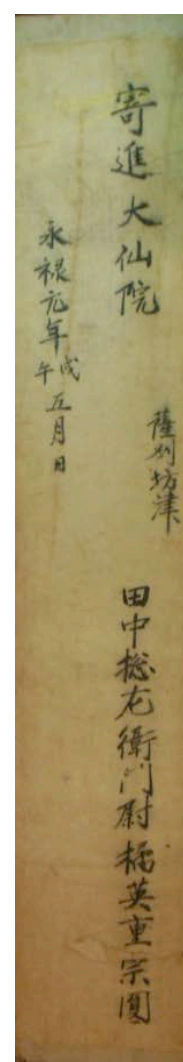


図 4 1 墨蹟を収納する箱裏の貼り紙

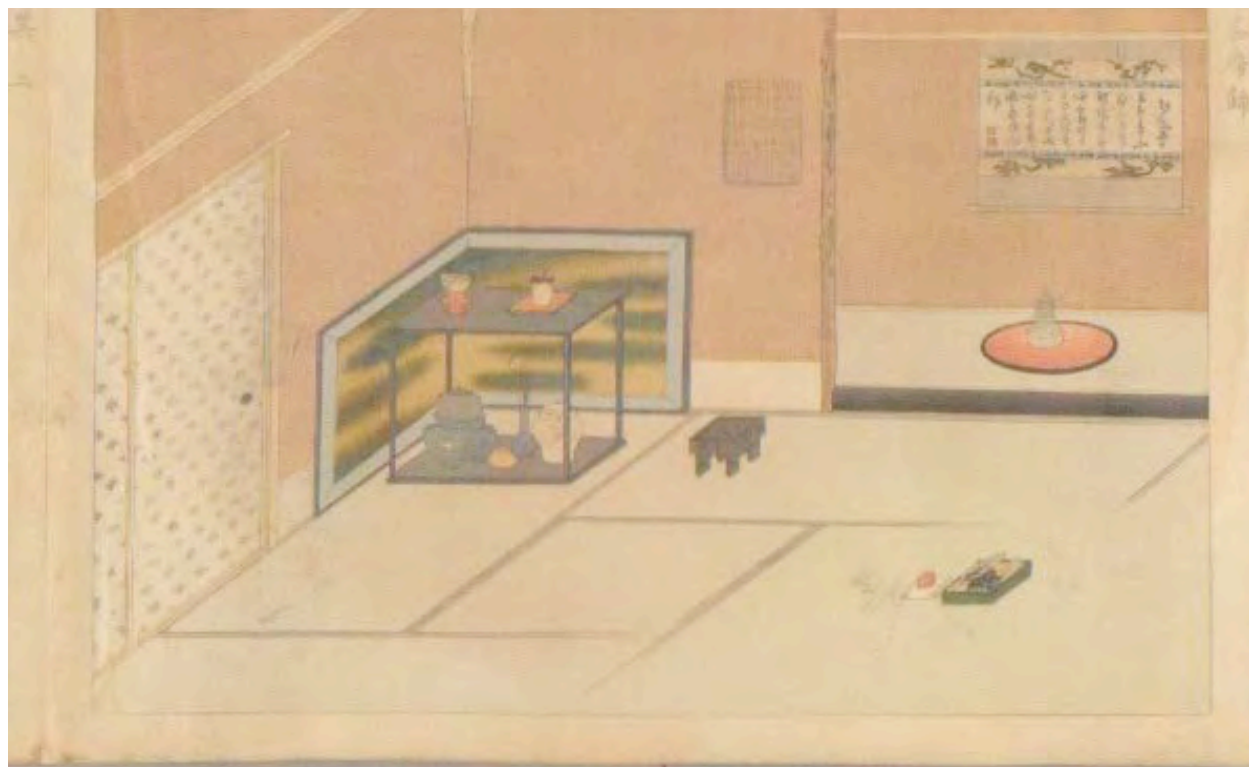
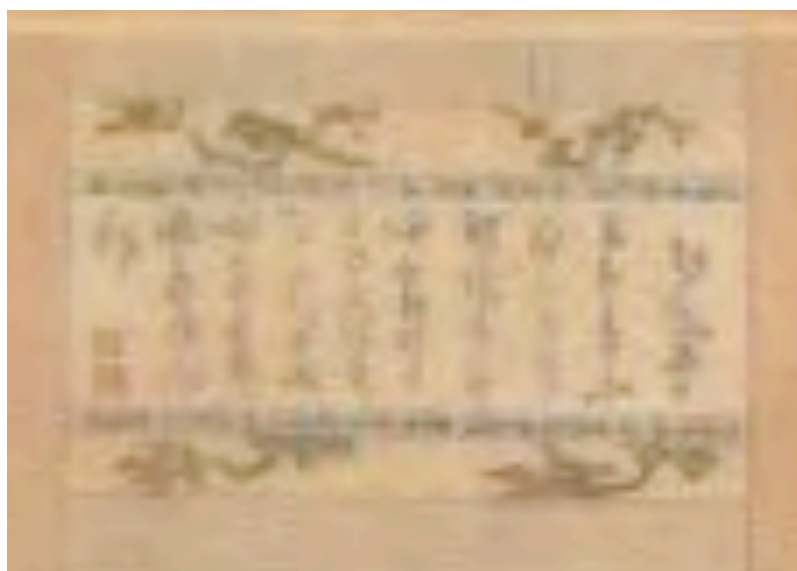


図4-2 『旧儀装飾十六式図譜』における抹茶席の図



同上の掛物拡大（部分）





図 4 3 『御掛物帳』（新発田市立図書館）

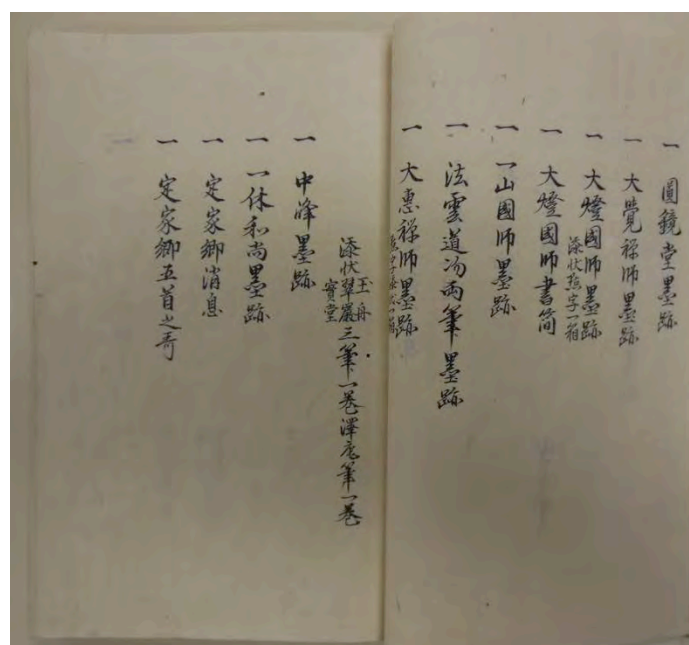


図 4 4 『御掛物帳』「乾坤入之部」

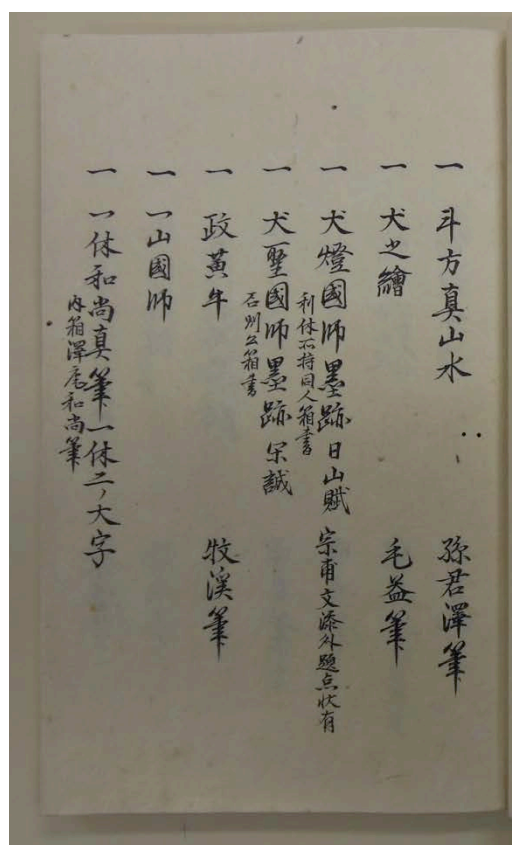


图 4 5 『御掛物帳』「雜之部」

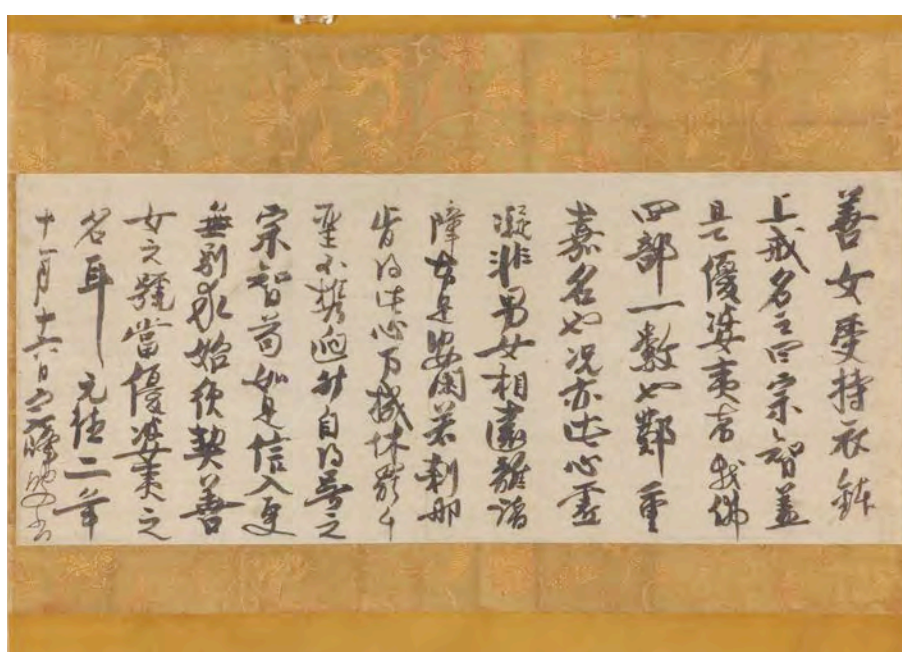


图 4 6 与宗智大姉法語 (MIHO MUSEUM)

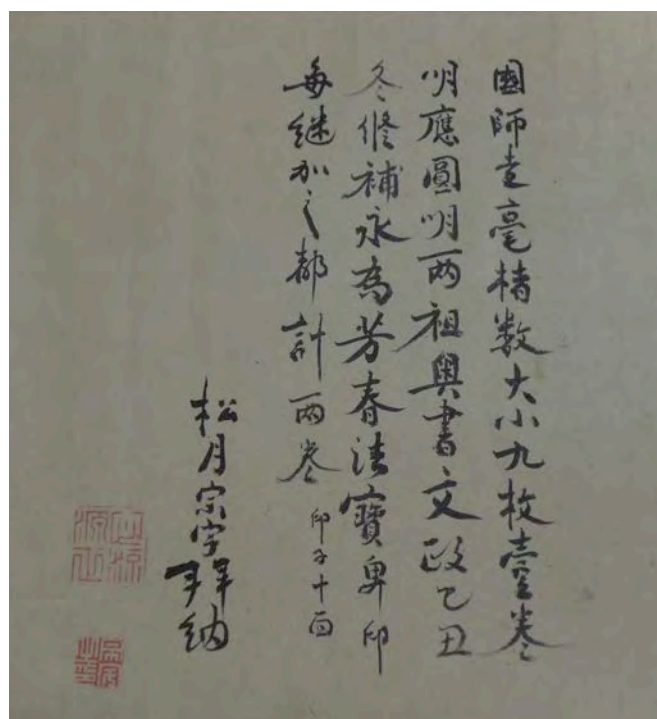


图 4 7 卷一卷末（芳春院）

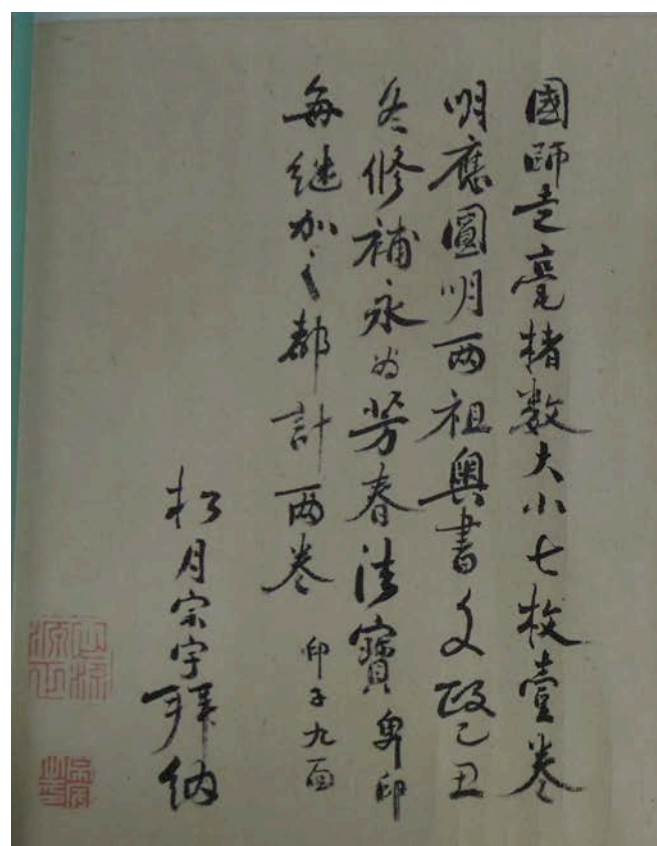


图 4 8 卷二卷末（芳春院）





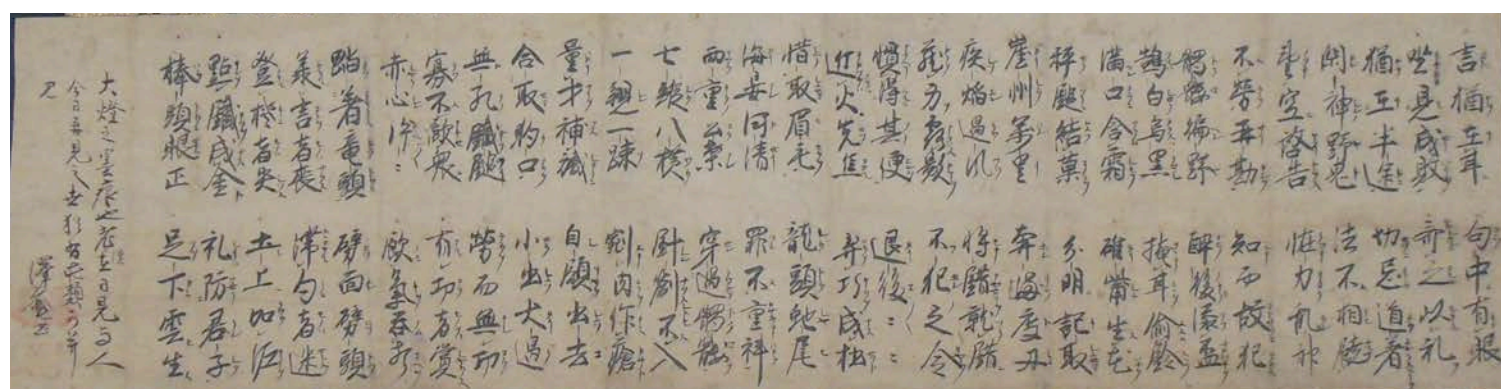


图 5 0 宗峰妙超墨蹟澤庵宗彭証明



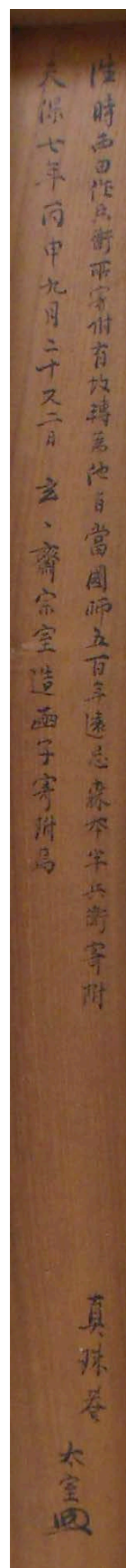


図 5 1 宗峰墨蹟澤庵宗彭証明の箱墨書（個人蔵）

### 第三章の図版

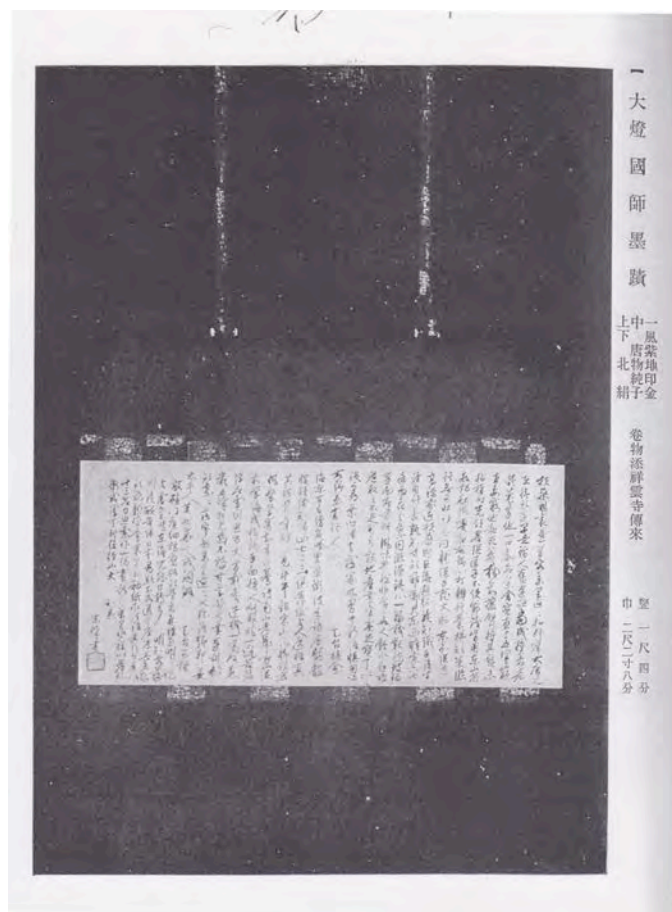


図5 2 某家所蔵品入札



図5 3 『池田清助氏所蔵書画屏風道具類入札』に所載される宗峰妙超墨蹟

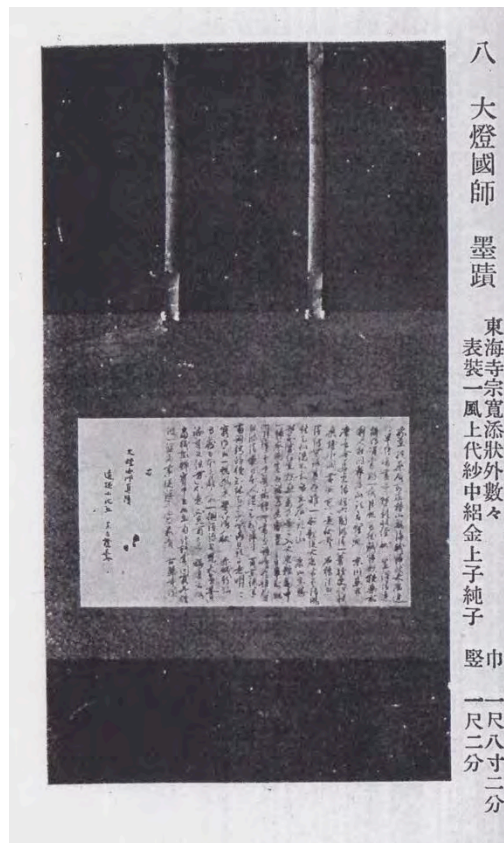


図5 4 『土方伯爵某子爵家御所蔵品入札』に所載される宗峰妙超墨蹟

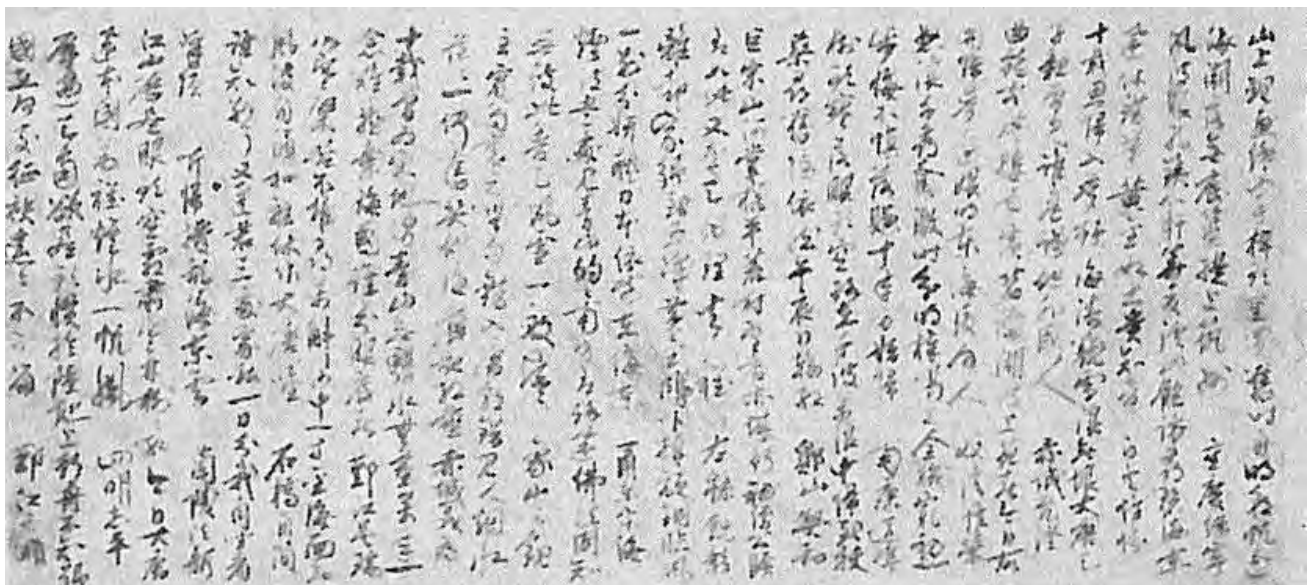


図5 5 『益田信世氏所蔵品入札』所載の宗峰妙超墨蹟



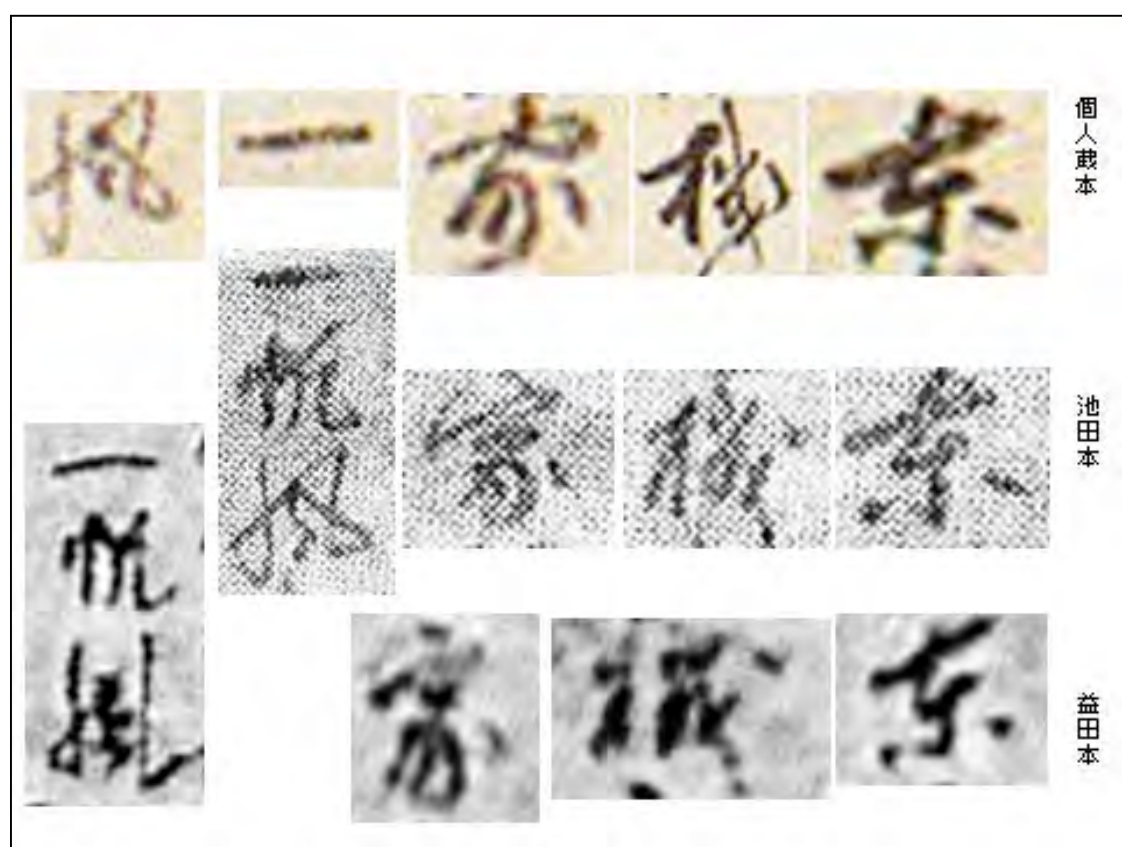


図 5 6 現存する一帆風と売立目録所載二件の筆跡比較

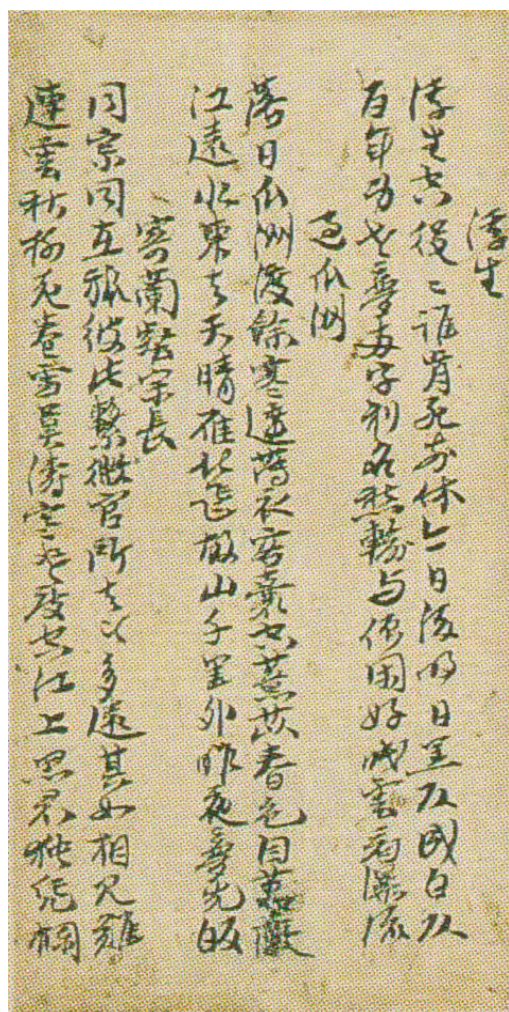


図 5 8 『和美の会』に所載される白雲集断簡

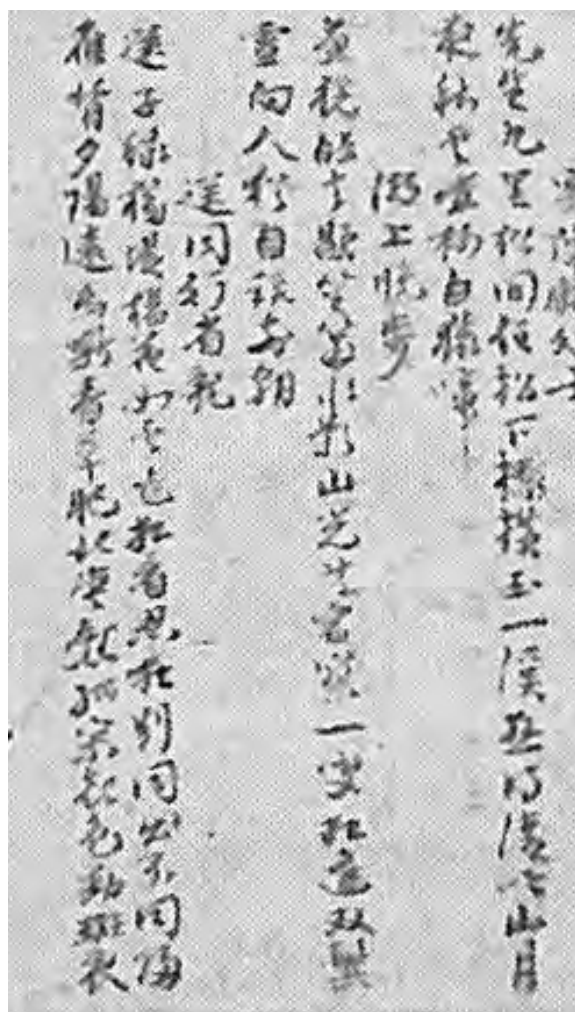


図 5 7 『甲南氏所蔵品入札』に所載される白雲集断簡



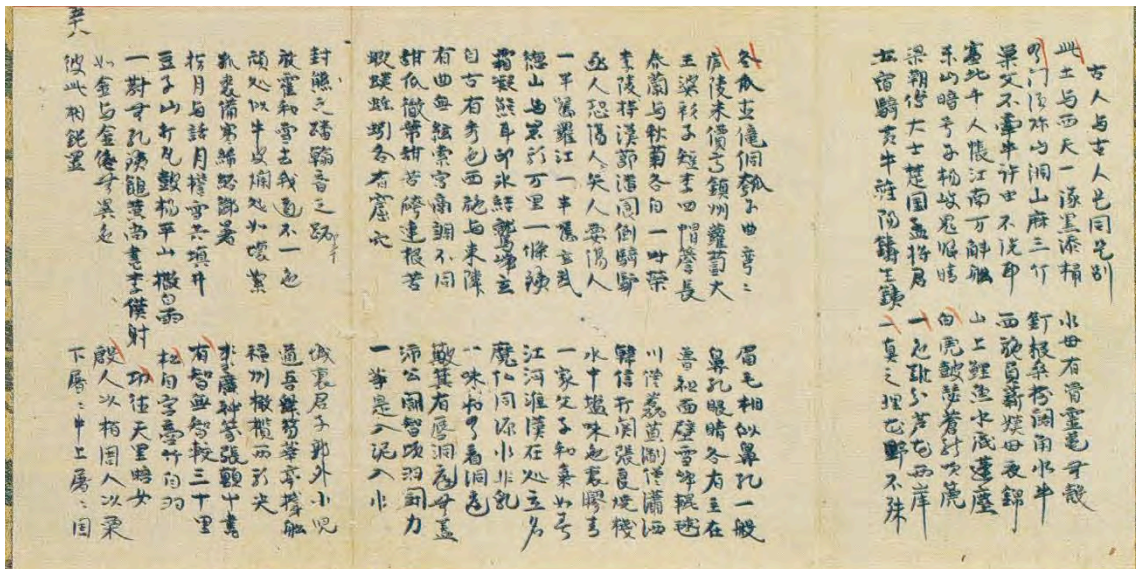


図59 『茶美の会』に所載される手抄二卷（断簡）

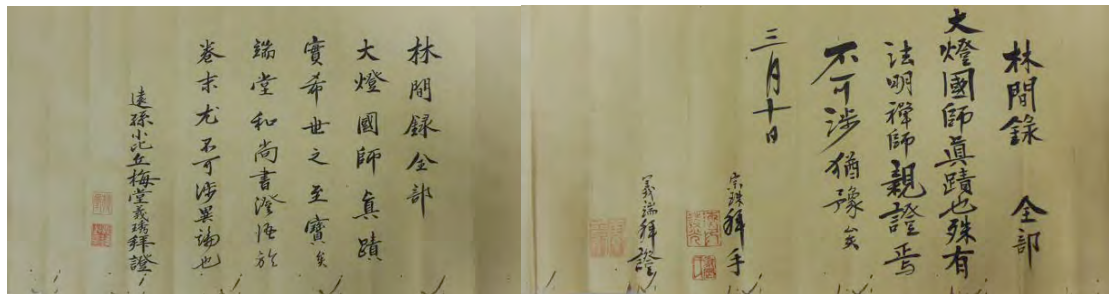


図60 与宗明大姉法語（永青文庫）と一緒に保管される添状

六  
大  
燈  
国  
師

林  
間  
録  
ノ  
記

巾  
豎  
八  
七  
寸  
寸

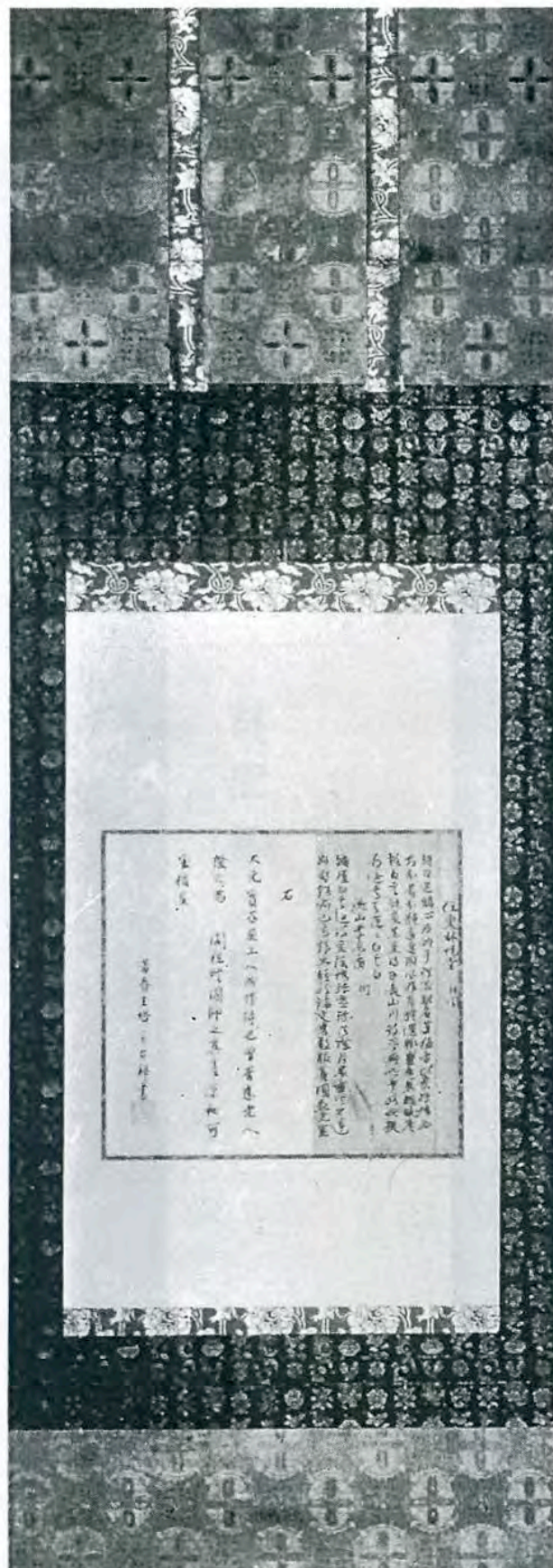


図 6 1 林間録断簡  
『書画美術品洋画展観』所載  
35







図 6 3 禅林類聚膳写卷（『旧大名某家所蔵品入札』所載）

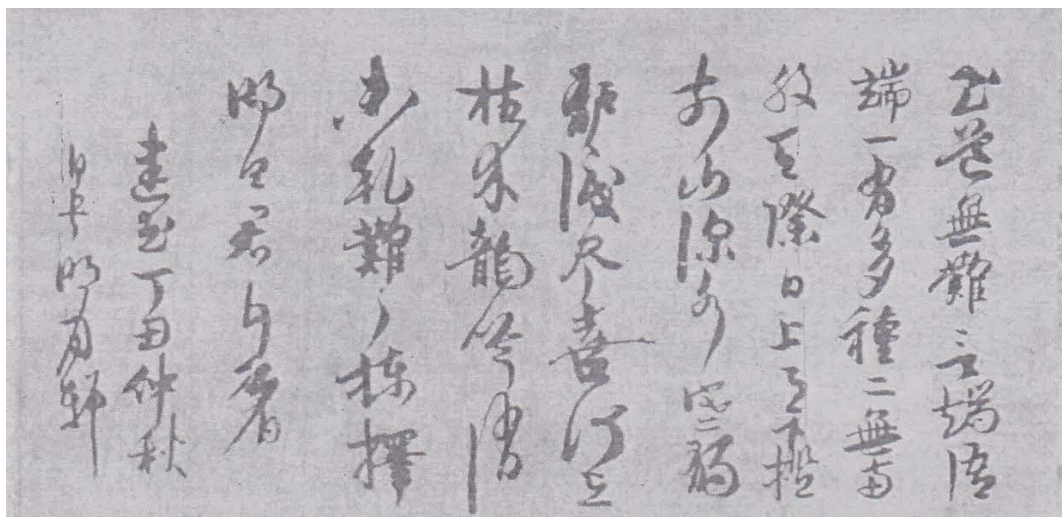


図 6 4 「至道無難」から始まる墨蹟（『某家御所蔵品入札』所載）



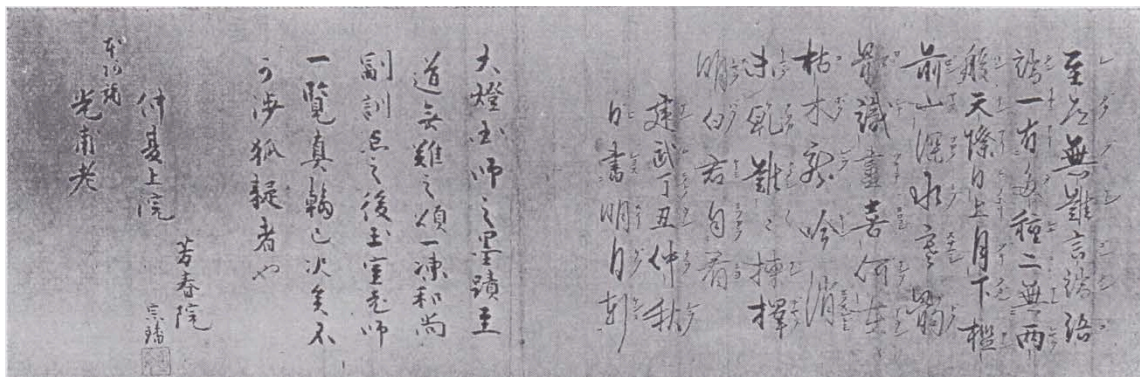


図 6 5 目録所載の玉舟宗璠の添状

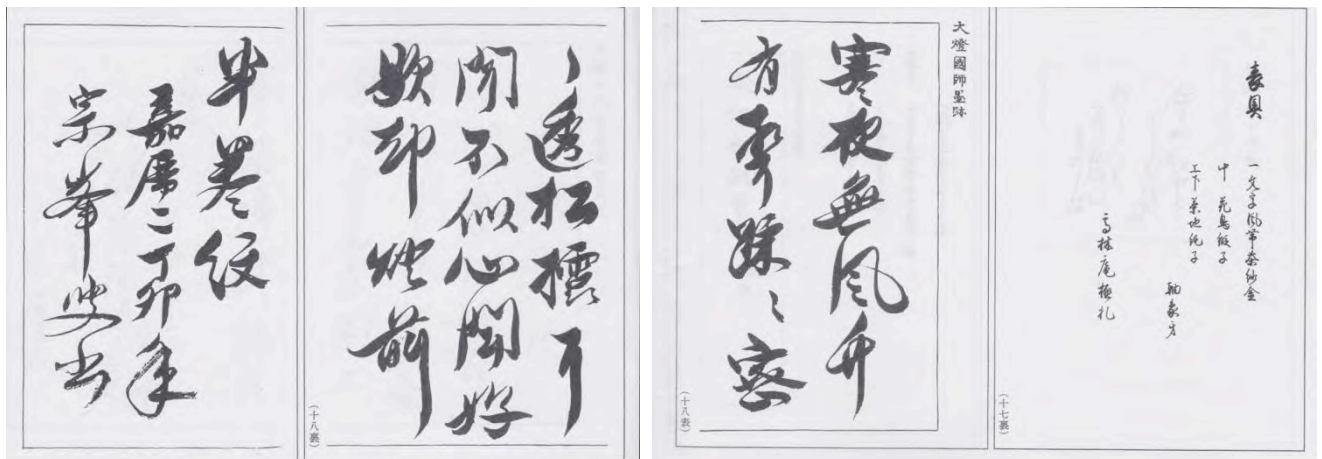


図 6 6 『茶器名物図彙』所載の墨蹟

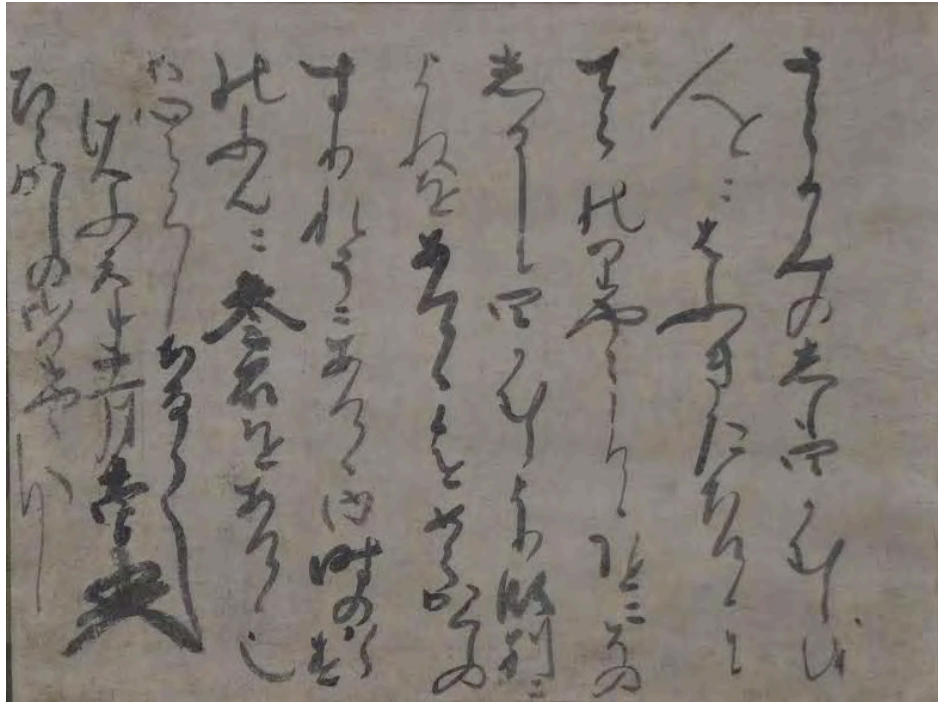


図 6 7 よねの文（福岡市美術館）

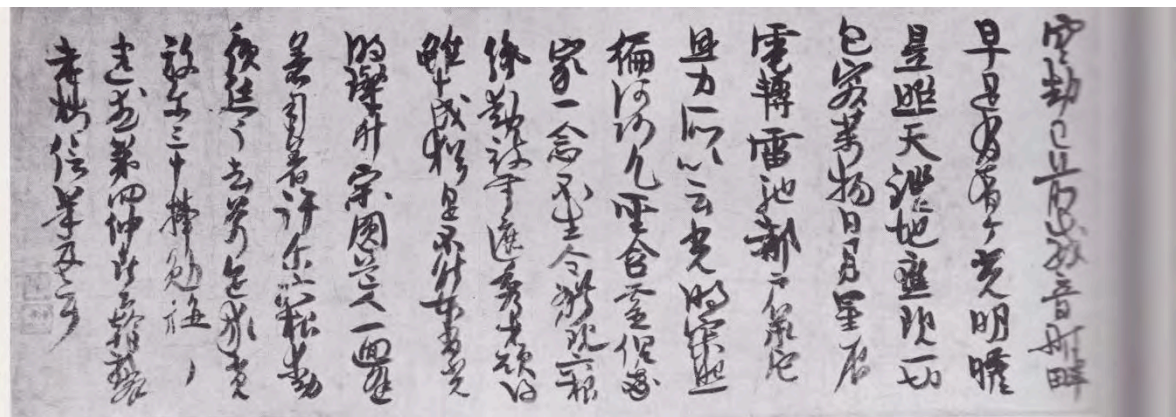


図 6 8 宗峰妙超墨蹟（常盤山文庫）



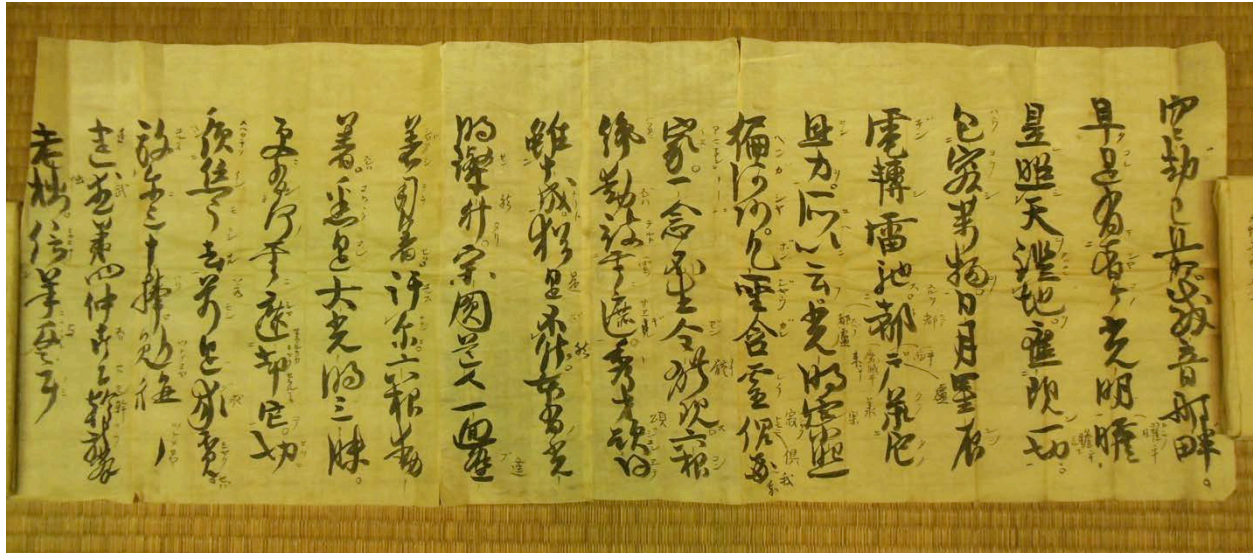


図 6 9 《与宗圓道人法語》の原寸大の模写（梅澤記念館）

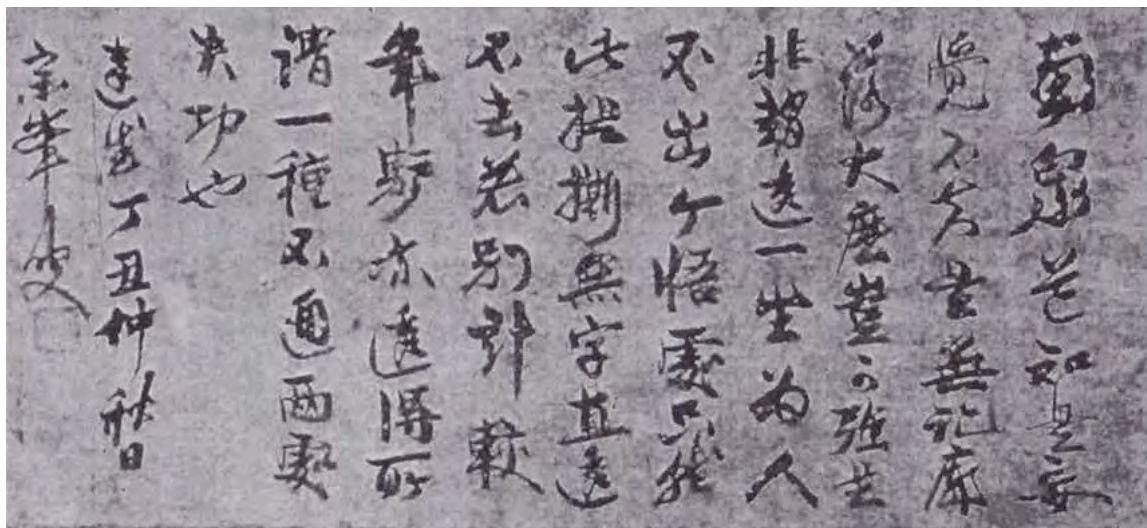


図 7 0 「南泉道知」の書き出しから始まる墨蹟

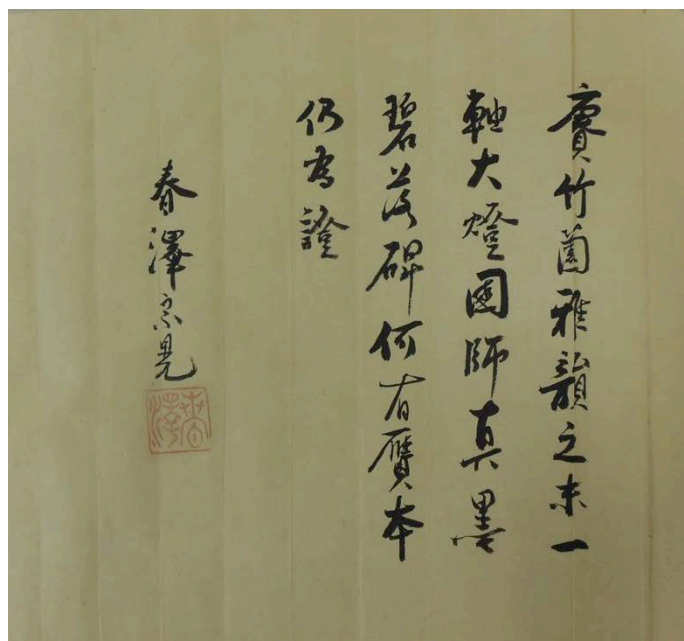


図 7 1 敬春惜詩の春澤宗晃添状（永青文庫）

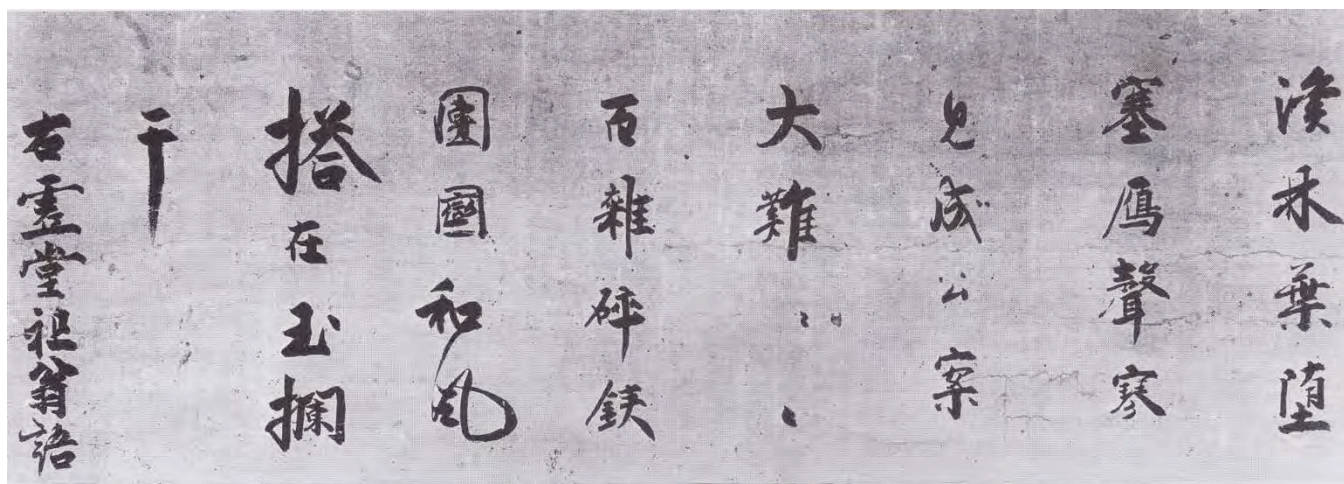


図 7 2 （夙）（九州国立博物館）



図 7 3 外箱裏（九州国立博物館）



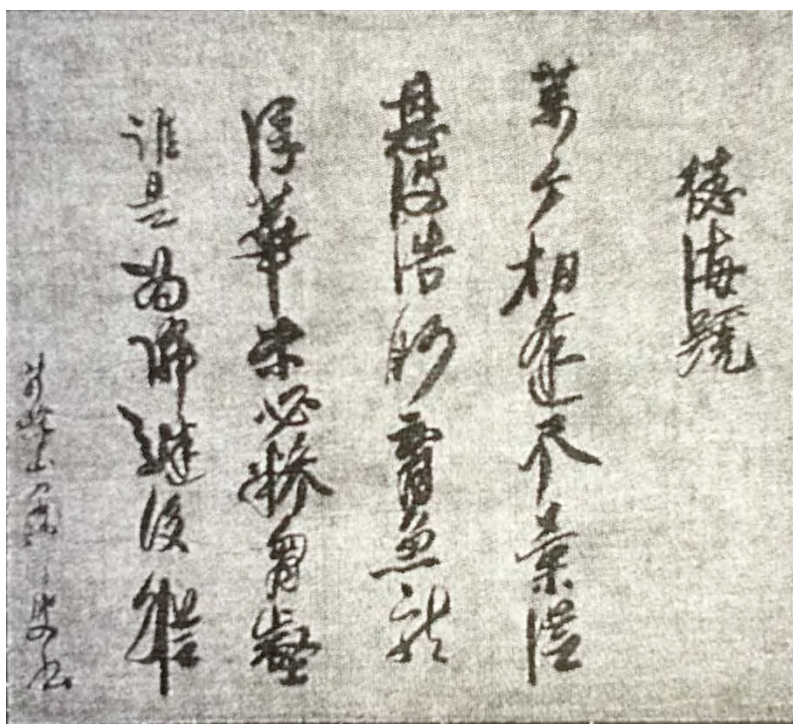


图 7 4 德海号（個人藏）



图 7 5 初花肩衝

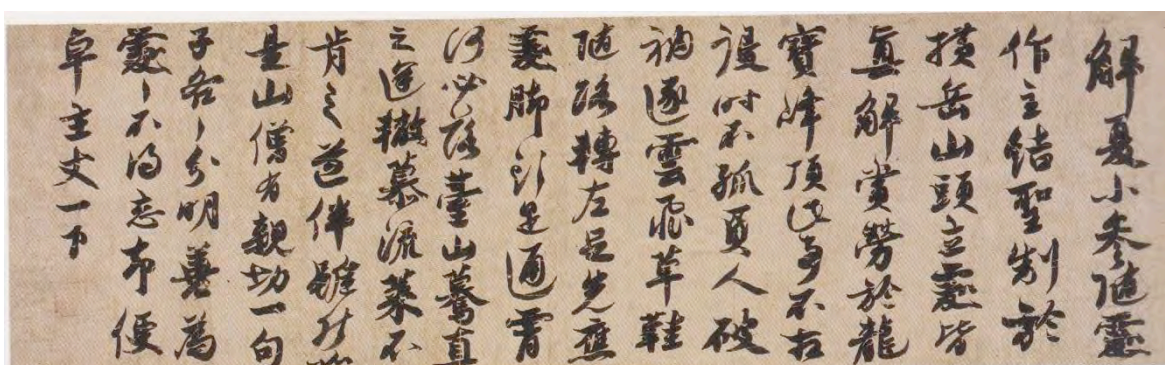


图 7 6 解夏少参法語（大德寺）



溪林我隱室為亭久矣  
 公策火難、百雜砧鍊周梁  
 和風搭旺玉欄干一室

图 7 7 溪林偈（正木美術館）

南嶽七十二峰 華頂菜干  
 丈瞻之無際仰之無垠以此為窮  
 也周祝聖的矣

图 7 8 南嶽偈（正木美術館）



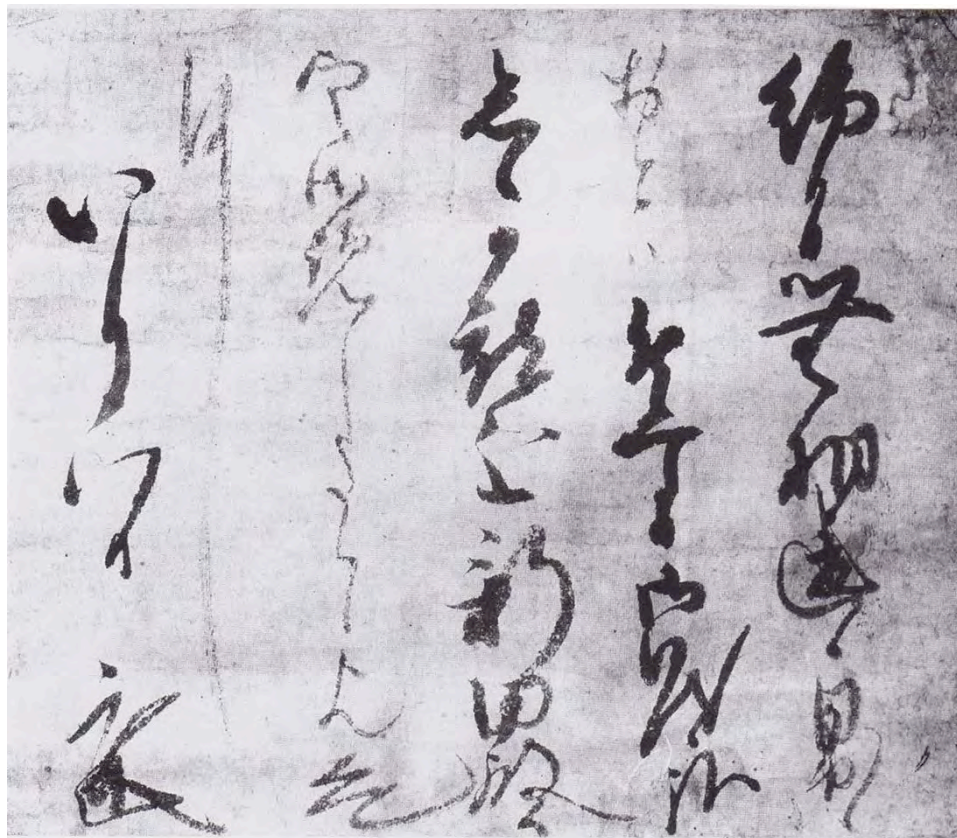


図 7 9 書簡（大徳寺）



図 8 0 白雲偈（野村美術館）が掲載される『徳川家御所蔵品入札』



図 8 1 靈徹号（サンリツ服部美術館）が掲載される『松浦伯爵家並某家蔵品展観  
入札目録』

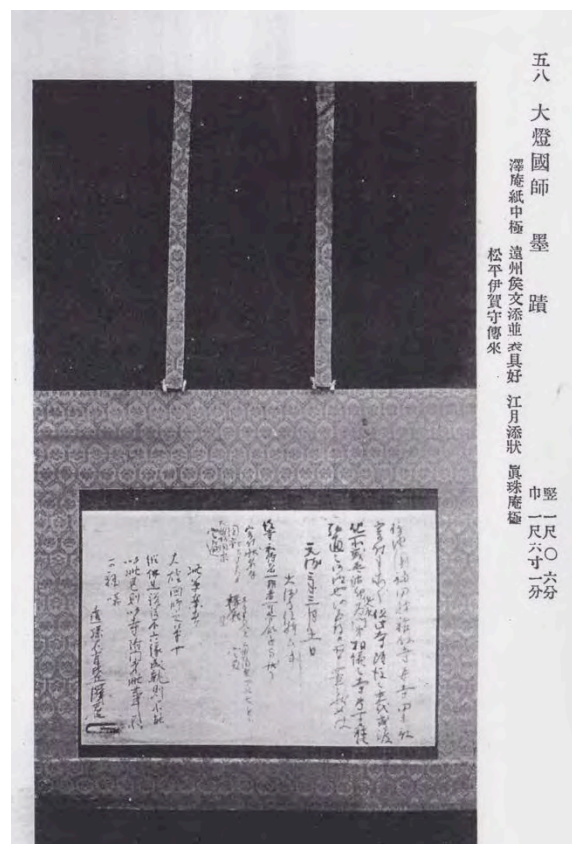


図 8 2 置文案（出光美術館）が掲載される『某子爵家并某大家所蔵品入札』

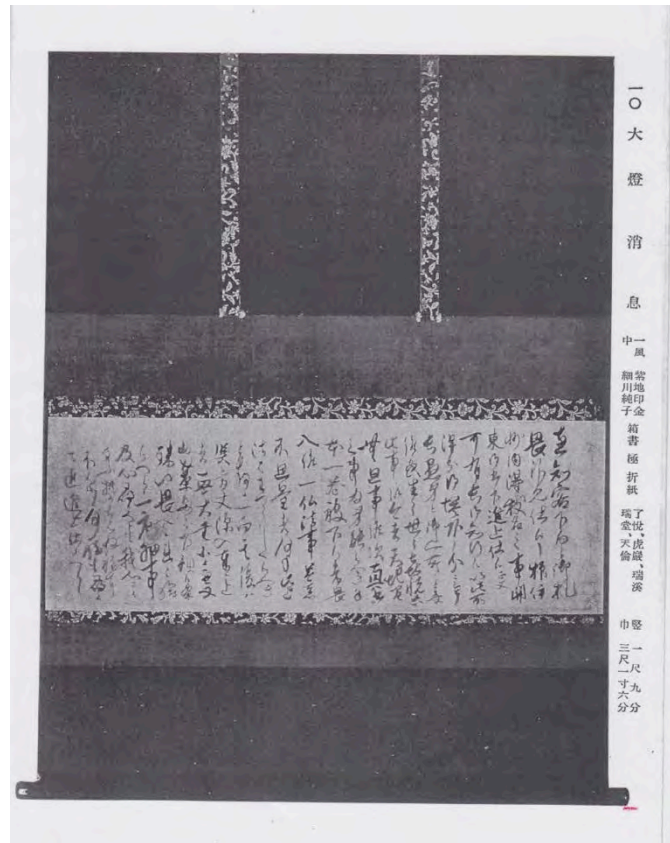


図83 消息（根津美術館）が所載する『前松方侯爵家蔵品入札』





図 8 4 梅溪（五島美術館）

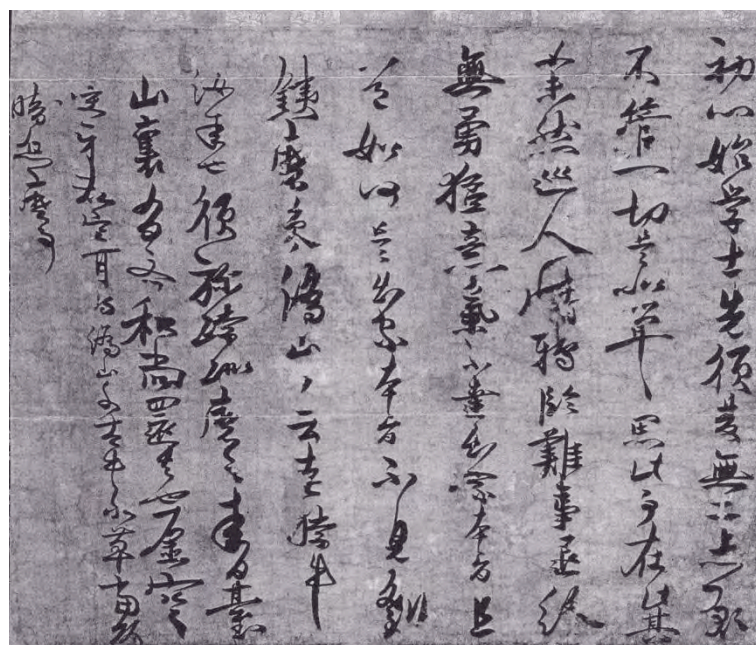


図 8 5 法語（尊經閣文庫）



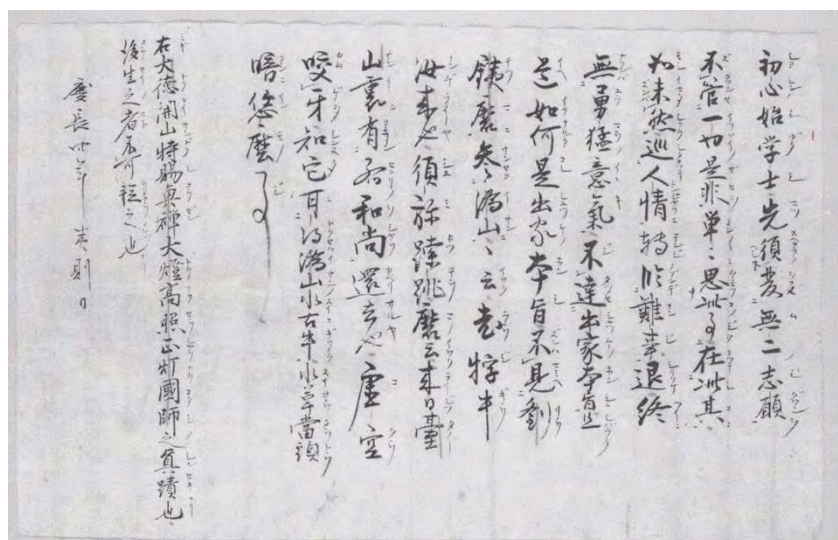


図 8 6 法語に付属する添状（尊経閣文庫）

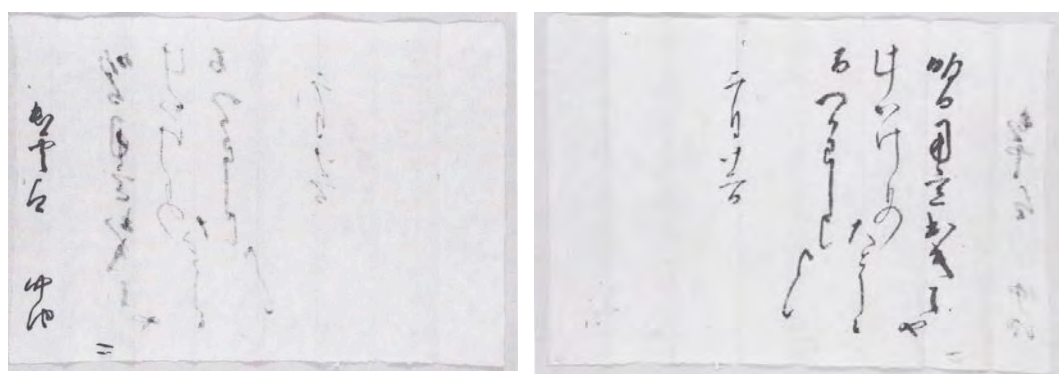


図 8 7 法語に付属する添状（尊経閣文庫）

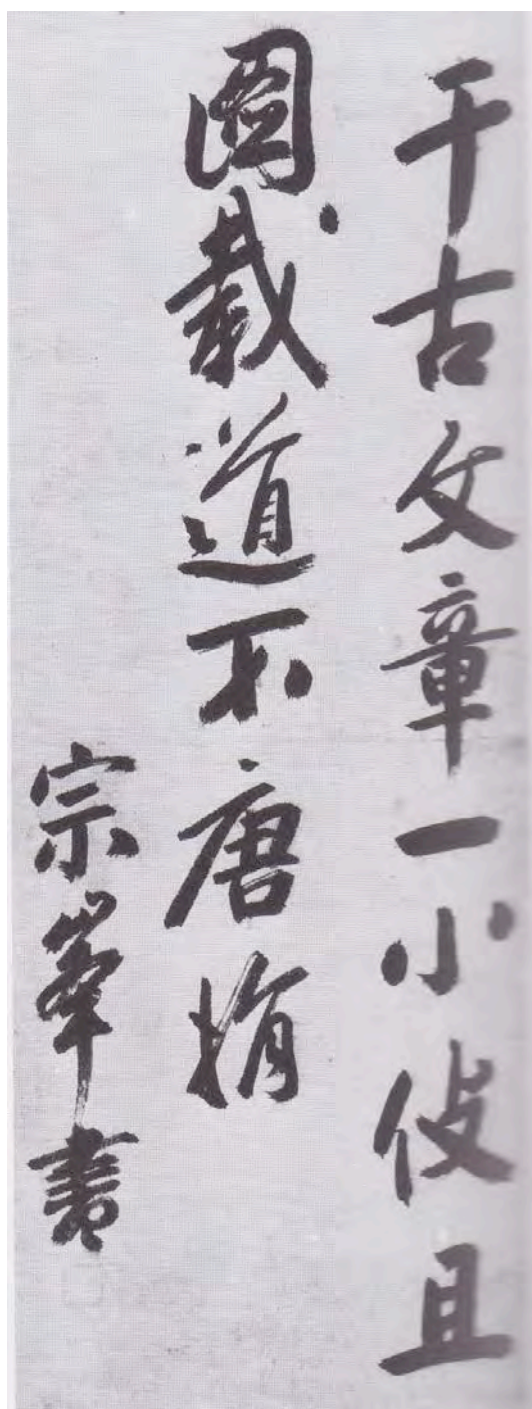


图8 9 二行物（芳春院）

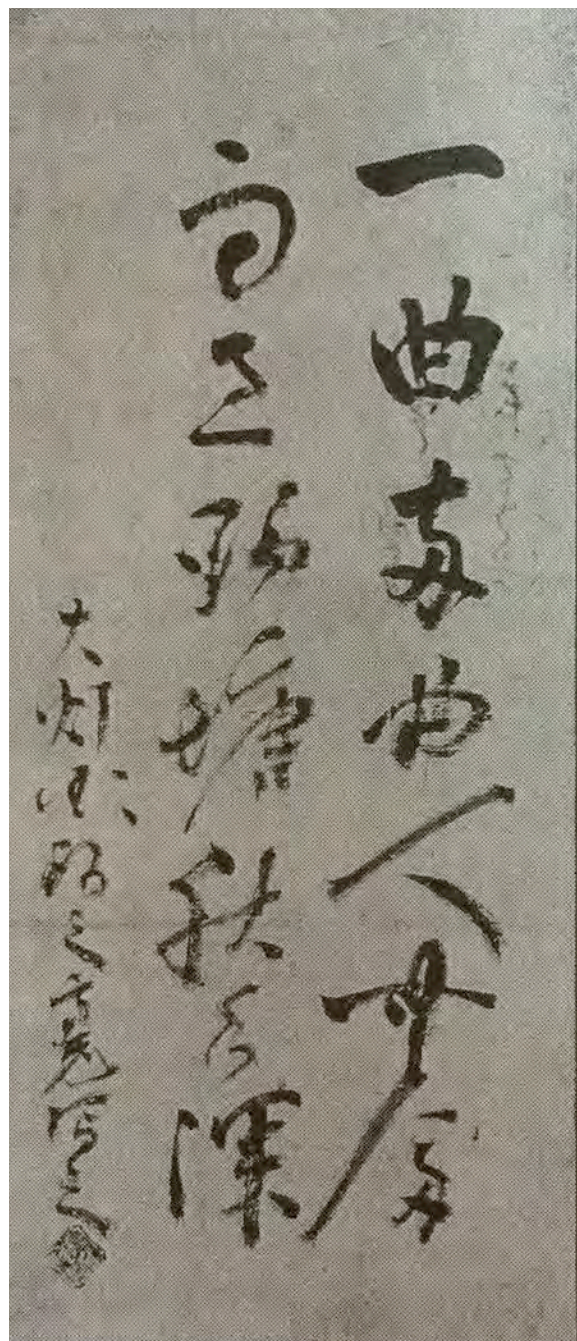


图8 8 元伯宗旦筆二行書



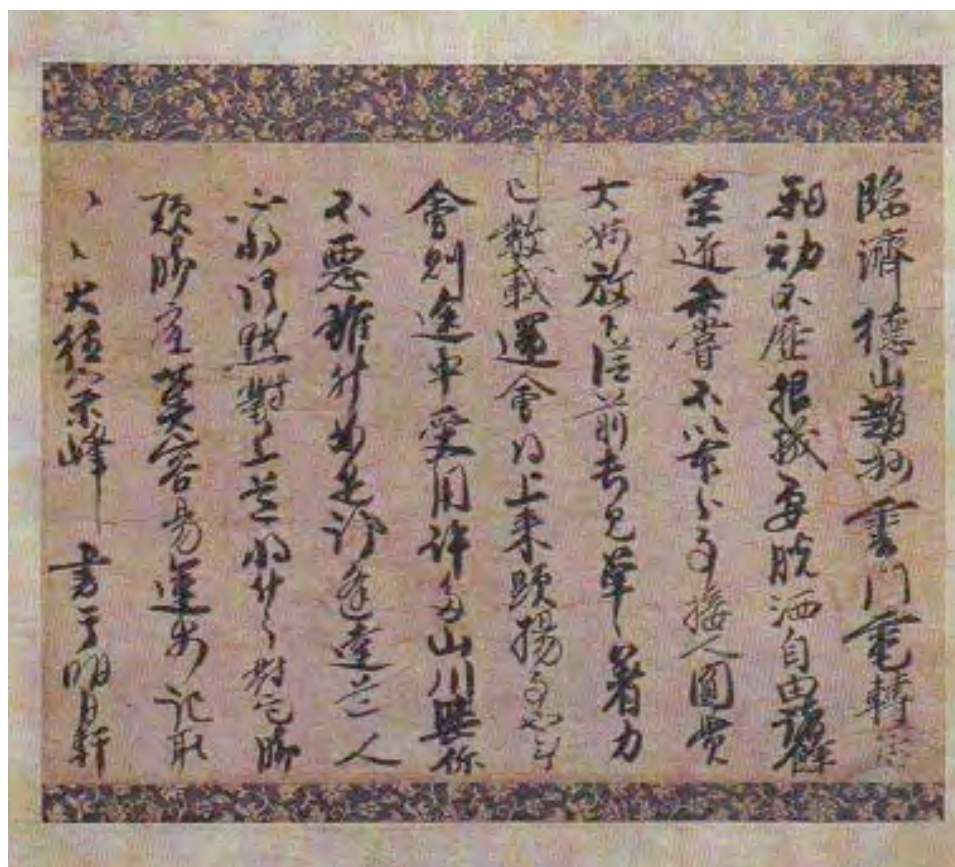


图 9 0 与圓覺大姉法語（個人蔵）

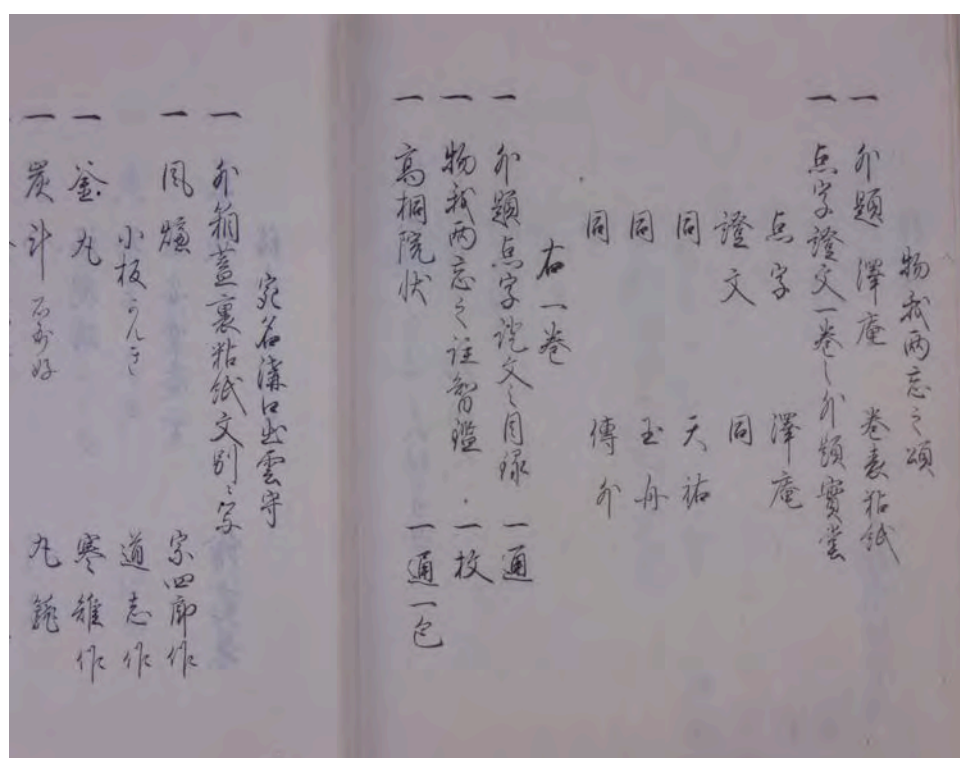


图 9 1 『溝口日向守様御茶事記』（小浜市立図書館）

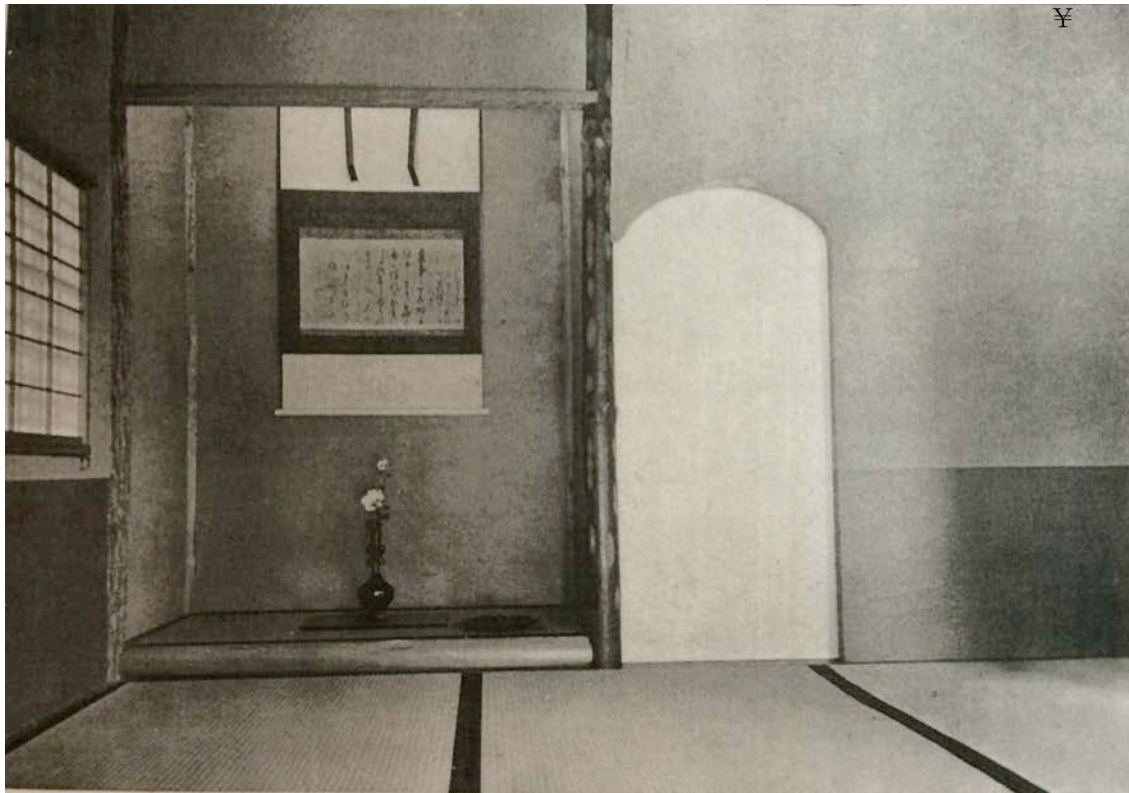


図 9 2 多曾雅礼会により使用された宗峰妙超墨蹟

図版の翻刻

第一章の図版

図1 宗峰妙超像（大徳寺）

末上聳聴直下攻

機眼裏怒発舌

根失理古今此色

得人惡青絹画出

它是誰咦賓主難

藏分外意寥廓

天辺月一規

建武甲戌朧月下澣

龍寶山宗峯叟妙超

為上聳記室書

図2 景德伝灯録（大徳寺）

此是千聖靈機烈祖命脈也遠超  
夷希之境邈出至理之鄉潢兮滌  
兮不可知不可覺矧是討毫迹迹  
何異傷其軀四十日之中投筆三十  
卷紘々形勢切難為郢人耳正

図3 関山号（妙心寺）

鎖斷路頭難透

關 處寒雲長帶

翠巒峰韶陽一

字藏機去正眼

看來隔萬重

山 右為慧玄藏主

賦關山號嘉曆己巳

仲春龍峰山宗峰妙超書

図4 与関山慧玄印可状（妙心寺）

此事卓犖挺拔清靈

乃佛乃祖惟以之而務苟

有其人則於壁立萬仞  
處輕々推將去到不同頭  
時節直與个惡辣手脚  
全体作用使它到勦絕  
白的之地古人得旨之後深  
隱堅韜不必長養靈廓  
之聖胎專亦有意憂於  
後昆者也上人既頓與本來  
相應起居幽邃受用確

乎切須綿々不通風蜜々  
緊護惜佗時異日將吾  
道而光輝便是不孤負老  
漢徹因之恩耳元德二  
年仲夏上澣宗峰叟  
妙超為慧玄藏主書

図5 頂相（妙心寺）

好我者喚之為  
驢好弥者喚之  
為馬召免彼此七馬  
雖作異類名異  
類不可可惜半疋  
青絲絹畫了教  
人相見訝

元德二年仲春上澣  
龍宝宗峰叟妙超

王書

図6 徹翁大德寺一世置文（大德寺）

亨首座相從久矣悟徹既人  
皆知之宣為第一世住持  
慈育一衆并付老僧常  
用法衣深思好念矣

建武四年蠟月日（花押）

図7 興作偈（出光美術館）

興作都無定中霄殊未眠窓明簷外  
雪室靜竹間泉幾倒無聲際還  
帰有象前盤桓成此曲不覺曉光連

図8 消息（東京国立博物館）

淹閣毫不審

處芳問不知

所謝候兼亦可有

御上洛之由蒙

仰候本望此事候

相構々々有御参

暇今夏御参禅

候者道友者心々

可奉馮候哉不

取敢候之際省

略候了恐々謹言

三月一日

図9 投機偈（大徳寺）

雲門云關也幾乎同路

一回透得雲関了南北東西活路通

夕處朝遊無賓主脚頭脚底起

清風

透過雲關無舊路青天白日是

家山機輪通變難人到金色頭陀

拱手還

妙超胸懷如是若不孤負師意伏望賜

一言近擬歸故都莫惜尊意以為

大幸耳

妙超九拝

図10 手抄二卷（芳春院）

（書出し）無事生嶺上有月泉波心

図11 大川普濟録（龍光院）

（書出し）大川和尚徑山如琰法嗣也



図12 白雲集（福岡市美術館）

贈鄭炳文送人之平江投知已孤景翔幽居暨陽別友

図13 看読真詮榜（真珠庵）

看読真

詮榜

伏以三陽

図14 与宗明大姉法語（根津美術館）

仏法無多子只是年

生着衣喫飯底時節

便是現前緊要時節

也只於此處更不回頭直

下用去自然脱白露淨

阿轆々地転著不汚染

自己心曰弧迥々峭巍々

不与萬法為侶不與千

聖同鄺上無舉仰下

絶己躬頂門光明透乾

坤一生参学事了畢

其或未然行住坐臥造

次顛沛畢竟它是阿誰

綿々密々看来看去日久

年深必須有入頭乎為宗明

大姉龍宝叟書

第二章の図版

図15 江月宗玩『墨蹟之写』中の大悟時代の墨蹟

（上）

何事よりもまつ酒如此

（中）

承候之條感悦之外無

他事令存候哉古しへ遣

能法語に下語をして

まいら勢候こ連越可有御

覽御本を志路しめされす  
候盤舞本とハ下語に御心え  
あるへか羅す候也

法々本来法足瘦草鞋覓心々  
無別心鐵丸無縫罇世界國土

このしうに申しいれまいらせさせ  
給候へ者一日も御せんけの御物  
かたり候しかハ御させん候へく候

かやうの

事も御古ねにもわたり亭返々

よろこひいりて候へともな越まこと二  
この法にて生死ハ者なるへき物

(下)

そとふかく信する御心かいまた候ハぬこ  
と於ほく候かまへてもろともに御修  
候へく候實にハ又な越さりにてハかな  
ハぬ事にて候やよく 志いても御

させんハあるへき事にて候也何事も  
ゆいけんしやういん御まいり候ハんとき  
申入候へく候恐々謹言

二月十六日

「花押」

浦上殿

此文字道吾トミタリ

開山ヲ初ハ道吾ト云々

図16 写本讓狀紀州高家莊の江月による賛部分(龍光院)

紀州高家庄讓狀之写

大燈国師自筆錐仮名難辨別

国師授与浦上氏慈父慈母仮名之

藻翰相似分明矣

図17 投機偈(大徳寺)

(再出。図9参照)

図18 与宗圓禪人法語(根津美術館)  
偏界不會藏處方是

時人難躋避時節恰似  
半夜放鳥鷄左之右之  
尚甚處辨明直得陰  
去陽來雲寒冰冷吾  
家大用觸處繁興豈  
敢逐洞山圖熱鬧底之  
狂解雖然如是諸人  
且道貴其耳孰與  
貴其眼  
元亨壬戌 宗峰叟妙超  
書以與宗圓禪人

図19 与宗明大姉法語（永青文庫）  
六道衢而今頼你圓師姑之形相  
捨汚染之情謂諸仏所褒讃莫出  
於斯豈止濟度慈母之昏沈一切有  
情與無情一等得蒙其利況亦存死  
生一致之道為清法名予不恡其号  
名之宗明大姉千生百劫稱此一名  
之理永不得入凡地耳正中二年  
臘八信筆書之以塞其請

大德 宗峰 妙超

図20 与宗悟大姉法語（大仙院）  
要超出生死度越佛界  
安閑休歇無事快與脱體  
靈疑去住自由切急識取自  
心蓋此心堪然圓明寂寥昭  
靈蓋天蓋地透色騎聲曠  
蕩孤危巍々迥々不與凡聖  
侶不與動靜混爲萬家  
主時無遷變從諸佛至螻  
蟻平等均齊無有差異頂  
門光明隨處曜昱歩々威風  
應物廣被若能薦得此心  
不求殊勝而殊勝自至不要

脱透而品類無羈不存順逆  
方圓得所不護已虛起倒有  
則諸惡莫作諸善奉行有  
意擅施無心慳瞋見世相  
功娛轉棄幻心隨日月遷流  
以覺夢身於一切境緣悉  
歸入薩般若海受用無虧  
轉處幽微默々自得酒々無  
退立處眞實行履自在矣  
宗悟大姉只能如此志願  
可謂遂出家之本志其如  
靈度時光侘日必須悔去  
勉旃々々元德二年五月  
十三日宗峰叟書

図21 与泰綱居士法語（湯木美術館）  
古德云

毫釐釐繫念三塗業因  
瞥爾惜生劫萬劫羈鎖只  
要直下休歇去見聞知覺  
處便是安樂無事時節  
穩察穩座屈宅也可能  
恁麼去喚男呼女坐起  
經行大自在不可思議境  
界與從長上拙秀才陳  
操尚書李騎馬楊大年  
把手俱行便是雖處在  
家中則所謂火中蓮花  
眞出家兒也泰綱居士  
來受衣鉢上戒已做吾佛  
一弟子求法號則名宗正紙  
背覓个警策信筆及之  
以塞其請大德宗峰妙超  
書于明月軒

図22 七言偈（熱一上）（藤田美術館）

熱一上兮寒一  
上去留出沒任  
天真浮世年  
老心孤處飛  
過帝鄉作野  
人

龍寶山宗峰  
叟書

図23 与宗玉善女法語（水府明德会）

此心無翳點清淨虛凝  
恰如白玉絕瑕類隨物轉  
轉々觸處撥々縁遇即  
照更沒遲疑去來無滯  
動靜一致本無汚染不  
藉琢磨所以古人云白珪  
無瑕銅文喪德只是莫  
馳求光明自然燦爛既  
是燦爛阿那个是光明  
底且請向此崖將去綿々  
蜜々無有退轉日久年深  
忽然一念相應始見盡大地  
色空明暗悉從此光明  
裏出頭來若到恁麼田地  
行住坐臥舉手動足一々  
是自己本有白玉無瑕底時  
節更無一絲毫許有侘物  
思之念之現行二年孟夏  
佛誕生前三日宗峰叟妙超  
為宗玉善女書

図24 宗峰妙超像（大徳寺）  
（↓図1参照）

図25 示衆法語（弧峰庵）  
達磨大師從竺乾遠泛鯨波

初到梁王有廓然無聖之語  
千里萬里恰如一條鉄從爾以還  
有少林皮肉骨體之分付並皆  
不出廓然無聖之一句子後來宗  
派流注亦只向者裏為人抽鉄拔  
橛念粘去縛而臨濟入門便是喝  
德嶠跨戸便棒不歷根機不立  
垠栽迥々巍々終無縫罅轉力  
轉緊逾親逾儉至干而今洋々  
不斷允是吾宗源深流長決矣  
所以道萬古應不墜分明在目  
前且道目前底个阿誰切  
切着此崖到去崖到來忽  
然一回築著一連々得左之右之  
起坐經行悉是本地風光本  
本來心地雖為纖毫無有它物  
政恁麼時節乃是廓然無聖  
底如厝手見掌浮世難久  
居出息不待入息切須勉旃建  
武三祀孟冬下澣宗峰叟

図26 日山之賦（個人蔵）

賦

日山之號

華嚴方廣中重々無盡

須弥第一峯跛甕盲龜出

幽谷正今日之照林錚

建武丁丑 龍寶山宗峰叟書

図27 遺偈（大徳寺）

截斷佛祖

吹毛常磨

機輪轉處

虚空咬牙

建武丁丑蠟

月 日 （花押）



珍重  
首座大衆

図28 与宗圓道人法語（梅澤記念館）

空劫已前威音那畔  
早是有者个光明瞻  
是照天鑑地應現一切  
包容萬物日月星辰  
電轉雷馳都盧承它  
恩力所以云光明寂照  
徧河沙凡聖含靈俱我  
家一念不生全體現六根  
纔動被雲遮秀才頌得  
雖十成猶是不然本有光  
明燦然宗圓道人一迴逢  
着用着許爾六根動  
着須恁麼去若是求覓  
更有何雲遮却它切  
須恁麼去若是求覓  
放爾三十棒勉旃々々  
建武第四仲春下幹龍峯  
老拙信筆及之耳

図29 徹翁号（徳禅寺）

徹  
翁

宗峰翁為

義亨首座作

図30 興作偈、夏日偈（いずれも出光美術館）  
（興作偈↓図7参照）

夏日宜山寺優遊趣幾何閑  
庭芳草長危嶺微雲過潤水穿廓  
遶崑風入座多更當星少夜月色透松蘿

図31 白雲偈（野村美術館）

白雲

為蓋

流泉

作琴

図32 宗峰妙超墨蹟 一帆風（個人蔵）

扶桑国裏蓬萊客萬里迢々扣師席太唐元

在脚頭邊早是循人舊途跡當機撞着老

菸菟遭他一口毒無藥含冤直上五峰巔

直要窮他起死着機前攘臂將其鬚未

拈棒時先領畧從來子不使爺錢肯用東山省

數佰秋風喚起故鄉心打辦行囊佛短策臨

行無可壯行色問龍借力飛大舶 東嘉從逸

高禪家近扶桑国巨海遐征驗知識年後生

涯自許長熟知寸短難憑尺東西曠索六七

年雨花雲葉固彌漫鉄心一触機穎脱玻璃

盞面春芳妍風味果然非草々如人飲水応難

道取之不足用有餘地産黄金奚足寶了々々々

沒可尋乘時帰去蔵家林胸中新語慎勿吐

故鄉易動行人心 天台禧会

海東古有僧名曉冒浪衛波來訪道髑髏

悞飲便知帰四七二三俱靠倒上人逸格真

其流骨氣雄々充斗牛鉅宋山河脚跟底

風驚草動知來日驀被南山老虎嚙從

前学海成枯竭手面換人双眼睛一甌苦茗

浮春雪因思百丈曾戴参迅機一喝何森

巖五峰相見齒不啓甘草苦兮黄連甜樹

頭葉々落寒羽萬里迢々又杯渡郷邦元是

太平人莫把華言成錮鎔 天台可権

敲磕門庭細揣摩磨路頭尽處再經過明々説

与虚堂叟東海孫兒日轉多 明知客發

明後欲告帰日本尋照知客通首座源長老聚

頭説龍峰會裏家私袖紙求法語老僧今年八

十三無力思索作一偈以贐行色萬里水程以道琰

衛咸淳丁卯住徑山大

智愚

宗峰書

図35 大心義統添状

南浦國師初絶深溟遍游宋地終抵徑山觀投虛堂  
師祖大獲記莛既而欲還本土師祖寵賞之以七絶  
粧其行色一時庶名衲無不矜式各聲詩偈亦  
瞻祖道渾緝之其篇四十有二品題為一帆風  
咸淳三年茗溪慧明冠引語而相流國師東歸  
後門人衷之貽厥塔所天源菴然昔時有鬱攸  
之凶所衷之者僉俱燼焉所賴我之大燈祖掌  
騰寫之為一軸矣予以淹雖聞持之未知散在  
何家而不果目焉斯日府之壇越紀安殷速予懸  
一軸就而敬矚則所謂燈祖手澤之一帆風也匪  
啻多年宿望果乎今日而已且喜拝燈祖臨池天縱  
妙而甄知世多贗類時安殷之曰儻不容偽疑者  
則請賜一語為後照鑑據矣於此乎予告之曰縱  
鞅掌士不族予之辯而知茲墨字真也然予據  
其因由抑自曰國徃中華蒙許可者大都一百  
人予未聆如國師得徹惻提重許可者方觀師祖  
不誤兒孫日多懸記彌漫延驗今日而可知然而  
予於茲墨寶不克無一喜一惜蓋一帆風所職由  
者其以敲磬門庭等語句也其重如九鼎也假如  
餘韻已成焉比九鼎則奚其不輕邪爾則首  
其輕者尾其重者理敢然乎況勦蠲彼全篇而  
纔剩從逸禮會等詩偈耳耶雖然燈祖若斯  
書也予豈得間然唯嘆惜焉而已且所以喜者何  
夫墨寶所尊者名實洎模印也賴燈祖名印  
在于茲尚且所重亦在于茲是予喜其所惜惜其  
所喜者也今原其餘軸鎮其某院秘于某家而  
既三之云嗚呼各鎮秘之而為世之奇貨則雖不  
可惜庶幾偕繾綣留護于一所

享保辛酉三月十六日 紫野東堂 義統拝書

図36 江西宗寛ら添状

大燈國師所書宋國諸尊宿送南浦  
和尚歸日本偈頌若干章後來裁為  
三幅俱為好古之者所藏今其末篇

始於扶桑國裏蓬萊客卒於住徑山  
智愚計二十九行行々嚴整字々精  
奇可謂碧落之碑無贗本因證之

東海寺

江西宗寬（花押）

法靈院

桃林宗陽（花押）

享保五庚子年十月日 妙解院

天柱義雪（花押）

勝幢院

鶴洲宗壽（花押）

図37 玉僊宗斤添状

谷氏安殷居士家寶一軸者世  
所謂一帆風所載之從逸禧會

二老之長篇泊天澤師祖

之兒孫日多之偈而大燈國師

之眞蹟也嗚呼國師滅後垂

于四百年而墨色雲興龍虵

飛動頃安殷就予求其語予曰

目擊分明一大手筆点畫

已前文彩全彰豈敢容喙于

其間乎謂趙璧無瑕類勿

受相如瞞者也因爲之語

享保六歲次年丑孟夏

紫野 宗斤 玉僊敬書

図38 新井白石添状

予嘗觀宋僧送南浦明公東歸詩四十四首梓  
行于世者一卷題之曰一帆風盖祝之也是歲

庚子冬復觀泉州紀安殷所藏宗峰妙超國師眞

蹟一幅即是卷中所錄者其始則法逸禧會可

權詩而次之以虛堂愚禪師偈并引凡四首蓋

彼三僧其引所謂當時聚頭者耳因知帆風之

作自惟溪至正芾七言絶凡四十詩是固一卷

也且彼三僧所作古風短編其體裁自別而後來鏤梓者勦之以入于卷中遂使其引語亦無歸趣可以笑也雖然愚禪師宋末名僧其徒寶業靈石禹溪之輩皆是一時之傑而南浦師兄者也豈復無一言之贈其行乎哉而今則不傳矣禪師及三僧所贈幸得于世者實賴宗峰所書而已宗峰嗣南浦其所書必不誤矣 傳  
享保五年十一月白石源君美書

図39 流れ園悟（東京国立博物館）  
（書出）有祖已來唯務單伝直指不

図40 物我兩忘（個人蔵）  
物我兩忘  
居常多不器情  
謂盡方知有  
眼挂空壁無  
心合祖師衲  
穿隨手補客  
至下階遲或  
問虚堂叟  
慇懃説向  
伊 「方印」 「丸印」

図41 墨蹟を収納する箱裏の貼り紙  
寄進大仙院 薩州坊津 田中総左衛門尉橘英重宗圓  
永禄元年戊午五月日

図44 『御掛物帳』「乾坤入之部」  
一 圓鏡堂墨跡  
一 大覺禪師墨跡  
一 大燈國師墨跡  
添狀點字一箱  
一 大燈國師書簡  
一 一山國師墨跡  
一 法雲道洵両筆墨跡

一 大惠無禪師墨跡

添狀點字一箱

玉舟

添狀

翠巖

三筆一卷

澤庵筆一卷

實堂

一 中峰墨跡

一 一休和尚墨跡

一 定家卿消息

図45 『御掛物帳』〔雜之部〕

一 斗方真山水

孫君澤筆

一 犬之繪

毛益筆

一 大燈國師墨跡

日山賦

宗甫文添外題点状有

利休所持同人箱書

一 大聖國師墨跡

閑誠

石州公箱書

一 政黃牛

牧谿筆

一 一山國師

一 一休和尚真筆一休二ノ大字

内箱澤庵和尚筆

図46 与宗智大姉法語 (MIHO MUSEUM)

善女受持遺髪

上戒名之宗智盖

是優婆夷者我佛

四部一教也鄭重

嘉名也況亦此心靈

凝非男女相違難謂

障者是安閑若刹那

肯得此心万機休能千

聖不携迥能自得号之

宗智爲如是信入更

無別求始須契善

女之号当優婆之

名耳 元徳二年

十一月十六日宗峰叟書



図49 手抄二卷断簡（個人蔵）

（書出）拈却玄沙白紙自然千里同風

図50 宗峰妙超墨蹟澤庵宗彭証明

（書出）言猶在耳 句中有眼

図51 宗峰墨蹟澤庵宗彭証明の箱墨書（個人蔵）

時西田作兵衛所寄附有故轉為他有當国師五百遠忌森本半兵衛寄附

真珠庵

天保七年丙申九月二十又二日 玄々斎宗室造函子寄附為

太室（花押）

### 第三章の図版

図53 『池田清助氏所蔵書画屏風道具類入札』に所載される宗峰墨蹟

家在扶桑何所求梯山航海賦歸休大唐遑  
得单伝旨黄葉瓢々双径秋 笠澤清達  
構得凌霄那一機片帆高掛賦歸歟扶桑故  
国入相問報道山頭有鯉魚 東川慧林  
唐言会尽見歸程六国風清一葦輕更説扶  
桑烟水濶黄蘆葉々是秋声 石橋法思  
清波無路透応難一舟親從大唐会雲浄風  
体天似洗不知身在屋頭山 康山宗翹  
誰知家住在扶桑萬里迢々人大唐雜毒中  
心歸故国定応錯罵老虚堂 金華智端  
一片寒雲下翠微櫓声高处語声底誰知月  
白風清夜日本人從天外帰 甫東徳来  
南詢端的便知休天上元無両日頭可是明々  
窮得到一帆風急驚濤秋 赤城行弘  
身藏日本未離前一捆須弥上梵天命委危  
流来又往方知意不在南辺 福庵若水  
當機擬弁賓中主妙在南針転□間窮尽煙  
波一漚尔還從漚未発前看 古勝本聞

図55 『益田信世氏所蔵品入札』所載の宗峰妙超墨蹟

山上鯉魚纔入手棹頭重買旧時舟明朝帆遂  
海潮落無底籃提上筑州 重慶継寧

風波眼孔銑心肝華夏溪出飽訪尋碧海東  
還休錯拏黃金如土貴知音 白雲惟汾  
十載思歸人夢頻海濤翻雪浪無垠大唐天  
子親曾見難衙謾他外人 赤城允澄  
曲施客札接來賓茗淪湖波上苑春今日故  
鄉歸夢遠眼明東海復何人 双鷄惟榮  
怒浪千尋奮激時分明棒喝上全機最初一  
步悔不領落賺十年方始歸 南康道準  
樹頭零落眼頭空路在千波萬浪中歸到扶  
桑尋旧隱依然午夜日輪紅 鄮山契和  
巨宋山河掌樣平荒村野店亦堪行衲僧公驗  
有如此又逐天風理去心程 左綿銳彰  
離却家鄉到五峰黃金颺下棒頑銅臨風  
一別分妍醜日本依然在海東 甬東宗海  
烟波尽處青山的々南方有路路還佻法固知  
無彼此普天風雪一般寒 象山可觀  
主賓句裏元無句錯入唐朝錯見入烟水  
茫々一仍舊咲他海底起紅塵 赤城義為  
十載曾為宋地僧青山無翳水無塵萬年一  
念難拋棄海國誰分眼底春 鄞江曇瑞  
冰寒槩苦不推尋万斛沙中一寸金海面無  
風波自涌扣舷休作大唐吟 石橋自簡  
誰知別了又逢君三處家山一日分我自坐看  
峰頂 斤歸撥乱海東雲 蘭陵法新  
江山歷尽眼頭空霜肅寒林樹々紅今日辞唐  
還本國萬程烟水一帆風 四明志平  
歷遍天南欲尽頭慣於陸地上行舟不知鄉  
國在何處征袂遙々不可留 鄞江元明

図57 白雲集断簡 『甲南氏所蔵品入札』所載

寄陳隣处士

先生九里松間住松下橋橫玉一溪想得清吟山月  
夜秋雲兩梅白獨啼

湖上晚步

畫橈歸去歇笙簫水影山光其寂寥一叟相逢双鬢  
雪向人猶自話前朝

送同行省親

送子綠楊堤楊花如雪飛相看忍相別同出不同歸  
雁背夕陽遠斷春草肥北堂慰孤寂毵色動斑衣

図58 手抄二卷の断簡 『和美の会』所載

浮生

浮生空役々誰肩死前休今日復明日黒頭成白頭  
百年身世夢両字利名愁輸与僧閑好眠雲看瀑流

過瓜州

落日瓜州渡餘寒透薄衣客囊空惹苒春色自薔微  
江遠水東去天晴鴈北飛故山千里外昨夜夢先皈

寄蘭壑宗長

同宗同在旅彼此繫微官所去無多遠其如相見難  
連雲秋樹老卷雪暮濤寒幾度空江上思君独凭欄

図59 手抄二卷の断簡

（書出）古人為古人是同是別

図60 蠟八偈（永青文庫）と一緒に保管添状

林間録全部

大燈国師真蹟也殊有

法明禪師親證焉

不可涉猶豫矣

三月十日

宗珠拝手

印 印

義端拝證

印 印

林間録全部

大燈国師真跡

實希世之至寶矣

端堂和尚書證語於

卷末尤不可涉異論也

遠孫小比丘梅堂義琇拝證 印

図61 林間録断簡（『書画美術品洋画展観』所載）  
（書出）住東林

図62 句双紙（『当市辻東氏蔵品売立』所載）  
（書出）秋庭住月露

図63 禅林類聚膳写（『旧大名某家所蔵品入札』所載）  
（十行目の書出）雲門僧問不是

図64 「至道無難」から始まる墨蹟（『某家御所蔵品入札』所載）  
至道無難言之端語  
端一有多種二無兩  
般天際日上月下檻  
前山深水寒髑  
體識畫喜河直  
枯木龍吟消  
未乾難々練擇  
明白君自看  
建武丁丑仲秋  
日書明月軒

図65 目錄所載の玉舟宗璠の添状  
至道無難言端語  
端一有多種二無兩  
般天際日上月下檻  
前山深水寒髑  
體識畫喜河直  
枯木龍吟消  
未乾難々練擇  
明白君自看  
建武丁丑仲秋  
日書明月軒

大燈国師之墨蹟至  
道無難之頌一凍和尚  
副訓点之後玉室老師

一覽真輪已次矣不  
可涉孤疑者也

芳春院

宗璠

仲秋上院

本阿弥

光甫老

図66 『茶器名物図集』所載の墨蹟

寒夜無風并

有聲疎々密

々透松櫺了

開不似心開好

歇却燈前

半卷紋

嘉曆二丁卯年

宗峯叟書

図67 よねの文（福岡市美術館）

うら可みの志も四可むら越

人々ニはふたらちて候に

てらの里やうにて候ひとニその

志るしに四可むらより段別ニ

よねをあてゝ候をめうかくしの

するれうニあて候内時のハうす

のふんニ参石をあて候也

御心え候へく候あな可しく

けんふ元年十一月十四日

ひらかしの御里やうへ

まいらせ候

図68 宗峰妙超墨蹟（常盤山文庫）

空劫已前威音那畔

早是有者个光明瞻

是照天鑑地應現一切

包容萬物日月星辰

電轉雷馳都盧承它  
恩力所以云光明寂照  
徧河沙凡聖含靈俱我  
家一念不生全體現六根  
纔動被雲遮秀才頌得  
雖十成猶是不然本有光  
明燦然宗圓道人一迴逢  
着用着許爾六根動着  
須恁麼去若是求覓  
放爾三十棒勉強々々  
建武第四仲春下幹龍峯  
老拙信筆及之耳

図70 「南泉知」の書き出しから始まる墨蹟  
(書出) 南泉道知是

図71 敬春惜詩の春澤宗晃添状(永青文庫)  
敬竹菌雅韻之未一  
軸大燈国師真墨  
碧落碑何有右贗本  
仍為證

春澤宗晃

図72 上堂語(夙)(九州国立博物館)  
溪林葉墮  
塞鴈声寒  
見性公案  
大難々々  
百雜碎鉄  
団圓和風  
搭在玉欄  
干

右虚堂祖翁語

図73 外箱裏(九州国立博物館)  
雲林院開山大燈国師御筆跡 禅隆寺為永代什物奉遣上也 上田弥平次



（貼紙）開山国師墨寶 雲林院常什

寶永五戊子歲二月 政郷

図74 德海号（個人蔵）

德海号

萬々相逢尽景從

甚波浩眇育魚龍

浮華未必糝胸壑

誰是爲隣繼復縱

龍峰宗峰叟書

図76 解夏少参法語（大徳寺）

解夏小参隨處

作主結聖制於

横岳山頭立處皆

真解賞勞於龍

寶峰頂此事不相

謾時不孤負人破

衲遂雲飛草鞋

隨路轉左足先應

處脚頭是通宵

何必落臺山驀直

之途撒慕流菜不

肯之道伴雖然

是山僧有親切一句

子各之分明善為

處々不得忘却便

卓主丈一下

図77 溪林偈（正木美術館）

溪林葉墮塞鴈聲見成

公案大難々々百雜碎鍊團欒

和風塔在玉欄下寒

図78 南嶽偈（正木美術館）

南嶽七十二峰華頂萬八千

丈瞻之無際仰之無垠以此無窮

數用祝聖明君

図79 書簡(大徳寺)

綸旨無相違候目出候

於今ハ能可有御沙汰候哉

恩々可被進新田殿候

定御覽したく候ハん歟恐々

謹言

八月八日 (花押)

図80 白雲偈(野村美術館)が所載する『徳川家御所蔵品入札』

(↓図31参照)

図81 靈微号(サンリツ服部美術館)が所載する『松浦伯爵家並某家蔵品展観入札目録』  
宗峰叟為

靈

微

昭首座作

図82 置文案(出光美術館)が所載する『某子爵家并某大家所蔵品入札』

撰津国福田村称仏寺并寺田日子被

寄付事承了但此寺雖後々末代或渡

他所或不可沽却他人永為門弟相続之寺專可有禅法

弘通之沙汰也仍為後日所申置之状如件

元徳三年三月十一日

大徳寺住寺ム判

彼寺ハ和侍者 一期者可管領之由与状了

寄付状名字

七郎左衛門尉 木工さ衛門入道 大輔阿闍梨子息大進房

国重 称願 定恵

大輔阿闍梨

定遍

〈継ぎ目〉

此草案者

大燈国師之筆也

縦仏之説法不日子録成就則不能

以此見則以寺附門弟此事不可懸喏

遠孫不肖比丘澤庵（花押）

図83 消息（根津美術館）が所載する『前松方侯爵家蔵品入札』  
恵知客下向之御礼  
畏拝見仕候了抑伊  
州内得枝名之事關  
東御書下進上仕候正文  
可有長御知行候以此所  
得分御塔頭ノ分ニシテ  
長愚身と御一所ニ令承  
候条生々世々喜悅只  
此事候今者天地間  
無思事候次真書  
之事為身能候へき手  
本一卷被下候者畏  
入候一佛法事善惡  
不思量者何事此上  
法見已つらハしく候へき  
と存候一向其後ハ  
堅方丈憚入奉候上  
者莫大無小候兼又  
山菓毎々下預候条  
殊以畏入候連々給  
候へく候一唐物事  
及心尋候へとも我心ニか  
なふ物か候はぬ程に  
不進候何程も尋候  
て追進上仕候へく候

第四章の図版

図84 梅溪（五島美術館）

宗峯叟書

梅

溪

宗智道人作

図85 法語（尊經閣文庫）

初心始学士先須発無二志願

不管一切是非単々思此事在此其

如未然巡人情転臨難事退決

無勇猛意氣不達出家本旨且

道如如是出家本旨不見劉

鍊磨參瀉山々云老牝牛

汝来也須弥牝跳磨云来日臺

山裏有斎和尚還去也虚空

咬牙若空甘得瀉山千古手水草當頭

暗恁麼事

図86 法語に付属する添状（尊經閣文庫）

初心始学士先須発無二志願

不管一切是非単々思此事在此其

如未然巡人情転臨難事退決

無勇猛意氣不達出家本旨且

道如如是出家本旨不見劉

鍊磨參瀉山々云老牝牛

汝来也須弥牝跳磨云来日臺

山裏有斎和尚還去也虚空

咬牙若空甘得瀉山千古手水草當頭

暗恁麼事

右大徳寺開山特賜興禪大燈高照正灯國師之眞蹟也  
後生之者不可疑之也

慶長四年夷則日

図87 法語に付属する添状（尊經閣文庫）

明日用意出き候や

此かけもの大とう候

間つかわし申候かしこ

二月二十二日

出雲まいる 中納言

図88 二行書

一曲兩曲人無会

雨過野塘秋水深

大灯国師毫写之(印)

図89 二行物(芳春院)

文章一小枝且

道不唐稍

宗峯書

図90 与圓覺大姉法語(個人蔵)

臨濟德山趙州雲門電轉

飛初不歷根機要脱洒自由諸餘

宗匠未嘗不以本文事接人圓覺

大姉放下從前卑見單々着力

已數載還會得上來顯揚事也無

會則途中受用許多山川與你

不惡雖然如是論逢達道人

不持語默對且道持什ム對它脚

頭脚底莫容易運步記取

々々大徳宗峰妙超書于明月軒

図91 『溝口日向守様御茶事記』(小浜市立図書館)

物我両忘之頌

一 外題 澤庵 卷表粘紙

一 点字証文一卷之外題實堂

点字 澤庵

証文 同

同 天祐

同 玉舟

同 傳外

右一卷

一 外題点字証文之目錄 一通

- 一 物我両忘之註智鑑 一枚
- 一 高桐院状 一通一色
- 宛名溝口出雲守
- 一 外箱蓋裏粘紙文別々写
- 一 風呂 宗四郎作
- 小板かんき 道志作
- 一 釜丸 寒雉作
- 一 炭斗 石州好丸籠



## 研究編の付録

## 付録1 調査を実施した墨蹟

### 1 《投機偈》（図A1。大徳寺蔵）

本紙寸法は縦三二・四<sup>セシ</sup>、横四八・二<sup>セシ</sup>。本墨蹟が書かれた年代は、『大燈国師行状』から宗峰二十六歳のときとわかる。本墨蹟は師である南浦紹明（一二三五・一三〇九）から与えられた雲門関の公案を透得したとき、その胸中を書き師に示したものである。そのため後半部分には師の南浦により印可証明する旨が書かれている。収納される箱には円山要宗（伝衣室。大徳寺四百八十四世。一八七一・一九四〇）による墨書で甲部には

開山国師投機偈 大徳寺

と書かれ、同箱裏には

開山国師投機偈大應證明一軸深珍藏不可輕忽者也今添箱收寶庫矣

昭和二年五月日 現住要宗傳衣室識（花押）

とあり、昭和三年（一九二八）に収納する箱が作られたことが判明する。本墨蹟の背面には江月宗玩（一五七四・一六四三）により、以下のような墨書が認められる。

国師三百年遠諱之辰

表背衣改之矣

寛永十三丙子蠟月日

十二世孫小比丘宗玩

記述から寛永十三年（一六三六）、宗峰妙超三百年遠忌のときに表具が改修されたことがわかる。

### 2 《与宗明大姉法語》（図A2。永青文庫蔵）

本紙寸法は縦三二・五<sup>セシ</sup>、横三六・四<sup>セシ</sup>。本墨蹟は宗明大姉に与えた法語墨蹟である。文末に「蠟月八日」とあることから《蠟八偈》ともいわれている。本墨蹟はもとと前半部分が存在したが欠損し、現存するのは後半部分のみである。筆跡は行書体を中心に書かれる。文末に「正中二年蠟月」とあることから、本墨蹟は正中二年（一三二五）に書かれたことが判明する。調査したところ《与宗明大姉法語》には片桐石州（一六〇五・一六七三）の添状（図A3）が付属する。添状には以下のような記述がある。

昨日御越之大燈国師之墨蹟

東海寺へ遣各相談仕候春屋国師之

外題有之候上は不及添状之旨被申候へとも

進て御所望之旨申入春沢和尚添状  
被相調致候間則墨蹟之家之  
内へ入墨蹟も只今返進仕候猶得望  
之時候恐惶謹言

五月十五日

(花押)

(裏)

片桐石見守

伊沢隼人正様

人々御中

添状にある伊沢隼人は江戸幕府旗本である伊沢隼人政信であると考えられる。彼の名は『寛政重修諸家譜』<sup>1</sup>や『干城録』<sup>2</sup>に記載がみられる。伊沢隼人正と、片桐石州の關係は柳営における公的な役職での交渉と考えられる。『寛政重修諸家譜』中、伊沢政信の記載では

寛文六年十一月十六日、先に菱御櫓下御茶屋の普請を奉公せしにより、時服羽織などを賜う

とあり、その關係も茶屋の普請を通じたものと考えられる。

### 3 《与宗圓禪人法語》 (図A4。根津美術館。重要文化財)

寸法は縦三二・一<sup>セ</sup>、横七七・六<sup>セ</sup>。本墨蹟は元亨二年(一二三二)、宗峰四十一歳のときに宗圓禪人に書き与えた法語墨蹟である。閲覧したところ行書体で書かれている。筆跡は横画に注目すると入筆から徐々に筆圧を強めて書かれている。そのため始筆は鋭く、中央部は膨らみを持ち、終筆は次の文字の一面目につなげようとしているため、ハネ、ハライになっている。シンニヨウや「時」の文字など草書体になっている。起筆から徐々に力を入れて書かれ、終筆で止めている。運筆は比較的ゆつくりと書かれる。文字毎の間隔は狭く、一文字あたりの字粒は全体を通じて同一であるが、「處」の文字は筆先を用い細めに書かれている。終筆は若干上向いている。

### 4 《宗峰妙超像》 (図A5。大徳寺蔵。国宝)

本紙寸法は縦一一五・五<sup>セ</sup>、横五六・七<sup>セ</sup>。讚の年号は建武元年(一二三四)であることから宗峰五十六歳のときの筆跡である。讚文より上聳書記の求めに応じて書かれたことが判明する。

閲覧したところ讚文三行目から五行目は剥落しているが、おおよその文字の形状が判

読できる。「機」という文字をみると字体がしっかりしている。このころは蔵峰で書かれており、書き出しは筆の中腹までを用いてしっかりと書かれているが、後半になるとやや筆先を用い書いている箇所がある。そのため線質に若干の変化がある。

##### 5 《日山之賦》（図A6。個人蔵）

本紙寸法は縦四四<sup>サ</sup>、横四三・二<sup>サ</sup>。《日山之賦》とは、金剛寺の日山に与えた字号と印可墨蹟である。この墨蹟はかつて松下幸之助<sup>3</sup>（一八九四・一九八九）が所蔵した墨蹟である<sup>4</sup>。この墨蹟が使用された茶会としては、京都美術倶楽部で二〇〇八年に行われた百周年記念茶会がある。茶会の図録には、利休所持とする箱書の画像も掲載されている<sup>5</sup>。本墨蹟は『禅林墨蹟拾遺』および『茶の湯と掛物Ⅱ』の図録に墨蹟本体のみが紹介される。文末に建武丁丑、すなわち建武四年（一三三七）とあり、宗峰最晩年に書かれた墨蹟である<sup>7</sup>。賦号の与えられた日山について『龍寶山祖師伝』には以下のような記述がある。

日山和尚

嗣法開山國師住河州靈松山金剛禪寺不詳氏族

法諱據春浦和尚語録文明七年相當師百年忌然

師之示寂盖有永和二年六月廿八日去徹翁和尚示寂應安二年七年後也

（中略）

延寶伝燈録曰、金剛日山禪師心地明潔頓機電奔

（中略）

師逸居金剛一生不出生 全文抄出廿一卷

日山和尚は宗峰の晩年の法嗣で靈松山金剛寺にあった。出自については不詳である。春浦宗熙（大徳寺四十世。一四一六―一四九六）の語録には、永和二年（一三七六）六月二十八日に死去したことが書かれ、また、日山は不出生の人物であったとも記される。

この墨蹟は『墨蹟之写』にも所載が確認され、以下のような記述がある。

##### 一 賦

日山之號

華嚴方廣中重々無盡

須弥第一峯跛鼈盲龜出

幽谷正今日之照林鋒

建武丁丑龍寶山宗峰叟書

帗之内横一尺四寸五分整一尺四寸九分表具上下茶絹

中風帯薄萌黄之金紗一文字帗地ノ金紗勝田今以

□参候佐久間将監ニテ見候事之文字ソ板嶋左衛門持来ル所持也

この墨蹟は、金剛寺に伝来したと考えられるが、『墨蹟之写』の記述から江月の活躍した時代には、すでに金剛寺から流出していたことが判明する。

#### 6 《与宗圓道人法語》（図A7。梅澤記念館蔵。重要文化財）

本紙寸法は縦三三・九<sup>サシ</sup>、横九七・三<sup>サシ</sup>。本墨蹟は宗圓道人に与えた法語である。本墨蹟には建武丁丑、すなわち建武四年（一三三七）に書かれた最晩年の筆跡である。最晩年の墨蹟中、この墨蹟は最長である。全体的に文字は行書体から書き始められているが後半に行くに従い草書体となっている。終筆にはわずかに筆先が震えた箇所がある。

本墨蹟は梅澤家が入手する以前は馬越恭平（一八四四・一九三三）が所蔵した。馬越は本墨蹟を麻布（当時）の祥雲寺より入手した。従って本墨蹟は麻布祥雲寺伝来の墨蹟である。なお、どのような経緯で祥雲寺が所有したのかについては明らかにできていない。本墨蹟の付属品には双鉤による原寸大の模写一枚が付属する（図A8）。双鉤とは墨蹟本紙の上に和紙を敷いて文字をなぞり、その文字形状を書き写すことである。梅澤記念館本に付属する双鉤の存在は点字が付されるが、文字形状を留めておくための補完的な資料であったと考えられる。

#### 7 《遺偈》（図A9。大徳寺蔵。重要文化財）

本紙寸法は縦三三<sup>サシ</sup>・八七<sup>サシ</sup>、横六二・七<sup>サシ</sup>。宗峰は建武四年（一三三七）十二月二十二日に没しているが、本墨蹟はその直前に書かれた墨蹟である。先に紹介した《日山之賦》同様に筆先に僅かな震えがみられる。同墨蹟が収納される箱には、江月宗玩により金粉の隸書体で甲には「開山国師辞世」とあり、箱裏に以下のような記述がある。

開山国師辞世頌表緒繪小堀氏宗甫改之寄附之

寛永壬午年二月二十二日 大徳寺住山江月叟誌

江月の箱書により、本墨蹟は寛永十九年（一六四二）に、小堀遠州（一五七九―一六四七）によって表具寄進がなされたことが判明する。

#### 8 《看読真詮傍》（図A10、真珠庵蔵。国宝）

本紙寸法は縦三二・七<sup>サシ</sup>、全長八三二<sup>サシ</sup>。全十七紙を継いでいる。看読真詮傍とは

七月十五日の盂蘭盆会に際し僧堂に掲示する紙のことである。そこには読経する経文が書かれ、僧が随意に読経を行う。本墨蹟を閲覧したところ文末に宗鏡とあるが、筆跡が異なっており、宗峰のものとはいえず加筆である。本紙の筆跡は中筆を用いて書かれ、墨色の変化もあり運筆をよくみることができる。起筆をみると徐々に筆が入っており、穂先の長い筆を用いて書かれたと考えられる。文字から文字の空間は筆が紙面と擦れているため、細い連綿をみることができる。一行あたり四文字程度を書いているため間隔が狭いが、文字と文字の間は適宜、間隔が空いている。また行草入り交じって書かれている。このような限られた空間における文字の配置から、宗峰妙超の書の技量を伺うことができる。文字全体をみると縦の線、ウ冠、「利」の右側、「一」の字など強調して書かれている。

9 《与泰綱居士法語》（図A11。湯木美術館蔵。重要文化財）

本紙寸法は縦三四・八<sup>セシ</sup>、横八二・二<sup>セシ</sup>。泰綱居士に与えた法語墨蹟である。閲覧したところ筆跡は「火中蓮花」の「花」以降に変化を確認できる。その点を起点にして考えると、「花」以前は宗峰特有の墨を多く含んだ筆致で描かれており、やや遅筆である。後半は、比較的早い速度で書かれている。墨蹟中に「明月軒」で書かれたことが判明する。ほかの墨蹟中、明月軒と表記するのは《与明倫禅尼法語》（畠山記念館蔵）があり、同一時代に書かれた墨蹟で、明月軒は宗峰の居室であるとされる。紙の色は時代の経過によって黄色みを帯びていた。

この墨蹟は『墨蹟之写』（元和三年丁己、四冊之内上中下、墨蹟之写卷十）に掲載されており、以下のような記述がある。

古徳云

「ツギメ」

毫釐繫念三塗業因

瞥爾惜生劫萬劫羈鎖只

要直下休歇去見聞知覺

處便是安樂無事時節

穩察穩坐屈宅也可能

恁麼去喚男呼女坐起

經行大自在不可思議境

界与從上長拙秀才陳

操尚書李駙馬楊大年

把手俱行便是雖處在

家中則所謂火中蓮花

眞出家兒也泰綱居士

来受衣鉢上戒已做吾佛

一弟子求法号則名宗正紙

背覓个警策信筆及之

以塞其請大徳宗峰妙超

書于明月軒

奥少モライナシ春屋ノ外題有大灯国師眞蹟ト

有印ハナシ大灯正筆ト相見候春屋ノ外題モ

正筆ゾ

記述から江月は墨蹟および春屋による極の両方を真蹟としている。なお現在、この墨蹟には春屋宗園および伝小堀遠州筆による極「たいとう」が付属している。

10 《興作偈》、《夏日偈》（図A12。出光美術館蔵。重要文化財）

いずれも本紙寸法は縦一一七センチ、横三三・六センチ。これら二件の墨蹟はいずれも『白雲守端語録』を出典とする墨蹟である<sup>10</sup>。類似する作例としては《看読真詮傍》（真珠庵蔵）や《秋風偈》（MOA美術館蔵）があり、大書で詩偈を書いた作例の一つである。ただ、《夏日偈》の三行目にある「更」の最終画や、《興作偈》三行目最終文字である「連」のシンニヨウは、ほかの宗峰妙超墨蹟にはみられない運筆である。箱墨書より《興作偈》、《夏日偈》の双幅は南宗寺から酒井家に伝来した<sup>11</sup>。

11 《風》（図A13。九州国立博物館蔵。重要文化財）

本紙寸法は縦三三センチ、横八六・一センチ。『虚堂録』を出典とする詩偈墨蹟である。運筆は遅筆である。用いられた筆はやや穂先の長い、中筆である。紙は薄い紙質である。横皺と共に、縦皺も多くあることを確認した。印は押されている位置関係から考え、後印である。墨蹟を収納する箱は桐箱で、二重箱が春慶ヤリガンナである。二重箱の内側及び蓋裏側に和紙が貼ってある。甲には、

大燈国師墨蹟 死後則紫野真珠庵江

上可申者也 宗長

と書かれ、連歌師であつた柴屋軒宗長（一四四八―一五三二）が所持し、没後、真珠庵に寄進することを書いた墨書が確認できる。外箱裏（図A14）には以下のような記述がある。



雲林院開山大燈国師御筆跡 禅隆寺為永代什物奉遣上也 上田弥平次

(貼紙) 開山国師墨寶 雲林院常什 寶永五戊子歳二月 政郷

記述から上田弥平次が宝永五年(一七〇八)に禅隆寺へ寄進し、その後は雲林院で所蔵された墨蹟であることが判明する。また上田弥平次によって「政郷」の自署がある。江戸の材木商であった上田家は、かつて《利休遺偈》(不審庵蔵)を所持していた。屋号が冬木屋であったため、上田家は冬木家と称される。

雲林院とは現在でも大徳寺山内にある塔頭寺院である。元々は天台宗の寺院であったが、宗峰の時代以後醍醐天皇より下賜された。その後は廃れ江戸時代中期に江西宗寛(一六六七―一七二二)により再興された寺院である。この時、檀越として冬木政郷の名が確認できる。『龍寶山大徳禅寺世譜』<sup>12</sup>には雲林院について、以下のような記述がある。

雲林院 龍泉派獨往今兼帯

(中略)

寶永三年丙戌秋江西宗寛和尚中興殿宇一新莊田有羨檀越江戸冬木氏寛政享

和間廃唯存觀音堂一字門一棟耳

記述によると、荒廃していた雲林院は江西宗寛により中興されたが、その援助を冬木氏が行ったとある。《上堂語(風)》≡墨蹟の箱書内容から、本墨蹟は、冬木家、上田政郷により禅隆寺に寄進したものである<sup>13</sup>。

江西と冬木家との交渉は江西が品川、東海寺の輪番として住した時期より関係があったものと推測できる。江西以降四代まで雲林院は続いたが、その後は再び廃れる憂き目にあった。明治二十八年(一八九五)七月十五日付の『雲林院什物』(大徳寺蔵)の記載には、本墨蹟は記載されておらず、当時すでに流出していたことが判明する。

## 12 《七言偈》(「熱一上」) ≡ (図A15。藤田美術館蔵。重要文化財)

本紙寸法は縦三三・三<sup>セ</sup>、横七四・八<sup>セ</sup>。「熱一上」の書き出しから始まり、その出典は『虚堂録』である。閲覧したところ起筆終筆ともにしつかりと書かれている。本墨蹟にみる筆跡は、筆を垂直に近い形でもって書かれたためと考えられる。ハネ、ハライは穏やかで、一定の早さで書かれた。文字および行間がほかの法語墨蹟と異なり広い。特に語と落款部分の行間は大きく空いている。このような特徴はさきにみた《風》(九州国立博物館蔵)墨蹟も同様であって、横幅詩偈において文字をこのように書く場合の書式として共通している。

## 13 《徹翁号》(図A16。徳禅寺蔵。重要文化財)

本紙寸法は縦三九・三<sup>セ</sup>、横三三<sup>セ</sup>。宗峰法嗣の徹翁義亨(一二九五―一三六九)に

与えた字号である。徹翁に印可が与えられたは、宗峰妙超が五十歳前後であると推定されており、本墨蹟はその後、徹翁に付与されたものである。この墨蹟の制作年代について篠原寿雄は国師晩年の筆であると指摘している<sup>14</sup>。閲覧したところ本墨蹟の筆跡は中筆か大筆に墨を十分に含ませて書かれている。「徹」という文字においては紙面に押し付けるように書かれた。一定の速度が感じられ、速筆で書かれたものと考えられる。為書きにある「宗峯叟為、義亨首座作」の筆跡は、さきに述べた《日山之賦》（個人蔵）、《与宗圓道人法語》（梅澤記念館蔵）が書かれた建武四年（一三三七）の筆跡に近い、建武年間の筆跡であると考えられる。

14 《白雲偈》（図A17。野村美術館蔵。重要文化財）

本紙寸法は縦三二・五<sub>セシ</sub>、横三六・四<sub>セシ</sub>。一画、一点に着目すると、「雲」の跳ね上がりの二画目の字が金釘ようなまがりの調子をみせる。運筆から前半四文字は各文字行草が入り交じったものであるのに対して、後半四文字は行書体である。「泉」の字は、途中から筆を始めた跡が確認できる。用いられた筆はやや穂先の長い、太筆と考えられる。本墨蹟には清巖宗渭（一五八八・一六六一）による極状が付属しており、以下のような記述がある。

白雲為蓋流

泉作琴之語

大燈国師之真

蹟此一軸年来

当庵什物無

其隠見自餘

一期何渴候恐惶

不宣

元和七 東林庵

十二月九 宗渭

（花押）

記述から清巖在世の当時、大徳寺山内の大仙院の寮舎であつた東林庵の什寶であつたことが判明する<sup>15</sup>。《白雲偈》の次の句である墨蹟には《一曲偈》（図A18）がある。本墨蹟を閲覧できておらず、『禅林墨蹟』の図版を参考に検討する。《一曲偈》は『墨蹟之写』（元和三年、丁巳）に以下のような記述がある。

一曲兩

曲無人　口ヨリツギメマテ

へツギメ

八寸九分アリ

會　雨　　　　豎之奥壹尺

五寸貳分

過夜濤

秋　水

深　昏内、貳尺四寸壹分、豎一尺、表具、

上下浅黄ノ昏、中アサキノカミ、一

字白地ノ金襴

記述と『禅林墨蹟』の画像を比較してみると、「一曲両曲無人」と「会雨過夜濤秋水深」では、紙の継いだ部分がみえる。また、筆跡および墨色にも変化が見られ、本紙中の宗峰妙超の筆跡部分には、『白雲偈』（野村美術館蔵）と同じく、「蓋」に通じる終画の留めが確認できる。

紙の継ぎ目および、「雨」の文字の一部が前半部分の紙に被さっている点、そして渴筆である点の以上を総合して考えてみると、「会雨過夜濤秋水深」の部分は後世の補筆部分であると考えられる。本墨蹟は、『墨蹟之写』に記載された当時、尊重する底本（または原本）があつたが、何らかの事情により分割された。分割された部分を補うものとして底本を知る人物により書かれたと推測される。

#### 15 《書簡》（図A19。大徳寺蔵。重要文化財）

本紙寸法は縦三二・四<sub>セシ</sub>、横三六・四<sub>セシ</sub>。本墨蹟は綸旨に関する消息である。本紙の文末に花押が確認できる。『墨蹟之写』（慶長廿年元和元年　墨蹟之写巻五）には、本墨蹟が掲載されており、以下のような記述がある。

綸旨無相違候目出候

於今ハ能可有御沙汰候哉

恩々可被進新田殿候

定御覽したく候ハん歟恐々

謹言

八月八日　「花押」

此開山ノ文後藤縫殿介所持候也死後主其志とて  
從後室大徳寺常住へ寄進候新田殿之義有之故乎

蜀隣ニ有之開山ノ文ソ文乙卯十一月十二日拝見之

本墨蹟は後藤縫殿介益勝によつて大徳寺に寄進されたとされるが、実際のところは益勝の死後に正室よつて「主其志」により大徳寺に寄進されたものであることが判明する。江月は大徳寺に寄進した理由として、宗峰妙超の出身地が播磨国であり、建武の新政時、新田義貞が播磨介となり、その関係から益勝が大徳寺に奉納したものと述べている。

この墨蹟は、寄進されて以降は大徳寺方丈に保管されてきた。『大徳寺重書箱入日記』（寛永七年七日）によれば

開山書簡

書中有新田殿事、

後藤縫殿允寄進

とあり、本墨蹟と合致する。寄進者の後藤縫殿允益勝については『寛政重修諸家譜』に後藤益勝として、その名がある<sup>16</sup>。益勝は十二歳の時より徳川家康に仕え、大阪夏の陣にも家康につき従い参加した。寛永四年（一六二七）に御所出入りの呉服商である縫殿寮の口宣<sup>17</sup>を賜うとある。大徳寺との関係では方丈の寄進者であつた<sup>18</sup>。また、益勝は刀剣についての鑑識も高かつたようで、『本阿弥行状記』にも紹介されている<sup>19</sup>。

#### 16 《秋風偈》（図A20。MOA美術館蔵）

本紙寸法は縦三〇・六<sup>サ</sup>、横六三・六<sup>サ</sup>。本墨蹟は『虚堂録』を出典とする詩偈墨蹟である。中筆を用いて書かれた墨蹟である。『墨蹟之写』（元和二年丙辰式冊之内上、墨蹟之写卷六）に本墨蹟が掲載されており、以下のような記述がある。

秋風淅々

秋水冷々

千辛萬

苦負笈

擔簞

大燈之墨蹟トテ

村不及ヨリ来候名印

無之誰トモ不知候

玉室へも談合候へと

申候ツル

同書において印の記述はなく、現在、本紙には印が押されていることから後印である。またこの墨蹟は、江月の時代には宗峰妙超筆跡であるとは特定されていなかったこ

とがわかる。閲覧したところ筆跡は中筆を用いて書かれている。墨色は薄い。紙面の状態から、「秋風」の書き出しによって書かれた墨蹟である。四行目の「苦」の文字は、先にみた《看読真詮傍》（真珠庵蔵）にも通じている。

17 《置文案》（図A21。出光美術館蔵。重要美術品）

本紙寸法は縦三二<sup>サ</sup>、横四九<sup>サ</sup>。なお、この墨蹟は宗峰妙超墨蹟中、「置文案」と呼ばれ、かつては古田紹欽により『古美術』において墨蹟本文と添状について述べられている<sup>20</sup>。本墨蹟の内容は以下となる。

摂津国福田村称仏寺并寺田日子被

寄付事承了但此寺雖後々末代或渡

他所或不可沽却他人永為門弟相続之寺專可有禅法

弘通之沙汰也仍為後日所申置之状如件

元徳三年三月十一日

大徳寺住寺ム判

彼寺ハ和侍者 一期者可管領之由与状了

寄付状名字

七郎左衛門尉 木工さ衛門入道 大輔阿闍梨子息大進房

国重 称願 定恵

大輔阿闍梨

定遍

《継ぎ目》

此草案者

大燈国師之筆也

縦仏之説法、不日子録成就則不能

以此見則以寺附門弟此事不

可懸喏

遠孫不肖比丘澤庵（花押）

書かれる内容は大徳寺寺院経営に関する文書である。文中に元徳三年（一三三二）と書かれており、宗峰四十八歳のときの筆跡と考えられる。本墨蹟は草稿の性格上、墨色は薄い。なお、本墨蹟は大正四年（一九一五）に東京美術倶楽部で開催された某子爵家并某大家所蔵品入札の売立目録に掲載される<sup>21</sup>。目録では松平伊賀守家伝来として紹介されている。本墨蹟には小堀遠州による添状（図A22）が付属しており、以下のような記述がある。

幸便之条、一筆令啓候。先日者繼飛脚之剋、御状亀松さま御むし氣に被成御座候へ共、早速御快然之由被仰越忝存候。弥御無事二両上様亀松様御機嫌よく可被成御座とめでたく存候。然者、国師のかけ物御氣二入之由をそらく見事なるかけ物に罷成候。国師のかけ物ニハならひなく見事さにて候。表具之事貴さまより御のぼせ候ハ、此方ニ御座候。別の御かけ物表具被成之剋、付可申候。今度之表具あしくハ在之まじく候。とかくとかく御床布計ニて別の事ハ無之候。

委曲 吉若州可仰候 恐惶謹言

小堀江守

六月十一日

政一(花押)

加甲州様

貴報

(返し書)

朽木民部殿御息災ニ被成御座候哉。御意得候て被仰可被下候。被仰下候。釜、花入相たつね申候。さて貴様之はいまだ見あたり不申と仰可被下候。

記述にある亀松とは徳川家光次男のことで、寛永二十年(二六四三)から正保四年(一六四七)に没している。そのため遠州の添状もその間に書かれたものと推定される。この添状は遠州が墨蹟の鑑定を依頼されたのか、先ず、その返答を行い、表具のことについても触れられている。

18 《白雲集》(図A23。福岡市美術館蔵)

本紙寸法は二二<sup>サ</sup>、全長二六五<sup>サ</sup>。白雲上人は中国の元代の禅僧で、字を英実存といい、銭塘(現在の浙江省)の人である。別号は白雲。その詩集が『白雲集』である。宗峰妙超が『白雲集』を書写したものが現在、卷子本として福岡市美術館に所蔵される。閲覧したところ用いた筆は写経用の筆で穂先の短い小筆を用いて書かれている。一文字毎に注目すると、一画一点をおろそかにせず書かれている。

本墨蹟は、版本『白雲集』巻二のうち十首、巻三のうち三十九首、巻四のうち十四首の計六十三首が収められているが、白雲集巻一の墨蹟は所収されていない。元来は冊子本であったものが分割され、後世になって収集され卷子に仕立てられたものである。閲覧したところ綴り合わせた紙と紙の上に押印がなされている。

卷子本となる以前は断簡が掛物として存在したようである。現在、同館が所蔵する白

雲集に付属する添状には以下のような記述がある。

第二卷

贈鄭炳文

井上家

掛軸

送人之平江投知己

孫景翔幽居

暨田別友

記述によると贈鄭炳文以下の四首軸が所収される。もともとこの四首は軸装本であったと考えられ、井上馨（一八三六―一九一五）が所持していた。関係する記録では、井上家が所蔵した白雲集については『萬象録』の大正元年（一九一二）十一月三十日、「井上馨侯八窓庵茶会」には以下のような記述がある<sup>22</sup>。

書院には宗峰妙超の白雲集

記述から、井上家が所有した四首軸の白雲集墨蹟が茶会で使用されたと考えられる。このような書軸本による白雲集は、多数存在したと考えられる。散逸した断簡がその後、収集され現在の一卷になった。

19 《手抄二卷》（図A24。芳春院蔵。重要美術品）

本紙寸法は縦二四・五<sup>サ</sup>。《手抄二卷》（芳春院蔵）は宗峰により、語録などから語句を書き出した抄録である。本墨蹟二巻は重要美術品に認定されている。書かれた内容から祖録写本に分類できる。その筆跡は筆先のみを用いて書かれている。さきの《白雲集》にみた筆跡とは異なっており、ハネ、ハライを気にせずに書かれたものである。なお本紙には後世のものと考えられる朱点が記入されている。巻末には玉舟宗璠（一六六〇―一六六八）、天室宗竺（一六〇五―一六七七）、宙寶宗宇（一七六〇―一八三八）の極めがある。宙寶の極には各巻に以下のような記述がある。先ず、一卷目では以下のような記述がある。

国師走毫楮数大小九枚壹卷

明應圓明両祖奥書書分析乙丑

冬修補永為芳春院寶卑印

每継加之都計両卷印子十面

松月宗宇拝納

印 印

記述から本巻は九枚をつないだ卷子であることが述べられる。次に第二巻では以下のような記述がある。

国師走毫楮数大小七枚壹卷

明應圓明両祖奥書書分析乙丑



冬修補永為芳春院寶卑印

每繼加之都計兩卷印子九面

松月宗宇拝納

印 印

記述から本巻は七枚をつないだ巻であることが述べられる。本紙には左上部に丁数と考えられる数字が記載しており、第一巻では順に「三十四」、「五十一」、「三十四」、「四十五」、「八十三」、「二十一」、「三十六」、「十二」、「二」とあり、九紙が継がれている。

第二巻には順に「三十」、「二十三」、「三十六」、「二十八」、「三十九」、「十五」、「十九」とあり、七紙が継がれている。なお巻末には第一巻同様に玉舟宗璫、天室宗竺、宙實宗宇の極めがある。また、収納する箱書は宙實によって以下のような記述がある。

(甲)

開山國師尊毫 兩卷

(裏)

開山國師細字手澤 兩卷

納之芳春院法寶藏須珍襲矣

修補共箱浦井隆屋喜捨

文政十二歲次己丑十二月 松月宗宇識(花押)

記述にある表具の改修については二巻を収納する箱に宙實によって甲には「開山國師尊毫 兩卷」とあり内側には以下のような記述がある。

開山國師細字手澤 兩卷

納之芳春院法寶藏須珍襲矣

修補共箱浦井隆屋喜捨

文政十二歲次己丑十二月 松月宗宇識(花押)

記述から文政十二年(一八二九)に浦井隆屋の寄進によって表具が改修されたことが判明し、継目の押印と巻末の極めはこのときになされたことが判明する。

20 虚堂智愚墨蹟《達磨忌拈香語》(図A25。大徳寺藏。国宝)

本紙寸法は縦四一・五<sup>センチ</sup>、横一一九・七<sup>センチ</sup>。本墨蹟は『山上宗二記』において以下のような記述がある。

一、虚堂 一幅

堺山上宗二。此一幅ハ達磨大師七百年忌ノ枯ノ香也

(中略)

虚堂墨蹟達磨忌七百年之拈香

應般若多羅之懺 嫩桂無差 破流支三藏之疑 詞鋒峻烈 縦此六宗斂影

正脉流通 一花五葉 滿地吹香 海豎山栴 咸霑聖澤 月良春小 蕙莢五

敷 炷此兜慕 少伸攀慕 且道 大師還來也無 梓香云 不審々々

外題 虚堂和尚真蹟達磨忌拈香 大燈國師御筆

三好實休所持、其後本願寺家中へ渡、当代山上宗二所持也

記述から本墨蹟の内容と、外題が宗峰妙超による筆跡であることが述べられている。  
閲覧したところ、外題の寸法は縦一二<sup>サ</sup>、横三<sup>サ</sup>である。

## 21 《法語》(図A26。尊経閣文庫蔵)

本紙寸法は縦三〇<sup>サ</sup>、横四〇<sup>サ</sup>。加賀藩二代藩主であつた前田利常(一五九四―一六五八)の所蔵した墨蹟である。《法語》について、先行研究では古田紹欽による『大燈国師墨蹟』<sup>23</sup>において紹介されている。この墨蹟は、『墨蹟之写』(元和八年墨蹟二十六卷)に同一と考えられる墨蹟の記載が確認でき、以下のような記述がある。

初心始学士先須発無二志願

不管一切是非単々思此事在此其

如未然巡人情転臨難事退決

無勇猛意気不達出家本旨且

道如如是出家本旨不見劉

鍊磨参瀉山々云老特牛

汝来也須弥特跳磨云来日臺

山裏有斎和尚還去也虚空

咬牙若空甘得瀉山千古手水草當頭

暗恁麼事

右大徳寺開山特賜興禪大燈高照正灯國師之眞蹟也

後生之者不可疑之也慶長四年夷則日

帗内横一尺六寸五分豎一尺三寸六分上下浅黄之絹

中風帶紺地ノ金紗一文字香地印金

八月廿四日知首座持参申候名印無之其上常ニ

見申候大燈ヨリモ手蹟ハタラキ見事候大燈トハ

難申候コトく點アリ手蹟李叔太首座事

落墮候テ書被申候カト相見候

記述によれば、知首座が持参したものと書かれる。また、この墨蹟は、李叔太首座によつて書かれた墨蹟であり、摸本墨蹟であることが判明する。同書の記述では、この墨蹟には以下のような中継ぎの極めがあったようである。

右大徳寺開山特賜興禪大燈高照正灯國師之眞蹟也

後生之者不可疑之也慶長四年夷則日

記述にある二行の極書は現在の墨蹟に存在していない。しかし、この墨蹟に付属する添状(図A27)では記述があり、当初は存在したが、前田家において切断されたものと考えられる。本墨蹟には添状(利常の書状の写し)が付属する。添状(図A28)では以下のような記述がある。

明日用意出き候や

此かけもの大とう候

間つかわし申候 かしこ

二月二十二日

出雲まいる 中納言

また、収納される箱の蓋には墨書で

進上 大燈御掛物 前田出雲

記述から前田家に伝わった本墨蹟は利常の時代、家臣の前田出雲守貞里に下賜されたが、後年再び前田家に献上されていることが判明する。

22 《与道刃禅尼法語》(図A29。香雪美術館蔵)

本紙寸法は縦二九・八<sub>セシ</sub>、横九四・五<sub>セシ</sub>。道刃禅尼に与えた法語である。田山方南は本墨蹟を『禅林墨蹟拾遺』において紹介されている。閲覧したところ、筆跡は速筆のために起筆から中盤に向かつて筆を走らせ、中央部が最も太くなっている。文末に建武丁丑、すなわち建武四年(一二三七)の宗峰最晩年の筆跡であるとされる。同年に書かれた作例では《与宗圓道人法語》(梅澤記念館蔵)、《日山之賦》(個人蔵)があるが、これらと比較するといずれとも類似していない。なおこの墨蹟は大正五年(一九一六)に行われた『当市某旧家・神戸一峯庵所蔵品入札』の売立目録に所載される<sup>24</sup>。

23 《休翁号》(図A30。根津美術館蔵)

本紙寸法は縦三一・五<sub>セシ</sub>、横六九・二<sub>セシ</sub>。休翁という道号を書いた字号である。関

覧したところ、墨色は薄く、宗峰の印がある。用いた筆は大筆で、行書体で書かれている。田山方南は本墨蹟を『禅林墨蹟拾遺』において紹介しており、休翁という人物については法嗣以外の参禅の居士と指摘している。現存する二大字号では《徹翁》（徳禅寺蔵）や《梅溪》（五島美術館蔵）があるが、これらと比較しても、本墨蹟の筆跡は共通していない。

#### 24 《与宗明大姉法語》（図A31。根津美術館蔵）

本紙寸法は縦三二・一<sup>セ</sup>、横七七・六<sup>セ</sup>。書かれる内容は宗明大姉に与えた法語である。先行研究では古田紹欽による『大燈国師墨蹟』において紹介されている<sup>25</sup>。閲覧したところ、墨色は薄い。筆跡は入筆が鋭く、文字の雰囲気としては宗峰の特徴に類似しているが、「也」の文字や「心」の文字などは硬い印象を受ける。筆跡に躍動感はなく、宗峰の筆跡とは言い難い。文字を書き進むにつれて行頭が下がっていく傾向がみられる。この傾向は《与泰綱居士法語》（湯木美術館蔵）や《与宗圓道人法語》（梅澤記念館蔵）にもみられた傾向である。従って尊重する底本もしくは作風を模したものであると考える。

<sup>1</sup> 大田善磨『寛政重修家譜』第三卷、続群書類従完成会、一九六四年。  
<sup>2</sup> 林亮勝、坂本正仁校訂『干城録』第一卷、人間舎、一九九七年。  
<sup>3</sup> 松下幸之助（一八九四・一九八九）。松下電気産業株式会社創業者（現パナソニック株式会社）。裏千家十四代家元淡々斎（一八九三・一九六四）に私淑し茶をよくした。西宮の自宅には名次庵、京都南禅寺近くには真々（いづれも小間）がある。なお真々は裏千家今日庵を写したものの。

<sup>4</sup> 田山方南『禅林墨蹟拾遺解説』（思文閣出版、一九七七年、一〇七頁）では「大燈国師墨蹟日山号 松下家蔵」と紹介される。

<sup>5</sup> 京都美術倶楽部編『京華』（京都美術倶楽部、二〇〇八年、二七八頁）参照。このほかの茶会の使用は、財津永次氏の教示によれば大燈忌茶会（於五島美術館）で用いられ、茶会当日のみ、当時の所有者である松下家から借用されたため、添状等の付属品は確認していないとのことである。

<sup>6</sup> 茶道資料館「茶の湯と掛物Ⅱ大徳寺の墨蹟を中心に」茶道資料館、一九八二年、一〇七頁。

<sup>7</sup> 『書道芸術』（中央公論社、一九七五）および木下政雄「大燈国師真跡の意義」『月刊文化財』一九八五）でも紹介される。

<sup>8</sup> 『龍寶山祖師伝』花園大学図書館蔵、請求記号≒33159。

<sup>9</sup> 大塚榮三著『馬越恭平翁傳』馬越恭平翁傳記編纂會、一九三年。

<sup>10</sup> 『興作偈』を閲覧したところ用いた筆は、双幅の《夏日偈》同様に柔らかな大筆で書かれたと考えられる。文字に注目すると「成」の四面目などの払いが右肩上がりになる箇所や、「殊」の左下がりになっている箇所など、これらが本紙全体で動きをつける役割をしている。総体に各字形が右肩上がりになっている特徴がある。墨色もはつきりとしている。

次に《夏日偈》を閲覧したところ大筆を用い書かれている。墨色の濃淡も残り、筆の腹部を用いて書かれている。筆の毛は柔らかであったためか、線質は丸みを帯びている。経年変化による皸、および割れが多くみられる。筆跡が同じことから先の《興作偈》と同時に書かれた墨蹟である。

<sup>11</sup> 付属する箱および付属品を調査したところ、《興作偈》箱裏には以下のような墨書がある。

昔泉州左海南宗寺什物沢庵和尚傳來

慶應年間酒井雅楽頭より里木場鹿嶋清右衛門へ傳

明治七年石町松澤孫八へ又傳り同家より

明治三十六年十月御殿山益田家へ傳ル

本墨蹟は堺の南宗寺に所蔵された墨蹟であり、澤庵宗彭（一五七三・一六四六）が所持していたとされる。慶応年間（一八六五・一八六八）に酒井宗雅（一七五六・一七九〇）が所持していた。その後、木場の材木商であった鹿嶋清右衛門、明治七年（一八七四）には松澤孫八、明治三十六年十月に益田孝（一八四八・一九三八）が所持した旨が書かれている。

<sup>12</sup> 平野宗浄校訂『増補龍寶山大徳禅寺世譜』、思文閣出版、一九七九年、三七頁。

<sup>13</sup> この墨蹟の伝来を整理すると以下になる。

連歌師宗長↓真珠庵↓（織田信長）↓篠屋宗久↓冬木弥平次↓禅隆寺↓雲林院↓樽与左衛門↓大坂某↓平瀬露香↓松岡忠良↓井上馨↓藤原銀次郎↓藤原有三↓東京国立博物館↓九州国立博物館（現在）である。

<sup>14</sup> 『書道芸術（第十七巻）』、中央公論社、一九七五年、一九〇―一九一頁。

<sup>15</sup> 東林庵以前の伝来については「真珠庵墨蹟箱入置注文」から判明する。

<sup>16</sup> 同書には以下のような記述がある。

後藤益勝 初忠勝 生蔵或生三 縫殿允

慶長元年より東照宮につかえたてまつる。時に十二歳。のち大猷院に附属せられ、御側に勤仕し、のち父が家督を継、十九年大阪の役には東照宮にしたがひたてまつり、仰によりて大阪城に入り、和議の事をはからふ。元和元年の役には大猷院殿の御使として大阪におもむき、御陣所にいたり圓相前建の甲冑をたまわり、五月七日も御陣に供奉す。寛永四年大猷院殿の御前にいて恩命をかうぶるとき、益勝かつてより封禄をのぞまずとて其身の昇進を辞したてまつり、こふて致仕す。九月縫殿寮の口宣をたまわり、呉服司となる。今子孫その業を相続す。

<sup>17</sup> 縫殿允。縫殿寮のなかで、「允」は従七位下相当の役職。

<sup>18</sup> 山田宗敏『史料大徳寺の歴史』（毎日新聞社、一九九三年）に所収の『大梁興宗禅師年譜』（寛

永十年）によれば益勝について以下のような記述がある。

洛有信士後藤氏、発願一新本山函丈、乃出家資巨万寄師、以告其志於山中諸彦記述から益勝は、大徳寺方丈の寄進者でもあったことが判明する。

<sup>19</sup>『本阿弥行状記』には以下のような記述がある。

台徳院様勝れたる名人ありやと御尋ね被成しとき、光室具に申上けるゆえ能く御存知被成、第一御秘蔵三吉正宗の拭ひを光瑳に被仰付度思召けれども、病人にて江戸まで罷越申事不叶ゆえ、後藤縫殿助に御腰物奉行衆付けられ、はるばる京都まで御登せ被成

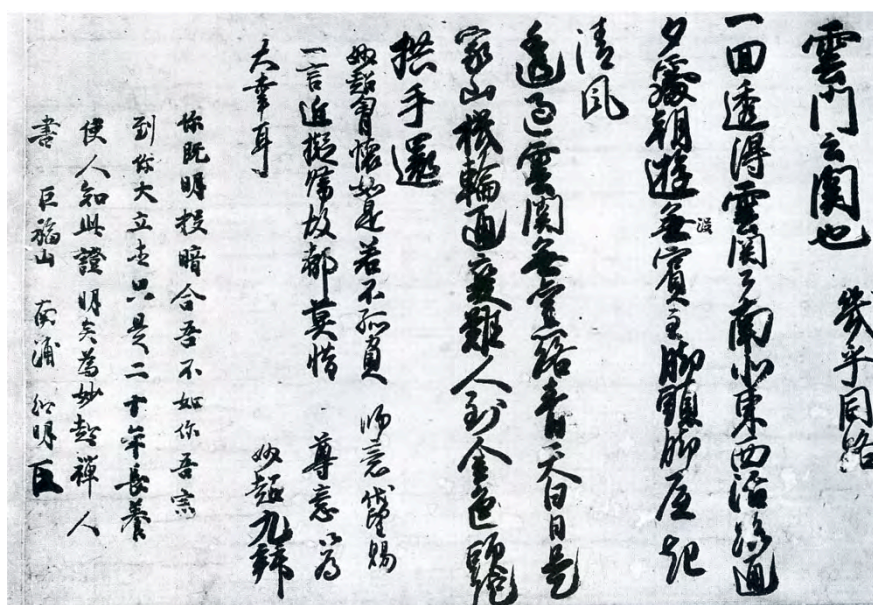
<sup>20</sup>古田紹欽「大灯国師筆置文案に寄せて」『古美術』五三号、一四七・一五〇頁。

<sup>21</sup>売立目録『某子爵家并某大家所蔵品入札』東京美術倶楽部蔵。

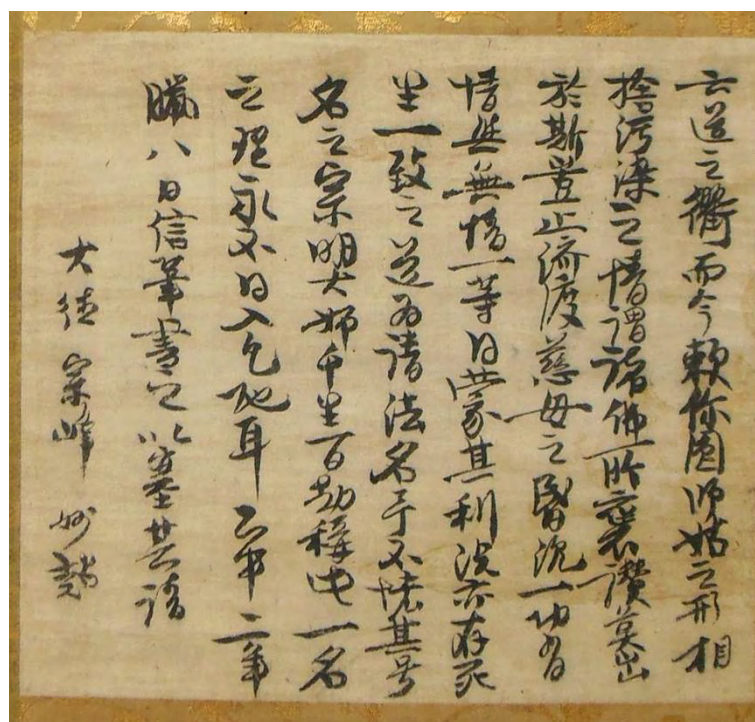
<sup>22</sup>高橋義雄『萬象録』高橋箒庵日記（卷一）、思文閣出版、一九八六年。

<sup>23</sup>古田紹鉄『大燈国師墨蹟』河原書店 一九四九年。

<sup>24</sup>売立目録『当市某旧家・神戸一峯庵所蔵品入札』、東京文化財研究所蔵、請求記号美研-108。  
<sup>25</sup>伊東卓治によれば宗峰の筆跡としては疑わしいとされる。

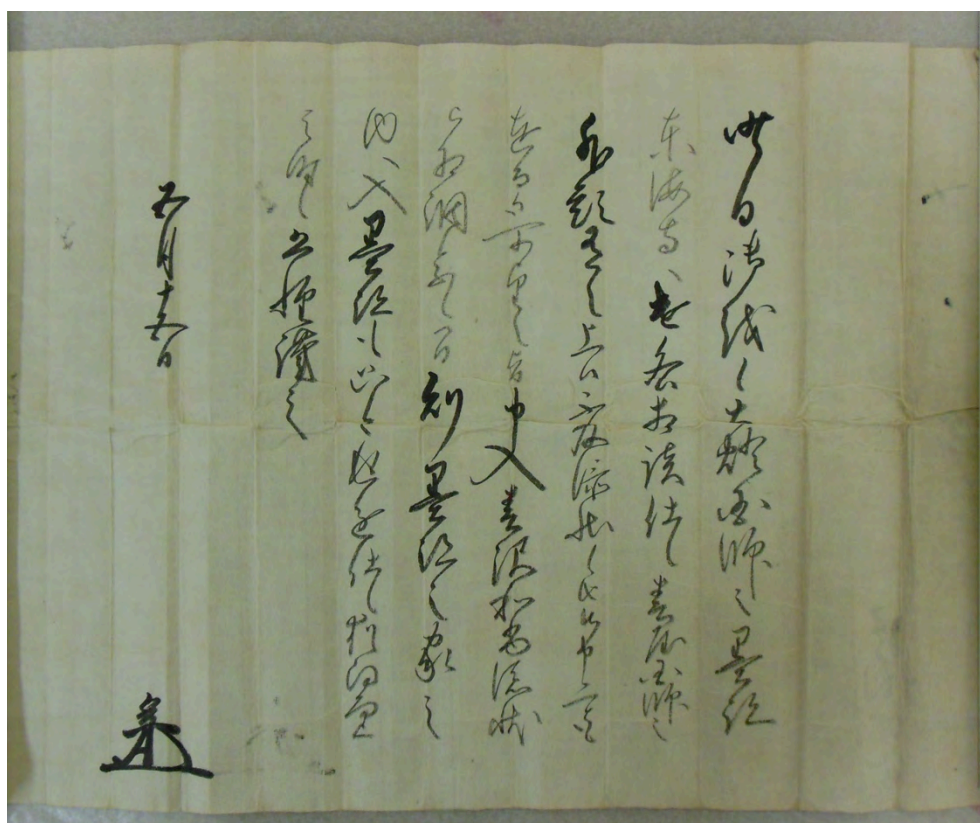


図A1 投機偈（大徳寺）

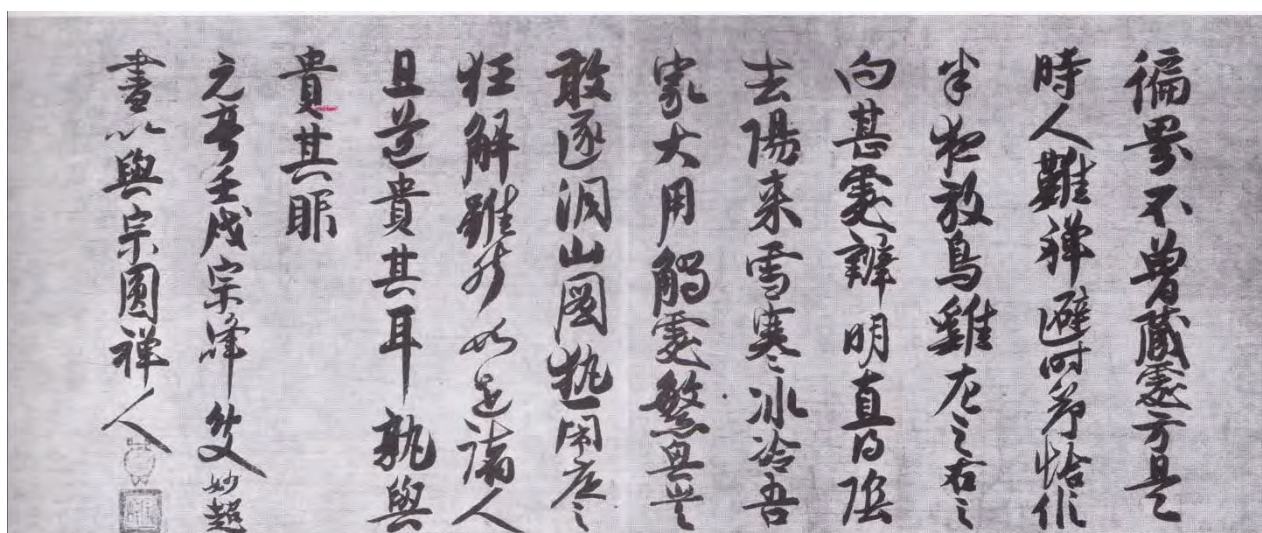


図A2 与宗明大姉法語（永青文庫）



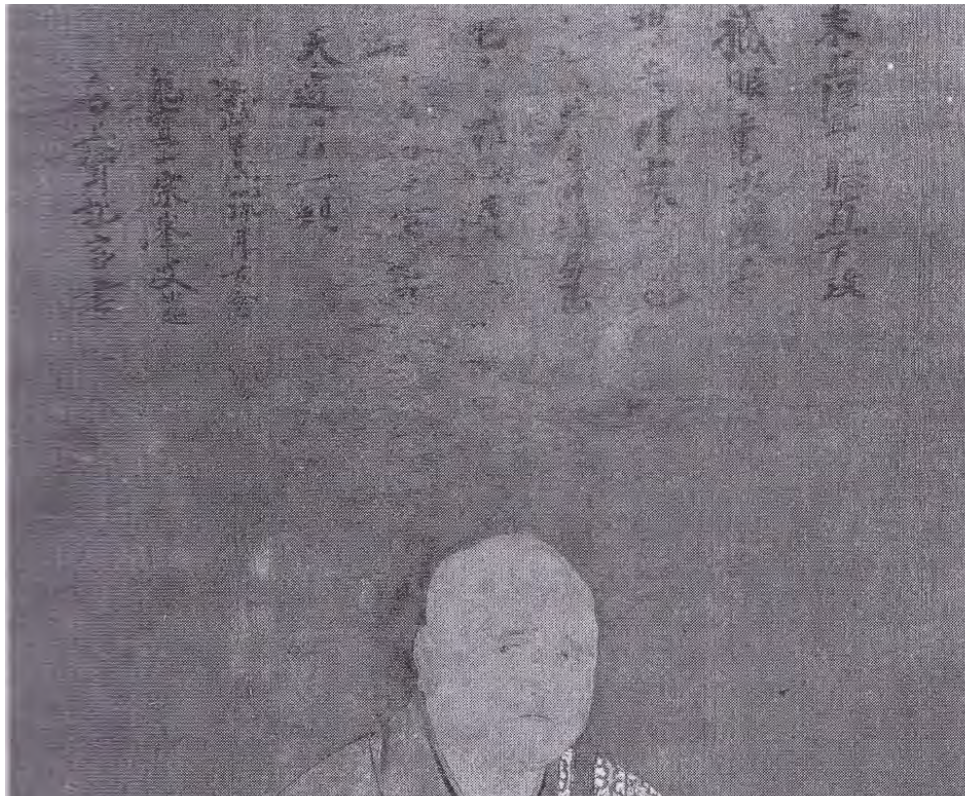


図A 3 与宗明大姉法語に付属する片桐石州添状（永青文庫）

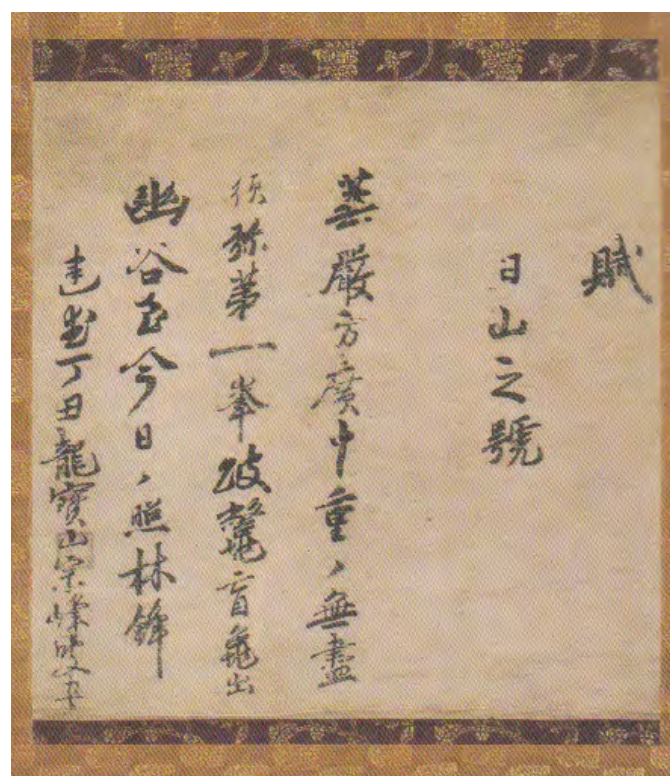


図A 4 与宗圓禅人法語（根津美術館）



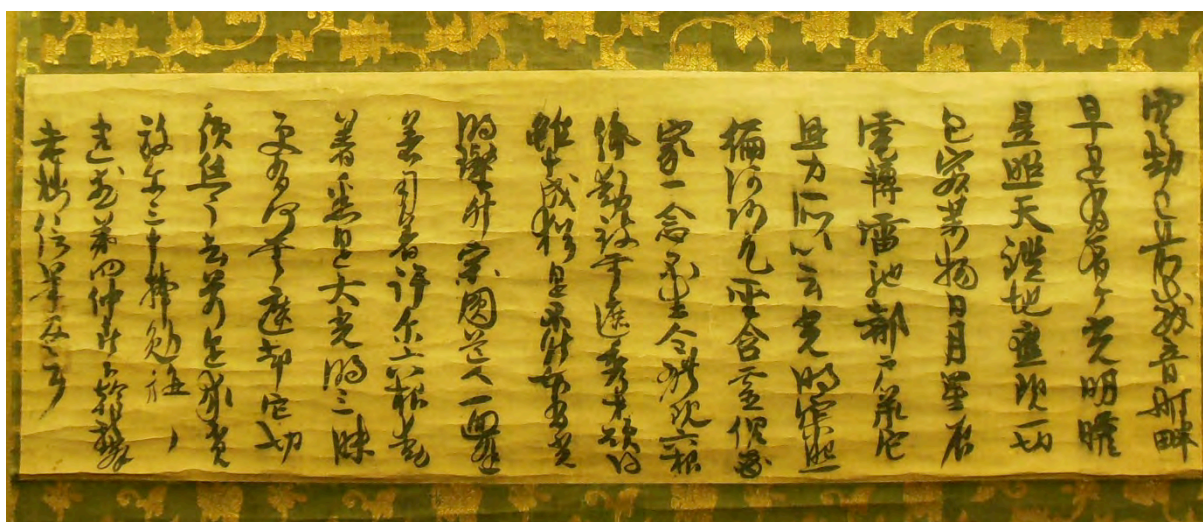


图A 5 宗峰妙超像（大德寺）

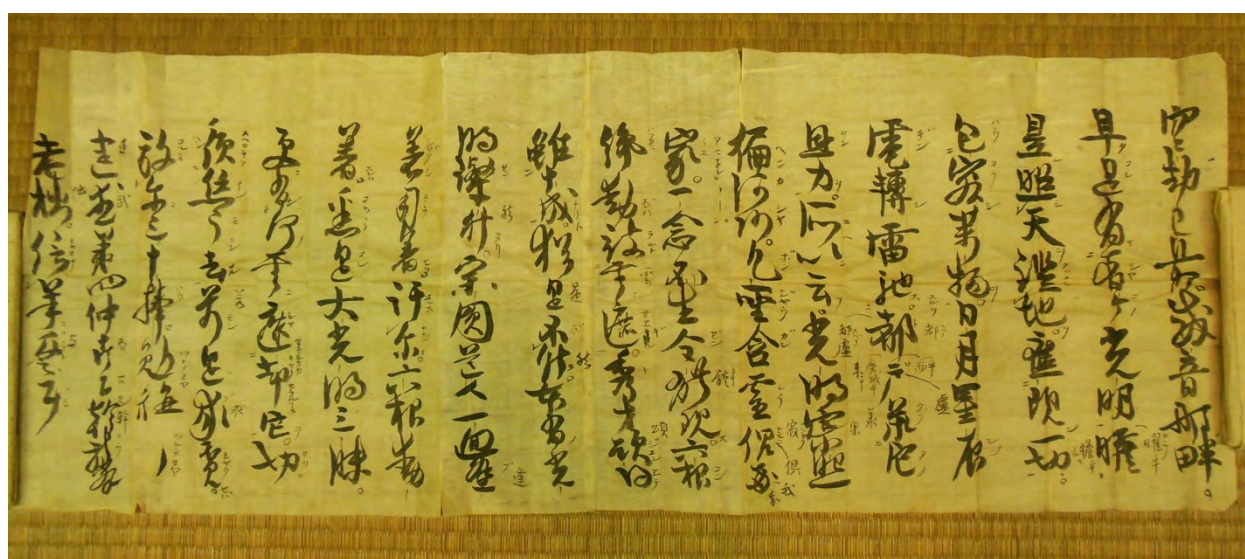


图A 6 日山之賦（個人藏）

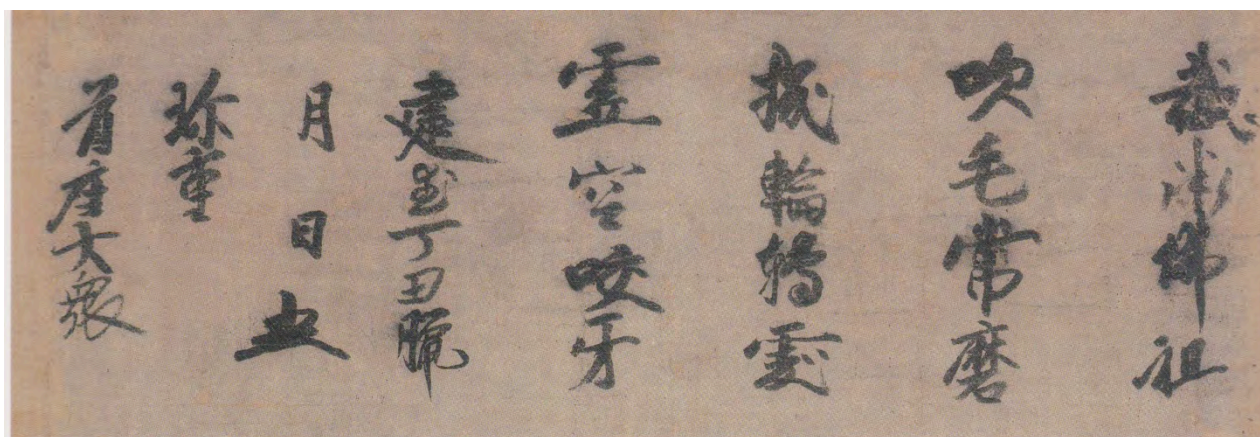




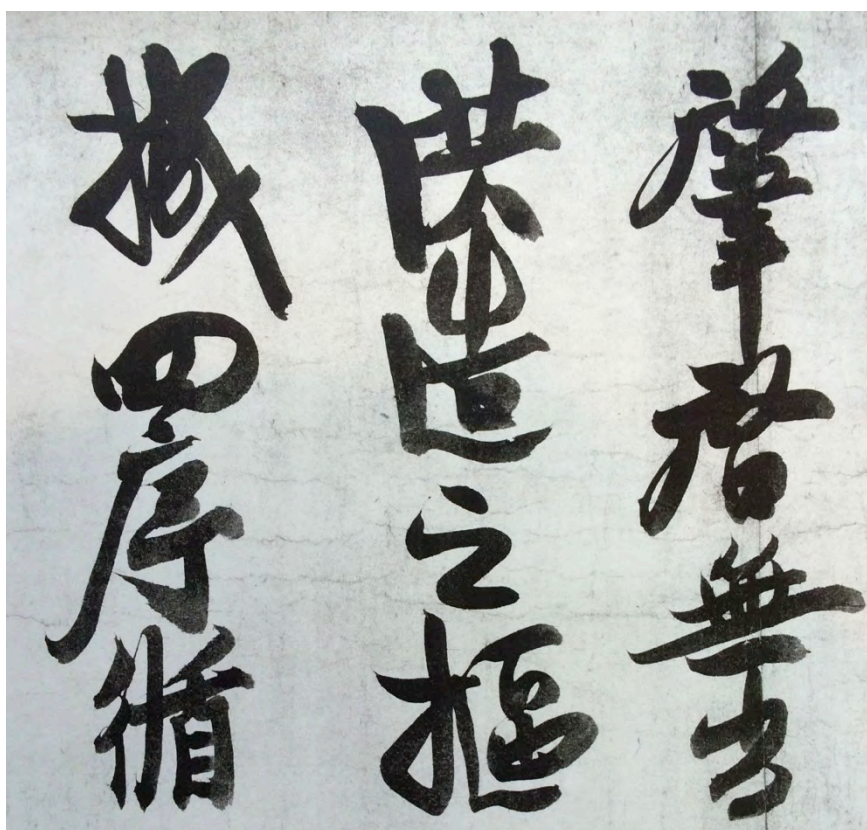
図A 7 与宗圓道人法語（梅澤記念館）



図A 8 《与宗圓道人法語》の原寸大の模写（梅澤記念館）



図A 9 遺偈（大徳寺）

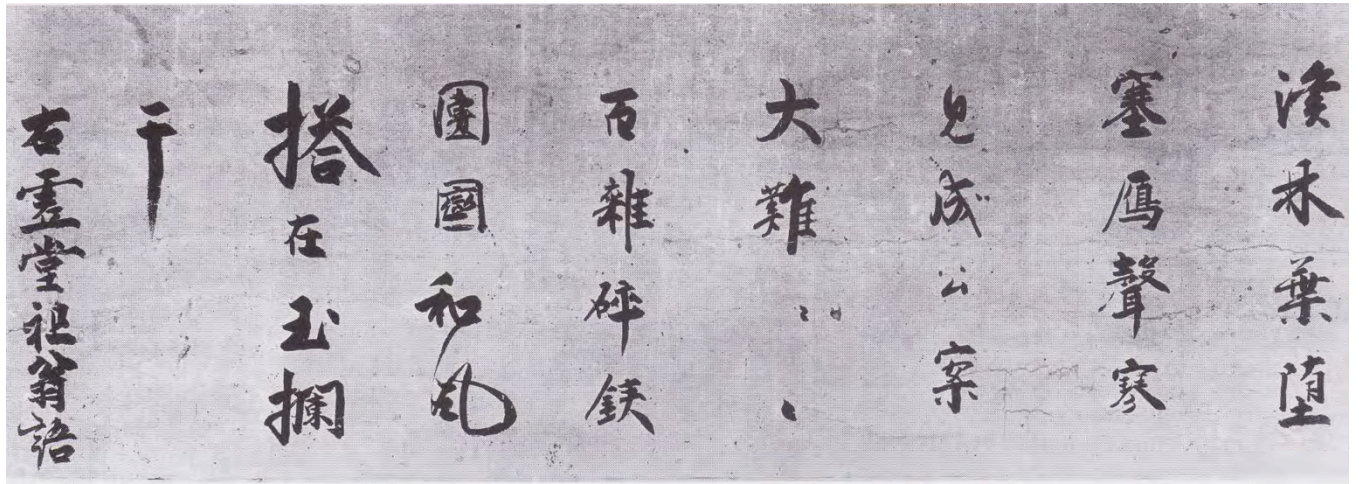


図A 10 看読真詮傍（部分。真珠庵）





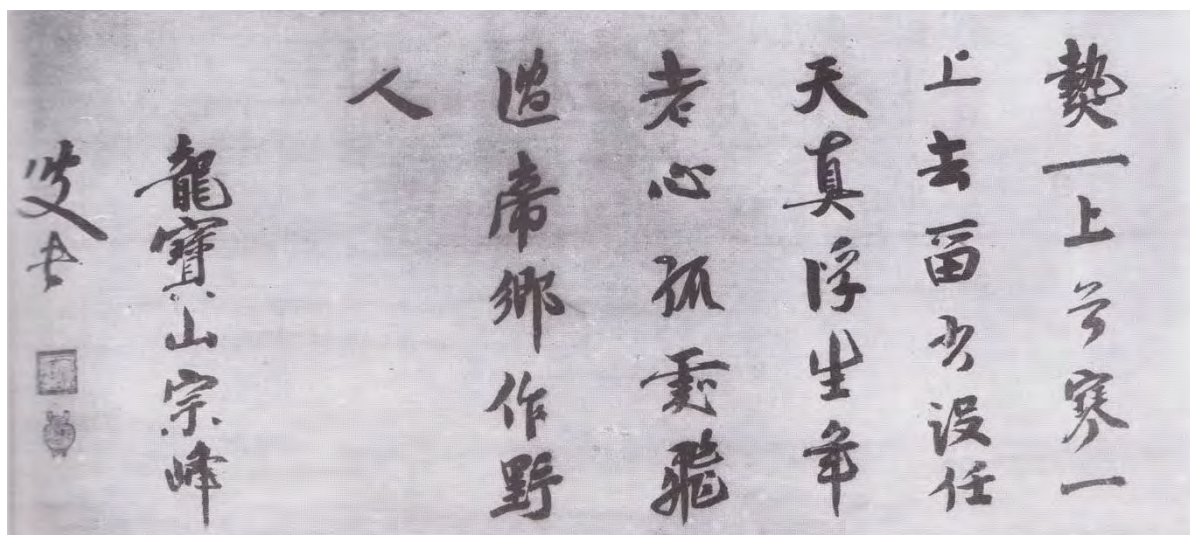




図A 1 3 凧（九州国立博物館）



図A 1 4 外箱裏（九州国立博物館）左は自署部分の拡大

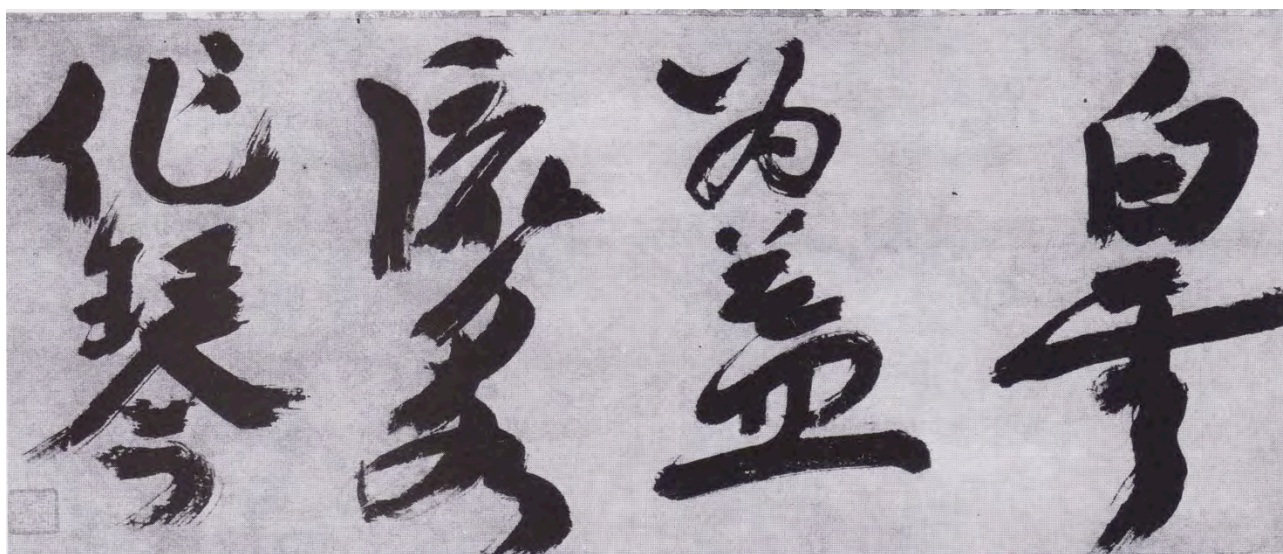


図A 1 5 七言偈（「熱一上」）（藤田美術館）

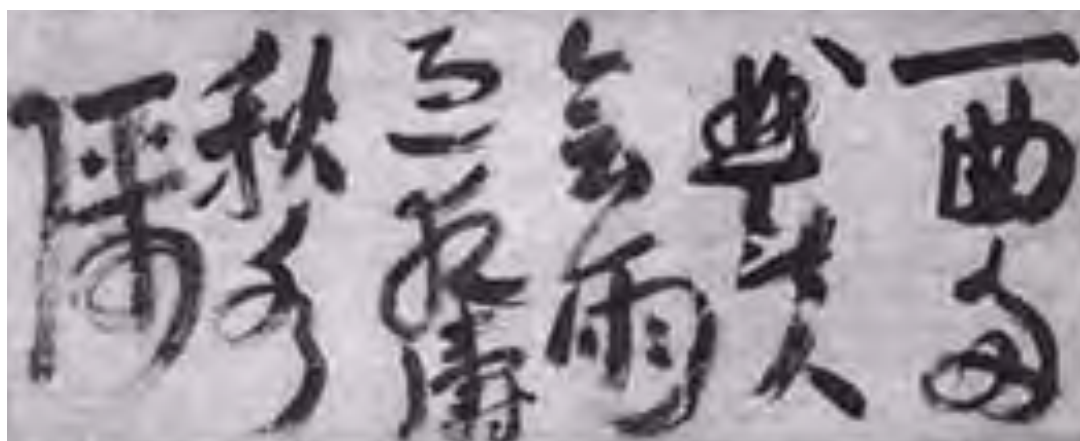


図A 1 6 徹翁号（徳禅寺）

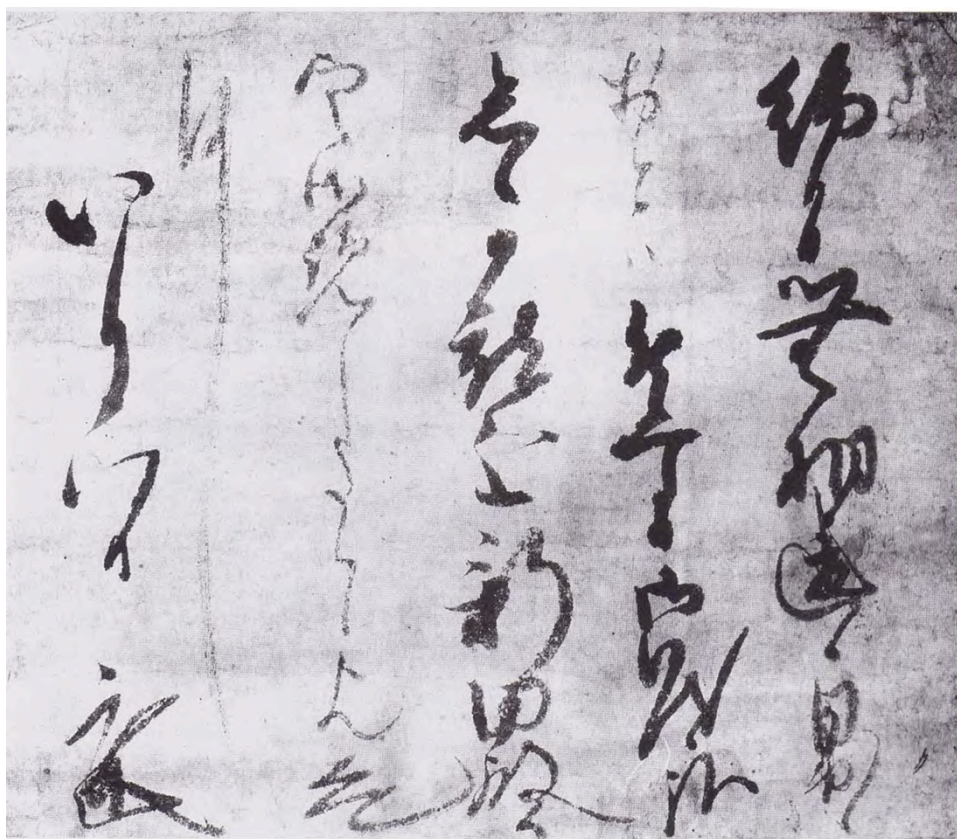




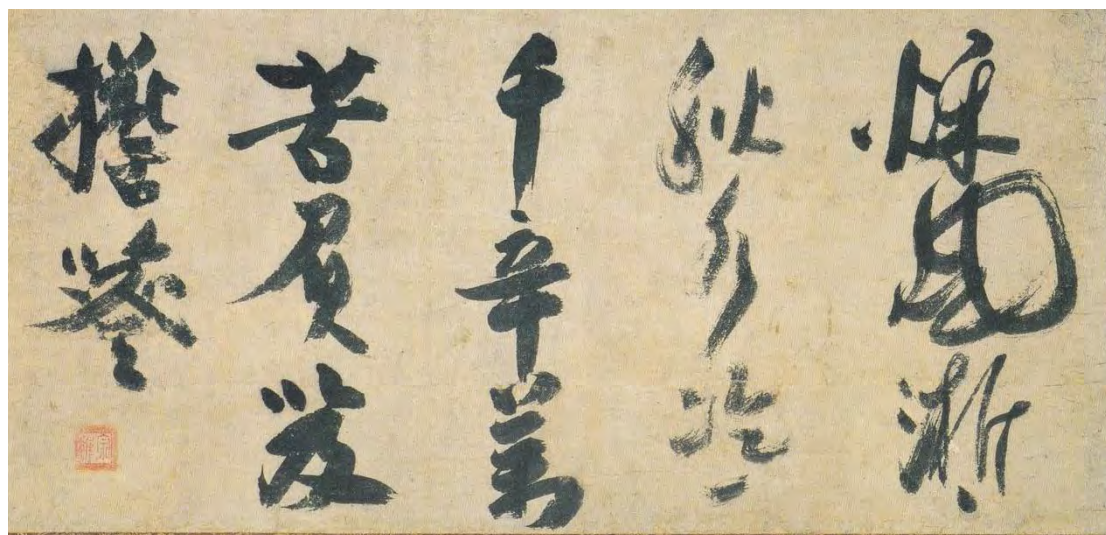
图A 1 7 白雲偈（野村美術館）



图A 1 8 一曲偈（個人藏）

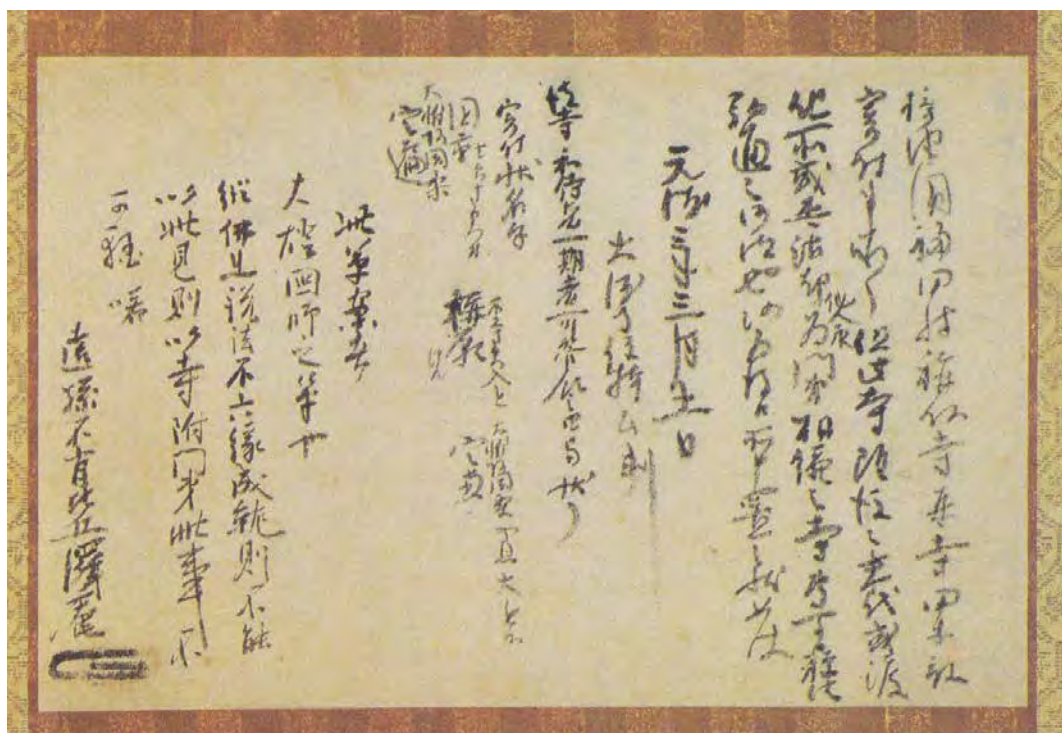


图A 1 9 書簡（大徳寺）

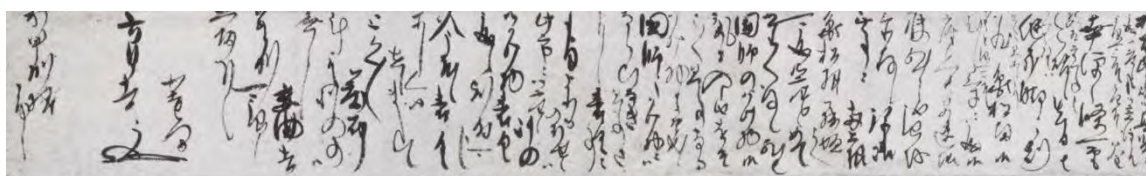


图A 2 0 秋風偈（MOA美術館）

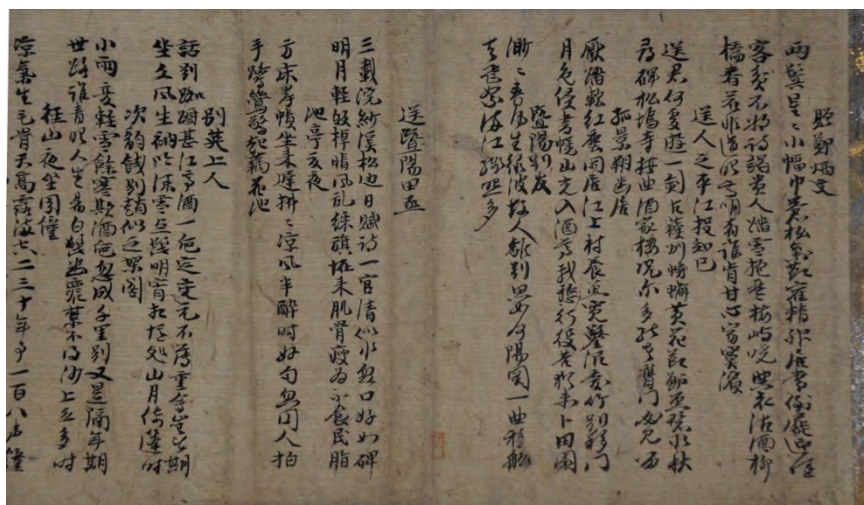




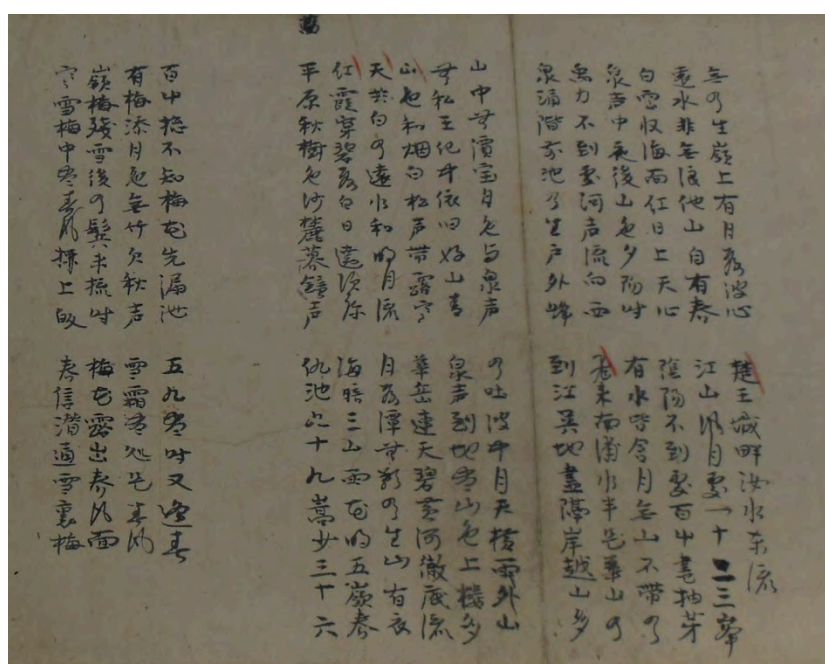
図A 2 1 置文案（出光美術館）



図A 2 2 置文案に付属する小堀遠州添状（出光美術館）

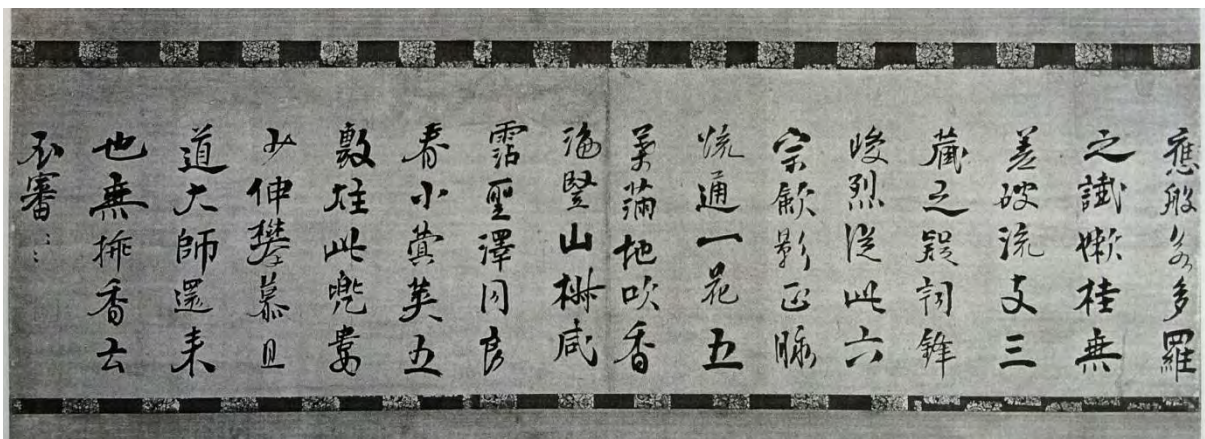


図A 2 3 白雲集（福岡市美術館）

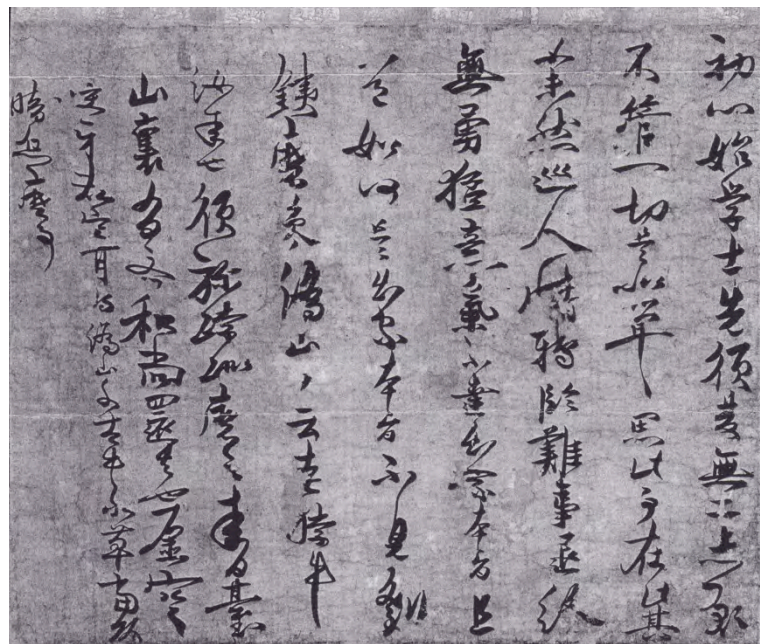


図A 2 4 手抄二卷（芳春院）

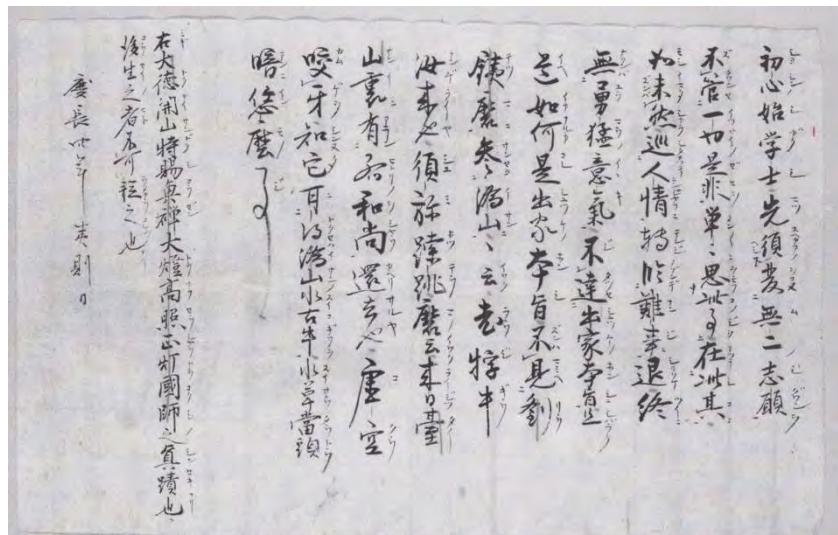




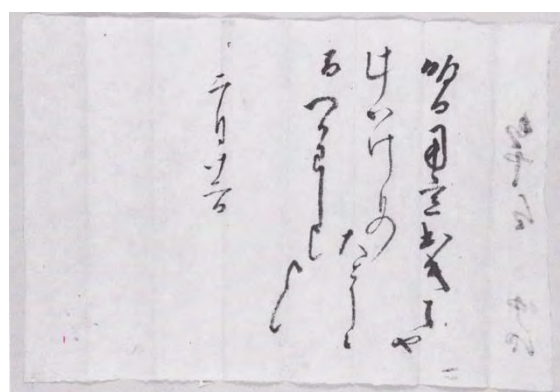
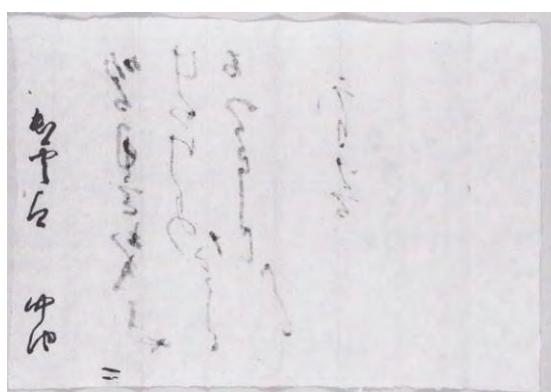
図A 2 5 虚堂智愚墨蹟 達磨忌拈香語 (大徳寺)



図A 2 6 法語 (尊經閣文庫)

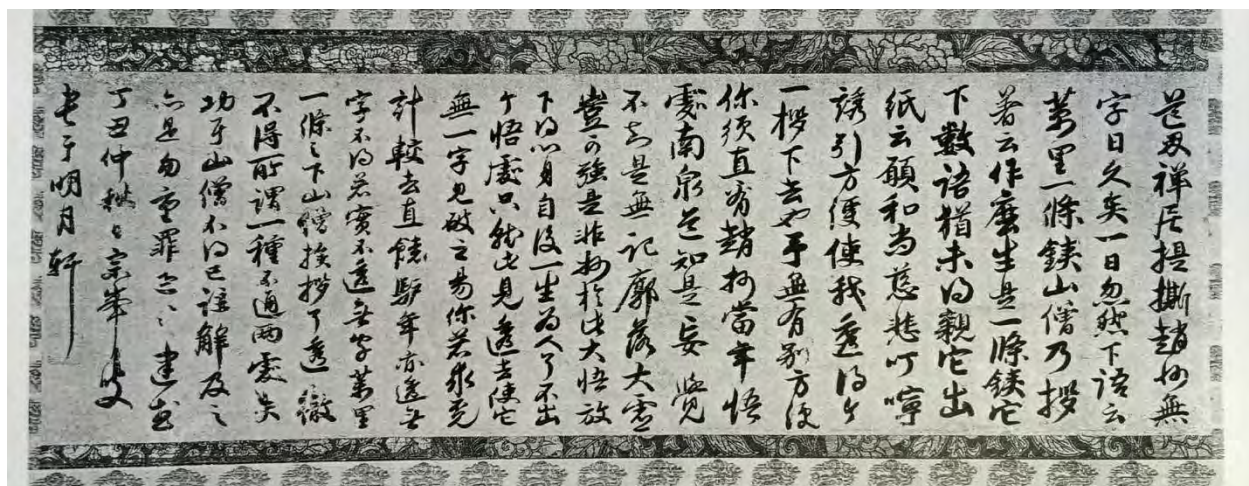


図A 2 7 法語に付属する添状（尊経閣文庫）

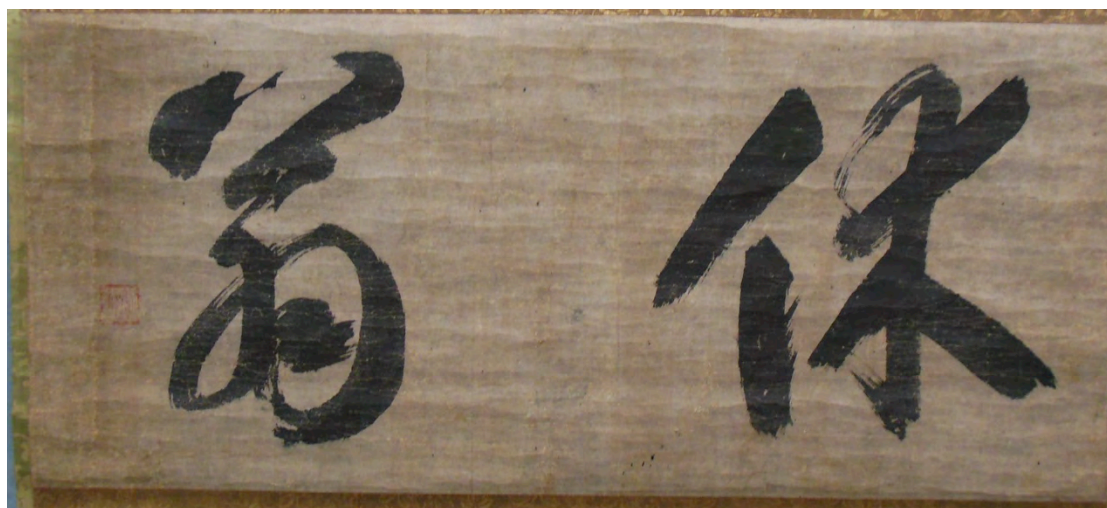


図A 2 8 法語に付属する添状（尊経閣文庫）



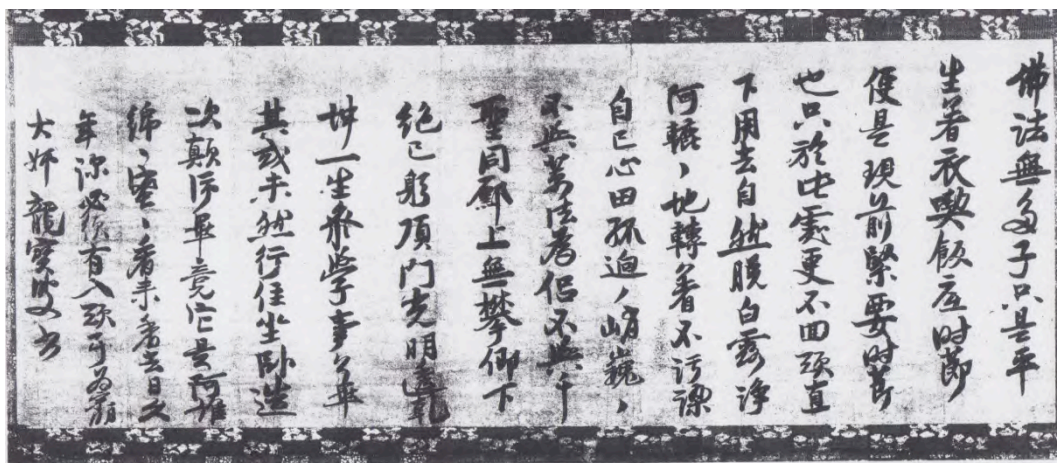


图A 2 9 与道刃禅尼法語（香雪美術館）



图A 3 0 休翁号（根津美術館）





图A 3 1 与宗明大姉法語（根津美術館藏）

## 付録1 調査を実施した墨蹟図版の翻刻

図A1 投機偈（大徳寺）

雲門云關也幾乎同路

一回透得雲関了南北東西活路通

夕處朝遊無賓主脚頭脚底起

清風

透過雲關無舊路青天白日是

家山機輪通變難人到金色頭陀

拱手還

妙超胸懷如是若不孤負師意伏望賜

一言近擬歸故都莫惜尊意以為

大幸耳

妙超九拝

図A2 与宗明大姉法語（永青文庫）

六道衢而今頼你圓師姑之形相

捨汚染之情謂諸仏所褒讃莫出

於斯豈止濟度慈母之昏沈一切有

情與無情一得蒙其利況亦存死

生一致之道為清法名予不恡其号

名之宗明大姉千生百劫稱此一名

之理永不得入凡地耳正中二年

臘八信筆書之以塞其請

大徳 宗峰 妙超

図A3 蠟八偈に付属する片桐石州添状（永青文庫）

昨日御越之大燈国師之墨蹟

東海寺へ遣各相談仕候、春屋国師之

外題有之候上は、不及添状之旨被申候へとも

進て御所望之旨申入春沢和尚添状

被相調致候間、則墨蹟之家之

内へ入、墨蹟も只今返進仕候、猶得望

之時候、恐惶謹言

五月十五日

（花押）

（裏）

片桐石見守

伊沢隼人正樣

人々御中

図A 4 与宗圓禪人法語（根津美術館）

偏界不會藏處方是

時人難驪避時節恰似

半夜放鳥鷄左之右之

尚甚處辨明直得陰

去陽來雲寒冰冷吾

家大用觸處繁興豈

敢逐洞山圖熱鬧底之

狂解雖然如是諸人

且道貴其耳孰與

貴其眼

元亨壬戌 宗峰叟妙超

書以與宗圓禪人

図A 5 宗峰妙超像（大徳寺）

末上聳聽直下攻

機眼裏怒發舌

根失理古今此色

得人惡青絹画出

它是誰唼賓主難

藏分外意寥廓

天辺月一規

建武甲戌臘月下澣

龍寶山宗峯叟妙超

為上聳記室書

図A 6 日山之賦（個人蔵）

賦

日山之號

華嚴方廣中重々無盡

須弥第一峯跛甕盲龜出

幽谷正今日之照林錚

建武丁丑 龍寶山宗峰叟書

図A 7 与宗圓道人法語（梅澤記念館）

空劫已前威音那畔

早是有者个光明瞻

是照天鑑地應現一切

包容萬物日月星辰

電轉雷馳都盧承它

恩力所以云光明寂照

徧河沙凡聖含靈俱我

家一念不生全體現六根

纔動被雲遮秀才頌得

雖十成猶是不然本有光

明燦然宗圓道人一迴逢

着用着許爾六根動着

須恁麼去若是求覓

放爾三十棒勉強々々

建武第四仲春下幹龍峯

老拙信筆及之耳

図A 9 遺偈（大德寺）

截斷佛祖

吹毛常磨

機輪轉處

虚空咬牙

建武丁丑蠟

月 日 （花押）

珍重

首座大衆

図A 1 0 看読真詮榜（部分。真珠庵）

看読真

詮榜

伏以三陽

図A11 与泰綱居士法語（湯木美術館）  
古德云

毫釐釐繫念三塗業因  
瞥爾惜生劫萬劫羈鎖只  
要直下休歇去見聞知覺  
處便是安樂無事時節  
穩察穩座屈宅也可能  
恁麼去喚男呼女坐起  
經行大自在不可思議境  
界與從長上拙秀才陳  
操尚書李騎馬、楊大年  
把手俱行便是雖處在  
家中則所謂火中蓮花  
眞出家兒也泰綱居士  
來受衣鉢上戒已做吾佛  
一弟子求法號則名宗正紙  
背覓个警策信筆及之  
以塞其請大德宗峰妙超  
書于明月軒

図A12 興作偈、夏日偈（いずれも出光美術館）  
興作都無定中霄殊未眠窓明簷外  
雪室靜竹間泉幾倒無聲際還  
帰有象前盤桓成此曲不覺曉光連

夏日宜山寺優遊趣幾何閑  
庭芳草長危嶺微雲過潤水穿廓  
遶崑風入座多更當星少夜月色透松蘿

図A13 上堂語（汎）（九州国立博物館）  
溪林葉墮  
塞鴈声寒  
見性公案  
大難々々  
百雜碎鉄  
団圓和風

搭在玉欄

干

右虛堂祖翁語

図A14 外箱裏（九州国立博物館）

雲林院開山大燈国師御筆跡 禅隆寺為永代什物奉遣上也 上田弥平次

（貼紙）開山国師墨寶 雲林院常什 寶永五戌子歳二月 政郷

図A15 七言偈（「熱一上」）（藤田美術館）

熱一上兮寒一

上去留出沒任

天真浮世年

老心孤處飛

過帝郷作野

人

龍寶山宗峰

叟書

図A16 徹翁号（徳禅寺）

徹

翁

宗峰翁為

義亨首座作

図A17 白雲偈（野村美術館）

白雲

為蓋

流泉

作琴

図A18 一曲偈（個人蔵）

一曲両

曲無人

会雨

過夜濤

秋水

深

図A19 書簡(大徳寺)

綸旨無相違候目出候

於今ハ能可有御沙汰候哉

恩々可被進新田殿候

定御覽したく候ハハ歟恐々

謹言

八月八日 (花押)

図A20 秋風偈(MOA美術館)

秋風淅々

秋水冷々

千辛萬苦

負笈擔簦

図A21 置文案(出光美術館)

撰津国福田村称仏寺并寺田日子被

寄付事、承了。但此寺雖後々末代或渡

他所或不可沽却他人。永為門弟相統之寺專可有禪法

弘通之沙汰也。仍為後日所申置之状如件。

元徳三年三月十一日

大徳寺住寺ム判

彼寺ハ和侍者 一期者可管領之由与状了。

寄付状名字

七郎左衛門尉 木工さ衛門入道 大輔阿闍梨子息大進房

国重 称願 定恵

大輔阿闍梨

定遍

〈継ぎ目〉

此草案者

大燈国師之筆也

縦仏之説法、不日子録成就則不能

以此見則以寺附門弟此事不

可懸喏

遠孫不肖比丘澤庵(花押)



図A22 置文案に付属する小堀遠州添状（出光美術館）

幸便之条、一筆令啓候。先日者継飛脚之剋、御状亀松さま御むし氣に被成御座候へ共、早速御快然之由被仰越忝存候。弥御無事二両上様亀松様御機嫌よく可被成御座とめでたく存候。然者、国師のかけ物御氣二入之由をそらく見事なるかけ物に罷成候。国師のかけ物二ハならひなく見事さにて候。表具之事貴さまより御のぼせ候ハ、此方ニ御座候。別の御かけ物表具被成之剋、付可申候。今度之表具あしくハ在之まじく候。とかくとかく御床布計ニて別の事ハ無之候。

委曲 吉若州可仰候 恐惶謹言

小堀江守

六月十一日

政一（花押）

加甲州様

図A23 白雲集（福岡市美術館）

（書出）贈鄭炳文、送人之平江投知己、孤景翔幽居、暨陽別友

図A24 手抄二卷（芳春院）

（書出）拈却玄沙白紙自然千里同風

図A25 虚堂智愚墨蹟 達磨忌拈香語（大徳寺）

達應般若多羅  
之讖。嫩桂無  
差。破流支三  
藏之疑。詞鋒  
峻烈。從此六  
宗歛影。正脈  
流通。一花五  
葉。滿地吹香。  
海豎山椒。咸  
沾聖澤。月良  
春小。萸莢五  
敷。炷此兜樓。  
少伸攀慕。且  
道。大師還來

也無。挿香云。  
不審々々。

図A26 法語（尊經閣文庫）  
初心始学士先須発無二志願  
不管一切是非単々思此事在此其  
如未然巡人情転臨難事退決  
無勇猛意氣不達出家本旨且  
道如如是出家本旨不見劉  
鍊磨參瀉山々云老（牛に字）牛  
汝来也須弥特）跳、磨云、来日臺  
山裏有斎和尚還去也虚空  
咬牙、若空甘得瀉山千古手水草、當頭  
暗恁麼事

図A27 法語に付属する添状（尊經閣文庫）  
初心始学士先須発無二志願  
不管一切是非単々思此事在此其  
如未然巡人情転臨難事退決  
無勇猛意氣不達出家本旨且  
道如如是出家本旨不見劉  
鍊磨參瀉山々云老（牛に字）牛  
汝来也須弥特）跳、磨云、来日臺  
山裏有斎和尚還去也虚空  
咬牙、若空甘得瀉山千古手水草、當頭  
暗恁麼事

右大徳寺開山特賜興禪大燈高照正灯國師之眞蹟也  
後生之者不可疑之也

慶長四年夷則日

図A28 法語に付属する添状（尊經閣文庫）  
明日用意出き候や

此かけもの大とう候

間、つかわし申候。かしこ。

二月二十二日

出雲まいる

中納言

図A29 與道刃禪尼法語（香雪美術館）

■図版参照

道刃禪尼提撕趙州無  
字日久矣一日忽然下語云  
萬里一條鍊山僧乃拶  
着云作麼生是一條鍊它  
下數語猶未得親它出  
紙云願和尚慈悲叮嚀  
誘引方便使我透得于  
一拶下去也乎無有別方便  
你須真下有趙柯当年語  
處南泉道知是安覺  
不知是無記廓落大靈  
豈可強是非柯於此大語放  
下得心身自後一生為人了不出  
ケ悟處只我此見透去使它  
無一字見破之易你若求覓  
計較去直饒駟年亦透無  
字不得若實不透無字萬里  
一條之下山僧挨拶了透徹  
不得所謂一種不通兩處失  
功于山僧不得已語解及之  
而是勿重罪過々建武  
丁丑仲秋日宗峯叟  
書于明月軒

図A30 休翁号（根津美術館）  
翁 休

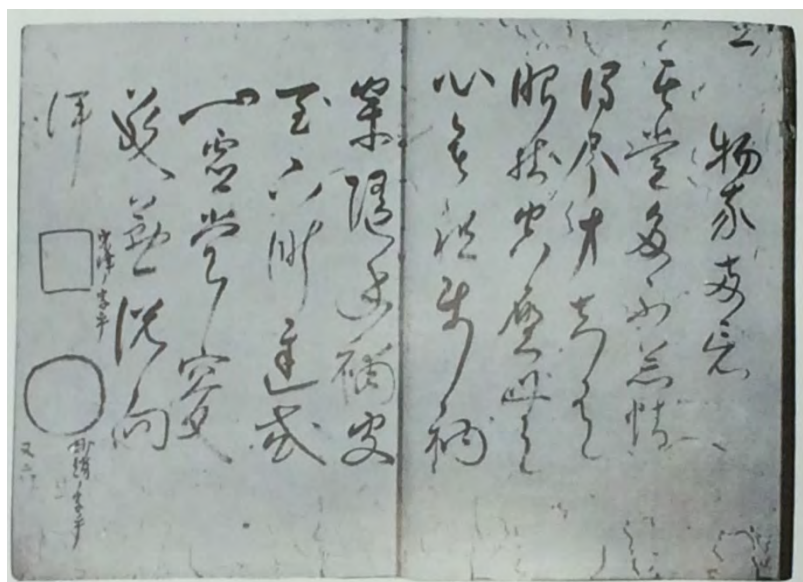
図31 与宗明大姉法語（根津美術館蔵）  
仏法無多子只是年  
生着衣喫飯底時節  
便是現前 要時節  
也只於此處更不回頭直  
下用去自然脱白露淨  
阿輓々地転著不汚染  
自己心曰弧迥々峭巍々  
不与萬法為侶不與千  
聖同 ■ 1 上無舉仰下  
絶己躬頂門光明透乾  
坤一生参学事了畢  
其或未然行住坐臥造  
次顛沛畢竟它是阿誰  
綿々密々看来看去日久  
年深必須有入頭乎為宗明  
大姉龍宝叟書

## 付録2 江月宗玩『墨跡之写』にみえる宗峰妙超墨蹟

凡例

- 一、以下に記載する翻刻は、印影本「江月宗玩墨跡之写」（竹幽文庫蔵）より、大燈国師または宗峰妙超墨蹟とされる記述を抽出し翻刻した。
- 二、影印本は「墨蹟之写」四十冊である。
- 三、記載のある墨蹟には通し番号を付与した。
- 四、記載に該当する冊番号を明らかにし、年号を記入した。
- 五、断簡部分に関して付与された番号が或る場合は適宜、記載した。
- 六、欠字は□、判読不能な文字は■で示した。
- 七、断簡部分、または本文しか存在しないものは（断簡につき本文のみ）と記載した。
- 八、江月による本文中で継ぎ目の記載があるものは「ツギメー」とした。
- 九、断簡部分で、一墨蹟が頁で分断されている場合には適宜（1）、（2）の番号を付与し、同一通し番号内で表示した。

以上



物我両忘の記述（翻刻は47頁参照）

（画像は竹内尚次『江月宗玩墨蹟之写（禅林墨蹟鑑定日録）の研究上』より転載）

「本文翻刻」

1 慶長十六辛亥 墨蹟之寫卷一

物我兩忘

居常多不器情

謂盡方知有

眼挂空壁無

心合祖師衲

穿隨手補客

至下階遲或

問虛堂叟

慇懃說向

伊 「方印」 「丸印」

(宗峰ノ字乎) (妙超ノ字乎)

右之開山ノ墨跡大森宗巴被取候也此墨跡ハ先季

薩摩衆大仙ヘ寄進其後大仙ヨリ出候今ハ和泉衆ヨリ

宗巴ヘ来候也金子三枚か四枚がほとニテ取候ト聞ヘタ

昏ニ所ホトツイテ有タ

2 慶長十六辛亥 墨蹟之寫卷一

新命龍山和尚眼瞰西江碧色胃

吞東海層瀾三十年吳楚爛遊二六時

已躬不昧靖退小鄉堅尊宿鐵眼之

何堪盍

右之墨跡大燈也前萬江禾上ニ在之大佛之自性院

ヨリミセニ来候慶長十六二来候也外題在之月堂トヤラ

月英トヤラ云人ノ手跡ト萬江ヨリ云来候其人之

添狀モ在之ト也添狀ハ不来候爰元ニ久敷有テ正筆

ト云傳候ホトニ定而可為其分候此節似物多ホトニ

以正筆似タルも不存事候能々穿鑿候へと申遣候

其上切タル物ニテ

語ツキカヌルト云テヤリタリ

3 慶長十七壬子 墨蹟之寫卷二

一段大事因縁空劫已前

威音那畔早是現成久矣

廓如大靈無邊無際絶

絶迹行往坐臥語玄

作用道是此時節間不

容髮孤老峭凌祖佛

近傍是終直下於是受

用去得大自在大安樂坐

得承把得定千靈羅以龍

未終不廻頭等用握土

自然成金亦非此道奇妙

奇特乎宗智道人道任可

麼做ニ夫不久乃善 宗峰叟書

帋乃内横三尺壹寸五分豎一尺一寸一分表具上下チヤノ絹  
中アサキノ絹一文字風帶紫地印金ヤナナ半兵衛ヨリ来小遠州  
取ツキ為真筆ト点ヲシテ遣候也重而寛永三八月廿五日  
從松倉豐州来候前方同時ニ申遣候右大灯国師之文字春屋  
手蹟ニテ御寫物三玄院ニアリ元和五八日ニ見候

4 慶長十九甲寅 墨蹟之寫卷四

諸惡莫作

衆善奉公

右之二行物六月七日從水河州来候小遠州ヨリ状も  
来候大灯之由申来候墨色新手蹟も開山トハ不見前々

澤庵御覽アリテ正筆ト云来則澤庵ニ見セ候ヘハ前々御覽アリタト也正筆トイワヌトノ  
返事也

澤庵和尚御覽之時

大阪丹波屋トヤラ云モノ所持候トテミセタト御申候  
表具ナド結構ニアリタゾ上下紫地ノツクリツチノ印金唐ト見ヘタリ中  
白地テツセン花ツルノ銀欄一文字風帶白地ヲウチビシノヤウナル文ノ金欄  
慶包紙ニ大灯国師墨跡慶觀ト書テアリ慶觀ハ慶音カ子也

5 慶長十九甲寅 墨蹟之寫卷四

餘慶應来積善家何須靈

鶻噪楂々不如返哺全慈孝

我欲良工寫十鴉

樗里生 「印」

一大灯之由浴佛之偈南都湯や作助ヨリ来トテ渭首座ニ  
見候大灯ニテアルマジキカト云タゾ見事成  
手蹟ソ開山ノ手ヨリ尚モ見事ナル手テアリタソ  
此書付此冊口ノ卅七丁朝行西域ノ墨跡ノ  
次ニ来トテ奥書付テ有之候

6 慶長廿年元和元年 墨蹟之寫卷五

達磨大師從竺乾遠泛鯨波  
初到梁王有廓然無聖之語千里萬里恰如一條鉄從爾以還  
有少林皮肉骨體之分付並皆不出廓然無聖之一句子後來宗  
派流注亦只向者裏為人抽鉄拔槩解粘去縛而臨濟入門便是喝  
德嶠跨戸便棒不歷根機不立  
垠栽迥々巍々終無縫罅轉力  
轉緊逾親逾儉至干而今洋々  
不斷允是吾宗源深流長決矣  
所以道萬古應不墜分明在目  
前且道目前底个阿誰切  
切着此崖到去崖到来忽然一回築光本  
来心地雖為纖毫無有它物  
政恁麼時節乃是廓然無聖底如厝手見掌浮世難久  
居出息不待入息切須勉旃  
建三祀孟冬下澣宗峰叟 「花押」

此大灯八月十九日大宗味ヨリ



ミセ被来候從堺出候ト也玉室  
沢庵同時二見申候一段ト見事之  
文字ソ墨コク手ニツクヤウニ  
有タ乍然可為正筆候前々  
長谷川忠衛所ヨリ来候文字ハ  
手ヲソヘタレハ其儘墨ツキタルソ  
此文字八寸ホドニハナシ何様新ク見  
ユル墨ソ悪キ墨ニテコクカキタハ  
經筆モ如此ト沢庵ナト云候何  
トシ申候モ此文字ハ似セタモノニテ  
無之候返事ニ大燈国師墨蹟  
芳春院同時拝覽候シ初而申候文字  
定而可為正筆芳春院モ其通ニ候  
昨日芳礼其副使隙御報延引  
右之文字從堺出候由其段何トモ覺  
無之候□芳春院舊札可被申候今  
應客人取粉被申候テ從愚也相心得候  
様ニト申候此文字所持候者彌見事鑒  
候テ可然存事候口ナトハ切リタル事可有候  
重而元和三三月十四日從小遠州来候  
此文字ハ前々徳乗処ニ有テ後ト養ニ  
有タ文字ゾ

7 慶長廿年元和元年 墨蹟之寫卷五  
何事よりもまつ酒如此

承候之條感悦之外無  
他事令存候哉古しへ遣  
能法語に下語をして  
まいら勢候こ連越可有御  
覽御本を志路しめされす  
候盤舞本とハ下語に御心え  
あるへか羅す候也  
法々本来法足瘦草鞋覓心々  
無別心鐵丸無縫罅世界國土  
このしうに申しいれまいらせさせ  
給候へ者一日も御せんけの御物  
かたり候しかハ御させん候へく候  
かやうの  
事も御古ねにもわたり亭返々  
よろこひいりて候へともな越まことニ  
この法にて生死ハ者なるへき物  
そとふかく信する御心かいまた候ハぬこ  
と於ほく候かまへてもろともに御修  
候へく候實にハ又な越さりにてハかな  
ハぬ事にて候やよく／＼ 志いても御  
させんハあるへき事にて候也何事も  
ゆいけんしやういん御まいり候ハんとき  
申入候へく候恐々謹言  
二月十六日 「花押」  
浦上殿

此文字道吾トミタリ

開山ヲ初ハ道吾ト云タ

浦上殿ハ開山ノ親父也此文ハ前宮幸三郎所持一段ハ利休所ニ有リ利休ヨリ住吉屋宗拙父モライタト也由来正キ物ノ壺道味ニ有之開山ノ文

8 慶長廿年元和元年 墨蹟之寫卷五

とかく枝寺からも

得□事書慥無為候

□無子細者

無心元候て完元房ヲ

御上洛候ハん

別寺ニ付ケ下候了

以前兩度預芳札候條

當年者

御報者即申候宗正房

不可有子細候□由被存候也然申候間

事未申御報候出家無子細候

不□候

但掛搭之一段未落居候

妙覺寺宗仙房等六惜テ

思案之最中ニ候當寺

難渋候ハ々祖庭書記ヘ

可報之由候いづれニ付テモ

御在所不可有候 子細候也又

惠日参此論慥給候了

吾悦入候當年者いかにと

候やらん心身安隱と申へきにて

候ハん例々か支りて思食事と申し候

振舞と申候存外ニも萬事ニ

道身不節兩毎々ニ悦ヲ

たて候ハて不叶候風ニあたり

候ハん不叶不可思議不可讒之次第候恐々謹言

八月四日

「花押」

石和田半丈 御報

此大燈之文長谷川式部ヨリ乙卯十一月六日ニミセニ來候駿河ヨリ被參候

玉室ニもミセ候手跡見事ゾ玉室被申候ハ手跡見事ニて候間

定而可為正筆候哉前々比判ノ有ノ春屋在世中ニ

來候ト也表具了德所より來候よしニ候比判慥ニミシラヌ程ニ

如何候と春屋も被申候ト也愚拙も覺無之手跡見事ナホトニ正筆か

昏内一尺四分横貳尺五寸貳分昏ハ三粗紙表具上下茶北絹

中ヨモキ金欄一文字なし

△長谷川ヘ江月返事ニも手跡見事に候條定而可為

正筆候他所へも被懸御目候可然と返事申候從

江戸文來候其返事ソ

9 慶長廿年元和元年 墨蹟之寫卷五

綸旨無相違候目出候

於今ハ能可有御沙汰候哉

念々可被進新田殿候

定御覽したく候はん歟恐々

謹言

八月八日 「花押」

此開山ノ文後藤縫殿介所持候也死後主其志とて  
從後室大徳寺常住へ寄進候新田殿之義有之故乎  
匍隣ニ有之開山ノ文ソ文乙卯十一月十二日拝見之

10 元和二年丙辰 式冊之内上 墨蹟之寫卷六  
就播州事彦五朗申

入候至今日二十九日無音愚推

不違候歟引洩寺中之所存

許候歟定別秘計候内々其

分承候也相傳打之所存有

子細事候貴邊以一片心令

仰傳被語給之間誰有所存

申返事候果無正體事歟

他比後又萬一いかなる事を被申て

出来候はん寸候返々さう特候

同人持参候大略大燈正筆之様ニ相見候前後ヲ切タル  
物ソ正筆ニシテ何ノ用立事ハ有ましきゾ

ライ昏も無之

11 元和二年丙辰 式冊之内上 墨蹟之寫卷六

秋風淅々

秋水冷々

千辛萬

苦負笈

擔簦

大燈之墨跡トテ

村不及ヨリ来候名印

無之誰トモ不知候

玉室へも談合候へと

申候つる

12 元和三年丁己 上四冊之内 墨蹟之寫卷八

雨夜即事

簷頭雨滴為君報明暗双々

誰共論朕龍出身難藏処

知它幾ヶ弄精之鬼

諸惡善作衆善奉行

和夜坐聞雨韻

都靈不足耳邊聽春雨

濠々簷外声玉句秘来清

奥別蒲稂牢是柰動幽情

(↑誤写したものか)

上堂一句去一句來慶狀你一

平生忽然傾洌倒嶽入那春

出那意昨夜三更失却

牛天睦起來決却火卓

「ツギメアリ」

丈一下 大燈墨迹一休一覽了也 「印」

正月晦日ニ甚右衛門見遣來也堺ヨリ來候也昏内横壹尺六寸豎九寸二分

開山手ノヤウニハアレトモ慥々シヘヌ事也一休ノ奥書何トヤライナ物ソ印ノ朱墨色

新ク覽候也

13 元和三年丁己 四冊之内上中下 墨蹟之寫卷十

一曲兩

曲無人

「ツギメ」

會々雨

過夜屏

秋水

深

口ヨリツギメマテ

八寸九分アリ

豎之奥壹尺

五寸貳分

昏内横貳尺四寸壹分豎一尺表具

上下濃淺黃ノ昏中アサキノカミ一文

字白地ノ金欄

14 元和三年丁己 四冊之内上中下 墨蹟之寫卷十

古徳云

「ツギメ」

毫釐繫念三塗業因

瞥爾惜生劫萬劫羈鎖只

要直下休歇去見聞知覺

處便是安樂無事時節

穩察穩座屈宅也可能

恁麼去喚男呼女坐起

經行大自在不可思議境

界與從上長拙秀才陳

操尚書李駙馬楊大年

把手俱行便是雖處在

家中則所謂火中蓮花

眞出家兒也泰綱居士

來受衣鉢上戒已做吾佛

一弟子求法號則名宗正紙

背寬个警策信筆及之

以塞其請大徳宗峰 妙超

書于明月軒

奥少モライナシ春屋ノ外題有大灯国師眞蹟ト  
有印ハナシ大灯正筆ト相見候春屋ノ外題モ  
正筆ゾ

15 元和四年戊午 三冊之内上 墨蹟之寫卷十二

御下向之後不申承

候之間積鬱々々乎

教首座御下向一所

御座候けるよし傳承て

聞悦存候きと御上

洛之時御札未遣所候

歟杉原十帖猶得之

遠く御志不知所謝候

猶々早々他事期後

信候恐々謹言

三月三日 「花押」

斗子原殿

御返事

昏内横二尺一寸二分堅一尺一分ニヨハシ表具上下  
コイアサギウキ紋ノ紗中風帶紺色牡丹カラ草金  
欄一文字ヨモキ地ノ金欄荒尾志摩ヨリ来候可為  
正筆ト申遣候口ノ昏ハスケ奥ノ昏新ク見候

16 元和四年戊午 三冊之内上 墨蹟之寫卷十二

惠知客下向之御札

畏拝見仕候了抑伊

州内得枝名之事關

東御書下進上仕候正文

可有長御知行候以此所

得分御塔頭ノ分ニシテ

長愚身と御一所ニ令承

候条生々世々喜悦只

此事候今者天地間

無思事候次真書

之事為身能候へき手

本一卷被下候者畏

入候一佛法事善惡

不思量者何事此上

法見已つらハしく候へき

と存候一向其後ハ

堅方丈憚入奉候上

者莫大無小候兼又

山菓毎々下預候条

殊以畏入候連々給

候へく候一唐物事

及心尋候へとも我心ニか

なふ物か候はぬ程に

不進候何程も尋候

て追進上仕候へく候

此得枝ノ事大灯光文ニ

アル文字慶長廿五年乙

外ノ写シニアリ其文ニハ得枝

ハ人ノ名ノ如ク右紫野

所ニ名ノヤウニアリ不審

ナモ事ゾ

五月二十三日寺内庄左衛門ヨリ来候誰ノ手跡トモ不知似物カト申来候返事誰ノ手跡ト

不存似物カトハ不審當寺大灯光師ノ手跡ニ似タ所アレドモ名モナク判印ナク何共

不知物ノ由申遣表具上下ノ茶ノ紙中浅黄北絹一文字風帯白地梅ノ小紋

△此文字重而同人ヨリ元和五末年二月二十六日ニ来候右同事ニ申遣候大略ハ大灯光正筆ト

相見候乍去不存事候間何方へも御見せ候へト申遣候

17 元和五年己未 上三冊之内 墨蹟之寫卷十五

以資朝卿令申候

二度入室事内々

且無相違之跡候条

特本意候我等承

分明御返事候之間

重々申候相構無

相違令治定候者為悦候

ツギメ

毎事期見參候

謹言

四月晦日

「花押」

帗内横二尺一寸二分半豎一尺八分表具上下モヘキ絹中風帯

甲金紗フトズル三月十六日取賣與一郎持參申候大黒重兵衛頼候ト候

前々国師被見候由も候間玉室へ見セ候へバ正筆ニ候半ト御申候ト與一郎申候

玉室左様ニ御申候ハバ定而正筆ニ候半哉ト申候拙子ハ慥ニ正筆ニ不存候判モ

常ニ見申候判ト相違候手跡ハ見事候ナ程ニ正筆ナル事ノ様ニ被存候トコヤラ

似タヤウニアリテ不審ナモノゾ

18 元和六 三冊之内下 墨蹟之寫卷十九

きたこうち大宮きたこうち

より北めうかくし能うしろの地くち

九丈三尺五寸をくへ廿四丈い里への地

くち三丈六寸をくへ七丈三寸

妙覺寺北地丈敷大宮殿御放券面

かやうに候いつれの篇目ニてもうく

候はんするやう越御口入の地ニて候へハ

御申候てとかくかためてあつか利候へく候

帗内横一尺七寸八分豎一尺三分半上下浅黄ノシケ絹中

風帯茶ノ絹一文字紺地金欄口ノ帗一尺二寸一分



大燈国師真蹟	馬書帑共ソ	索有 一休派下世乃山獄座元 之外題、此分唐帑堅五寸六分横ツキ帑同シ、 大燈国師清自可歴尔 「宗彭」「沢庵」 スリハケ□	從是 奥五寸七 分

閑首座取次ニて  
見申候澤庵ノ  
奥書定而可  
為正筆候此方不存候由  
申候也

19 元和六 三冊之内下 墨蹟之寫卷十九  
世間事併如夢  
候定令聞及ぶ給う候歟  
猶一定説も不審候  
按察大理ハ共逐電  
由承候間驚き歎く之處  
前内府下向被罷迎  
致之由是又承及候如何  
今聞給候らんとてともかくも  
不及申候非心之所及之  
間不惘然候也御等閑候ハ  
必々可承謹言

八月二十廿五日 「花押」

大灯光師墨跡  
口ノ墨跡ノ外題也

帑内横貳尺四寸一分堅九寸八分半表具上下トモ  
浅黄帑中風帶カハ色帑從了云来候外題  
大燈御入候へとも大燈ト可申候様も無之手跡ハ古ク  
相見候  
右之大灯ト申文重而元和八年八月十六日  
野庄七来候表具カハリテ来候中ハ日本織ノ細  
ツルノニ仕候

20 元和七 墨蹟之寫卷二十  
獲殊吟 關南長老  
三界兮如幻六道兮如夢聖賢出世兮  
如電國土猶如水上泡無常生滅日遷變  
唯有摩訶般若堅猶若金剛不可鑽  
輒似兜羅大等空小極微塵不可見  
擁之令聚而不聚撥之令散而不散  
側耳欲聞而不聞瞪目觀之而不見  
訝復訝盤陀石上笑呵々笑復笑青  
松影下高聲叫自從獲得此  
心珠帝釈輪王俱不要不是山僧  
独施為自古先賢作此調不坐禪  
不修道任運逍遙只麼了但能

萬法不干懷無始何曾有生老

「壺印」

「方印」

「宗峰」

規首座ヨリトテ因齋持来候

印之内無心許存候玉室も其通被仰候由因齋申候江月ヨリハ  
前方金龍院ニ大燈アリシガ正宗へ参候ヲ疑キ物トテ内衆へ  
ヤラレタト云サタアリ若左様ノ文字テハ無之乎金龍院ノモ  
不見候未添状有三人とも横文なり昏内横一尺三寸  
三分半堅一尺四寸五分上下カバノ絹中風帶浅黄ノ絹

21 元和七 墨蹟之寫卷二十

緑

山

青

水

昏内横貳尺二寸七分堅六寸六分

昏表具ソ與一郎持来候也

大燈ノ由申候中々不存候印ノ有

タヲコソゲタルヤウニ相見候ゾ

22 元和八 墨蹟之寫卷二十六

今日聊小作

善事候之間

自是も不申候而

光清事者人遣

候ハん、神妙、戒

勝房事、同室

由緒承及候き

安堵不可有子細

候哉、御門跡奉公

之輩、出仕又不

可及豫儀候哉

故示預而為本

意候也、謹言

(大燈国師花押か)

十月八日 (花押)

23 元和八 墨蹟之寫卷二十

初心始學士先須發無二志願

不管一切是処単々思此而在此

如未然巡人情轉臨難事退攸

無勇猛意氣不達幻宗本旨且

道如何是出家本旨不見劉

鋏磨参撫山々云老牯牛

汝来也須彌口跳麼来臺

山裏雄齋和尚還去也虚空

咬牙知它耳得続山千古貴不蕝當頭

暗恁麼事

右大德寺開山特賜興禪大燈高照正灯國師之眞蹟也  
後生之者不可疑之也慶長四年夷則日

昏内横一尺六寸五分豎一尺三寸六分上下淺黄之絹  
中風帶紺地ノ金紗一文字香地印金

八月廿四日知首座持参申候名印無之其上常ニ  
見申候大燈ヨリモ手蹟ハタラキ見事候大燈トハ  
難申候コト / 點アリ手蹟李叔太首座事  
落隨候テ書被申候カト相見候

24 元和九 癸亥 墨蹟之寫卷二十二

龍寶山宗峰叟

一樣春光華木中兩

般開落眼歇空勸君

一有力相將者應以離眞

來興去同

昏内横一尺七寸豎一尺八分奥口札昏二寸三分程ニ候  
上下淺黄ノ絹中モヨキ紋紗一文字風帶モヘキ地ノ  
金紗寛永三年九月一六日龍泉ノ宣首座ヨリ來  
前々定ニモ何トモ無之今以不知物也玉室和尚  
何トヤラ申候由ニ□待可然と也申誰トモ不知存一字  
有候也離ノ字酢ノ字カト点シタモノニアリ

25 元和九 癸亥 墨蹟之寫卷二十二

聖廟法樂今日と

やらん承候間任

筆認進候定

無正躰事共可

在之候不審候

事共可示給候

旁期面候也

正月廿三日

「花押」

昏内横一尺四寸九分

豎九寸七分

表具上下黒茶中

風帶青絹一文字ヨ

モキ金紗

才藏主ミセ候似テ

書タルトハ不見大燈ノ

手跡ニ似タル古筆ヲ

書削ヲ後ニ書タル

物乎墨色以下

難心得事多シ

26 元和九 癸亥 墨蹟之寫卷二十二

昨日罷歸候仰定事

志ら須消光候醍醐

寺無こそ候敷寛高究竟

可被止長者候由事未

聞及候也此間次第ハ

仰候はん内々申含候き

「ツギメ」

夫久々候哉御入室事

自大覺寺殿未承候也

事々期面候へく候

十二月十七日 「花押」

帗内横二尺三寸四分堅九寸七分帗ニ朽目多シ

日付ノ奥先ノ名有之所コソゲタル様ナ事多シ

橘長兵へ来候大燈之由似タル事無之何とも難

見分由返事申候上下コビチャ中コイ浅黄一文字

風帶紺地ノ金紗

27 元和九 癸亥 墨蹟之寫卷二十二

敬奉廣

惜春

竹藺雅韻之末矣

龍寶山宗峰叟

一樣春光華木中兩

般開落眼欲空勸君

一有力相将者應離眞

来與去同

帗内横一尺六寸八分堅壹尺七分

表具上下浅黄絹中モヘキ地紗一文字

風帶紺地ノ金紗

28 寛永元年 元和第拾 甲子 墨蹟之寫卷二十三

山門事以外

風聞間□事

入□神與入洛必

定作越御心身併

□申沼就之又□

□木作□是□

落居会願外無他

作入洛実不行士万

無何不重□安袖

歳 悦事併

人々省略御也詞也

□□□ 「花押」

帗之内堅一尺

一分半横二尺七寸

八分表具致候

此大灯之文道閑

自来取賣小左衛門

所持之由候申遣候之

中々見事見我等

一人トシテ正筆ト

究候事□

□程文字見相シ

トカリ先々何事

御申候間敷之

道閑へ申候也

29 寛永五 戊辰 二冊之内上 墨蹟之寫卷二十六

此是第一頭人提持

此事榜樣也了即禪尼

若能如是趣向單々

提撕它是誰活忽然

一回打看便乃殺佛

殺祖座策略思之思之

善持宗峰叟書看

雲亭

昏内ヨコ壹尺一寸五分半豎八寸七分昏上ニロニツギアリ  
表具上下共ワタカミ中アサキ一文字白地印金妙心寺より  
来候誰共不知

30 寛永七 午蠟月於江戸至同八年 式冊之内下 墨蹟之寫卷三十一

善男子藤井

末光受衣鉢求

法号名之曰道忍

嘉曆四年正月

廿九日 宗峰叟

〈添状〉

藤井末光之法

号可為大燈国師之

真蹟候此以前圓

鑑国師被遂擇

覽ノ春也久々法々

大仙院

宗彭判

芳春院

宗狛判

六月十八日

井上小左衛門守殿

回畢

昏之内横一尺四寸二分  
上下豎一尺一分  
表具上下茶色ノ

絹中浅黄ノ絹

一文字ヲスカキノ金

紗正月二日從小遠

大場共来前方ニモ

見被候 前見添状ヲ

見ツシ事之正筆之

由申遣候

此語重而八月廿三日

板倉清右衛門より見セニ

来似ト初之紙之内

モ口ノヨリ横壹寸

三分ヒロク堅モ九分

ヒロク表具上下浅黄

ノ絹中緞子一文字

カキ地ノ金紗筆

法悪処多シ

添状沢庵之筆也芳春院

宗狛ト云ハ玉室之事也

31 寛永七 午蠟月於江戸至同八年 式冊之内下

墨蹟之寫卷三十一

祖師西来单唱見

性成佛之徳安直下

透徹不揮智與愚凡

與聖刹那便得道

如其瓢風洒雪聲

自得豈止佛年磨不得

且道河那ケ是見性屋

事試著此座得去

私ニ座ト点シ事不審

横一尺五寸リヤウワキニツギタルダシノ紙少有堅一尺七分上下カバノキヌ

中チウアサギノ絹一文字風帶白地ノホソツル金欄ゲダイアリ

黒カキノバチ幅外題ニ紫野開山大灯国師墨蹟誰共不知右ノ筆

本也 右督宗和尚ノ点也六月十六日奉神や立叱持来

32 寛永十二 乙亥 二冊之内 但一冊ニ作之

口三枚京都之分 奥江戸之分 墨蹟之寫卷三十六

賦

日山之號

華嚴方廣中重々無盡

須弥第一峯跋甕盲龜出

幽谷正今日照林錡

建武丁丑 龍寶山宗峰叟書

帙之内横一尺四寸五分堅一尺四寸九分表具上下茶絹

中風帶薄萌黄之金紗一文字帙地ノ金紗勝田今以



□參候佐久間將監ニテ見候事之文字ソ板嶋左衛門持来ル所持也

33 寛永十二 乙亥 二冊之内 但一冊二作之

口三枚京都之分 奥江戸之分 墨蹟之寫卷三十六

祖師西来单唱見 性成佛之徳安直下

透徹擇智與愚凡 與聖刹那便得道

如其瓢風洒雪聲 自得豈止佛年磨不得

且道河那ケ是見性屋 事一試著此座得去

此筆案者

大燈国師筆也

遠孫不肖比丘 澤菴「方印」「壺印」

表具上下茶絹中ヨモキ金欄一文字昏地印金阿形宗持ヨリ来候  
前方モ一新カハ覺申候大燈モ澤庵モ正筆ニテ無ヘシ江月添  
状ノ事はモ似セ物也

34 寛永十四 丁丑年 墨蹟之寫卷三十八

趙州云參南方三十年

火炉頭有ケ会賓主活直一分

而今與無人舉着趙老

面彼厚三寸要須灸乎

助熱其如炉下似春河直

饒是而今有人舉著方

知三ヶ枯柴品字燒卓  
丈一下

平野道析所持之

大灯也是ハ天王寺や道他所持之文字ニ候

昏之内横一尺貳寸五分豎九寸九分表具上下カバ色ノ絹中ウスモエキノ絹

一文字紫地ツクリ土ノ金欄風帶同ドウホエ大灯国師墨蹟ト外題アリ

誰共不知箱ノ上ニモ大灯国師墨蹟トアリ是亦不知候

35 寛永十四 丁丑年 墨蹟之寫卷三十八

敬奉賡

竹菌雅「惜」「春」韻之末矣

龍寶山宗峰叟

一樣春光華木中兩

般開落眼欲空勸君

有力相将者應離眞

来與去同

昏之内横一尺四寸七分豎一尺一寸三分

表具上下カバノキヌ中アサキ一文字

風帶モヨキ地金欄アタコ如成作兩

了句抱其似セ物外題有候

36 寛永十六 巳卯 墨蹟之寫卷四十

靈廟御樂今日□

□年□間□

筆詠遂□

其正□事長□

在□

歳□

□而 「花押」

昏之内豎八寸六分

横一尺四寸六分

璠首座ヨリミセ来候

大燈之手蹟ノ

事常ノ手

ブリトハ相違モ

正筆ニテ□

故之候

37 寛永十七 庚辰 二冊之内上 墨蹟之寫卷四十一

白日金鳥無海

岳影満天星宿

無月中月三赤

影篋無項分毎

橋痛滓東光

方悟紋瓢行

元徳二年□

庚午子ニ□人

澣為本悟□宅

宗峰叟妙□書

大燈ノ面ニモ不似

開山ノ影

真珠庵ノ安首座是

ヨリ見候キケハ□ノイ

モノ也表具モヒシ

前井中庵ヨリ寿々ノ由

安をの□候ニセモノ也

申シヤウ如知ニ申候

トノ事

38 寛永十七 十八 兩年 於江戸墨跡之寫并落以後寫モ有之

十二月十日 二冊之内上 墨蹟之寫卷四十三

きたこうち大宮きたこうち

より北めうかくし能うしろの地くち

九丈三尺五寸をくへ廿四丈い里への地

くち三丈六寸をくへ七丈三寸

妙覺寺北地丈敷大宮殿御放券面

かやうに候いつれの篇目ニてもうく

候ハんするやう越御口入の地ニて候へハ

御申候てとかくかためであつか利候へく候

索有

一休派下世乃山獄座元

大燈国師清見可歴尔

「方印」 「印」

足紙ノ内六寸

五分半五寸七分

此紙唐昏也

帗之内横一尺七寸七分竖八一尺二分半表具上下浅黄ノ絹中葉ノ絹一文字風帶コン地金紗  
ヌリ軸外題キエ候是事ハ々フコ子不見シ六月十日清庵和尚ヨリ参モ座ヲ使ニテ  
スルノハ而宗珠而来候御奥ノツギタルカミハ五寸八分也此カミハ中唐ノ粗茂紙  
沢庵和尚ノ奥書ハ覚押フケタ物上へ此印何難見候由参候首座へ申同シ

39 寛永十九 貳冊内上 墨蹟之寫卷四十五

祖師西来单唱見

性成佛之徳安直下

透徹不揮智與愚凡

與聖利那便得道

如其瓢風洒雪聲

自得豈止佛年磨不得

且道河那ケは見性屋

事試著此座得去

「ツギメアリ」

此筆案者

大燈国師墨蹟也

遠孫不有比丘 澤菴「方印」「壺印」

〈添状〉

師叔大燈国師之

筆蹟尊偈可謂呈

活機者也三要印不開

讀就即朱點側自悞雪

上霜矣 宗玩拝書「方印」

帗ノ内横一尺九寸九分竖一尺一寸五分表具上下茶ノ  
絹中ヨヘキ地緞子一文字風帶紫地ノ金欄五月十七日  
表具や浄智ヨリ持来候此文字ハ烏丸取内口頭トヤラ  
申者浄智ヲ頼候也御却仕タキトテ二・三年以前而浄智ニ  
預ケ来候ト也ウレ不申候而當  
年御取ニ来候前々替候テ  
前ノニテハ無シトテ不御取候テ  
可後へ目安ニテト也万一板防州  
此方ヘニテ事大シサテ大シ可江  
ノテ申クンヨ只々浄智見セ候  
事ハ隱密ノ也ト申候前ノ  
覚エハ沢庵ノ奥書モ無之

カ江戸堺ノ立叱ニ見候ソレモ

儲正筆トハ無シ是ハ沢庵ノ奥書モ難見不江月添状ハ似物也  
大灯墨蹟之奥並添状並不知書様也此添状似セ物ナルホトニ  
此方手奇ハ□申候□候也

40 寛永十九 貳冊内上 墨蹟之寫卷四十五

宗峰叟為

梅

溪ノ字虫クイアリ

溪

宗智道人作

右十月九日聖蹟偈見申大文字見事也

細字墨薄而在候也帗内豎壹尺

三寸横貳尺半有ノナタウチ表具有タソ

古ニテ候之□出候処不止事ノ是ハ市薪ノ什物

ト成候也

41 寛永十九 壬午年 貳冊内下 墨蹟之寫卷四十六

是日秉佛罷□使洞院都護請師入内 皇帝共仕受殿出

御對譚就五節所設寶座俄爾請上堂帝曰朕須發一問師受命曰

帷□帝座龍於室座右側亦園座宝座左側之平席點蠟■

當行灯□客勤之此外非月卿者不許入此内場

師拈香云此一辨香勢向炉中恭為祝延今上明時聖窮萬歲々々

萬々歲陛下恭顏金輪統御天基永同四海帰仁萬邦乎 師就

座云陰陽之統化育之本廣發無雲之清□高垂無私 天鑑

聖上良久師云得乃云至尊良久既是雷音大震何故瞿曇曰

法離言說難心線難因果難名桐蓋以尺大地尽法界都是一團

圓光□有微塵許之間隔何處有問話時節何處有答話

時節無問無答云二無三非動非靜非去非來所以古者云天

得一以清地得一以寧 君王得一以治天下以至後庭梁園左轉右

弼皆悉從一中出來有忠有孝有智有禮致君於老舜撫氏

於無偏迄于達磨示祖應密迹而丈陰濟發大杭此影与皆在御前

各々從一中出頭一花開五葉拔菩提枯株起□林供範立照用

略山野亦從一中生恭蒙聖恩對御說禪祈宝□於億兆

祝聖寿於□彊況是彩瓶受其体於長香合受其形於園蠟光

受其用於明松柄受其性於青箇一齋從箇一中出來作■

道場之莊嚴麗金玉殿之奇澤雖然如是親要向簾□呈露

國家得一治天下庭事卓拄仗一下云而今四海清似鏡三邊誰

敢殺封疆皆非拄仗下座

皇情大悅師登曰山野適来許多言說功皈何処聖上指一丈真箇

丈□為證明師云此外更無有證明人磨聖上豎起拳頭師曰

舉□則南山對北闕夜々見る明星聖上瞬目而搢師鞠躬又手出去

次日賜金子絹綿廿寺

未□見校劫可書入之

龍寶開山大燈国師并靈山和尚之墨

迹也主禪鳳禪人

一休子宗純老書之「方印」

帟ノ内縦九寸四分横一尺四寸五分表具上下アサギ北絹中ヨヘキ笹丸金紗丸大  
トコロニアリ一文字風帶紫色中ツルノ紗象牙軸風体露白シ此三筆ノ文字ハ  
矢嶋ヨリ覺甫所持而後什也宗春所持宗春ヨリ茶屋四郎次郎所へ方以霜月有  
今四郎次郎持来候間見候見申候徹翁大灯一休三筆共ニ見事也

4 2 寛永二拾年 癸未 墨蹟之寫卷四十七

都英幣心□□□合同

般子隨流行々

□□□轉金一切□生

出人惜□明

玉□過関正半□来難

噢月悦之交

□□□前玉和来□□

昆□□平

コノ一印口ニアリ

「壺印」

帟ノ内横九寸六分縦二尺三分表具上下風帶帟也

一文字モヨキ□有事中勢院ヨリ来候大燈ノ由申被候

大燈ニテ無之ノ由申遣候

4 3 寛永二拾年 癸未 墨蹟之寫卷四十七

春陽崑茶

之即天下私

平之時一人

有慶地民

頼之常寺体

逢再奥之期

入宝早速事

如所厚節悦

無極候併期

面湯之伴之

正月二日 「花押」

帟ノ内縦九寸八分横二尺五寸一分上下茶ノ絹中風帶紫地牡丹  
印金岸部や宗府持来候難見分物ノ也申後候宗府内力者親時  
ヨリ持候由了御見申候正筆ノ由手蹟ヨリ快ク大燈ニテ  
世シ候

4 4 — (1) 墨蹟之寫断簡卷一 一ノ一〇 三二

雨夜即事

簷頼雨滴為君報明暗双々

誰共論朕龍出身誰藏処

知它幾ケ弄精鬼

和夜坐聞雨韻

都靈不足耳邊聽春雨

濠々簷外声玉句秘来清

奥別蒲稂牢是柰動幽情

「繼有」 「方印」 「丸印」

□比筆者年久全今加一記澤菴

ニヤ尤有血関而鮮筋骨老也

見此筆蹟則在壯時老乎文

論老後之所筆有大同小異今

無論而有少壯老以壯時之筆

夫人之有少壯老之三時筆跡筆

此兩偈大燈国師真蹟也

44 — (2) 墨蹟之寫斷簡卷一 一ノ一〇 三三

丈久有升老ノ三時墨蹟

此兩偈大燈国師真蹟也

奥書帑ノ内横五寸八分半堅九寸二分表具上下茶ノ絹中アサキ絹

一文字風帶紫地印金此大灯沢庵奥書十二月四日九ヤ林才ヨリ来候

大灯ノ手蹟ノ様ナ事アリ慥ニハ不知沢庵奥書ヨリ定而正筆カ

此方ニハ不知ト申遣候道浦ヨリ□是ハ座頭ノゾン可ヤラガ

奥書精トヤ此大灯ノニ記ニ上堂ソ士添一休ノ奥書アル

不審ナシ當年筆来候灯丁日四冊ノ内ノ本写アリトケゾ

テ似タル物ト見候字形以下ト筆仕右ゾ

古紙書帑内横一尺二分堅八寸九分表具上下茶ノ絹中ヨヘキ地緞子一文字

風帶紫地ノ金欄

45 墨蹟之寫斷簡卷一 一ノ一一 二二

他日の有此

知行

□

私云大灯ヨリ徹和尚ノ手蹟近シ小遠州

アル帙林ノ四字ノ墨蹟ノヤウ尤事

アリ

三十一五日小遠州持来候帑ノ内堅一尺三分横一尺八分此文字大灯ト申来大既左衛門所持候ト也

見事ナル手蹟ゾモ仕大灯トスユル物ニハアラスイカサマ新ク書タル

物ニテナシ大灯トモ一々申物也名モナキ物ジャ土トニ然トハ不知由来阿克ハ正筆ニテ

アルベキカ申也表具上下浅黄ノ絹中茶ノアヤスタミノ紋茶印金風帶同シ

46 墨蹟之寫斷簡卷一 一ノ一六 四二

釈迦之後弥勒

之前少林正傳

雲門来也

文保元年三月日

宗峰「方印」

(妙超)

胎ノ内横一尺二三寸九分堅一尺七、八寸アルベシ空ニテ不覺黒キ胎書タル物ソ

簪如此大灯不見似テ書タル物ノヤウニニモナシ印ノ朱々也初メン宗峰ト同

人前ニアリタ乎然則印ト妙超ノ二字得ニ於添タ乎ノ尚以年号



十上無聞可考十一月二十貳日前小遠州見申候此時遠州播ノズント  
ヤラニヤ參候時也

47 墨蹟之寫斷簡卷五 五ノ六 七一

雲門云關也幾乎同路

一回透得雲關了南北東西活路通夕

處朝遊無賓主脚頭脚底起清風

透過雲關無舊路青天白日是一家山機

輪通變難人到金色頭陀拱手還

妙超胸懷如是若不孤負

師意伏望賜一言

近擬歸故都莫惜

尊意以為大幸耳

妙超九拝

巡之記物ナレ誰ノ手蹟トモ不知物ゾ

48 墨蹟之寫斷簡卷六 六ノ二二三

微妙清淨無礙大

涅槃真心曾無有問漸

二六時中行往坐臥

綿々密々恰如萬仞

懸崖佛祖無惜是迥

然独露觸処全彰

既是金露為甚佛祖  
無惜是還旨得無到

者裏一回肯諾得去

一切時中着々有歩

■路着友喫飯字

〈斷簡につき本文のみ〉

49 墨蹟之寫斷簡卷六 六ノ一四 六三

〈斷簡につき表具の記載のみ〉

山水ノ絹中淺黄ノ絹一文字風帶紺地ノ金欄

外題ニ紫野開山大燈国師墨蹟

右ノ然ヲシタル物上已ニ有タゾ

50―(1) 墨蹟之寫斷簡卷七 七ノ五 七三

空劫已前威音那畔

早是有者个光明瞻

是照天鑑地應現一切

包容萬物日月星辰

電轉雷馳都盧承它

恩力所以云光明寂照

徧河沙凡聖含靈我

家一念不生全體現六根

纔動被雲遮秀才頌得

雖十成猶是不然本有光

明燦然宗圓道人一迴逢

着用着許爾六根動  
着悉是大光明三昧  
便有何雲遮却它切  
須怎麼去若是求覓

50—(2) 墨蹟之寫斷簡卷七 七ノ五 七四

放爾三十棒勉強々々

建武第四仲春下幹龍峯

老拙信筆及之耳「方印」

右開山ノ文字間来兵衛ヨリ間ニ来候也一覽事デハアリタルモ墨新ク手サ  
ユレハユエニモ則チ何共不知人玉室間ハ返事候也沢庵ナドハ墨新クトモ  
似タル物デハルアママイト御申候見ユレバ墨新印モフチゴトニスデノ事  
ニテ来也何トヤライナモノデアリタゾ三玄ニアル文字印トクラヘタガ少  
チイサクミエタソ昏内横三尺二寸二分此内ツキメロノ方一尺六寸九分堅  
一尺一寸二分此内昏之内下二一分二分上下ノツギアリ中ノツキメヨリロ  
ニハロニスケツキ出シアリ奥昏ニハ筆共ニ・三分二分ツ々本トノツギア  
リ特ニ上ノハ四分モ書アリ

51 墨蹟之寫斷簡卷七 七ノ六 八六

端一有多種ニ典兩

級天際行上有下檻

前山源水寒獨

炉減不喜河直

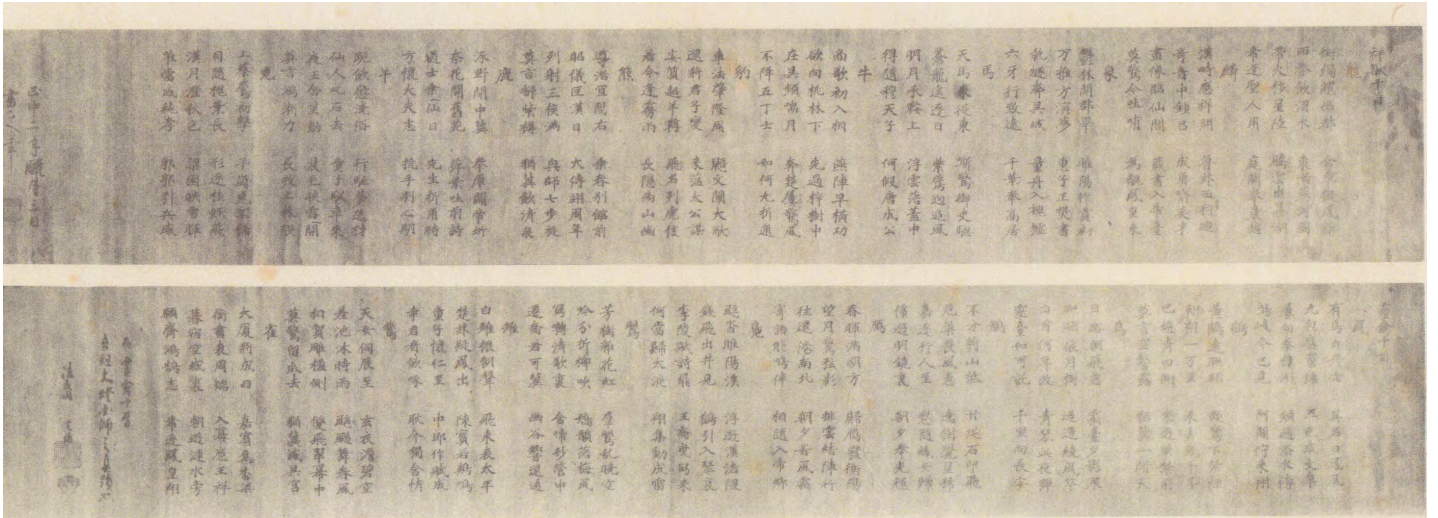
枯木龍吟消

未札難々練擇  
明具天行香

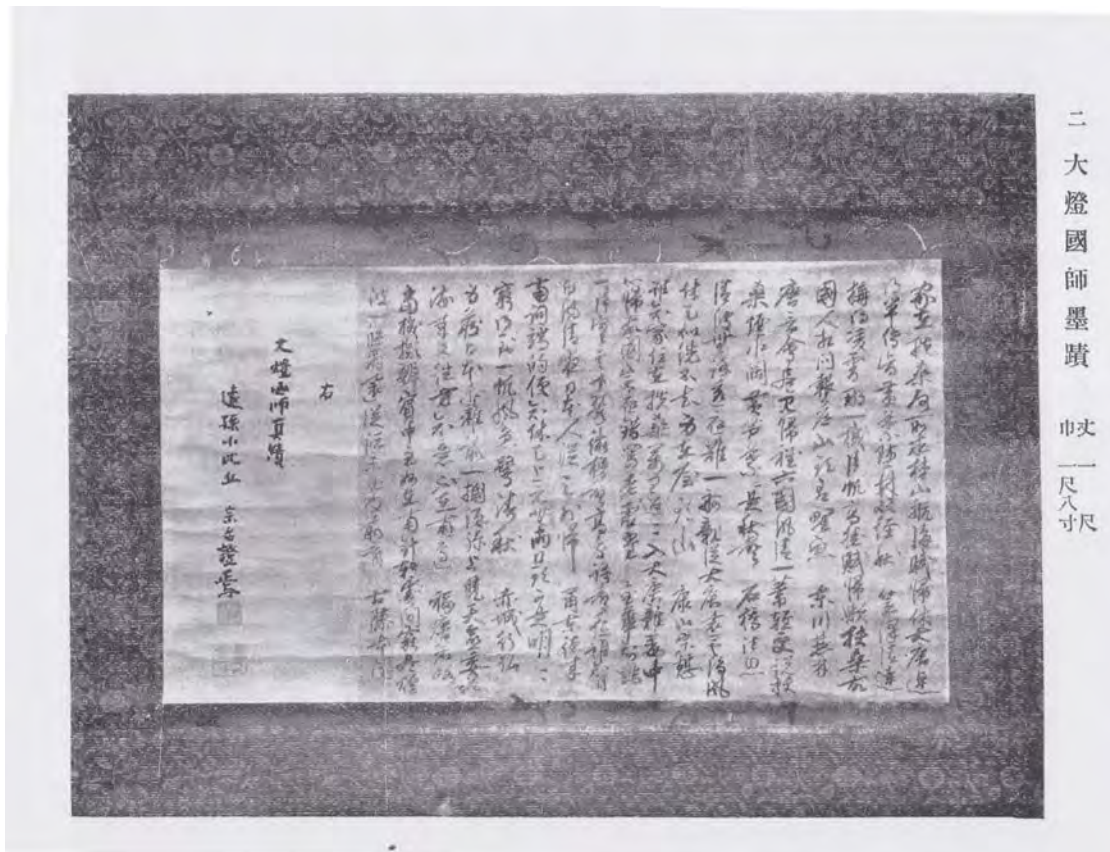
建武丁丑仲秋  
行長明月軒

此大燈墨蹟以非旁青仰甫持来候本安ミ家々来候力也  
正筆ト相見候堺ヨリ出候由申亦々見候一凍自筆然モ相添  
二人モ可為正筆四方ニフトキ筋有紋有薄唐昏紋ヲ  
縫イタル様ニ赤黒ナル昏ヤナ昏ゾ後ニ然ニ本前之  
又左衛門金三拾枚ニ所持之由申候光悦同等之大徳寺衆  
ニミセ而不及事トテ候由玉室以相□コシ  
昏ノ内横ニ尺一寸六分堅一尺一寸五分表具上下浅黄絹中風帶紺地金紗  
右之毫軸之文字ハ寛永十八十二月十八日夜本光甫ヨリ  
□時ヨリ有光仰時ヨリ有テ光仰後家所ニ有身誰不成候相他ヘ遣候  
愚僧ニ見セテト也定而致候者ト也三ケ来候間紅□ニ□行可の由  
易本壮行□物致候此覺之可為正筆ト有今ハ證人ニカ誰  
成ニ愁ゾ

壳立目錄図版

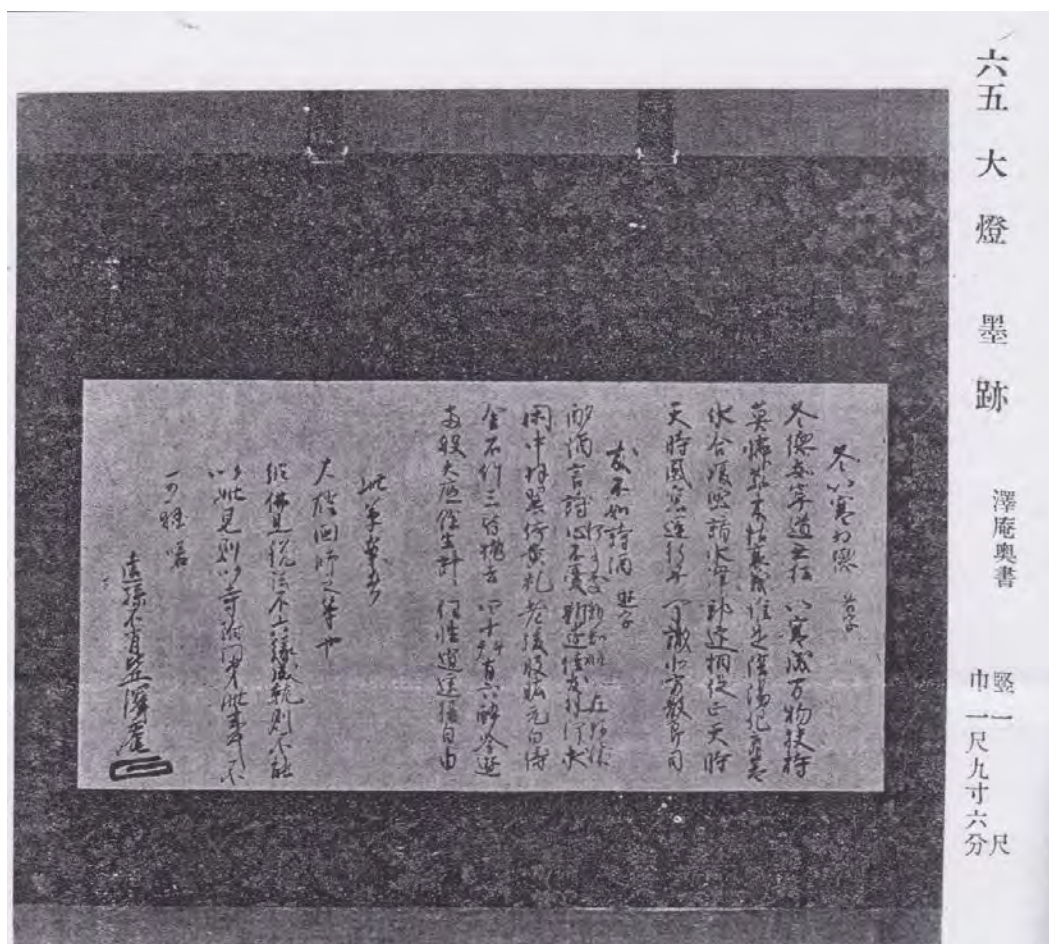


図B 1 白鶴帖



図B 2 池田清助家 目錄





六五大燈墨跡

澤庵與書

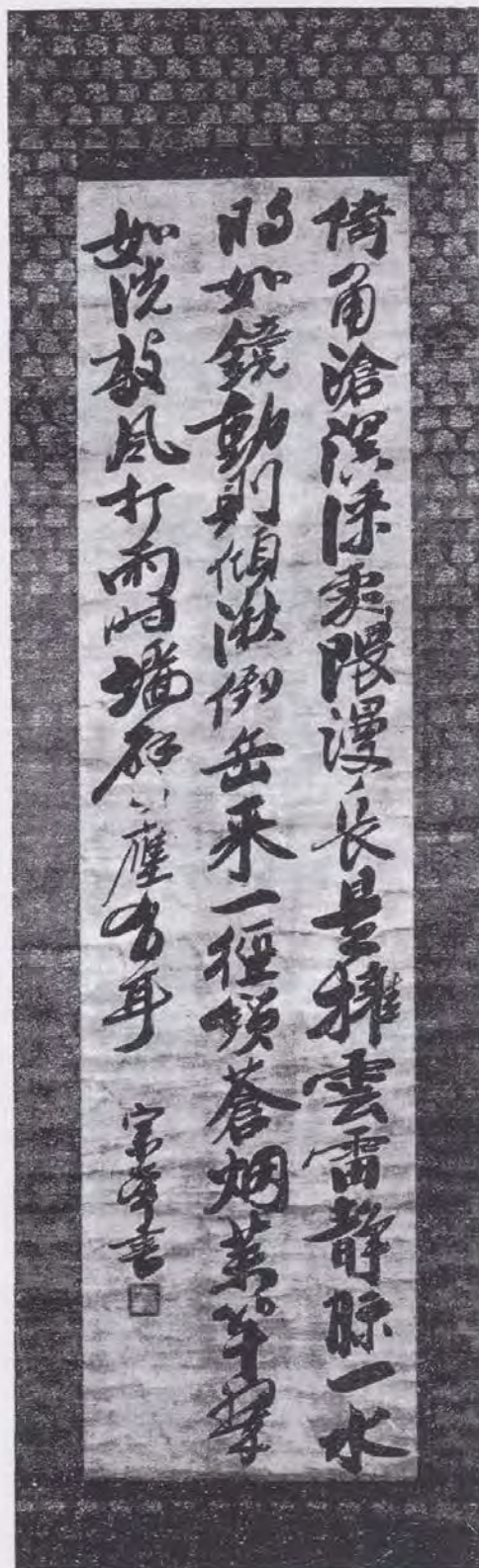
巾一尺九寸六分

冬の寒の興 首  
冬寒の字道五指 以寒減万物扶持  
葉落草木枯葉散 惟是清湯地裏表  
水合暖照諸火年跡迹相侵亡天時  
天時風寒逆得年 丁散北方散身司  
衣不如時同世  
郎滴言暗心不愛物逆性火行火  
用中得異何貴札 老後暖氣元白侍  
金不付三時地古 心十時有六時冷逆  
有銀大庭生計 仁性逆逆後自由  
此筆筆少  
大徳回所之筆也  
能佛是悦法不立後歲就則不能  
以此見則以寺散同寒散其不  
一可難信  
法孫不有是筆筆

図B 3 某貴頭御所蔵并二某家所蔵品入札

一 大燈國師墨蹟

巾 豎  
三尺六寸五分  
九寸三分



图B 4 当市武田氏所藏品入札

一四

大燈國師一行

大聖國師添卷  
金龍院添狀

巾 豎  
四尺八寸三分  
一尺六分



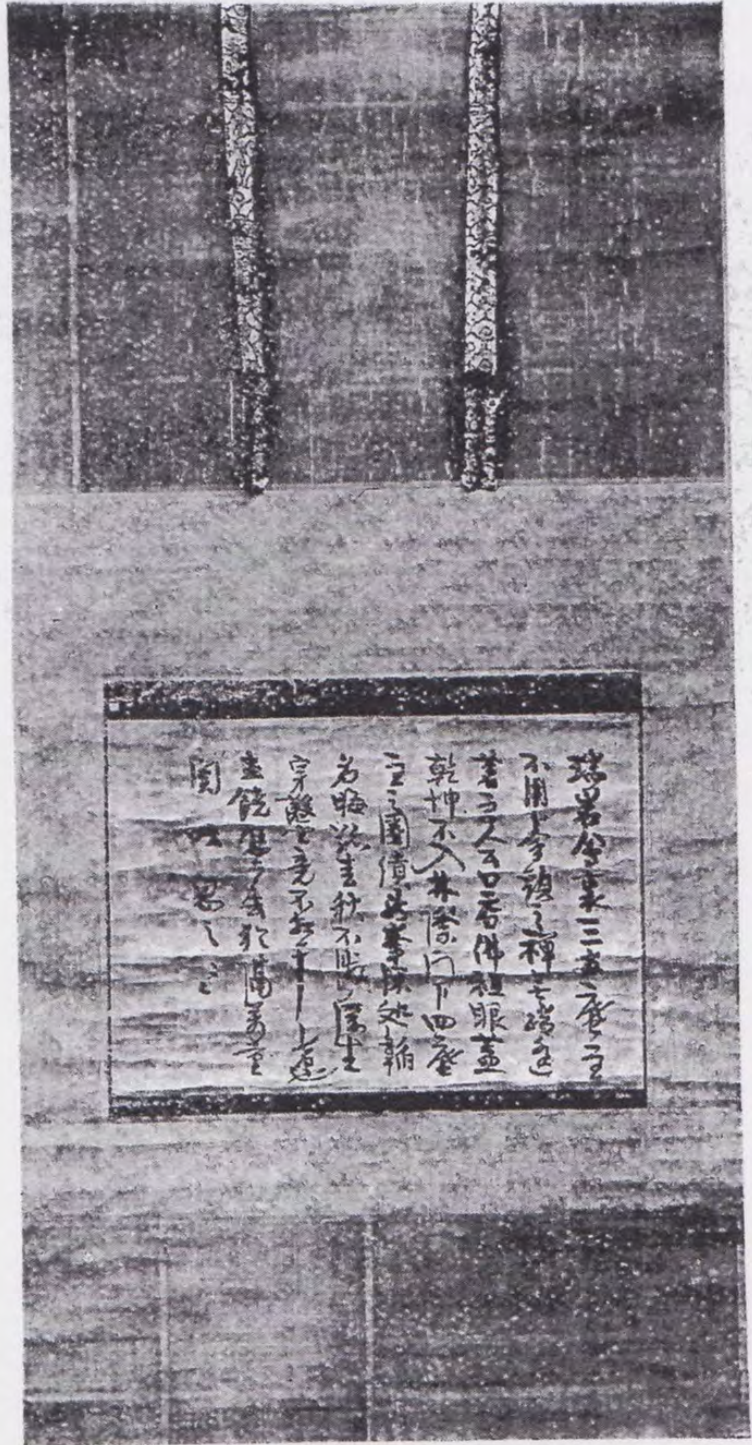
图B 5 金沢市能久治氏所藏品入



大燈國師墨蹟

眞珠菴折紙

巾豎  
一九寸三分



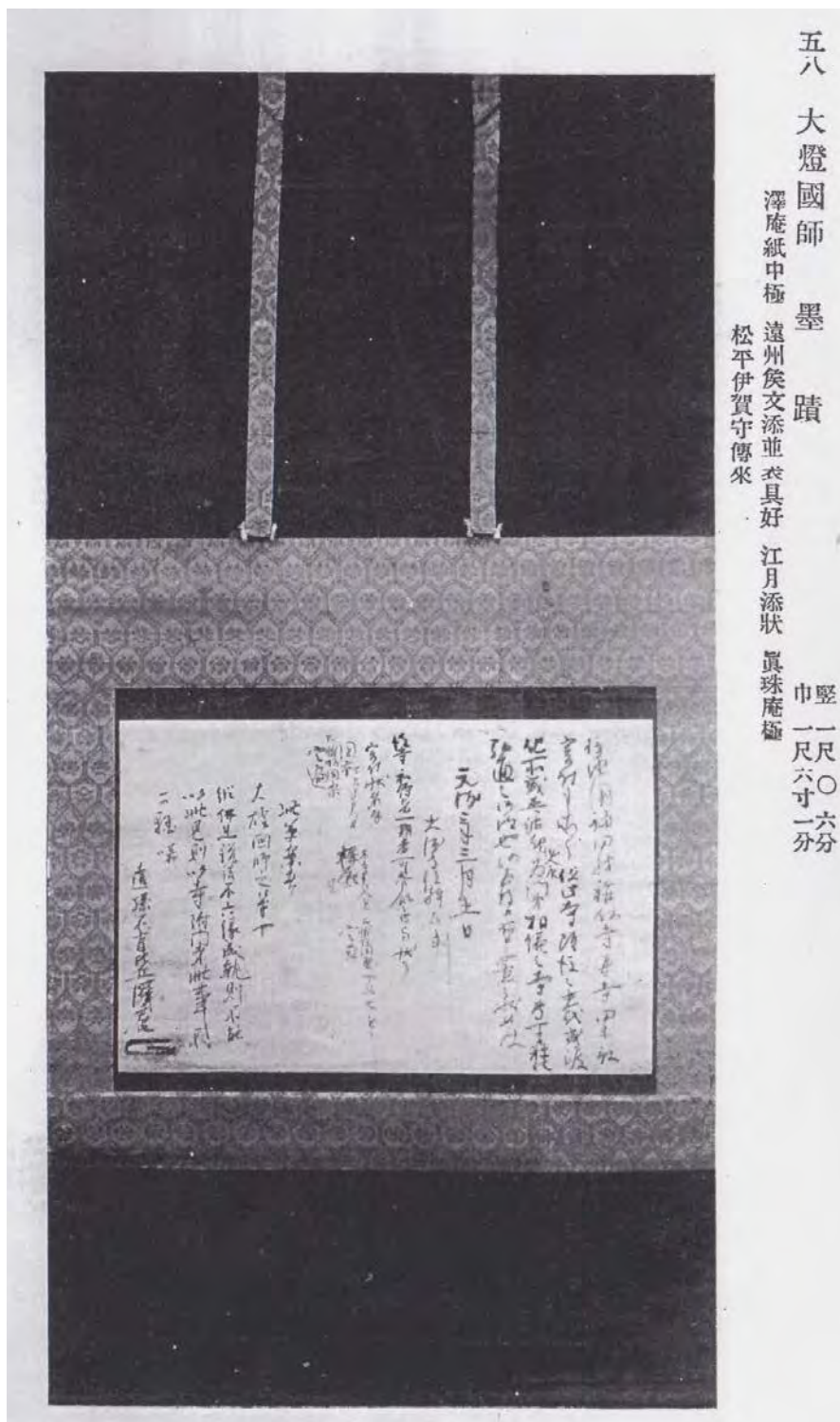
図B 6 渡邊氏及某家所藏品入札



五八 大燈國師 墨蹟

澤庵紙中極 遠州侯文添並表具好 江月添狀 眞珠庵極  
松平伊賀守傳來

巾 一尺〇六分  
一尺六寸一分



図B 7 某子爵家并某大家所蔵品入札

大燈國師 三行墨蹟

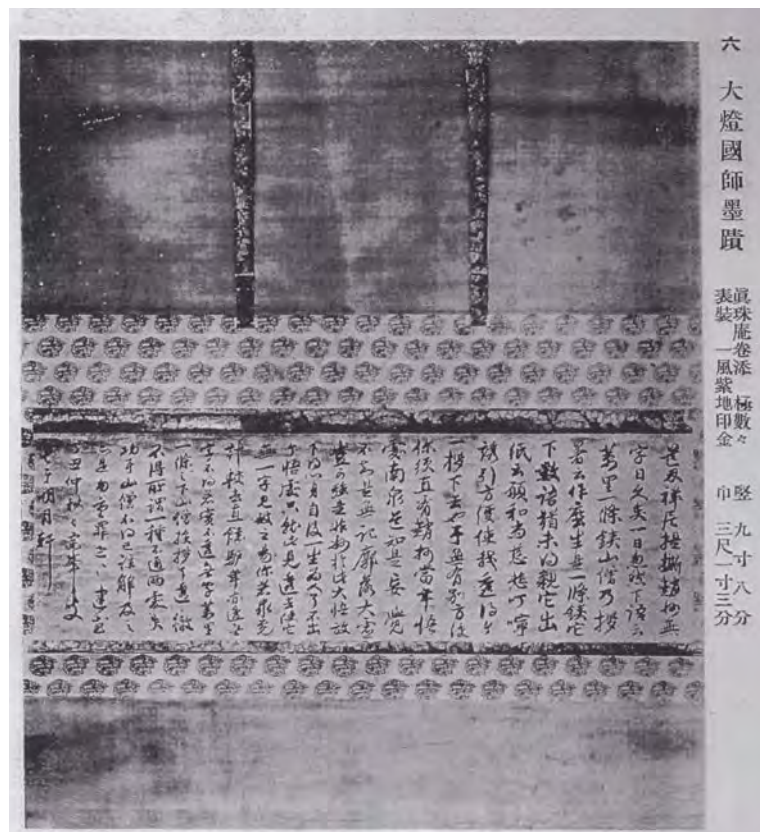
澤庵天室添狀

巾 二尺二寸四分  
九寸三分

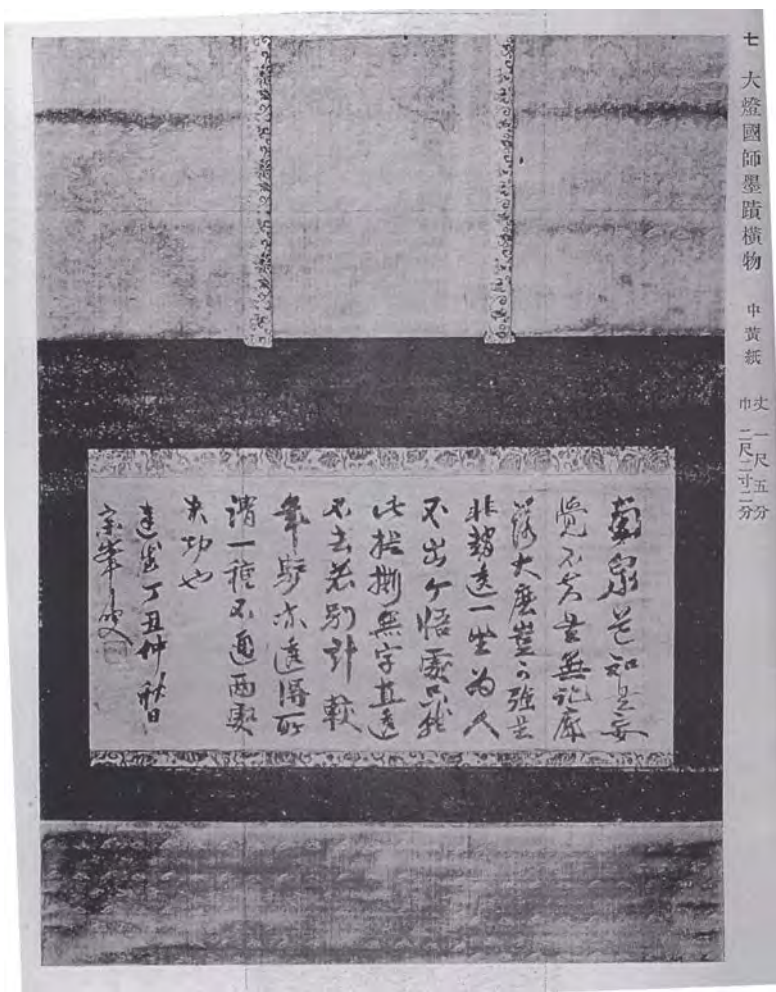


図B 8 第二回当市生嶋家所蔵品入札





图B 9 当市（雁半）中村氏旧藏品目錄



图B 10 当市（雁半）中村氏旧藏品第三回入札目錄



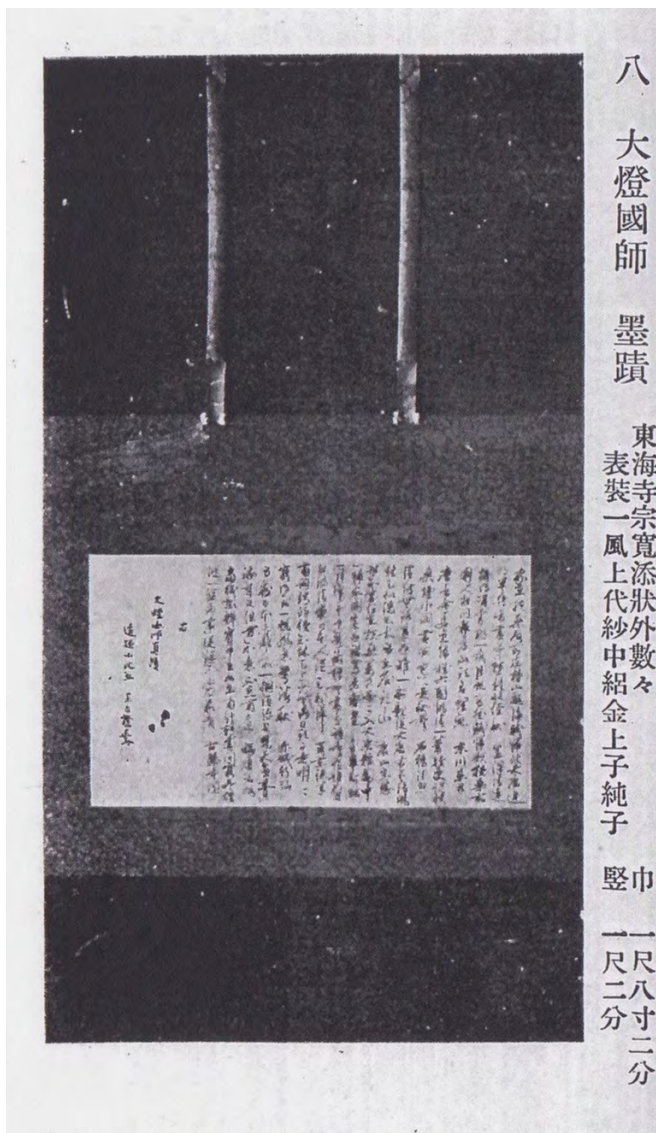
图B 1 1 当市丹羽氏旧藏品壳立





大燈國師墨蹟  
清嚴與書  
巾 竪七寸一分  
一尺五寸五分

図 B 1 2 当市吉田氏所蔵品壳立



八 大燈國師 墨蹟  
東海寺宗寛添狀外數々  
表装一風上代紗中紹金上子純子  
巾 竪一尺八寸二分

図 B 1 3 土方伯爵某子爵家御所蔵品入札



二 大燈國師一行

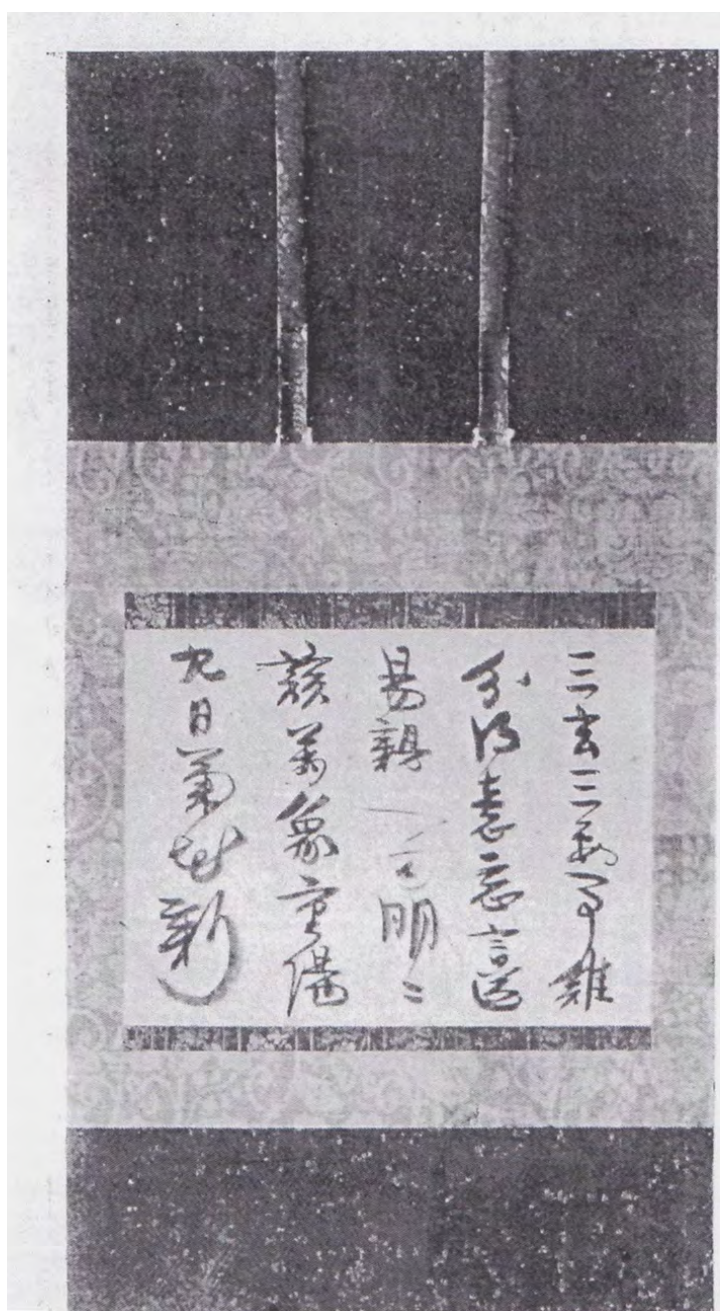
巾豎  
九寸四分



图B 1 4 伊勢松坂町長井家旧藏品

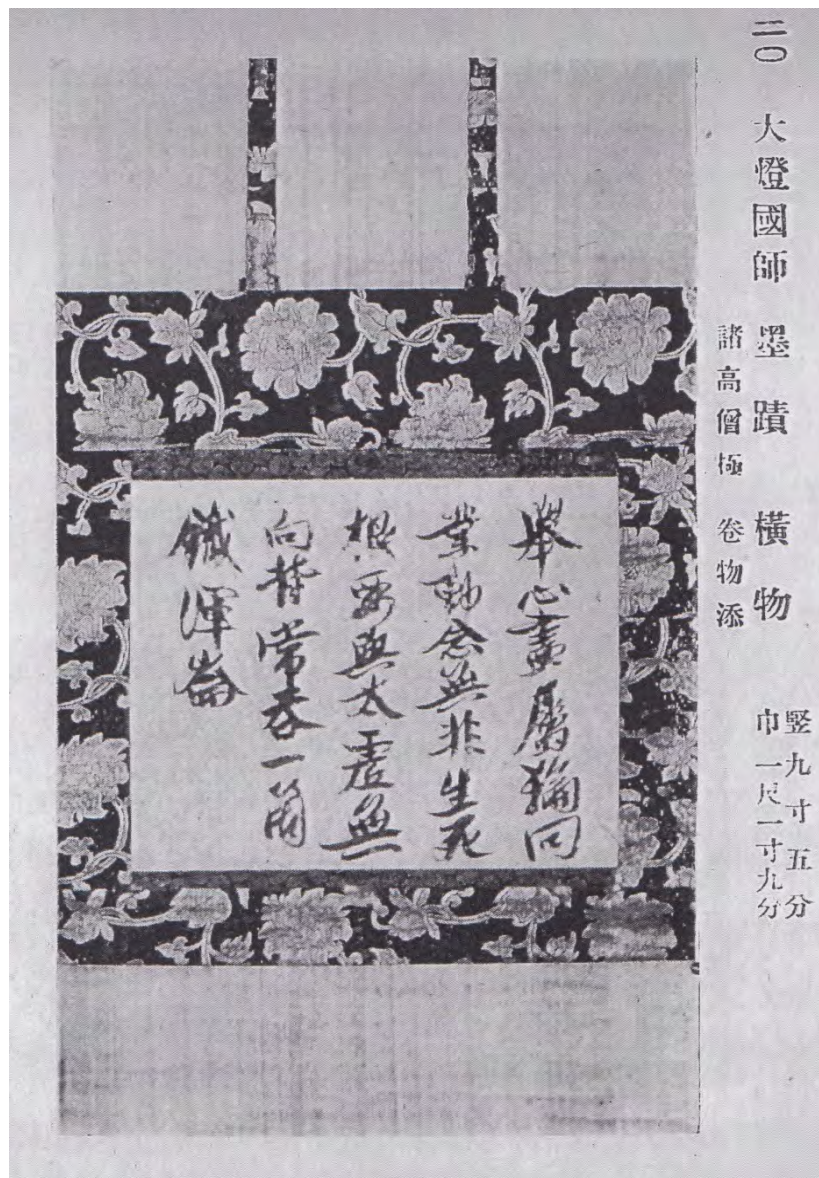
三 大燈國師 墨蹟

巾豎  
一尺六分  
一尺四寸二分



图B 1 5 某家御所藏品入札





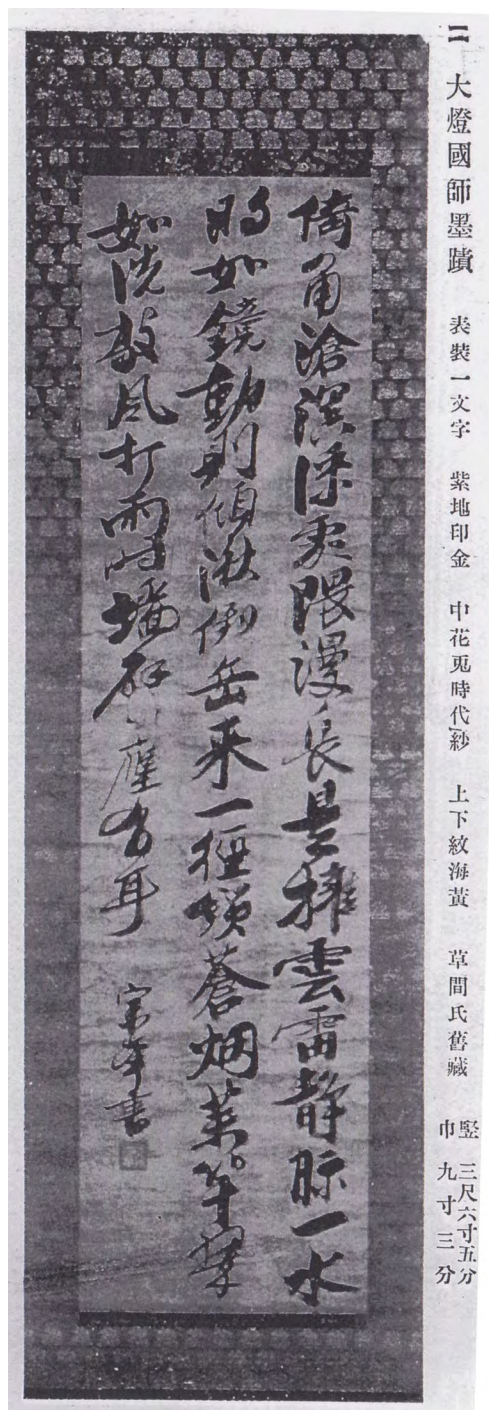
二〇 大燈國師

墨蹟 諸高僧極

橫物 卷物添

豎 九寸五分  
一尺二寸九分

图B 1 6 当市木下家所藏品第壹回入札



二 大燈國師墨蹟

表裝一文字

紫地印金

中花鬼時代鈔

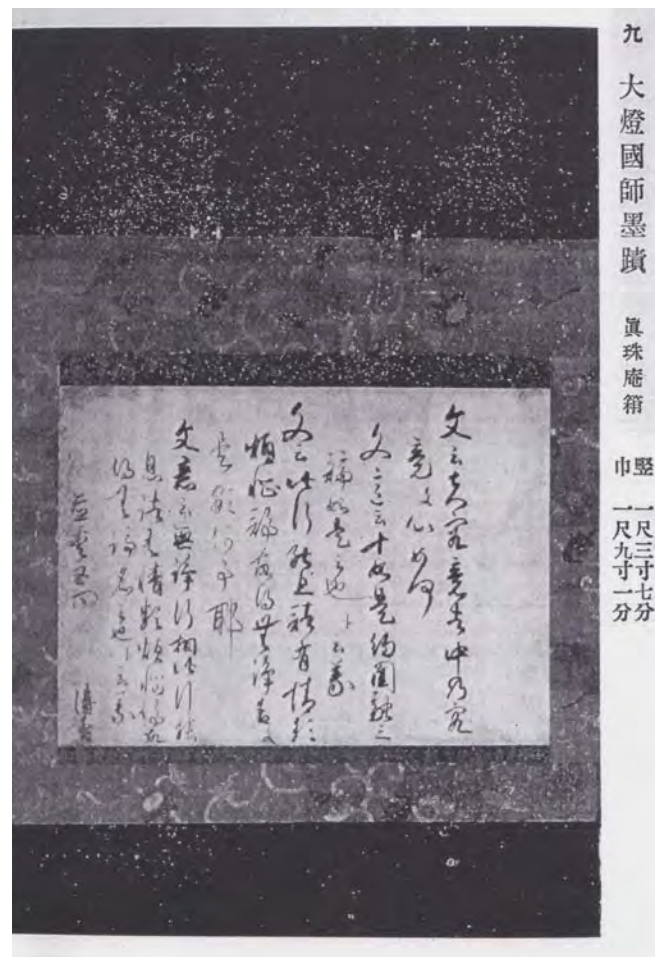
上下紋海黃

草間氏舊藏

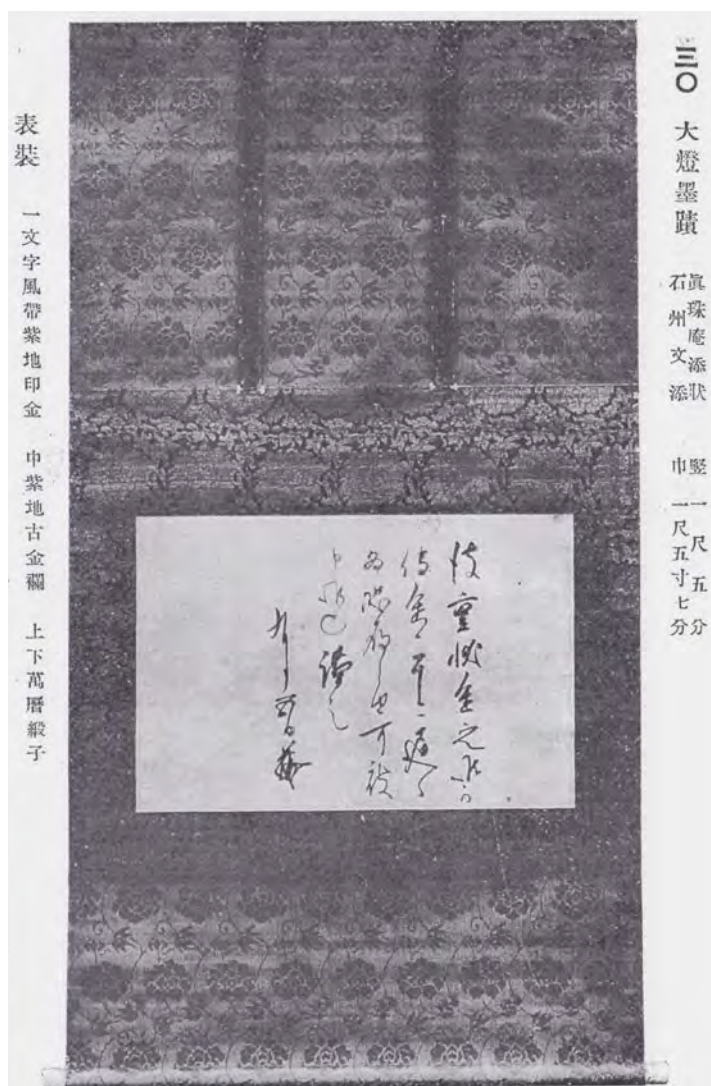
豎 三尺六寸五分  
九寸三分

图B 1 7 当市某氏所藏品入札

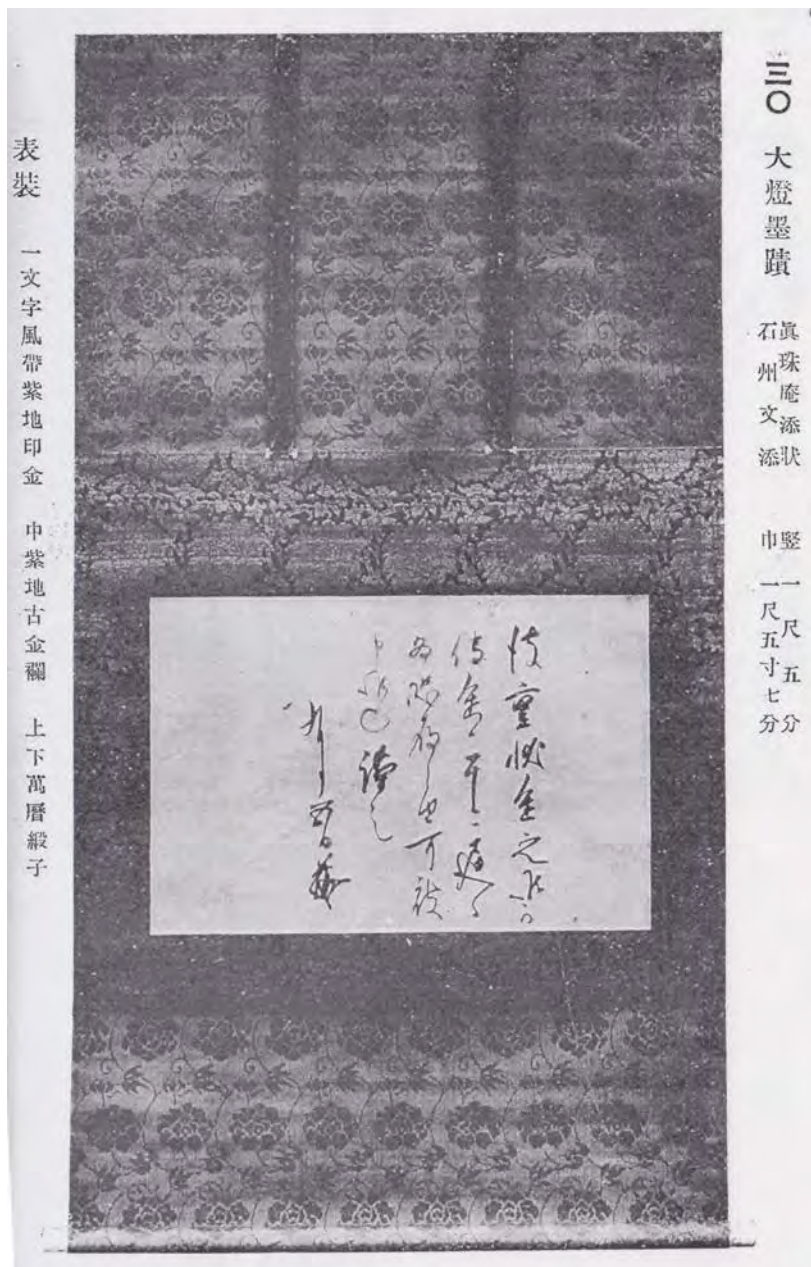




図B 1 8 京都市中京区飯後軒所蔵品入札



図B 1 9 第三回赤星家所蔵品入札



图B 2 0 当市八田氏旧所藏品入札



图B 2 1 当市河原町寺村氏所藏品入札



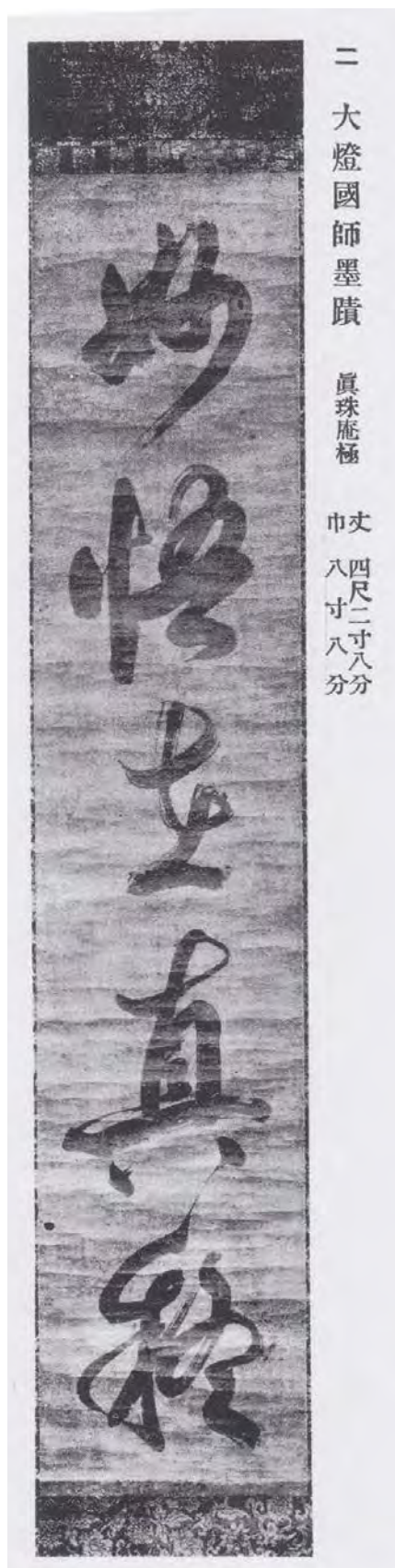


図 B 2 3 当市上京栗辻氏所蔵品入札

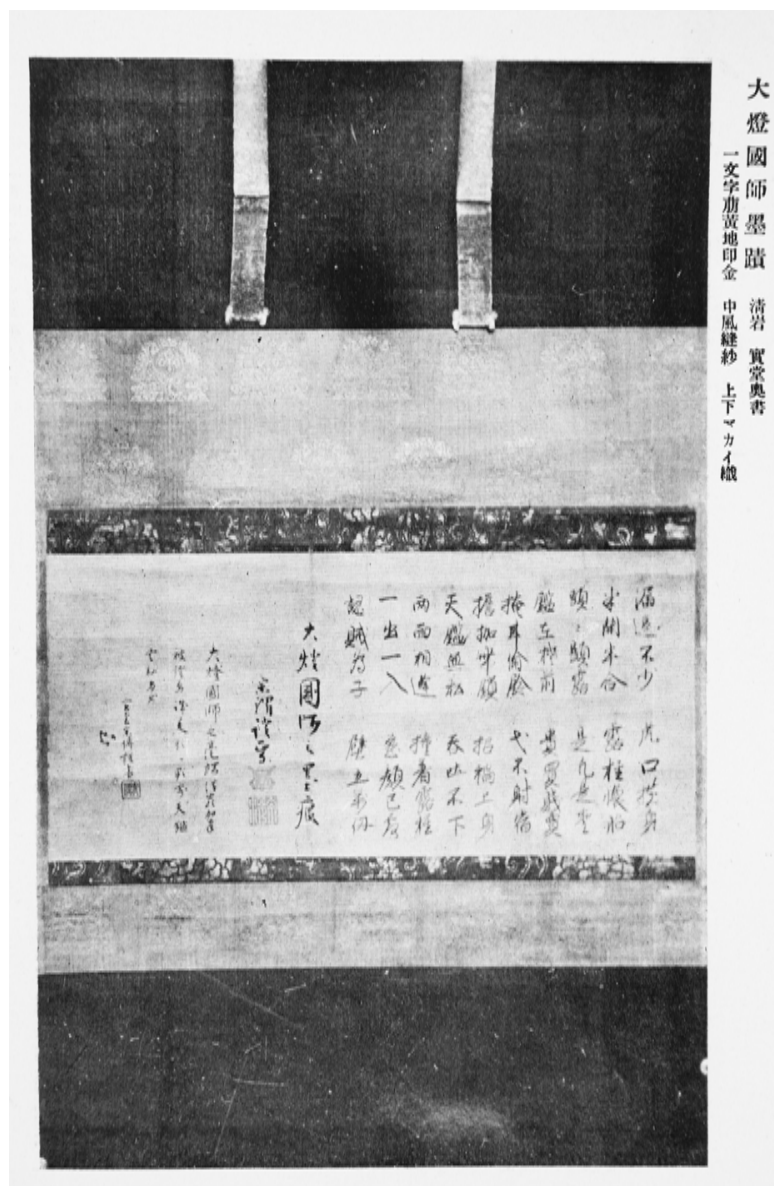
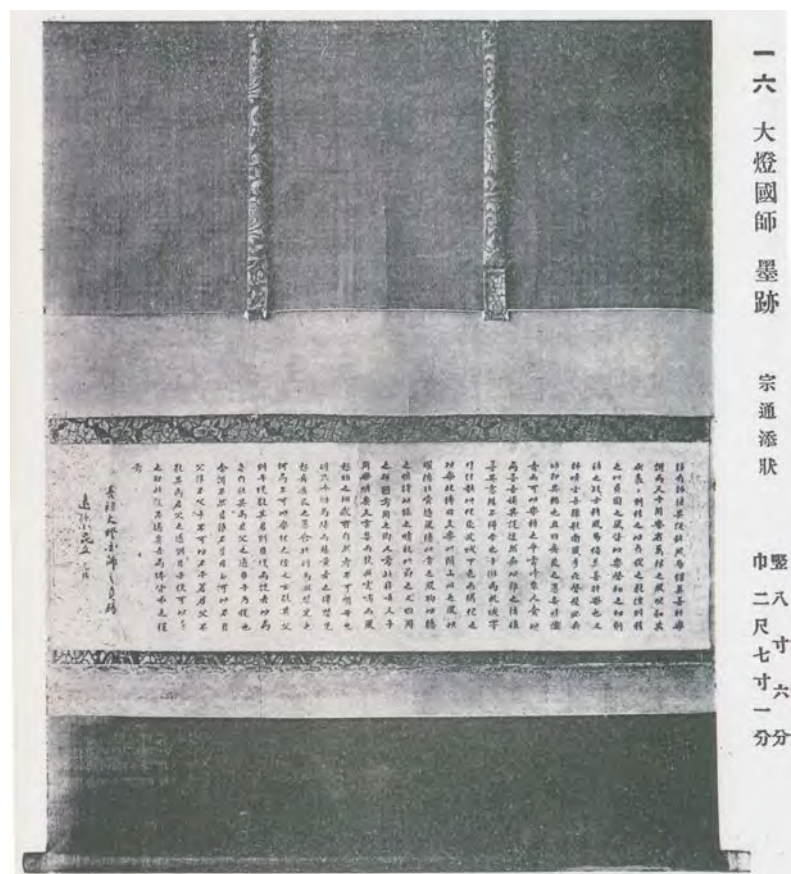


図 B 2 2 当市神戸氏青木氏所蔵品売立



図B 2 4 松平子爵（主殿頭）家御蔵品入札



図B 2 5 当市某旧家所蔵品売立





図 B 2 7 当市三田九層台主人所蔵書画骨董入

札

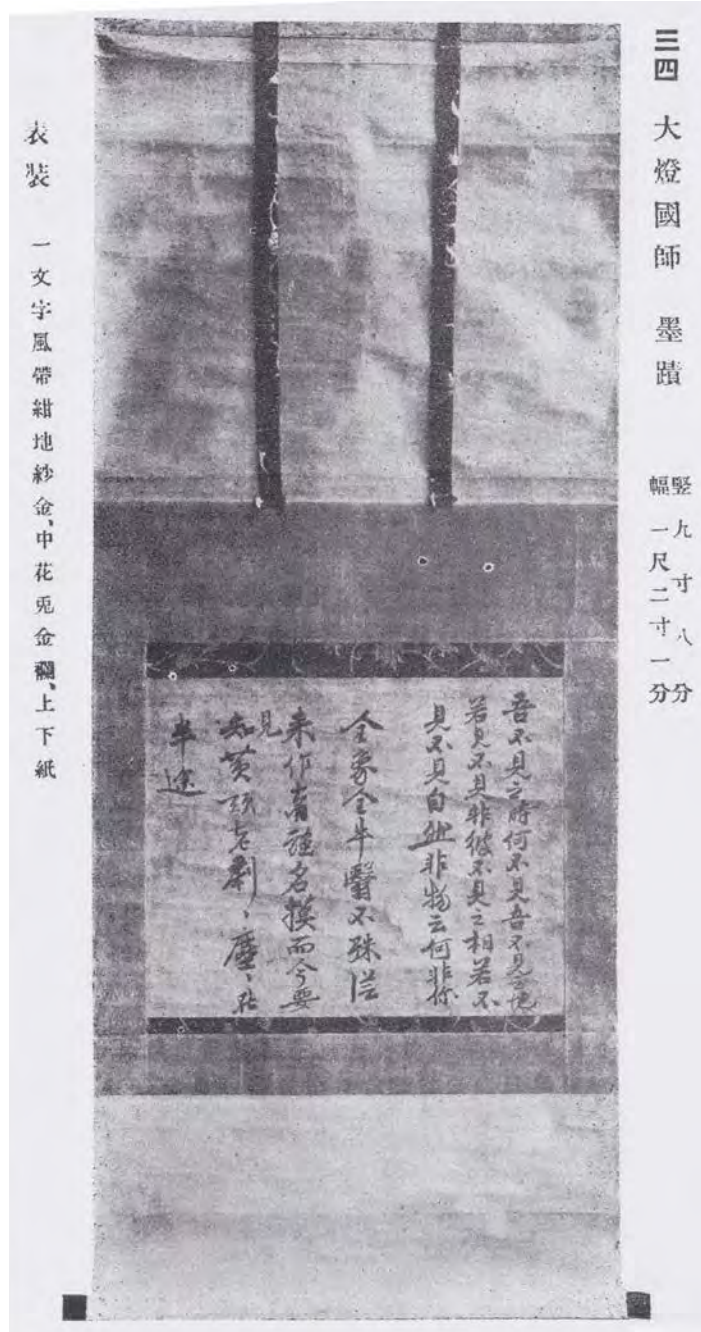


図 B 2 6 池田侯爵家御所蔵品入札





図 B 2 8 因州池田侯爵家御蔵品入札

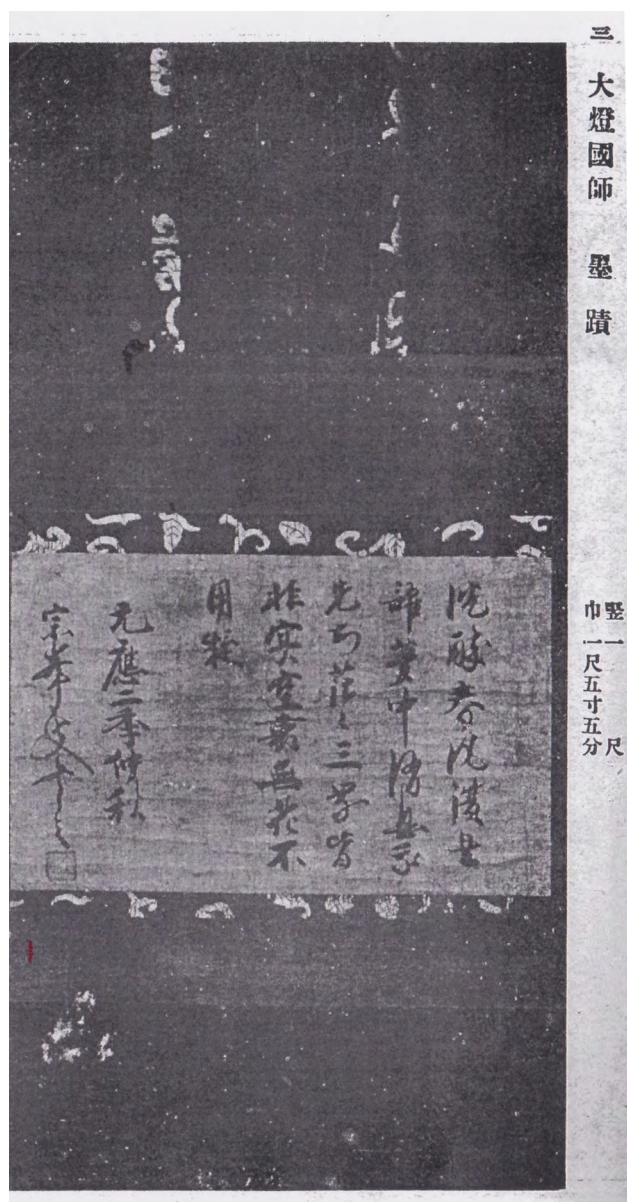


図 B 2 9 郷男爵家御所蔵品入札



一 大燈國師 墨跡 大心和尙 眞珠庵 添狀 一風繼分印金



図B30 某家所蔵品入札

六五 大燈國師 一行

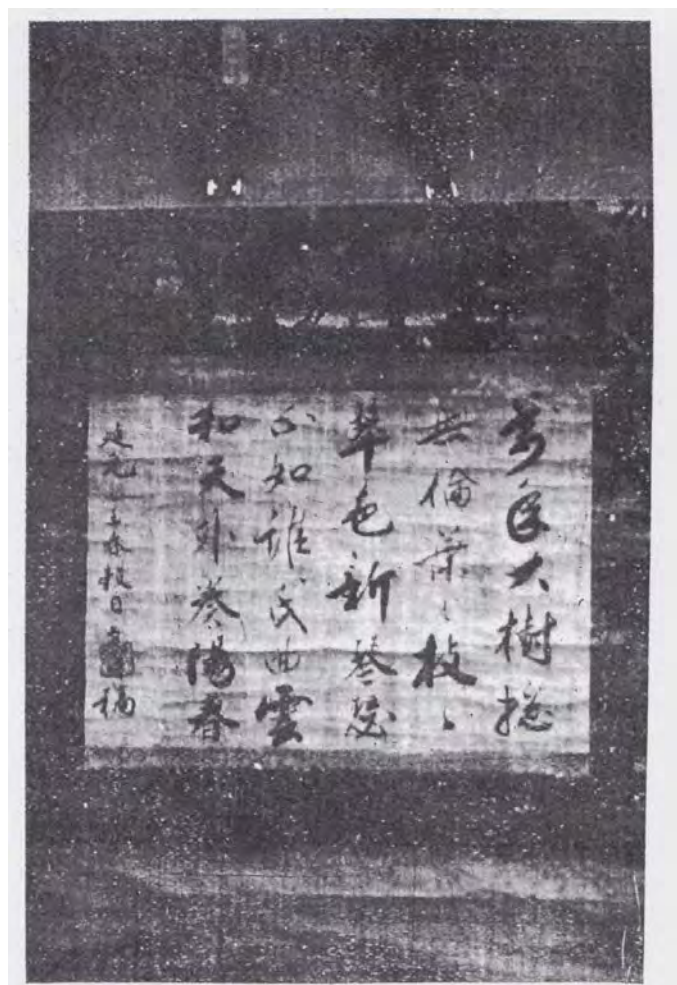
巾 三尺五寸五分  
九寸三分



図B31 某子爵家御蔵品入札



図B 3 2 子爵土井家御蔵品入札



図B 3 3 某家所蔵品入札



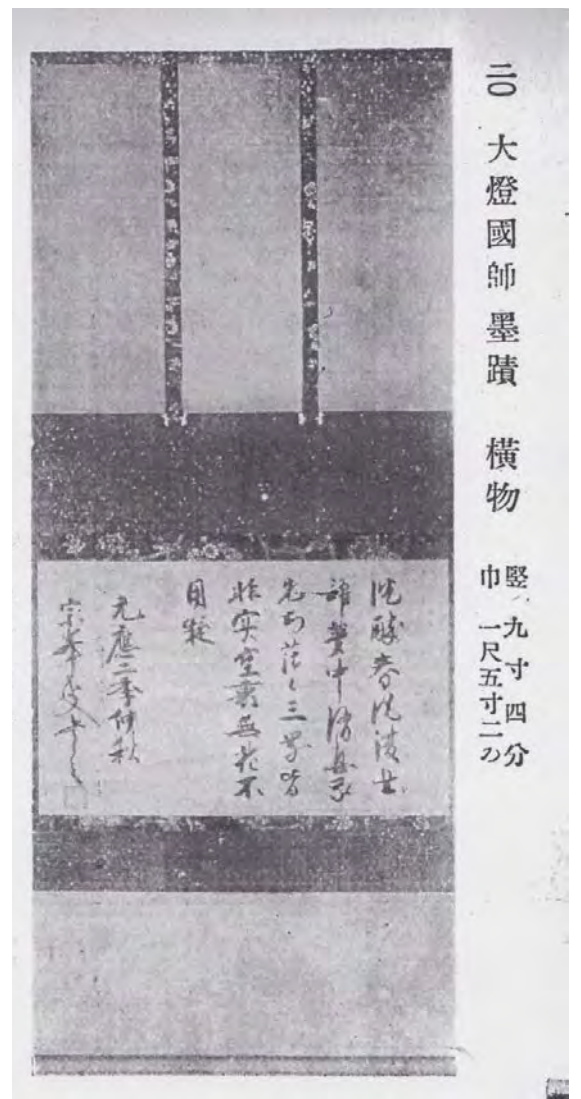


図 B 3 4 末松子爵遺愛品入札

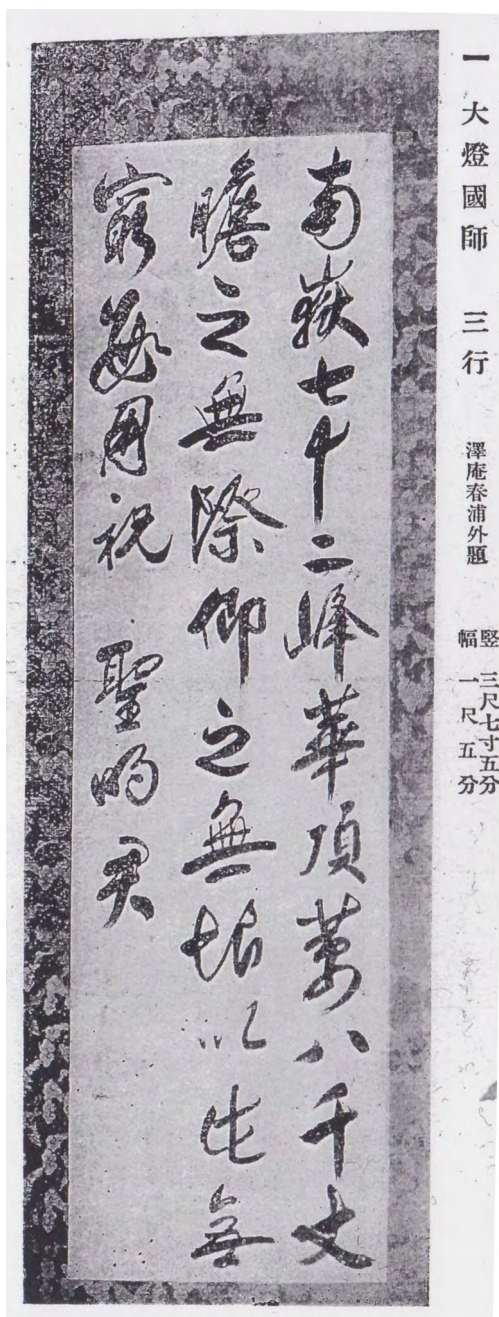


図 B 3 5 田中四郎左衛門氏藏品入札



大燈國師墨蹟橫物 眞珠庵極 巾 豎 一尺〇六分 一尺四寸五分

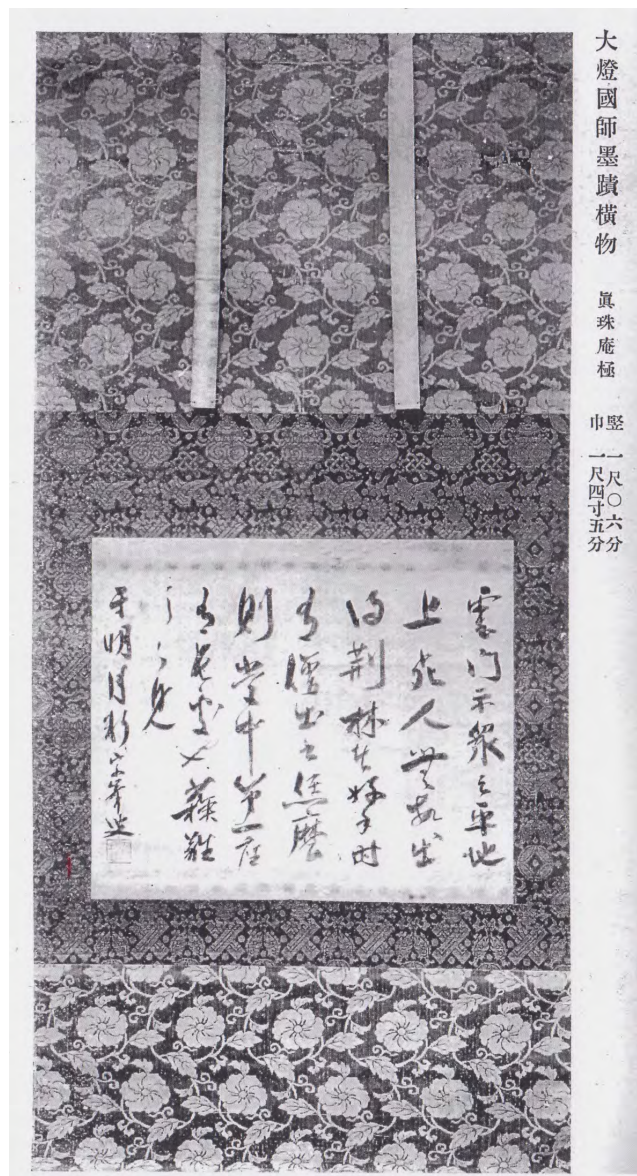


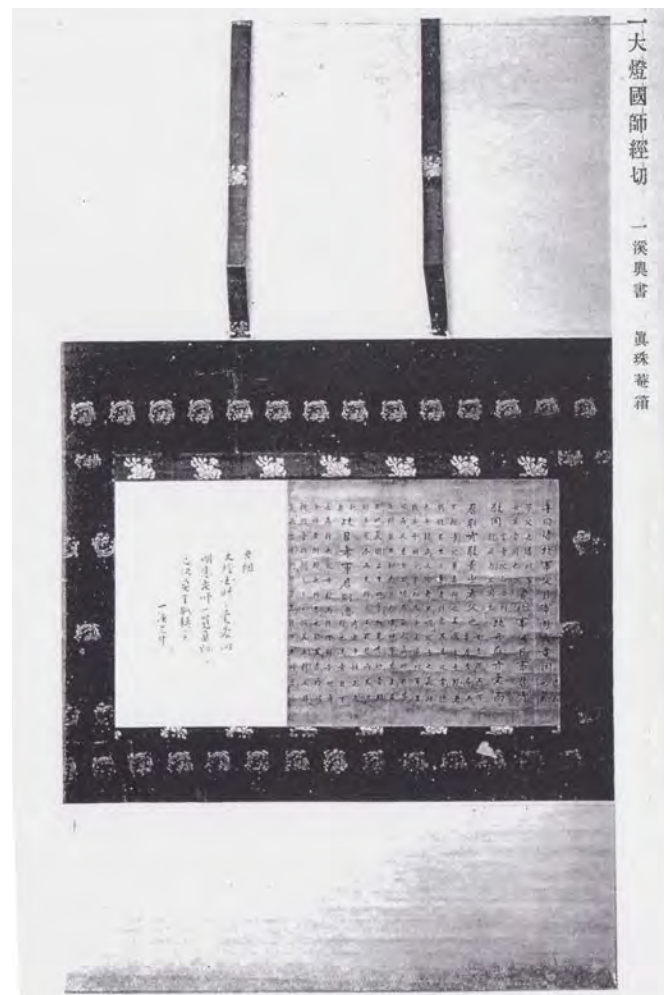
図 B 3 6 市内島之内某旧家所藏品入札

三 大燈國師墨蹟 天倫極

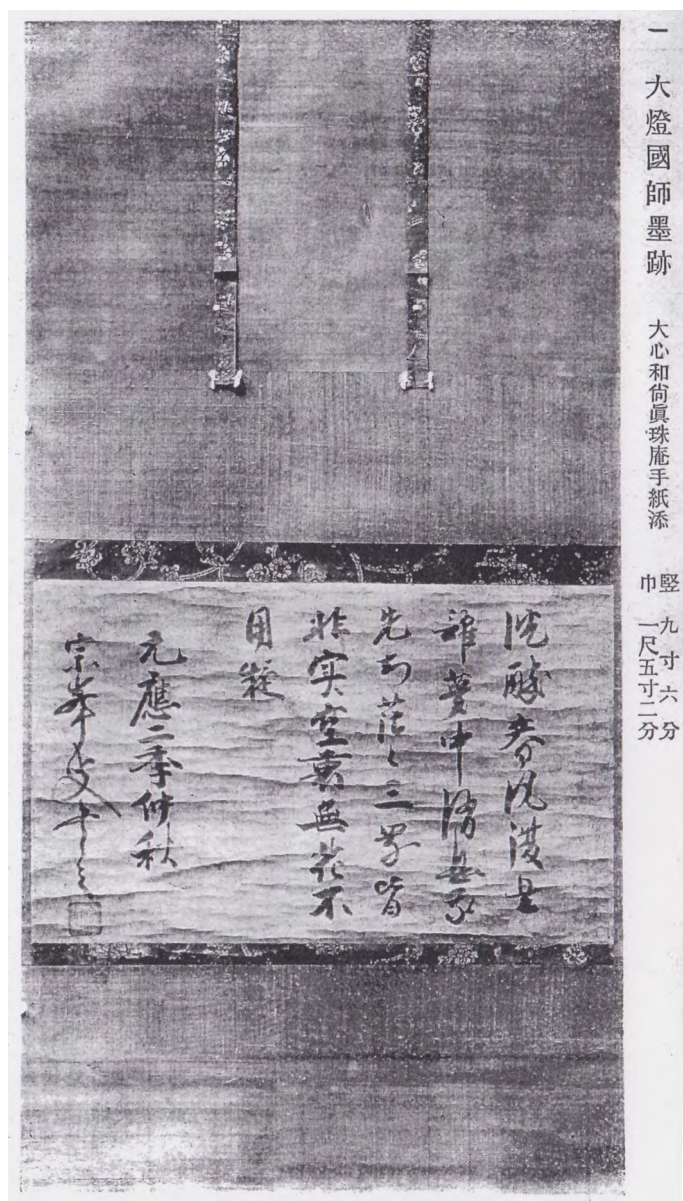


図 B 3 7 甲南氏所藏品入札



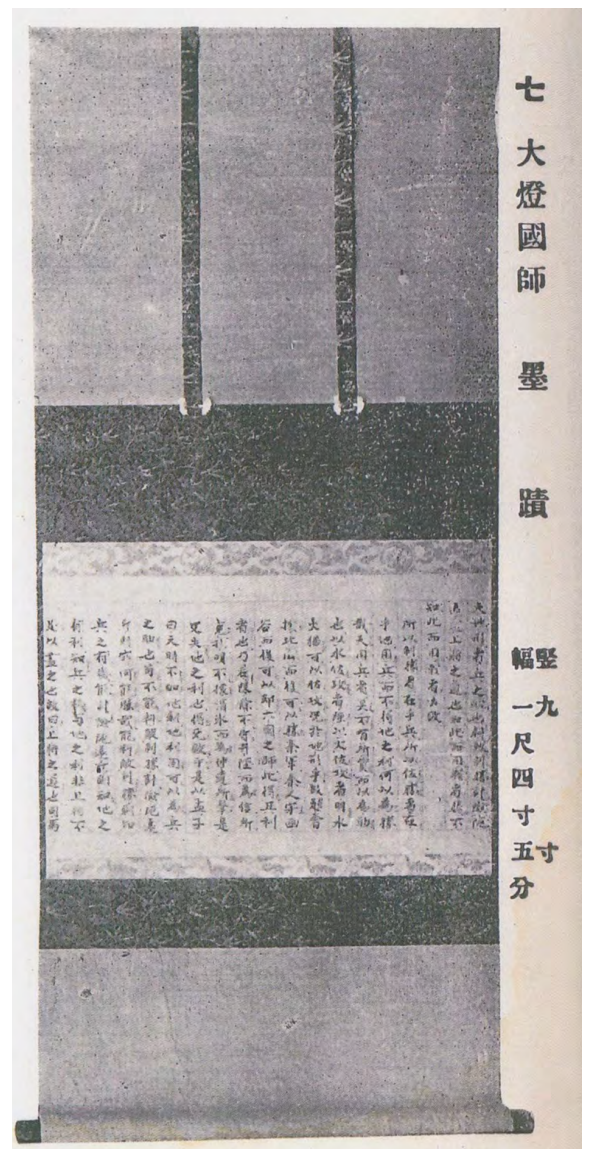


图B 3 8 三重県松坂中井家・当市某家所藏品入札



图B 3 9 芦屋・大橋蒼翠軒氏及某氏所藏品入札





図B 4 0 益田家御所蔵品入札



図B 4 1 徳川家御所蔵品入札





図B 4 2 当市中京大原氏・西陣本田氏旧蔵品及某家所蔵品入札



図B 4 3 下篠桂谷翁遺愛品入札

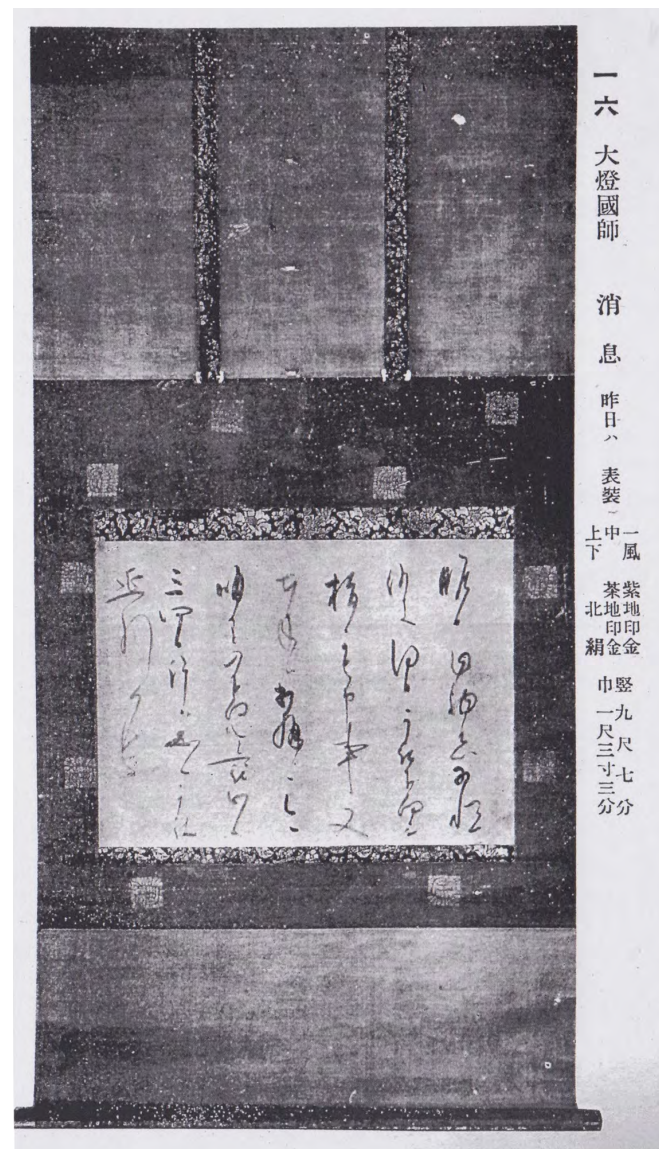


图 B 4 4 若洲酒井伯爵家御所藏品入札

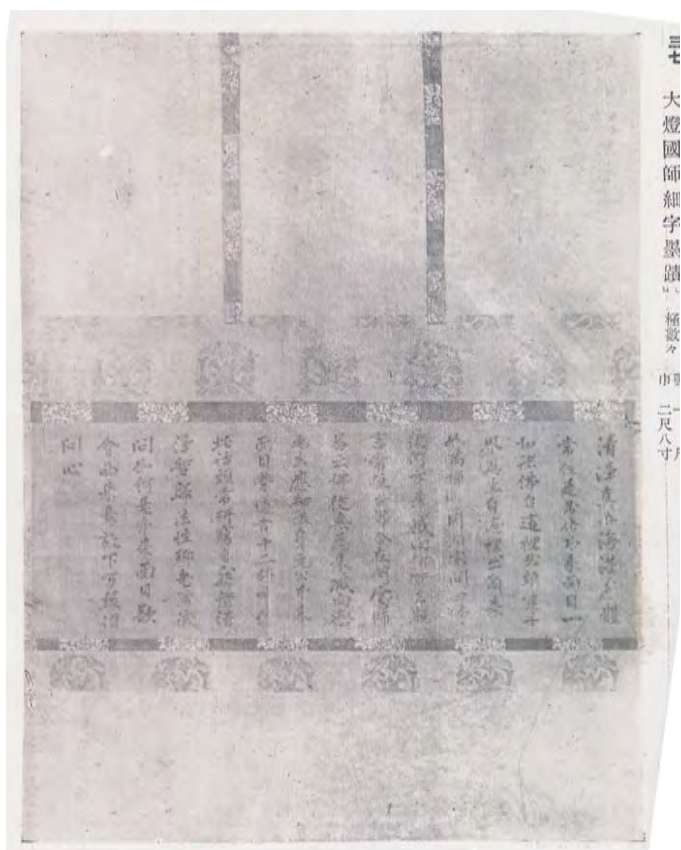


图 B 4 5 穠緑亭神戸家所藏品立売





図B 4 6 旧伊豫西条藩主子爵松平家御所蔵器入札



図B 4 7 市内某家所蔵品入札

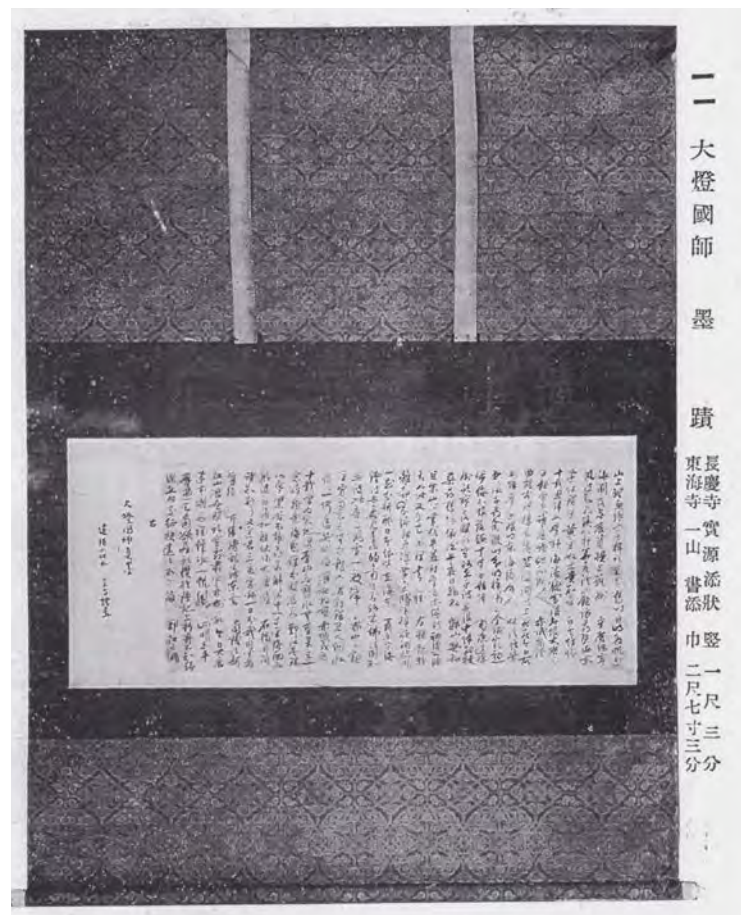


图 B 4 8 益田信世氏所藏品入札



图 B 4 9 当市騎牛菴氏所藏品入札

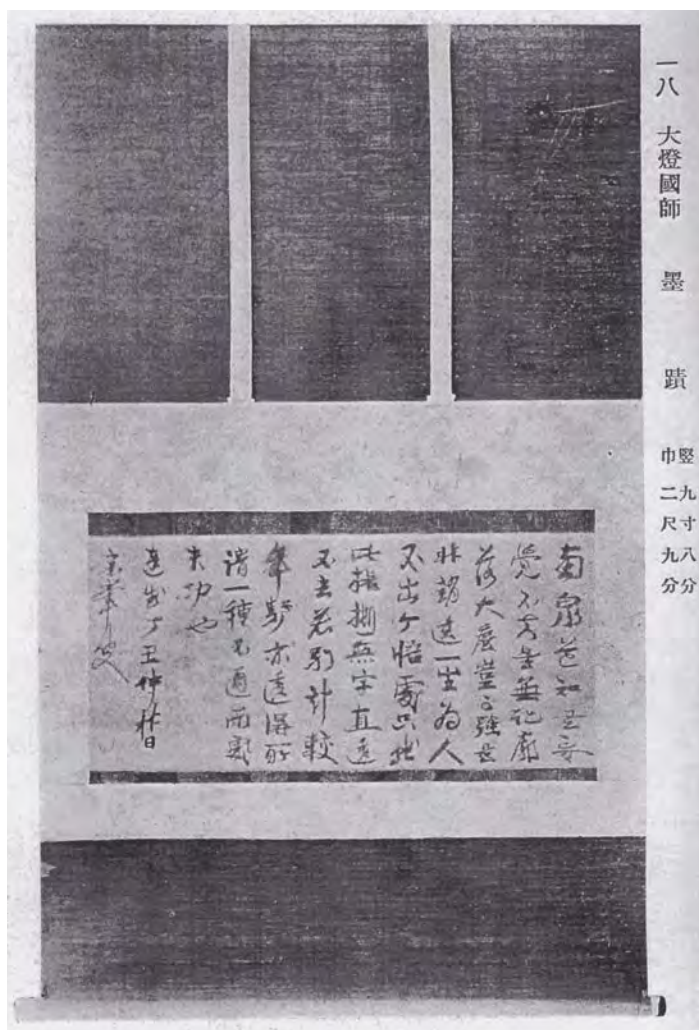




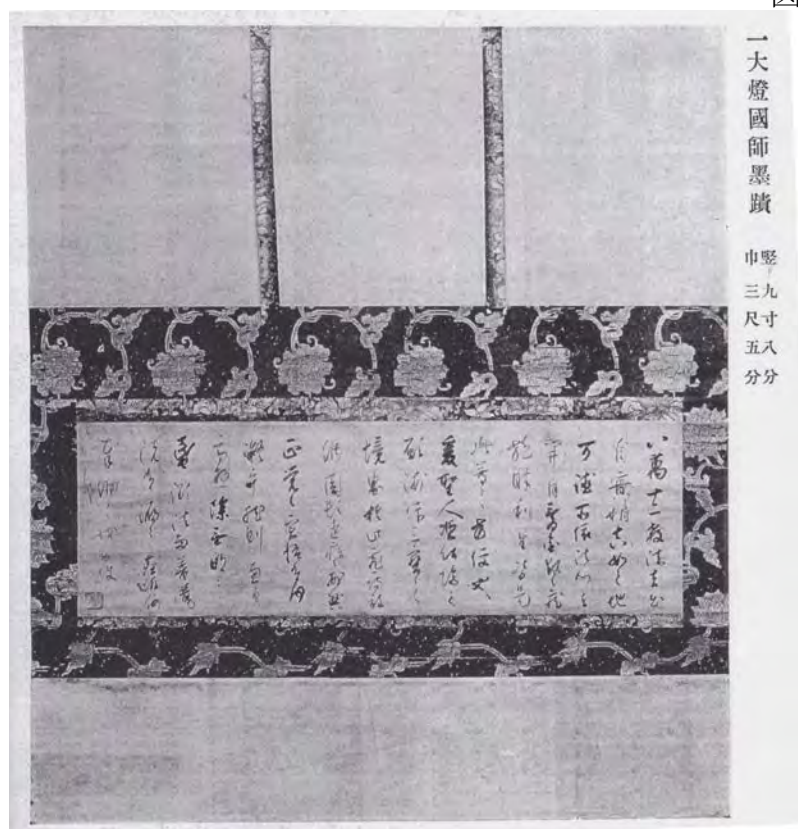
图 B 5 1 当市某家所藏品入札



图 B 5 0 伯爵・有馬家御藏品入札



図B 5 2 下篠桂谷翁遺愛品入札



図B 5 3 鈴木梅四郎氏・某氏所蔵品入札



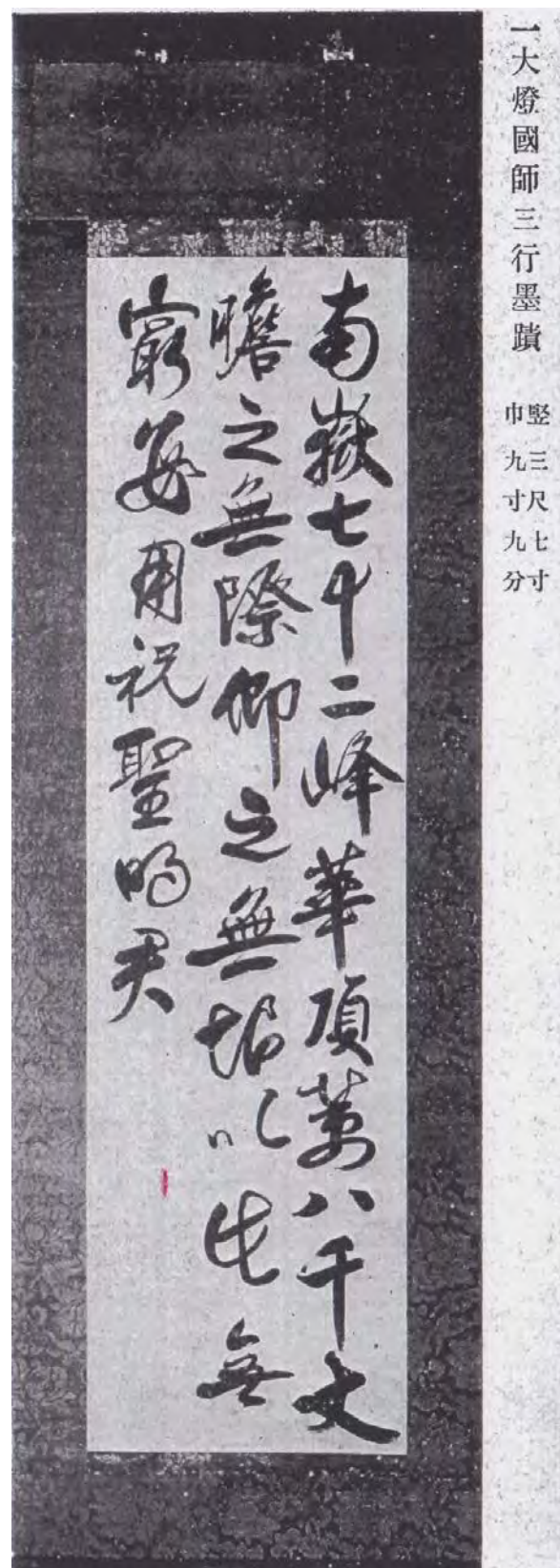


図 B 5 4 鈴木梅四郎氏・某氏所藏品  
入札

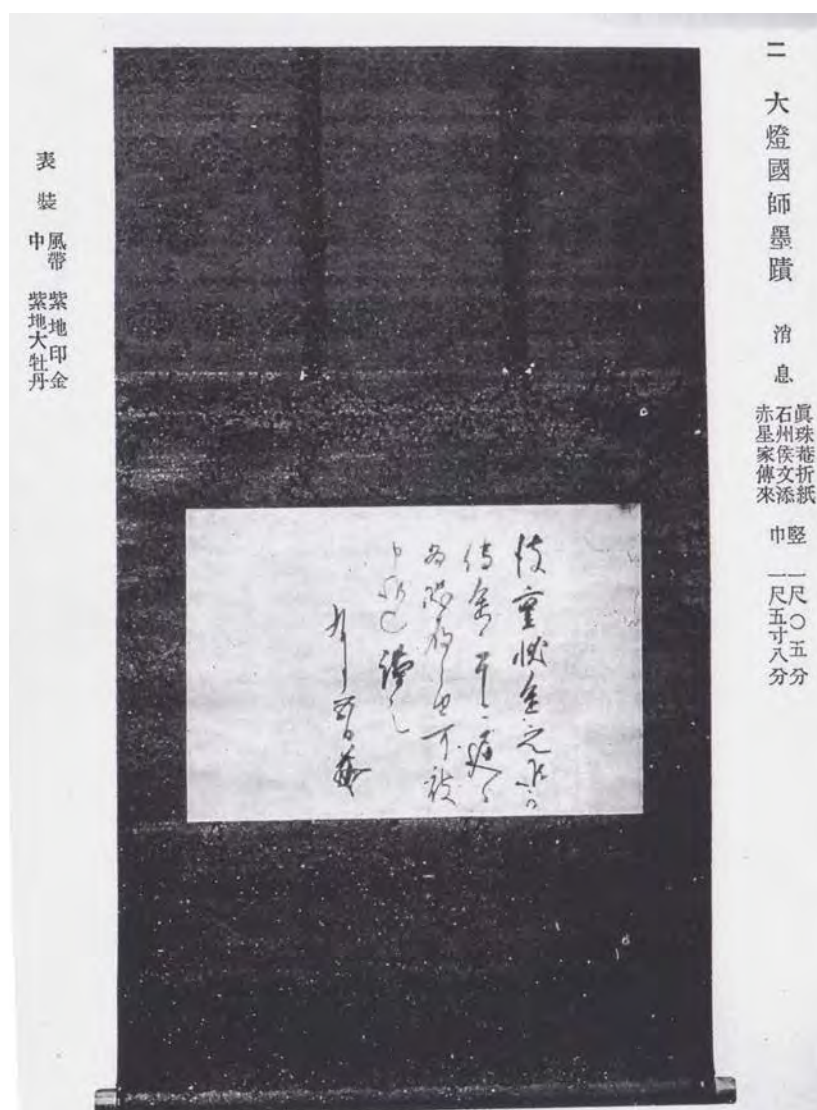


図 B 5 5 大村家所藏品入札



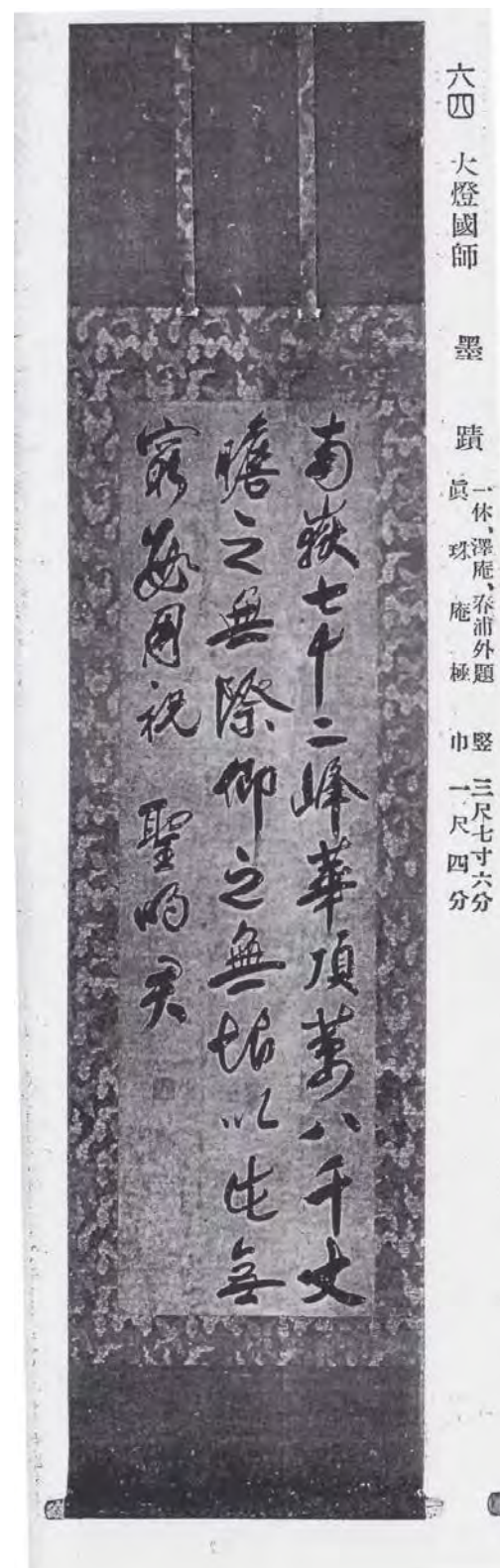


図 B 5 6 秋田県河田丹楓氏入札目録



図 B 5 7 井上侯爵家御所藏品入札







图 B 6 0 当市某家所藏品入札

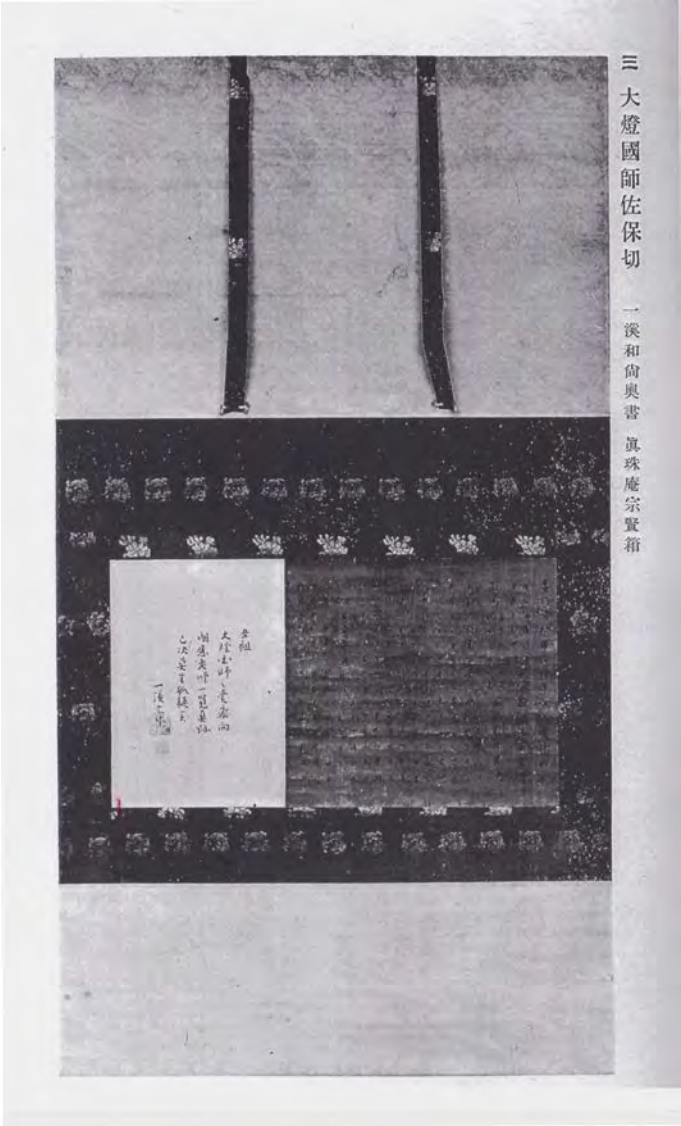


图 B 6 1 当市某家所藏品入札



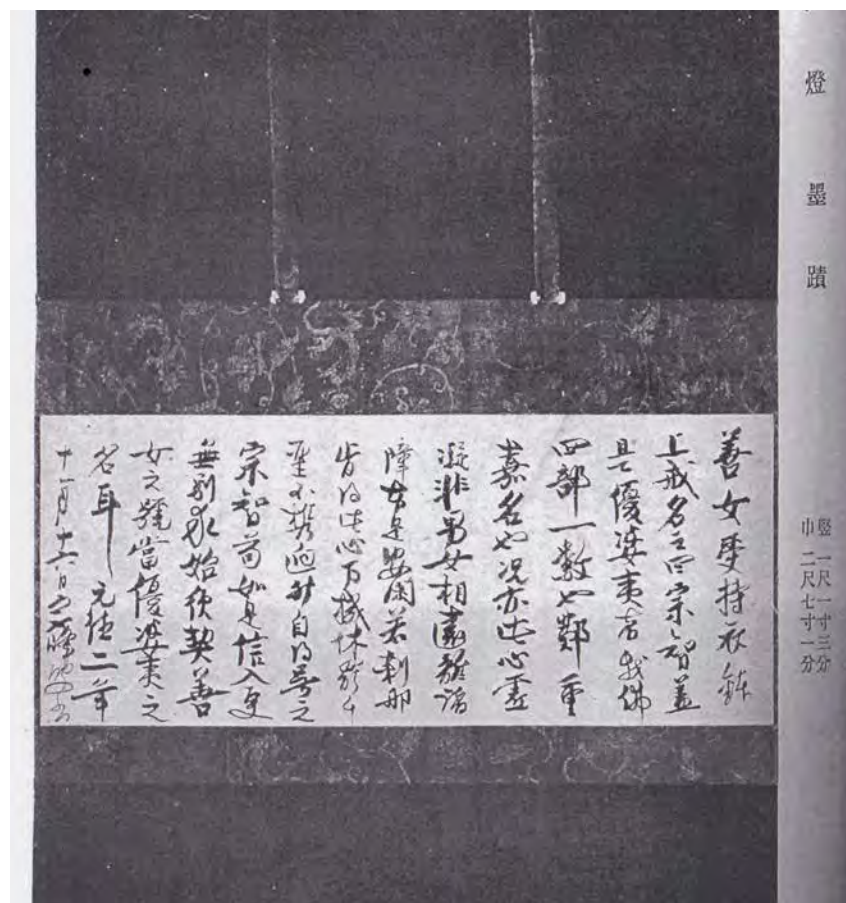


图 B 6 2 洪柿庵藏品入札

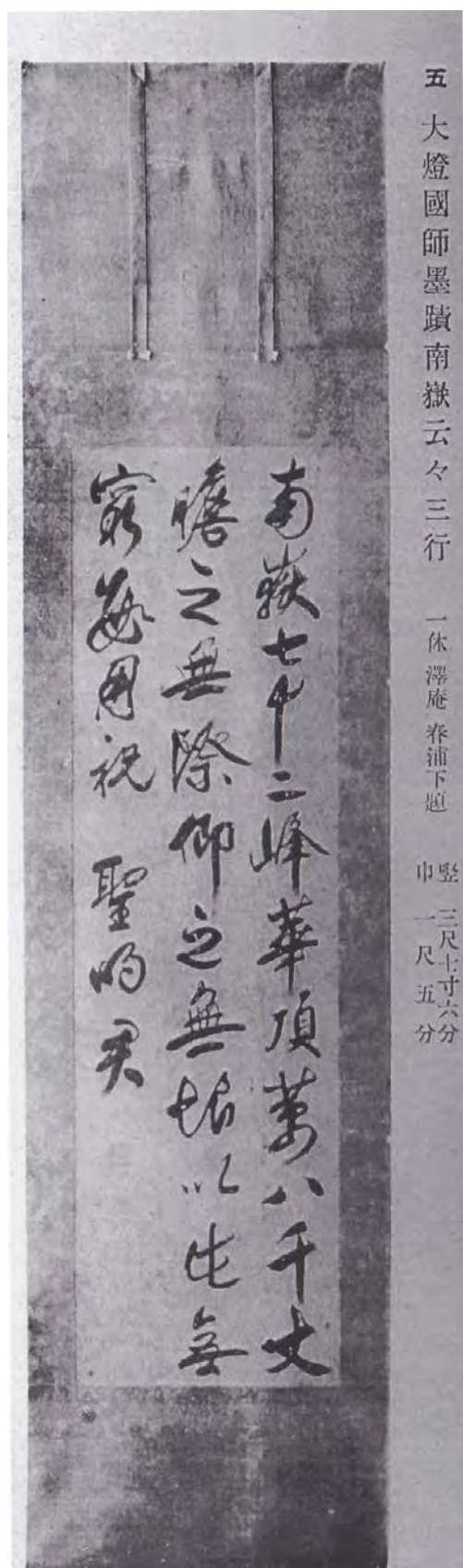
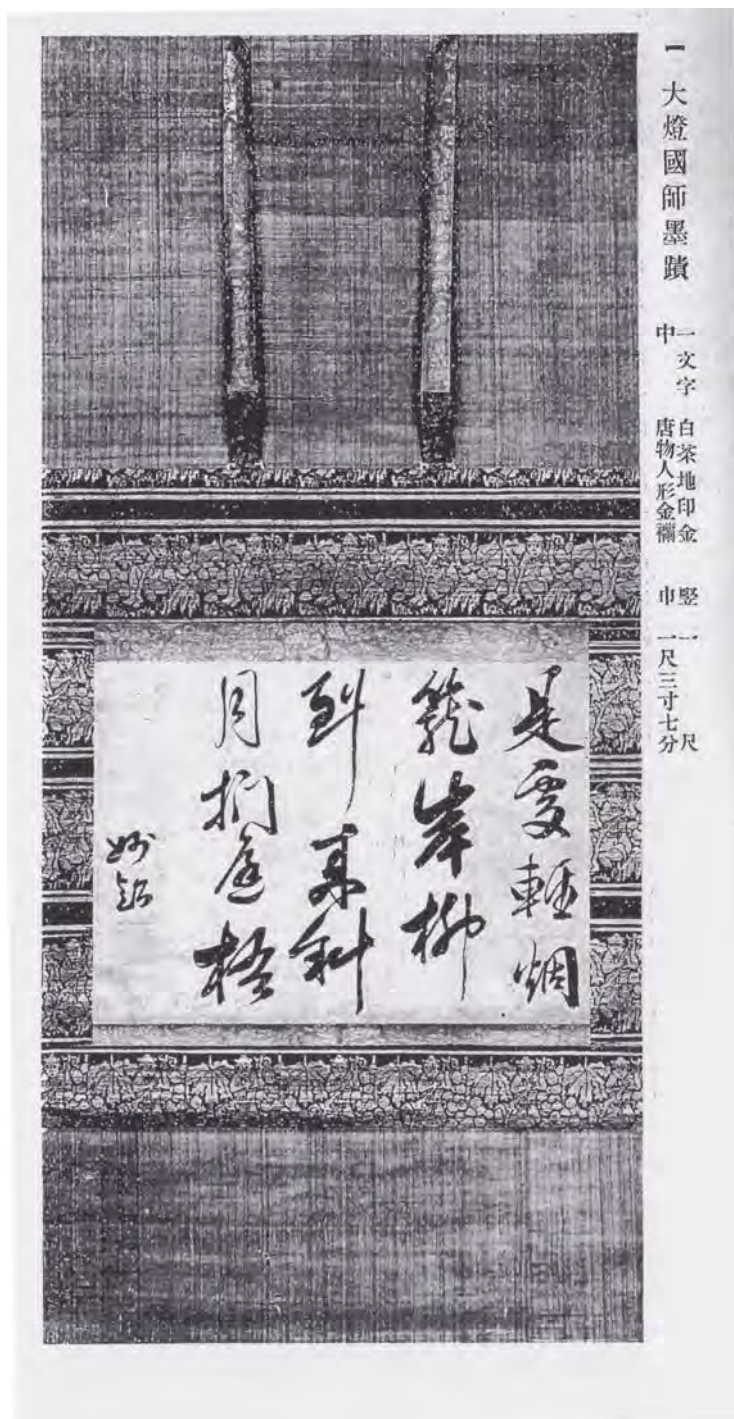
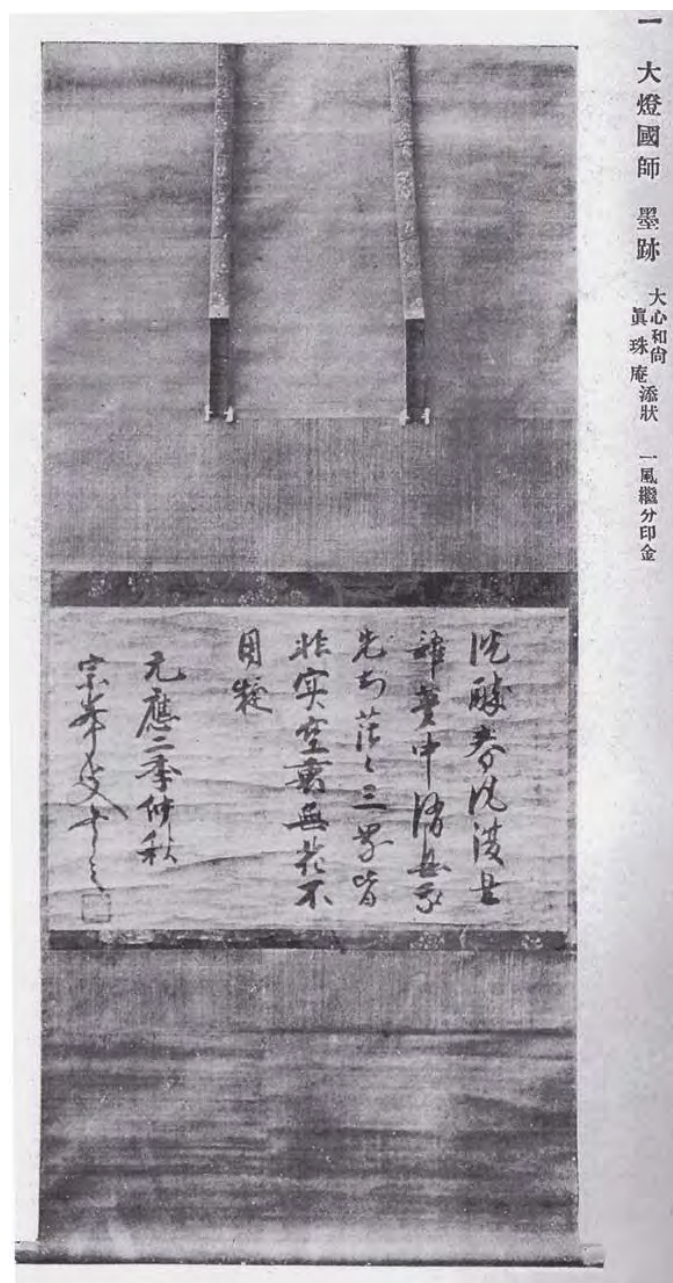


图 B 6 3 某家所藏品入札





图B 6 4 某家所藏品入札



图B 6 5 某家所藏品入札



三  
大燈  
國師 墨蹟 一行  
巾 豎 四尺二寸九分  
八寸八分



图 B 6 6 当市西林治兵衛氏及某家所藏品入札

七五 大燈國師三行  
澤菴天室添狀  
眞珠菴極外數々  
巾 豎 二尺二寸三分  
九寸二分

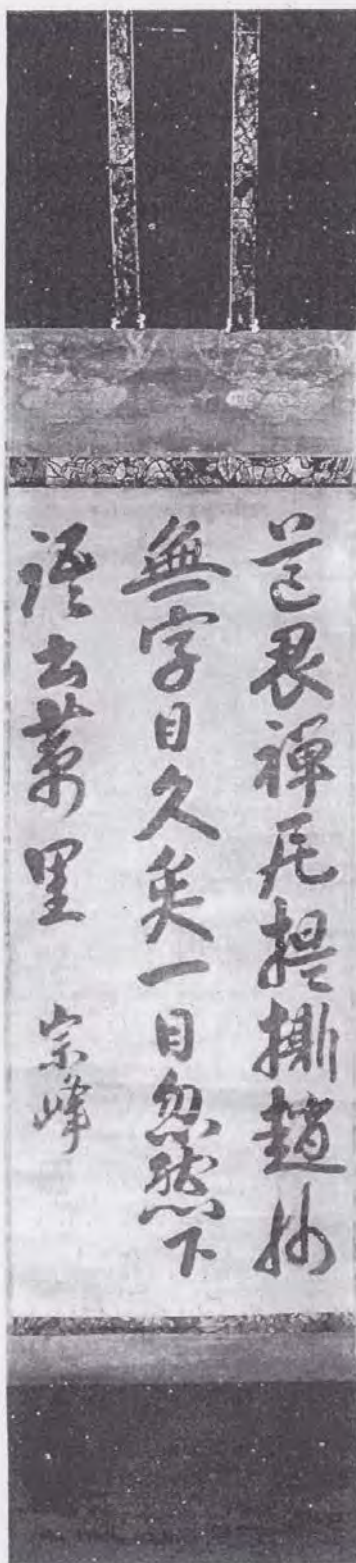
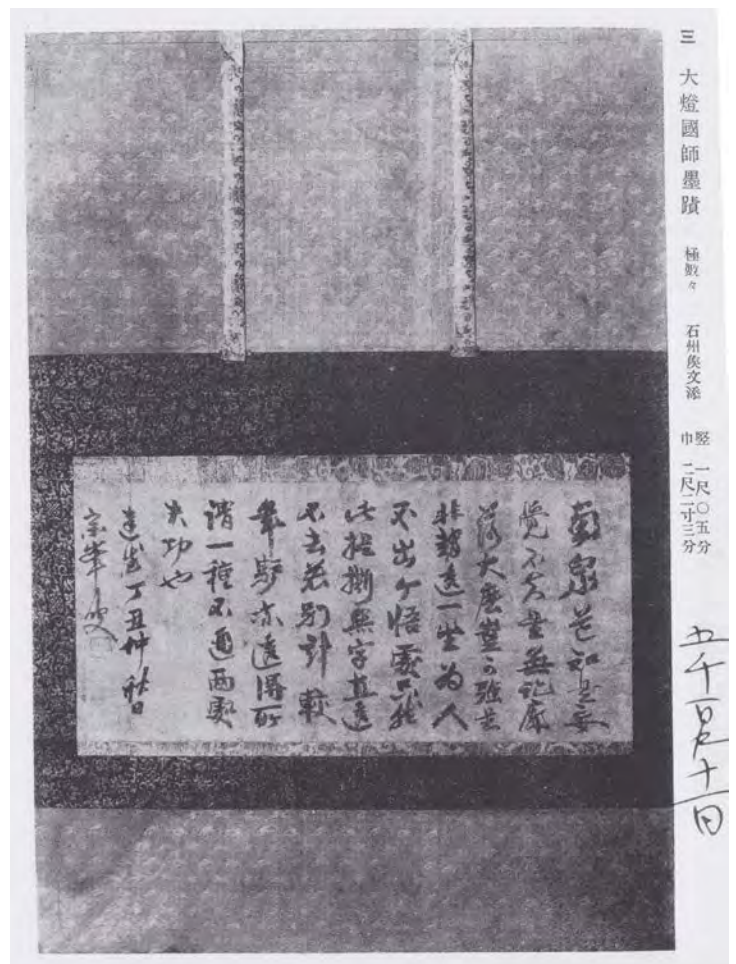
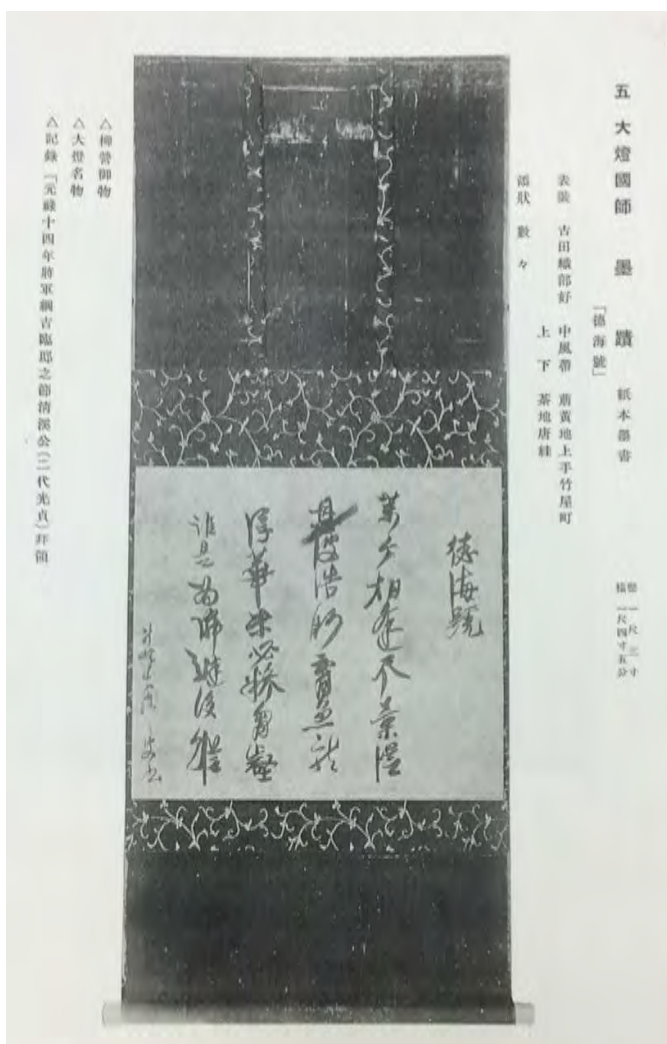


图 B 6 7 当市某旧家・神戸一峯庵所藏品入札





図B 6 8 某大家所蔵品入札



図B 6 9 紀州徳川家蔵品展観目録

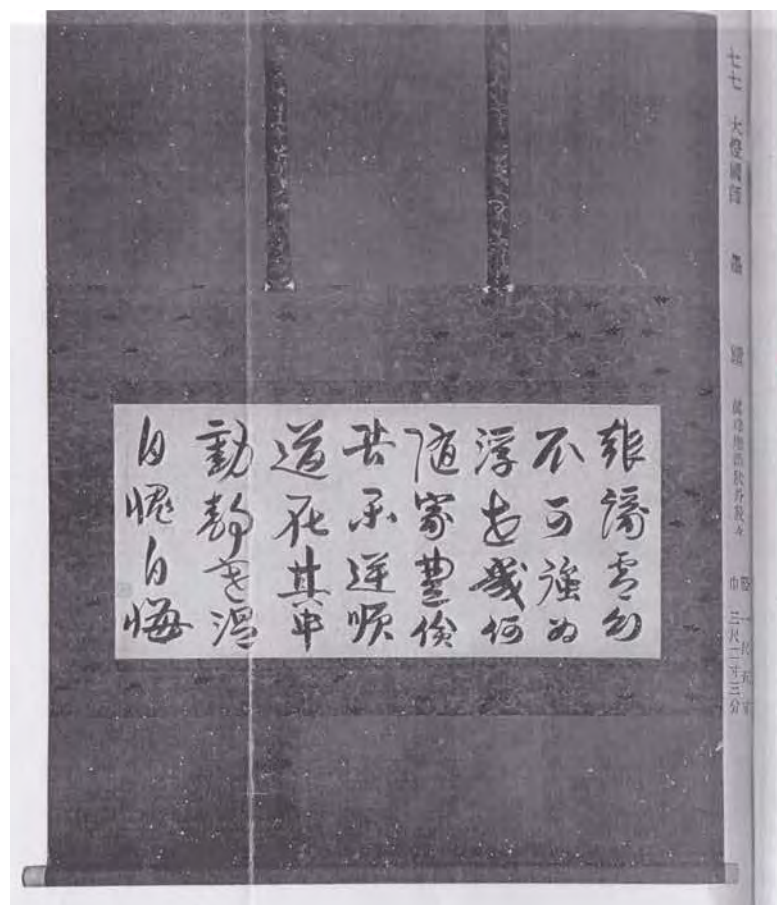


図 B 7 0 林家所藏品入札

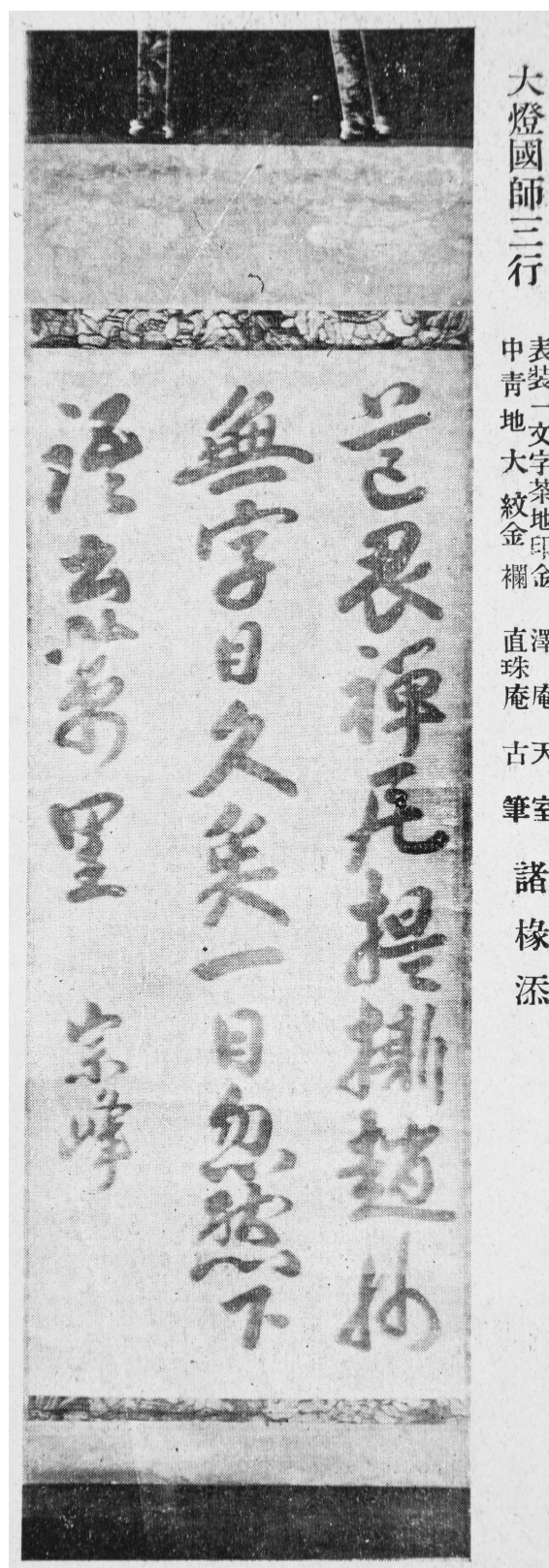
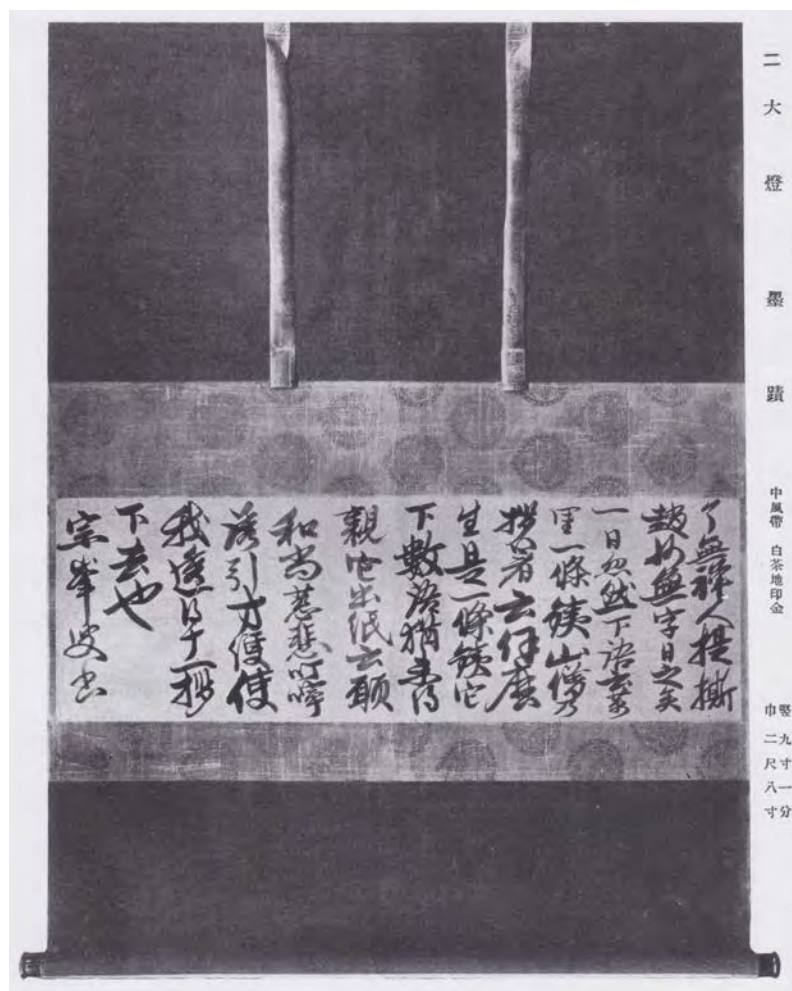
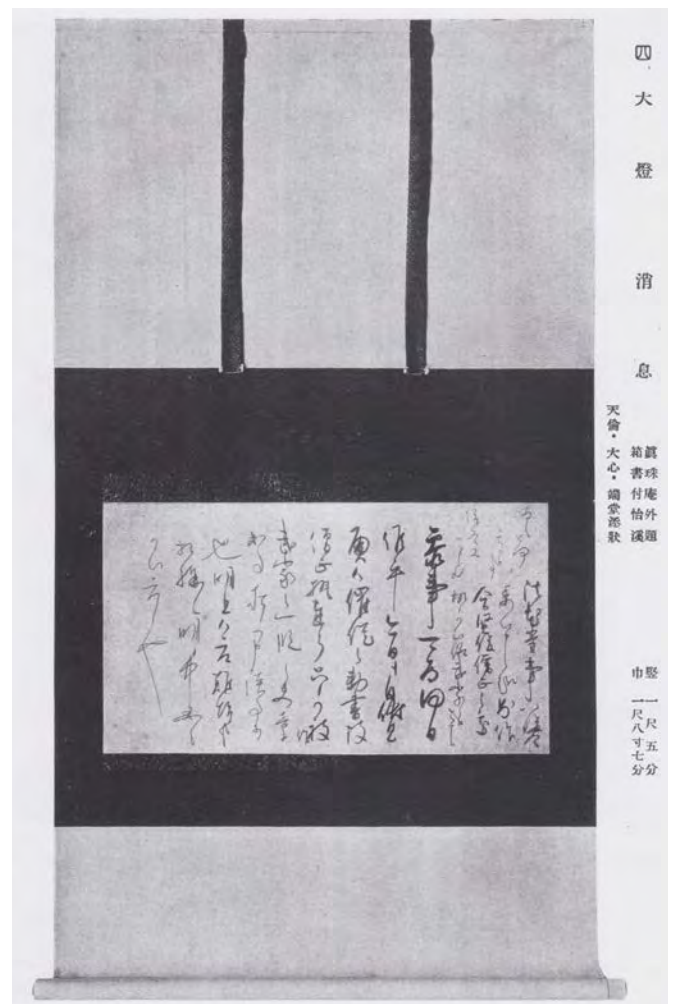


図 B 7 1 当市青木鶯語亭氏竹ヶ鼻太田平右衛門両氏所藏品売立





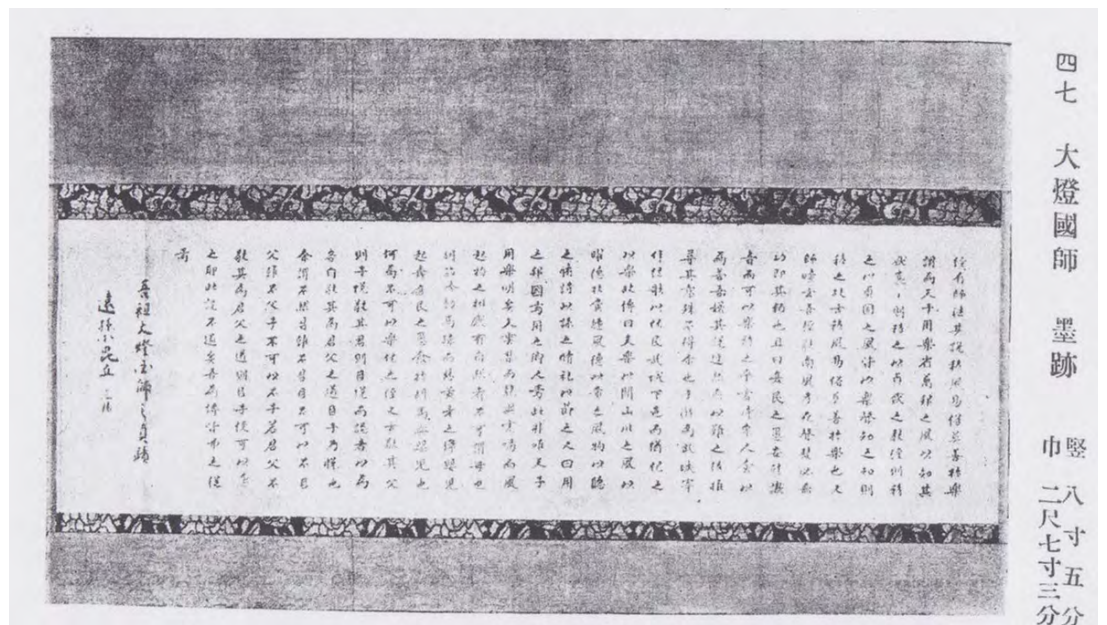
図B 7 2 肥前松浦伯爵家蔵品目録



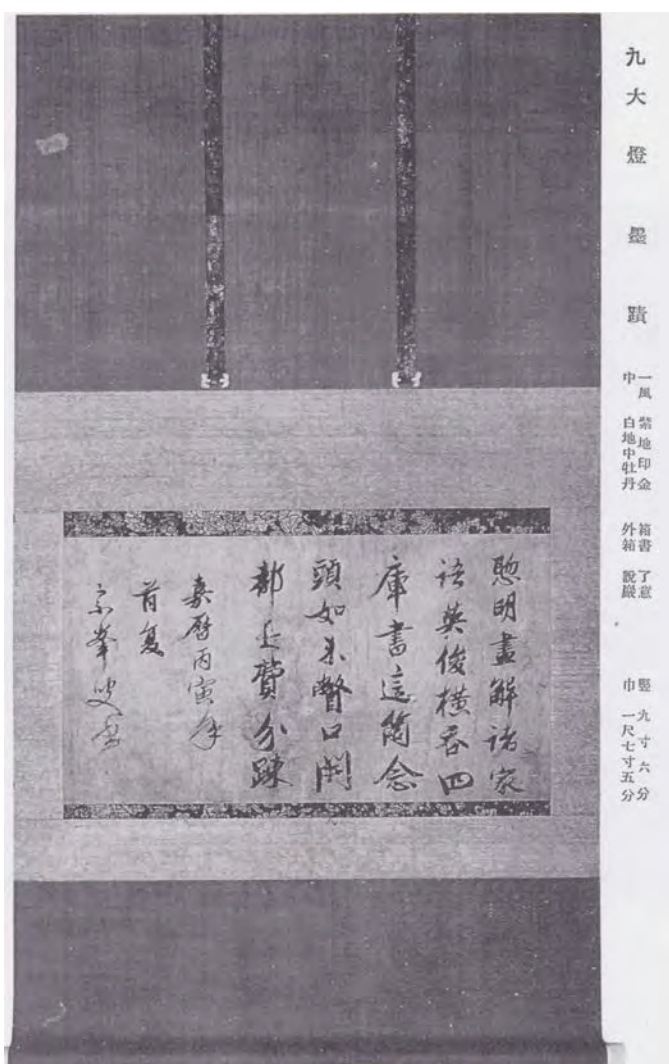
図B 7 3 肥前松浦伯爵家蔵品目録



図B 7 4 某大家所蔵品入札目録

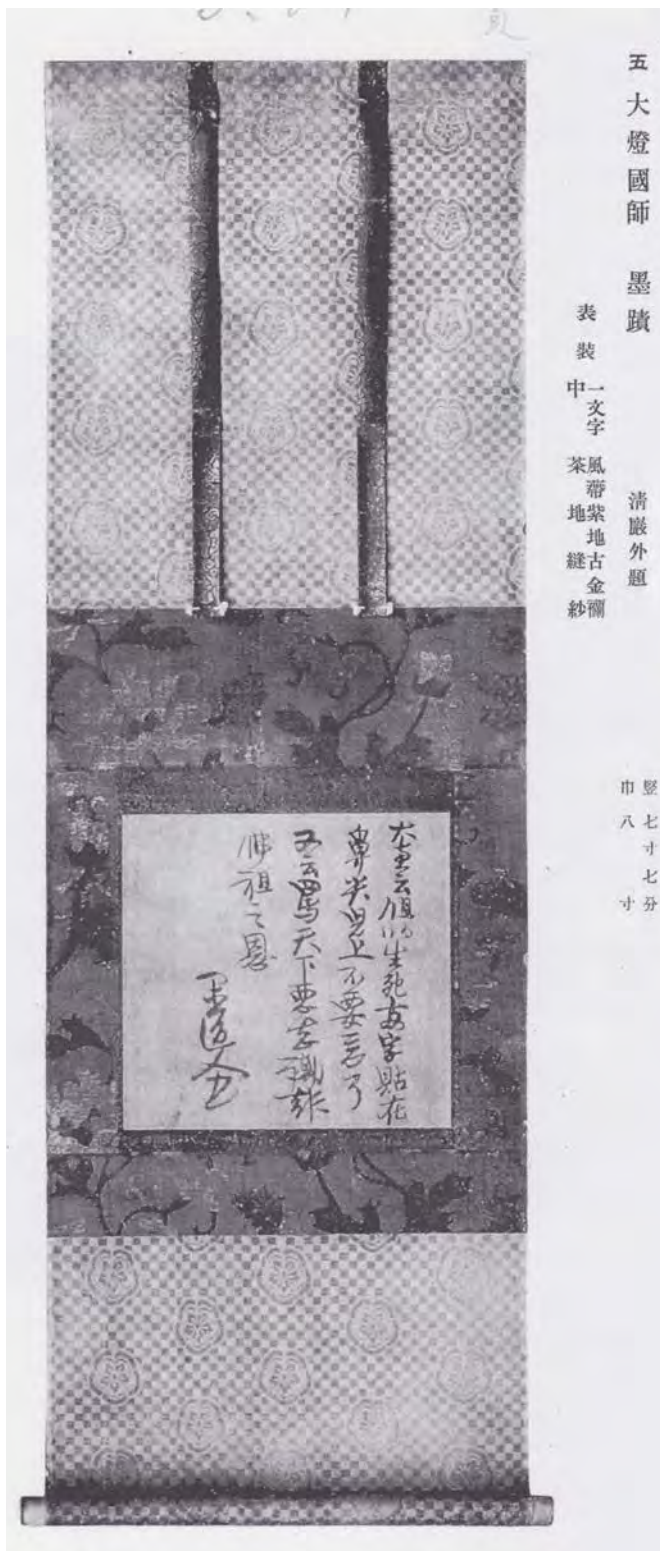


図B 7 5 男爵神田家及某大家所蔵品入札

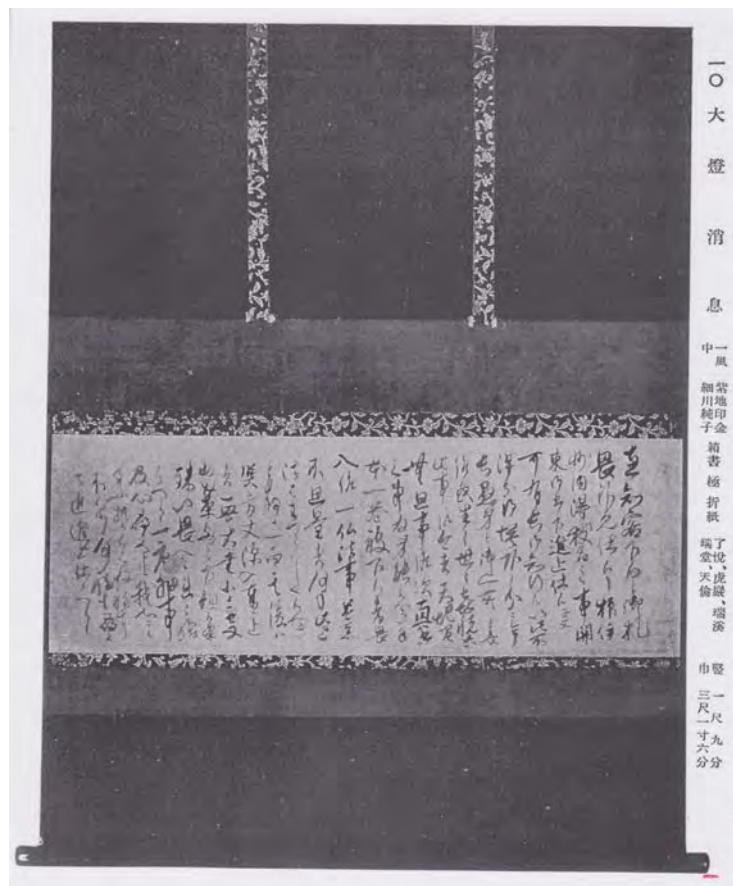


図B 7 6 松方前侯爵家蔵品入札





図B78 広岡家蔵品入札



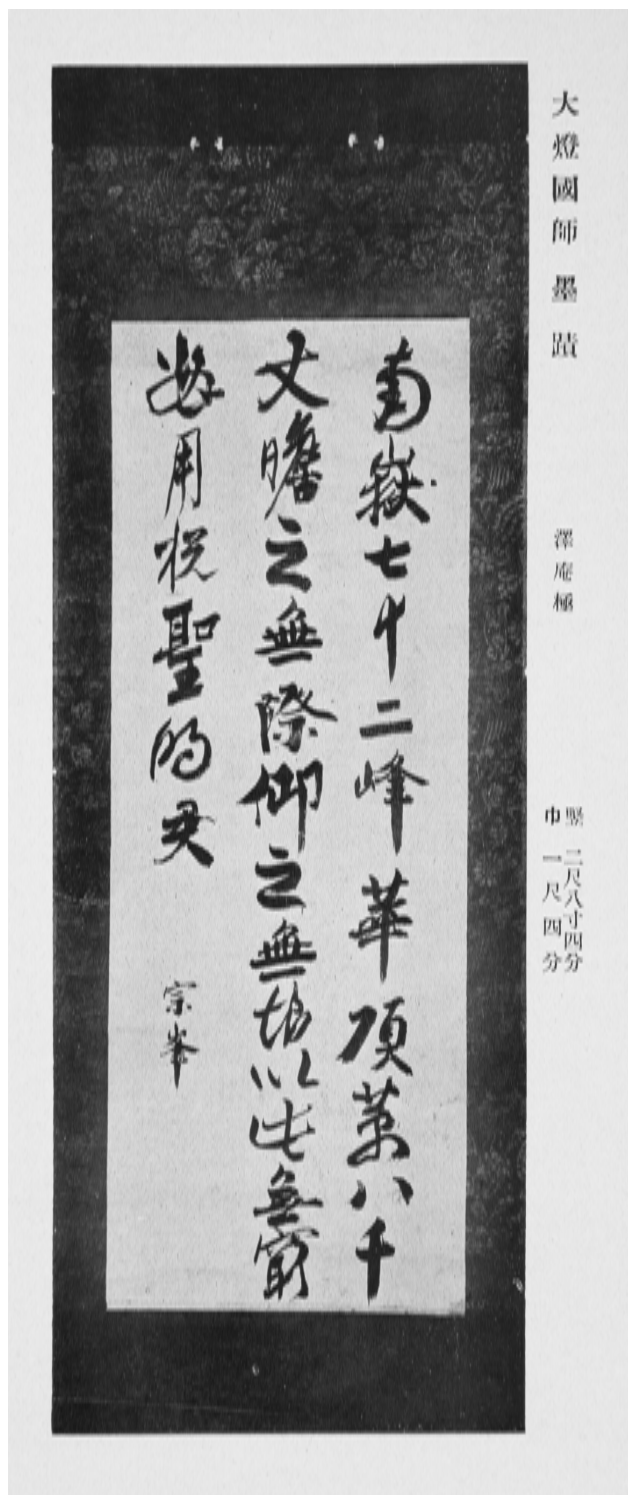
図B 7 7 前侯爵松方家蔵品入札



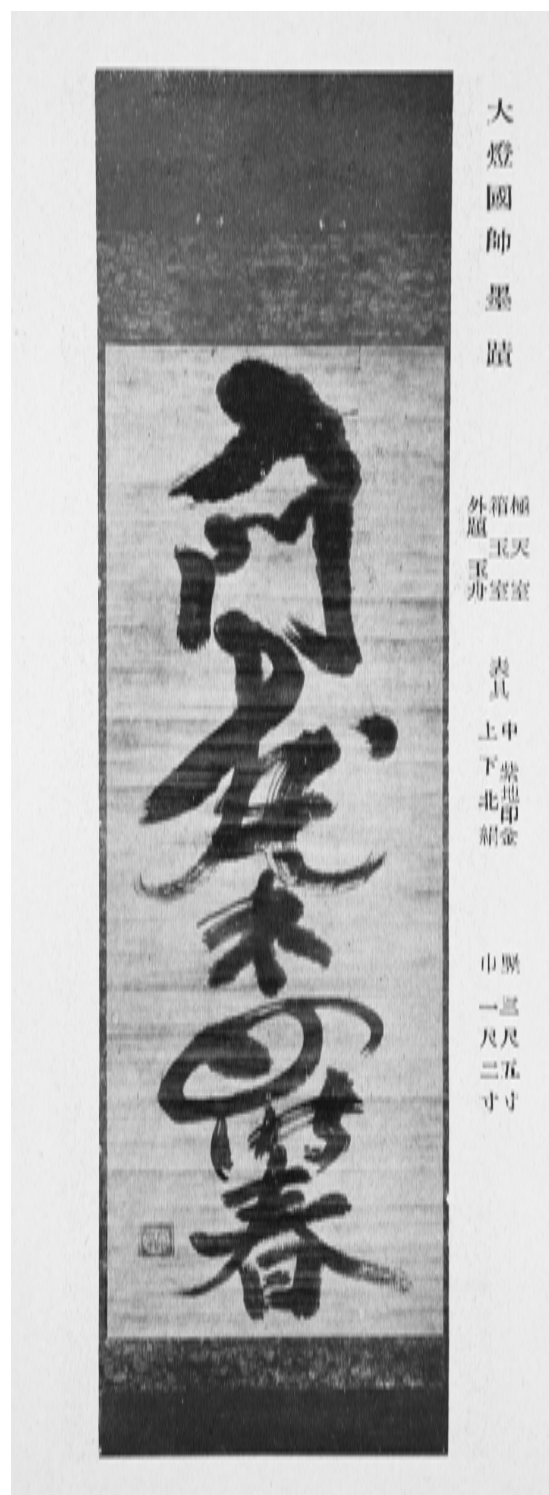
図 B 7 9 広岡家蔵品入札



図 B 8 0 旧姫路藩男爵武井家蔵品入札



図B 8 2 市外西枇杷嶋町故川島松次郎氏遺愛品売立目録



図B 8 1 市外西枇杷嶋町故川島松次郎氏遺愛品売立目録





図 B 8 3 中京杉浦家所蔵品入札

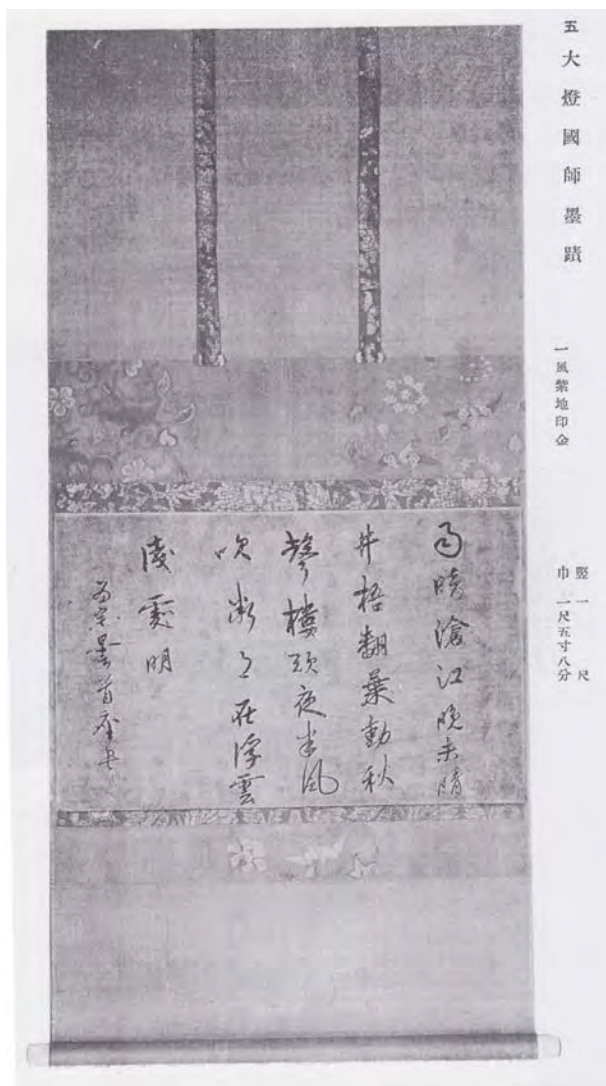


図 B 8 4 渡信州松本藩戸田子爵家蔵品入札目録



図 B 8 5 某家御所蔵品入札

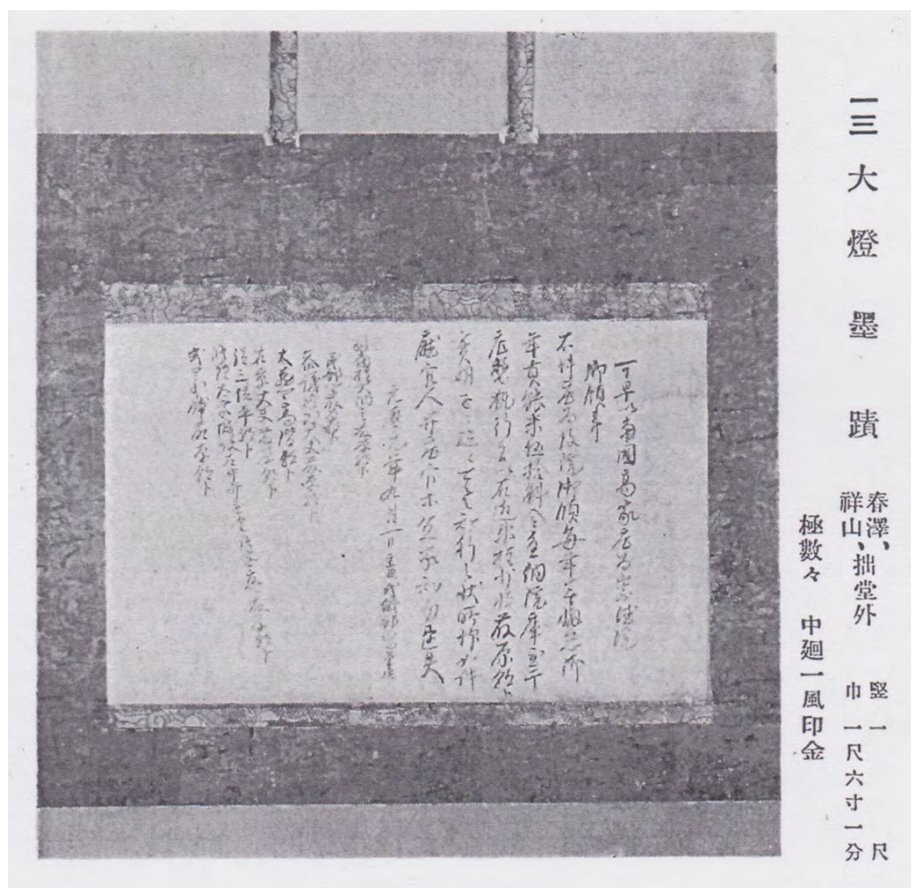


図 B 8 6 礪川山房蔵品入札



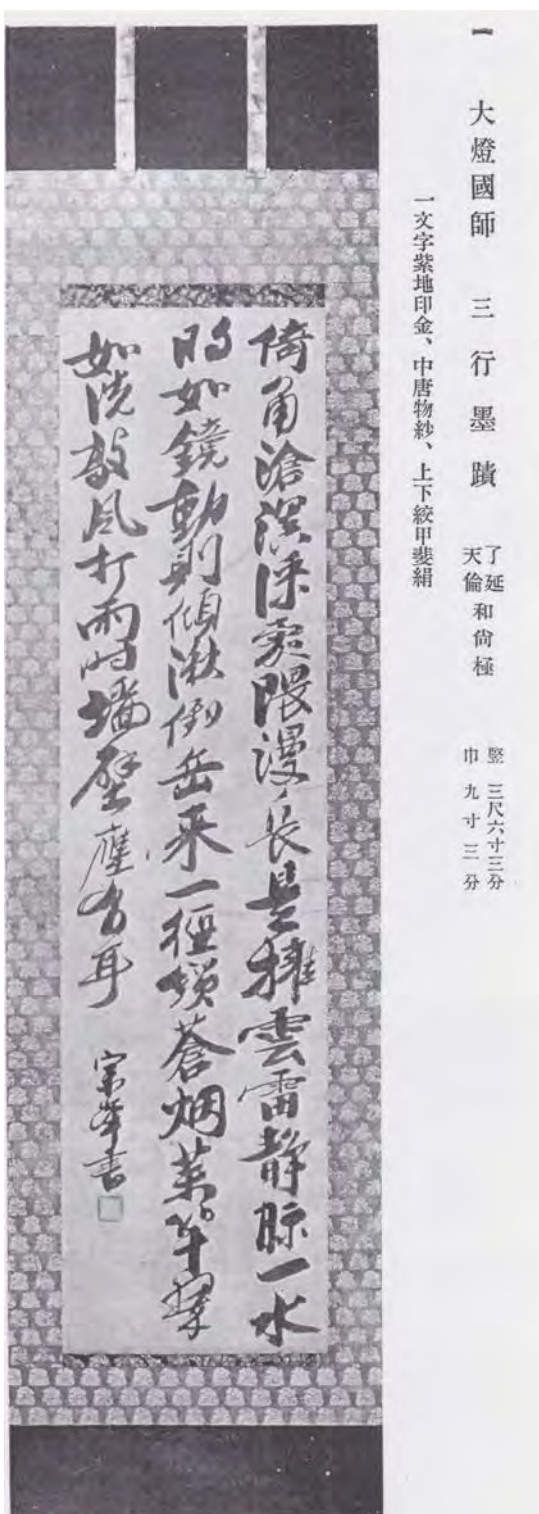
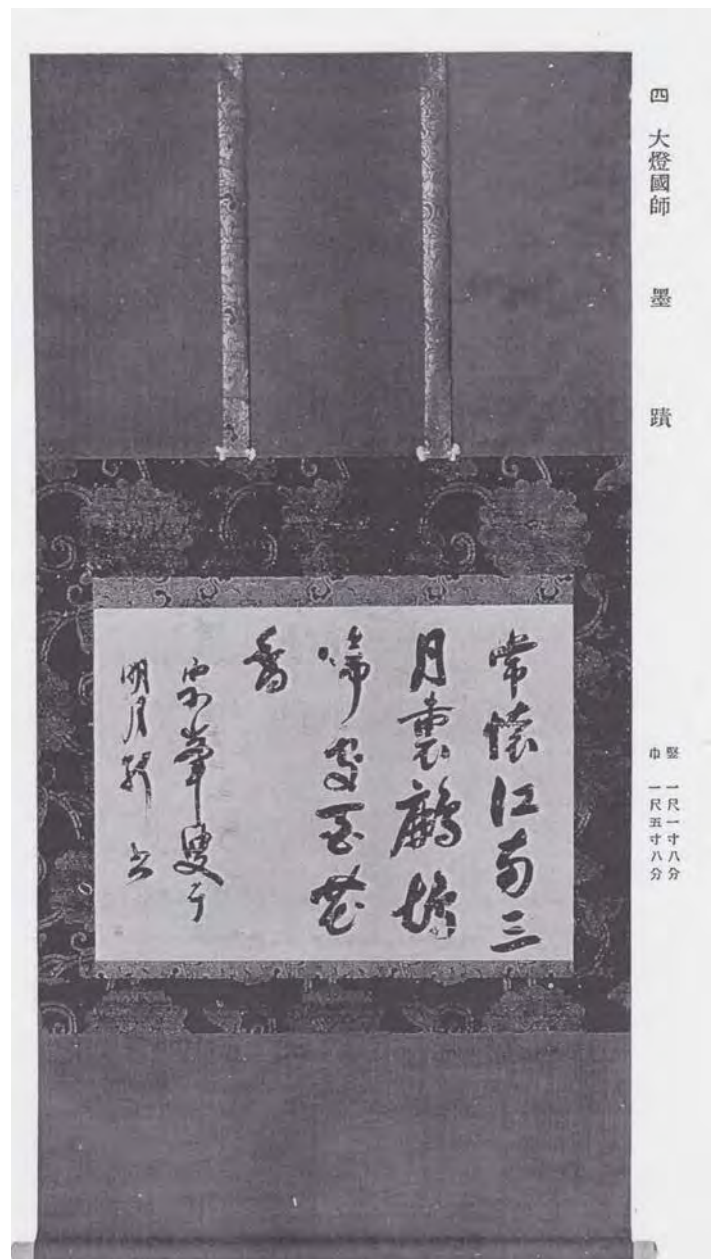


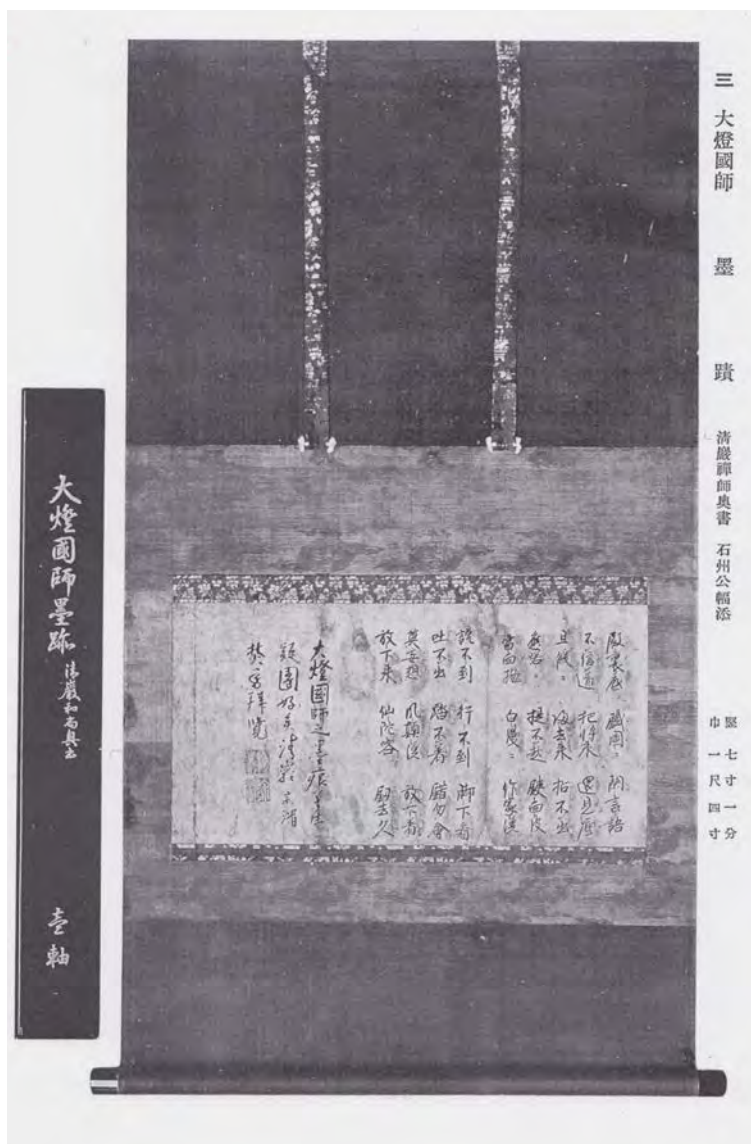
図 B 8 8 某家御所蔵品入札



図 B 8 7 某家所蔵品入札



图B 8 9 某子爵・江戸旧家所藏品入札



图B 9 0 井上子爵家並某家所藏品入札



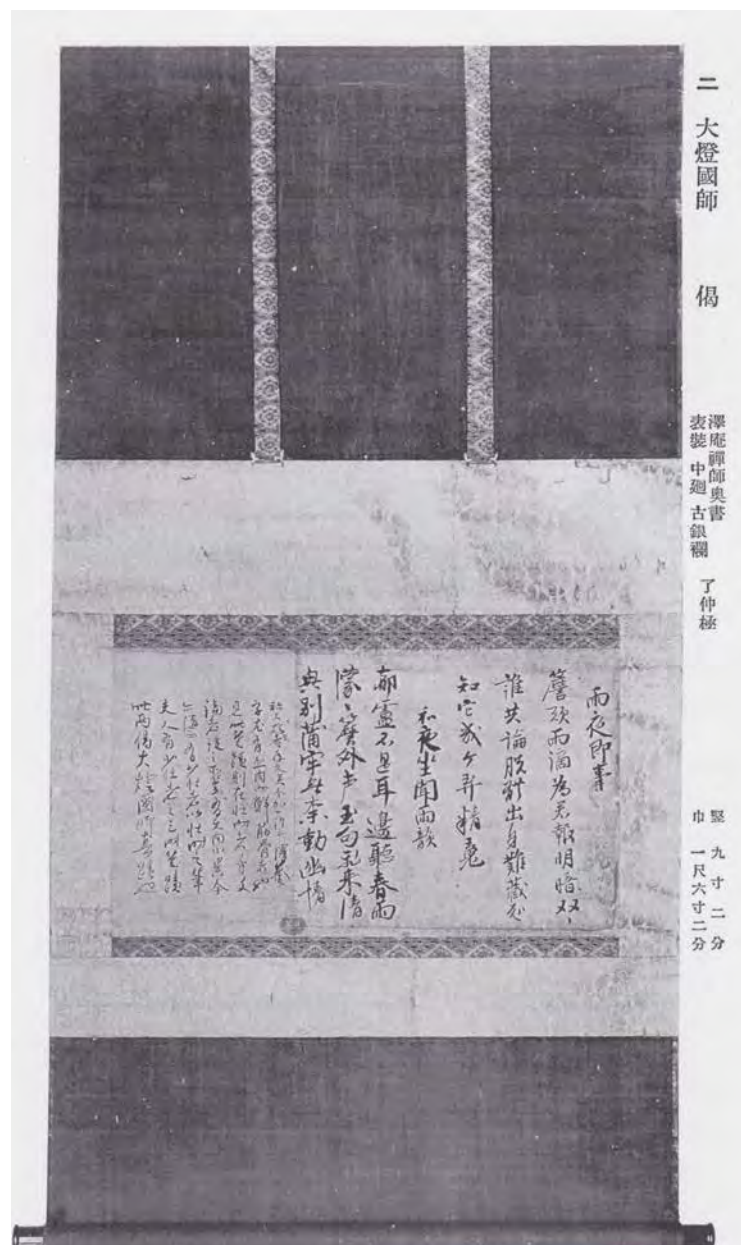


図 B 9 1 井上子爵家並某家所藏品入札



図 B 9 2 某家御所藏品入札

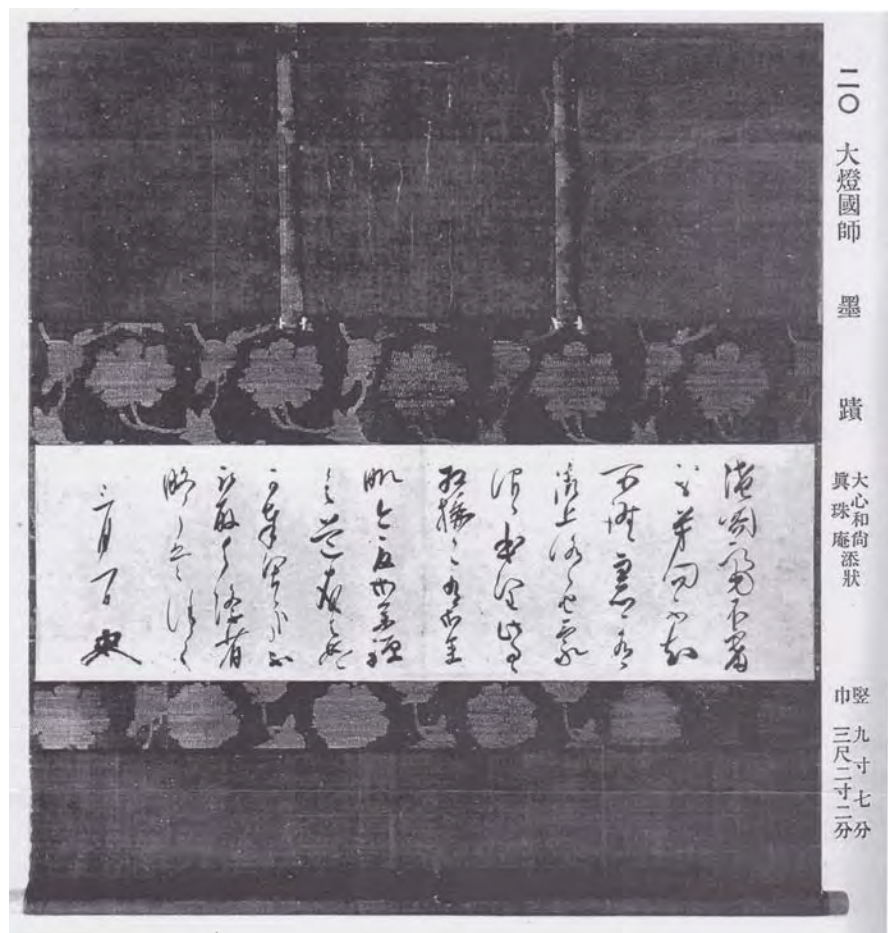


図B 9 4 故村瀬汀湘庵愛蔵品売立



図B 9 3 鈴木家蔵品入  
札





図B 9 5 侯爵蜂須賀家御蔵品入札





图 B 9 6 向日莊賴母木家所藏品入札



图 B 9 7 泉州沢久大夫氏・某氏所藏品入札



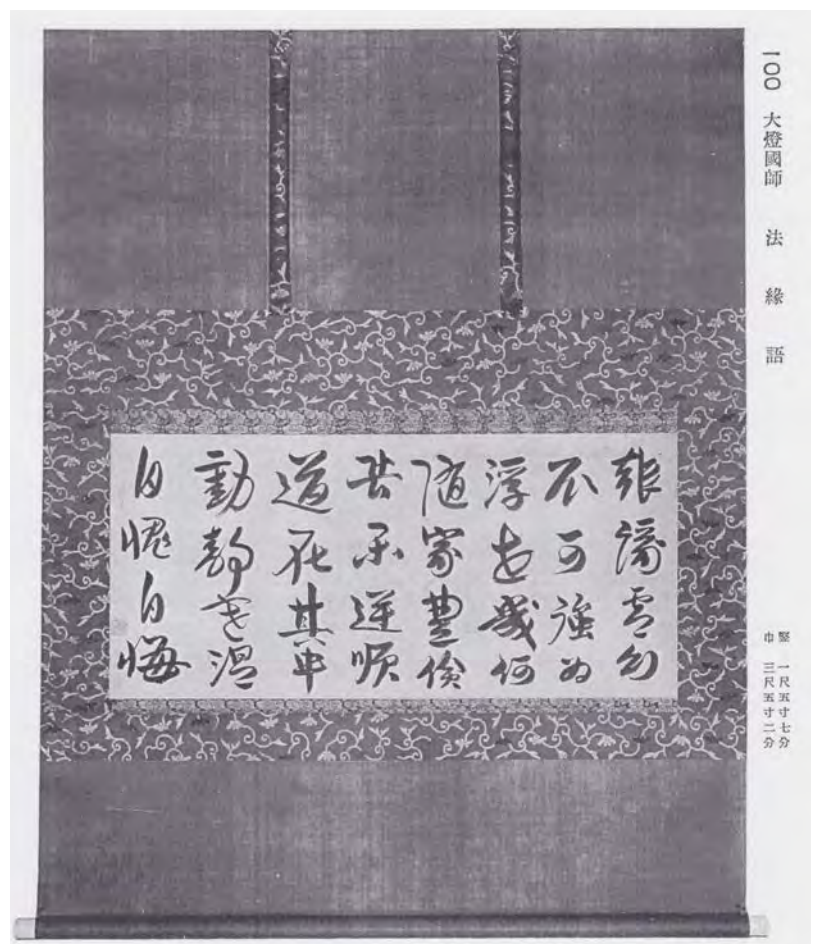
図B 9 8 大分市中尾家所蔵品展観入札



図B 9 9 桜田莊遺愛品高橋弘吉氏所蔵品入札







図B 1 0 2 翠樹園山田家所蔵品入札



図B 1 0 3 田村家



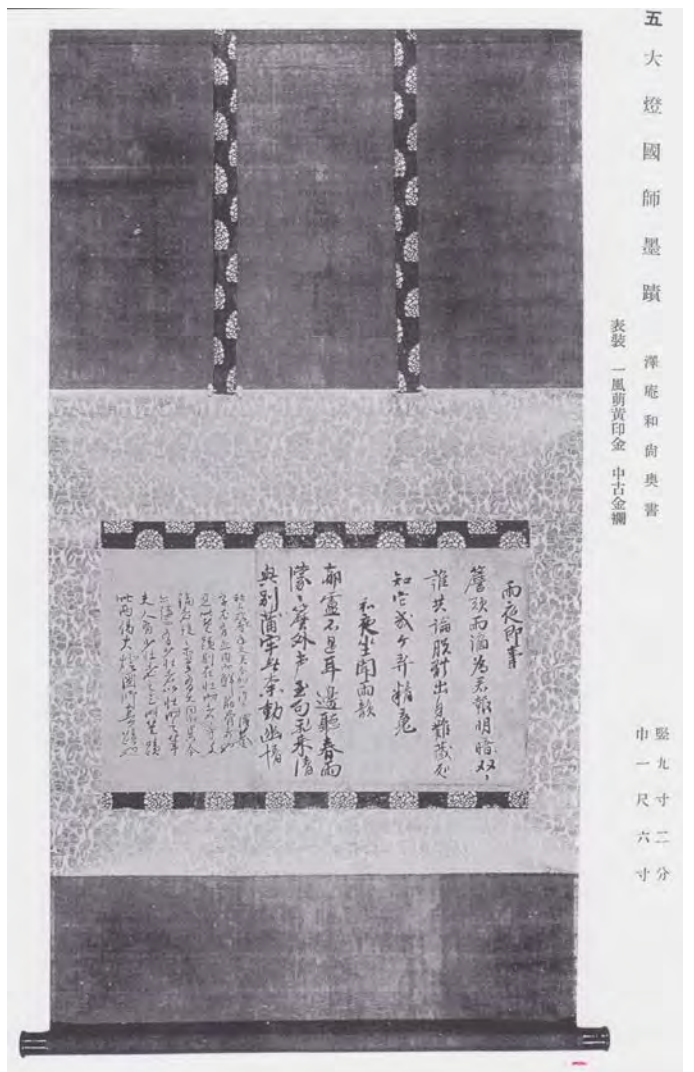


图B 1 0 4 甲州汲故庵村松家藏品入札

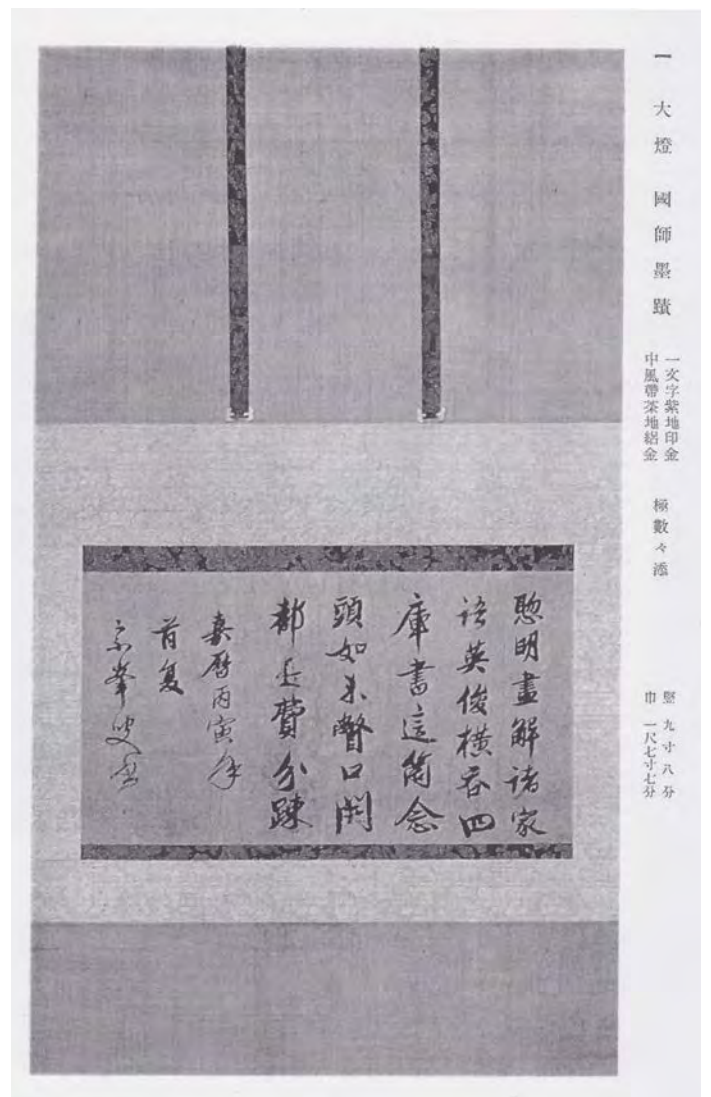


图B 1 0 5 某家所藏品売立





図B 1 0 6 特別展観目録

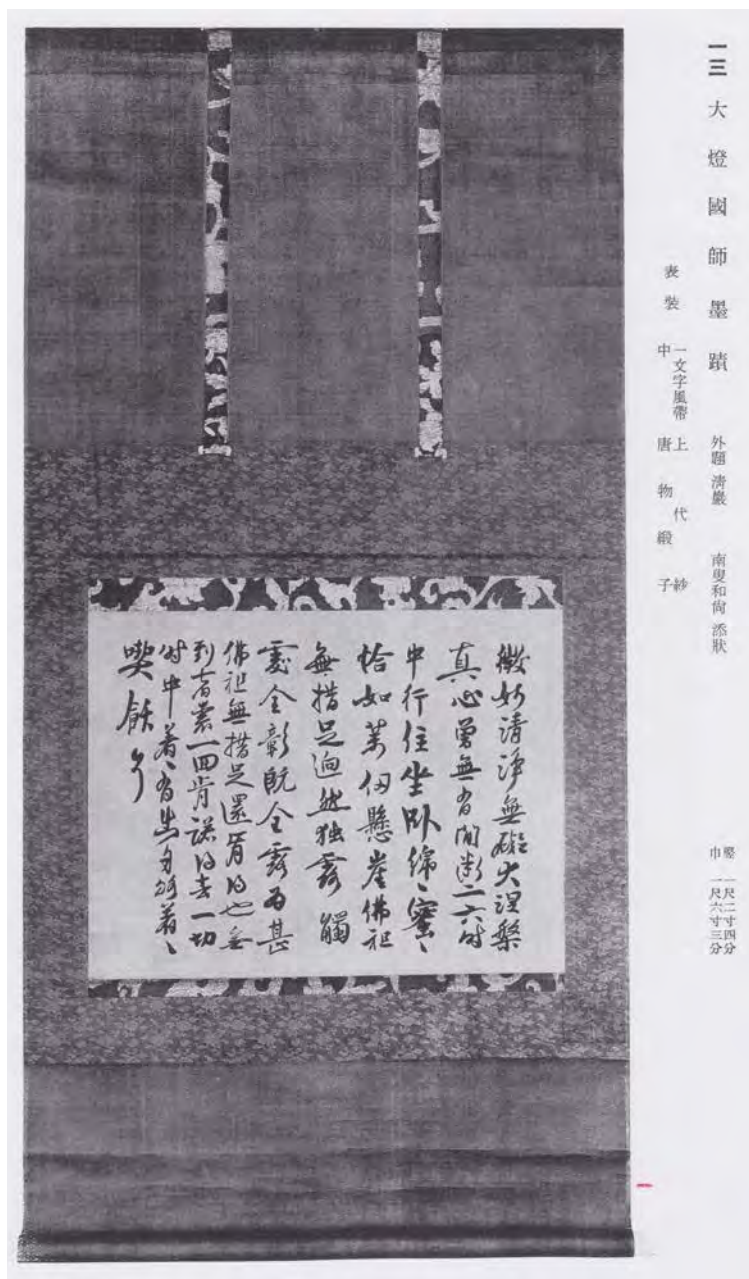


図B 1 0 7 泉松庵所蔵品入札目録



図B 1 0 8 泉松庵所蔵品入札目録



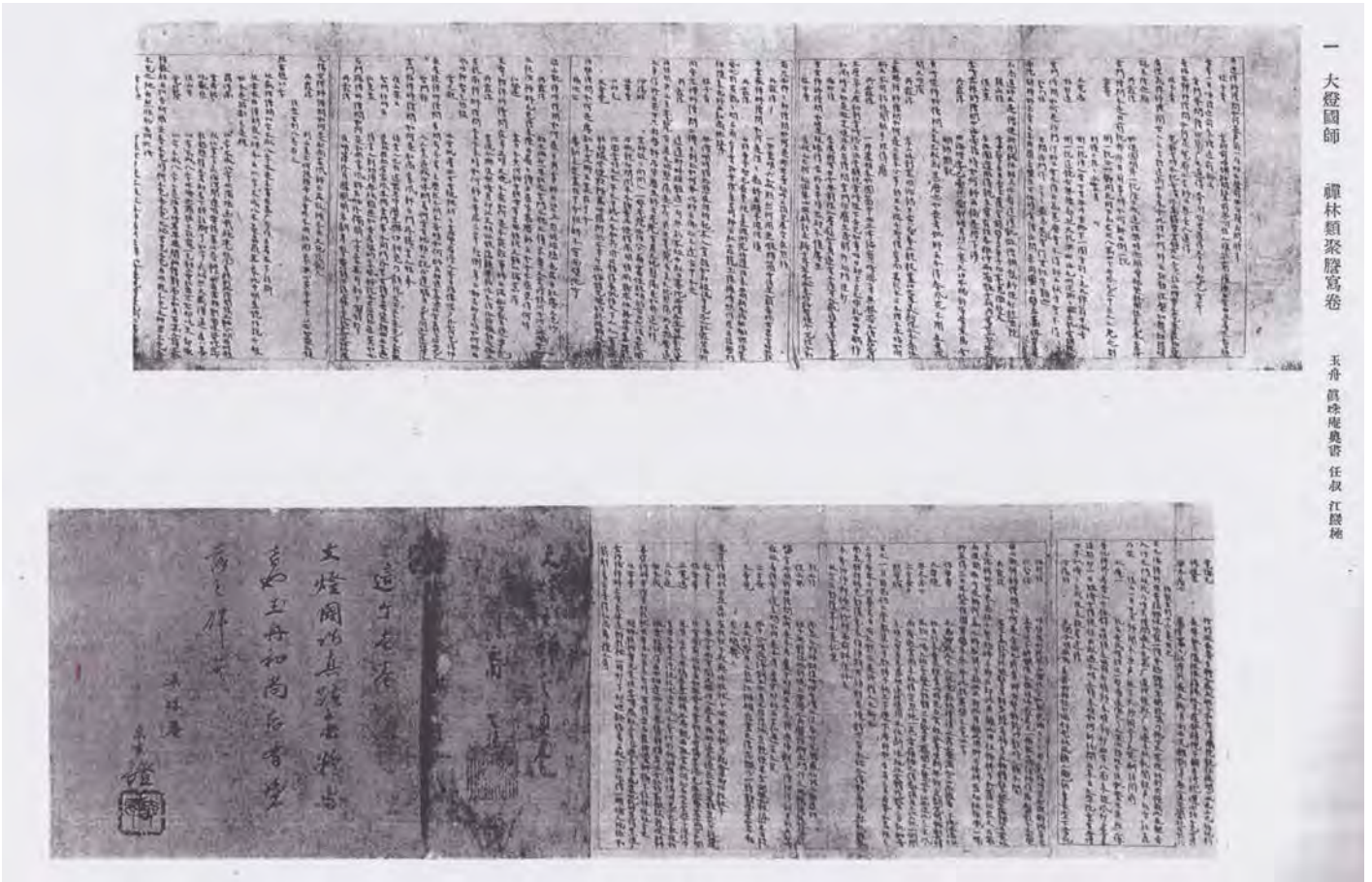


図B 1 1 0 松筠亭藏品展観目録



図B 1 0 9 某家所蔵入札及壳立

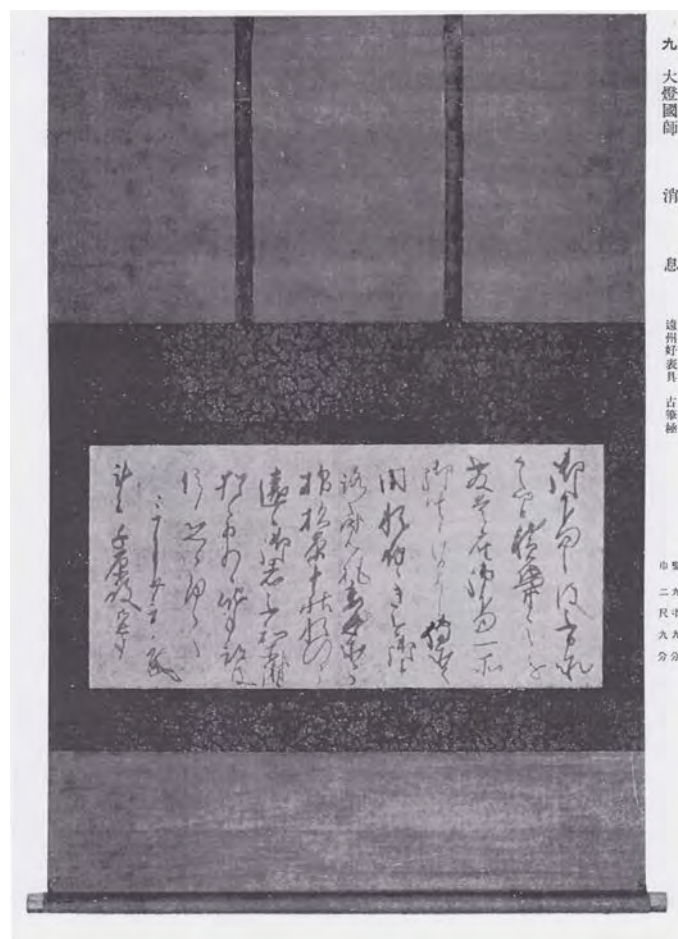




図B 1 1 1 旧大名某家所蔵品入札



図B 1 1 2 高知市瑞雲洞所蔵品入札目録

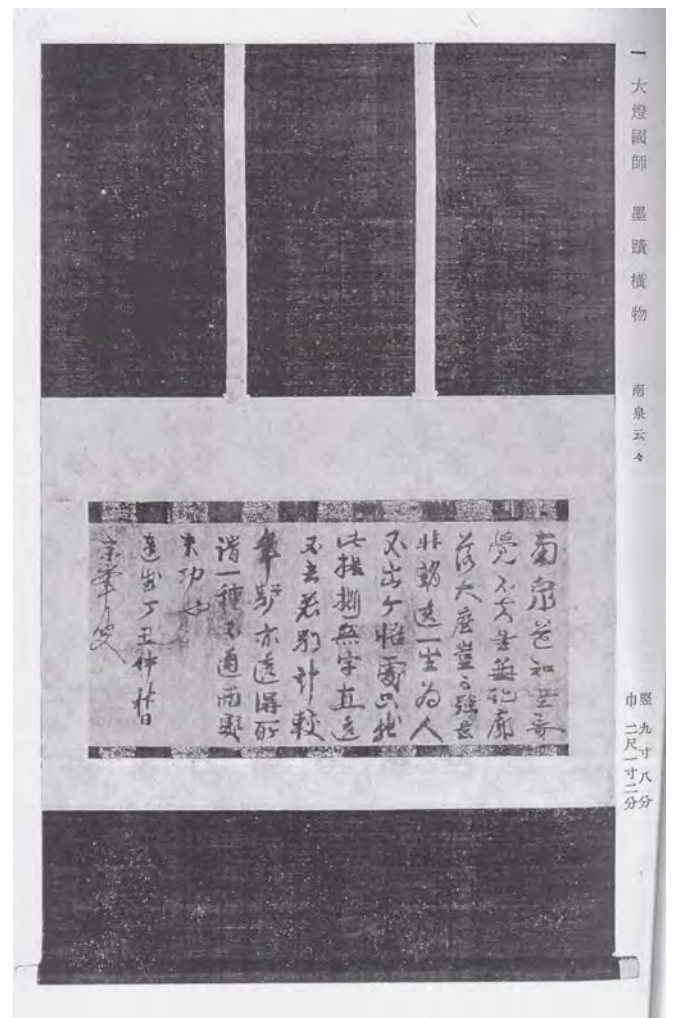


図B 1 1 3 某家所蔵品入札



図B 1 1 4 某家所蔵品入札





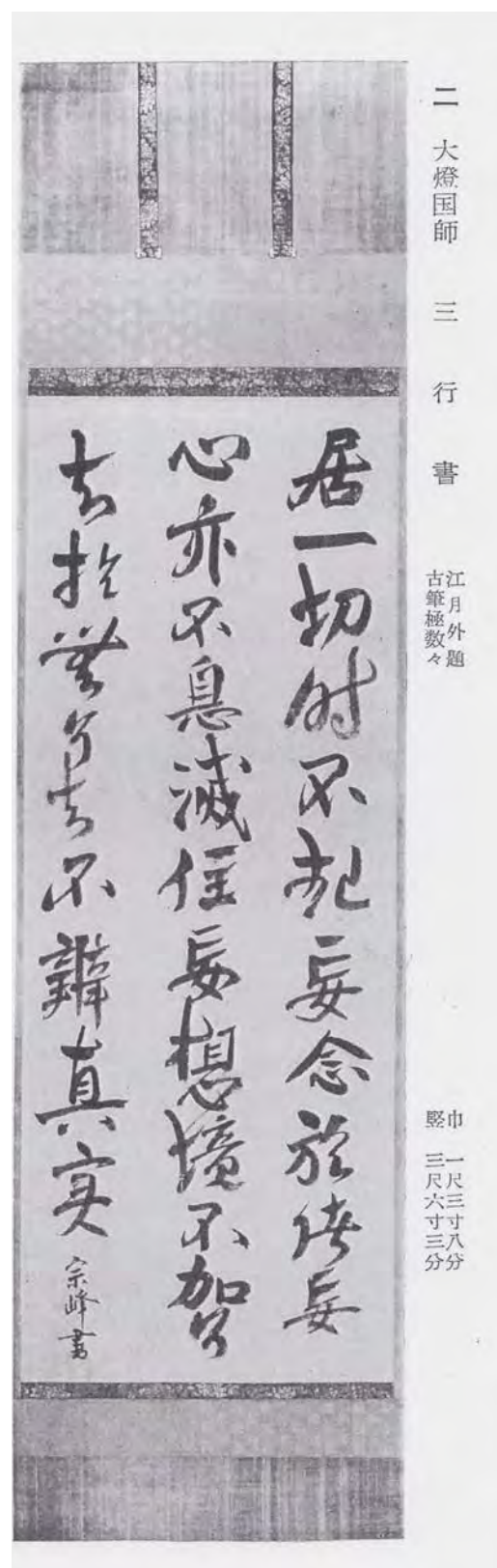
図B 1 1 5 某家所蔵品入札



図B 1 1 6 原田二郎翁

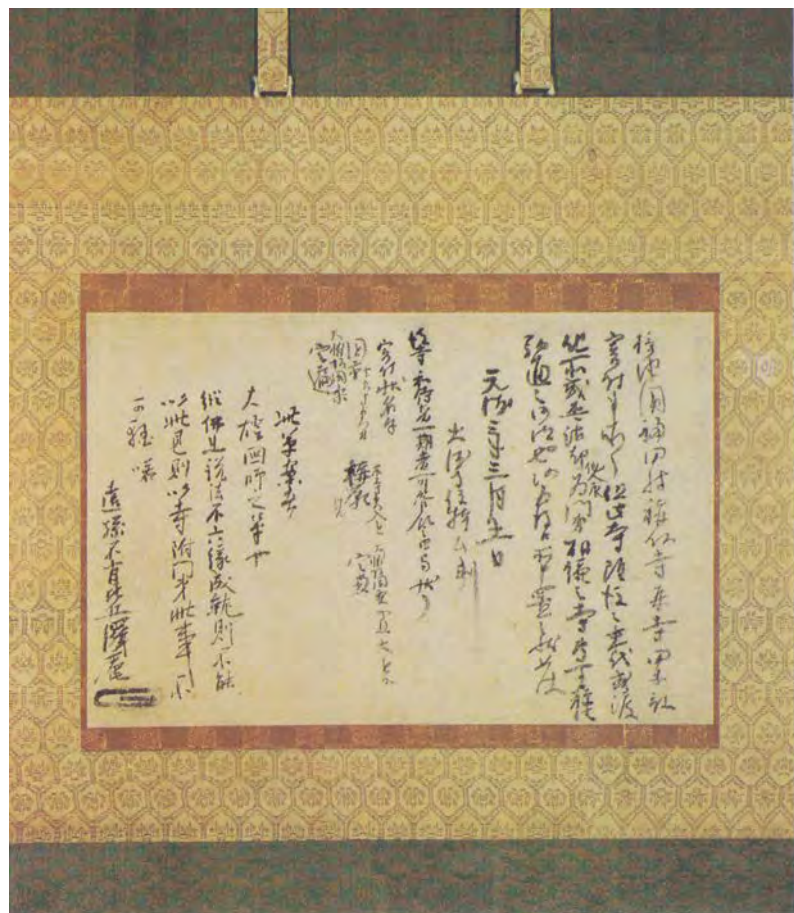


図B 1 1 8 書画美術品洋画展観



図B 1 1 7 書画美術品入札展  
観壳立会

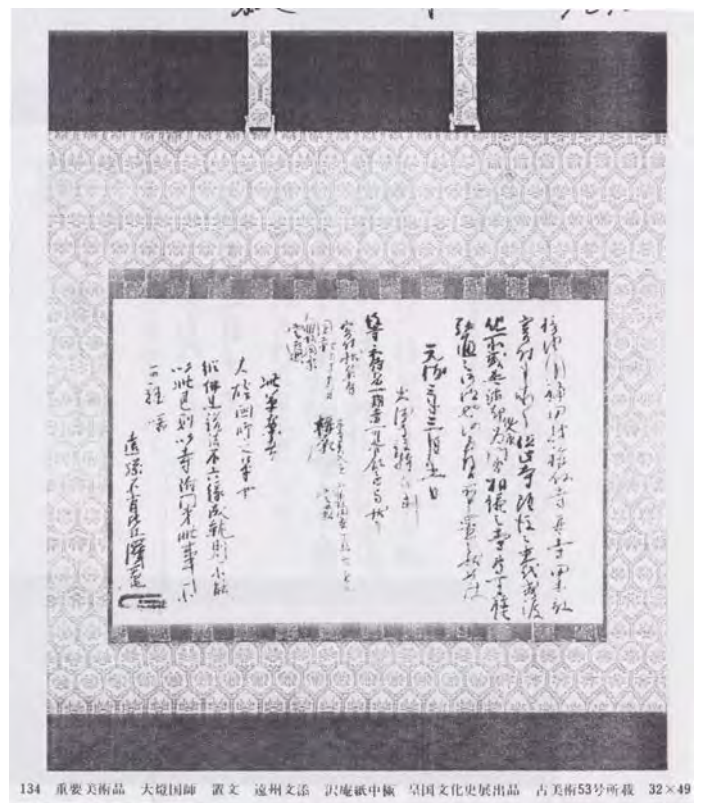




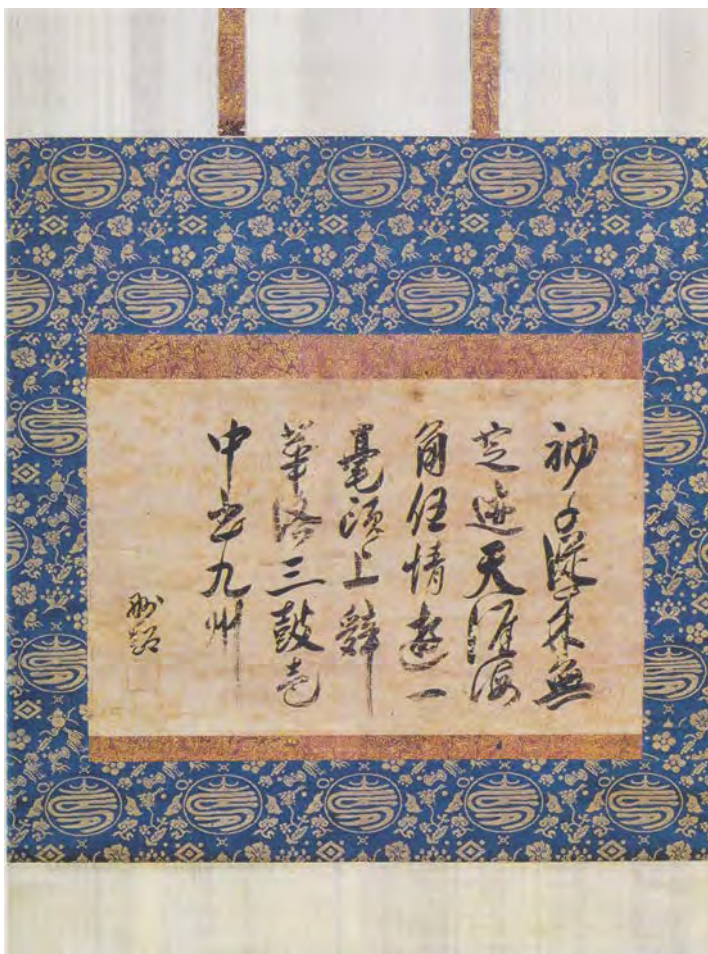
図B 1 1 9 茶美の会



図B 1 2 0 第12回東美オークション



図B 1 2 1 第4回東美入札



図B 1 2 2 第8回東美特別展







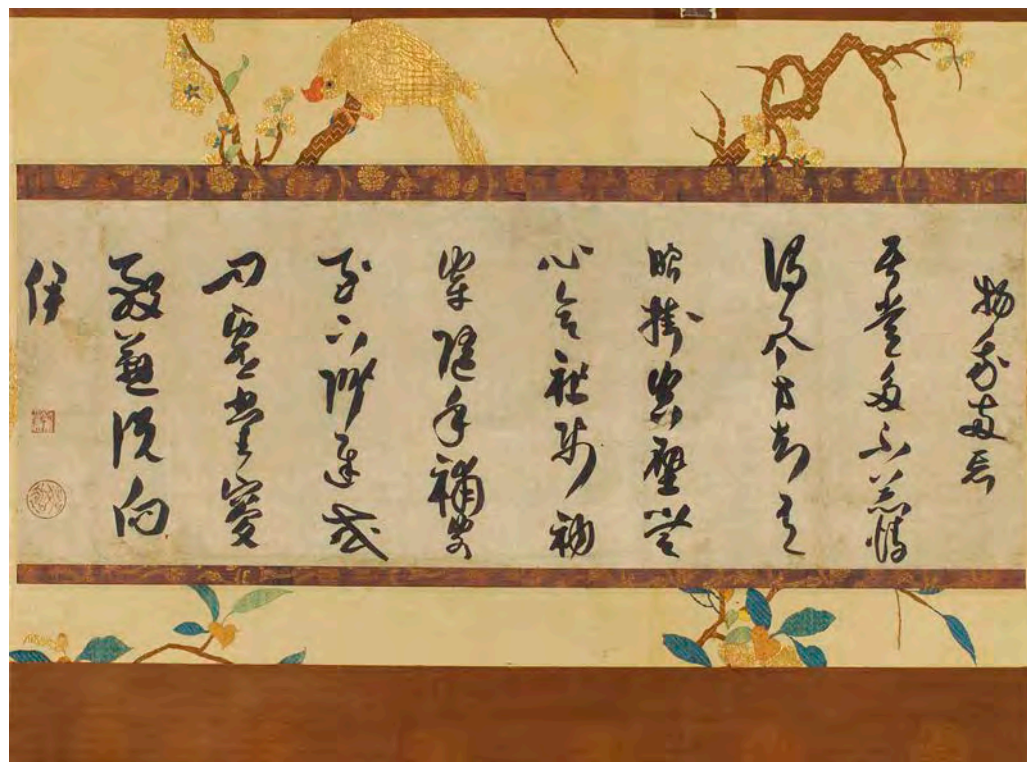


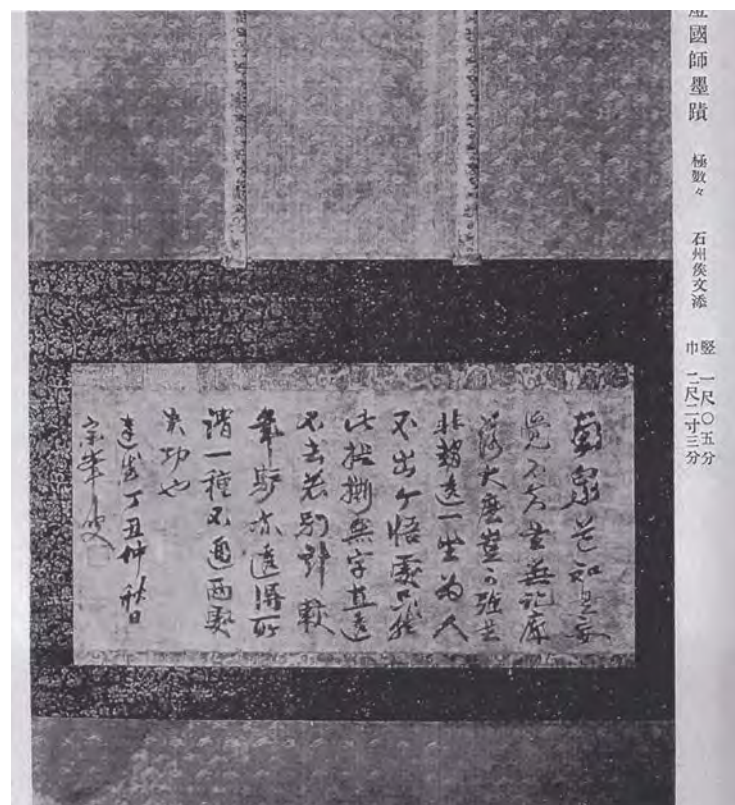
図 B 1 2 5 Japanese And Korean Art



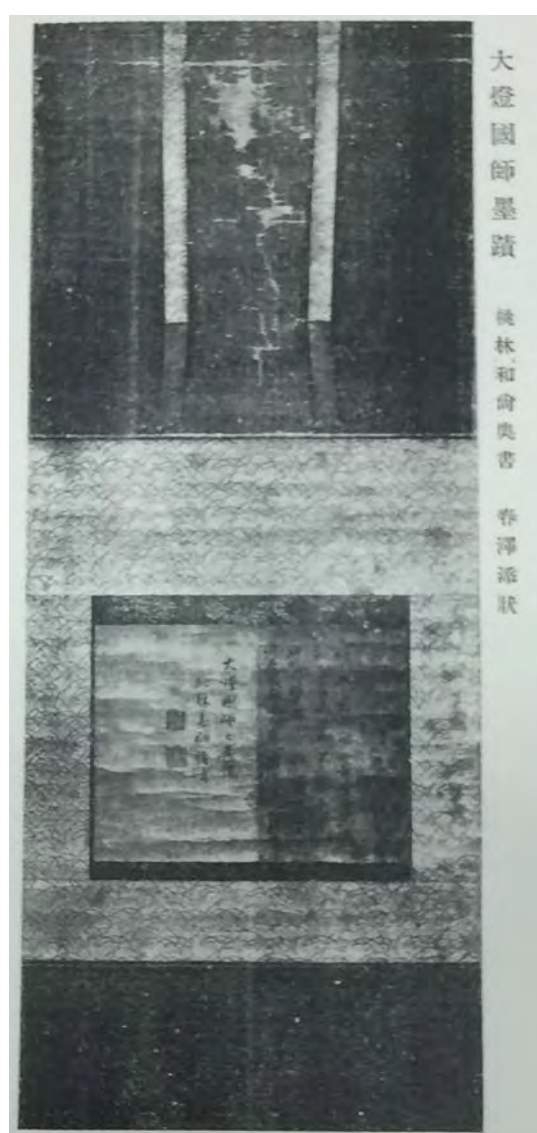
図 B 1 2 6 済美入礼会



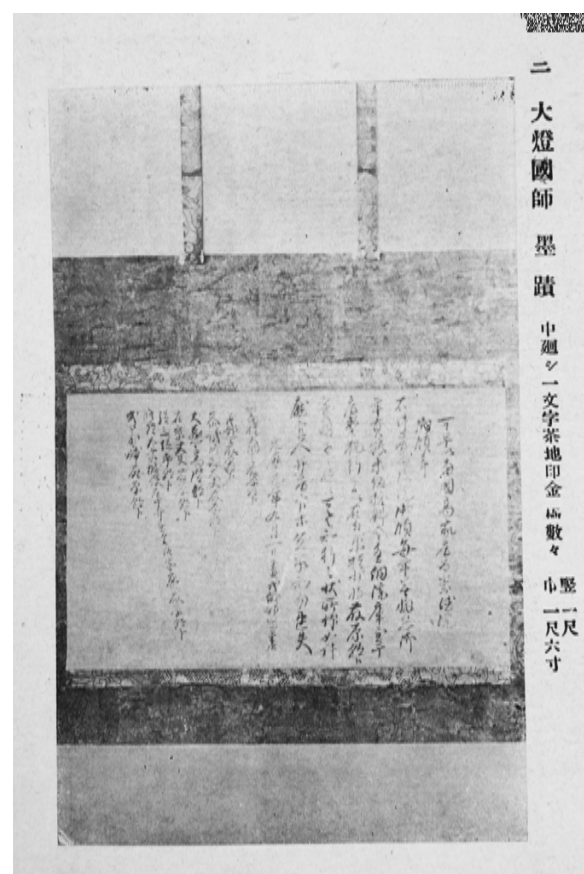




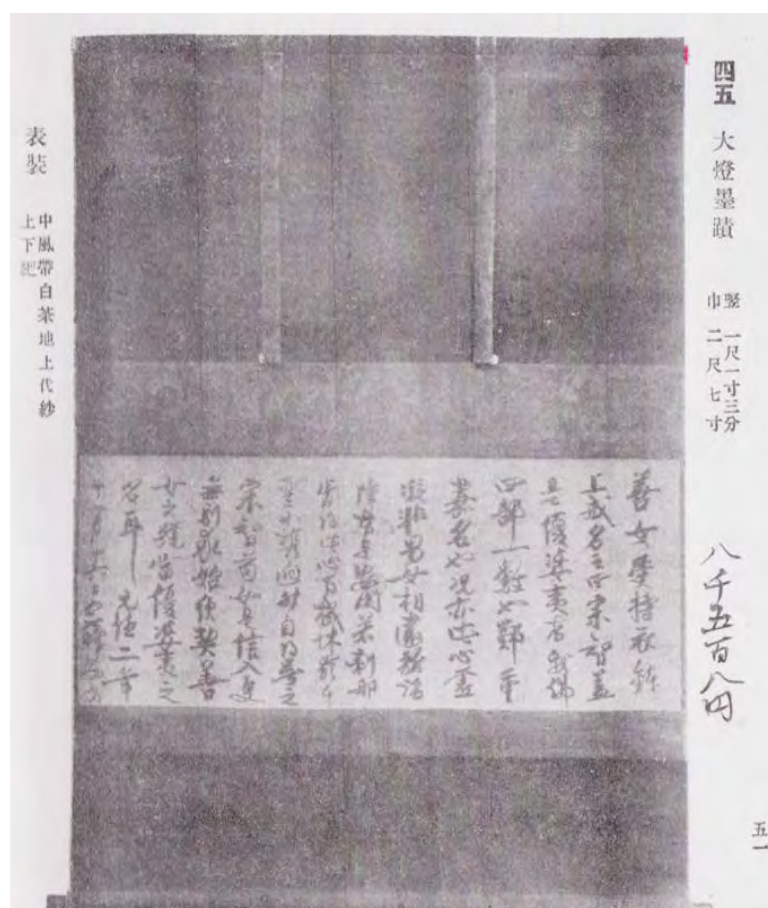
图B 1 2 9 当市田守家所藏品入札



图B 1 3 0 当市門前町柏屋並某家所藏品壳立



図B 1 3 1 北風家某大家所蔵品入札



図B 1 3 2 赤星家所蔵品入札